田中谷遺跡
塚山古墳
下がり松遺跡
角谷遺跡

法吉団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

本文編

2002年3月

島根県教育委員会

田中谷遺跡
塚山古墳
下がり松遺跡
角谷遺跡

法吉団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

本　文　編

2002年3月

島根県教育委員会

序

島根県教育委員会では、島根県住宅供給公社の委託を受け、平成11、12年度に法吉団地建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施しましたが、この度その成果をまとめ報告書を刊行することとしました。

調査を行った松江市法吉町には数多くの遺跡が所在し、『出雲国風土記』にその地名起源譚が記されるなど原始・古代より栄えた地域です。今回の調査により、田中谷遺跡では弥生時代後期から継続して営まれた集落を確認し、これを母胎として傑出した古墳時代中期の首長墓である塚山古墳の様相が詳しくわかるなど多くの成果を上げることができました。いずれも、この地域の歴史を解明する上で貴重な資料であり、本書が郷土の歴史と文化財に対する理解や関心を高める一助となれば幸いです。

発掘調査及び本報告書の刊行にあたりまして、地元の方々、松江市教育委員会をはじめ関係の皆様から多くの御協力を得ましたことに対し心からお礼申し上げます。最後になりましたが、塚山古墳の重要性に理解を示し、開発と保存という重大問題に直面しながら、多大な困難を排して保存を決定された島根県住宅供給公社に対し、深く感謝いたします。

平成14年３月

島根県教育委員会

教育長　山　﨑　悠　雄

例　言

1．本書は島根県住宅供給公社の委託を受けて、島根県教育委員会が実施した、法吉団地建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書で、本文編・写真図版編の2冊からなる。

2．本書に収録したのは以下の遺跡である。

田中谷遺跡　：松江市法吉町727－1番地外　　塚山古墳：　同　721－1番地外

下がり松遺跡：　同　680－2番地外　　角谷遺跡：　同　974番地外

田中谷遺跡のうち一部は松江市教育文化振興事業団によって調査が行われ、既に報告書が刊行されている（『田中谷遺跡（Ⅲ区）発掘調査報告書』2001年3月松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興事業団）。

3．挿図中の方位は、測量法による平面直角第Ⅲ座標系のＸ軸方向を指し、レベル高は海抜高を示す。

4．本書に掲載した地図のうち第2図は国土交通省国土地理院の地形図を、また第4図は島根県住宅供給公社が1981年に作成し1996年に修正した地形図を一部改変して使用した。また、空中写真のうち図版1は『ふるさと飛行　島根県航空写真集』（1982　山陰中央新報社刊）に掲載された写真を、図版6～8は国土地理院が所管する写真をそれぞれ使用した。

5．本書で使用した記号は以下のとおりである。

ＳＩ：竪穴建物、ＳＢ：掘立柱建物、ＳＫ：土壙、ＳＤ：溝、Ｐ：柱穴等、ＳＸ：その他

6．遺物図面の縮尺は基本的には土器を1／4、石製品を1／2，2／3、金属器を1／1，1／2、木器を1／4，1／6，1／10とした。

7．掘立柱建物の平面図に示した数値は柱穴心心間の距離を表し、単位はcmである。

8．木製品の樹種同定は㈱吉田生物研究所に委託し結果は遺物観察表に掲載した。炭化物の年代測定は㈱文化財調査コンサルタント、パリノ・サーヴェイ㈱にそれぞれ委託し、その結果を掲載した。また、塚山古墳から出土した赤色顔料については朽津信明氏（東京文化財研究所）・下山進氏（吉備国際大学）に分析・執筆いただいた。

9．出土遺物の実測は第2章第1節にあげた調査員、補助員、整理作業員があたった。また遺構・遺物写真は各調査員が撮影した。

10．本書は第8章を除き目次に示した各調査員が執筆した。

11．出土した遺物並びに調査に関する写真、実測図等の記録は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。

12．本文に示した遺物の時期は、弥生土器が鹿島町1992に、須恵器出現以前の土師器が松山1991，2000に、須恵器が大谷1994にそれぞれ依拠している。

13．塚山古墳については第5章第1節に述べたとおり、団地内に公園の一部として保存・整備されている。説明板も設置されており、地域の方々に末永く親しまれ活用されることを願う。

目　次

序
例　言
第1章　調査に至る経緯 …… （熱田貴保）… 1
第2章　位置と環境 …… （越智昌二）… 2
第3章　調査の概要 …… 5
　第1節　分布調査と範囲確認調査 …… （東山信治）… 5
　第2節　本調査の概要と調査経過 …… （深田浩）… 8
　第3節　調査体制 …… （熱田）… 9
第4章　田中谷遺跡 …… 11
　第1節　Ⅰ区の調査結果 …… （熱田）… 11
　第2節　Ⅱ区の調査結果 …… （深田）… 66
　第3節　Ⅳ区の調査結果 …… （東山）… 102
　第4節　Ⅴ区の調査結果 …… 112
第5章　塚山古墳 …… 187
　第1節　調査に至る経緯及び調査の方法 …… （東山）… 187
　第2節　調査の結果 …… （東山、熱田、深田）… 191
　第3節　まとめ …… （東山、熱田）… 225
第6章　下がり松遺跡 …… 231
　第1節　調査の経過と調査方法 …… （深田）… 231
　第2節　調査の結果 …… （深田、熱田）… 233
　第3節　まとめ …… （深田、熱田）… 279
第7章　角谷遺跡 …… （東山）… 285
　第1節　調査の経過及び調査方法 …… 285
　第2節　調査の結果 …… 288
　第3節　まとめ …… 294
第8章　自然科学分析 …… 295
　第1節　田中谷遺跡・下がり松古墓における^{14}C年代測定 …… 295
　第2節　塚山古墳出土炭化材の^{14}C年代と樹種 …… 297
　第3節　塚山古墳出土の赤色顔料について …… 301
出土遺物観察表 …… 303

挿図目次

第１図　遺跡位置図　2
第２図　調査遺跡と周辺の遺跡　3
第３図　新宮２号墳トレンチ位置図・断面図　6
第４図　試掘トレンチ・本調査区設定図　7
第５図　田中谷遺跡Ⅰ区位置図　11
第６図　田中谷遺跡Ⅰ区平面図　13
第７図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＩ01・出土遺物実測図　14
第８図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＩ02・出土遺物実測図　15
第９図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＩ05，06・出土遺物実測図　15
第10図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＩ04実測図　16
第11図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＩ04出土遺物実測図　17
第12図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＢ01，02・出土遺物実測図　18
第13図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＢ03実測図　19
第14図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＢ04～07平面・断面図　19
第15図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＢ04～07周辺出土遺物実測図　19
第16図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＢ04・出土遺物実測図　20
第17図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＢ05実測図　21
第18図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＢ06・出土遺物実測図　21
第19図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＢ07・出土遺物実測図　22
第20図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＢ08実測図　22
第21図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＫ09・出土遺物実測図　23
第22図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＫ10・出土遺物実測図　23
第23図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＫ05，06実測図　24
第24図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＫ06遺物出土状況図　24
第25図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＫ05，06出土遺物実測図　25
第26図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＥ01実測図　26
第27図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＥ01井戸枠実測図　26
第28図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＥ01出土遺物実測図　26
第29図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＤ05，06・出土遺物実測図　27
第30図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＤ14，15・出土遺物実測図　27
第31図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＤ09，11，12，21，22実測図　28
第32図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＤ11遺物出土状況図　29
第33図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＤ09，11，12，21・出土遺物実測図　29
第34図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１平面図　31
第35図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１土層断面図　32
第36図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１遺物出土状況図（１）　34
第37図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（１）　35
第38図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１遺物出土状況図（２）　36
第39図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（２）　37
第40図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（３）　38
第41図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（４）　39
第42図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（５）　40
第43図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１遺物出土状況図（３）　41
第44図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（６）　42
第45図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（７）　43
第46図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（８）　44
第47図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１遺物出土状況図（４）　46
第48図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１遺物出土状況図（５）　47
第49図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（９）　48
第50図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（10）　49
第51図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（11）　50
第52図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（12）　51
第53図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（13）　52
第54図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１遺物出土状況図（６）　53
第55図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（14）　54
第56図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（15）　55
第57図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（16）　56
第58図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（17）　57
第59図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道２実測図　58
第60図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道２土層断面図　59
第61図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道２遺物出土状況図　60
第62図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道２出土遺物実測図（１）　61
第63図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道２出土遺物実測図（２）　62
第64図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道２出土遺物実測図（３）　62
第65図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道２出土遺物実測図（４）　63
第66図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道２出土遺物実測図（５）　64
第67図　田中谷遺跡Ⅱ区調査区割図　66
第68図　田中谷遺跡Ⅱ－１区調査区設定図　67
第69図　田中谷遺跡Ⅱ－１区トレンチ１～３土層断面図　68

第70図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第Ⅰ層出土遺物実測図　69
第71図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第Ⅱ層出土遺物実測図（１）　70
第72図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第Ⅱ層出土遺物実測図（２）　71
第73図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第Ⅱ層出土遺物実測図（３）　72
第74図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第Ⅲ層出土遺物実測図（１）　73
第75図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第Ⅲ層出土遺物実測図（２）　74
第76図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第Ⅲ層出土遺物実測図（３）　74
第77図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第１しがらみ状遺構実測図　75
第78図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第１しがらみ状遺構
出土遺物実測図（１）　76
第79図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第１しがらみ状遺構
出土遺物実測図（２）　77
第80図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第２しがらみ状遺構実測図　78
第81図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第２しがらみ状遺構
出土遺物実測図（１）　79
第82図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第２しがらみ状遺構
出土遺物実測図（２）　80
第83図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第２しがらみ状遺構
出土遺物実測図（３）　81
第84図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第３しがらみ状遺構実測図　82
第85図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第３しがらみ状遺構
出土遺物実測図（１）　83
第86図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第３しがらみ状遺構
出土遺物実測図（２）　84
第87図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第３しがらみ状遺構
出土遺物実測図（３）　85
第88図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第３しがらみ状遺構
出土遺物実測図（４）　86
第89図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第４しがらみ状遺構実測図　87
第90図　田中谷遺跡Ⅱ－１区ＳＤ02，杭列検出状況実測図　88
第91図　田中谷遺跡Ⅱ－１区ピット群実測図　89
第92図　田中谷遺跡Ⅱ－１区ＳＤ02出土遺物実測図　89
第93図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第４しがらみ状遺構
出土遺物実測図（１）　90
第94図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第４しがらみ状遺構
出土遺物実測図（２）　90
第95図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第４しがらみ状遺構
出土遺物実測図（３）　91
第96図　田中谷遺跡Ⅱ－１区ＳＤ01実測図　92
第97図　田中谷遺跡Ⅱ－１区ＳＤ03実測図　92
第98図　田中谷遺跡Ⅱ－２区調査区設定図　94
第99図　田中谷遺跡Ⅱ－２区調査区セクション実測図　95
第100図　田中谷遺跡Ⅱ－２区第Ⅲ層出土遺物実測図　96
第101図　田中谷遺跡Ⅱ－２区旧河道２，３実測図　97
第102図　田中谷遺跡Ⅱ－２区旧河道２，３出土遺物実測図　98
第103図　田中谷遺跡Ⅱ－２区ＳＤ04実測図　99
第104図　田中谷遺跡Ⅳ区調査区設定図　102
第105図　田中谷遺跡Ⅳ区全体図　103
第106図　田中谷遺跡Ⅳ区北壁・南壁土層図　104
第107図　田中谷遺跡Ⅳ区旧河道出土遺物　105
第108図　田中谷遺跡Ⅳ区柱穴群実測図　105
第109図　田中谷遺跡Ⅳ区ＳＩ01実測図　106
第110図　田中谷遺跡Ⅳ区ＳＢ01、加工段１、
ＳＤ01，02・出土遺物実測図　106
第111図　田中谷遺跡Ⅳ区柱穴列１実測図　107
第112図　田中谷遺跡Ⅳ区柱穴列２・出土遺物実測図　107
第113図　田中谷遺跡Ⅳ区ＳＢ02，03実測図　107
第114図　田中谷遺跡Ⅳ区加工段２・出土遺物実測図　108
第115図　田中谷遺跡Ⅳ区ＳＫ01・出土遺物実測図　109
第116図　田中谷遺跡Ⅳ区ＳＫ02・出土遺物実測図　109
第117図　田中谷遺跡Ⅳ区ＳＸ01・出土遺物実測図　109
第118図　田中谷遺跡Ⅳ区遺構外出土遺物実測図　110
第119図　田中谷遺跡Ⅴ区調査区設定図　112
第120図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区全体図、土層断面図　113
第121図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区ＳＩ01実測図　114
第122図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区ＳＩ01上層貼床面実測図　115
第123図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区ＳＩ01上層出土遺物実測図　115
第124図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区ＳＢ01・出土遺物実測図　116
第125図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区加工段１実測図　117
第126図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区加工段１出土遺物実測図　118
第127図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区ＳＤ01・出土遺物実測図　119
第128図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区・石列、ＳＤ02～04・実測図　119
第129図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区ＳＫ01実測図　119
第130図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区ＳＫ02・出土遺物実測図　120
第131図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区１トレンチ出土遺物実測図　120
第132図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区遺構外出土遺物実測図　120

第133図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区全体図　121
第134図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区遺構配置図（建物群）・土層断面図　122
第135図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ02～04平面図　124
第136図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ02実測図　124
第137図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ03・出土遺物実測図　124
第138図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ04実測図　124
第139図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ05実測図　125
第140図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ06実測図　125
第141図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ07実測図　126
第142図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ08実測図　126
第143図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ09，10実測図　126
第144図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ11～15、ＳＤ12平面図　127
第145図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ11実測図　127
第146図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ12実測図　127
第147図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ13実測図　128
第148図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ14実測図　128
第149図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ12実測図　128
第150図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ15・出土遺物実測図　129
第151図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ16、旧河道２・出土遺物実測図　129
第152図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ17実測図　130
第153図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ18実測図　130
第154図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ19～22平面図　131
第155図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ19・出土遺物実測図　131
第156図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ20実測図　132
第157図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ21実測図　132
第158図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ22実測図　133
第159図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ23実測図　133
第160図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ24実測図　134
第161図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ25・出土遺物実測図　134
第162図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ26実測図　135
第163図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ27実測図　135
第164図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ28・出土遺物実測図　136
第165図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区柱穴列１実測図　136
第166図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区柱穴列２実測図　136
第167図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ05，06・出土遺物実測図　136
第168図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ07，08・出土遺物実測図　137
第169図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ09実測図　138
第170図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ10，11実測図　138
第171図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ13，14，15・出土遺物実測図　138
第172図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ16実測図　139
第173図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ17・出土遺物実測図　139
第174図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ18、ＳＫ06実測図　139
第175図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ19・出土遺物実測図　139
第176図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＫ03・出土遺物実測図　141
第177図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＫ04実測図　141
第178図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＫ05・出土遺物実測図　141
第179図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区旧河道１・出土遺物実測図　141
第180図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区旧河道３・出土遺物実測図　141
第181図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ20、旧河道４，５実測図・土層断面図　142
第182図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区旧河道４，５土層断面図　142
第183図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区旧河道４出土遺物実測図（１）　144
第184図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区旧河道４出土遺物実測図（２）　145
第185図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区旧河道５出土遺物実測図　145
第186図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ20実測図　146
第187図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＥ01実測図　147
第188図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ20、ＳＥ01周辺遺物出土状況図　147
第189図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＥ01内出土遺物実測図　148
第190図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＥ01、SD20周辺出土遺物実測図（１）　149
第191図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＥ01、SD20周辺出土遺物実測図（２）　150
第192図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区遺構外出土遺物実測図　150
第193図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｗ区全体図　151
第194図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｗ区遺構配置図（１）　152
第195図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｗ区遺構配置図（２）　153
第196図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｗ区ＳＩ02、加工段２、ＳＤ21，22実測図　155
第197図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｗ区ＳＩ02、加工段２、ＳＤ21，22周辺出土遺物実測図　156
第198図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｗ区ＳＩ03実測図　157
第199図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｗ区ＳＩ03出土遺物実測図　158
第200図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｗ区ＳＩ04実測図　158

第201図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＢ29実測図　153
第202図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＢ30，31、
加工段３、ＳＫ07周辺遺構実測図　159
第203図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＢ30実測図　160
第204図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＢ31実測図　160
第205図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＫ07実測図　161
第206図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＢ30周辺、
ＳＫ07出土遺物実測図　161
第207図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＫ08実測図・加工段３、
ＳＫ08出土遺物実測図　161
第208図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＢ32，柱穴列３実測図　162
第209図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＢ33，
柱穴列４・出土遺物実測図　163
第210図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＢ34・出土遺物実測図　163
第211図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＢ35実測図　164
第212図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＢ36実測図　164
第213図　田中谷遺跡Ⅴ－W区加工段４実測図　165
第214図　田中谷遺跡Ⅴ－W区加工段４Ｐ１実測図　165
第215図　田中谷遺跡Ⅴ－W区加工段４出土遺物実測図　165
第216図　田中谷遺跡Ⅴ－W区加工段５、
ＳＸ01・出土遺物実測図　166
第217図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＤ24～26・出土遺物実測図　167
第218図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＤ27実測図　168
第219図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＤ28実測図　168
第220図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＤ29・出土遺物実測図　168
第221図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＤ30実測図　170
第222図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＤ30出土遺物実測図　171
第223図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＤ31・出土遺物実測図　172
第224図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＤ32・出土遺物実測図　172
第225図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＤ33・出土遺物実測図　173
第226図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＤ34・出土遺物実測図　173
第227図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＫ09実測図　174
第228図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＫ10・出土遺物実測図　174
第229図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＫ11・出土遺物実測図　174
第230図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＫ12・出土遺物実測図　175
第231図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＫ13・出土遺物実測図　175
第232図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＫ14～17・出土遺物実測図　176
第233図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＸ02実測　177
第234図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＸ02出土遺物実測図（１）　178
第235図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＸ02出土遺物実測図（２）　179
第236図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＸ03・出土遺物実測図　180
第237図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＸ03古銭拓影　181
第238図　田中谷遺跡Ⅴ－W区包含層出土遺物実測図（１）　181
第239図　田中谷遺跡Ⅴ－W区包含層出土遺物実測図（２）　182
第240図　田中谷遺跡Ⅴ－W区包含層出土遺物実測図（３）　183
第241図　塚山古墳調査前地形測量図　187
第242図　塚山古墳調査後全体図　188
第243図　塚山古墳１トレンチ実測図　190
第244図　塚山古墳１トレンチ葺石実測図　191
第245図　塚山古墳１トレンチ遺物出土状況図　191
第246図　塚山古墳１トレンチＰ１，杭列、Ｐ１
出土遺物実測図　192
第247図　塚山古墳２トレンチ実測図　193
第248図　塚山古墳３，８トレンチ実測図　196
第249図　塚山古墳３トレンチＤ－Ｄ’ライン土層断面図　197
第250図　塚山古墳３，８トレンチ遺物出土状況図　197
第251図　塚山古墳８トレンチＰ２実測図　198
第252図　塚山古墳４トレンチ実測図　199
第253図　塚山古墳５トレンチ実測図　199
第254図　塚山古墳６トレンチ西壁土層図　199
第255図　塚山古墳７トレンチ実測図　199
第256図　塚山古墳円筒埴輪実測図　201
第257図　塚山古墳円筒埴輪・朝顔形埴輪実測図　202
第258図　塚山古墳形象埴輪実測図（１）　204
第259図　塚山古墳形象埴輪実測図（２）　205
第260図　塚山古墳須恵器・土師器実測図　206
第261図　塚山古墳２トレンチＳＸ01礫検出時実測図　207
第262図　塚山古墳２トレンチＳＸ01礫除去後実測図　208
第263図　塚山古墳２トレンチＳＸ01遺物出土状況図　209
第264図　塚山古墳２トレンチＳＸ01周辺出土遺物実測図（１）　210
第265図　塚山古墳２トレンチＳＸ01周辺出土遺物実測図（２）　211
第266図　塚山古墳主体部実測図　212
第267図　塚山古墳主体部遺物出土状況図　213
第268図　塚山古墳主体部横断面図　214
第269図　塚山古墳主体部短甲出土状況図　215
第270図　塚山古墳主体部出土遺物実測図（１）　216

第271図　塚山古墳主体部出土遺物実測図（２）　217
第272図　塚山古墳主体部出土遺物実測図（３）　219
第273図　塚山古墳主体部出土遺物実測図（４）　220
第274図　塚山古墳主体部出土短甲展開模式図　221
第275図　塚山古墳主体部出土遺物実測図（５）　223
第276図　塚山古墳主体部出土遺物実測図（６）　224
第277図　下がり松遺跡調査区割図　231
第278図　下がり松遺跡調査区設定図　232
第279図　下がり松遺跡調査区南壁Ａ－Ｂ土層断面図　234
第280図　下がり松遺跡トレンチ１，３，５北壁土層断面図　235
第281図　下がり松遺跡ＳＩ01，ＳＤ05実測図　236
第282図　下がり松遺跡ＳＩ01出土遺物実測図　237
第283図　下がり松遺跡ＳＢ01・出土遺物実測図　237
第284図　下がり松遺跡ＳＢ02，03・出土遺物実測図　238
第285図　下がり松遺跡ＳＢ04，05・出土遺物実測図　239
第286図　下がり松遺跡ＳＢ06実測図　240
第287図　下がり松遺跡ＳＢ06出土遺物実測図　240
第288図　下がり松遺跡ＳＢ07・出土遺物実測図　241
第289図　下がり松遺跡ＳＢ08・出土遺物実測図　242
第290図　下がり松遺跡ＳＢ09実測図　243
第291図　下がり松遺跡ＳＢ09出土遺物実測図　243
第292図　下がり松遺跡ＳＢ10実測図　243
第293図　下がり松遺跡ＳＢ10出土遺物実測図　243
第294図　下がり松遺跡ＳＢ11～13出土遺物実測図　244
第295図　下がり松遺跡加工段１実測図　245
第296図　下がり松遺跡加工段１出土遺物実測図　245
第297図　下がり松遺跡加工段２実測図　246
第298図　下がり松遺跡加工段２出土遺物実測図　247
第299図　下がり松遺跡加工段３実測図　247
第300図　下がり松遺跡加工段４実測図　247
第301図　下がり松遺跡ＳＤ01，02実測図　248
第302図　下がり松遺跡ＳＤ01，02出土遺物実測図　249
第303図　下がり松遺跡ＳＤ03，04実測図　250
第304図　下がり松遺跡ＳＤ04出土遺物実測図　251
第305図　下がり松遺跡ＳＤ06実測図　251
第306図　下がり松遺跡ＳＤ07実測図　252
第307図　下がり松遺跡ＳＤ08実測図　252
第308図　下がり松遺跡ＳＤ08出土遺物実測図　252
第309図　下がり松遺跡ＳＤ09実測図　252
第310図　下がり松遺跡ＳＤ10実測図　253
第311図　下がり松遺跡ＳＤ11実測図　253
第312図　下がり松遺跡ＳＤ12実測図　253
第313図　下がり松遺跡ＳＤ13～16実測図　254
第314図　下がり松遺跡ＳＤ14出土遺物実測図　254
第315図　下がり松遺跡ＳＤ15，16出土遺物実測図　256
第316図　下がり松遺跡ＳＤ17実測図　257
第317図　下がり松遺跡ＳＤ17出土遺物実測図　257
第318図　下がり松遺跡ＳＤ18実測図　258
第319図　下がり松遺跡ＳＤ18出土遺物実測図　258
第320図　下がり松遺跡ＳＤ20実測図　258
第321図　下がり松遺跡ＳＤ21～23実測図　259
第322図　下がり松遺跡ＳＫ01～16実測図　260
第323図　下がり松遺跡ＳＫ06，15，16出土遺物実測図　261
第324図　下がり松遺跡ＳＸ01，02実測図　263
第325図　下がり松遺跡ＳＸ01出土遺物実測図　264
第326図　下がり松遺跡ＳＸ02出土遺物実測図　265
第327図　下がり松遺跡第Ⅳ，Ⅱ層出土遺物実測図（１）　266
第328図　下がり松遺跡第Ⅱ層出土遺物実測図（２）　267
第329図　下がり松遺跡第Ⅱ層出土遺物実測図（３）　268
第330図　下がり松遺跡第Ⅱ層出土遺物実測図（４）　268
第331図　下がり松遺跡遺構に伴わない出土遺物実測図　269
第332図　下がり松遺跡古墓調査前地形測量図　270
第333図　下がり松遺跡古墓調査後地形測量図　271
第334図　下がり松遺跡古墓基壇検出平面図・断面図　272
第335図　下がり松遺跡古墓基壇検出平面図・立面図　274
第336図　下がり松遺跡古墓ＳＸ03，04実測図　275
第337図　下がり松遺跡古墓基壇ＳＸ07・盛土中遺物実測図　275
第338図　下がり松遺跡古墓平坦面実測図　276
第339図　下がり松遺跡古墓出土遺物実測図（１）　277
第340図　下がり松遺跡古墓出土遺物実測図（２）　278
第341図　下がり松遺跡古墓ＳＸ06・出土遺物実測図　279
第342図　角谷遺跡調査区設定図　285
第343図　角谷遺跡調査前地形測量図　286
第344図　角谷遺跡調査後地形測量図　287
第345図　角谷遺跡丘頂部周辺遺構配置図　288
第346図　角谷遺跡土層断面図　289

第347図　角谷遺跡土橋状遺構土層断面図　290
第348図　角谷遺跡丘頂部ピット群実測図　291
第349図　角谷遺跡丘頂部ピット群断面図　292
第350図　角谷遺跡遺物分布図　293
第351図　角谷遺跡出土遺物実測図　293

表　目　次

表1　周辺遺跡一覧　3
表2　田中谷遺跡Ⅰ区遺構・遺物時期別消長　65
表3　三角板横矧併用鋲留短甲の出土例　222
表4　島根県内の短甲出土例　222
表5　分析試料一覧表　295
表6　^{14}C年代　295
表7　放射性炭素年代測定および樹種同定結果　298

写真目次

写真1　発掘体験風景　12
写真2　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＢ04　18
写真3　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＢ04～07　21
写真4　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道1調査風景　30

第１章　調査に至る経緯

島根県住宅供給公社（以下「公社」）は勤労者に住宅を供給する目的で、既に開発された比津ヶ丘団地に隣接する松江市法吉町の丘陵地に戸数約300の大規模住宅団地と中学校建設用地の開発を計画した。この計画は当初昭和55年度に事業地として選定され、同年地方住宅供給公社法第28条の規定に基づく松江市協議及び国土利用計画法に基づく開発協議を行い、翌56年に島根県教育庁文化課（当時）が予定地内の分布調査を行った。その後諸般の事情により開発計画が保留されたが、平成６年度に、計画を一部変更して再度開発協議がなされ、事業の実施が決定された。

平成10年６月に公社と県教育委員会文化財課（以下「文化財課」）は計画変更後の初の協議を行ない、公社から塚山古墳を団地内に公園として保存する内容を含む事業計画が示されると共に、分布・試掘調査の依頼があった。そして用地取得の目途がほぼついたため、平成10年11月26日付で公社は文化財課に分布調査を依頼した。これを受け文化財課では山林と狭長な水田で構成される事業地約16haを対象に同年12月に分布調査を実施し、周知の遺跡を含む８個所の地点を確認した。ただし、樹木が繁茂した状態での踏査であったため、遺跡の範囲などについて詳細な確認調査が必要であることを伝えた。この結果を受けて公社は平成11年２月１日付けで文化財保護法第57条の2（ママ）第１項の書類を文化庁長官宛て提出するとともに同２月９日付けで文化財課に発掘調査を依頼した。

公社から依頼を受けた時点で、県の調査機関である埋蔵文化財調査センター（以下「センター」）では継続の調査事業を抱えており、多数の新規事業の調査に応えられない状況にあった。一方団地の開発計画は大規模で事業地内に周知の遺跡も多いうえに、平成11年度中に造成工事に着手する予定であったため、文化財保護担当の部局としても調査着手が急がれた。このような状況から関係者による協議が重ねられた結果、調査パーティー１を充てることが決まり、文化財課はこのことを平成11年３月５日付けで伝え、同３月31日付けで調査受託を正式に公社あて回答した。

このような事前の協議等をふまえ、センターが調査を実施することとなり、次に調査方法と事業とのすり合わせなど具体的な段階に進んだ。まず、トレンチ調査により遺跡の範囲確認・性格の把握等を行い、その結果に基づいた全体の調査計画をたて、事業との調整を図ることとした。また、塚山古墳についても保存区域を確定させるための範囲確認調査を行うことが決められた。

以上のような経緯から、平成11年４月１日付けで公社と島根県の間で委託契約が締結され、同５月20日から調査員１人、調査補助員２人の１班体制で現地調査を開始した。

なお、団地内の幹線道が市道春日東生馬線として整備されることから、この部分については松江市教育委員会で対応することになり、（財）松江市教育文化振興事業団が平成12年４月10日～同７月26日で発掘調査を実施した。その結果は既に『田中谷遺跡（Ⅲ区）発掘調査報告書』として2001年３月に刊行されている。

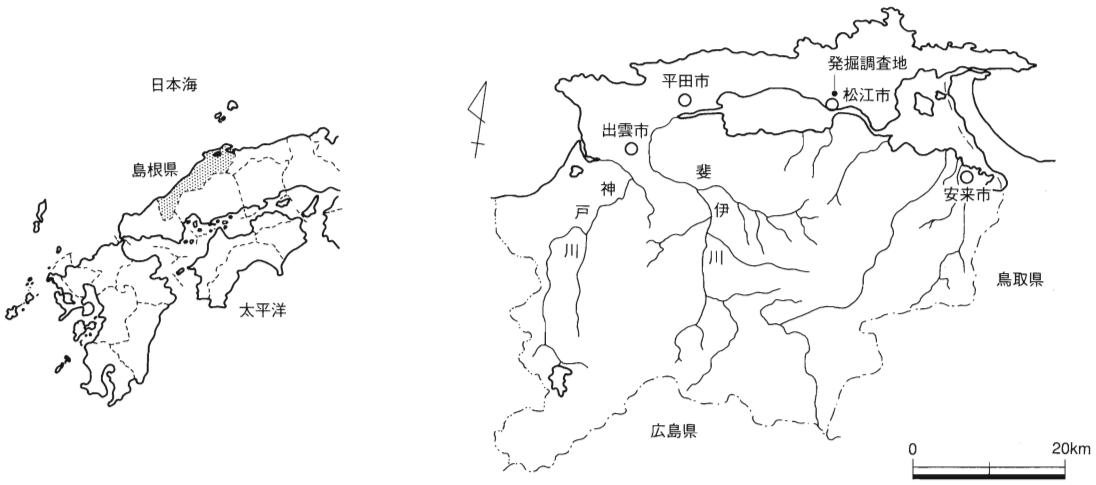
第2章　位置と環境

法吉地域は松江市街地の北側、島根半島からつらなる丘陵の南端部に位置する。西に比津丘陵、東に菅田丘陵、南側に現在の淞北台住宅団地から東奥谷町一帯にかけて丘陵が形成され、これら丘陵の間をぬって東西に平地が広がっている。今回調査を行った場所は、法吉地域でも西側に位置し、谷と丘陵尾根が入り組んだ地形となっており、この南側に向かって平地が開けた形になっている。周辺の丘陵部分の多くは山林で、平地は主に水田として利用されていたが、近年は開発により宅地化が進んでいる。以下に時代を追ってこの地域の遺跡を概観することとしたい。

この地域で最も古い人間の活動の跡は後期旧石器時代にまで遡り、白鹿谷遺跡㉒では玉髄製掻器が採集されている（丹羽野2001）。縄文時代から弥生時代の遺跡では法吉遺跡㉝が知られている。ここでは縄文時代晩期、弥生時代初頭～中期の土器、石鏃、石錘などが出土しており、また、平成12年度の松江市の調査では縄文時代の流路でドングリの集積が検出されている（松江市（財）2001）。田中谷遺跡Ⅲ区①では弥生時代後期の遺物を含む旧河道などが確認された（松江市2001）。ただし、この時代の集落については発掘調査がされておらず、当時の人々がどのような環境で生活していたのかは明らかではない。

法吉地区周辺には多くの古墳が存在し、北山丘陵から派生する丘陵尾根上や先端、北山丘陵から低地をはさんで南側に位置する丘陵の上や端部に位置するものが多い。古墳時代前期から中期には、月廻古墳群⑧（前島1974、宮沢1976）、折廻古墳群㊴などが営まれる。月廻古墳群は埋葬施設に箱式石棺や礫床を伴う箱形木棺を持つ古墳があり、番外３号墳には木棺内に盤龍鏡が副葬されていた。折廻古墳群には礫床を伴う箱式石棺を主体部とする古墳も確認されている。後期古墳では伝宇牟加比売命御陵古墳⑩（松江市1993）、岡田薬師古墳⑳（島根県1986）が調査されている。伝宇牟加比売命御陵古墳は一辺16m、高さ２mの造り出し付き方墳で、主体部は石囲を伴う木棺であったと考えられる。出土した須恵器・埴輪から６世紀前半の築造と推定される。また、岡田薬師古墳は横穴式石室をもつ６世紀後半の方墳で、副葬品には須恵器や玉類がある。墳丘盛土内には須恵器が置かれ、墳丘を構築する最終段階で何らかの祭祀行為が行われたと考えられる。

時期は不明だが松ヶ峠古墳㉓（造り出し付き円墳、径36m）、田中谷古墳⑦（前方後方墳、全長



第１図　遺跡位置図

第２図　調査遺跡と周辺の遺跡（Ｓ＝1／30000）

表１　周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	田中谷遺跡	18	長谷歳徳神古墳	35	久米横穴墓群	52	金刀比羅古墳	69	高柳古墳
2	下がり松遺跡	19	棗谷荒神古墳	36	中代遺跡	53	深町古墳群	70	北垣古墳
3	塚山古墳	20	岡田薬師古墳	37	栗元古墳	54	菅田ヶ丘古墳群	71	薦津殿山城跡
4	角谷遺跡	21	二反田古墓	38	栗元横穴墓	55	宮田古墳群	72	生馬神社旧社地
5	鶯谷遺跡	22	白鹿谷遺跡	39	折廻古墳群	56	小丸山古墳	73	平野前廃寺
6	新宮古墳	23	松ケ峠古墳	40	煙硝倉古墳	57	菅田丘古墳	74	法恩寺瓦窯跡
7	田中谷古墳	24	藤ヶ谷遺跡	41	法吉小学校裏山横穴墓群	58	薬師山古墳	75	桜本古墳
8	月廻古墳群	25	ゴルフ場内古墳群	42	摩利支天山横穴墓群	59	荒張古墳	76	桜本古墳群
9	久米古墳群	26	ゴルフ場内横穴墓群	43	赤山横穴墓群	60	荒張古墳群	77	山王古墳
10	伝宇牟加比売命御陵古墳	27	水酌崎横穴墓群	44	ひのさん山横穴墓群	61	皆美山１号墳	78	山玉神社跡
11	春日遺跡	28	ひゃくだ横穴墓	45	桜崎横穴墓	62	皆美山２号墳	79	井原古墳
12	吉岡兵之助宅前古墳	29	久米第２横穴墓群	46	切通横穴墓	63	松橋古墳群	80	かいつき山古墳群
13	白鹿山城砦群	30	久米遺跡	47	赤崎横穴墓	64	高専敷地内古墳群	81	万寿寺裏山古墳
14	長谷窯跡推定地	31	唐梅古墳群	48	松江城址	65	名尾丘古墳		
15	ココメダカ山遺跡	32	石在経塚	49	小丸山古墳	66	名尾荒神古墳		
16	山槇経塚群	33	法吉遺跡	50	荒隅城跡	67	大北古墳		
17	山槇古墳群	34	比津が崎横穴墓群	51	真山城跡	68	Ｌ３６古墳		

24m)、新宮古墳⑥（円墳、径25m）は墳形や規模から、中期から後期にかけてこの地域の首長墓であったと推測される。このほか久米古墳群⑨、唐梅古墳群㉛、吉岡兵之助宅前古墳⑫など、20m前後もしくはそれ以下の小規模な古墳が築かれている。6世紀後半以降になると、ひのさん山横穴墓群㊹、ひゃくだ横穴墓㉘、比津が崎横穴墓群㊳など多くの横穴墓が造られている。集落跡の様相については明らかではないが、長谷窯跡推定地⑭では6世紀後半の熔着した須恵器片が多く採取されており、須恵器窯があったと考えられている（岡崎1989)。

奈良・平安時代の遺跡では、久米遺跡㉟が調査されている。丘陵斜面を加工して掘立柱建物が建てられていた（松江市2000)。白鹿谷遺跡では石帯が出土しているほか、熔着した須恵器がかなり採取され、8～9世紀代に須恵器窯が営まれたと考えられている（岡崎1989、岡崎・坪倉2001)。なお、鷺谷遺跡⑤は、出雲国風土記にも記述のある法吉神社の旧社地で、法吉の地名起源の由来となった場所である。

中世以降の遺跡では、2基の経塚からなる山槇経塚群⑯や、一字一石経が出土した石在経塚㉜が知られる。コゴメダカ山遺跡⑮では宋銭・明銭と脇差1が出土し、古墓と思われる。二反田古墓㉑は室町時代後半から安土桃山時代の古墓で、石敷基壇や宝篋印塔、火葬壙が検出されている（松江市1987)。

戦国時代には、尼子氏に属した松田氏の居城、白鹿山城砦群⑬（島根県1998）が標高154mの白鹿山を中心に築かれ、のちの軍記物の『雲陽軍実記』では「尼子十旗」のうちの第一に挙げられている。この白鹿山城砦群の攻略のため毛利氏により、白鹿山から北へ1km、標高256mの真山に真山城㊶（島根県1998）が構築された。1563（永禄6）年には尼子氏と毛利氏との間で激しい戦闘が繰り広げられた末、ついに白鹿山城砦群は陥落した。こののち、1569（永禄12）年から1571（元亀2）年にかけて真山城は尼子氏再興の拠点となるが、再び毛利氏の手に落ちた。

参考文献

前島己基1974　「月廻古墳群」『日本考古学年報』25　1972年版

宮沢明久1976　「月廻古墳群」『日本考古学年報』27　1974年版

島根県教育委員会1986　『岡田薬師古墳』

松江市教育委員会1987　『二反田古墓』

岡崎雄二郎1989　「松江市法吉・長谷窯跡推定地について」『松江考古』第7号

岡崎雄二郎1989　「松江市白鹿谷遺跡について」『八雲立つ風土記の丘』№97

松江市教育委員会1993　『伝宇牟加比売命御陵古墳』松江市文化財調査報告書第54集

島根県教育委員会1998　『出雲・隠岐の城館跡』島根県中近世城館跡分布調査報告書＜第2集＞

松江市教育委員会2000　『久米遺跡群発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第82集

松江市教育委員会2001　『田中谷遺跡Ⅲ区発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第86集

丹羽野裕2001　「松江市出土の石器3点」『松江考古』第9号

岡崎雄二郎・坪倉武久2001　「松江・白鹿谷遺跡について(2)」『松江考古』第9号

(財)松江市教育文化振興事業団2001　『財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課年報』Ⅴ

第3章　調査の概要

第1節　分布調査と範囲確認調査

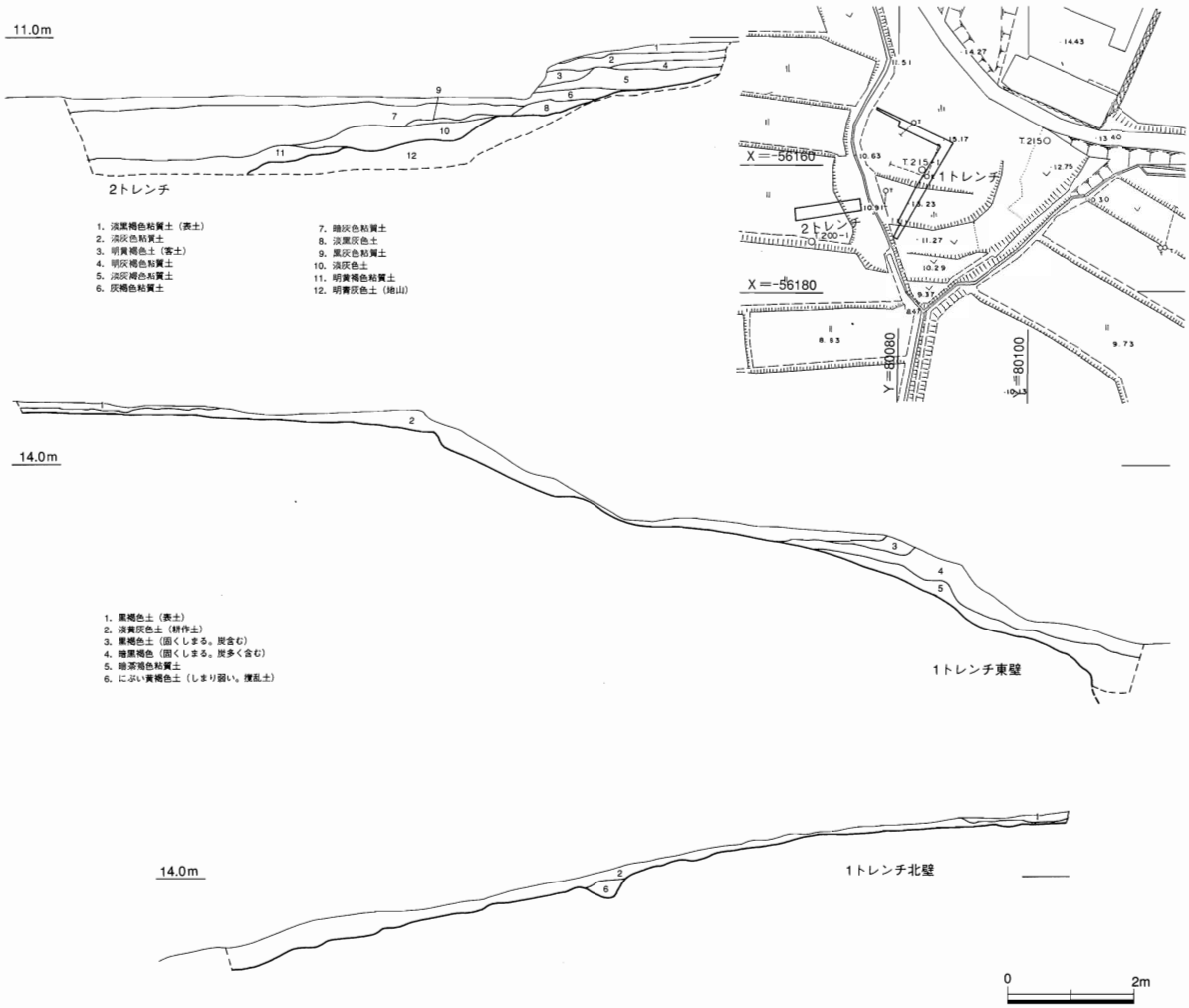
法吉団地の開発予定地内には、周知の遺跡として、西から、下り松窯跡、田中谷遺跡、塚山古墳、松崎金一郎所有山林古墳、下り松遺跡の存在が知られていた[1)]。また、事前の現地踏査から、下がり松遺跡の北側の尾根筋上で山城跡の可能性のある部分が、下がり松遺跡から谷を挟んで東側に位置する丘陵の先端部に古墳の可能性がある地点がそれぞれ確認できたため、前者を「角谷遺跡」、後者を「新宮2号墳」と仮称することとした。1999年5月より本調査に先立ってこれらの遺跡の範囲確認調査を実施することとなった。

田中谷遺跡は東西を丘陵に挟まれた南北に細長くのびる谷に位置しており、全部で49箇所のトレンチを設定した。北側の谷奥部に近い箇所では、弥生時代後期の土器や古墳時代後期～奈良・平安時代の須恵器・土師器が多く出土しており、遺構としては弥生時代後期の溝も検出された。この周辺については南北90m、東西30mの範囲を本調査することとし、田中谷遺跡Ⅰ区と呼ぶことにした。そこから南側へ下った部分では、谷の東側から中央にかけては耕作土中から若干の土師器・須恵器片が出土するのみであったが、谷の西側では弥生時代後期の土器や、古墳時代後期～奈良・平安時代の土師器・須恵器がまとまって出土している部分が確認できたため南北150m、東西20mを田中谷遺跡Ⅱ区として本調査対象区域とした。

谷の南半部では、中央部ではまとまった遺物の出土が見られなかったが、東側では砂礫層から弥生土器等がまとまって出土したため南北約75m、東西約30mの範囲を本調査対象とした。田中谷遺跡Ⅲ区としたこの部分については松江市道が計画されていたため松江市教育文化振興事業団が調査することとなった。その南側の丘陵裾では奈良・平安時代頃を中心とする遺物が出土したため田中谷遺跡Ⅳ区と呼び、南北85m、東西35mを本調査対象とした。谷中央を挟んで西側の水田部ではトレンチで須恵器・土師器の出土し、時期不明ながらピットや溝跡が検出されたため本調査対象区域とし、ここを田中谷遺跡Ⅴ区と呼ぶこととした。田中谷遺跡の西側の丘陵裾から中腹にかけては下り松窯跡として周知されており、ここに8箇所でトレンチ調査を実施したところ、古墳時代終末期～奈良・平安時代、中世の遺物・遺構が検出された。ただし、窯跡関連の遺構・遺物は確認できず、下がり松遺跡との名称の混乱を防ぐため、田中谷遺跡Ⅴ区に含めることとした。

下がり松遺跡[2)]については田中谷遺跡の東側の丘陵の南側の尾根筋から東・西の斜面にかけて22箇所のトレンチを設定した。尾根上や西側の斜面では、遺物はほとんど出土していないが、東側の斜面や丘陵裾で奈良・平安時代の遺構・遺物が確認できたため東西70m、南北80mを本調査対象区域とした。なお、松崎金一郎所有山林古墳と考えられた古墳は下がり松遺跡の東側斜面に認められたが、この部分は松崎氏の所有していた土地ではなく、本来の松崎金一郎所有山林古墳と異なる可能性も考えられた[3)]。このため、「下がり松古墳」と呼ぶこととし、本調査の過程で中世墓であることが判明したため「下がり松古墓」と呼称している。

角谷遺跡については18箇所のトレンチを設定したが、石器や須恵器片が出土し、地形から山城跡



第3図　新宮2号墳トレンチ位置図・断面図（S＝1／1000）（S＝1／100）

の可能性が考えられたため丘陵上部の尾根筋の南北約160mの範囲を本調査対象とした。

塚山古墳については、古墳の範囲は保存する方向で島根県住宅供給公社と協議を進めたが、古墳の形状・規模を確定するため8箇所のトレンチを設定した。

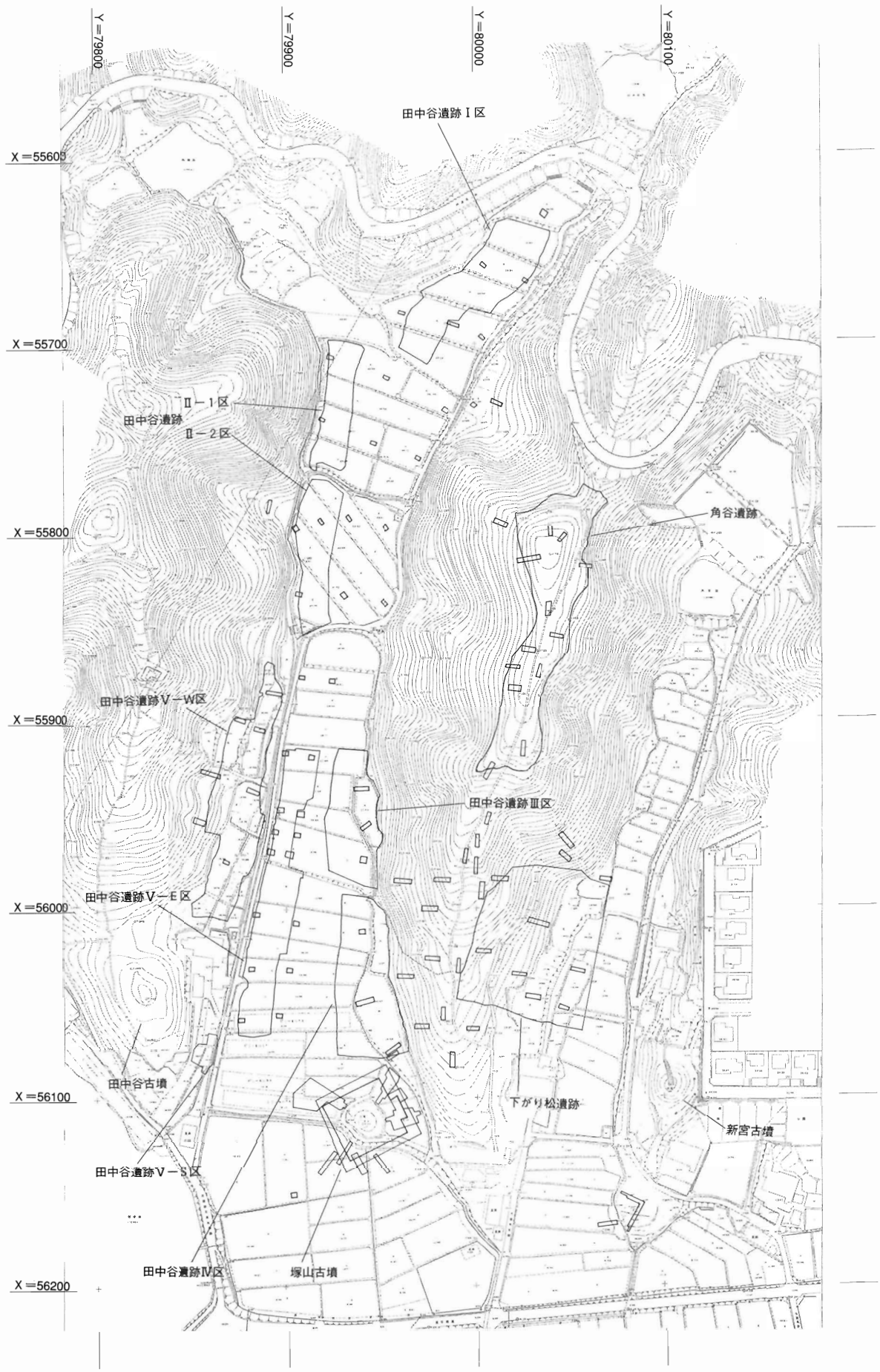
「新宮2号墳」は、下がり松遺跡の東側の丘陵の先端部に位置し、北側の尾根筋には径25m前後の円墳である新宮古墳がある。この部分について当初の計画では、工事の予定された範囲ではなかったが計画が変更されたため2000年4月から遺跡の内容・範囲を確認するためトレンチ調査を実施することとした。「墳丘」中央部に東西13m、南北17.6m、幅2mのL字形の1トレンチを、古墳西側の裾に長さ10.4m、幅2mの2トレンチを設定した。調査の結果、古墳に関連するような遺物や遺構などは確認できなかったため、古墳ではないと判断し、本調査区域には含めなかった。

注

1）島根県教育委員会　1993　『増補改訂　島根県遺跡地図』Ⅰ（出雲・隠岐編）による。

2）切り図等によれば字名は「下り松」と表記されていて、地元の呼称は「サガリマツ」である。今回の報告では表記を呼称に合わせるため遺跡名を「下がり松」とした。

3）昭和48（1973）年の遺跡台帳では、平成5（1993）年の島根県遺跡地図の示す地点とは別の位置に松崎金一郎所有山林古墳が記されており、平成5年以前に遺跡名の混乱があった可能性も考えられる。



第４図　試掘調査・本調査区設定図（S＝1／3000）

第２節　本調査の概要と調査経過

第１節で述べたように範囲確認調査の結果、法吉団地開発予定地内では「田中谷遺跡（Ⅰ～Ⅴ区）」「塚山古墳」「角谷遺跡」「下がり松遺跡」の４遺跡が存在することが明らかとなった。本調査は、1999年度は角谷遺跡と塚山古墳について調査を行った。なお保存が決定した塚山古墳は墳丘の形状・規模を確認するため、墳裾のトレンチ調査を行うにとどめている。2000年度は田中谷遺跡と下がり松遺跡、そして塚山古墳のトレンチ調査を前年度に引き続いて行った。

角谷遺跡は、南北にのびる丘陵尾根上に立地している。中世の山城である白鹿山城砦群の南西に位置し、丘頂部はなだらかな平坦面が広がることから当初は山城の可能性が考えられた。本調査は1999年９月20日より開始し、丘頂部からピット群、尾根筋上からは通路跡が検出された。ピット群は建物跡や柱列が復元できるもので、周辺から奈良・平安期の遺物が検出された。通路跡は尾根筋上を南北にのびており、特に丘陵北端部では大規模な盛土により土橋状に構築されるものである。調査は2000年１月12日に終了し、同年４月９日には地元住民を対象とした現地見学会を開催した。その際、丘頂部の平坦面から鉄砲玉が採取された。

塚山古墳は田中谷遺跡が立地する谷の出口付近に位置する。墳丘の形状を把握するための測量調査を1999年５月20日から行い、墳裾のトレンチ調査は７月１日から開始した。その結果、古墳は墳丘規模が一辺33ｍの方墳で、墳丘の東側と南側には造り出し部があり、墳丘周辺には周溝が巡ることが明らかとなった。トレンチからは円筒埴輪や人物埴輪、筒形器台などが出土しており、北東側のトレンチでは奈良～平安期の水場遺構も検出された。10月30日には現地説明会を開催し、140人の参加者があった。11月30日にはトレンチを埋め戻して調査を終了した。翌2000年には、造り出し部の規模等を確認するため再度トレンチ調査を行い、さらに古墳の公園としての整備に向け、墳丘の表土はぎ作業を2001年１月29日から行った。そしてこの作業中、墳丘の頂部付近で古墳の主体部と、副葬品とみられる鉄器片が数点検出されたのであった。このため急遽遺物を保護するべく、主体部の調査を２月５日から行うこととなった。冬期の不順な天候が想定されたので、墳頂部にパイプテントを設置して調査を進めた。強風や積雪に悩まされながらの調査であったが、主体部の礫床構造や短甲など数多くの副葬品が明らかとなった。３月11日には現地説明会を開催し50人の参加で賑わい、３月15日には主体部の埋め戻し作業を行い調査を終了した。

田中谷遺跡は、南北にのびる丘陵に挟まれた狭長な谷部に立地する。調査区は範囲確認調査における遺構・遺物の検出状況によりⅠ～Ⅴ区に分かれており、うちⅢ区は松江市道予定地であることから松江市教育文化振興事業団が調査を行った。田中谷遺跡の調査前の状況は水田であり、耕作土や客土が厚く堆積していた。従って調査は重機による水田層の除去作業から行った。

Ⅰ区は谷部の奥に位置する。４月24日から重機による水田層の除去作業を行い、５月９日より包含層の掘削を開始した。結果、弥生時代後期の井戸枠や木製品をはじめとする弥生時代～中世の遺物を大量に包含する旧河道が検出され、段丘上からは弥生時代後期から奈良時代にかけての建物跡が検出された。調査は団地造成工事の重機による騒音に終始悩まされながらも、９月20日に終了した。Ⅱ区はⅠ区の南西側の山際に位置している。細長い調査区で、水路を挟み北側をⅡ－１区、南側をⅡ－２区とした。重機による水田層の除去作業後、５月18日より調査を開始した。その結果、

Ⅱ－1区では調査区の北から南へ貫流する旧河道が検出され、弥生時代後期の木製品が多数出土した。調査は8月9日をもって終了した。Ⅳ区は谷の南東側に位置し、5月19日から調査を開始した。その結果、調査区北西で弥生時代後期の旧河道が検出され、段丘上ではピット群や溝状遺構等を検出した。調査は8月4日をもって終了した。Ⅴ区は谷の南西側に位置する。丘陵部から水田部まで調査区が広がっており、丘陵斜面部をⅤ－W区、水田部をⅤ－E区、丘陵南端部をⅤ－S区とした。4月10日から調査を開始し、Ⅴ－S区では弥生時代後期から古墳時代末にかけての竪穴建物や加工段、掘立柱建物を検出した。Ⅴ－E区では、弥生時代後期の旧河道や、掘立柱建物、布掘建物などが検出された。Ⅴ－W区では弥生後期から中世にかけてとみられる竪穴建物や掘立柱建物が検出され、出土遺物の中には石帯も含まれていた。調査は団地造成工事の重機の騒音や、湧き水、風雪に悩まされながらも2001年1月12日をもって終了した。田中谷遺跡Ⅰ区とⅤ区については、9月17日に現地説明会を行い80人の参加で賑わった。

下がり松遺跡は、田中谷遺跡の東側に隣接する丘陵先端部に立地し、8月10日から調査を行った。その結果、丘陵頂部から通路状遺構、斜面部から平坦部では弥生時代後期から奈良・平安時代にかけての竪穴建物や加工段、掘立柱建物、溝状遺構、土坑等が検出された。谷部からは奈良・平安時代の遺物が大量に出土し、中には墨書土器も含まれていた。また、斜面上方には当初「下がり松古墳」と称する墳丘状の高まりが存在した。しかし調査の結果、石積基壇をもつ中世の火葬墓であることが判明し、「下がり松古墓」と呼称した。下がり松遺跡の調査は1月10日で終了した。

この他、本調査中の9月24日には大雨のため事務所が水没し、一階が床上浸水をうけるなどの被害を受けた。また10月6日には鳥取西部地震をうけながらも幸い被害はなく、法吉団地内遺跡の調査は2001年1月12日をもって終了した。

第3節　調査体制

【調査主体】　島根県教育委員会

【事務局】　宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、秋山実（同総務課長）、内田融（同）、松本岩雄（同調査第1課長）

【調査員】　熱田貴保（同文化財保護主事）、深田浩（同主事）、東山信治（同）、越智昌二（同教諭兼文化財保護主事）、伊藤幸子（同調査補助員）、小田川悠美（同）、糸賀五月（同）、平井大介（同）、寺本和明（同）、野津清（同）、青木満（同）

【調査指導】　大谷晃二（島根県立松江北高等学校）、朽津信明（東京文化財研究所）、阪口英毅（京都大学）、下山進（吉備国際大学）、田中義昭（島根県文化財保護審議会）、松木武彦（岡山大学）、森下章司（大手前大学）、山根正明（島根県立松江南高等学校）、渡邊貞幸（島根大学）

【発掘作業員】　赤井英子、秋国勝、青山豊子、安食栄、小豆澤嘉積、安達福、安達多津子、足立春房、安達フミコ、井川弘人、井口清、井口トミ子、石倉春枝、石丸正、伊藤悟朗、井上節夫、井上昇、井上幸夫、今岡孝之、岩本大平、上田考子、遠藤繁、大國和夫、岡礼二、小川吉子、小田川望美、恩村健二、勝部慶福、加藤哲弘、岸和也、木谷久美子、小泉ハルミ、河野清正、古島幸子、小谷ルリ子、小原本衛、近藤静代、坂根栄、昌子治雄、瀬利貢、曽田愿重、曽田雄三、高

倉重夫、高島孝子、田部茂、田部千重子、谷干城、津森徳雄、永島昭、永島八重子、永島雄三、中村清子、中村礼三、ナリン・プラサーナ・ラトナヤケ、野津昭江、野津潔、野津喜代美、野津末子、野津千俊、野津安江、野津吉正、野津良、野津林子、花田依子、浜崎智和、ハラグワ・ハイル、福島秀香、福田巌、福田英子、福田喜久子、福田スミエ、福田千恵子、福田文子、福田正秋、福田ミヤ子、福田美代江、福頼英子、藤井トシ子、藤井誠、藤田美重子、藤森晶子、細木澄子、細田美智子、細田美晴、松田富江、松本明雄、松本長子、松本美佐子、松本諠、三代美音、本常貴広、山根誠、山本雄太、山本嘉男、横井寛之、吉岡昭男、吉岡啓三郎、吉岡正樹、吉岡泰子、吉野智、米田喜代利、和田隆徳

【遺物整理作業員】　浅井順子、岩崎恵、内海紀子、小野千歳、笠井文恵、門脇卓子、岸美佐子、栗原順子、佐々木順子、佐々木孝子、高島留美、田中路子、錦織美千恵、野田清美、羽島ひとみ、藤原須美子、守屋かおる、山根るみ子、若佐裕子、渡部恵子

【調査協力者】　赤沢秀則（鹿島町教育委員会）、石川崇（(財）松江市教育文化振興事業団）、江川幸子（同）、久保智康（京都国立博物館）、小林謙一（奈良文化財研究所）、中村唯史（島根県立三瓶自然館）、古谷毅（東京国立博物館）、水口晶郎（安来市教育委員会）、山内英樹（(財）愛媛県埋蔵文化財調査センター）

第4章　田中谷遺跡

第1節　Ⅰ区の調査結果

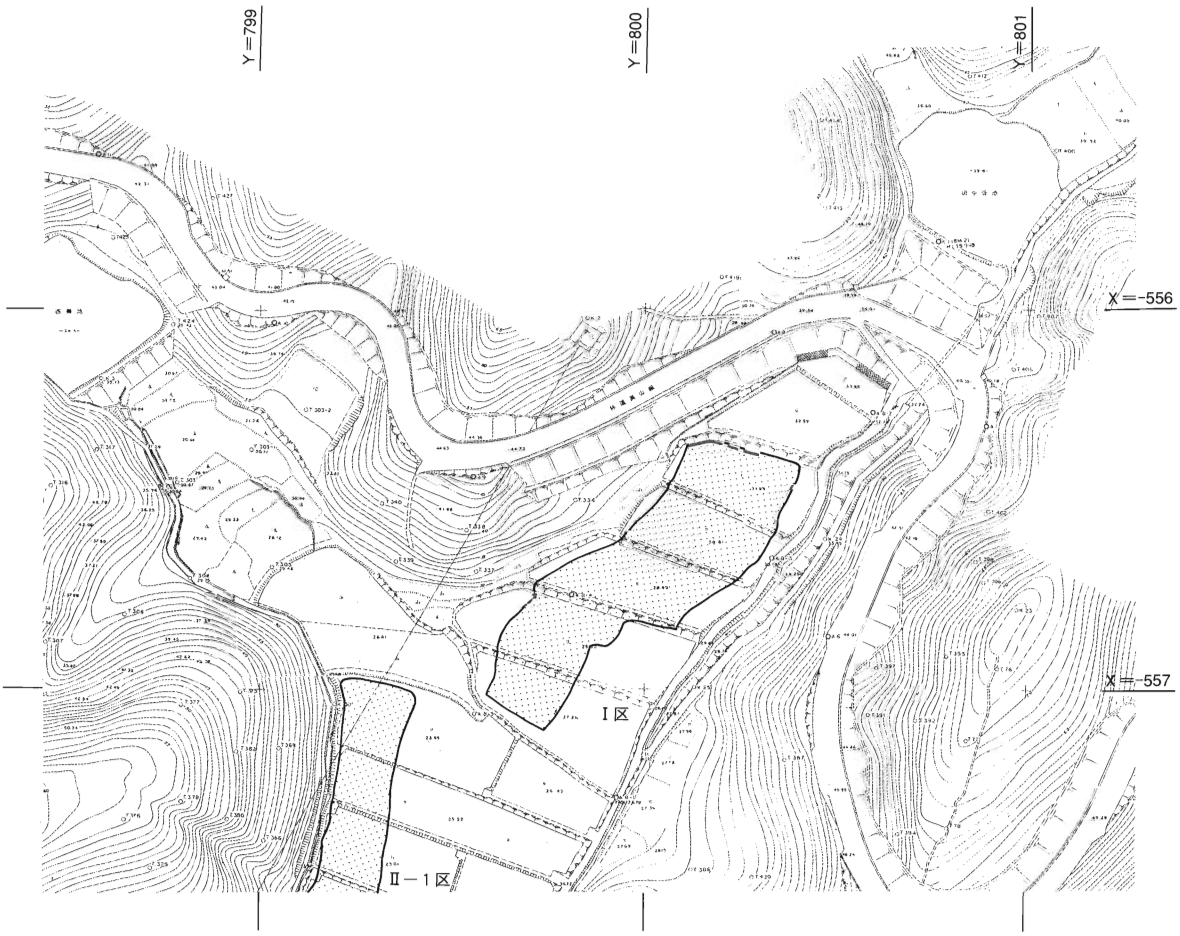
1．位　置

Ⅰ区は、田中谷と呼ばれる南北に長い谷の奥部に位置する。第5章で取り上げる塚山古墳はこの谷の南端に位置しており、古墳から約440mで谷は北から突き出る丘陵によって二股に分かれている。西側の支谷はほどなく西廻池（墓地造成工事により消滅）に行き当たって閉塞し、一方北東に伸びる谷はその幅を狭めながら林道真山線、田中池を越え、やがて北山山塊に消えてゆく。

Ⅰ区は谷の分岐点から北東約100m、幅約20～30mに設定した調査区である。調査前の現状は狭長な谷間に造成された水田で、各田面の比高差が約1mの棚田状を呈していた（図版11上）。谷東側の丘陵裾には田中池から流れ出す水路がある。数回の圃場整備により流路は大きく変わっていると思われるが、この谷を流下する主要な河川である。

2．調査の経過

調査区は排土処理の都合により谷奥側の水田3段分から着手しその後南2段分を拡張し総面積2,239㎡を調査した。



第5図　田中谷遺跡Ⅰ区位置図（S＝1／2000）

まず、各田面の比高差が約１mある水田の耕作土・客土を、重機を使って除去する作業を2000年４月24日から始めた。掘削を進める過程で、調査区の西側では水田面下30～40cmで遺構の基盤となる面が現れる一方、東側では暗茶褐色の粘質土が厚く堆積していることがわかり、東側に古代以前の河道が流下する谷底、西側に丘陵裾や河川堆積物で構成される段丘に営まれた居住空間が存在すると考えられた。この想定に基づき５月９日から旧河道を覆う包含層の掘り下げを開始し、段丘上で遺構の精査を行った。

谷底は拳大から人頭大以上もある礫で埋め尽くされており作業は困難を極めたが、弥生時代～中世の遺物を大量に包含する旧河道１を検出できた。７月24日に調査区北側で井戸（ＳＥ01）を検出、またこの旧河道１の支流ともいうべき旧河道２を北側で検出した。ここからは木製品を包含した弥生時代後期の遺物が出土した。

一方段丘上は水田造成によって著しく削平されており、十分に遺構を確認できなかったが、弥生時代後期の竪穴建物３棟、古墳時代中期の竪穴建物２棟、古墳時代後期の掘立柱建物３棟、奈良時代の掘立柱建物１棟を検出した。

７月12日には地元の生馬小学校６年生30名の見学を受け入れた。旧河道で行った発掘体験では土器が見つかるたびに子供たちの歓声が上がっていた。

本格的な夏を迎えるこの頃から調査区周辺に宅地造成工事の大型車両が迫るようになってきた。重機の音は調査員同士声が聞こえないほどけたたましく、調査の最終日までこの騒音に悩まされた。

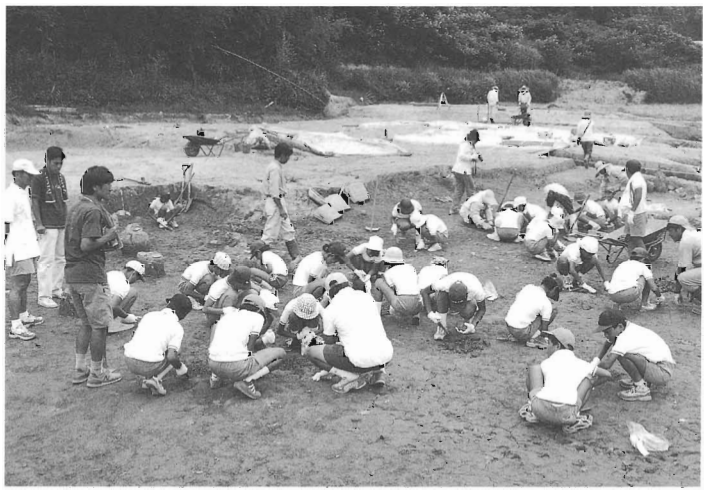


写真１　発掘体験風景

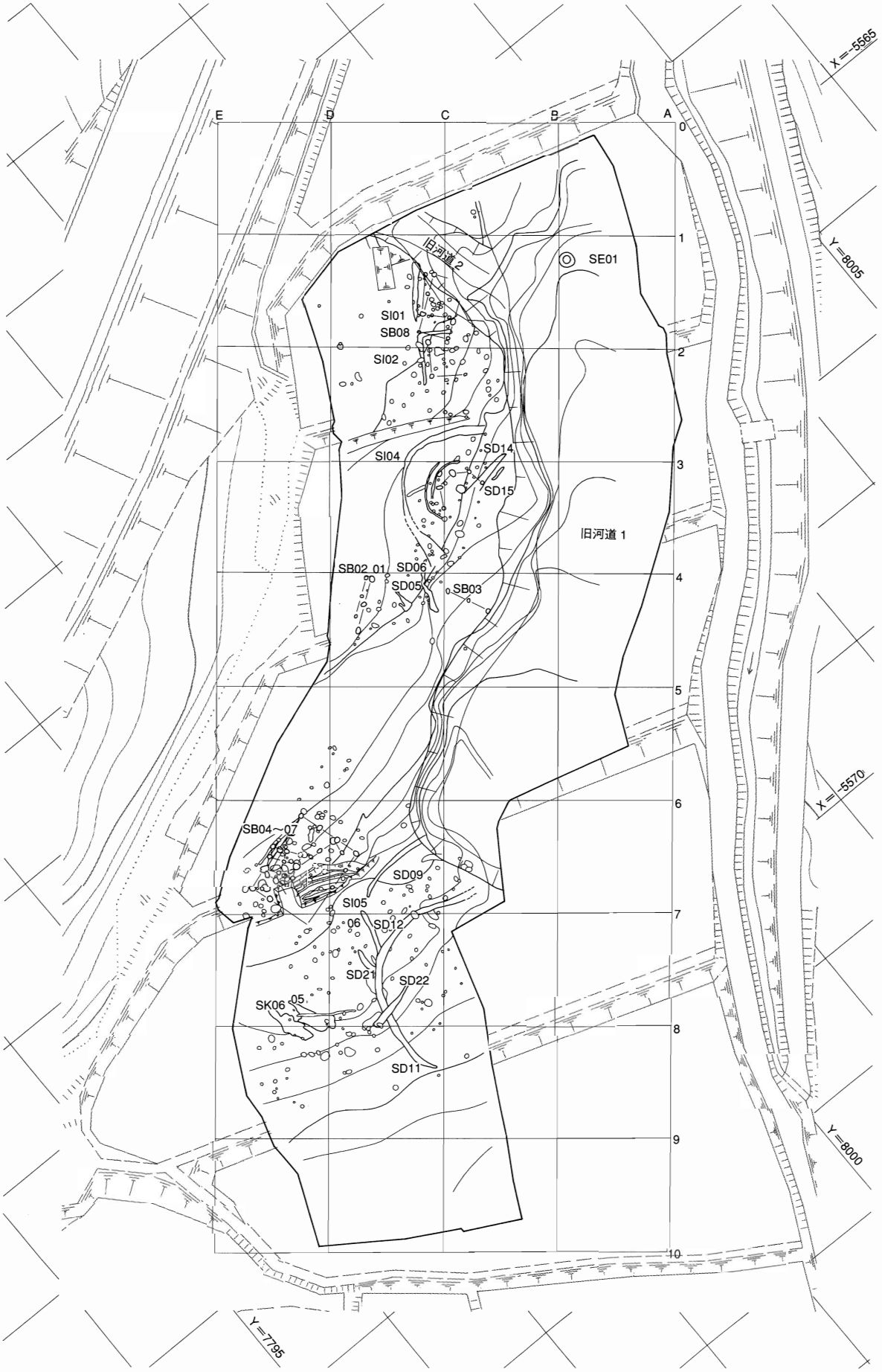
９月14日には田中義昭元島根大学教授の調査指導を受け、同16日に現地説明会を開催した。

調査の終了予定は当初８月末であったが、予想以上に大量の遺物が出土したため期間を延長し、９月20日に終了した。

３．調査の方法と遺構の概要

調査区の設定にあたっては主に旧河道の土層堆積状況の把握に留意して、谷地形に沿った任意の基準線を用いることとした。基準線の設定にあたり、北東側の丘陵裾に近い位置を起点とし、谷下側の方向を近接する水路にほぼ平行させた。北東側の起点の座標値はＸ＝－55644.3421、Ｙ＝80046.7627で、基準線に沿って10m間隔で区切りグリッドを設定した。グリッドを区切るラインは南西側に０，１，２，３～10、北西側にＡ，Ｂ，Ｃ～Ｅとし、グリッド名は北東隅を交差するラインのアルファベットと数字で、Ｄ－６のように表記した（第６図）。旧河道の断面観察は主にこのグリッドのラインで行った。また遺物の取り上げでも旧河道の流路を特定できない場合や、特定の遺構との関連が薄い場合にはグリッド単位で行った。各遺構については個々に基準線を設定した。

Ｉ区では幅30～40mほどの狭い谷の全幅を長さ約100mにわたって調査しており、遺跡を鳥瞰すると谷の東半分は低湿な谷底で、時期的な変遷を示す旧河道を検出した。一方西半分は比較的に高燥な丘陵裾～段丘にあたり、建物等の遺構を検出したことからも主要な居住域にあたる。ただし、



第６図　田中谷遺跡Ⅰ区平面図（**S**＝1／500）

これまでに繰り返されてきたと思われる大小の圃場整備により段丘面は著しく削平されていて、特に直近の造成では切土部分にあたった箇所で完全に遺構が消滅していた。従って調査によって検出・確認できた遺構は必ずしも本来の様相を反映しているものではなく、むしろ旧河道の遺物量からすればかなりの建物が存在していたと考える方が自然であろう。以下の説明ではまず段丘上の遺構について述べ、後に遺物を大量に包含した旧河道について記述する。なお、遺構番号の多くは調査時のままであり、掲載にあたって整列は敢えて行わなかった。

４．竪穴建物

竪穴建物は５棟検出した。前述したとおり削平著しく、断片的な把握にならざるを得なかった。古墳時代の建物は２棟（01，02）で弥生時代は３棟（04，05，06）である。

ＳＩ01（第７図　図版13上、31）

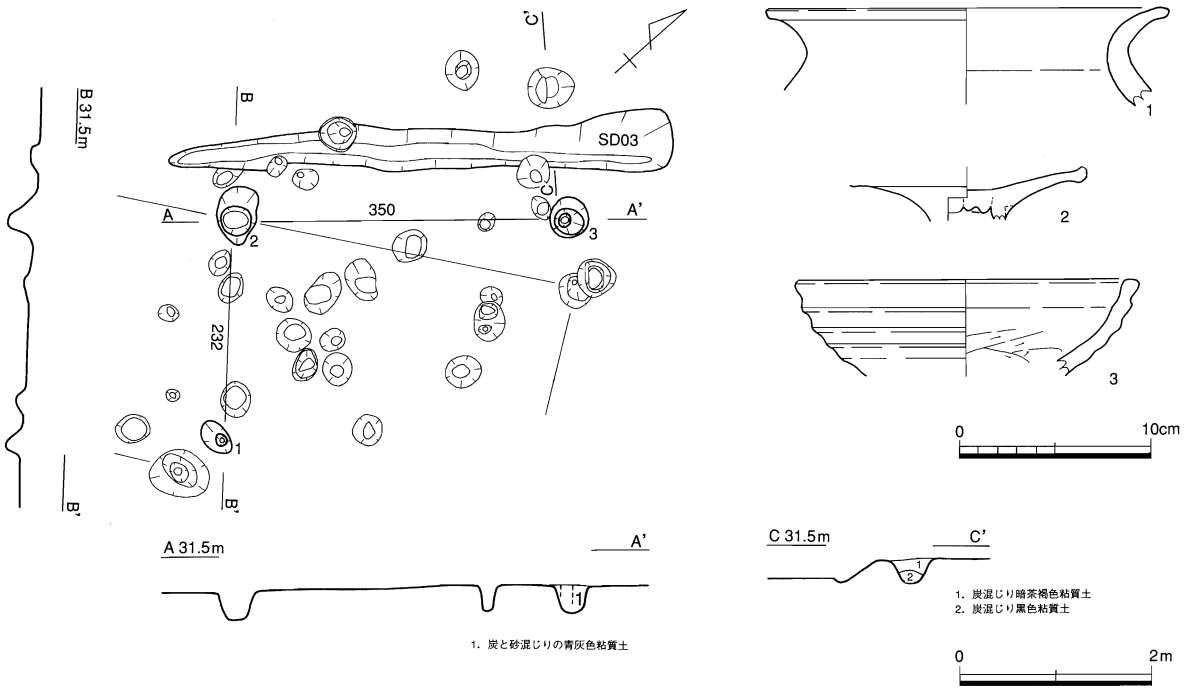
谷奥のC－１付近で、近接するＳＩ02とともに河道の流下方向に直列して並ぶ。北西側に長さ５．３ｍ、深さ40㎝の壁帯溝の一部が残ることから、平面は方形と考えられる。４柱穴のうち１穴は攪乱により検出できなかったが、柱穴間の距離から棟を河道に平行させていたものと考えられる。張り床は確認できなかった。

遺物は床面に相当する範囲から小片が出土した。２は坏部に明確な段を持って口縁が外反する高坏で、脚軸部には下方に肥厚する充填粘土に刺突痕を持つ（β）接合であり、松山Ⅱ期にあたる。建物の時期もおおよそこれに相当すると思われる。

ＳＩ02（第８図　図版13上、31）

前述のＳＩ01の南に隣接する方形の建物で、規模は不明であるが１辺4.5m程度と考えられる。４柱穴のうち１穴を欠くがＳＩ01と同じ棟方向であろう。

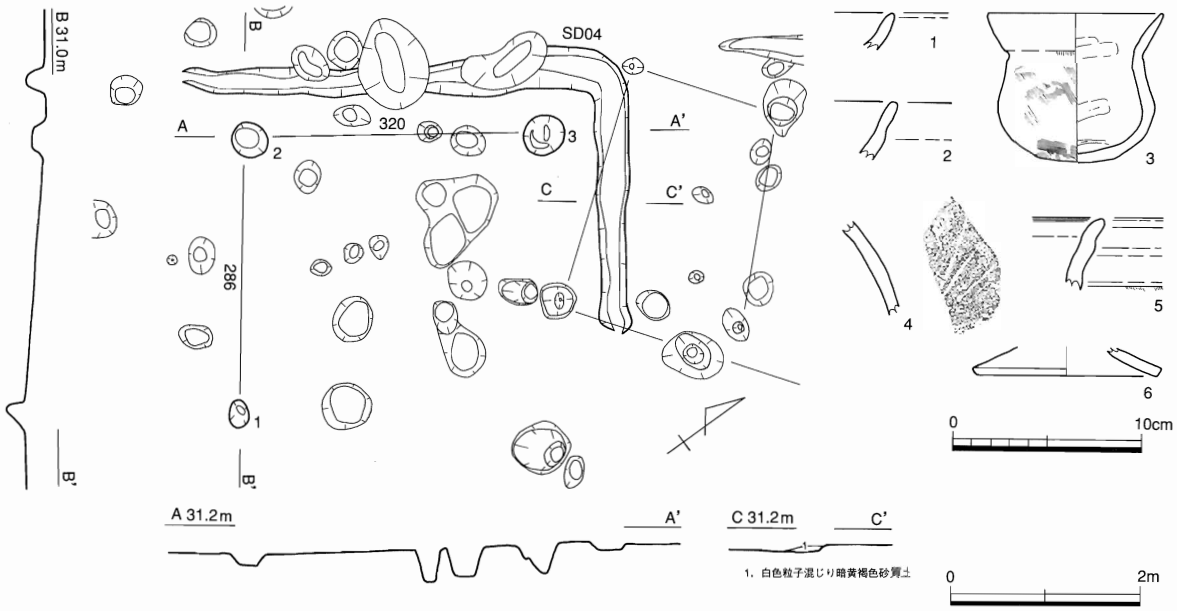
遺物のうち２がＰ３から出土した他はすべて壁帯溝から出土した。２，５は退化した複合口縁の甕、３は小型丸底壺で、ともに松山Ⅱ期である。



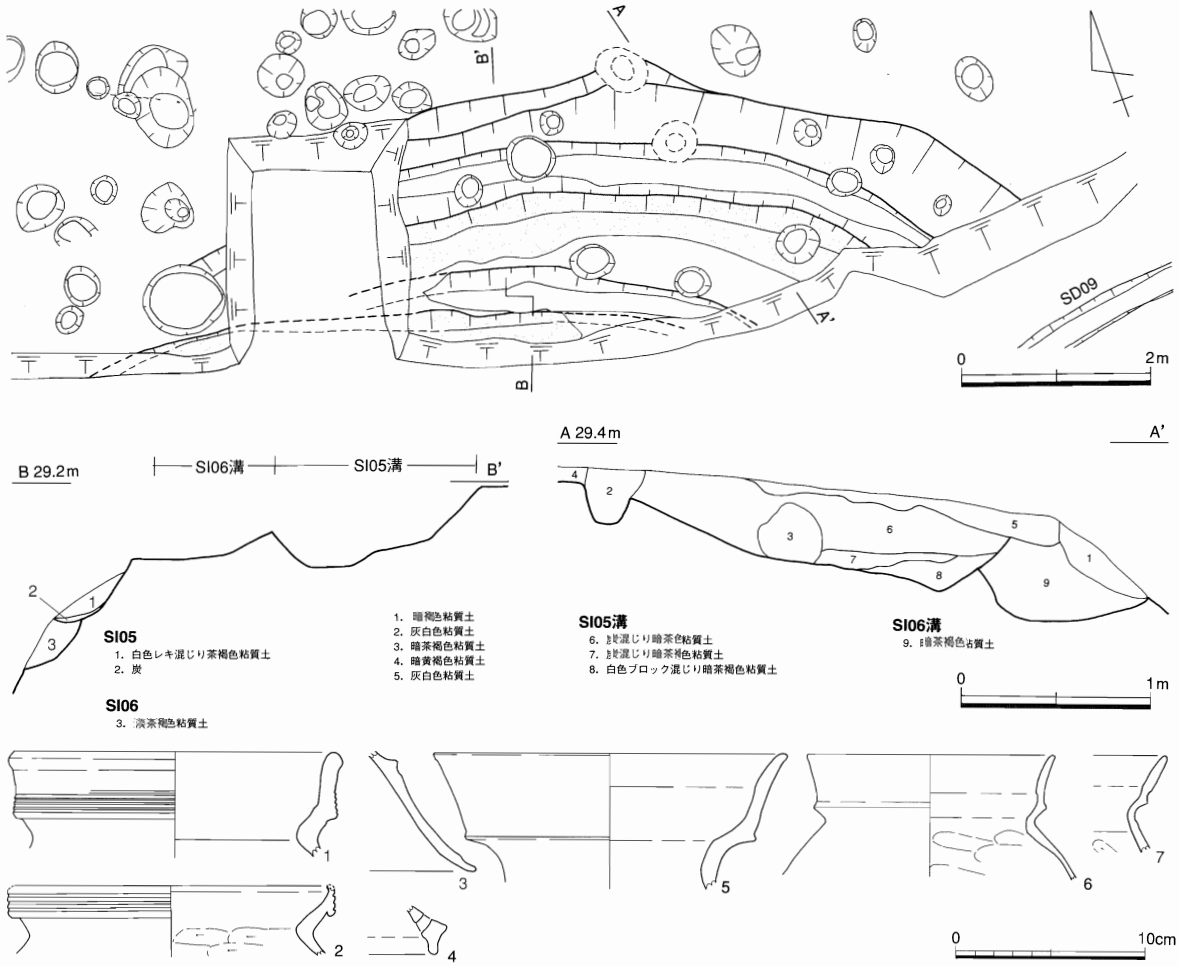
第７図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＩ01・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝1／80、遺物Ｓ＝1／4）

ＳＩ05，06（第９図　図版13中、31）

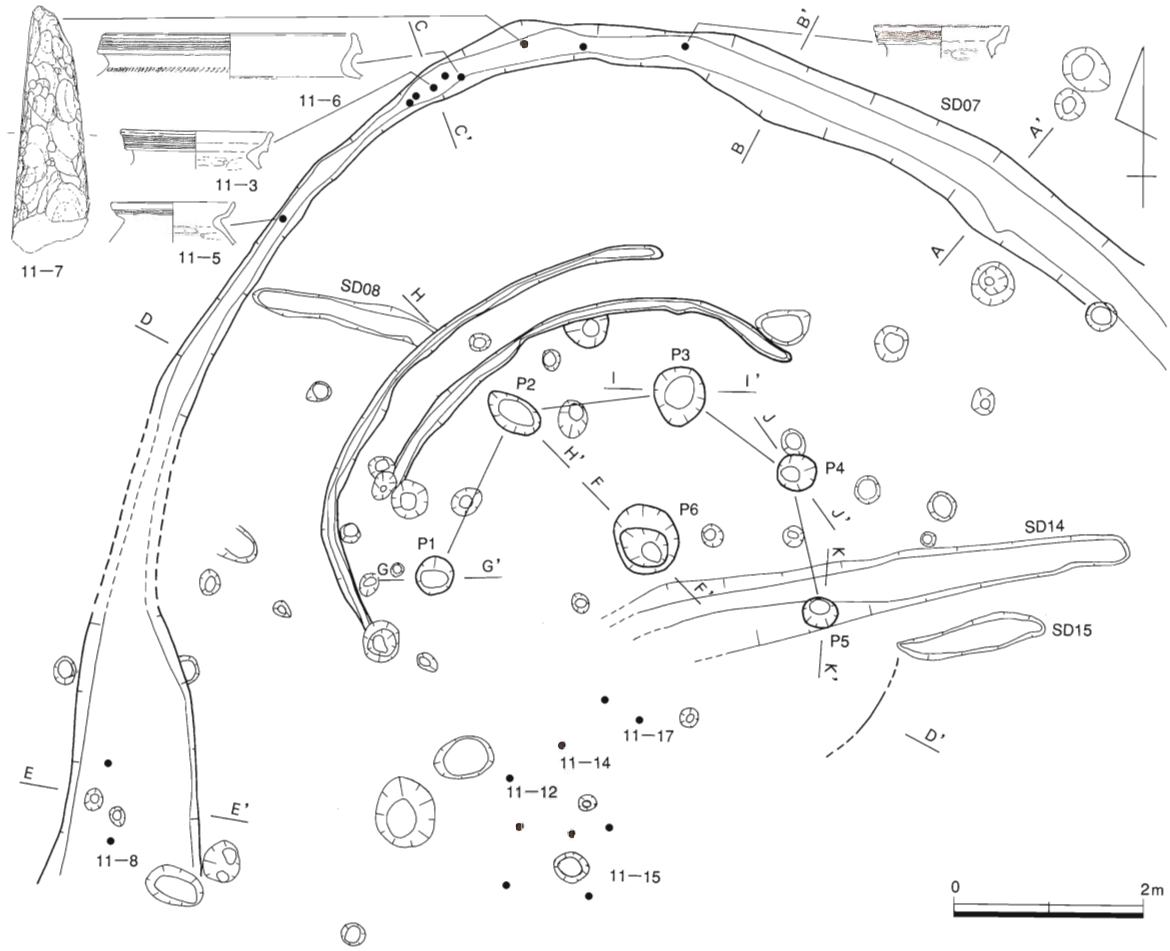
Ｄ－６の丘陵裾に位置する。水田造成によってほとんどが消失しており、丘陵上方側で床面と建

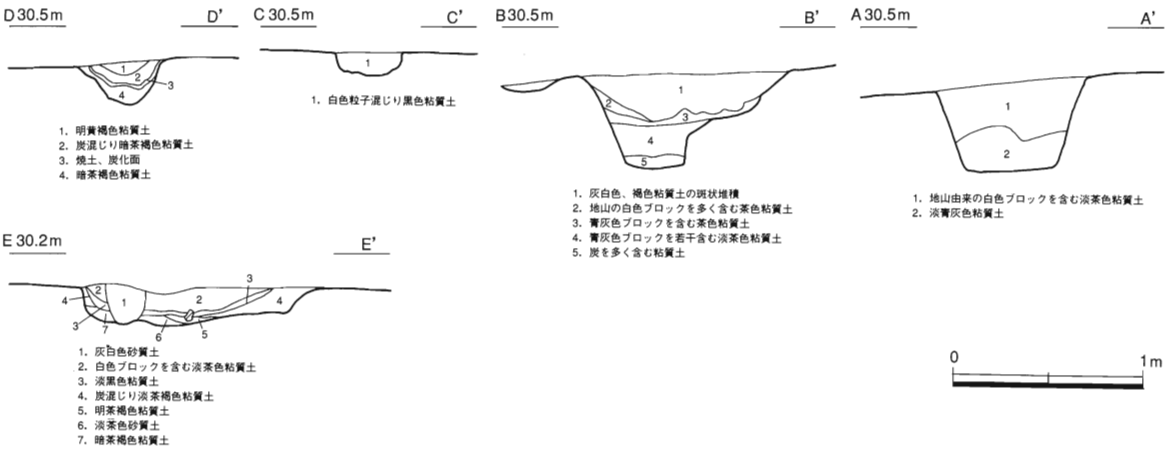


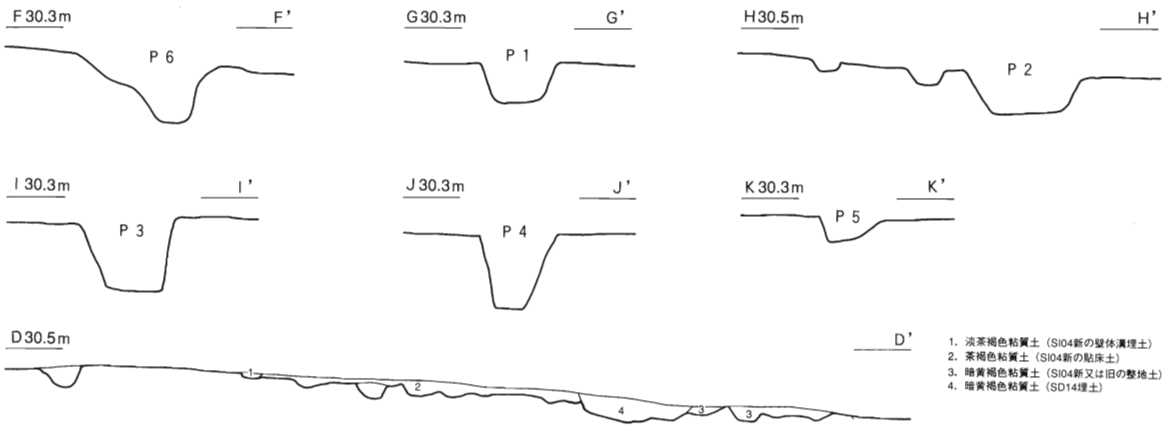
第８図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＩ02・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝1／80、遺物Ｓ＝1／4）



第９図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＩ05,06・出土遺物実測図（平面：Ｓ＝1／80、断面：Ｓ＝1／40、遺物：Ｓ＝1／4）







第10図　田中谷遺跡Ⅰ区**ＳＩ04**実測図（平面：**Ｓ**＝1／80、断面：**Ｓ**＝1／40、遺物：**Ｓ**＝1／8）

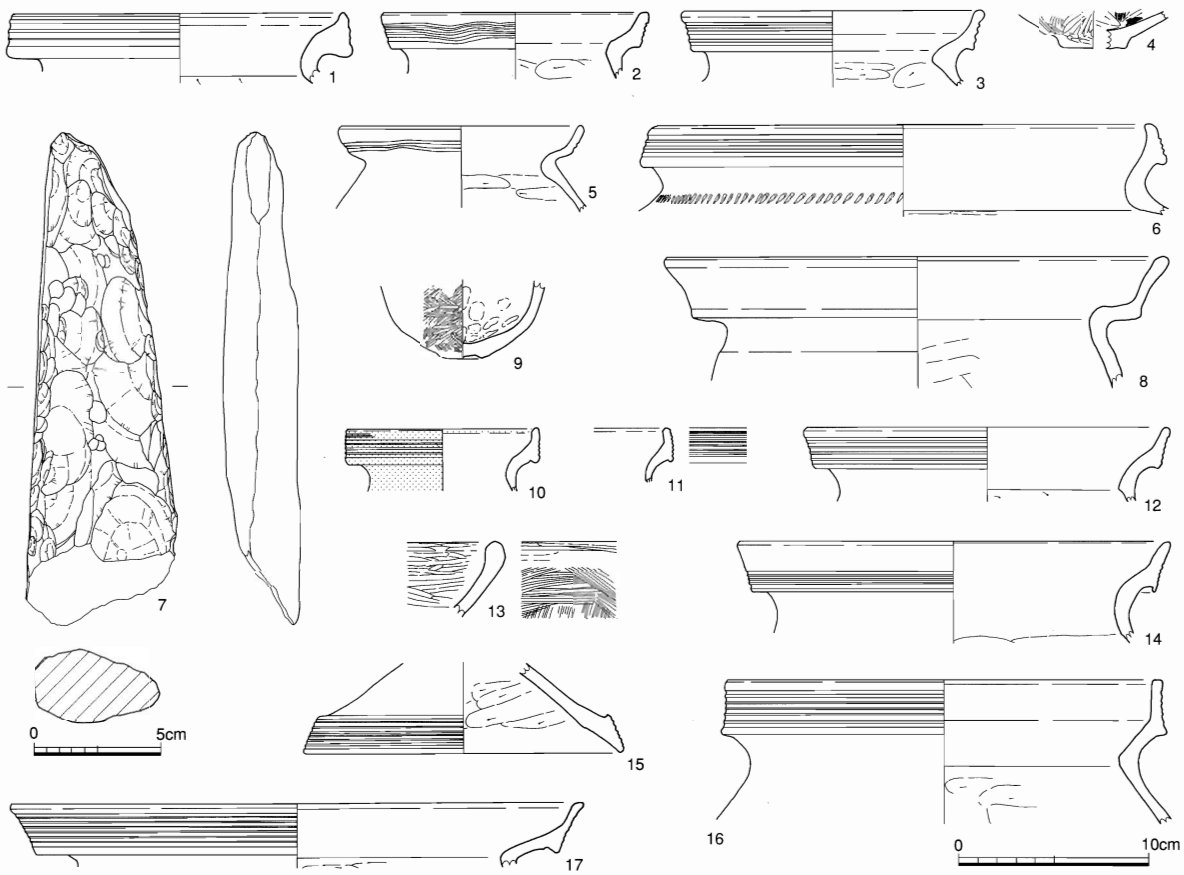
物外周を廻る溝の一部を検出したにすぎない。２棟は切り合い関係にあり06が古く、05が新しい。05の床面が06の住居内埋土を基盤に造られており、後述する遺物の時期幅からも２棟は継続した建て替えでなかったと考えられる。平面形は不明であるが床と外周溝の形状から円～隅丸方形が想定される。ＳＩ05の外周溝は幅約1.1m、深さ40cm以上で北側で２段になっている。

遺物のうち２はＳＩ06の埋土中から出土した甕で草田１期、６，７はＳＩ05の外周溝から出土した甕で草田４期にほぼ相当する。

ＳＩ04（第10，11図　図版14、32）

Ｃ－３付近に位置する、外周の溝を持つ平面円形の建物である。建物南側で弥生土器だけを含む攪乱が広範囲に及んでいてＳＤ14もプランが確認できなかった。床面は一度拡張されていて、元の床面と壁帯溝を茶褐色の粘質土で埋めていた。拡張後の規模は直径6.2m余りである。柱穴配置は８角形で、中央ピットは直径約80cm、深さ35cm、壁帯溝の幅は15cmである。建物外周に穿たれた溝（ＳＤ07）の底面は幅30cm程度で、丘陵斜面上方側から徐々に高さを減じ両端は建物前面の河道にまで伸びていたものと思われる。

遺物のうち１～８は外周の溝、９は拡張前の壁帯溝、10～16は建物南の攪乱土からそれぞれ出土した。複合口縁に貝殻腹縁で施文した平行沈線文が特徴の甕で草田２期にほぼ相当しよう。



第11図　田中谷遺跡Ｉ区ＳＩ04出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）

５．掘立柱建物

後世の削平によりかなりの遺構が失われているため、十分に検出・確認できたとは言い難いが、ここでは柱穴列が矩形に展開するものと等間隔に並ぶもののうち建物の蓋然性が高いものを取り上げた。

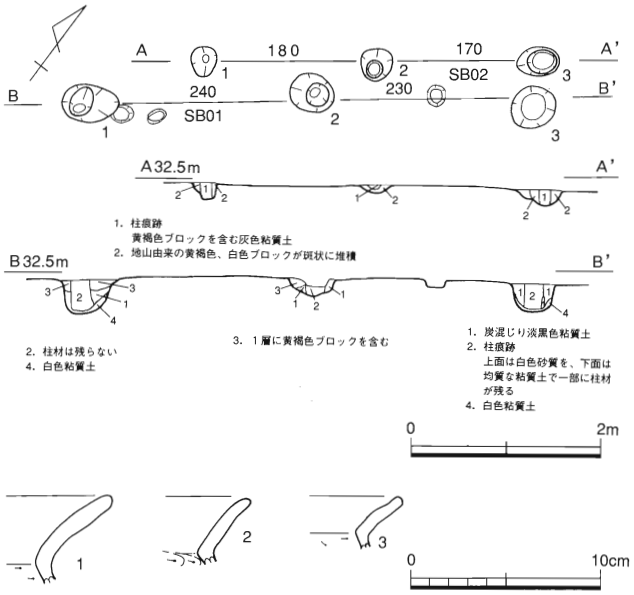
ＳＢ01（第12図　図版15上）

Ｃ－４の調査区際で検出した柱穴列で、２間分しか確認できなかった。柱間は５ｍ、4.6mと広く、柱穴列方向はＮ－53°－Ｅを示す。粘土に置換した直径約44cmの柱痕跡が明瞭に認められ、Ｐ３では一部でブナ科材の柱根が遺存していた。柱筋の展開方向は不明であるが、調査区外の丘陵側に伸びていた可能性もある。

出土したのは古墳時代中期以降の土師器甕の細片で、Ｐ３から出土した。

ＳＢ02（第12図　図版15上）

ＳＢ01の西に平行して隣接する２間分の柱穴列である。柱間は3.56、3.60ｍで、柱穴列方向はＮ－54°－Ｅである。北端の柱穴はＳＢ01のＰ３に揃うような位置関係をとっている。ＳＢ01に比べ柱穴規模は小型で、粘土に置換した柱痕跡も直径約24cmと小さい。ＳＢ01同様柱の展開方向は不明であるが、北側の柱位置を揃えることから２棟の建物が無関係に存在したとは考えにくい。柱穴から遺物は出土しなかった。



第12図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＢ01,02・出土遺物実測図
（遺構：Ｓ＝1／80、遺物：Ｓ＝1／4）

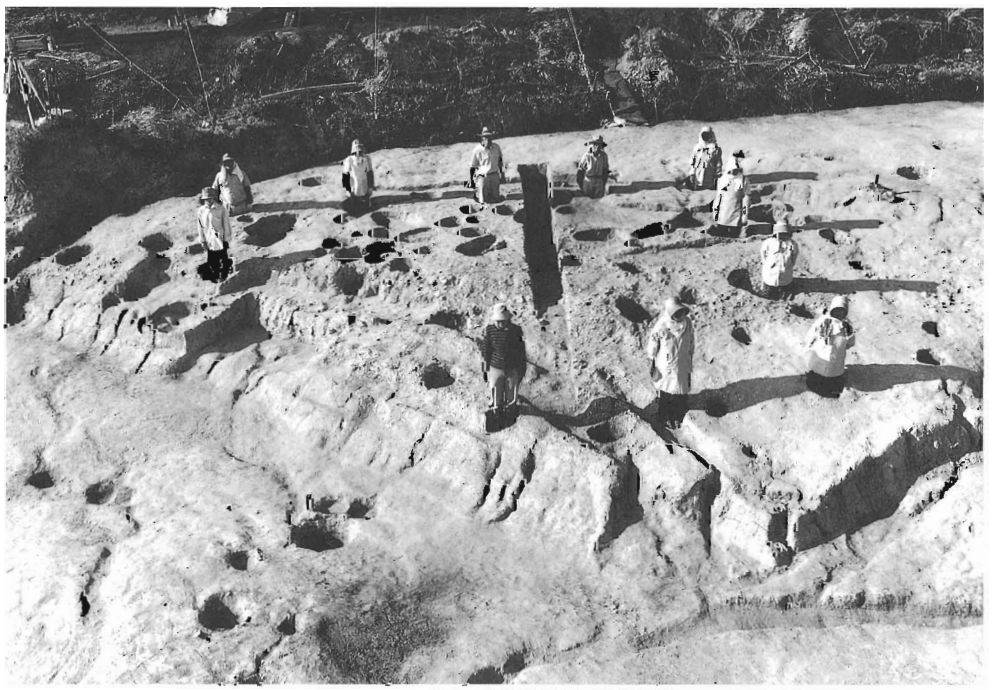
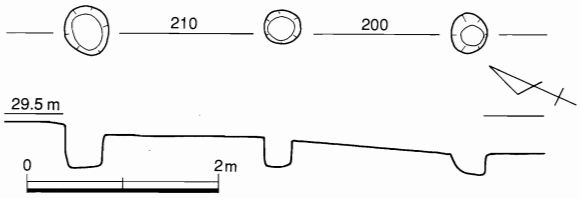


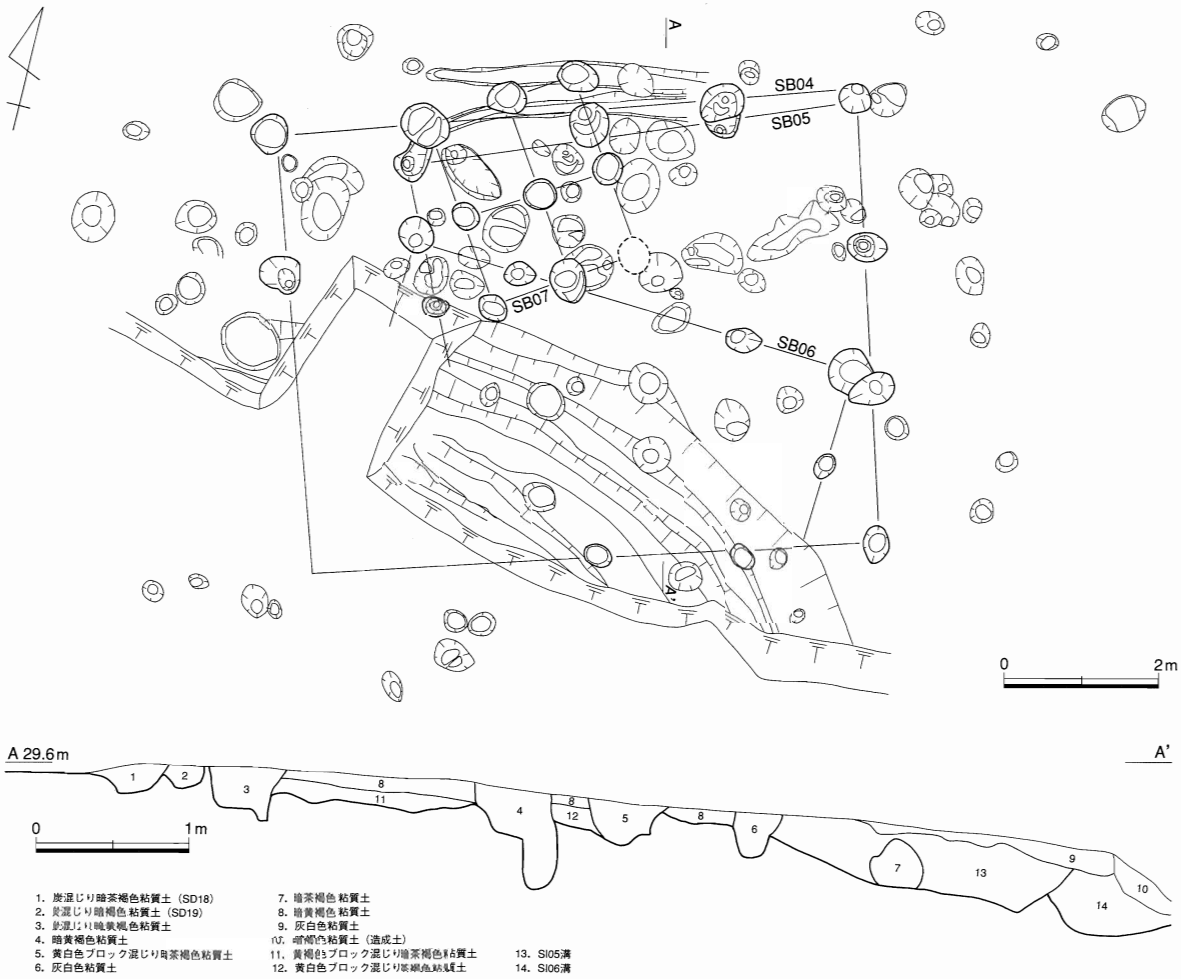
写真２　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＢ04

ＳＢ03（第13図）

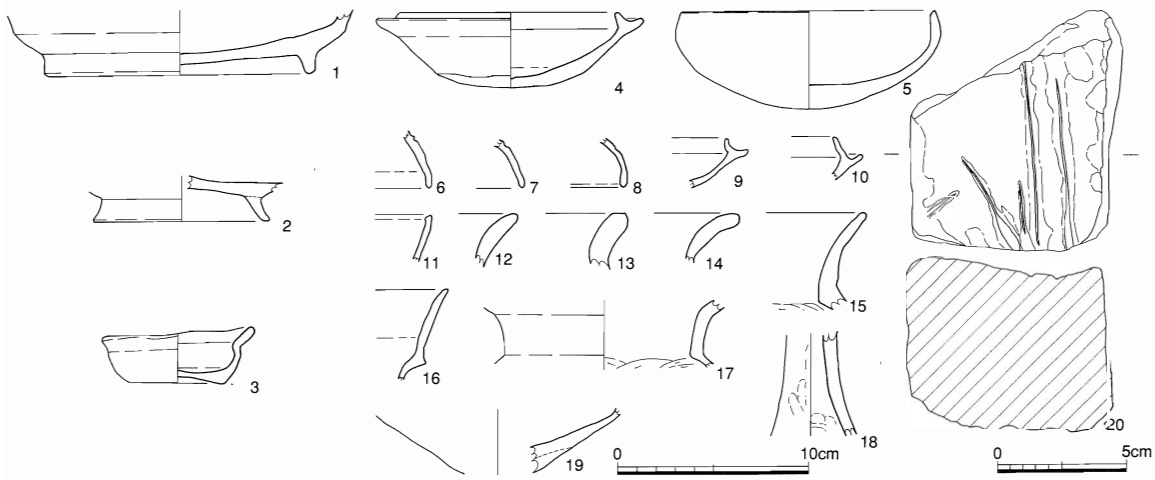
Ｂ－４の河道に接する位置にある２間分の柱穴列である。柱間間隔は4.0ｍで、柱穴列方向はＮ－26°－Ｗである。この付近は河道に近いためか浸食が著しく他の柱穴列を把握できなかった。遺物は出土していない。



第13図　田中谷遺跡Ｉ区ＳＢ03実測図（Ｓ＝1／80）



第14図　田中谷遺跡Ｉ区ＳＢ04～07付近平面・断面図（平面：Ｓ＝1／100、断面：Ｓ＝1／50）



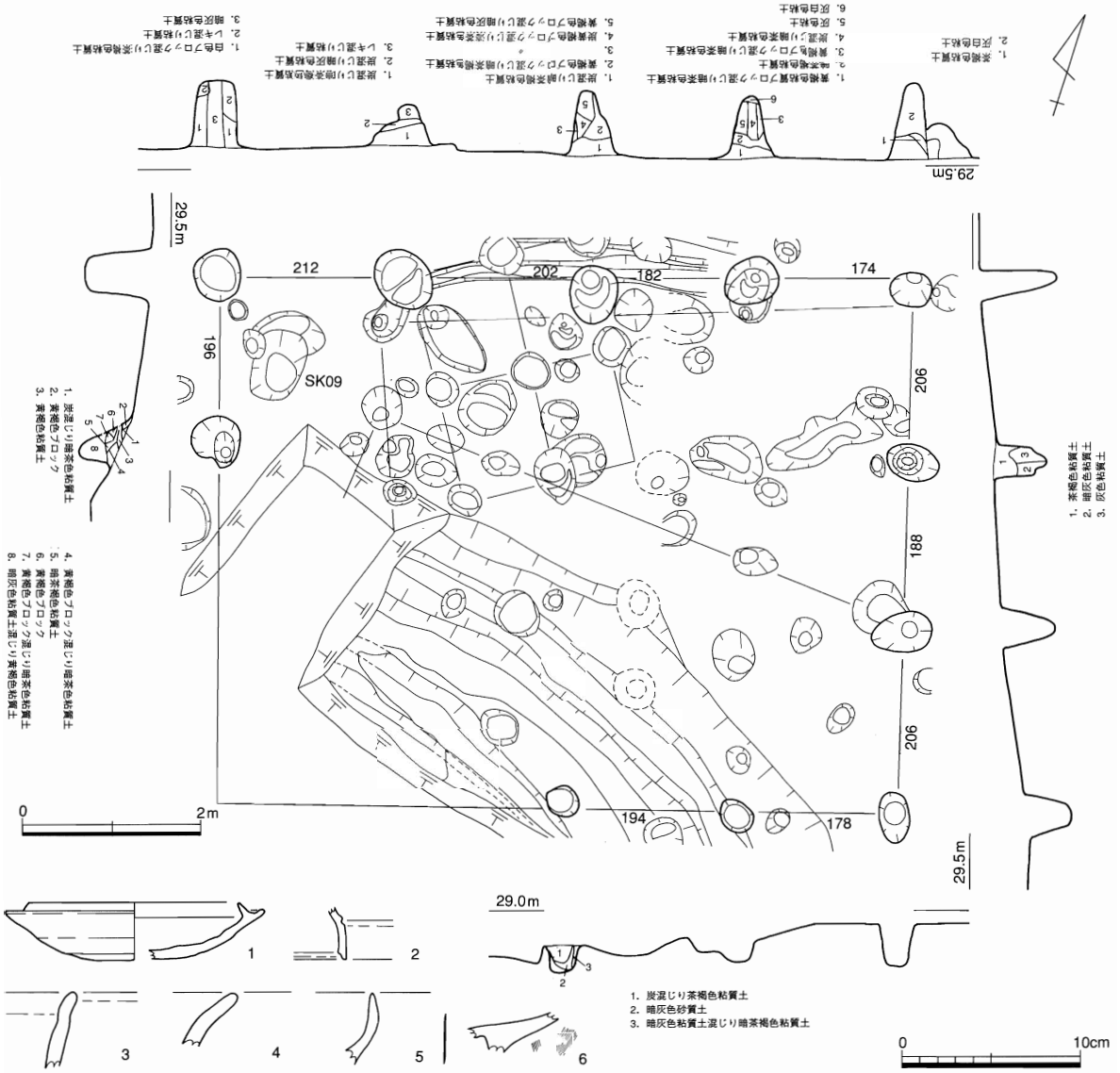
第15図　田中谷遺跡Ｉ区ＳＢ04～07周辺出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）

ＳＢ04（第16図　図版15中、33）

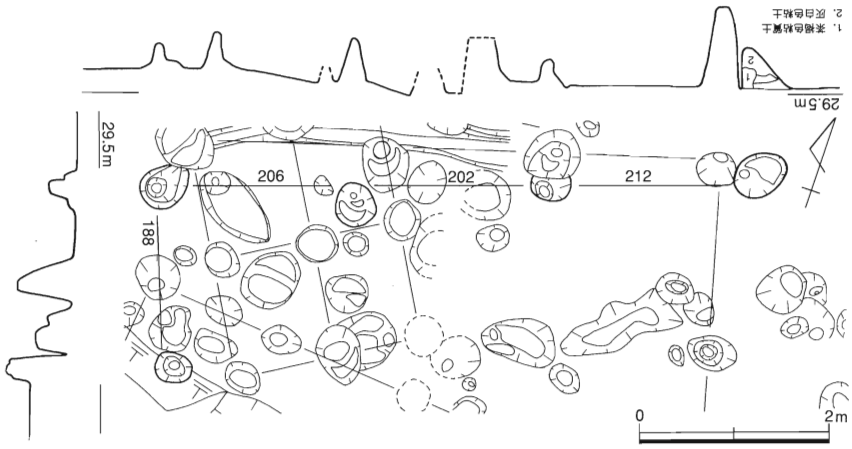
Ｄ－６の丘陵裾には、ＳＩ05，06と一部重複するように４棟の建物が検出できた（第14図）。Ｉ区の中では比較的に遺構の集中する地点である。確認できた建物以外にも柱穴が数多く検出できたことから他に建物が存在すると思われるが、十分に把握できなかった。Ｄ－６付近の包含層からは時期的に幅のある遺物が出土しており、弥生土器以外は掘立柱建物と関係する資料と思われる（第15図）。

ＳＢ04は南東隅を欠くが３間×４間の側柱建物である。梁行長６ｍ、桁行長7.7ｍで、床面積は46.2㎡である。棟方向はＮ－74°－Ｅである。柱穴は平面が楕円～不正円形を呈し、直径は0.44～0.66ｍである。もっとも深い柱穴で検出面から0.77ｍである。柱痕跡を残すものもあり、直径は20㎝程度である。柱間間隔は平均で桁行1.92ｍ、梁間2.0ｍで、梁間間隔がわずかに長い。

柱穴から出土した遺物は古墳時代中期から後期の須恵器と土師器の小片である。この建物内の北西隅のＳＫ09の上面から奈良～平安時代の須恵器の埦、皿が重なった状態で出土している。建物の平面形式が３間×４間で比較的に大型であることから、奈良時代以降の時期があてられるのでＳＫ09は建物内部に設けられた施設の一部と考えられる。



第16図　田中谷遺跡Ｉ区ＳＢ04・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／80、遺物：Ｓ＝1／4）



第17図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＢ05実測図（Ｓ＝1／80）

ＳＢ05（第17図　図版15中）

現状では３間×１間分のＬ字に曲がる柱穴列が確認できただけである。柱穴の切り合いからＳＢ04より古い。３間の柱穴列の長さは6.2mで柱間間隔は平均で2.07mである。方向はＮ－71°－Ｅで、ＳＢ04とほぼ同じである。北西側に浅い溝が２条あり建物に伴う溝の可能性がある。

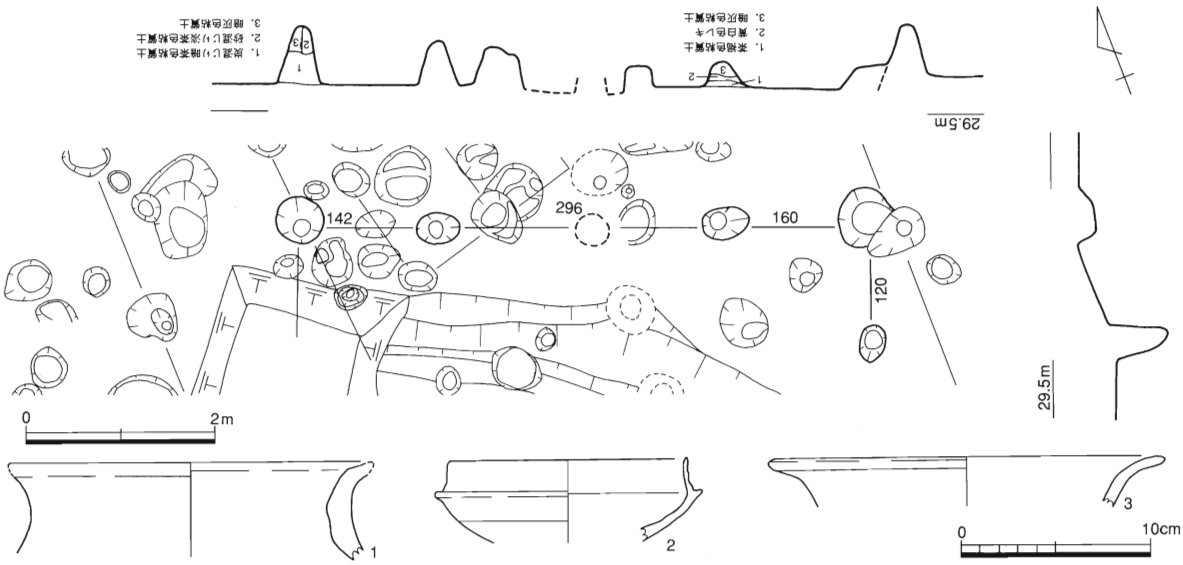
柱穴からは土器の細片が出土したが時期を判別できるものはなかった。

ＳＢ06（第18図　図版15中、33）

南側を削り取られていて４間×１間の柱穴列しか確認できなかった。柱穴の切り合いからＳＢ04より古い。４間の柱穴列の長さは5.98mで柱間間隔は平均で1.2mである。方向はＮ－95°－Ｅで、ほぼ東西方向を示しており、他の建物軸とは異なる。

柱穴からは古墳時代後期以降の須恵器、土師器片が出土している。

写真３　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＢ04～07

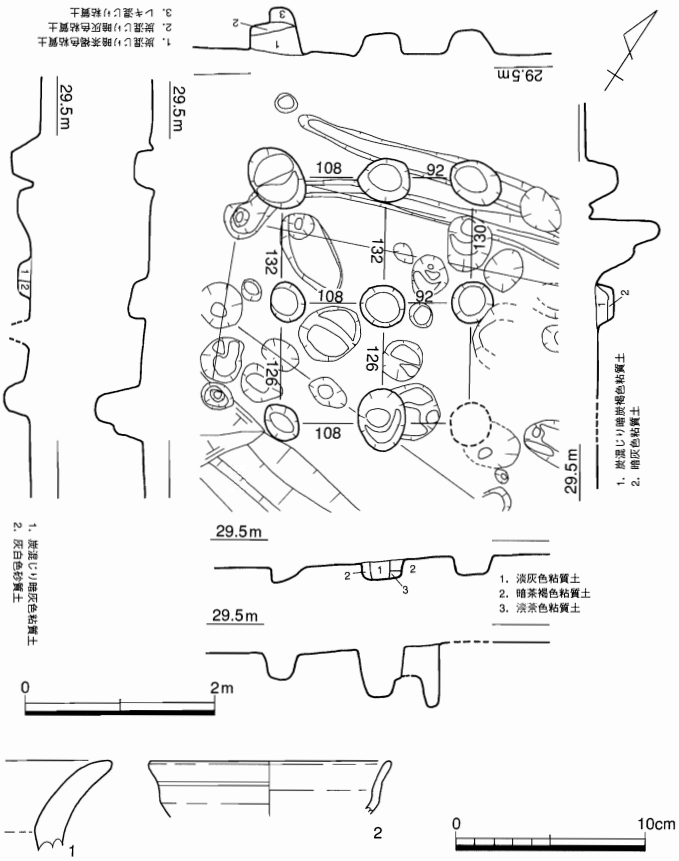


第18図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＢ06・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／80、遺物：Ｓ＝1／4）

ＳＢ07（第19図　図版15中、33）

南東の１穴を確認できなかったが、２間×２間の総柱建物である。桁行長2.58ｍ、梁行長2.0ｍで、床面積は5.16㎡である。棟方向はＮ－31°－Ｅである。柱間間隔の平均値は桁行が1.29m、梁間が1.0ｍであるが、東の梁間間隔がやや狭い。柱穴の平面形は円形～不正楕円形で直径0.3～0.6m、深さは最大で0.5ｍである。柱痕跡は確認できた柱穴で直径約0.2ｍである。他の建物との前後関係を明確にできなかった。

遺物は古墳時代後期以降の須恵器、土師器片がある。

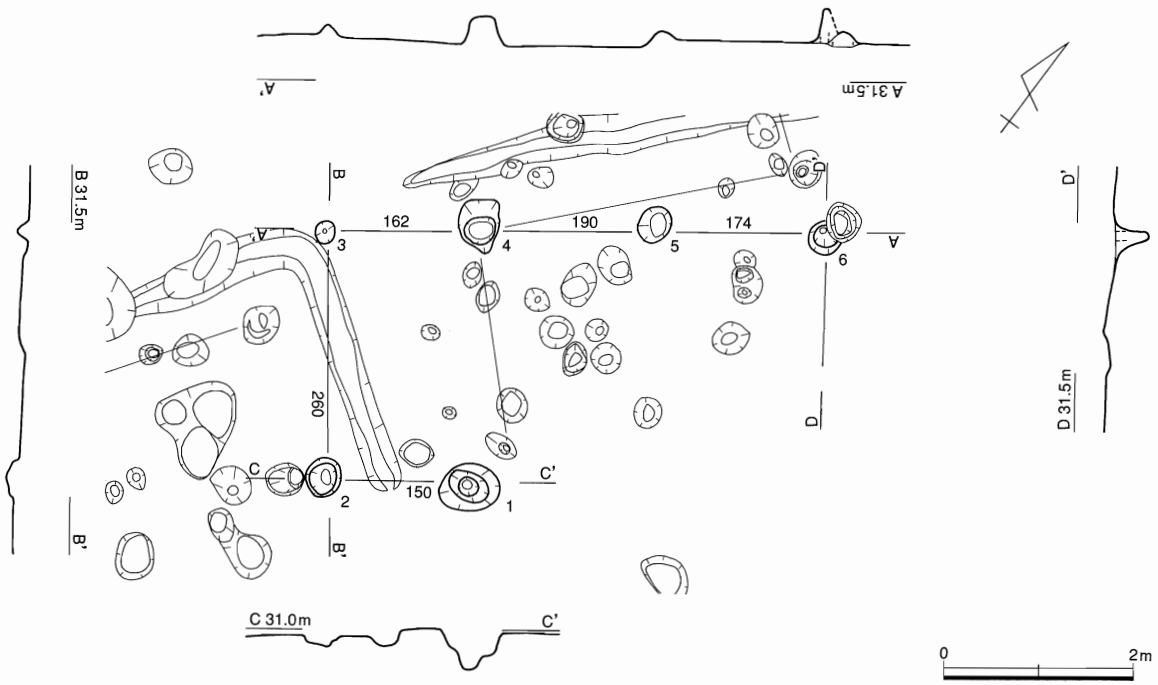


第19図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＢ07・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／80、遺物：Ｓ＝1／4）

ＳＢ08（第20図　図版15下）

Ｃ－１のＳＩ01、02と重複する位置にある。東側の柱穴列が一部検出できなかったが、３間×１間の側柱建物である。桁行長5.26ｍ、梁行長2.6ｍで、床面積は13.7㎡である。棟方向はＮ－53°－Ｅである。柱間間隔の平均値は桁行1.75ｍである。Ｐ４はＳＩ01の柱穴と重なるが、切り合いの前後関係は把握できなかった。

柱穴からの出土遺物はなく、時期は不明であるが、前面の旧河道に６世紀後半の土器溜まりがあることからこの時期の建物とも考えられる。



第20図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＢ08実測図（遺構：Ｓ＝1／80）

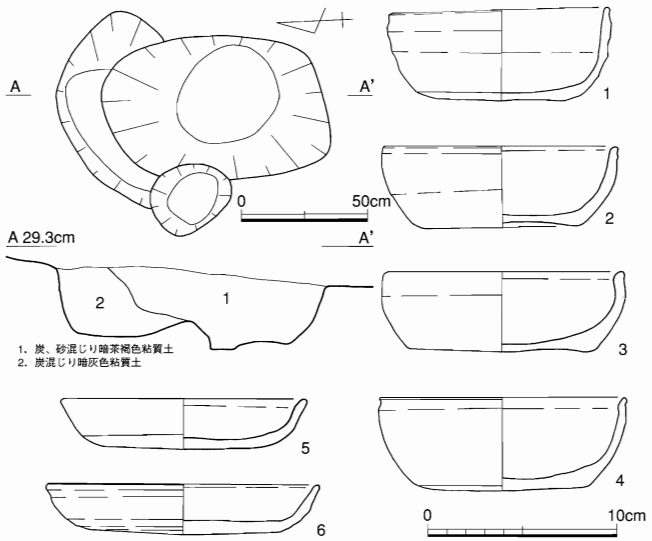
６．土　壙

ここでは、比較的大型の「穴」のうち、形状が特徴的なものや遺物がまとまって出土したものを土壙として取り上げた。また調査時にはピットとして扱い報告時に土壙としたものもあり、必ずしも調査時の記号番号を踏襲していないため、欠番がある。

ＳＫ09（第21図　図版34）

既述した掘立柱建物ＳＢ04の一角に位置する、南北に長い隅丸楕円形の土壙である（調査時にはＰ401）。長径89㎝、短径57㎝、深さ30㎝で、同規模の土壙を切り込んで造られている。

土壙上面から須恵器碗４（１～４）、同皿２（５，６）が出土した。口縁を上に重ねた状態で２群に分かれて置かれていることを確認した。ただし、残念ながら周辺工事による不慮の事故によって原位置を損ない、出土状況を記録することができなかった。碗、皿ともに底部は回転糸切りで、高径比に違いを見せている。おおよそ奈良時代後半があてられる。

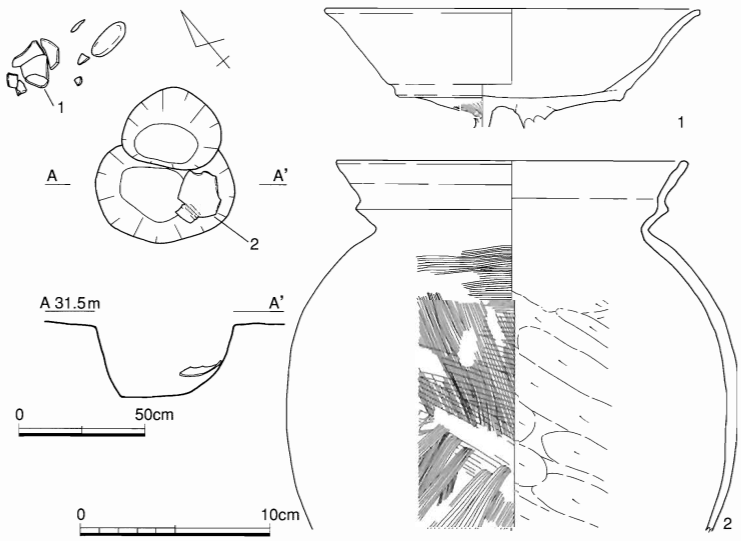


第21図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＫ09・出土遺物実測図
（遺構：Ｓ＝1／30、遺物：Ｓ＝1／4）

ＳＫ10（第22図　図版16上、34）

２ラインの調査区西端に近い位置にある。削平が著しく、周りに遺構が少ない場所の一つである。小型の土壙が切り合うが、遺物が出土したのは土壙底の深い方である。規模は長径56㎝、短径38㎝、深さ28㎝である。

遺物は壙底からやや浮いた状態で弥生土器の甕片（２）が出土した。草田５～６期に相当する。



第22図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＫ10・出土遺物実測図
（遺構：Ｓ＝1／30、遺物：Ｓ＝1／4）

土壙の北側で高坏が１個体まとまって出土した（１）。坏部は明瞭な屈曲を示し、接合法βの充填粘土が肥厚部分を底部から撫でつけたようにへこんでいる。松山Ⅱ期に相当する。土壙とは直接関係ないが、削平されたこの一帯にも弥生～古墳時代の遺構が存在したことを示す資料である。

ＳＫ05（第23、25図　図版16下、34）

８ライン上に後述するＳＫ06と長軸を平行させて並ぶ。斜めに横切るＳＤ13は水田耕作に関わる新しい溝である。土壙は北に細く突出する不整形な平面形を呈し、長軸4.74m、短軸1.2mで深さは0.23mである。土壙底の西側で炭が薄く堆積しているほか埋土にも炭が顕著に認められた。平面的には隣のＳＫ06とかなり近接しており本来は切り合っていた可能性もあるが、遺存状態が悪く確

かめることができなかった。

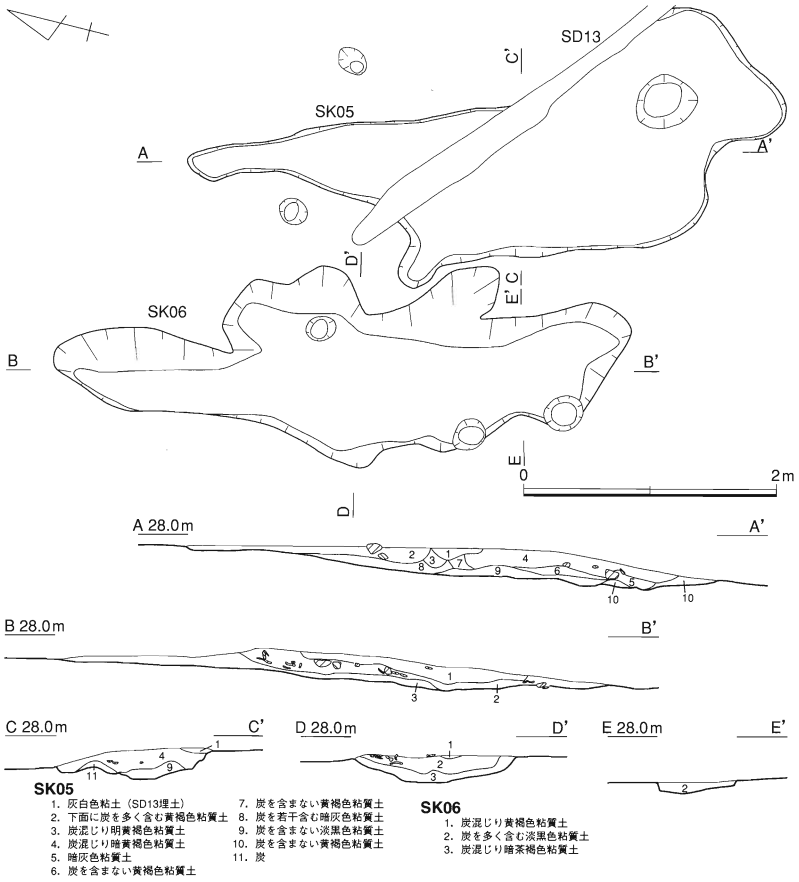
遺物は、ＳＫ06とは対照的に少量が散漫に出土している。(21～25)。21はやや器高の高い印象を受ける鼓形器台の受け部である。22は口縁端部を薄く引き出した甕である。両者とも草田５期頃にあたる。25は竹管文とその下に３条の沈線文を施した装飾壺の細片であろう。

ＳＫ06（第23～25図　図版16下、17、34、35）

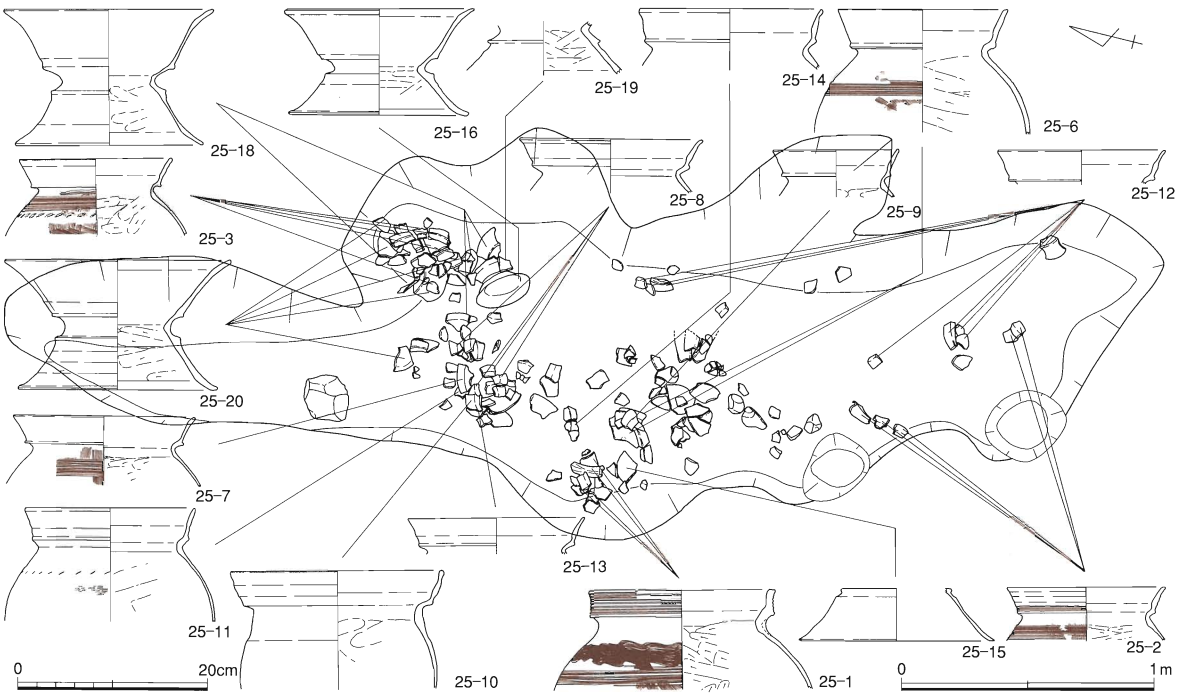
ＳＫ05の西隣に位置し、北に細い張り出しを持つ不整形な平面形を呈する。長軸は4.56m、短軸1.27m、深さ0.2mである。埋土は炭混じりの粘質土が３層あり、遺物はすべて中間の第２層から出土した。

遺物は中央付近に集中しており、南側は散漫で、北の張り出し部では全く出土しなかった。器種は不明の脚部（５）があるほかは甕（１～４，６～14）と鼓形器台（15～20）に限られ、量的には甕が圧倒的に多い。

甕では１と２の一部に複合口縁外面に貝殻腹縁の平行沈線文が施されていて、古い様

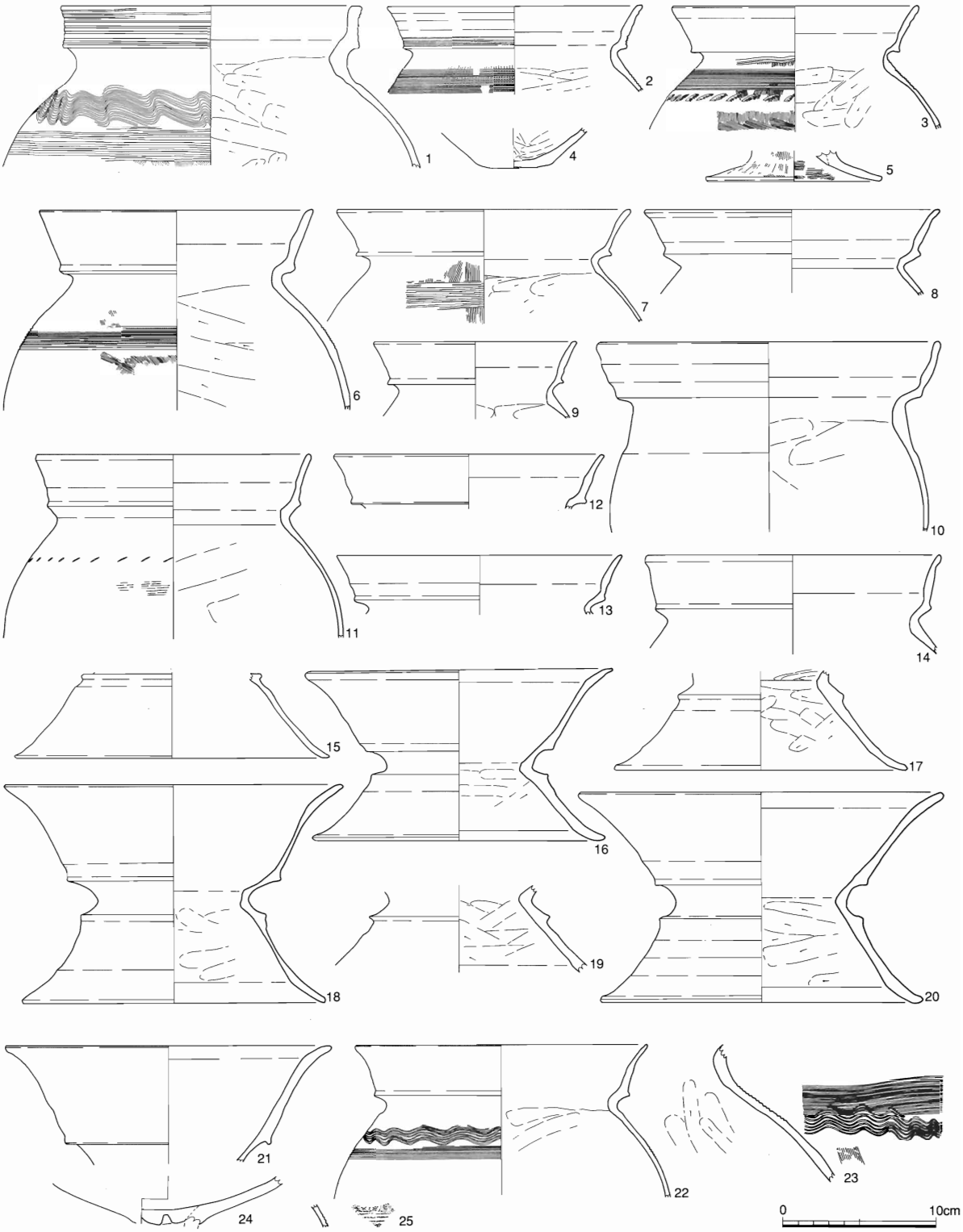


第23図　田中谷遺跡Ｉ区ＳＫ05,06実測図（Ｓ＝1／60）



第24図　田中谷遺跡Ｉ区ＳＫ06遺物出土状況図（遺構：Ｓ＝1／30、遺物：Ｓ＝1／8）

相を示すが、他はすべて平行沈線文が消失した段階の資料である。口縁端部の形態をみると８，14が端部に若干アクセントを持たせるほかは単純に納めている。10は他の資料と異なり肩が張らず口縁が内湾気味に立ち上がっており、特徴的な形態をもつ甕である。鼓形器台は７～８個体出土しており、全形が分かるのは図示した３個体である（16，18，20）。器高は11.3～13.7㎝、口径は20～23.4㎝で筒部は短かく太い。18がやや先行する特徴を持っている。１～３が草田３，４期のほか草田５期を中心とした時期に相当するものと思われる。



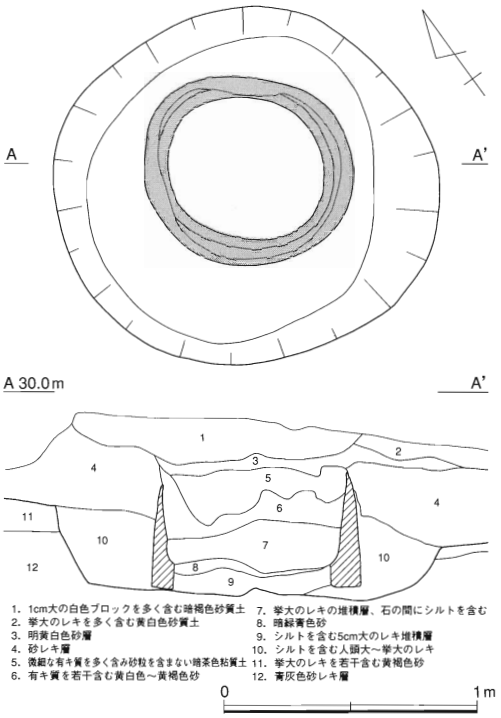
第25図　田中谷遺跡Ｉ区ＳＫ05,06出土遺物実測図（Ｓ＝1／4　ＳＫ06：1～20、ＳＫ05：21～25）

７．井　戸

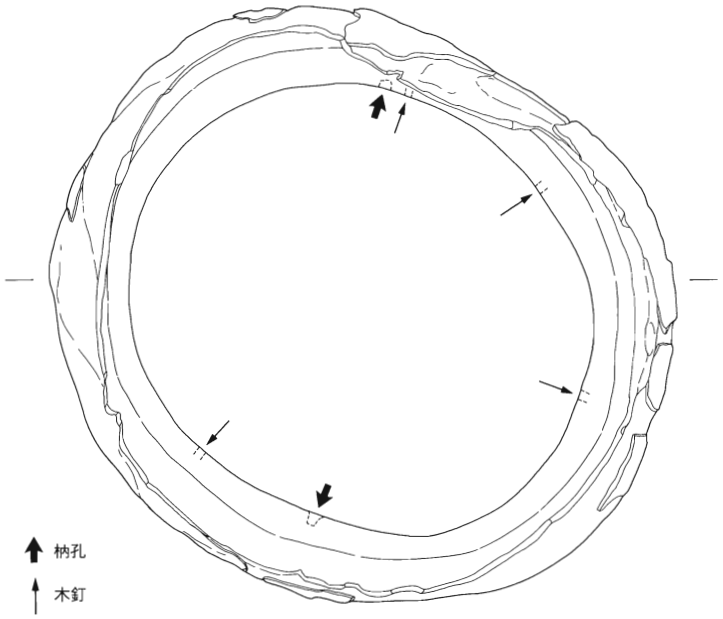
ＳＥ01（第26～28図　図版18、19、35、36）

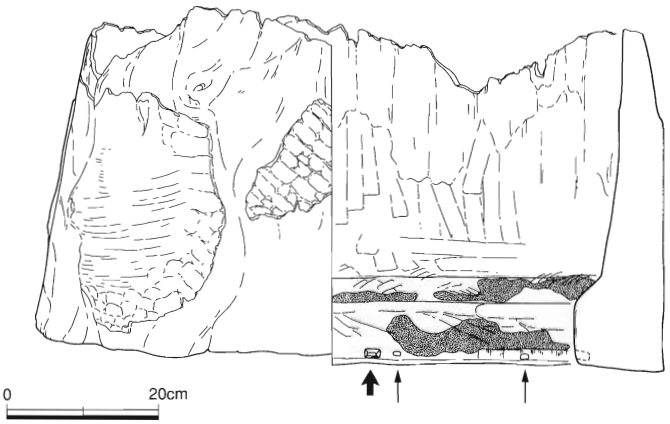
後述する旧河道１の上流側Ａ－１で検出した。拳大の礫を多く含む河川堆積層を基盤に掘り込まれた直径約1.5mの円形の掘形に直径0.75～0.85m、残存高0.46mの大型の刳物桶を転用した井戸枠が設置されていた。内部の埋土は砂礫が大半を占め（６～９層）、その上層には礫を含まない粘質土（５層）と砂層が堆積している。このことから河道堆積物で充満された井戸が使用不能となり、その後若干くぼんだ状態を経て完全に河道の中に埋没したと考えられる。埋土中からは他の調査例にあるような井戸廃絶の祭祀を思わせる遺物は出土しなかった。

井戸枠に転用された桶はバラ科サクラ属の大木を刳り抜き作られている。内面にはかすかながら幅２cmの加工痕が認められる。底部内面には下端から12cmの幅で底板を固定するための突帯が廻る。突帯は断面上方が僅かに

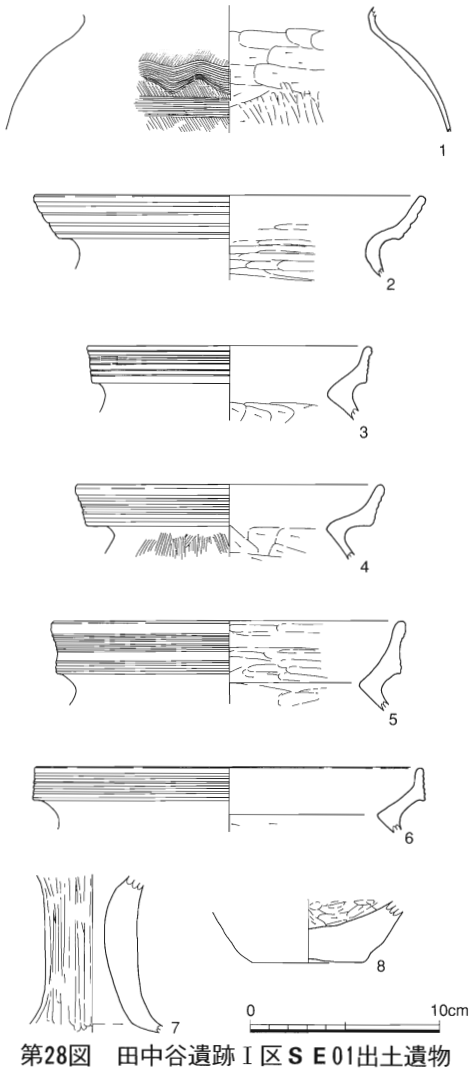


第26図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＥ01実測図（Ｓ＝1／30）





第27図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＥ01井戸枠実測図（Ｓ＝1／10）



第28図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＥ01出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）

内傾するように削り出していて、下から押し当てた底板が止まるようになっている。底板の固定には木釘と枘穴に差し込んだ桟木が使われたと考えられる。突帯下端近くに欠損したままの木釘が４カ所と、ほぼ対向する位置に開けられた縦1.2cm、横2.0cm、奥行1.9cmの枘穴が２個所開けられている。枘穴は貫通していないので桟木を掛けるとすれば竹などしなりのある材が使われたものと思われる。なお、突帯には部分的ながら漆が残っている。底板にあたる部分には付着していないことから、漆を塗って底板周縁の隙間を塞いでいたものと考えられる。

遺物は掘形及び井戸枠内埋土から出土した。すべて小片で、草田２期の甕が多いが、１は掘形埋土から出土した草田４～５期の甕片で、井戸は弥生後期後半以降の時期と考えられる。

８．溝

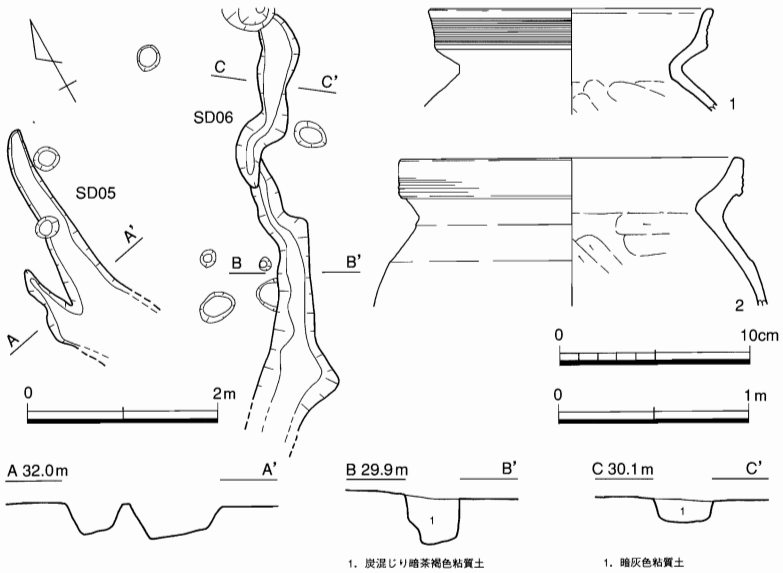
人為、自然の区別が必ずしも明確にできない場合が多く、ここでは段丘上の溝状の遺構を取り上げた。ただし建物に伴う壁帯溝などは取り上げなかった。

ＳＤ05，06（第29図）

ＳＤ05はＣ－４に位置し、ＳＤ06に近接してほぼ南北に伸びる。南側は攪乱によって失われていて全形は不明である。長さ2.1ｍで、南端は他の溝とつながっている。

ＳＤ06は北東から南西に蛇行する溝である。２本の溝が連続していて長さ4.22ｍである。

１はＳＤ05出土の草田２～３期の甕、２はＳＤ06出土の同２期の甕である。



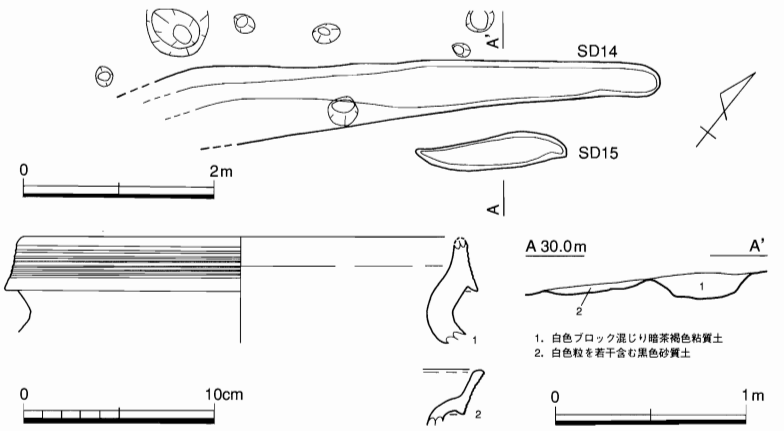
第29図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＤ05,06・出土遺物実測図
（平面：Ｓ＝1／80、断面：Ｓ＝1／40、遺物：Ｓ＝1／4）

ＳＤ14，15（第30図）

Ｂ－３のＳＩ04東に東西に平行して位置するする。ＳＤ14は長さ1.1ｍ、深さ0.13ｍで、南側は攪乱で失われている。

ＳＤ15は長さ1.54ｍ、幅0.34ｍ、深さ0.04ｍで、一応溝とした。

１はＳＤ14出土の草田２期頃の甕、２がＳＤ15出土の３期以降の弥生後期の甕である。

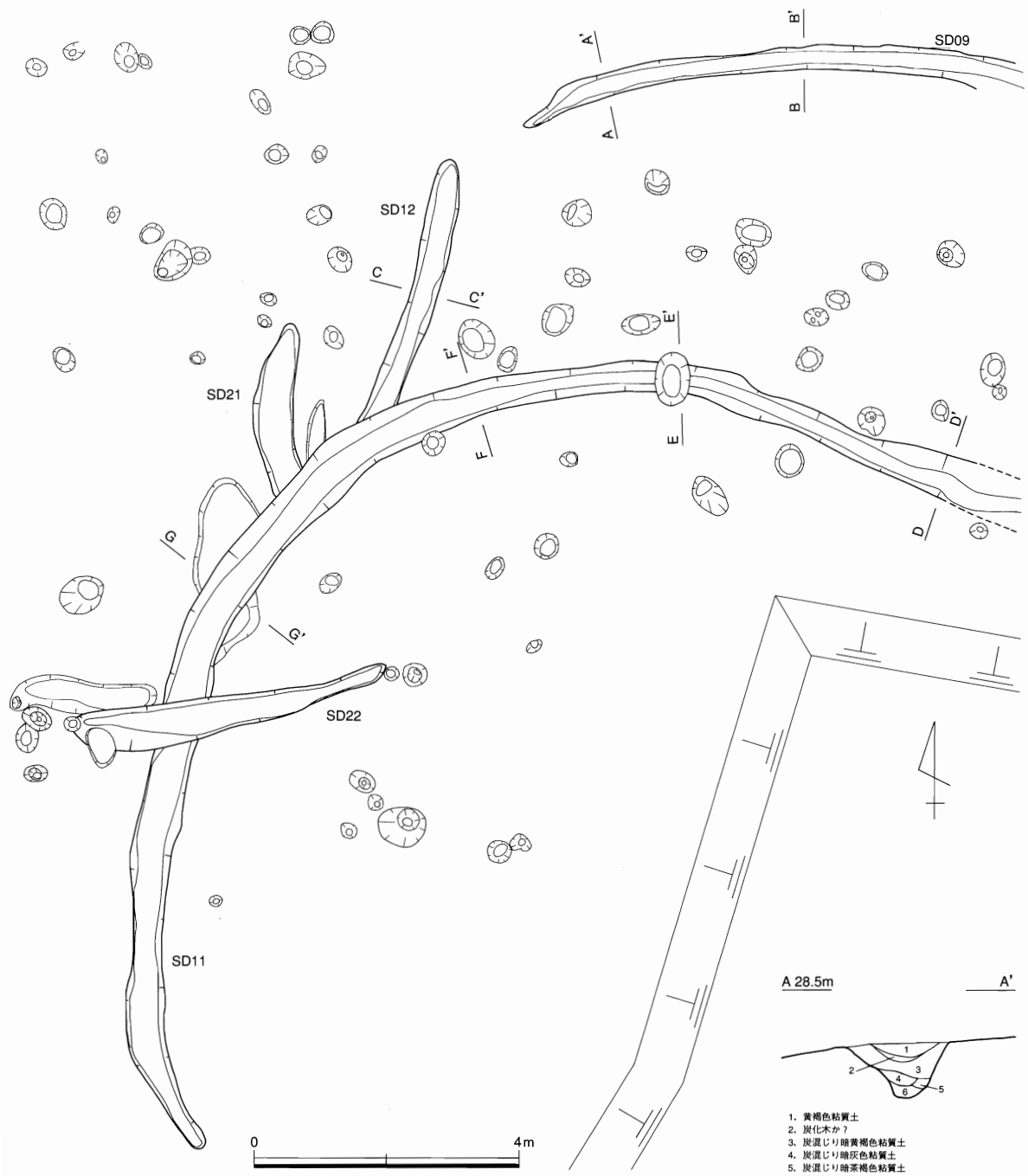


第30図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＤ14,15・出土遺物実測図
（平面：Ｓ＝1／80、断面：Ｓ＝1／40、遺物：Ｓ＝1／4）

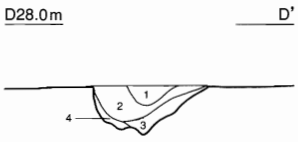
ＳＤ09（第31、33図　図版20、37）

Ｃ－６に位置する東西方向の溝である。長さ7.58ｍで、僅かに弧を描くように伸び、東端は旧河道１に行き当たっている。幅は0.3～0.6ｍで、断面はＵ字、台形を呈する。

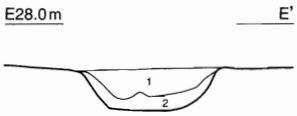
遺物は少なく、３は草田２～３期の甕の口縁である。



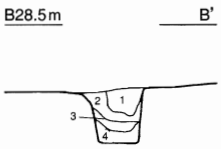
1. 黄褐色粘質土
2. 炭化木か？
3. 炭混じり暗黄褐色粘質土
4. 炭混じり暗灰色粘質土
5. 炭混じり暗茶褐色粘質土
6. 微砂粒炭を含む灰色砂質土



1. 白色砂レキ混じり暗黄褐色粘質土
2. 炭化木を含む暗灰色粘質土
3. 白色・黄褐色ブロック混じり暗灰白色粘質土
4. 白色・黄褐色ブロック混じり暗灰白色砂質土

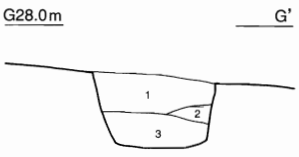


1. 白色ブロック混じり暗灰色粘質土
2. 炭混じり暗灰色粘質土

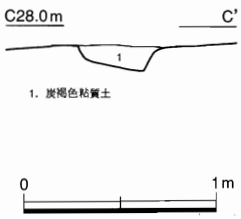


1. 炭黄褐色ブロックを含む暗灰色粘質土
2. 暗黄褐色粘質土
3. 暗灰色粘質土
4. 暗灰色砂質土

1. 暗黄褐色粘質土
2. 黄褐色ブロック混じり暗灰色粘質土
3. 微砂粒を含む白色ブロック混じり灰白色粘質土

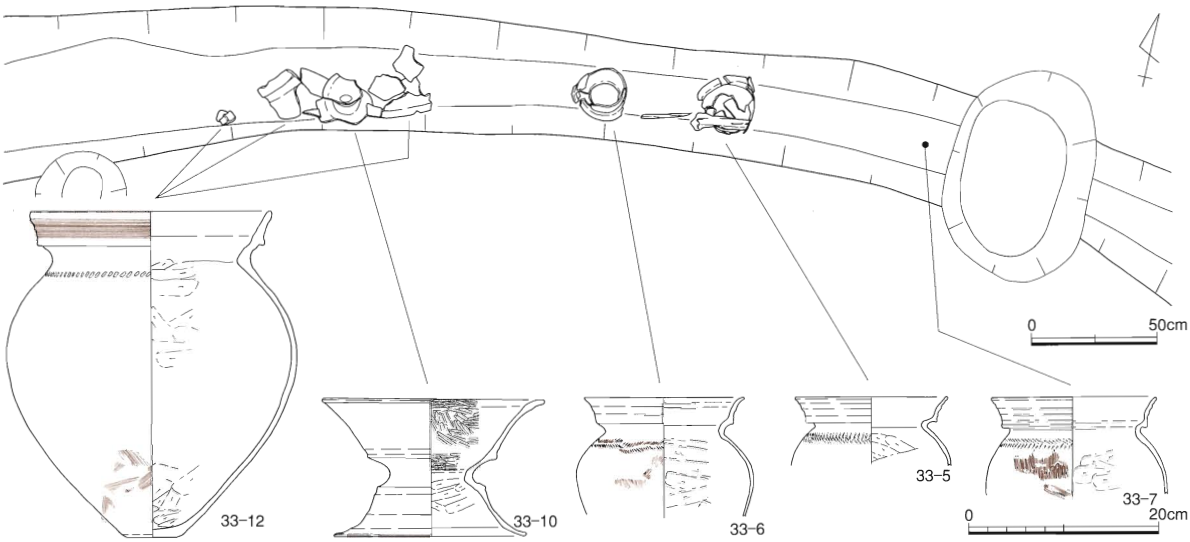


1. 暗黄褐色粘質土
2. 淡灰白色粘質土
3. 炭を含む灰白色粘質土

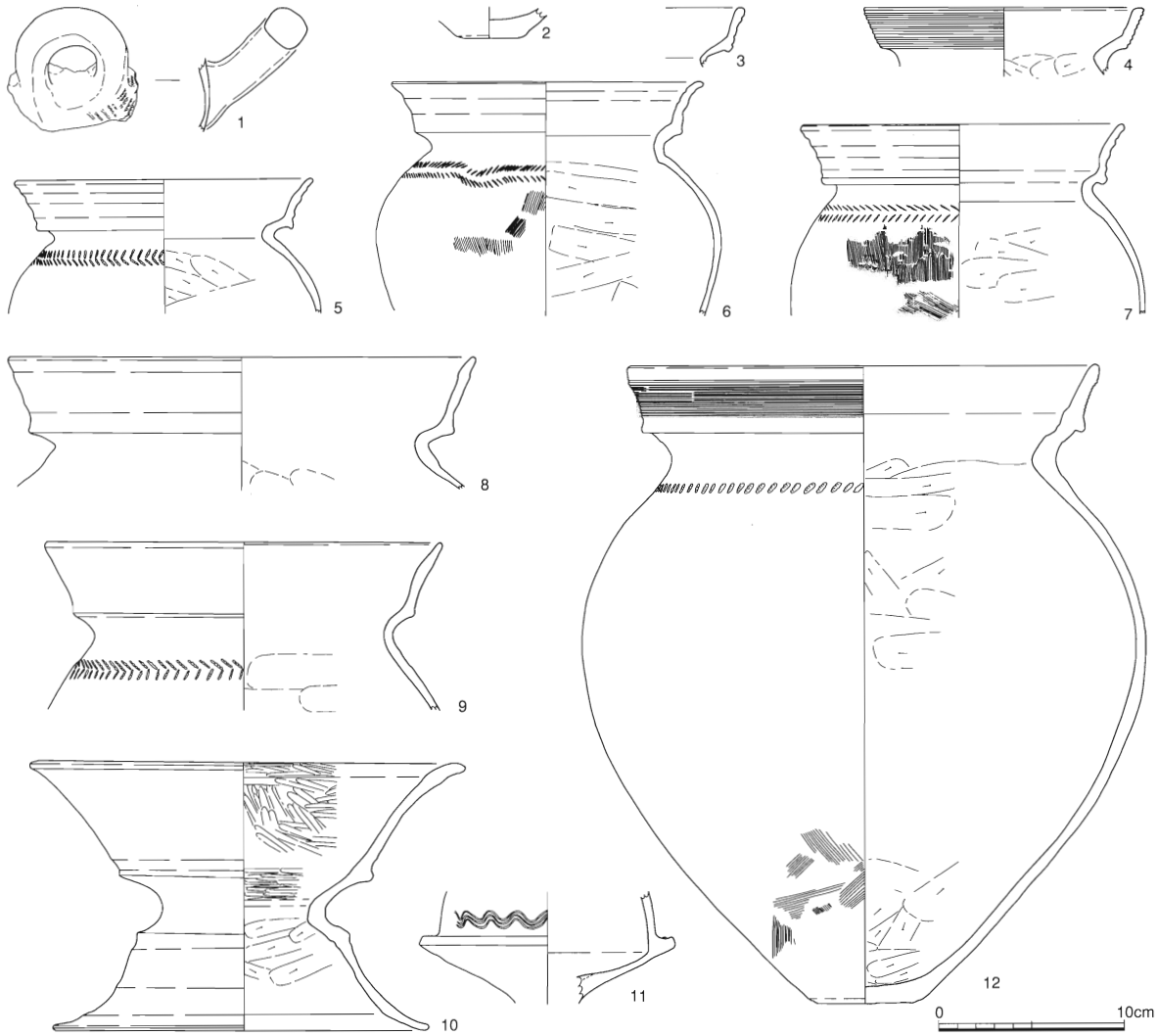


1. 炭褐色粘質土

第31図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＤ09,11,12,21,22実測図（平面：Ｓ＝1／100、断面：Ｓ＝1／40）



第32図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＤ11遺物出土状況図（遺構：Ｓ＝1／30、遺物：Ｓ＝1／8）



第33図　田中谷遺跡Ⅰ区ＳＤ09,11,12,21・出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）（ＳＤ09：3、ＳＤ11：5～12、ＳＤ12：1,2、ＳＤ21：4）

ＳＤ11（第31～33図　図版20、37）

Ｂ－６からＣ－８にかけて半径約７ｍの弧状に伸びる溝で両端は途切れている。残存長は約21ｍ、幅は0.5～0.6ｍで断面はＵ字、台形を呈する。

遺物はセクションポイントのＥ－Ｅ’，Ｆ－Ｆ’間と南端部で比較的にまとまって出土した（図32）。甕５～７は数10㎝の間隔を開けて出土したが、12の甕と10の鼓形器台は重なるような状態で見つかった。５～７は強く外反する口縁と２段に廻らせた貝殻腹縁による連続刺突文を特徴とする似通った甕である。９も連続刺突文を肩に持つ甕であるが口縁はやや直線的である。おおよそ草田５期にあたる。12は口縁に平行沈線を施した平底の甕で、草田３期に相当し、他の土器に比べやや古い。10は草田４期の鼓形器台である。11は台付直口坩のような土器であたかも須恵器坏身の受け部のような張り出しを持つ。口縁端部を欠くが外面にかすに波状文が残る。胎土の色調は白く、搬入品の可能性もある。

ＳＤ12（第31、33図　図版20上、37）

ＳＤ11に南側を切られる長さ4.15ｍ、幅0.4ｍ、深さ0.12ｍの溝である。１は注口土器の把手で、体部側に刺突文がのこる。２は甕の底部。

ＳＤ21（第31、33図　図版20上、37）

ＳＤ12に近接し同様にＳＤ11に切られている。長さ2.6ｍ、幅0.5ｍである。出土した土器（４）はやや内傾する口縁に平行沈線文を施した甕で草田２～３期である。

ＳＤ22（第31図　図版20上）

ＳＤ11を切る溝で、長さ4.8ｍ、幅0.7ｍである。遺物は出土しなかったので時期は不明である。

写真４　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１調査風景

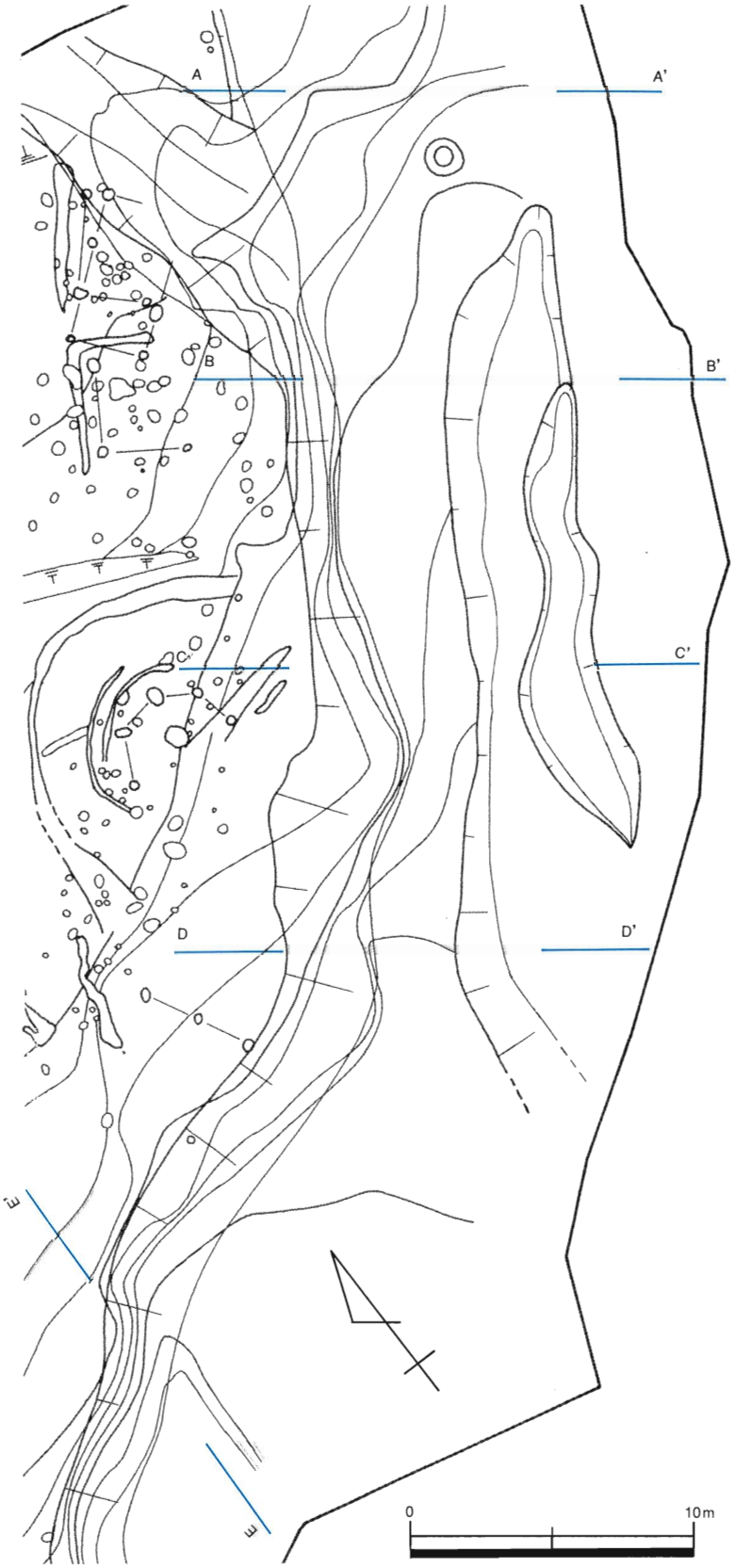
９．旧河道

旧河道１（第34～58図　図版21～27、38～54）

調査区東の谷部を北東から南西に流下する旧河道である。東側の丘陵裾を流れる水路との間に約10mの未調査区域があり現水路に至るすべての河道を把握していない。調査で確認した河道は幾度かその流れを変えているが、大きく見れば谷部を流れていた本流には違いなく、後述する支流と区別して旧河道１とした。

この河道の中で時期的に変遷する川筋を個々の流路とする。ただし河川堆積物は下層に移るほど礫が大きくしかも多量になるため層相の違いを識別することが困難で、土層として認識すること自体容易ではなかった。まして複雑に切り合う流路を断面で層相を対照する事は不可能に近く、現実には遺物の出土状況から流路を断片的に把握するしかなかった。一方、段丘上方から河道肩部にかけて遺物が斜面堆積していて、必ずしも河川の流下作用だけで土層を解釈できない面もあり、河道調査における技術的な問題を十分に克服することができなかった。

以上のような条件下で確認できた旧河道の内容を整理すると奈良・平安時代以降の流路２、古墳時代の包含層（終末、６世紀末、中期、前期）、古墳時代中期の流路１、弥生時代の流路１が確認できたことになる。以下時代をさかのぼって既述を進める。



第34図　田中谷遺跡Ｉ区旧河道１平面図（S＝1／250）

A—A'（1ライン）

1. 淡灰色粘質土
2. 砂質土混り黄褐色レキ層
3. 砂混じり黒色粘質土
4. 白色ブロックを斑状に含む茶褐色粘質土
5. 茶褐色～黄緑色砂
6. 人頭大のレキ層
7. 明赤褐色砂層
8. 挙大のレキ層
9. 明赤褐色砂レキ層
10. 明黄褐色砂層
11. 炭混じり茶褐色粘質土
12. 炭混じり黒色粘質土
13. 黒色粘質土
14. 明黄白色砂質土
15. レキ混じり暗灰色砂層
16. 明黄褐色層を含む挙大のレキ層

B—B'（2ライン）

SD01・2層
①、ち密な暗茶色質土
②—1、砂レキ混じり暗茶色粘質土
—2、微砂粒を多く含む暗茶色砂質土
—3、有機質を含む黄褐色砂
③—1、黄褐色砂レキ
—2、黄褐色砂レキ30cm大のレキを含む
④—1、黒色有機質土
—2、黄褐色砂
—3、黒色有機質土
⑤、淡黄褐色を含む円レキ堆積

1—1、砂混じり暗茶褐色粘質土
2—1、炭混じり暗黄褐色砂質土
—2、砂混じり暗黄褐色砂
—3、淡黄褐色砂
3—1、挙大のレキ層
—2、黄白色のブロックを含む青灰色砂質土
—3、挙大のレキ層
—4、黄褐色砂を含むレキ層
—5、淡黒色粘質土を含む人頭大のレキ層
4—1、黄褐色砂
—2、5cm大のレキを多く含む黄褐色砂
5、炭混じり黒色粘質土
6、黄褐色砂を含む挙大のレキ層
7、挙大～人頭大のレキ層
8、青灰色～暗黄褐色粗砂
9、白色ブロック混じり黄褐色～青灰色粘質土
10、暗黄褐色粘質土
11、淡黒色粘質土
12、暗灰白色粘質土
13、人頭大レキ層

C—C'（3ライン）

SD01
②—1、砂レキ混じり暗茶色粘質土
—2、微砂粒を多く含む暗茶色砂質土
—4、レキ混じり黒色砂質土
—5、炭混じり暗灰色粘質ブロック
—6、黒色砂質ブロック
—7、暗黄褐色砂
⑤、淡黄褐色砂を含む円レキ堆積

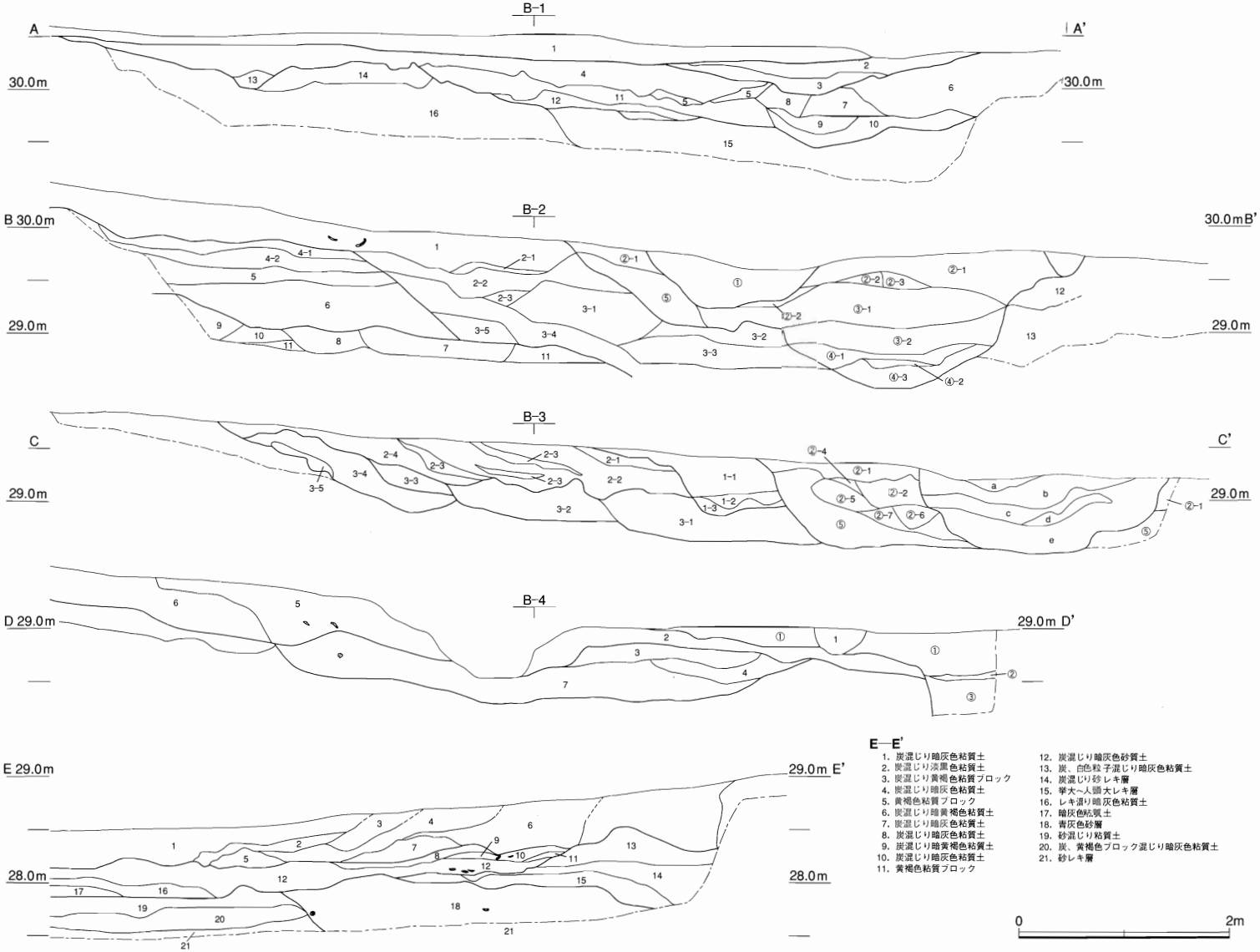
SD02
a、明黄褐色砂質土
b、下面に暗黄褐色の粘質土、上面に明黄褐色土
c、レキ混じり明黄褐色砂
d、暗灰色粘質土
e、レキ混じり明黄褐色砂

1—1、黄褐色粒を若干含む暗灰色粘質土
—2、レキ、炭混じり暗黄褐色砂
—3、黄褐色粒を若干含む明灰色粘質土
2—1、淡黄白色粘質土
—2、炭混じり暗灰色粘質土
—3、暗灰色粘質土混じり淡黄白色粘質土
—4、炭混じり暗灰色粘質土
—5、炭、黄褐色粒混じり暗黄褐色粘質土
3—1、砂混じりレキ層
—2、挙大レキ層
—3、砂混じりレキ層
—4、暗黒色砂層

D—D'（4ライン）

SD01
①、黒色砂質土
②、レキ混じり黄褐色砂
③、黒色粘質土

1、明黄褐色粘質土
2、暗灰白色粘質土
3、砂レキ層
4、黄褐色砂
5、炭混じり茶褐色粘質土
6、炭混じり明茶褐色粘質土
7、レキ層



E—E'

1、炭混じり暗灰色粘質土
2、炭混じり淡黒色粘質土
3、炭混じり黄褐色粘質ブロック
4、炭混じり暗灰色粘質土
5、黄褐色粘質ブロック
6、炭混じり暗黄褐色粘質土
7、炭混じり暗灰色粘質土
8、炭混じり暗灰色粘質土
9、炭混じり暗黄褐色粘質土
10、炭混じり暗灰色粘質土
11、黄褐色粘質ブロック
12、炭混じり暗灰色砂質土
13、炭、白色粒子混じり暗灰色粘質土
14、炭混じり砂レキ層
15、挙大～人頭大レキ層
16、レキ混り暗灰色粘質土
17、暗灰色粘質土
18、青灰色砂層
19、砂混じり粘質土
20、炭、黄褐色ブロック混じり暗灰色粘質土
21、砂レキ層

0　2m

第35図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１土層断面図（S＝1／60）

谷部の調査では水田耕作土下の包含層から遺物が若干出土している。弥生～古墳時代の土器もあるが、ここでは比較的に新しい、特徴的な遺物を掲載した（第37図１～７　図版38）。１は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－２類で12世紀後半～13世紀前半で、Ｉ区の時期的な下限を示す資料である。２は白磁水注の胴部片で肩に段を持ちその下に縦方向の筋状の窪みがある。白磁Ⅰ類で10世紀以前であろう。３は青白磁の合子身で12世紀頃。４は白磁皿、５はⅡ－１類の白磁碗、６はⅣ類の白磁碗でともに12世紀前半である。これらの遺物は後述する流路１，２と時期的に重なるが、該当する遺構は段丘上で確認できていない。７は土製品の一部が剥離したものかもしれない。現状では厚みのある円形で周縁部の色調が異なる。８は須恵器の円面硯脚部である。底径14㎝で上面の陸、海部を欠く。方形の透かし孔が廻るが数は不明である。

流路１，２は堆積物の特徴から平面的に把握できた流路である。流路１は流路２を切って流れ、南端は蛇行しながら調査区の外へ続いている。一方、北東側は水田造成時に削平されているがさらに上流へ伸びていたようである。残存長16.6m、最大幅2.9m、深さ0.75mで、明黄褐色の砂礫を大量に含む点が堆積物の特徴である。

遺物は第37図９～13（図版38）が出土している。９、10は黒色土器である。９は内黒の埦で高台を欠く。内面に横方向にへら磨きを施す。10は内外とも黒色の両黒の高台付埦である。内外ともへら磨きを施す。おおよそ10世紀代のものであろう。11～13は糸切り底の土師器埦である。

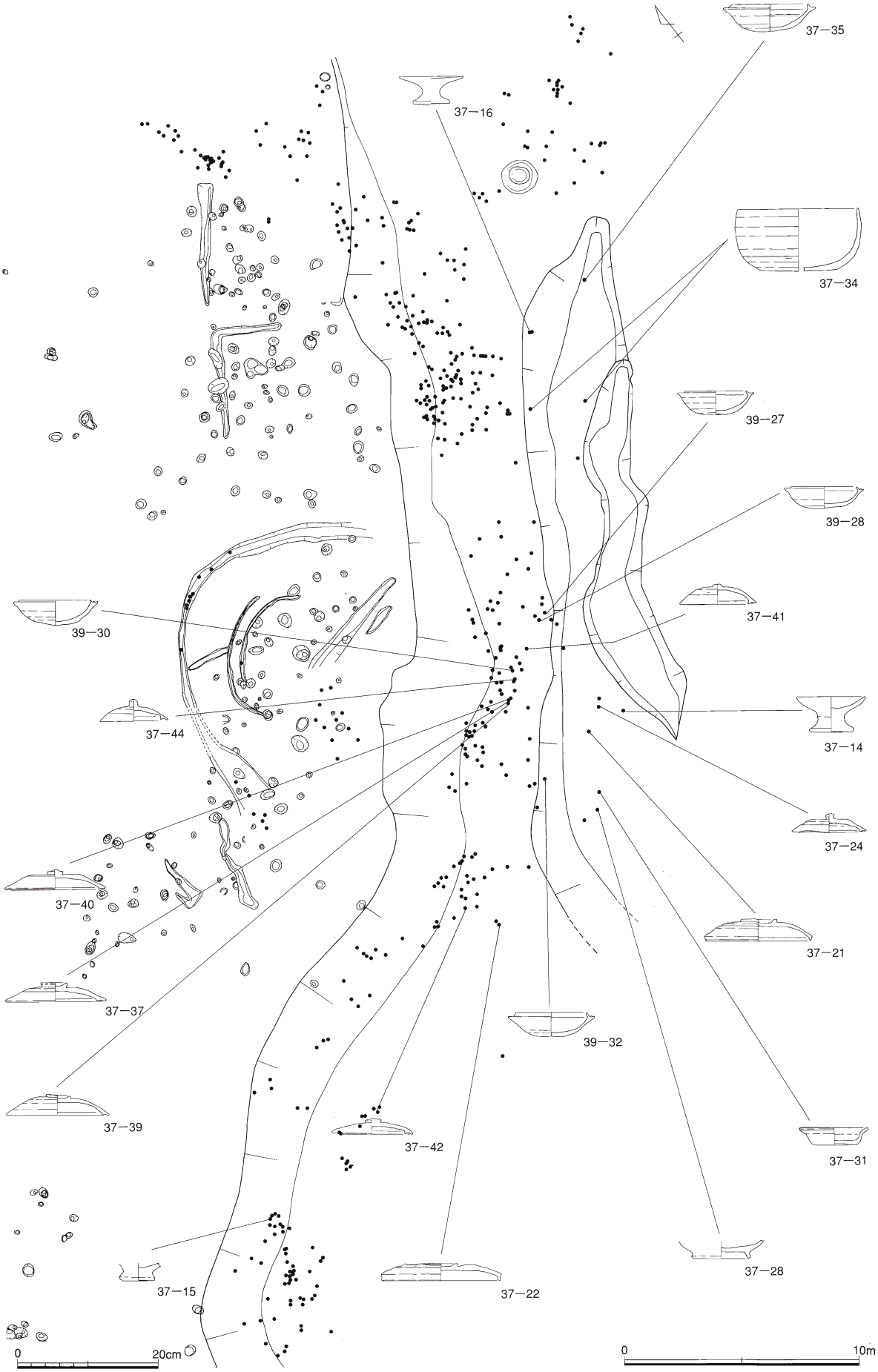
流路２（図版24）は河道の中程に位置し、流路１に切られ、後述する７世紀後半～８世紀の土層を切り込んでいる。上流側は削平により失われ、下流側は調査区外に続く。現存長30m、幅4.3m、深さ1.26mである。下層は礫の堆積が顕著であるが、上層では粘質土が堆積している。Ａ－１付近の上面では砂礫を全く含まない有機質に由来すると思われる均質な粘質土（第35図断面Ｂ－Ｂ’①層）が覆っていた。このことから川の流れが移動したあと、流路２はしばらく窪地となって痕跡を留めていたと思われる。この粘質土から柱状高台の土師器坏（36－16）が出土しており12世紀以降に流れが変わったと考えられる。

流路２の出土遺物は第37図14～36（図版38）である。土師器のうち14～16が柱状高台の坏、17、18は高台のつかない埦である。20～36は須恵器で、34に静止糸切り痕があるほかは、20、25、26、29、31に回転糸切り痕がある。29は出雲地方で奈良時代に盛行するタイプの埦で、30がその祖形にあたる。31は灯明皿で回転糸切り底。34は29と系譜が異なる器種であろう。

流路２以前の遺物は、平坦面が谷に向かって落ち込む河道の縁辺から出土した。このうち新しい一群の７世紀後半～８世紀の土器を包含する土層（第35図断面Ｃ－Ｃ’１層）はＡ－３付近で認められた（図版26上）。この土層は流路２に切られ、後述する６世紀後半の大量の遺物群を包含する土層を切り込んでいる。

出土した遺物は第37図37～48、第39図－27、28、30で、すべて須恵器である（図版38、40）。蓋は内面に返りのあるタイプで輪状つまみを持つ37～39は口径が12.4～15.5㎝、擬宝珠状つまみを持つ41～44は9.6～10.4㎝で、40は前者とほぼ同じ14.8㎝である。蓋坏は蓋、身とも口径が小さく10㎝前後である。おおむね大谷編年６～７期に相当する。高台付埦は48が静止糸切りであるほかは回転糸切りであり、８世紀に入る資料であろう。

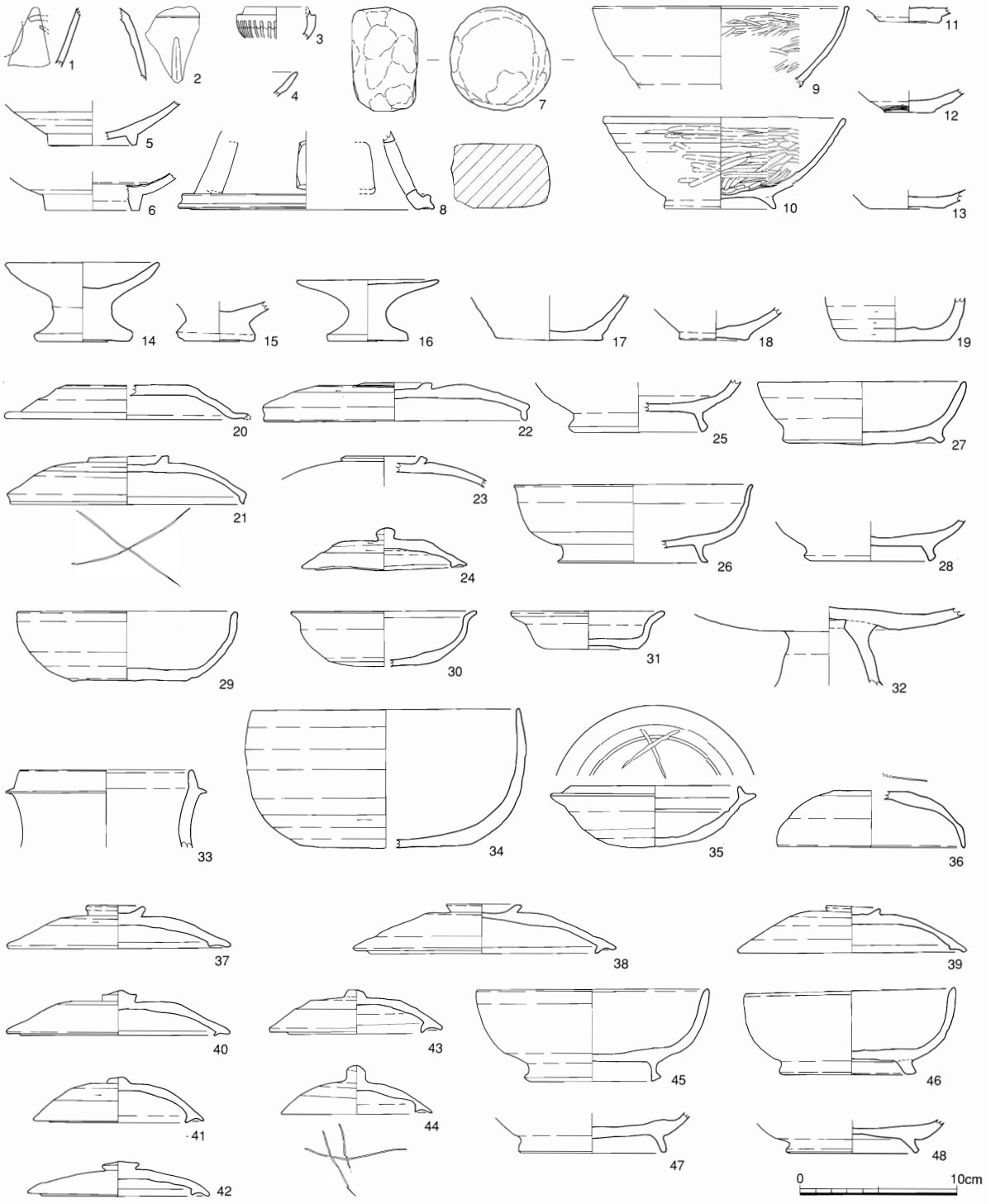
次に続く１群は６世紀後半～末頃の土器溜まりで、大量の遺物が河道の肩を覆うように出土した（図版25、26中）。この土器溜まりはＢ－１から下流に長さ約30m、幅２～３mにわたって顕著に



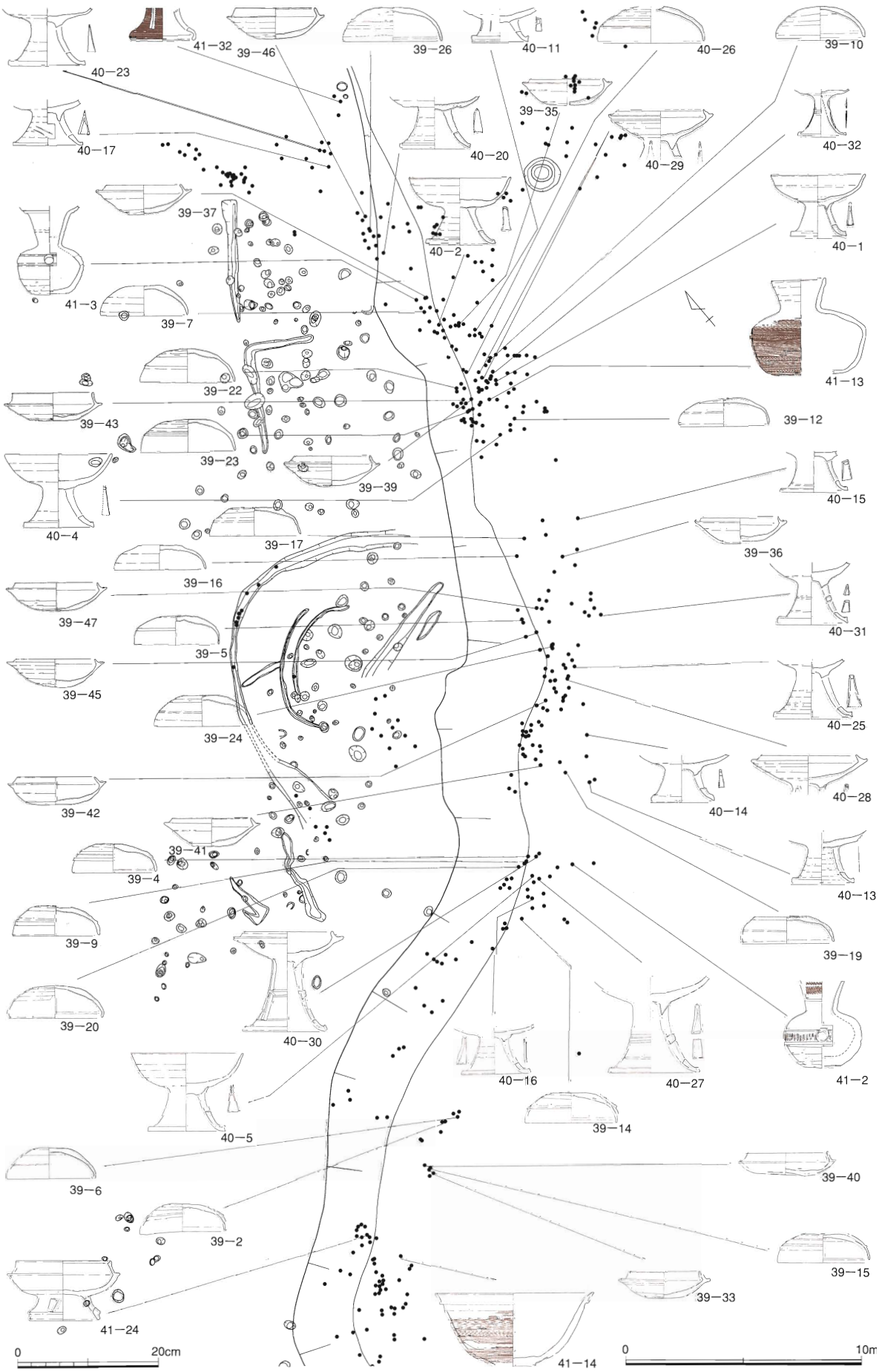
第36図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１遺物出土状況図（1）（遺構：S＝1／240、遺物：S＝1／8）

見られ、上流側から徐々にレベルを下げて続いている。Ｂ－１及びＢ－２で遺物の分布が途切れているが、調査時の掘り下げによるもので本来は一体として分布している。包含層は２ライン断面（第35図断面Ｂ－Ｂ’）では１層、３ライン（同Ｃ－Ｃ’）では２層、４ライン（同Ｄ－Ｄ’）では５層に相当する。ただし２ラインでは２，３層も同時期の遺物を包含している。なお同時期の遺物がＢ－４，５付近の河道の肩からも出土しているおり、かなり広範囲にわたって分布していることになるが、河道の下流側にあたるこの位置からは大谷３期の蓋坏も出土しており（第35図Ｅ－Ｅ’１～７層：上層）、土器溜まりが若干前後して形成された可能性もある。

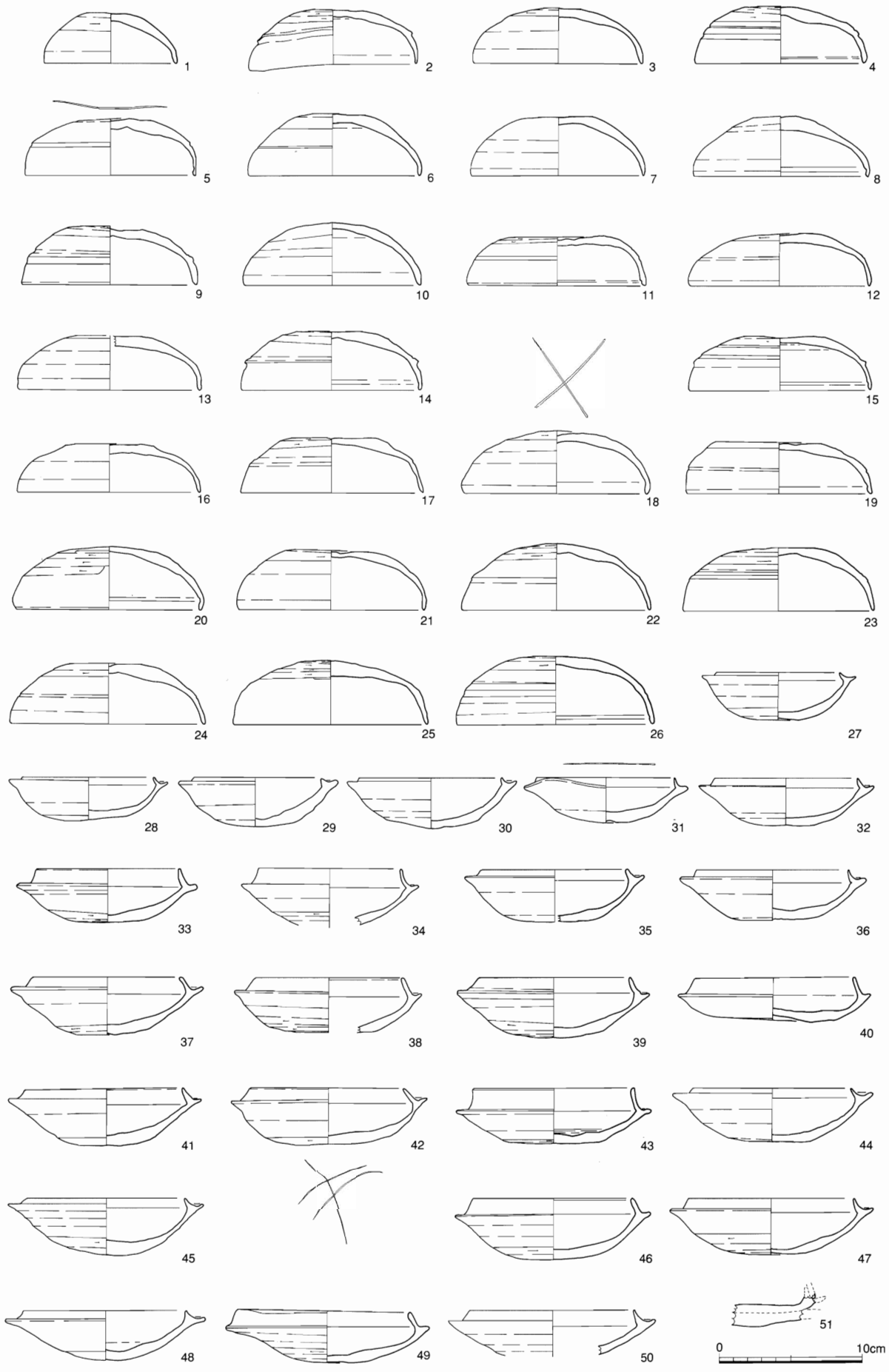
遺物は須恵器が蓋坏、高坏、瞭 、壺、横瓶、甕がある。土師器では甕が多く、甑、移動式竈、



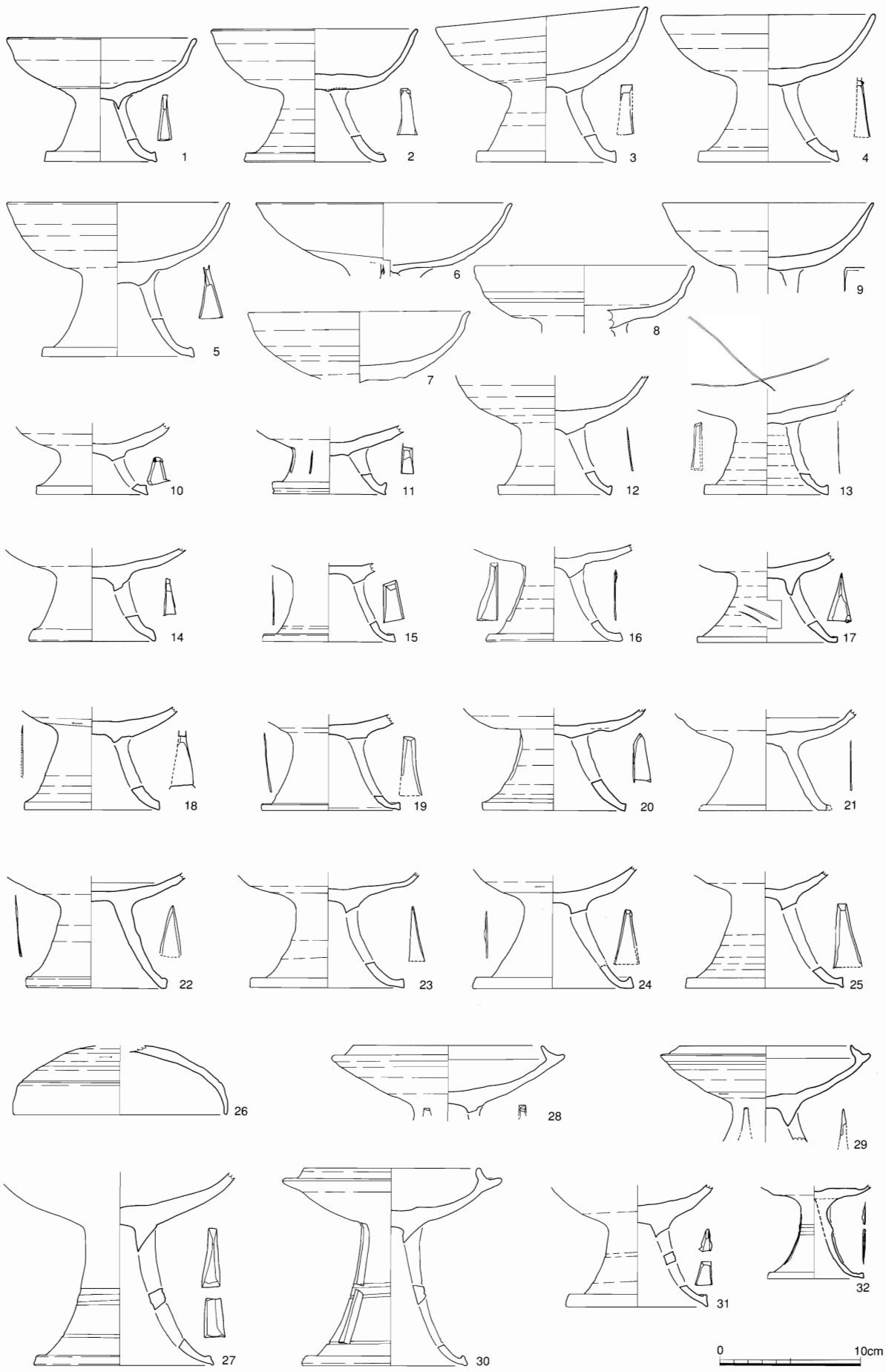
第37図　田中谷遺跡Ｉ区旧河道１出土遺物実測図（1）（Ｓ＝1／4）



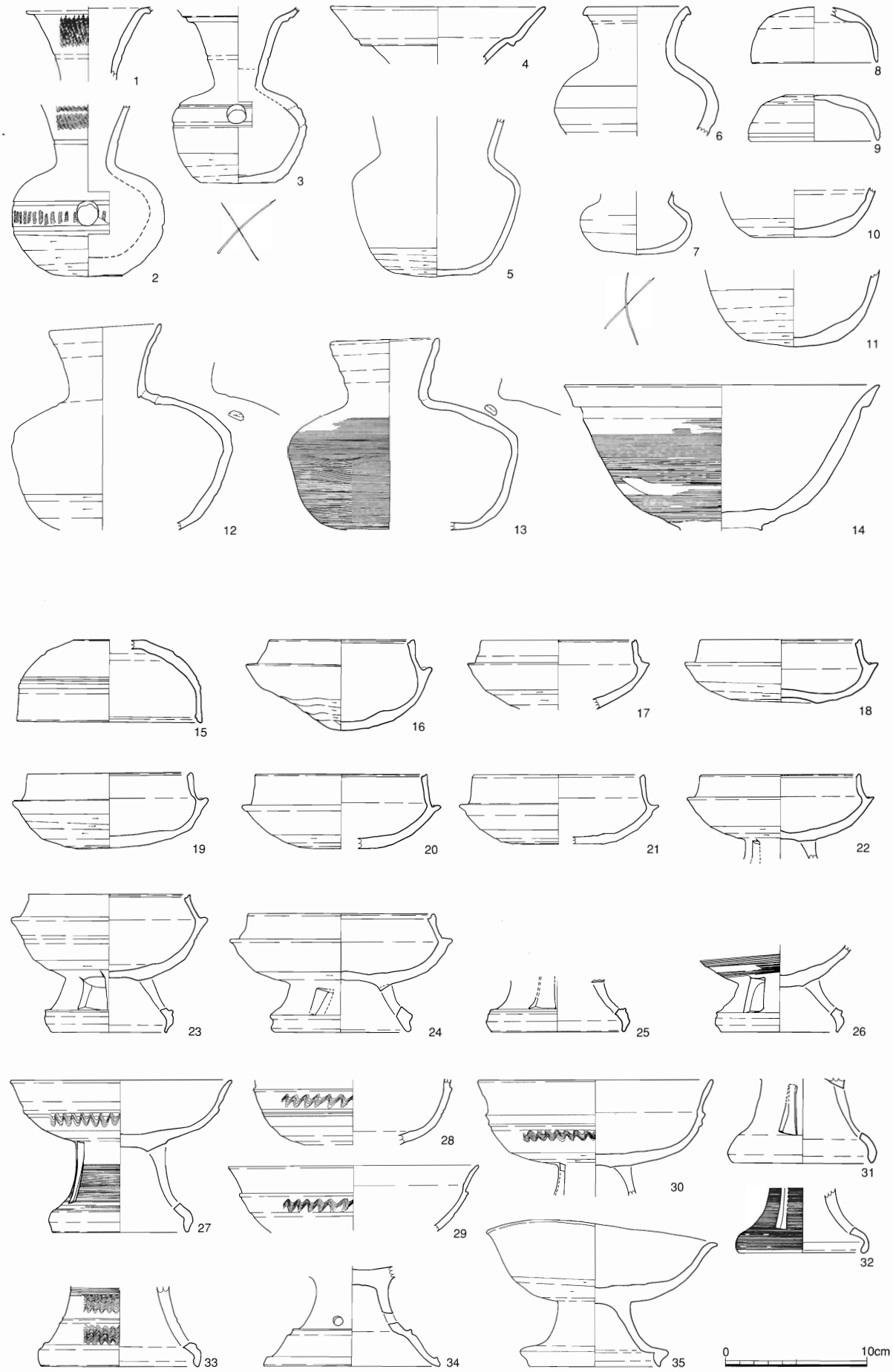
第38図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道 1 遺物出土状況図（2）（遺構：S＝1／240、遺物：S＝1／8）



第39図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（2）（S＝1／4）



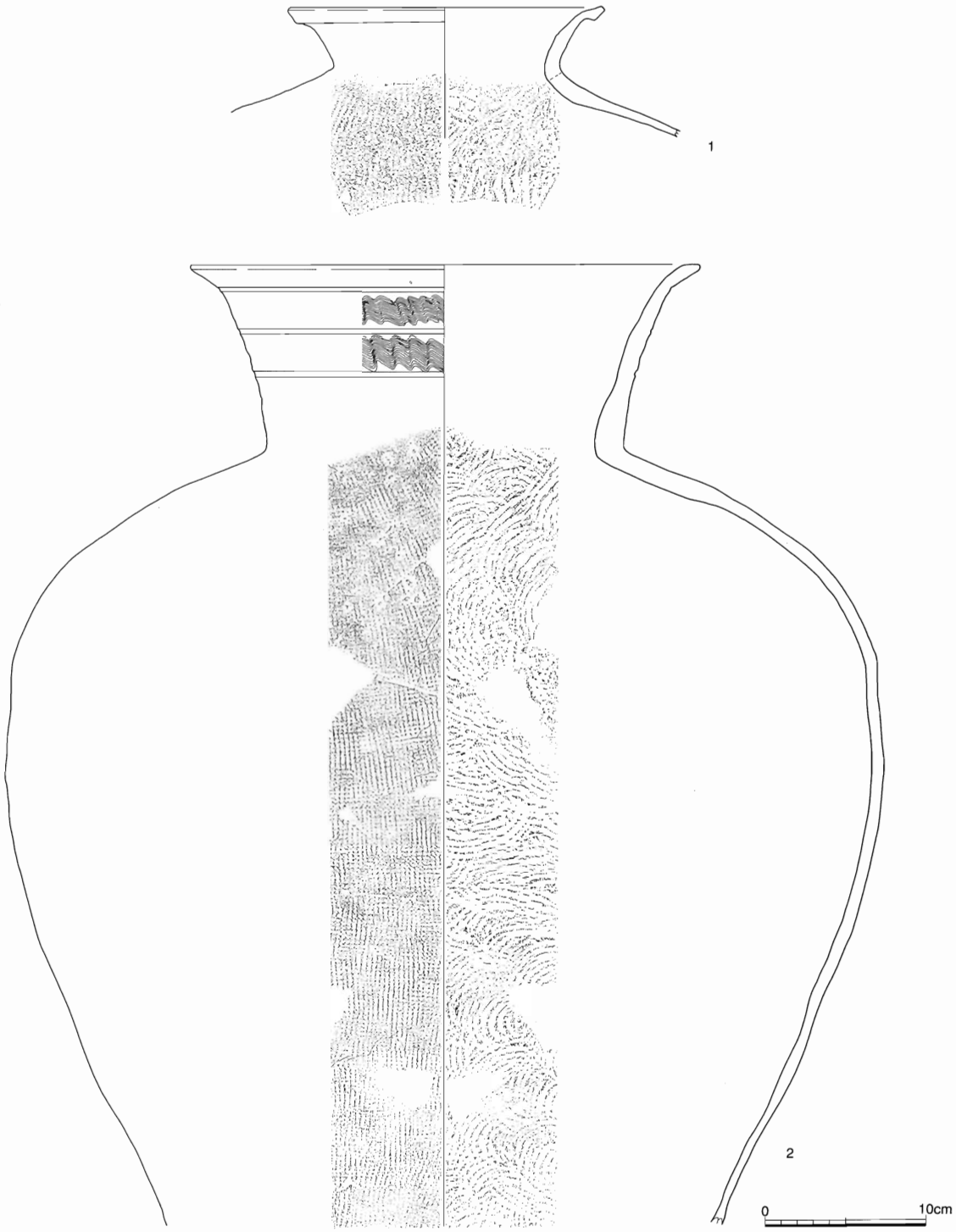
第40図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道 1 出土遺物実測図（3）（**S**＝1／4）



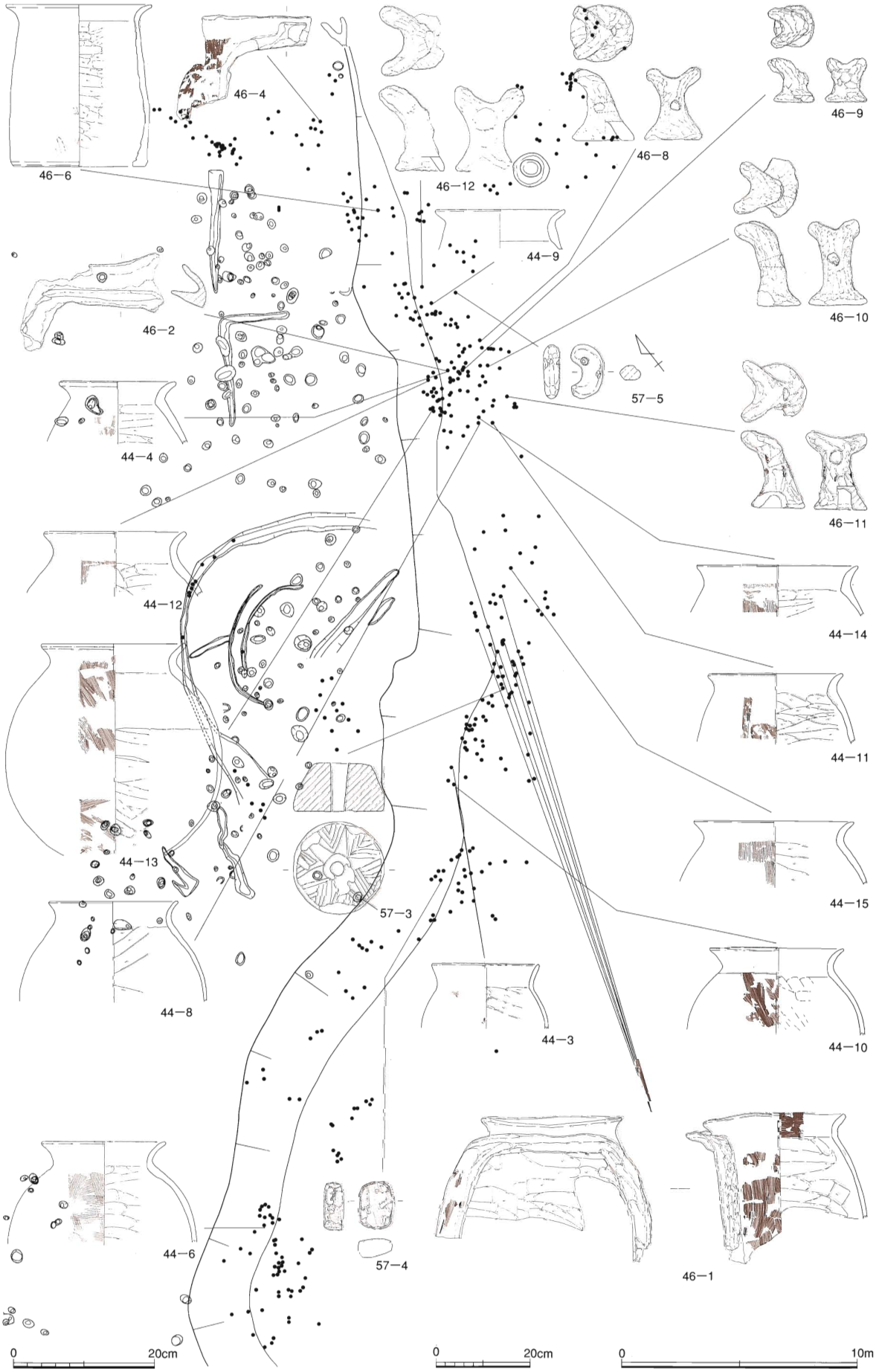
第41図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（4）（**S**＝1／4）

土製支脚である。このほかに石製品があり、砥石、紡錘車、勾玉がある。出土量はコンテナ約70箱でⅠ区の総遺物量のほぼ４割を占めている。土器類の器種構成を見ると須恵器＝供膳・貯蔵形態、土師器＝煮沸形態という性格が明確に現れている。

蓋坏（第39図　図版39、40）は口径12～12.5㎝前後の資料が多く、蓋の頂部のへら削りを簡略化したもので、口縁端部内面の沈線も省略した個体がある。大谷４～５期に相当する資料が大半で、３期の特徴を持つも蓋は４，９，25で、Ｂ－４で出土している。51は坏身の熔着資料である。高坏（第40図　図版41）は低脚無蓋高坏（１～25）が圧倒的に多く、長脚有蓋高坏（27～31）長脚無蓋高坏（32）は少ない。低脚無蓋高坏には大半が２方透かしで、13、15、16、18、19、22、23は対向



第42図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（5）（S＝1／4）



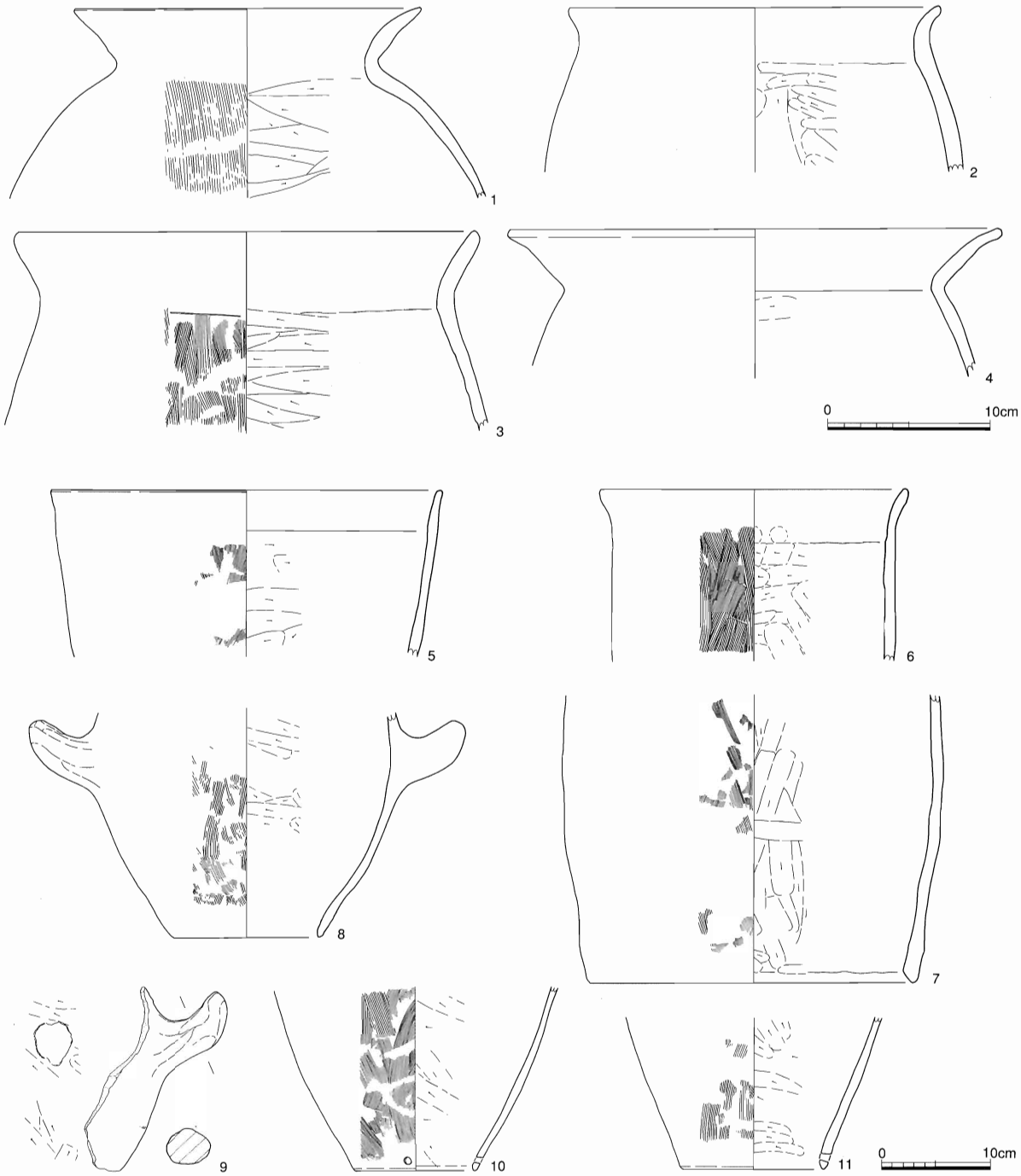
第43図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１遺物出土状況図（3）（遺構：S＝1／240、遺物：S＝1／8、S＝1／12）

第44図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道 1 出土遺物実測図（6）（S＝1／4）

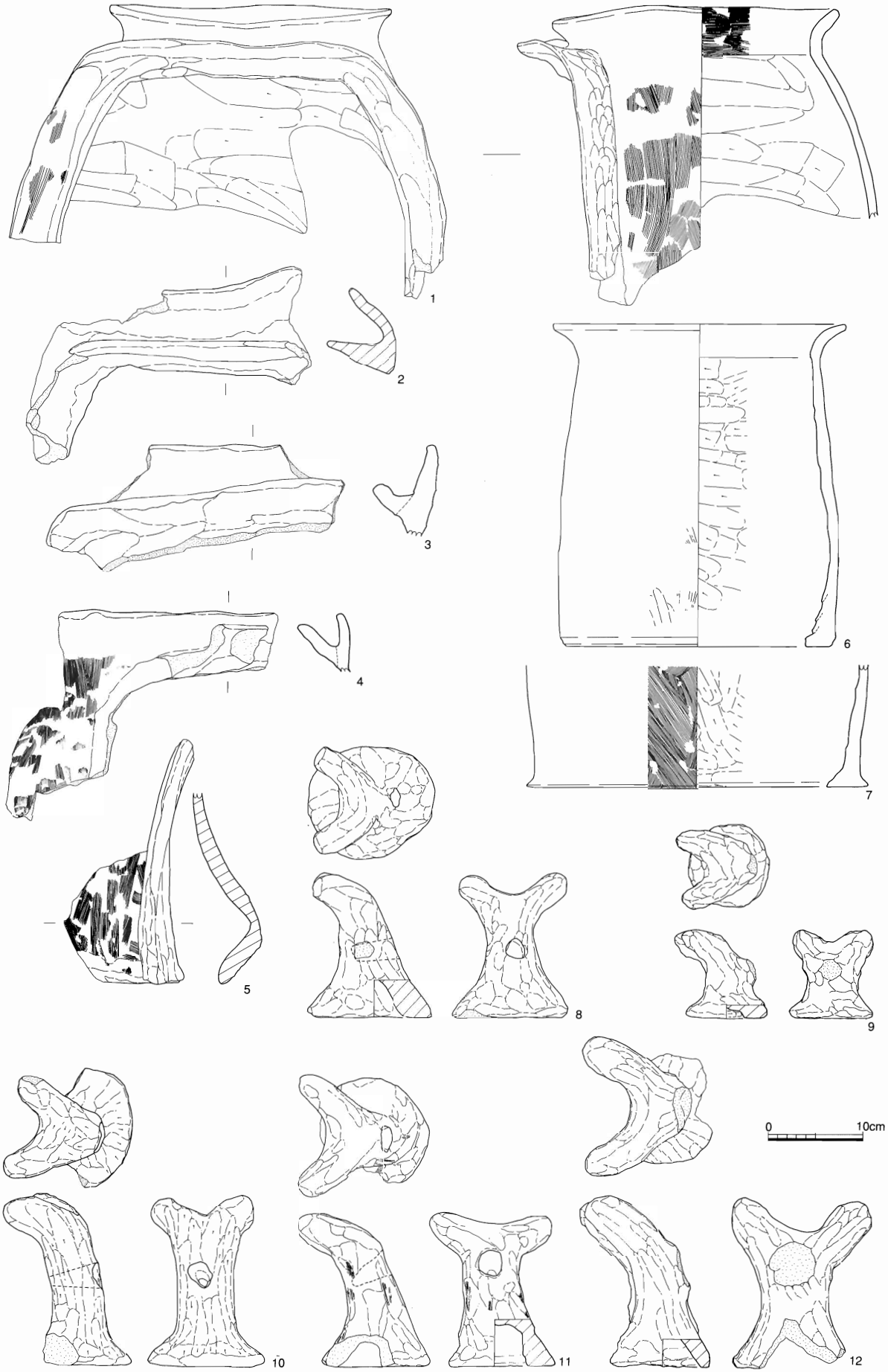
する透かし孔の一方が方形または三角形で他方が切れ目である。26はつまみが欠損する有蓋高坏の蓋である。３期にあたる30の長脚２段３方透かしの有蓋高坏はＢ－４から出土している。

甕（第41図１～４　図版42）のうち１，２は頸部に波状文があり、３、４は文様が消失して、３は胴部の刺突文もない。壺（同５～７，10、11）のうち10、11は底部で８，９は壺の蓋と思われる。横瓶（同12、13　図版42）のうち12はカキメが無く口縁を２重接合で形成し、13はカキメを施し単純な口縁の接合である。甕（第42図）の１は中型品、２は大型品である。

土師器では甕（第44図、第45図１～４　図版43）が多く、甑（同５～11　図版44）、移動式竈（第46図１～７　図版44）、土製支脚（同８～12）がある。石製品（図版53）では砥石（第57図８、10、11、12）、紡錘車（同２，３）、勾玉（同４～６）がある。勾玉未製品（同４）と内磨き砥石（10）



第45図　田中谷遺跡Ｉ区旧河道１出土遺物実測図（7）（1～4：S＝1／4、5～11：S＝1／6）



第46図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道 1 出土遺物実測図（8）（S ＝1／6）

があることから、勾玉の加工作業が行われていたようである。

これ以前の時期の遺物では５世紀末頃の須恵器がある（第41図15～34）。Ｂ－４，５を中心に出土した資料で、先述の６世紀後半遺物が出土した包含層より下層の炭混じり粘質土（第35図Ｅ－Ｅ’８～12層：中層）から出土した。器種は蓋坏、高坏がある。高坏は有蓋が短脚、無蓋がやや長めの脚を持つ。34は脚部に段をもち３方に円形透かしを配置した特徴的な形態の高坏である。同様の高坏は陶邑で須恵器生産が始まった当初に作られていて、脚短部の特徴からＴＫ73～216に相当すると考えられる。これらの須恵器が出土した層から土師器壺（第49図１）が出土している。

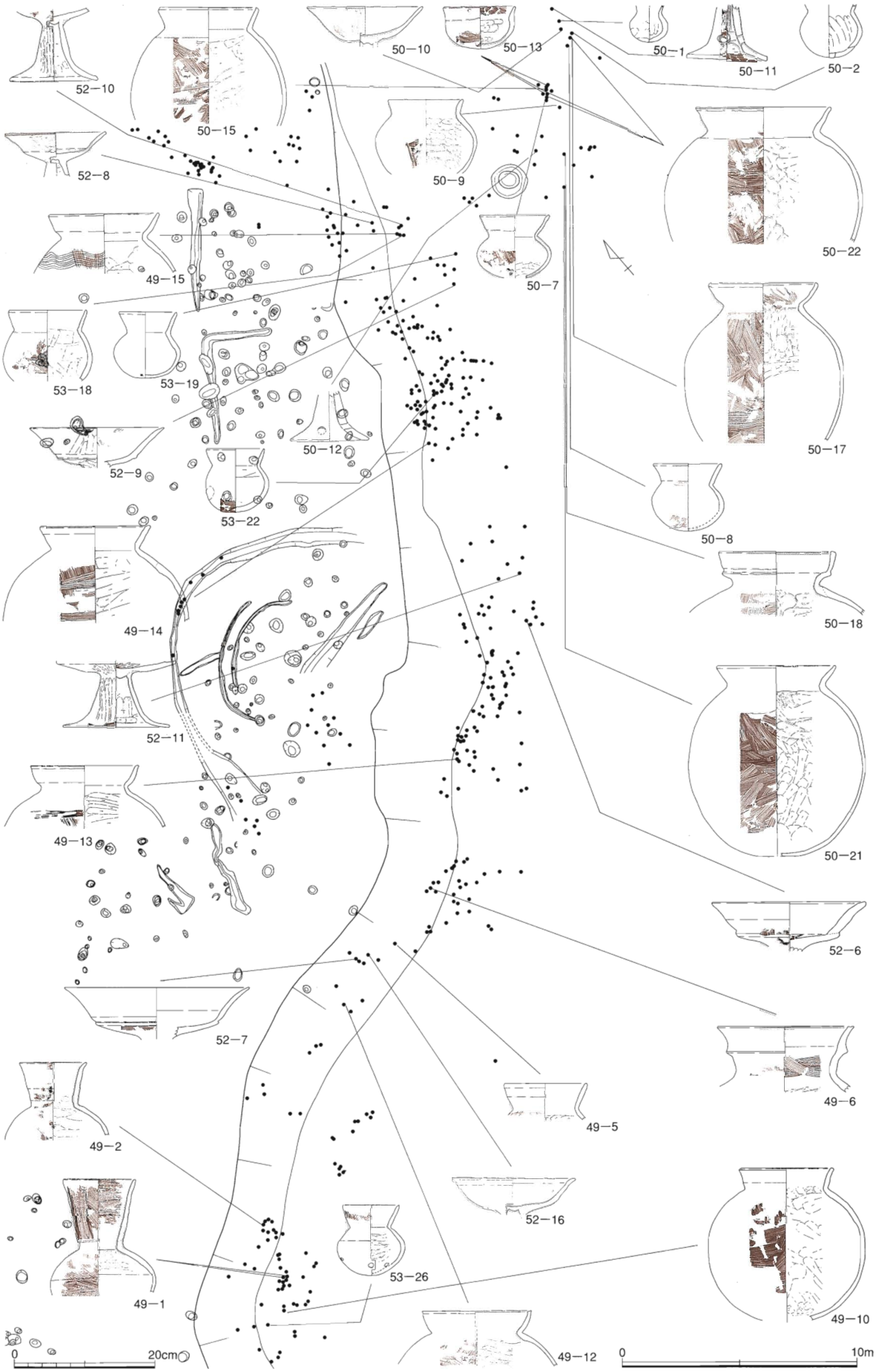
５世紀前半代にあたる松山Ⅱ期の遺物はＡ－０でまとまって出土している（図版26下）。Ａ－０の土器溜まりはおそらく河道内の流路の一つと思われ、１ライン断面（第35図Ａ－Ａ’）２，３層から一連の土器が出土している。調査区端に位置するため流路を平面的に確認できなかった。

第50図はＡ－０の出土遺物である（図版46）。小型丸底壺（１～８）は口縁は胴部高に比べ短い。高坏10は肥厚する充填粘土を底部側から撫でつけてへこむ。口縁の形態は違うが同種の接合方法はＳＫ10に隣接して出土した高坏（第22図１）と共通する。甕は単純口縁と複合口縁の２種がある。前者のうち内湾して立ち上がる口縁の個体と複合口縁の個体は口縁端部内面に僅かに段を作り出している点が特徴である。これらの特徴と共通する遺物は後述する旧河道２の上層でも出土している。

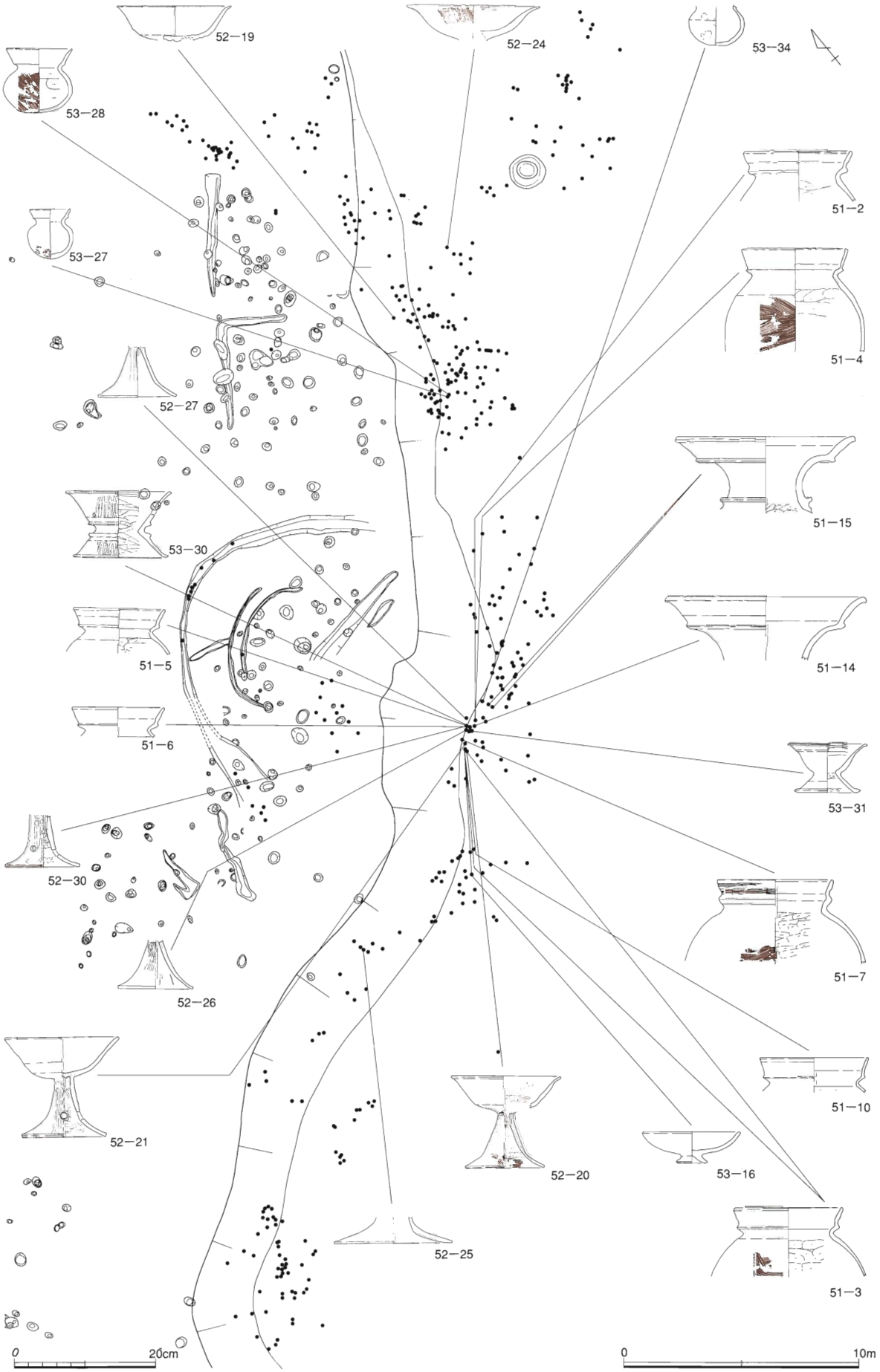
同時期の遺物は段丘側ではまとまって出ていないが、後述する旧河道２の上面の遺物群はＡ－０で確認した流路内遺物とほぼ時期が同じである。これらの一部が旧河道１に流れ込んでいるほかは、当該期の遺物はＢ－４，５付近で若干出土している（第49図）。

古墳時代前期の資料は出土地点が限られ、量も少ない。まとまって出土したのはＢ－３の段丘裾で、壺、甕、高坏、低脚坏、器台、小型丸底壺が出土した。土器は段丘裾が若干窪んだところにかたまっていて、河川によって削られずに残っていたような出土状況であった（図版27上）。河川堆積層にも少なからず同時期の土器が含まれており、この土器溜まりに由来するものと思われたので以下、同一の資料群として取り扱う。時期はおおよそ松山Ⅰ期後半である。

壺（第51図14、15　図版47）は大きく外反する複合口縁で、端部、頸は拡張され15には肩部に突帯が廻る。甕（同１～12　図版47）は複合口縁の個体が圧倒的に多い。１は「く」字状に開く単純口縁を持つ資料で、形態は布留式に系譜を求めることができよう。複合口縁の資料では２、３、７は口縁が屈曲し、４は端部が内面に肥厚、８、12、13は端部を外面に引き出す。高坏（第52図20、21、26～30 図版48）は丸みのある坏部からやや外反するよう開く口縁を持つ。脚部は軸部と脚裾との境があまり明瞭でなくなだらかに端部に向かって広がる。接合方法は確認できたものはすべて、充填した粘土板に刺突痕を持つ接続法αである（21、26、27）。これらの特徴から松山Ⅰ期新段階（小谷３式）に位置づけられよう。後出する松山Ⅱ期の高坏に比べ、口径と底径の差が少なく脚部が長いので全体にスマートな印象を受ける。形態的に近い特徴の高坏は上野１号墳第１主体部（八束郡宍道町）、釜代１号墳第１主体部（松江市）から出土している。低脚坏（第53図16、17　図版50）は調整のわかる資料では縦方向のへら磨きを施す。器台（同30～32　図版50）は２種類ある。30は小型の鼓形器台である。器高9.4㎝、口径14.4㎝で受部の３方に円形の透かし孔がある。外面は受部、脚部とも縦方向のへら磨き、受け部内面は横方向のへら磨きを施す。31は筒部が限りなく痕跡化したいわゆる開地谷型の鼓形器台である。大きさは30の器台に比べひとまわり小さく器高6.9㎝、口径11.0㎝である。外面はなで、受部内面は横方向のへら磨きが施される。30の器台と比

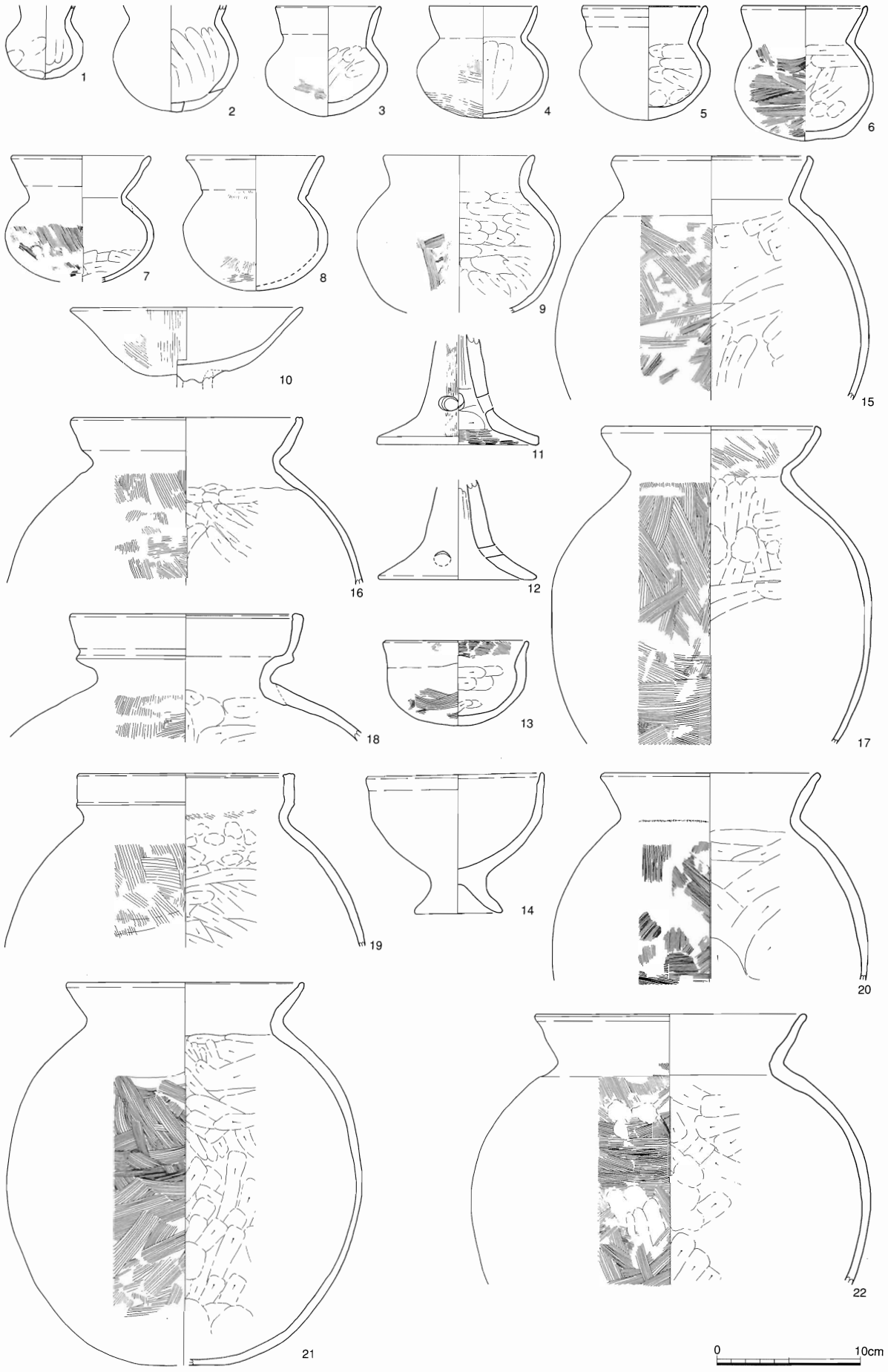


第47図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道 1 遺物出土状況図（4）（遺構：S＝1／240、遺物：S＝1／8）



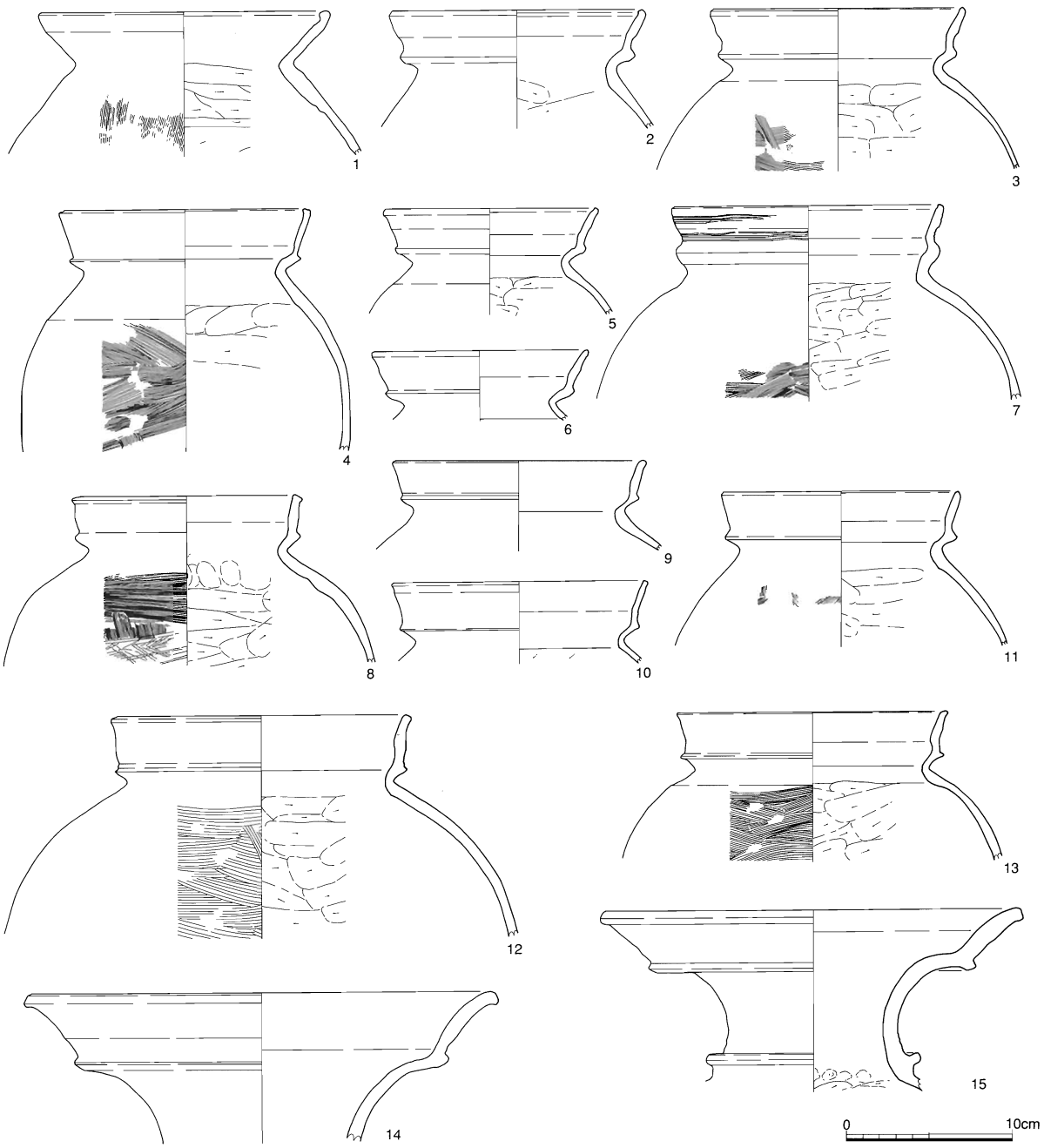
第48図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１遺物出土状況図（5）（遺構：S＝1／240、遺物：S＝1／8）

第49図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道 1 出土遺物実測図（9）（S＝1／4）

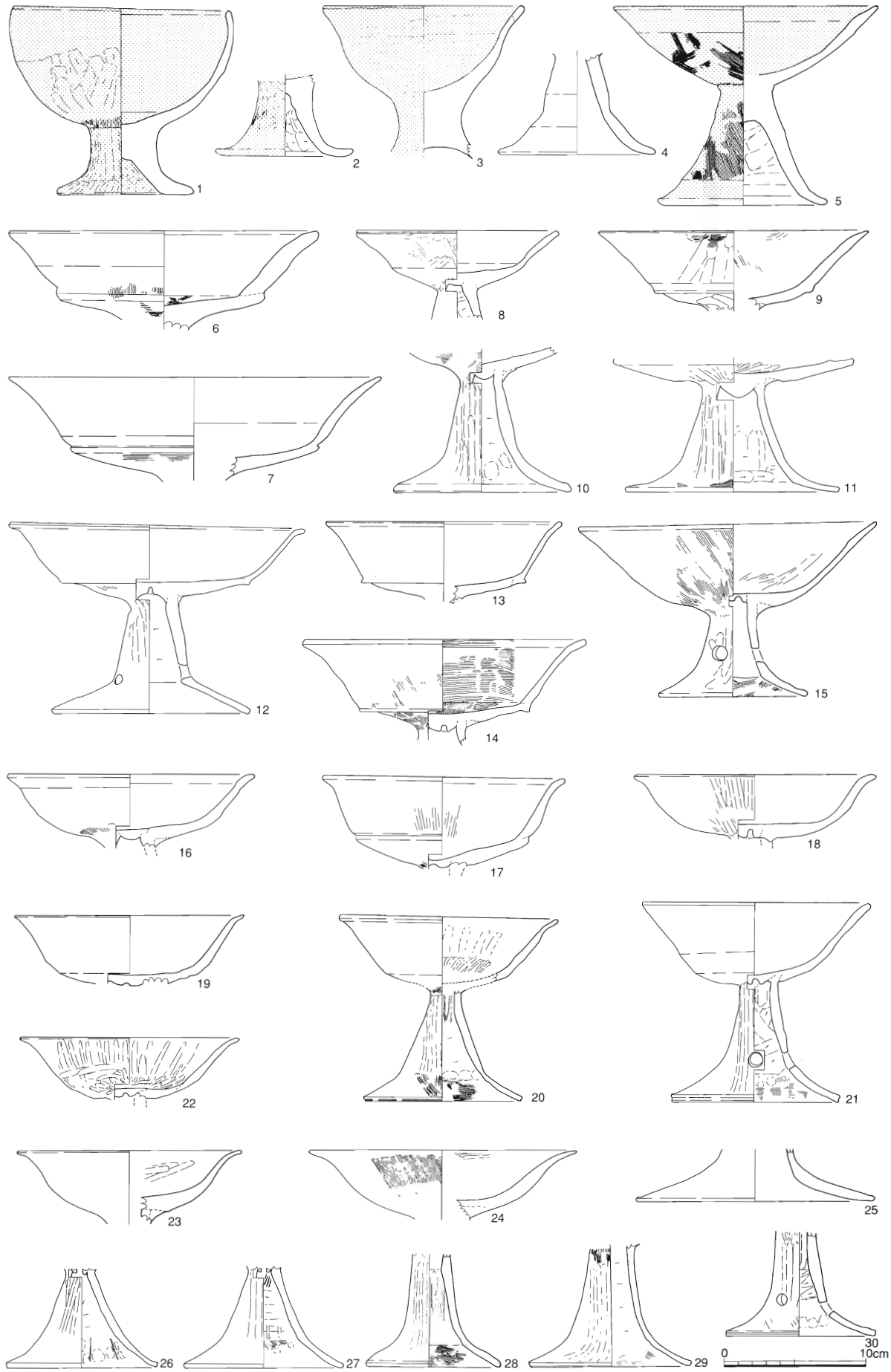


第50図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（10）（S＝1／4）

較すると筒部の上下に見られるはずの段が著しく形骸化しているが、全体的な形態は鼓形器台の特徴を留めている。32は受け部、脚部が大きく開く特徴的な形態のいわゆる「中空小形器台」である。受け部は僅かに内湾し、脚部は直線的に開く。器高7.0㎝、口径9.0㎝である。調整は内外面とも縦はけのちなでで、土器表面の色は特徴的な明黄橙色である。近畿地方でこの種の器台が盛行するのは布留１，２式とされている。34は同地点から出土した小型丸底壺だが口縁部を欠く。Ｂ－２の段丘裾から複合口縁の丸底壺が２個（同27、28　図版50）出土している。互いに接して出土しており（図版27中）ほぼ同時期の資料と思われる。



第51図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（11）（S＝1／4）

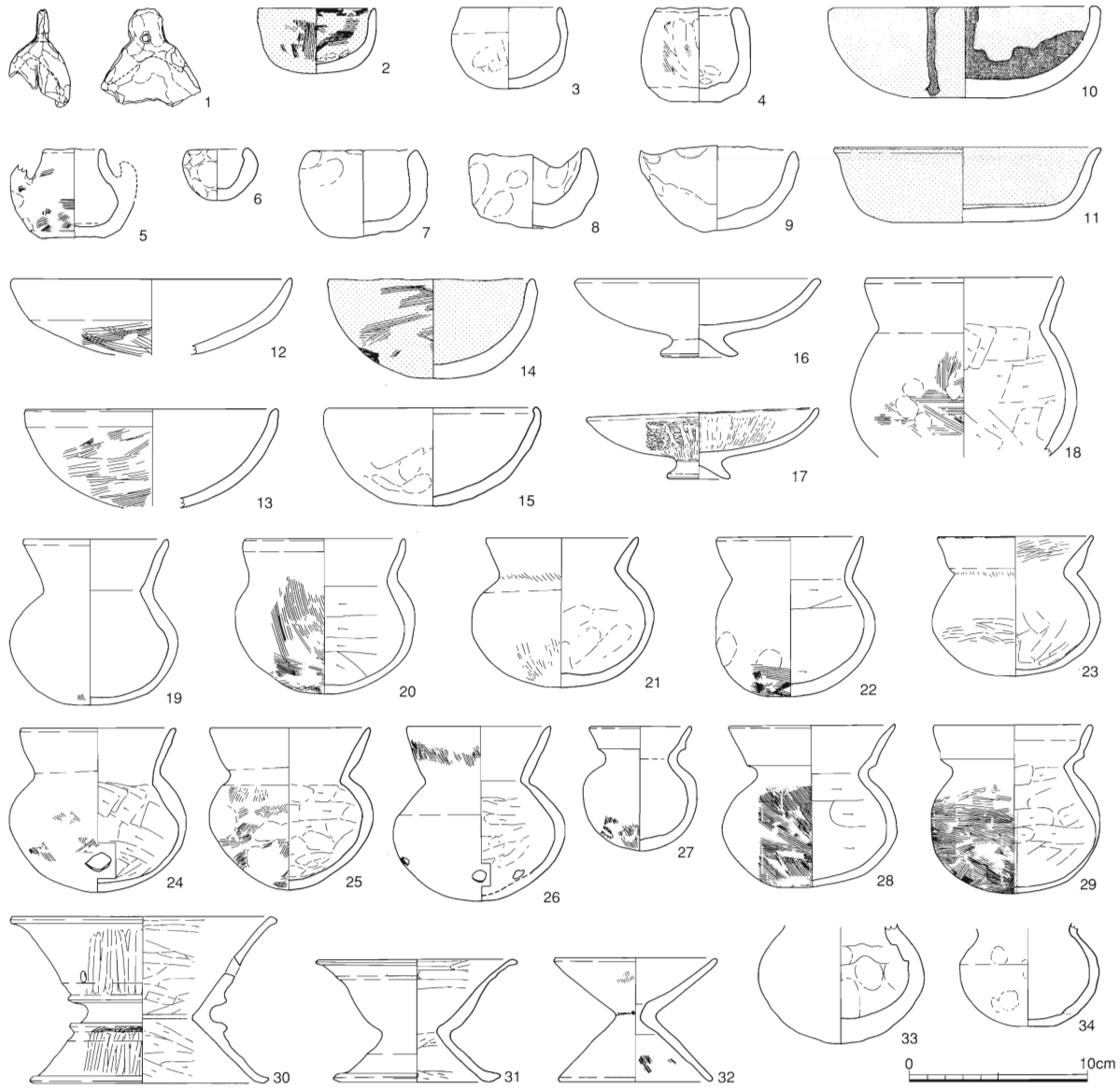


第52図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（12）（S＝1／4）

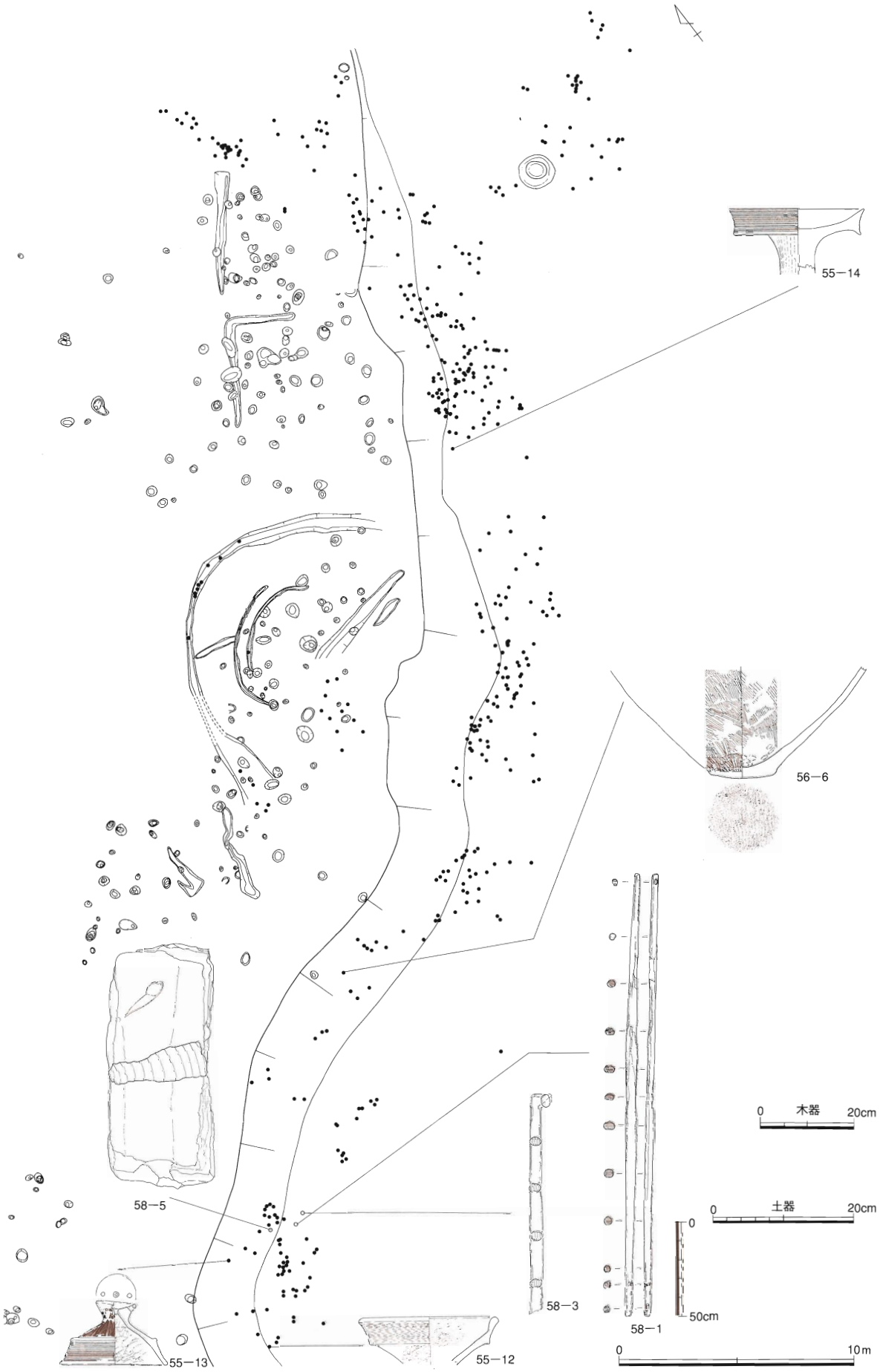
弥生土器（第55図）は、後述する旧河道2から流れ込んだ遺物があるほかは、新しい時代の遺物と混在して出土しており、単純な包含層、流路として把握することはできなかった。以下特徴的な遺物について簡単に触れておく。

9，10は注口土器の注口部と取手で、取手には竹管文・貝殻腹縁文が施されている。11は器台の脚部で赤色顔料が塗布されている。12は草田2期の鼓形器台の受け部。13は蓋でつまみの中心に孔があり、蓋内面に貫通している。左右にも取手を貫通する円孔が1対ある。蓋の下端は複合口縁状に拡張されていて貝殻腹縁による平行沈線文が施されている。草田3期に相当するようである。14は筒部が中空になっていないが、受け部の形状から器台と判断した。15～17は形態はそれぞれ異なるが貝殻腹縁を爪形状に加飾する点が共通する。17、18は算盤玉状の胴部に突帯を貼り付けた台付壺である。前者は竹管によるスタンプ文も施され、後者は胴部に全く装飾を持たない点で対照的である。15～18は鳥取県因幡、東伯耆地方の弥生後期中頃の土器と共通し、特に17、18は両地域でも一時期に限ってみられる器種だと言われている（松井1997）。19～21は低脚坏で、この器種の初源的形態を示している。

第56図は大型の壺等である。1は肩部に貝殻腹縁で平行沈線と波状文を施した大型の壺である。



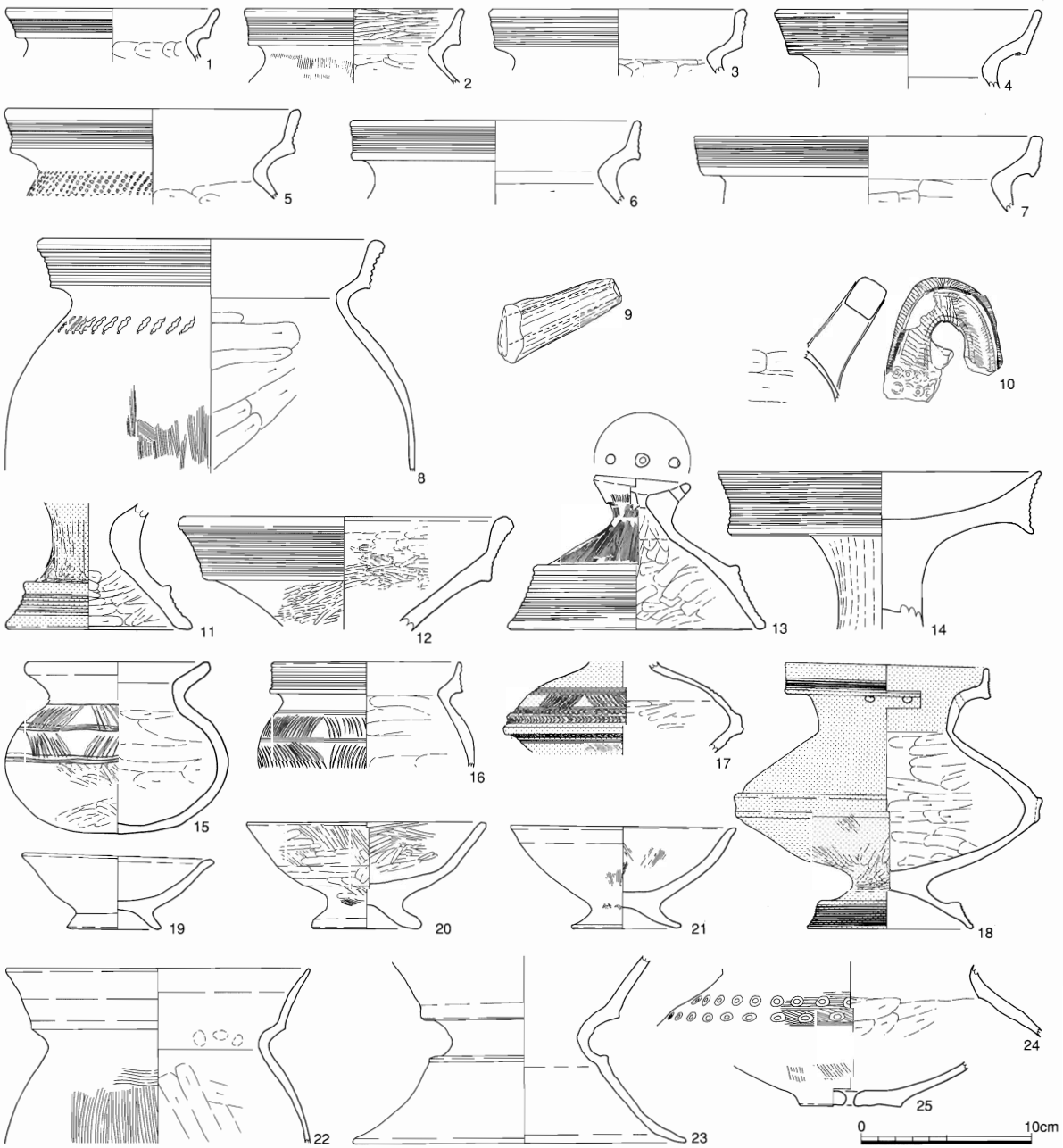
第53図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道1出土遺物実測図（13）（S＝1／4）



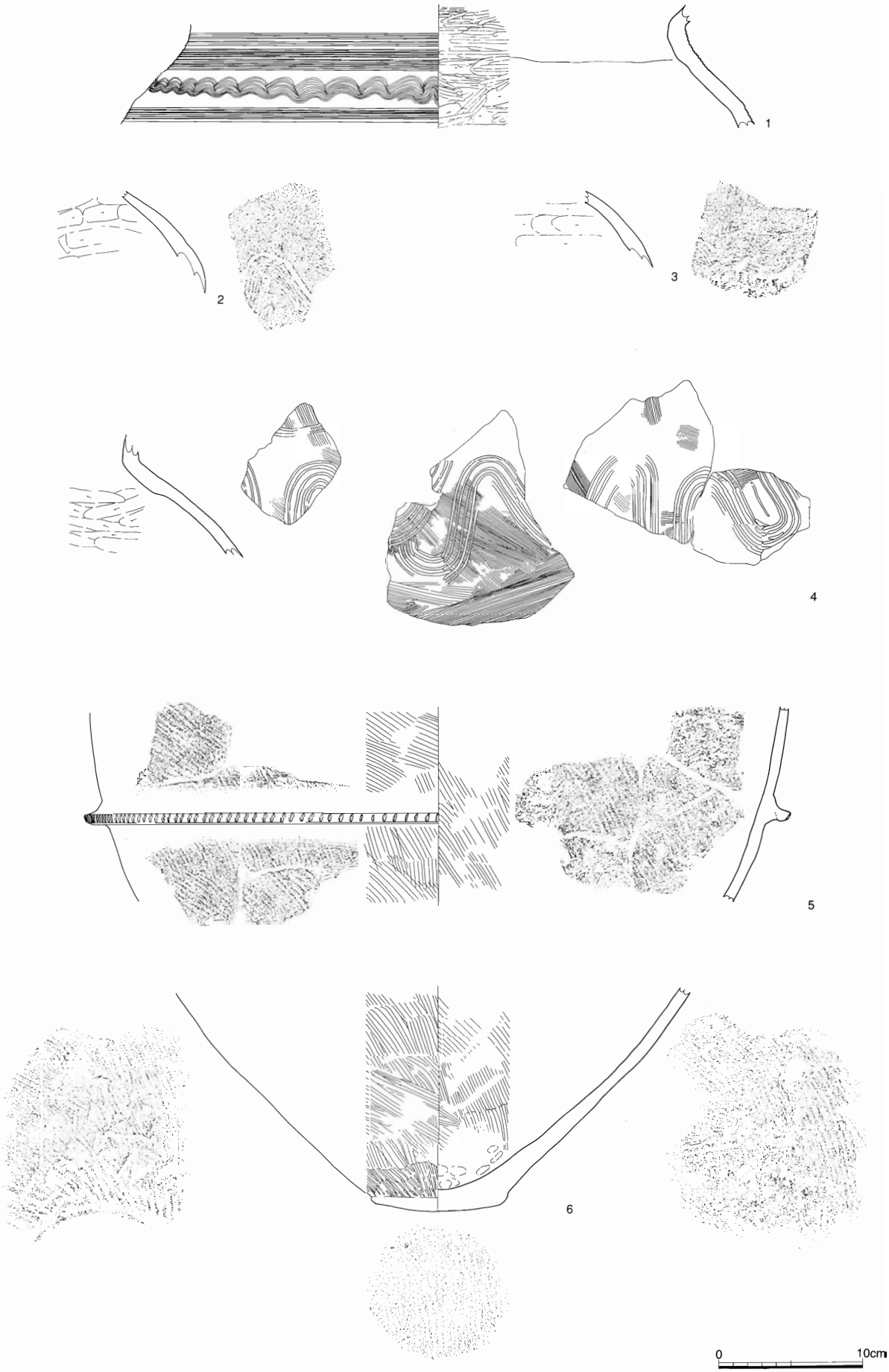
第54図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１遺物出土状況図（6）（遺構S＝1／250、遺物S＝1／8、1／12、1／30）

２，３は同一個体の壺の肩部で、前者は櫛状工具による波状文の上に同心円状の文様がかすかに残る。後者は波状文が断続的につながり、一部にへら描きの線が見られる。４も同様の文様を持つ壺で、平行する沈線は５本で間隔が広い。５，６は胴部に刻み目を付けた突帯が廻る大型の甕で、内外面ともかなり粗い縦刷毛を施す。丸みを帯びる底部は刷毛目の上から叩きが施されている。オレンジ色の胎土で、九州北部からの搬入品と考えられる。時期は弥生後期終末頃に相当すると思われる。同様の資料は堀部第１遺跡（鹿島町）、古志本郷遺跡（出雲市）、姫原西遺跡（同）などから出土している。

石製品・金属製品（第57図）のうち先述した６世紀後半の土器溜まり以外から出土したのは黒曜石製の石鏃（７）、凹石（９）、棒状の不明鉄器（13）がある。

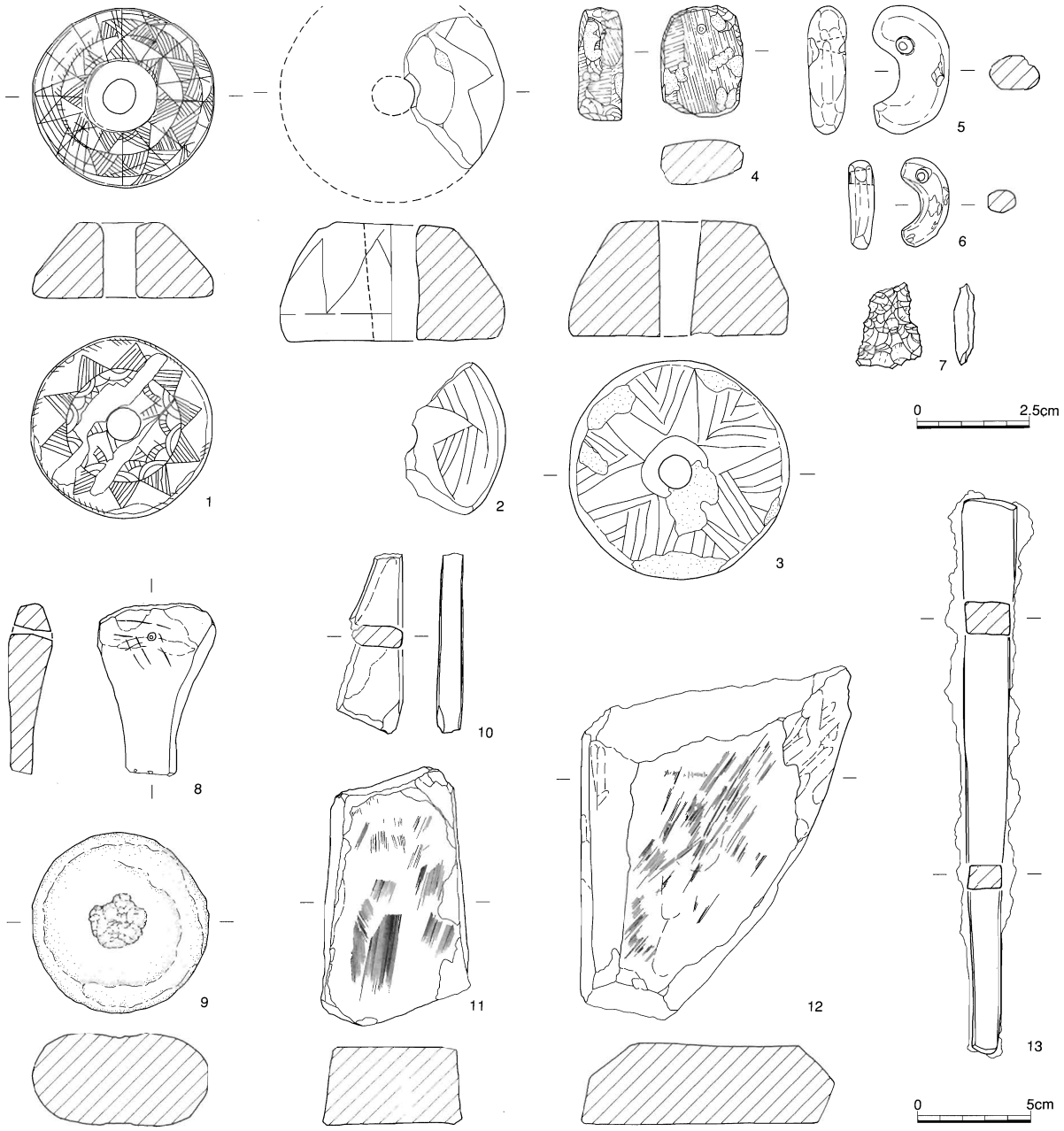


第55図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（14）（S＝1／4）

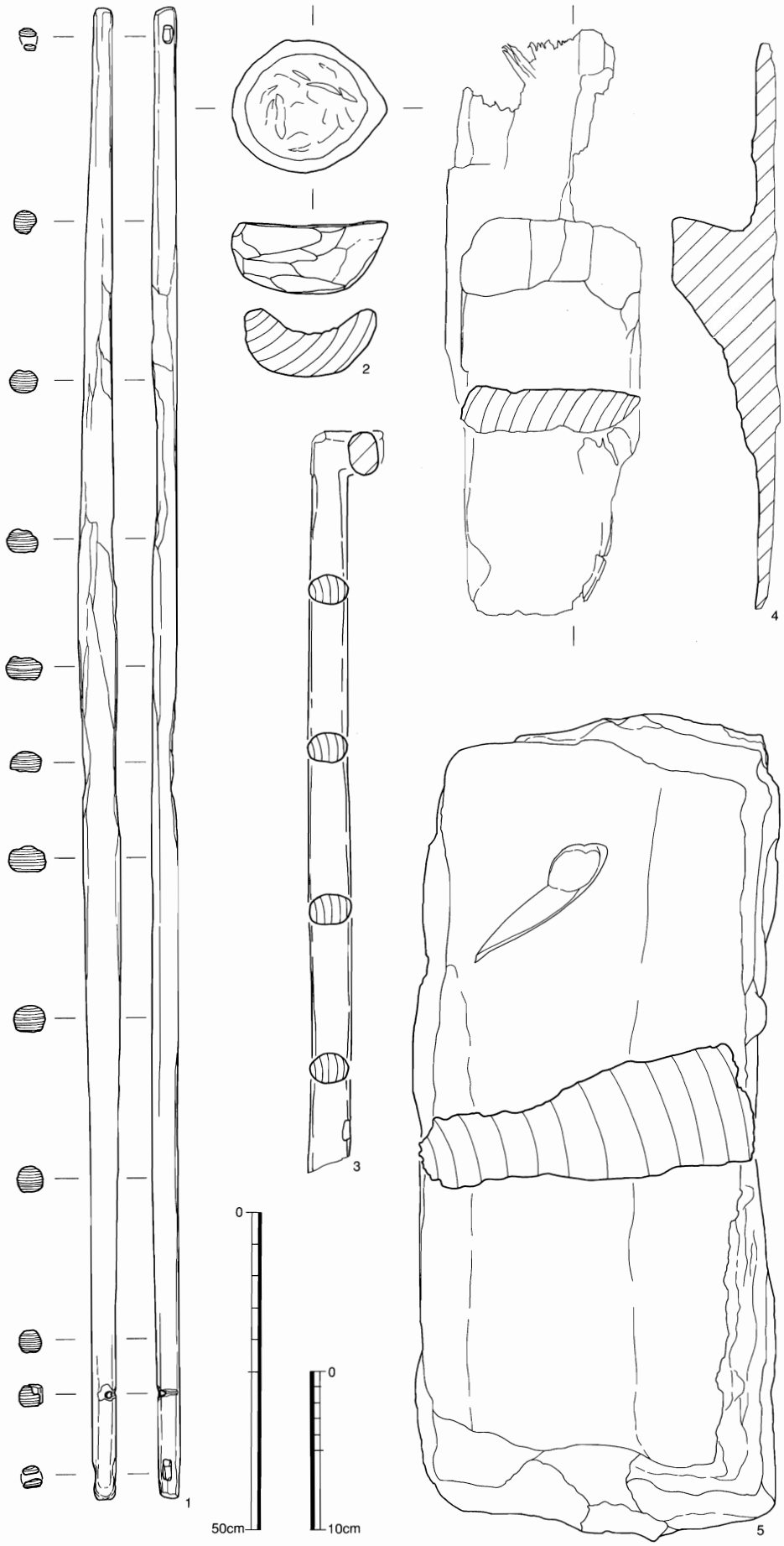


第56図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（15）（S＝1／4）

木製品（第58図　図版54）は、河道部の調査にしては出土数が非常に少なかった。１，２～５はＢ－５付近の下層（第35図Ｅ－Ｅ’18層）から出土（図版27下）していることから古墳時代前期以前のものと思われる。１は天秤棒で、板目材を加工した全長233.5㎝の長大なものである。両端に３×1.5㎝の紐通し穴が側面方向から開けられている。両端は丸みを帯び、断面は円形の棒状を呈している。中程に近づくにつれ太さを増すとともに担いだ時に下向きになる面が平坦になっている。上面から見た中心部は22㎝にわたり幅と厚みが減少しており、肩に乗せる箇所をあらかじめ削って担ぎ易いように加工したものと思われる。なお、図示した下端から16.5㎝の上面右側に火鑽臼として使用した痕跡がある。天秤棒は完形で廃棄による転用とは考えにくいので、天秤棒として機能している期間に火起こしにも使われたらしい。いろいろな状況が想像されるが、いずれにしても興味深い事例である。３は残存長46.6㎝、幅2.6㎝、厚さ1.9㎝の棒状を呈し、上端がＴ字になることから何かの柄であろう。４は破損著しいが、断面の形状が足掛け状になることから梯子と判断した。



第57図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道１出土遺物実測図（16）（1～7：Ｓ＝2／3、8～13：Ｓ＝1／3）



第58図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道1出土遺物実測図(17)(1：S＝1／10、2～5：S＝1／4)

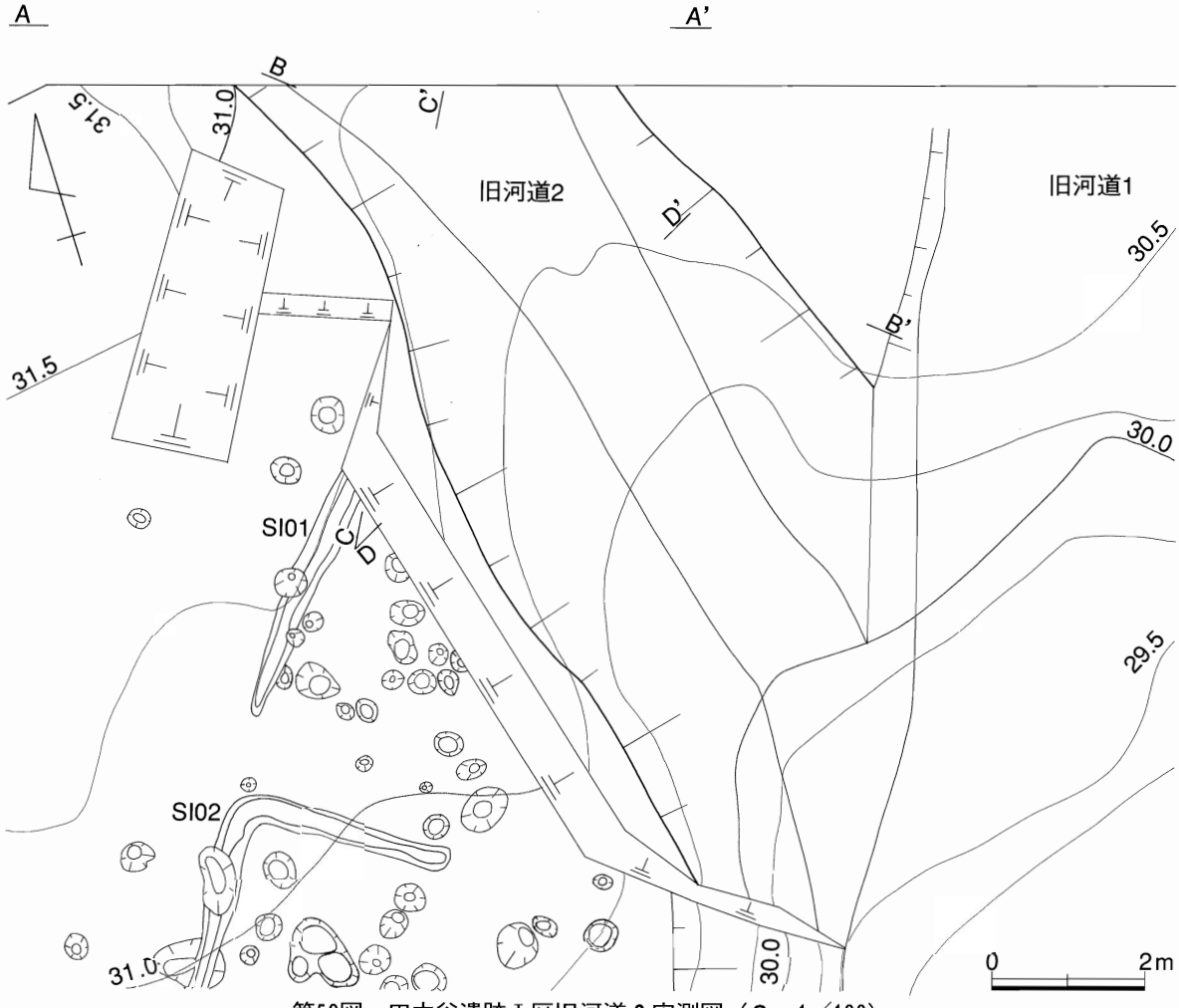
ただし、一木梯子に通有の芯持材ではないため断定はできない。5は原木をミカン割りして得たカシの原材で、図示した右側面が樹皮側にあたる。反対側は芯側にあたるが芯は残っていないようである。図示した柾目部分の上方に長さ11cmの細長い窪みが認められるが、人為的に開けたものかどうか不明である。長さ51.8cm、幅20.9cm、樹皮側の厚さが7.6cmで、泥除け2枚程度が作れる大きさであろう。2は小形の容器状のもので、一方が片口状に尖る。内外面とも粗い加工痕が残り、内側の刳り込みが浅いことから未製品と思われる。SE01周辺から出土しており、弥生時代後期以降と考えられる。

旧河道２（第59～66図　図版28～30、55～58）

旧河道２は調査区北西隅から北から南に向けて流れ、旧河道１に合流する。幅は最大で5.5m、深さは段丘面から0.78mである。小規模な河道であることから北西丘陵の小谷に源を持つ支流と考えられる。

調査開始当初はその存在に全く気がつかず、近接する竪穴建物ＳＩ01の壁帯溝が調査区北壁側に続かないことに疑問を持ちながらも上面にある古墳時代前期末～中期の土器溜まりの取り上げに終始していた。その後調査の進行過程で北壁下に側溝を設け、上面から0.6m下で有機質を多く含む黒色土を検出し、さらに土器溜まりの下をさらに掘り下げていたところ初めて河道の存在を確認するに至った。結果的には上面の古墳時代前期末～中期の遺物群はこの河道の終末段階に落ち込んだもので、河床に近い層から弥生後期前半の土器が木製品と共に堆積していることがわかった。ただし、河道の上端にあたるラインは段丘上面で確認できなかったため、やむを得ず任意で設定した範囲を掘り下げ、下層の黒色土と河床面を検出する方法を採った。従って、第59図に示した上端は断面から復元した線であることを断っておく。

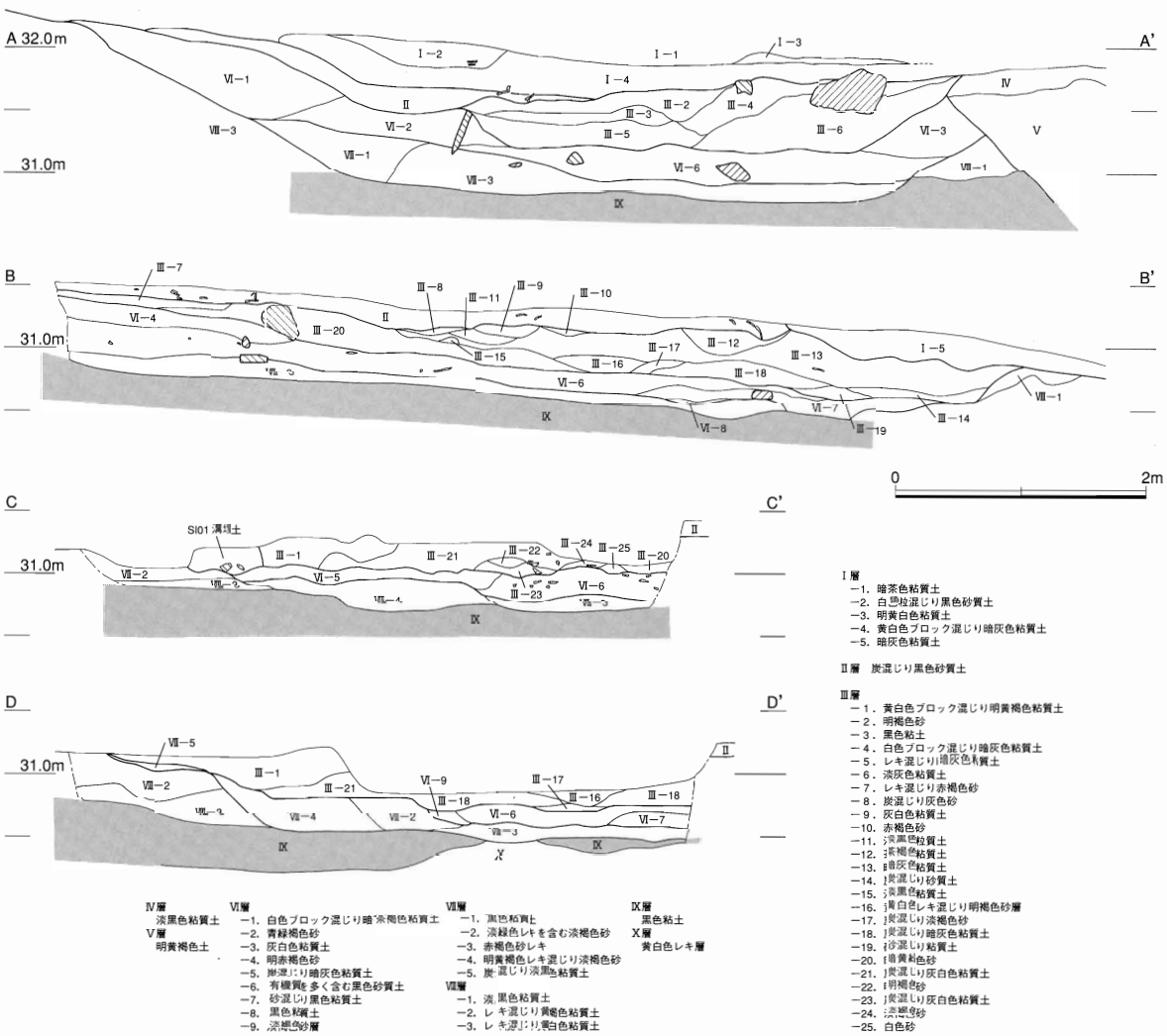
河道内は土層が複雑に切り合っており層相の比較検討が困難を極めたが、大きく見るとⅠ～Ⅹ層に大別できる（第60図）。Ⅰ層は水田造成によって削平されているため段丘上には残っていなかったが調査区北壁断面（同Ａ－Ａ’）で見ると西側丘陵裾を覆うように堆積している。Ⅱ層は調査当初に検出した古墳時代前期頃の遺物を包含する土層で河道の終末段階に堆積している。Ⅲ層は粘質



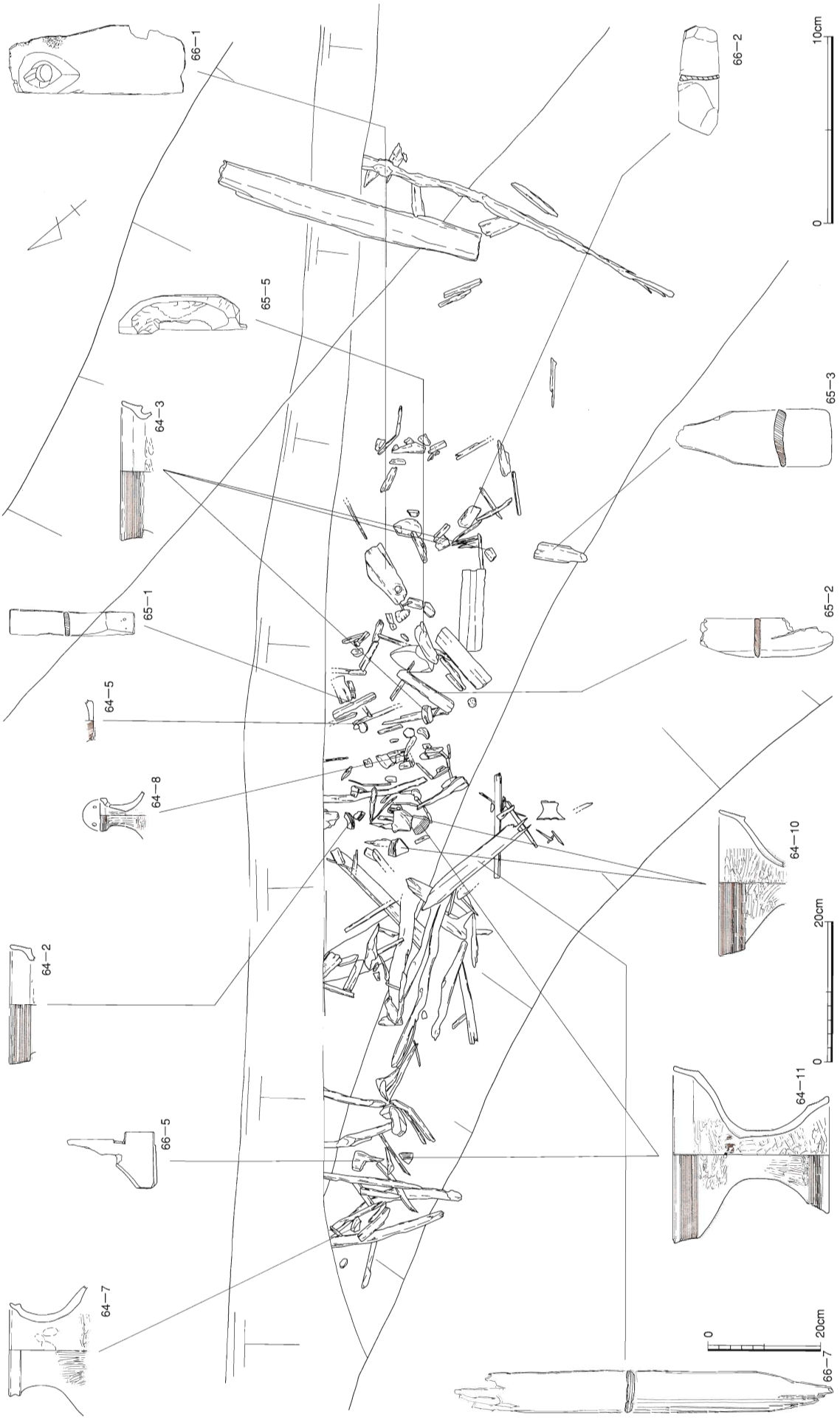
第59図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道２実測図（S＝1／100）

土と砂が複雑に入りくんだ流路内の堆積土である。丘陵から供給された２次堆積土や、旧河道１の河川堆積物で構成されるⅣ～Ⅵ－５層および弥生後期の堆積土であるⅥ－６層を切るように堆積している。断面Ａ－Ａ’の西側ではこの流路の肩にあたる部分に護岸用と思われる杭が打ち込まれている。下端はⅧ層に達し、上端はⅢ－３層で切られて欠損していることから古墳時代中期頃の所作と推測される。Ⅵ－６層は弥生後期の土器と木製品および木質を含む黒色砂質土である。遺物の出土状況は後で述べる。Ⅷ層は旧河道の形成された初期の堆積土で、河床直上は無遺物の砂層で覆われている。

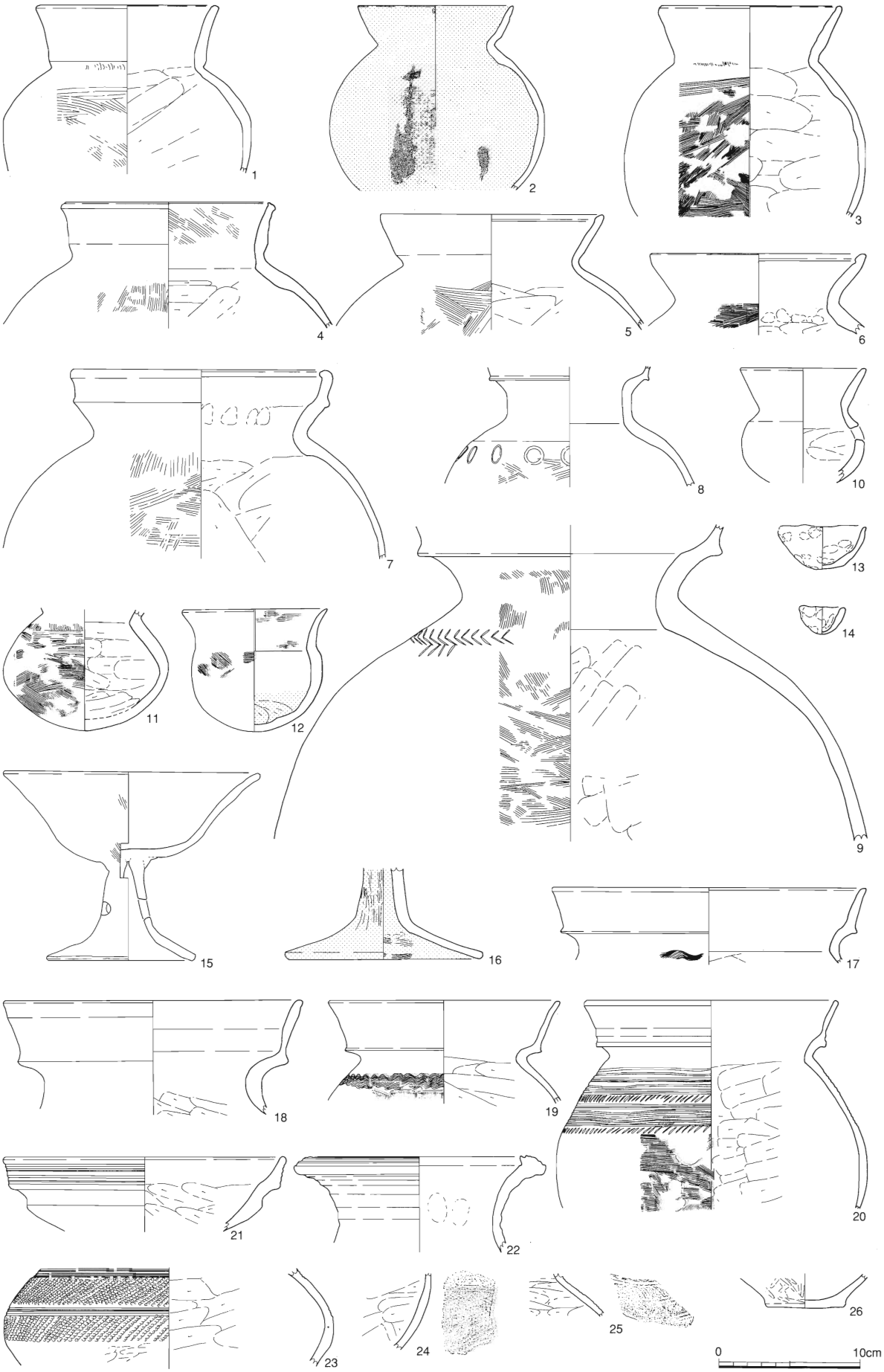
これより下層は河道の基盤にあたるため本報告の対象とは直接関係しないが、その成因について簡単に説明しておく。Ⅷ、Ⅹ層は段丘を形成する更新世の風化した礫層である。この２層に挟まれて非常に均質な黒色粘土のⅨ層が堆積する。肉眼で植物質を認めることはできなかったが、黒色の粘土という層相が有機質に由来することは間違いないと思われる。最終氷期後に進行した山塊の風化は河川の浸食・堆積作用により徐々に、谷間の河床を上昇させた。その間にも段丘面に比較的安定した時期があり植物が繁茂したようで、第Ⅸ層がそれに対応するものと思われる。同質の土層は田中谷遺跡の他の調査区でも風化した礫層中で確認されており、谷間における段丘の形成過程で同様の事象が各所で発生していたことを物語っている。段丘上の遺構群は複雑に入りくむ堆積層を基盤に掘り込まれており、場所によって土質がかなり異なるのは以上のような段丘の生成過程に起因



第60図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道２土層断面図（S＝1／60）



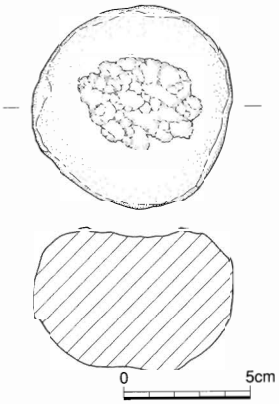
第61図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道2遺物出土状況図（遺構：S＝1／30、土器：S＝1／8、木器：1／10）



第62図　田中谷遺跡Ｉ区旧河道２出土遺物実測図（1）（S＝1／4）

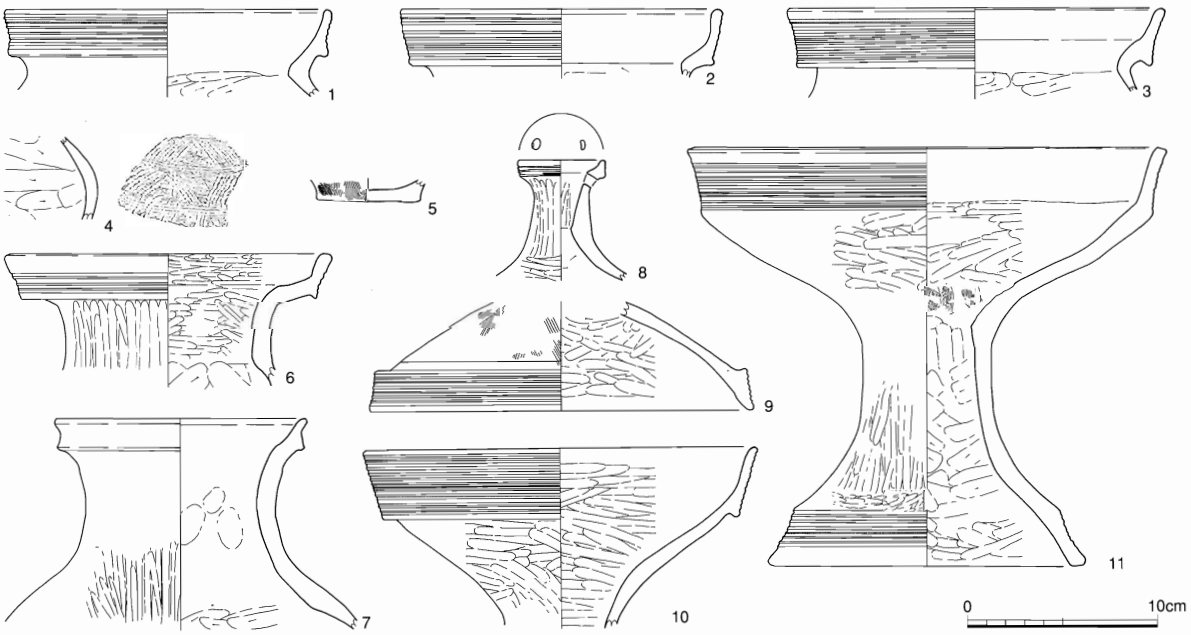
している。

次に出土遺物について述べる。先に述べたように、河道の上面には古墳時代前期末～中期の遺物が比較的にまとまって出土している（第62図　図版55)。隣接するＳＩ01との関係は明らかにできなかったが、出土遺物ではＳＩ01が先行する。１～３は直口壺、４は口縁端部に面を持つ甕である。７は口縁端部が内側に肥厚する壺で、同様の壺が旧河道１からも出土している（49－８、50－18)。以上は松山Ⅲ期に位置づけられる資料である。５，６は端部内面に段を付けた布留式土器の特徴を持つ松山Ⅰ期の甕である。８は肩部に竹管文を配し、９は綾杉文が断続的に付けた壺である。15は接合方法が不明確ながら器形から松山Ⅰ期新段階（小谷３式）の高坏であろう。出土した土器には弥生時代のものも含まれている。このうち時期的に古いものでは21が草田２期の鉢で、下層の遺物が新しい流路に削られ混入したのであろう。22は中期末の壺で、Ⅰ区で最も古い土器である。土器以外では凹石が１点出土している（第63図)。



第63図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道２出土遺物実測図（2）（Ｓ＝1／3）

下層（Ⅵ－６層）の弥生後期の土器と木製品は自然木を交えながら出土した（第61図　図版30)。弥生土器（第64図　図版56）で完形に復元できるものは少ないが、破片自体はあまり風化しておらず、甕などは外面にかなり煤が付着しているなど使用場所からあまり離れていなかったことを示している。１～３は複合口縁の甕で外面に煤が顕著に付着している。５は甕または壺の底部である。６，７は複合口縁の壺で口縁部が発達した前者には平行沈線文があり、後者は口縁の拡張が僅かで無文である。８は蓋の上部である。筒状に伸びて上端は僅かに複合口縁状を呈し沈線を廻らす。断面を見ると中程で中空の孔が狭まっている。つまみには１対の円孔がある。旧河道１から出土した蓋（第55図－13）と比較すると筒部が長い。９は高坏の坏部とも考えられるが、８に色調胎土が似ており、接点はないが蓋の下部の可能性もある。10は鼓形器台の受け部である。11は器高24.2㎝の高坏で唯一全形のわかる資料である。複合口縁状を呈する口縁下端部および脚部上端の拡張は顕著ではない。坏部底面は直径９㎝程度の粘土円盤で充填した痕跡が残る。草田２期のまとまった資料

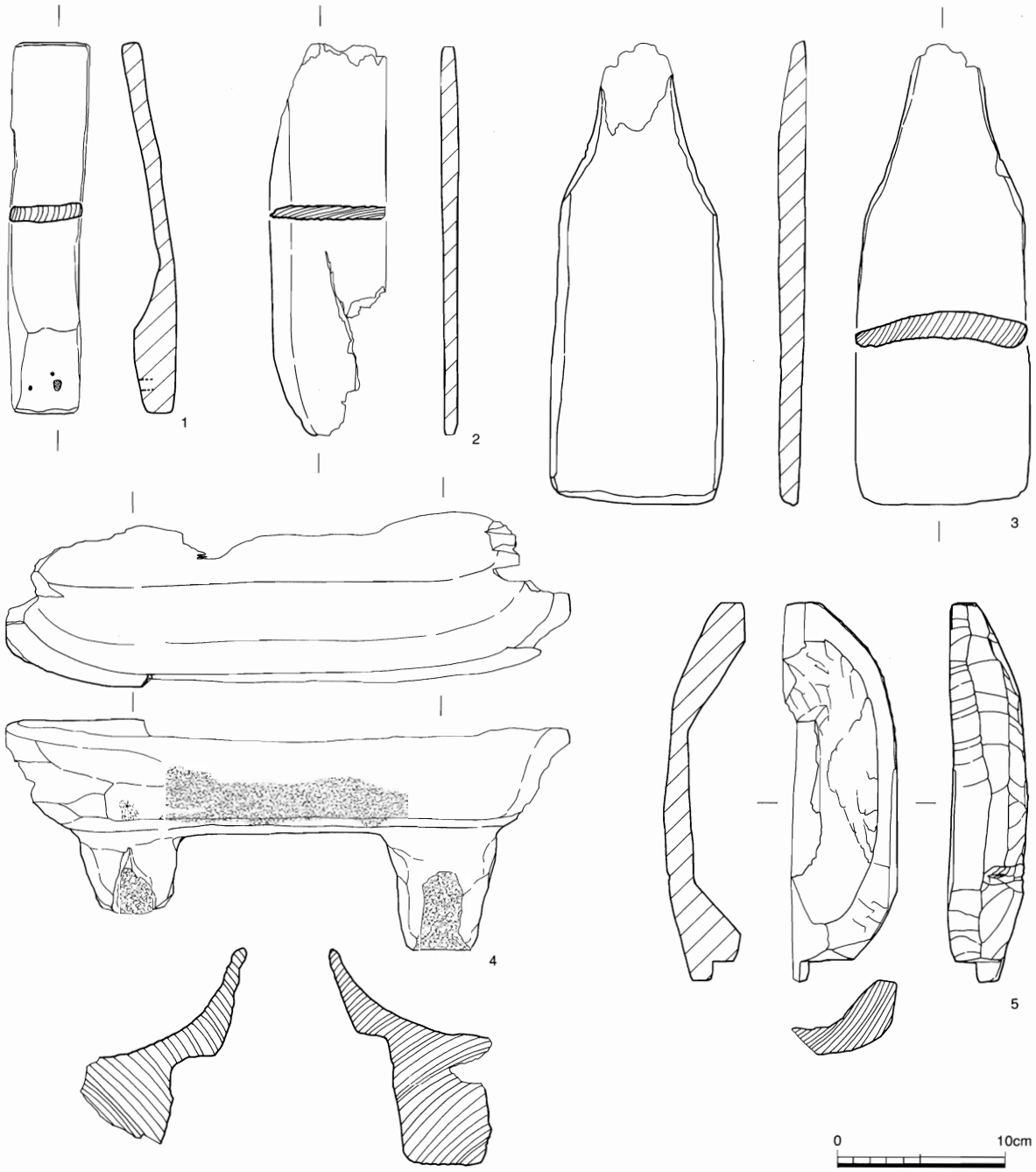


第64図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道２出土遺物実測図（3）（Ｓ＝1／4）

である。

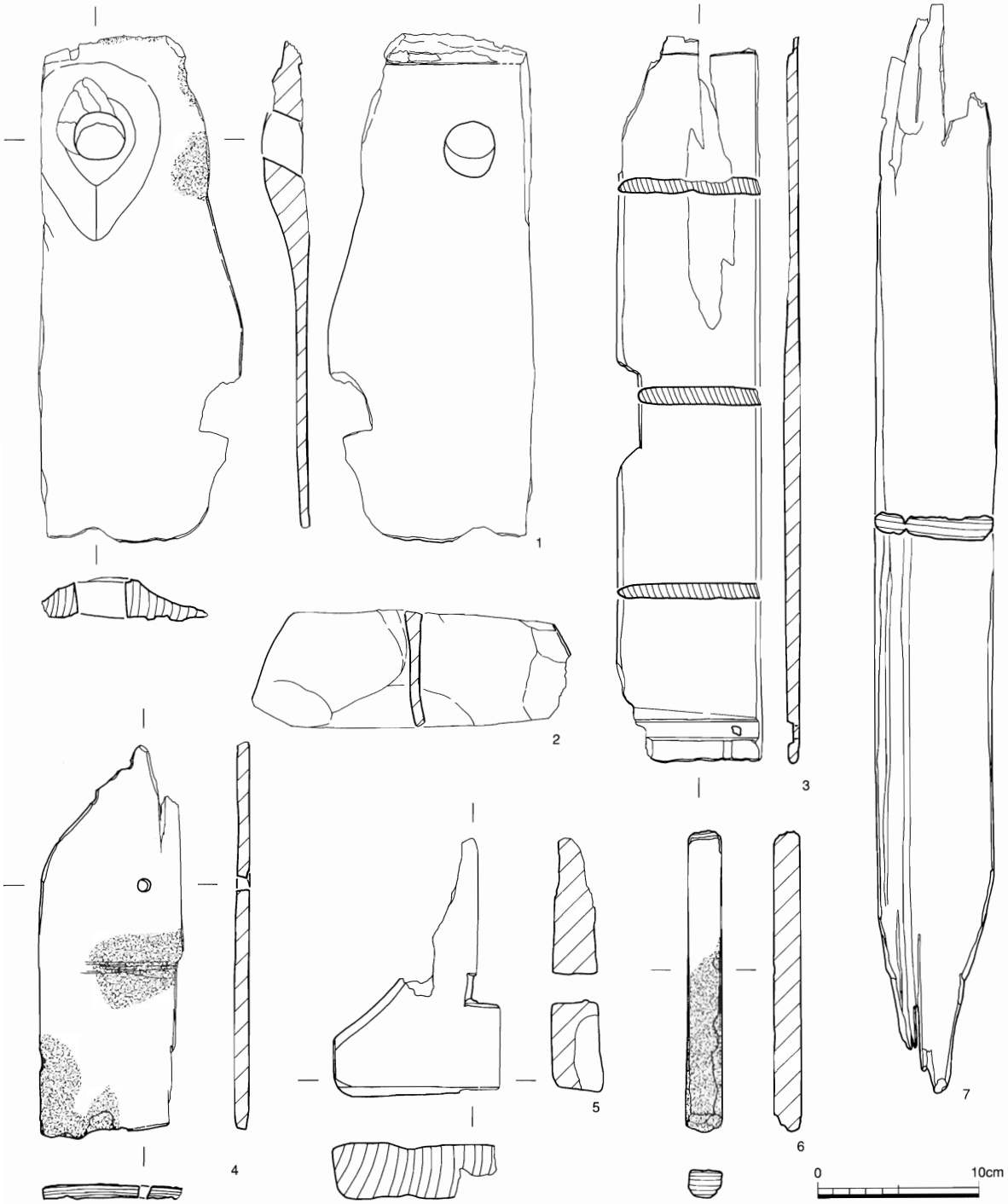
４は貝殻腹縁文で装飾した壺の胴部である。上層から出土した破片（第62図24、25）も同様の特徴を持ち、本来は下層に伴う土器であることがわかる。同様の資料は旧河道１からも出土（第55図15～17）しており、62－25は胴部が算盤玉状の55－17のような壺に、62－24、64－4が55－15、16のような小形の壺または甕に相当すると考えられる。これらは鳥取県の因幡、東伯耆地方に由来する土器で、搬入品の可能性が高い。

木製品（第65、66図　図版57、58）は容器、農具、部材などがある。65－１は刳物の桶で下から押し当てた底板を止める木釘が下部の突帯に残っている。２は楕円形を呈する薄い板で刳物桶の底板と考えられる。３も刳物桶の破片と思われる。４は方形四脚盤である。方形盤の一辺側と２脚が残っている。脚のうち一方は下端を欠損している。盤の外面と２脚の一部が黒く焦げていて（図の



第65図　田中谷遺跡Ｉ区旧河道２出土遺物実測図（4）（S＝1／4）

トーン部分)、脚部でこの焦げ跡と加工痕の先後関係を見ると後者が新しい。特に図の左側の脚では焦げた部分が島状に浮き上がるほどまわりが削り出されている。一方右側の脚は焦げ跡が脚下端面にまでまわっている。火を使って材を加工しやすくしたとすれば、これらの焦げ跡が加工前の芯去りの原材面の名残とも考えられる。5は一方に棒状の柄を作り出した容器で、内外面とも粗い加工痕が残る。縦断面が舟形を呈する点で𥫱(あか)取り状木製品とは異なる。第66図1は直柄の広鍬の身である。後面に舟形隆起をもち、裏面には泥除けを装着するための段が柄孔から約3.5㎝上方につく。前面の上部から柄孔にかけてと、後面の一部に焦げ跡があり、原形をとどめていない。2は柄孔部分と下半がないが泥除の一部と思われる。3は組み合わせ式の箱の側板と考えられる。板の短辺内側に小口板を仕込む溝があり、一方の短辺には外側から木釘を打ち込むための孔がある。側板の上



第66図　田中谷遺跡Ⅰ区旧河道2出土遺物実測図（5）（S＝1／4）

面側の中程は一段下がるように刳り込みが設けられている。4はやや上側に円孔のある板材で、中央に線状の傷が残っている。5は指物腰掛の脚板と思われる。脚板同士を固定する枘孔の一部が残る。6は1方が丸みを帯びた板目の棒状のもので平坦な側が半部焦げている。7は先端を削って尖らせた矢板である。

10. 小　結

以上、Ⅰ区の調査結果を時期別にまとめると表のようになる。まず、旧河道から出土した遺物を見ると、弥生終末から古墳時代初頭を除き、量の多寡はあれ全時期にわたっているので、弥生後期以降継続的に集落が営まれたことがわかる。一方、遺構を時期別に示すと古墳時代の大半が空白となっているが、中期以降は掘立柱建物が主流となるため、十分に確認できていない可能性がある。現にＳＢ01～03、05～07、08の7棟は時期の判別が難しく、古墳時代以降と考えて良いと思われる。谷の出口に位置する田中谷遺跡Ⅴ区（本章第4節）では弥生時代後期の掘立柱建物が数多く確認され、中には1×1間の小規模の建物もあることから、Ⅰ区にも小型の建物が相当数存在した可能性は十分ある。これを確認できなかった原因は、遺構の保存状態もさることながら調査者の力量による部分も大きい。

時代（土器編年）		遺　構	旧河道1	旧河道2
弥生中期				●
弥生後期	草田1期	ＳＩ06		●
	草田2期	ＳＩ04　ＳＤ05,06,14,21	●	●
	草田3期	ＳＤ15,09,12	●	
	草田4期	ＳＩ05	●	
	草田5期	ＳＫ10,05,06　ＳＥ01ＳＤ11	●	
	草田6期			
古墳時代	松山Ⅰ期		●	●
	松山Ⅱ期	ＳＩ01,02	●	
	松山Ⅲ期			●
	松山Ⅳ期・大谷1期		●	●
	大谷2期		●	
	大谷3期		●	
	大谷4期		●	
	大谷5期		●	
	大谷6期		●	
	大谷7期		●	
奈良時代		ＳＢ04　ＳＫ09	●	
平安時代			●	
中世～			●	

表2　田中谷遺跡Ⅰ区遺構・遺物時期別消長

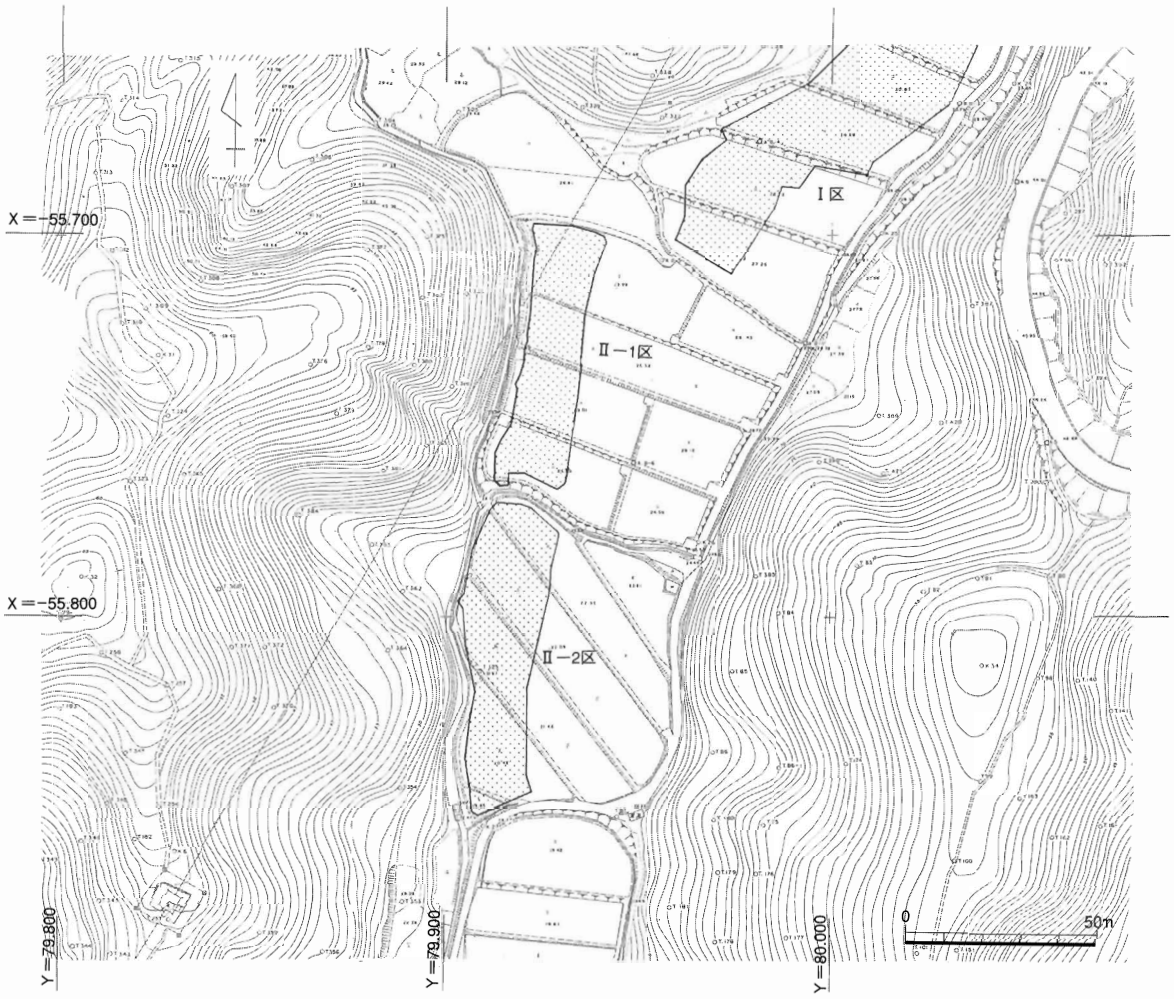
若干の空白期があるにしても弥生時代後期から中世に至るまで連綿と営まれた集落が北山山系の懐に近い狭隘な谷間に確認できたことは、今回の調査の成果といえる。

第２節　Ⅱ区の調査結果

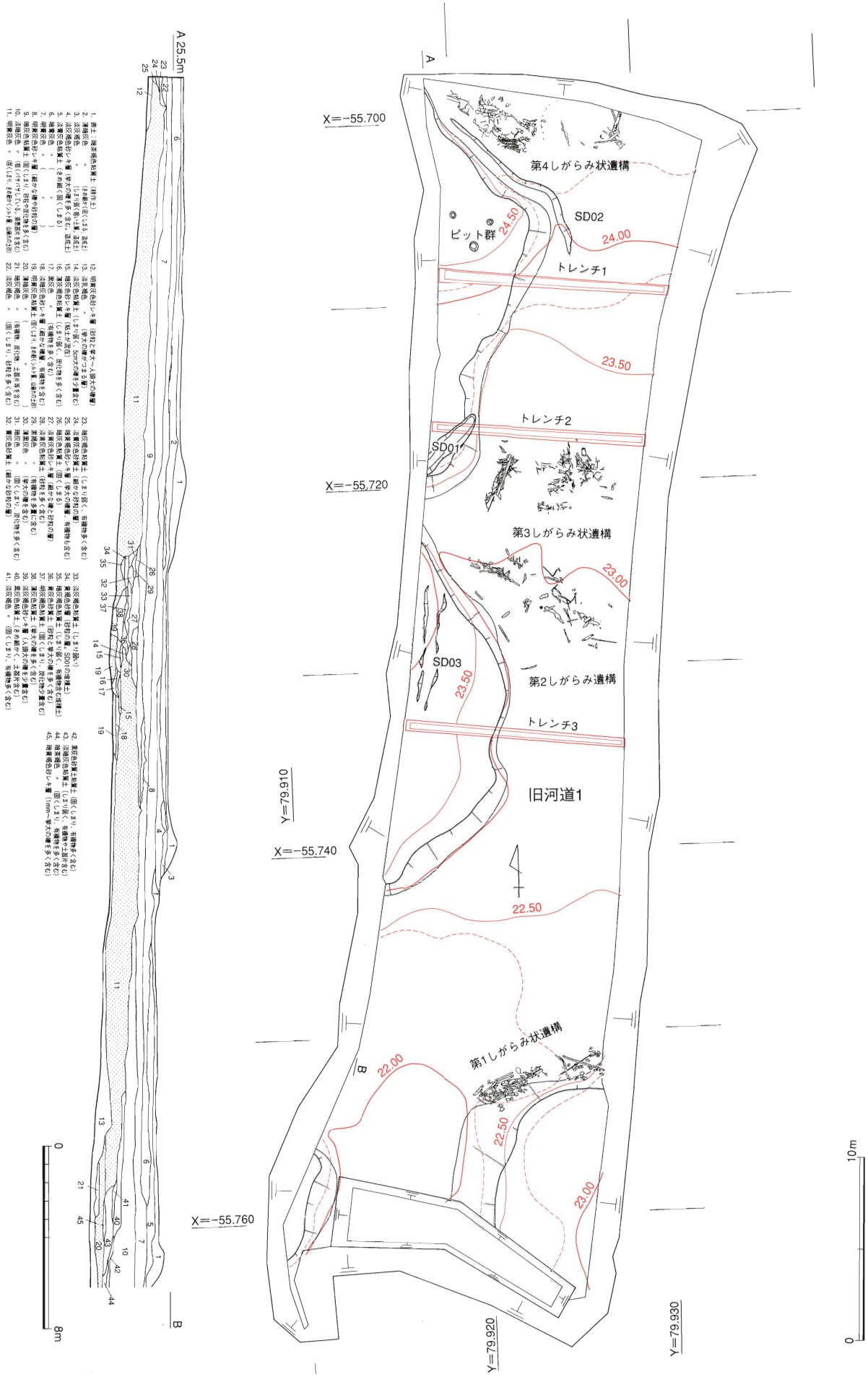
Ⅱ区はⅠ区の南西側に位置している。確認調査の結果、本来は山際に沿って長さ100m以上の調査範囲を設定していたが、現在でも利用されている水路が調査範囲内を横断していたため、その水路を境に北側と南側で調査区を２つに分けている。従って北側を「Ⅱ－１区」、南側を「Ⅱ－２区」と設定した。調査区は、Ⅱ－１、２区合わせて全長およそ150m・幅20mと細長く、面積は2484㎡である。

Ⅰ．Ⅱ－１区の調査

細長い調査区であるが、自然流路として旧河道（旧河道１）が検出されている。また、河道内やその周辺から溝状遺構が３ヶ所（ＳＤ01～03）、ピット群が１ヶ所検出された。以下、順を追って概要を述べる。



第67図　田中谷遺跡Ⅱ区調査区割図（Ｓ＝1／2000）



第68図　田中谷遺跡Ⅱ－１区調査区設定図（平面：Ｓ＝1／300、断面：Ｓ＝1／240）

1．基本層序

Ⅱ－1区は長さおよそ70m、最大幅19mを測り、面積は1099㎡である。遺構最下面までの深さは、最深部でおよそ3.2mを測るが、Ⅰ区と同様に水田層は重機で除去した。従って水田層より下層について所見を述べる。遺物の有無に関わらず、おおよそⅤ層に分類できる。

第Ⅰ層　－青灰色粘質土。きめ細かく、シルト質。若干遺物を含んでいる。第68図の7層。

第Ⅱ層　－黒色粘質土。きめ細かく、有機物や遺物を多く含む。旧河道1の堆積土。

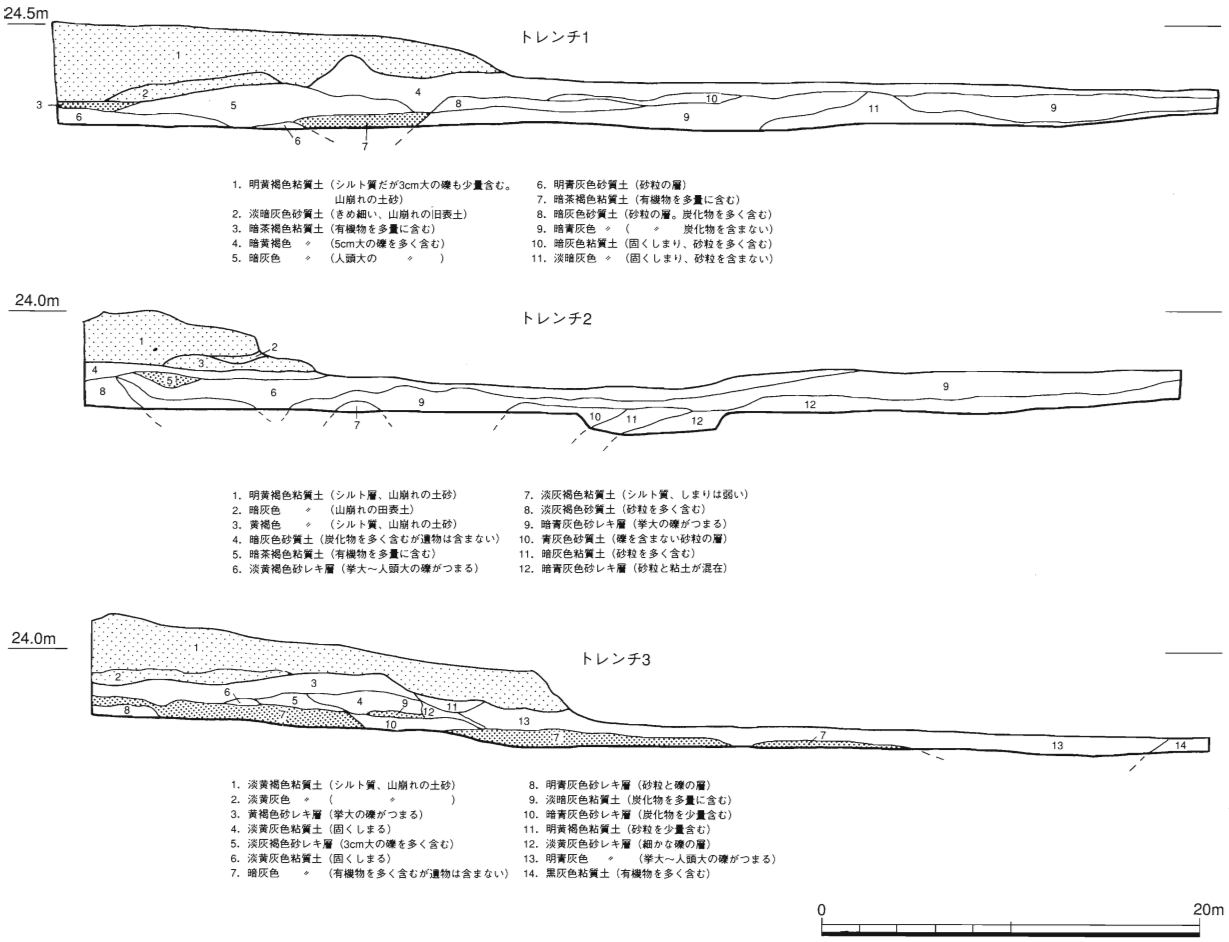
第Ⅲ層　－青灰色砂礫層。砂や有機物が混じり、遺物も多く含んでいる。旧河道1の底面。

第Ⅳ層　－黄灰色粘質土。礫を含むが、おおむねきめ細かくシルト質。遺物は含まれず崖錘堆積物とみられ、3ヶ所のトレンチ調査（第68・69図）で検出した有機物の^{14}C年代測定によりそれぞれ24,610±80、3,110±30、20,970±70BPの年代値が示されている。第68図の11層、第698図の1層に相当。

第Ⅴ層　－青灰色砂礫層。Ⅲ層に類似し砂や有機物が混じるが、礫が総じて大きく遺物も含まない。遺跡の基盤層にあたる。

2．旧河道1

旧河道として、山際に沿って北から南に蛇行しながら貫流する自然流路が1本検出されており、



第69図　田中谷遺跡Ⅱ－1区トレンチ1～3土層断面図（S＝1／100）

旧河道１とした。ただ調査区内では旧河道１の全体が捉えられておらず、調査区南側で両岸が一部検出されているところがあり、それを基にすると河幅はおよそ14mを測る。しかしながら旧河道１の北端部は左右の谷奥部からの流路の合流地点である感があり、その流れは一様ではないとみられる。

旧河道１からはほぼ全面から遺物が出土している（第Ⅱ・Ⅲ層）が、川岸に沿って木製品などの遺物が集中する地点が４ヶ所みられたので、便宜的ではあるが「しがらみ状遺構（第１～４）」と称した。

第Ⅰ層出土遺物（第70図）

数は少ないが多様な遺物があり、流れ込みとみられる。１・２は土師器の壺の口縁である。１は複合口縁を呈し、２は口縁が大きく外反する。３・４は脚付壺の胴部片である。両者とも凹線に平行した連続爪形刺突文がみられ、同一個体の可能性がある。５は低脚坏の脚部である。６は手捏土器である。７は高坏の脚部である。８・９は須恵器であり、８は坏身、９は大甕の頸部である。

これらの遺物の時期は、３・４が草田２期に併行し弥生時代後期中葉、１・５が古墳時代前期、２・７が古墳時代中期、８・９が古墳時代後期とみられる。

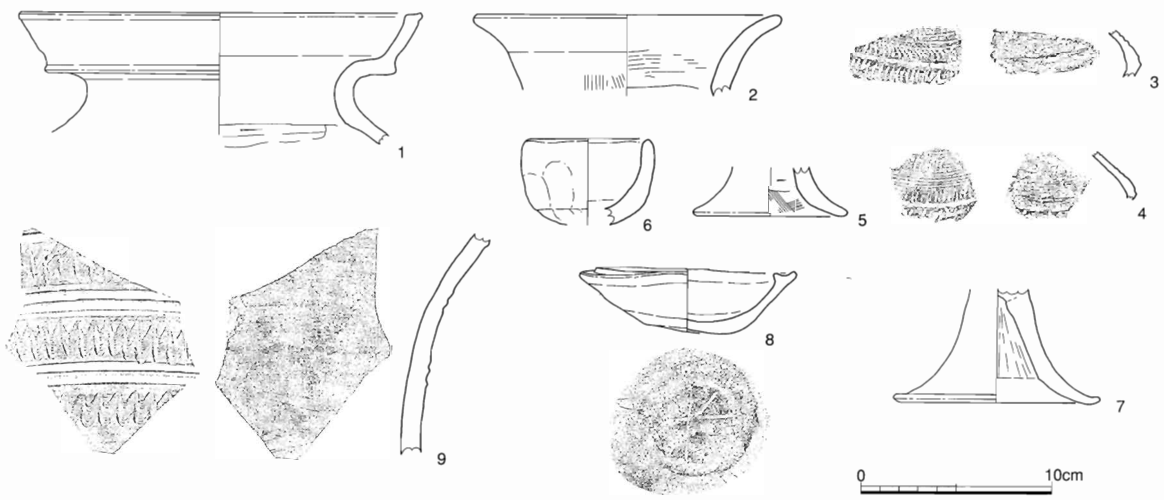
第Ⅱ層出土遺物（第71・72・73図）

第Ⅱ層は旧河道の堆積土である。遺物が最も多く出土しているが、掲載品は河道の時期幅や遺物組成が最低限わかる程度にとどめている。

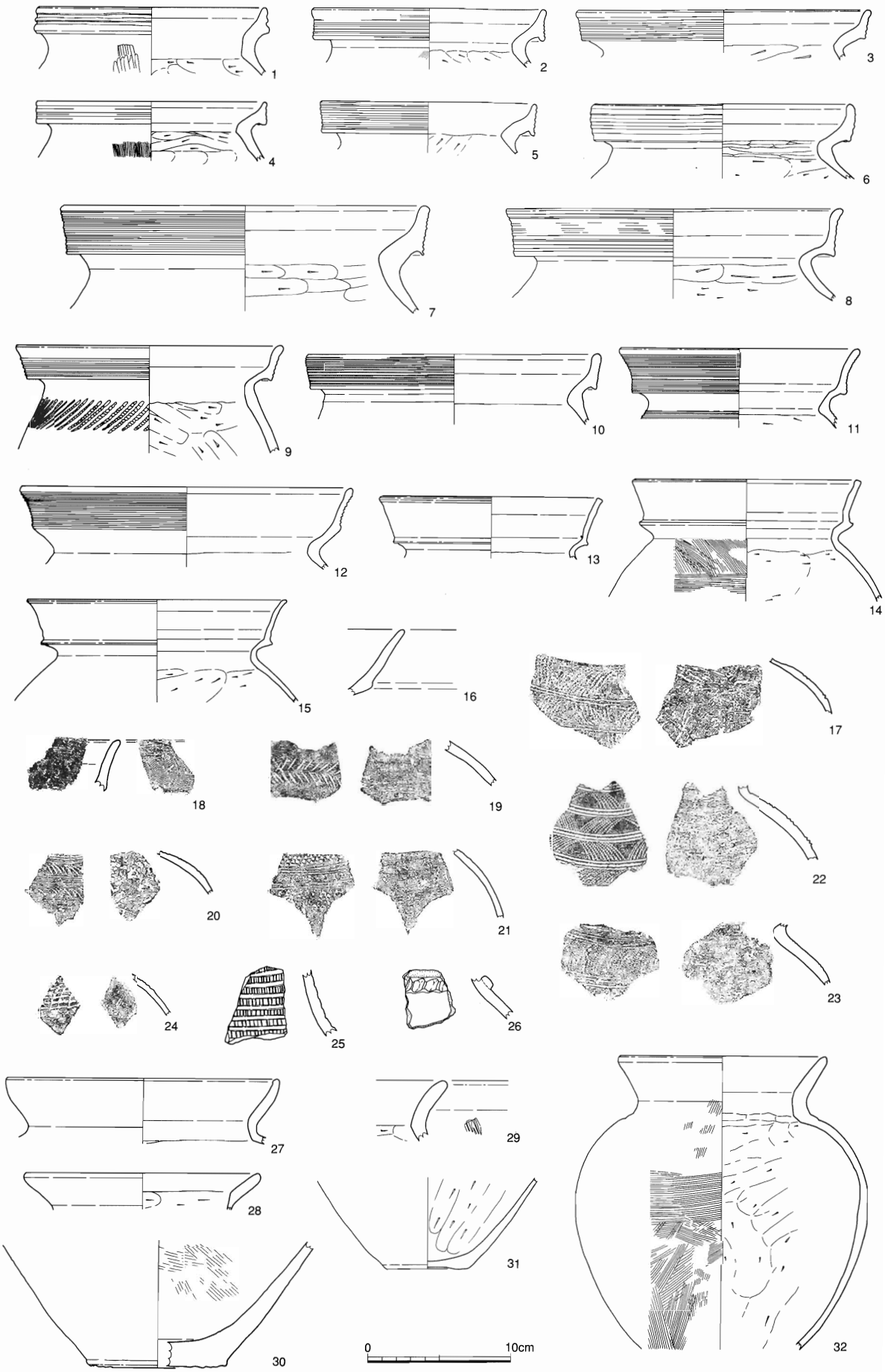
第71図は壺・甕類である。１～16・18は複合口縁を呈する口縁部であり、１・４・６には凹線、２・３・５・７～12には平行短線文が施されている。16は小片であるが、高坏かもしれない。18は波状文が施されている。

17・19～26は肩部から頸部にかけての破片である。17・19～24には貝殻腹縁や板状工具による列点文や羽状文などが施されている。25の頸部片にはタテ方向のハケメの後、板状工具による平行沈線が描かれており吉備系の土器とみられる。26の頸部片には指頭圧痕突帯が施されている。

27～29・32は単純口縁の甕である。27は口縁が内傾して立ち上がり、口唇部内面に段をもつ。30・31はいずれも平底の底部である。これらの遺物の時期は、26が弥生時代中期後葉、１・４が草田１期、２・３・５～10が草田２期、11・12が草田３期、13～15・27が古墳時代前期、28・29・32が



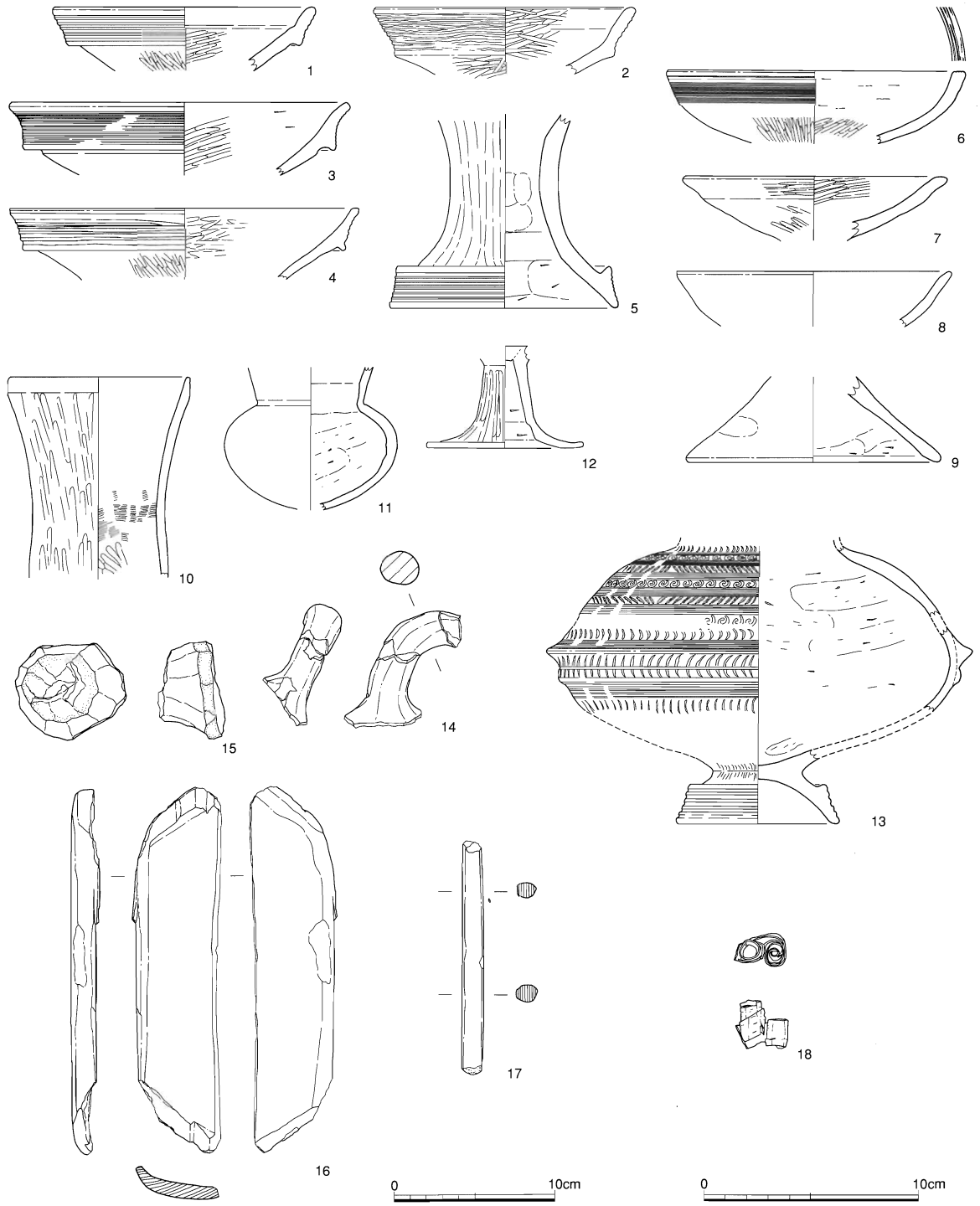
第70図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第Ⅰ層出土遺物実測図（S＝1／4）



第71図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第Ⅱ層出土遺物実測図（1）（S＝1／4）

古墳時代中期以降とみられる。30の底部は内面がハケ目調整で器壁が厚く、大粒の砂粒も多く含んでおり、少なくとも時期は弥生時代中期以前に遡るとみられる。

第72図１～３・６～９・12は高坏である。１は内外面に赤色顔料が塗布されている。６は口縁が内湾気味に立ち上がり、外面と端部に平行短線が施され、内面には赤紫色の顔料が塗布されている。９・12は脚部である。４・５は鼓形器台である。５は内外面に赤色顔料が塗布されている。10は長頸壺の口縁であり、外面は丁寧に磨きが施されている。11は小型丸底壺である。13は脚付装飾壺の胴部２点、脚部１点の破片を図上で復元したものである。従って脚部と胴部が同一個体であるかは定かではない。算盤状を呈する胴部には突帯が張り付けられ、外面のほぼ全面に秀麗な文様が刻ま



第72図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第Ⅱ層出土遺物実測図（2）（１～12･14～17：S＝1／4、13･18：S＝１／3）

れる。各文様は沈線で区画され、ヘラ状工具による爪形文や渦巻き状のスタンプ文、貝殻腹縁による刺突文が施されている。脚部には平行短線が施されている。14は甕形土器の把手である。15は土師器の甑の把手である。これらの遺物の時期は、1～7・10・13・14が草田2～3期、8・9・11が古墳時代前期、12が古墳時代中期、15が古墳時代後期以降とみられる。

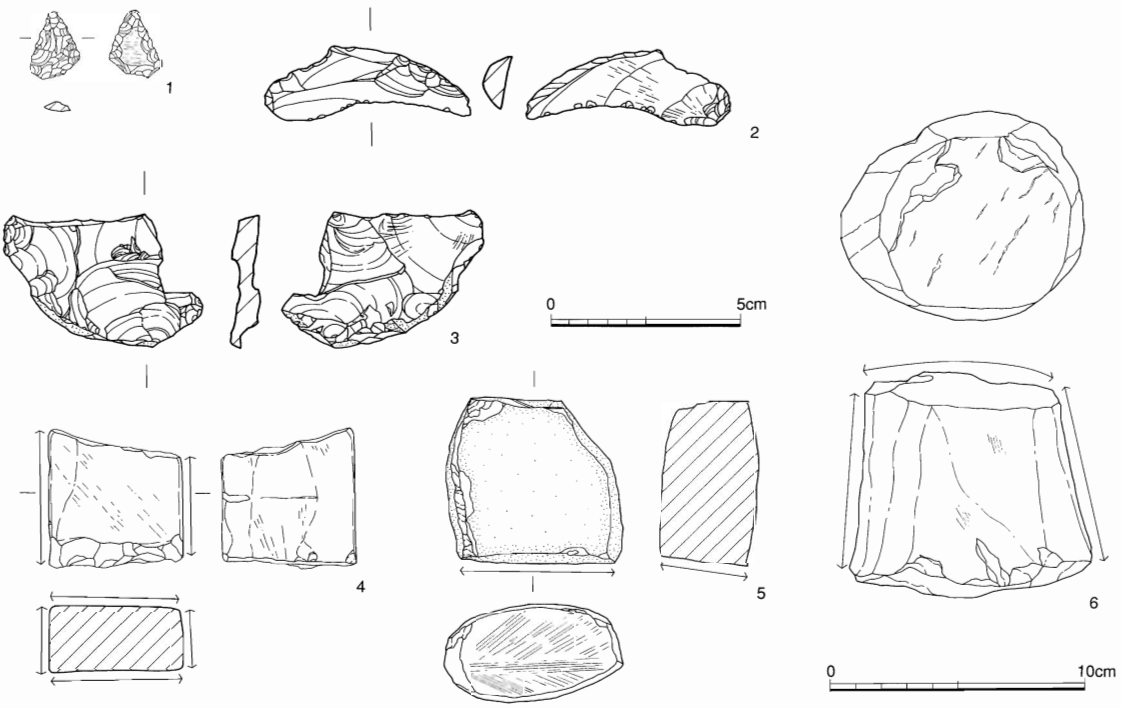
16～18は木製品である。16は側部が損失しており全体が明らかでないが、平面形が多角形を呈する容器片とみられる。樹種はスギである。17は断面がやや方形の棒状製品だが、先端が焦げており火きり杵とみられる。樹種はスギである。18はサクラ（またはカバ）の樹皮を双子状に丸めたものである。これらの木製品の時期であるが、出土土器は弥生後期中葉～後葉のものが最も多いので、木製品もおおむねこの時期に伴うものと推測される。

第73図は石器である。1は黒曜石製の石鏃である。2は黒曜石製の剥片であるが、一部2次加工が認められるものである。3は全面に剥離面がみられ、黒曜石製の石核の残片とみられる。4～6は石灰岩製の砥石類である。4は断面長方形を呈し、その4面に研磨痕がみられる。6は上面と側面が砥面であり、側面は研磨されて角柱状を呈する。

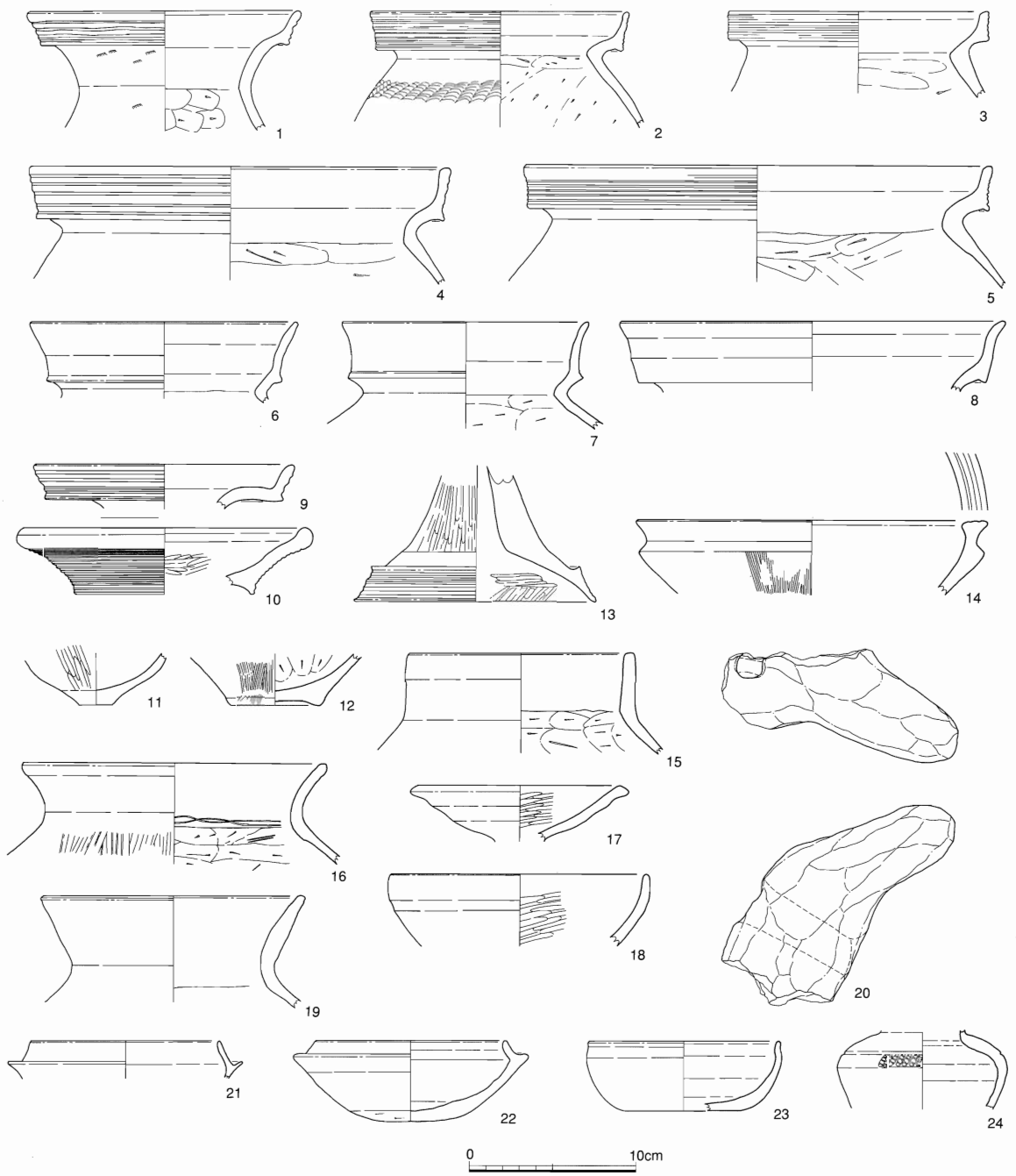
第Ⅲ層出土遺物（第74・75・76図）

第Ⅲ層は河道の底面とみられる砂礫層である。第Ⅱ層と同様に多種多様の遺物を含んでいるが、図面は必要最低限を掲載した。第Ⅱ層に比べると数量は少ない。

第74図は土器・土製品類である。1～8は複合口縁を呈する壺・甕類の口縁部である。1は壺で、凹線文が施されている。2～5は甕である。2・4・5は平行短線文、3は凹線文が施されている。2は肩部に波状文が施される。6～8は口縁が外反し、無文のものである。先端部はいずれも丸くおさめられており、7・8は口縁が口唇部にかけて引き伸ばされたように屈曲気味である。1～5は草田2期、6～8は後期末のものとみられる。9・10は器台である。9は筒部がほぼ垂直にのび、



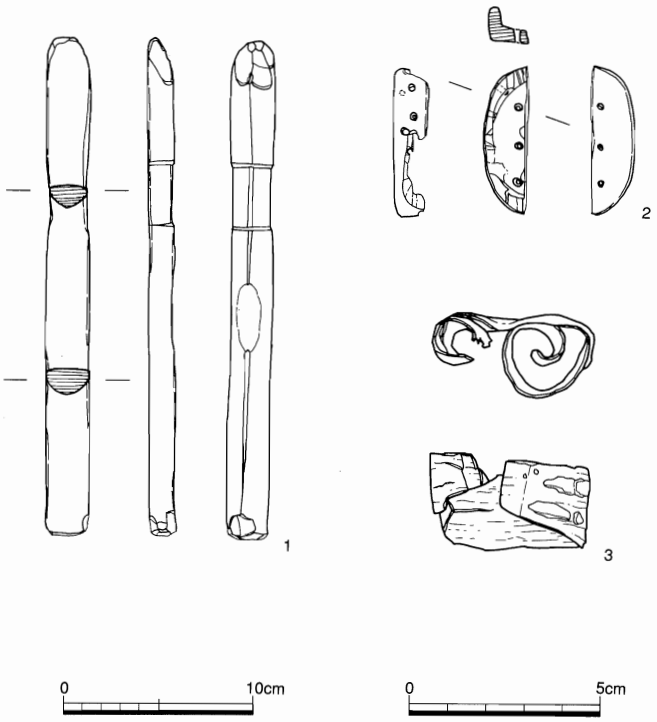
第73図　田中谷遺跡Ⅱ－1区第Ⅱ層出土遺物実測図（3）（1～3：S＝1／2、4～6：S＝1／3）



第74図　田中谷遺跡Ⅱ－1区第Ⅲ層出土遺物実測図（1）（S＝1／4）

脚部が裾広がりになるタイプであろう。10は鼓形器台である。いずれも草田2期の相当するとみられる。11・12は壺・甕類の底部である。11は小型の甕の底部とみられ、外面には丁寧なミガキが施されている。13・14は高坏である。13は高坏の脚部とみられ、端部が複合口縁を呈し平行短線が施される。14は口縁が内湾気味に立ち上がり端部が屈曲する。端部は拡張して平坦面をもち、2条の凹線が施される。13は草田2期、14は草田1期、松本Ⅴ－1期に並行するものとみられる。15は短頸壺ある。17は低脚坏である。端部が屈曲し草田3期並行とみられる。16・19は土師器の甕である。口縁が「く」の字外反し、いずれも古墳時代中期のものとみられる。18は坏である。内外面とも赤色顔料が塗布されている。古墳時代後期のものであろう。20は土製支脚である。側面の穿孔が貫通している。

21～24は須恵器であるが、全体からみて出土数はわずかである。21～23は坏身であり、21・22は

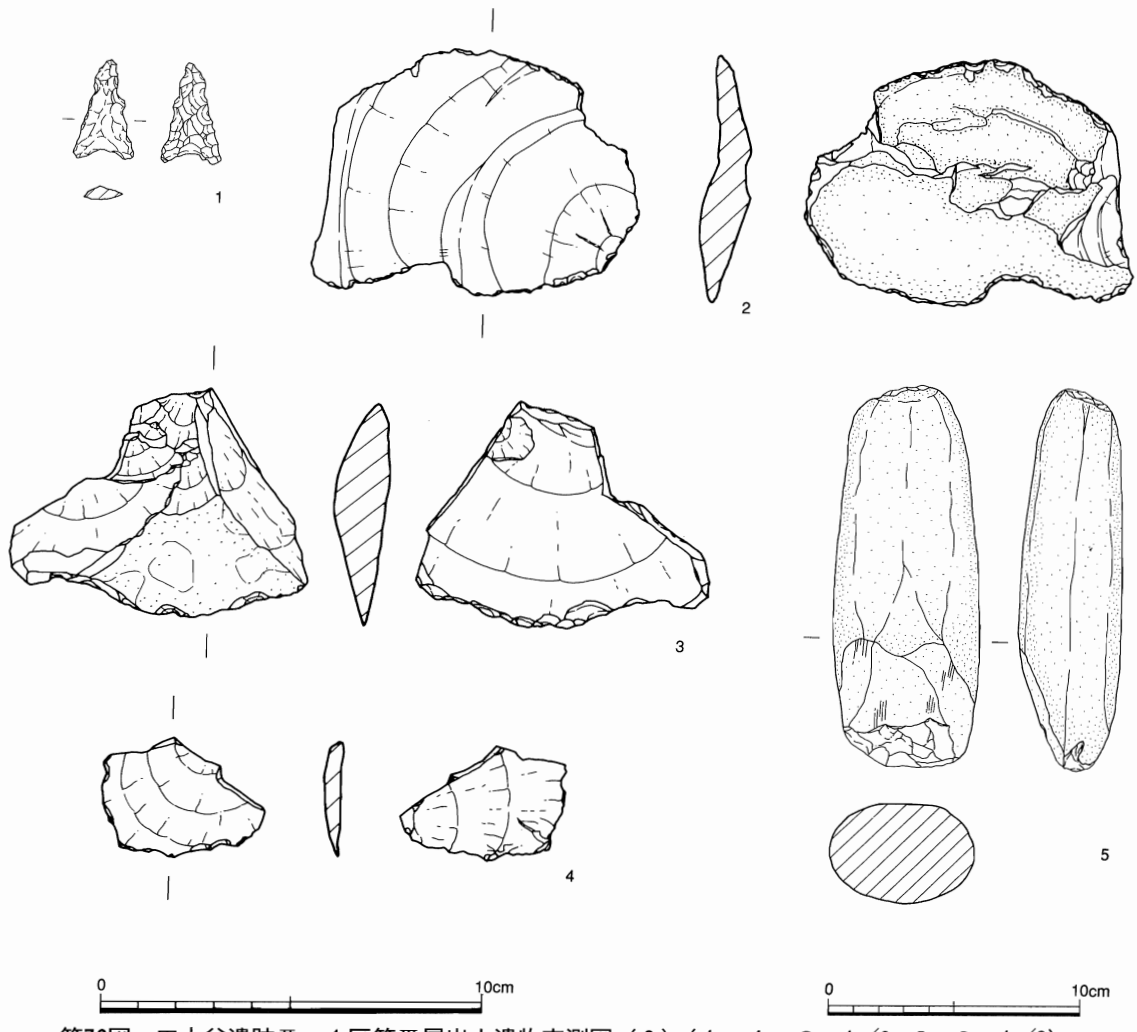


第75図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第Ⅲ層出土遺物実測図（２）
（1・2：S＝1／4、３：S＝1／2）

７世紀代、23は底部に回転糸切り痕が残る。８世紀代とみられる。24は碗である。

第75図は木製品である。１は用途不明品である。表面はほぼ平坦であるが、弧状に整形された裏面は途中部が細く整形され、先端部もヘラ先状に加工されている。樹種はスギである。２は本来は平面形が円形を呈していた容器類の蓋と考えられる。側面と表面に等間隔の貫通孔がみられるが、紐掛けであろうか。樹種はスギである。３は第72図18と同様の丸められた桜皮である。規格もほぼ同様である。

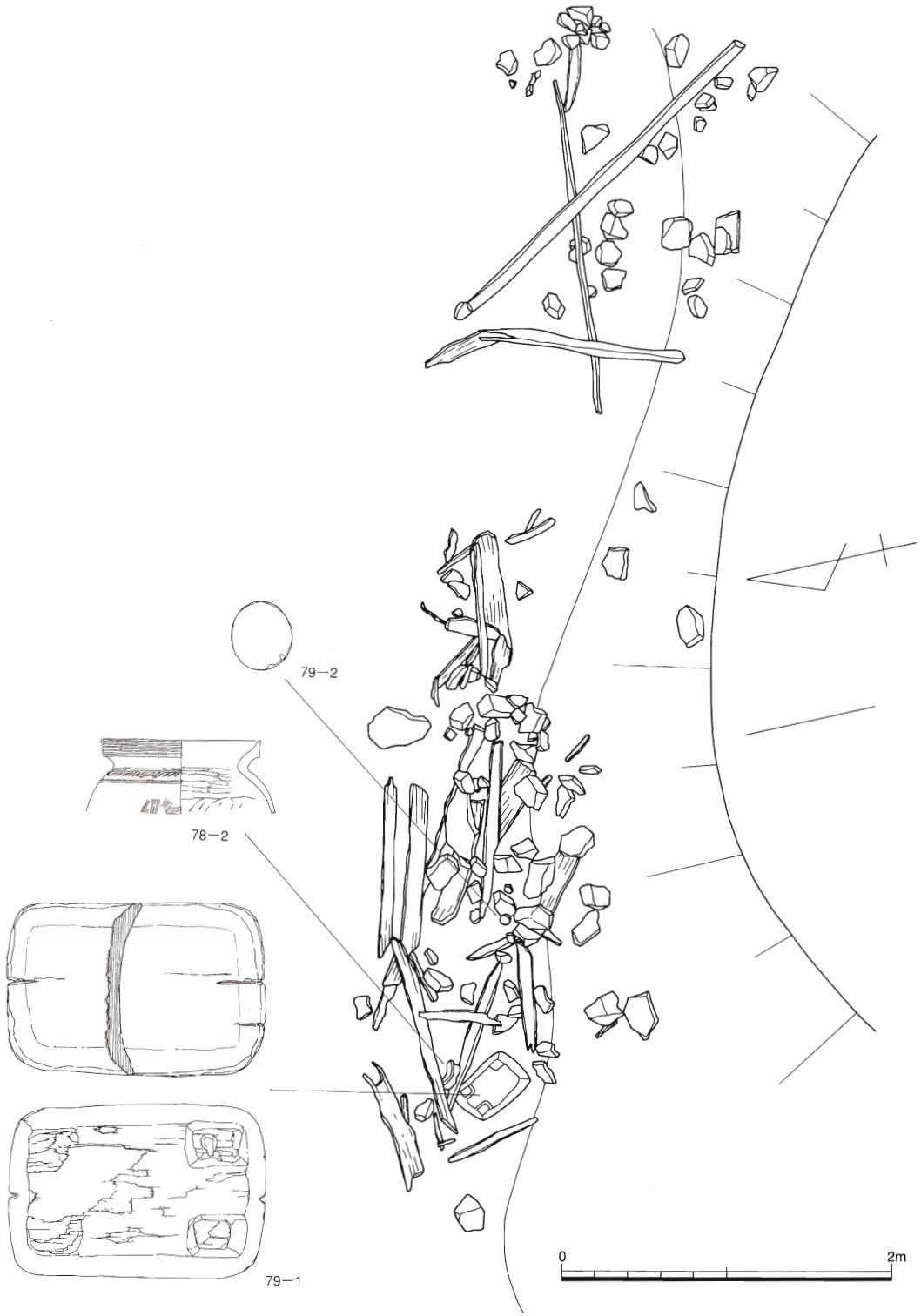
第76図は石器類である。１はサヌカイト製の石鏃である。２・３は２次加



第76図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第Ⅲ層出土遺物実測図（３）（１～４：S＝1／2、5：S＝1／3）

工が認められ、スクレイパーとみられる。2は黒曜石、3は石材不明である。4も2次加工が認められるが、刃部ほどには至っていない。サヌカイト製である。5はその形態から磨製石斧の未成品とも見受けられるが、先端部表裏面に刃部を作り出す痕跡が認められないので、乳棒状の敲打器と考えられる。

さて、第Ⅱ・Ⅲ層の遺物は河道内出土ということもあり、古くは弥生時代中期から古墳時代後期まで多時期に渡っており、層位的に比較しても差異はあまり感じられない。しかしながら出土遺物



第77図　田中谷遺跡Ⅱ－1区第1しがらみ状遺構実測図（S＝1／40）

は弥生時代後期のものが圧倒的に多く、特に草田２期並行など（松本編年Ⅴ－２）後期でも中葉ものが目立つといえる。

第１しがらみ状遺構（第77図）

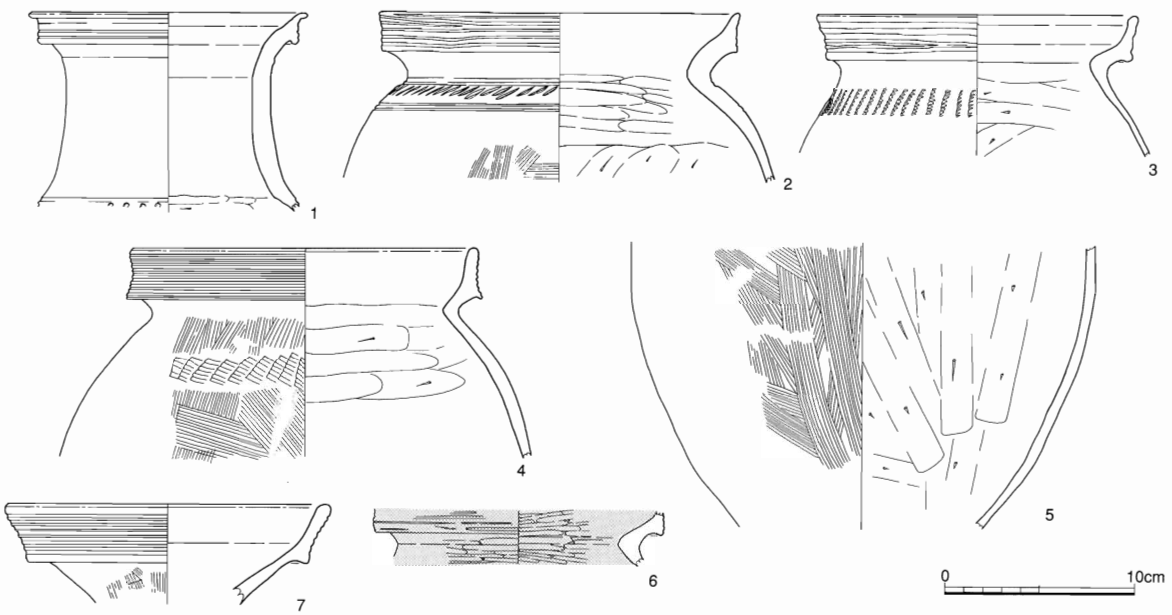
第１しがらみ状遺構は調査区南端部の東壁付近、ちょうど河道の川岸に沿ったかたちで検出されている。土器や木製品、自然流木の他、人頭大の礫も多数検出されたので、当初は護岸施設とも見受けられた。しかしながら、礫は河道底面からは浮いており、さらに南下してきた流路が西方に流れを変える場所の川岸でもあるので、むしろ流出してきたものが川岸に引っかかって堆積したと考えるのが自然であろう。

出土遺物（第78・79図）

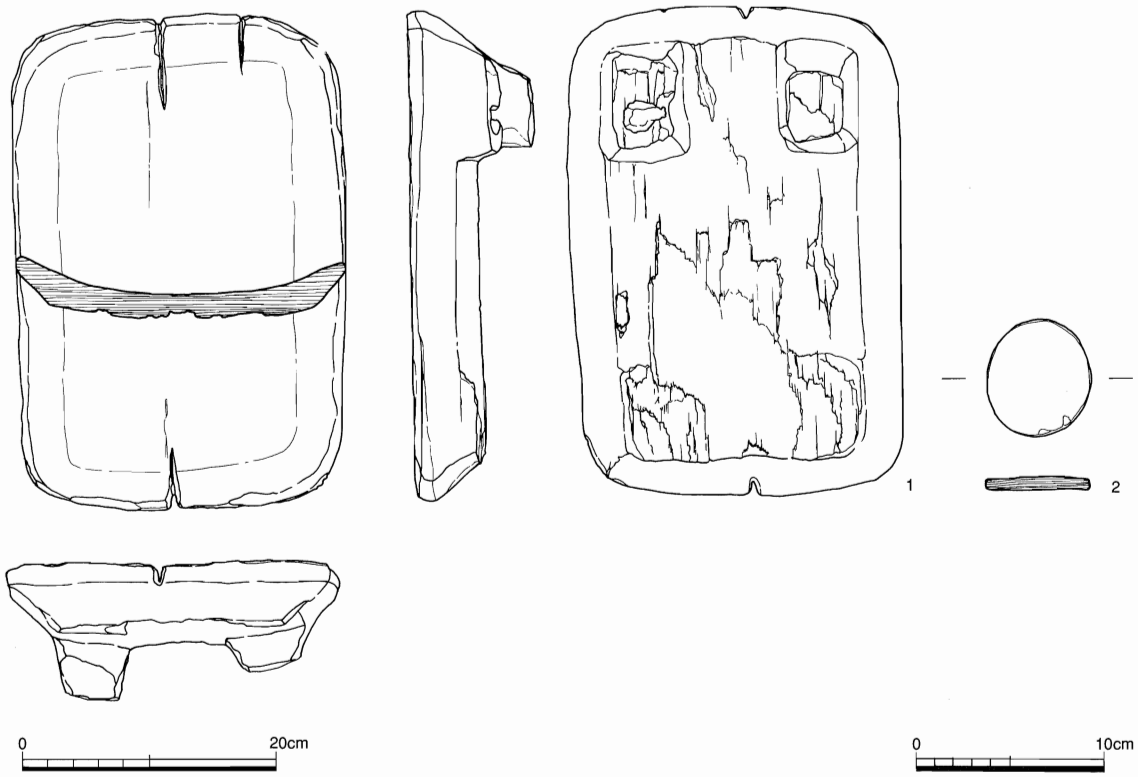
第78図は土器である。１は頸部の長い壺である。複合口縁を呈し、３条の凹線が施される。先端部はつまみ出されたように屈曲し、肩部には板状工具による列点状の刺突文が施されている。２～４は複合口縁を呈する甕の口縁部である。凹線（２・３）や平行短線文（４）が施され、肩部にはいずれも板状工具による刺突文が施される。５は甕の胴部である。外面にタテ方向のきめ細かいハケメが施される。６は口唇部を欠くが、複合口縁を呈する小型の甕である。内外面とも丁寧にミガキが施され、赤色顔料が塗布されている。７は鼓形器台である。７条の平行短線文が施されている。これらの土器の時期は、いずれも草田２期の範疇におさまるものとみられる。

第79図は木製品である。何らかの部材と思われるような木片も多数検出されているがそれらは省き、ここでは加工痕が明瞭なものを図化している。

１は方形の四脚盤である。方形を呈する脚部を２ヶ所欠くが、ほぼ完全な状態で検出されている。縁の短辺中央付近に抉りのような切り込みが３ヶ所みられる。長さ38.9㎝、幅25.8㎝、高さ9.8㎝を測り、樹種はスギである。２は楕円形を呈する小型の円盤である。径６㎝ほどで、用途は不明である。樹種はスギである。



第78図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第１しがらみ状遺構出土遺物実測図（１）（S＝1／4）



第79図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第１しがらみ状遺構出土遺物実測図（2）（1：S＝1／6、2：S＝1／4）

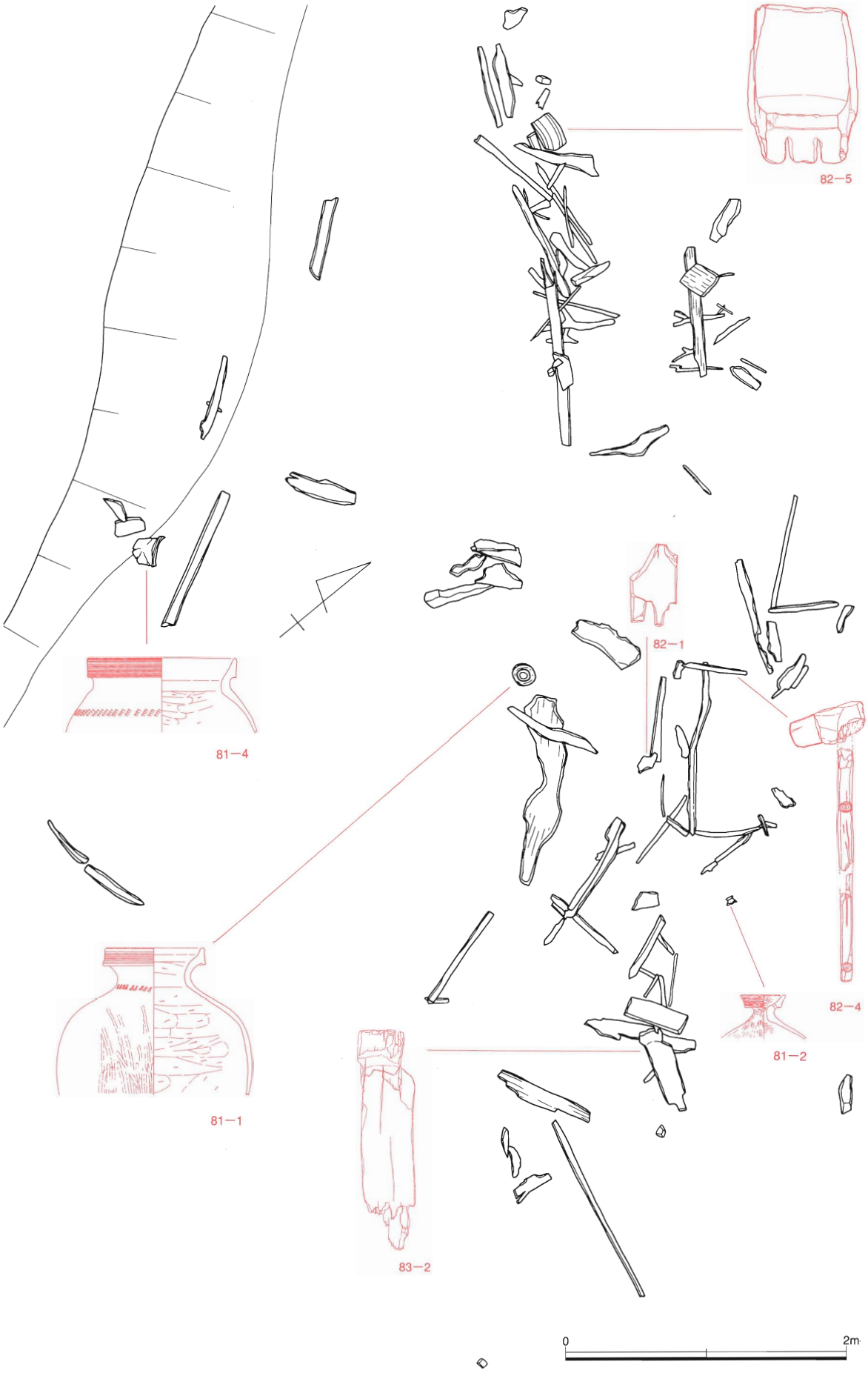
第２しがらみ状遺構（第80図）

調査区のほぼ中央付近で散出気味ながら遺物の集中地点が検出されたので、第２しがらみ状遺構と名付けた。第１しがらみ状遺構と同様、流出してきたものが川岸にかかり、そのまま堆積したのであろう。検出されたものの大半は自然流木とみられる。

出土遺物（第81・82・83図）

第81図は土器類である。１は壺である。肩部が大きく張り、複合口縁を呈し外面に平行短線文、頸部に板状工具による刺突文、胴部にはタテ方向のミガキが施されている。２は複合口縁を呈する蓋とみられる。口縁外面には平行短線文が施され、内外面とも丁寧にミガキが施されている。また口縁下方にはタテ方向に穿孔がみられる。３は甕形土器の把手である。４・５・７は甕である。器壁の厚い４に対し、５は薄く、口唇部が屈曲する。いずれも平行短線文が施され、４は肩部に板状工具による刺突文がみられる。７は無文で、口唇部が若干屈曲している。６は器台であろう。口縁には平行短線文が施され、頸部外面はミガキ、内面にはハケメが施されている。これらの時期は７を除いておおむね草田２期に相当するとみられる。

第82・83図は木製品である。第82図１は基部や先端部を欠くが、三又の鋤とみられる。樹種はアカガシである。２は上下端部を欠き用途も不明瞭であるが、現状で長さ66cmを測る柄状の棒製品である。断面楕円形であるが、先端部は滑らかな凹型に加工されている。樹種はシイである。３は鎌の柄である。ほぼ完形に見受けられるが、頭部に剥離面があり本来は突起が着くと思われる。[1)] 長さは現状で34cmを測る。装着孔は長さ4.7cmを測り、鎌の角度が若干基部側に向くよう、鋭角的に作られている。樹種はアカガシである。４は斧柄である。タテ斧用で、斧台の先端は鉄斧を装着させるため段差が作り出されている。断面やや扁平な柄部と斧台部は接合できなかったが、剥離面の観察から斧の装着角度は鋭角的であったと復元できる。樹種はサカキである。５は刳物桶である。

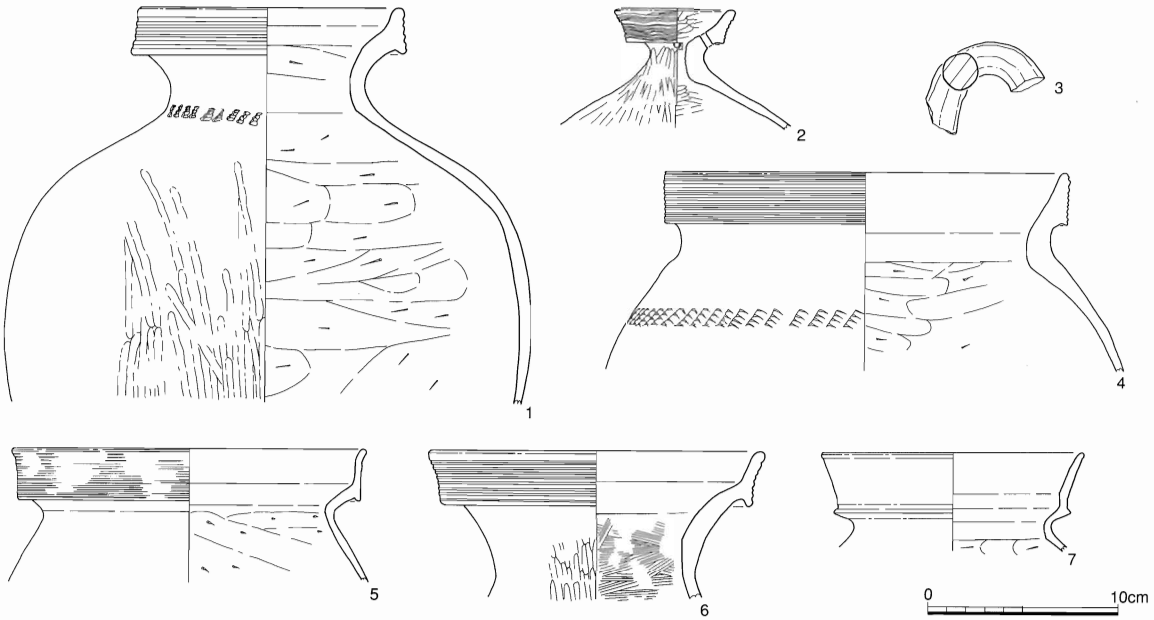


第80図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第２しがらみ状遺構実測図（S＝1／40）

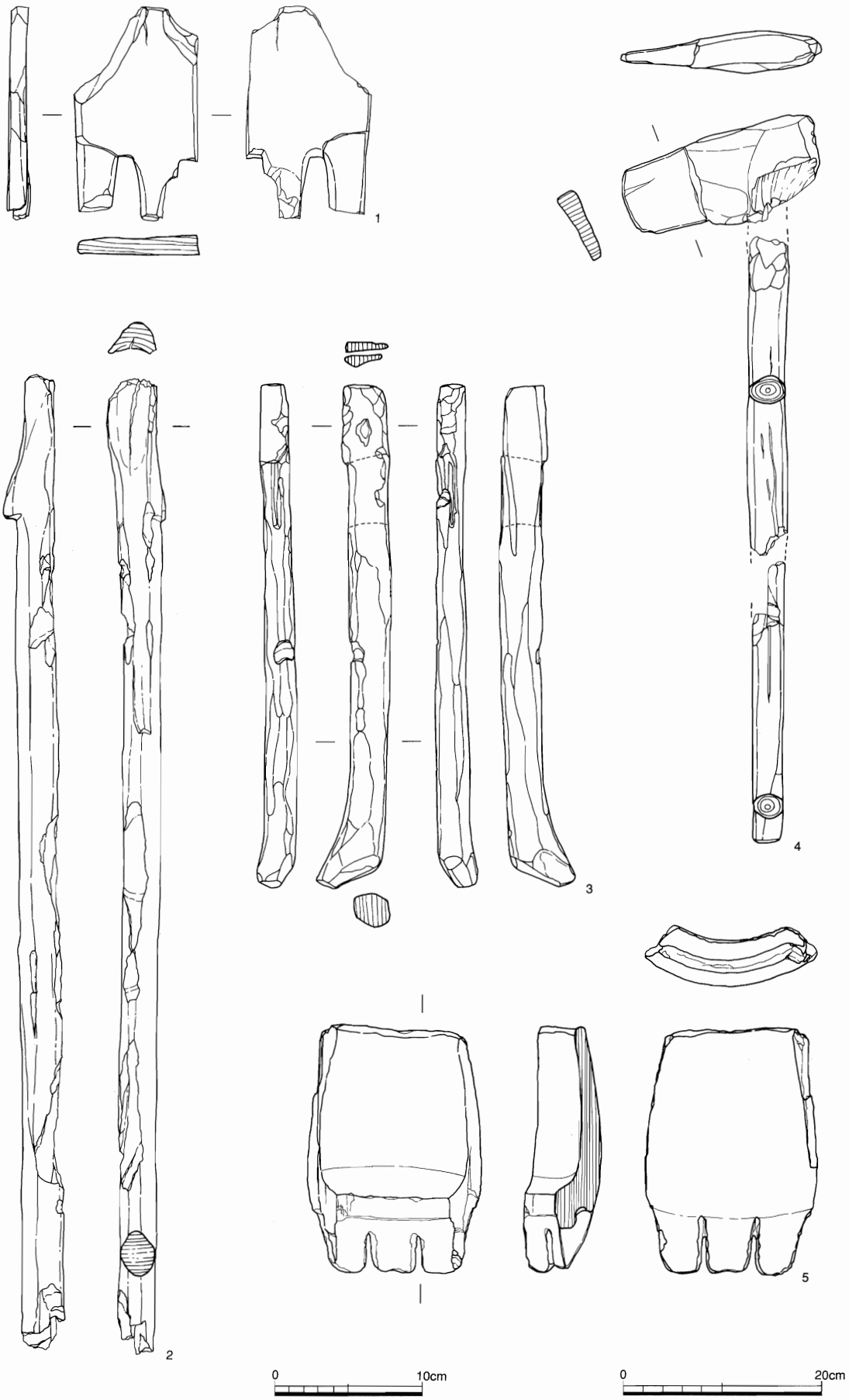
底部から丸みを帯びて立ち上がり、口縁が窄まる形状を呈する。外面には把手が着く痕跡がみられ、底部に木釘の痕跡は認められないが、等間隔で切り込みが入れられている。樹種はスギである。

第83図は比較的大型の木製品である。1は杭である。径7㎝・長さ84㎝を測るが、先端部から半分くらいはかなり焼け焦げている。基部には縄掛け用とみられる抉りが彫り込まれている。樹種はモミである。2は槽とみられ、かなり肉厚なつくりの大型品である。樹種はスギである。3は先端部を欠き用途不明瞭であるが、現状で長さ93㎝を測る棒製品である。断面は楕円形を呈するが、側面は真っ直ぐに、上下面は弧状に加工されている。樹種はスギである。

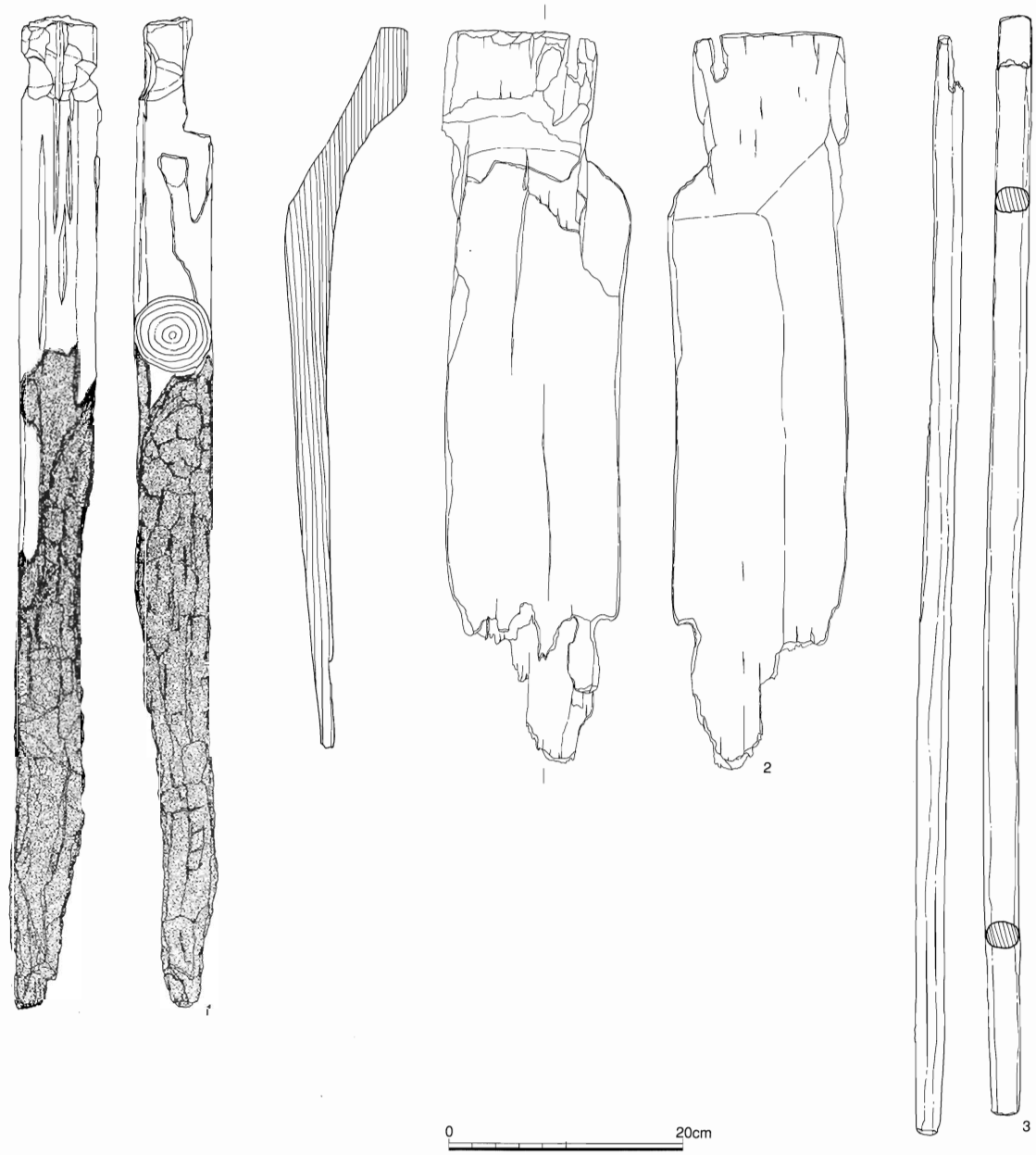
これらの木製品の時期であるが、同遺構内から検出された土器の大半が草田2期に相当することから、木製品もその時期に比定されると考えられよう。



第81図　田中谷遺跡Ⅱ－1区第2しがらみ状遺構出土遺物実測図（1）（S＝1／4）



第82図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第２しがらみ状遺構出土遺物実測図（2）（１～４：S＝1／4、5：S＝1／6）



第83図　田中谷遺跡Ⅱ－1区第2しがらみ状遺構出土遺物実測図（3）（S＝1／6）

第3しがらみ状遺構（第84図）

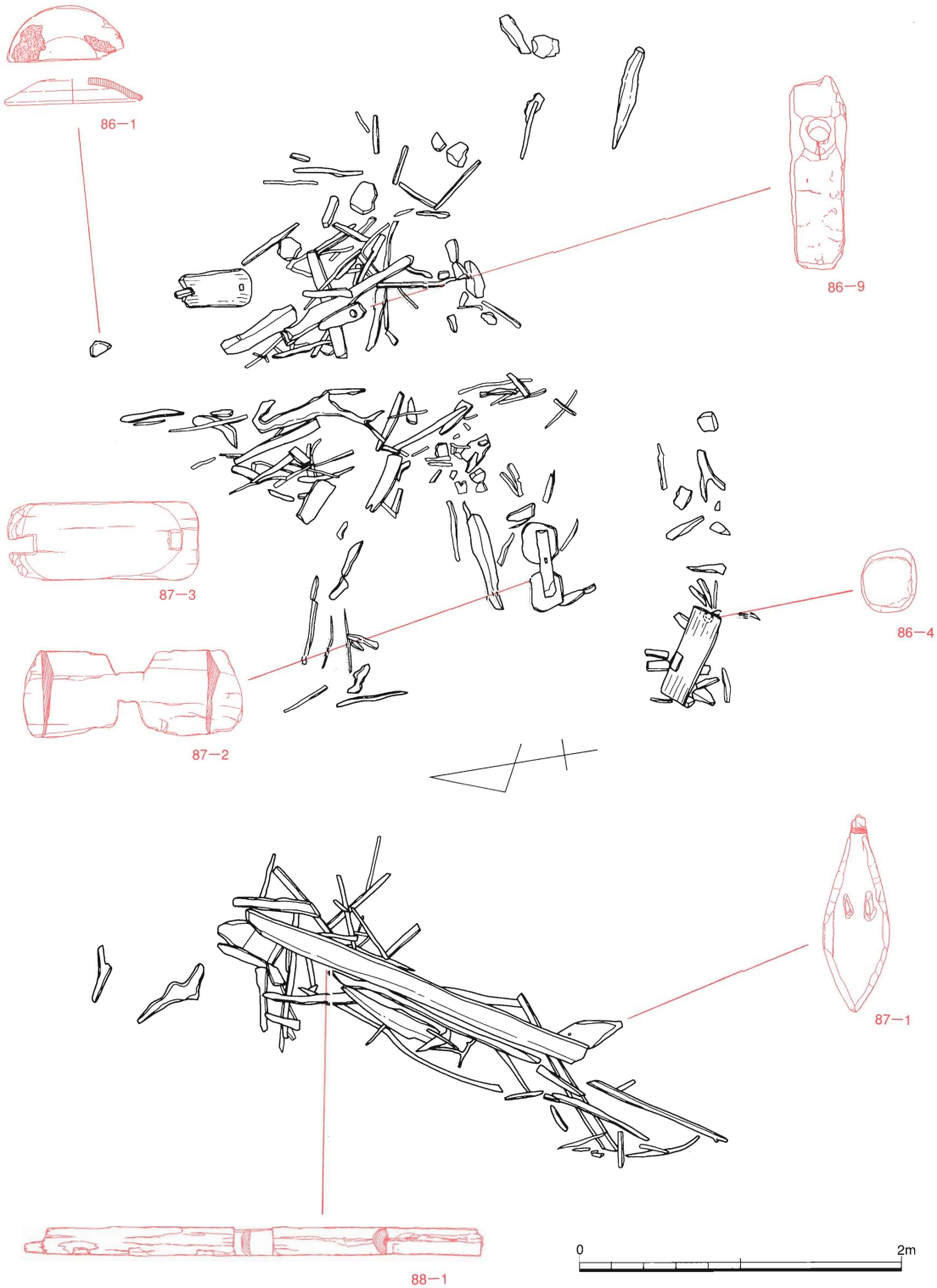
第2しがらみ状遺構のすぐ北側で検出された。多くは自然流木とみられるが、混じって木製品も多数検出されている。その検出状況から他のしがらみ状遺構と同様に、流木などが川岸に集まって堆積したものとみられる。

出土遺物（第85・86・87・88図）

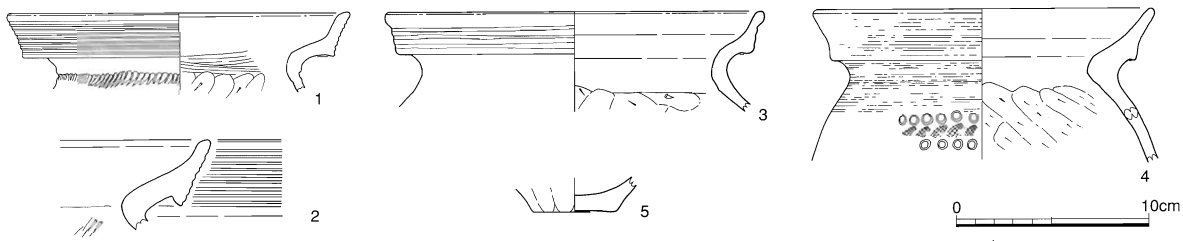
第85図は土器である。1～4は複合口縁を呈する甕である。1は口縁外面に平行短線文が施され、頸部には板状工具による刺突がみられる。2は小片であるが器壁は肉厚である。平行短線文が施される。3は3条の凹線が施され、口唇部がやや外反する。4は同一個体とみられる胴部片を図上復元したものである。口縁外面にはごく浅い平行短線文が施されているが、頸部から肩部にかけてはヨコナデが顕著である。胴部には竹管文と貝殻を押しつけた文様が施されている。5は甕の底部である。径はおよそ4.5cmを測る。

これらの時期は、いずれも草田２期に相当するとみられる。

第86図は比較的小型の木製品である。１は椀など容器類の蓋とみられる。口縁の内面を加工して受部を作り出している。外面には赤色顔料が塗布されている。樹種はスギである。２は高さ14㎝と比較的小型の刳物桶である。樹種はスギである。３は用途不明のスリコギ状を呈する、長さ11㎝の小型の棒製品である。基部は尖り気味で先端部は丸く削られ、側面は断面多角形に加工され



第84図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第３しがらみ状遺構実測図（S＝1／40）

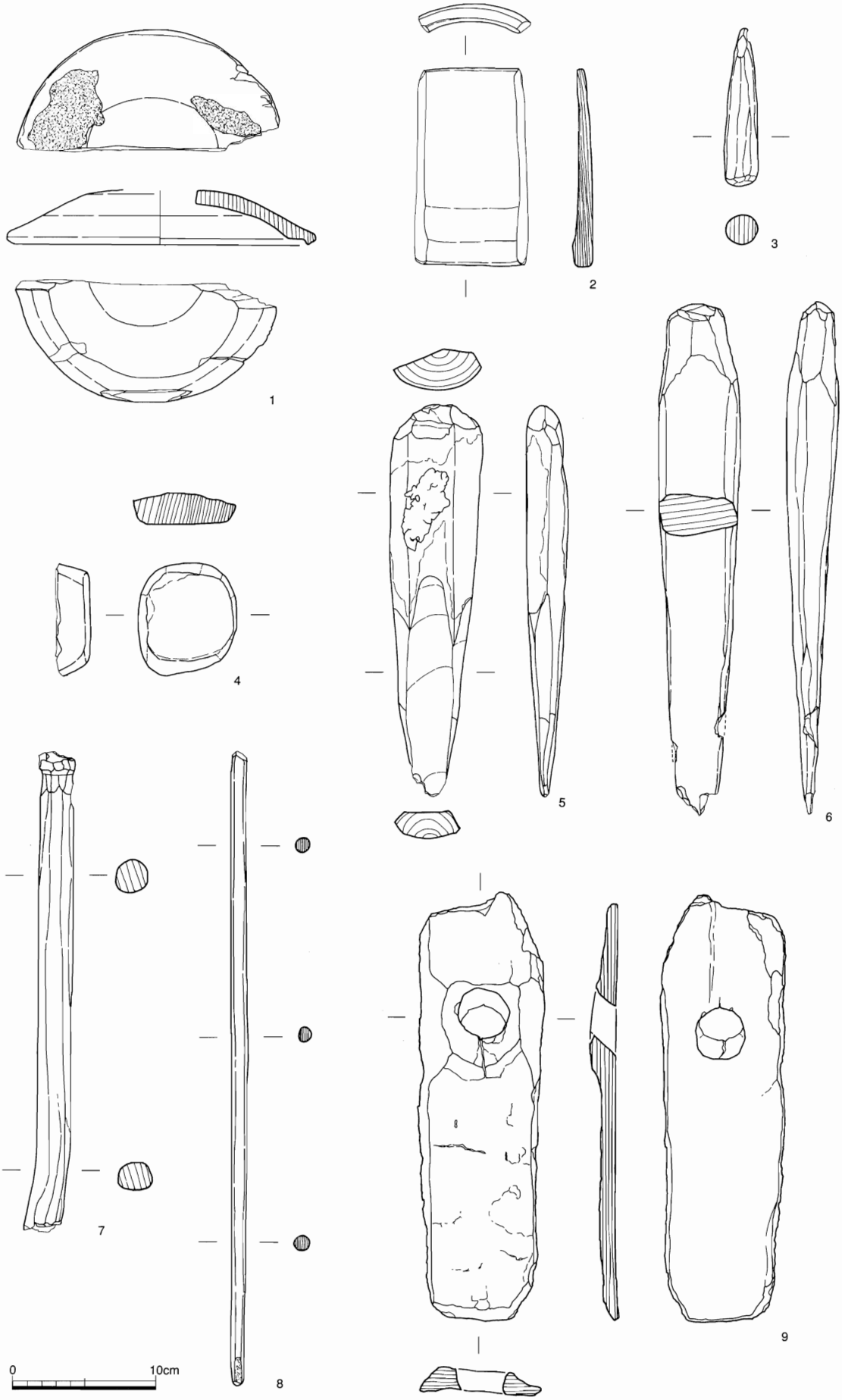


第85図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第３しがらみ状遺構出土遺物実測図（1）（S＝1／4）

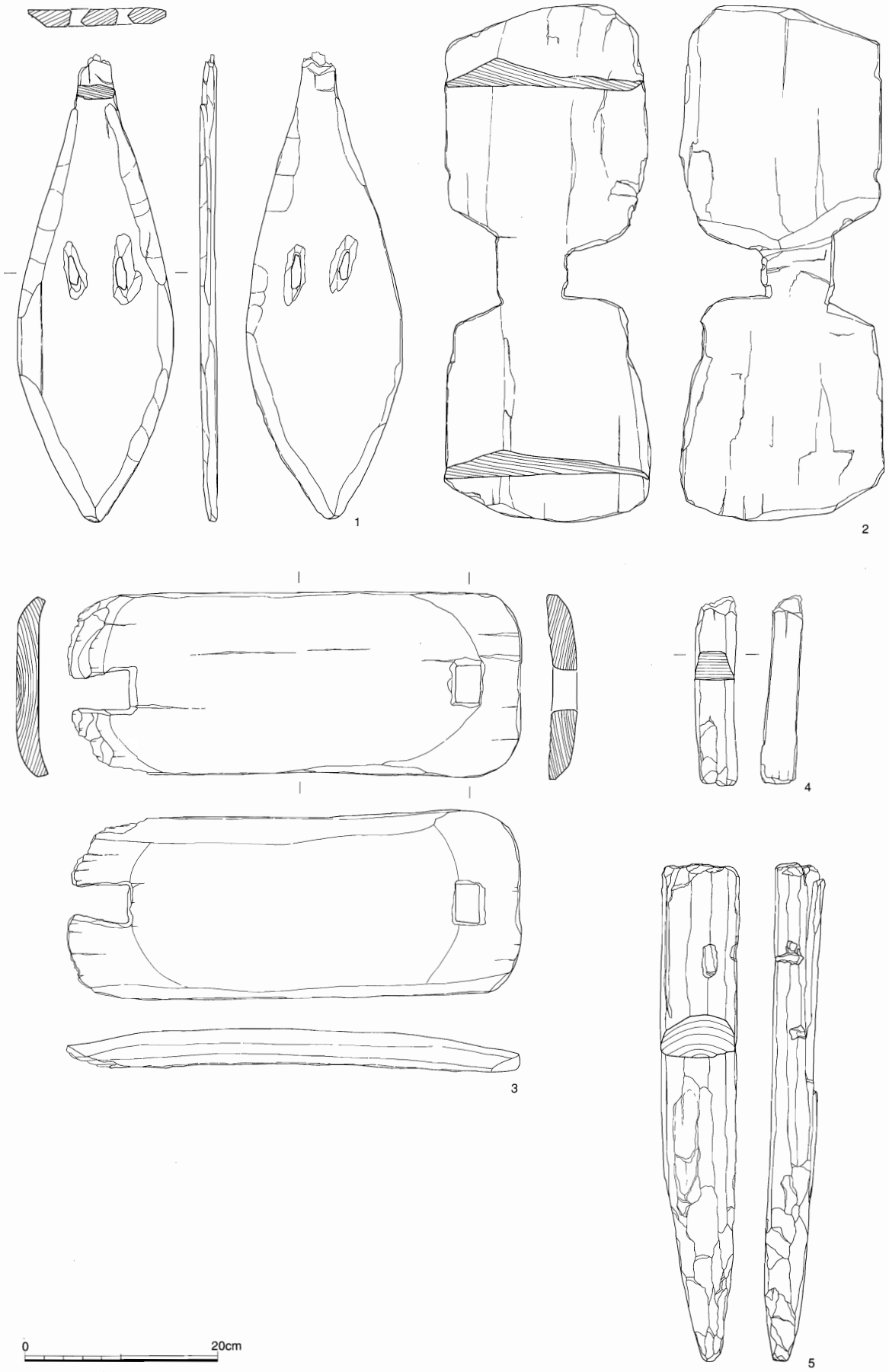
ている。樹種はツバキである。４は第79図１のような盤の脚部であろう。樹種はスギである。５・６は楔であり、いずれもほぼ完形のものである。５は長さ27cmを測り、表面には樹皮が残っている。樹皮はイイギリである。６は長さ35.5cmを測り、５と異なるのは全面が加工されていることである。樹種はアカガシである。７は棒製品である。先端部は削り出されて宝珠状に整形され紐掛けのようであり、さらに欠損部付近は若干カーブすることから天秤棒と考えられる。樹種はモミである。８は基部を欠き現状で長さ44cmと細長いものであるが、先端部が焦げており火きり杵状の棒製品といえる。樹種はスギである。９は直柄平鍬である。ほぼ完形のもので、長さ30cm、幅は8.5cmを測る。表面がかなり焼け焦げている。柄孔周囲の隆起は明瞭な段をもたず、身の周囲から徐々に厚みを増すタイプである。樹種はアカガシである。

第87図は比較的大型の木製品である。１は組合せ式の直柄平鋤である。長さ48.5cm、幅16.2cmを測る。肩部の張りは少ないが、先端は鋭く尖る形状を呈する。刃部中央には柄を結合するための穿孔が施されている。着柄軸の端部を欠いており、段差が作り出されていたかは明瞭でない。樹種はスギである。２は扁平で、平面形が鉄アレイ状を呈する木製品である。しかしながらその両端部の平面形が丸みを帯びた台形状を呈し、さらに断面形も中央よりやや上方に向かって厚みを増すことから２点連結した状態の泥除けの未製品とみられる。全体の長さは53.4cm、幅21cmを測り、１点の泥除けとみた場合の長さはおよそ21cmを測る。柄孔は穿たれておらず、泥除けの製作過程が伺える資料である。樹種はアカガシである。３は平面形が長方形を呈する指物腰掛の座板である。左側部を一部欠いているが、現状で長さ46.6cm、幅19.1cm、厚さ2.5cmを測る。中央が窪むように若干弓状に整形され、両端部には脚板を通すための方形のほぞ穴が穿たれている。樹種はヒノキである。４は３の脚板とみられ、出土時には３の一部欠損しているほぞ穴に装着された状態で検出された。しかしながら脚板とみた場合、その細長い形状は座板を受ける構造を呈していないという疑問点が浮かぶ。あるいは両側面は欠落しているのかもしれない。樹種はヒノキである。５は杭である。現状でタテにほぼ真っ二つに欠損しているが、全体の形状はよくわかる資料である。長さ51.5cm、幅7.9cm、厚さ4.5cmを測る。断面は半円形を呈するが側面の面取りが明瞭で、先端部にかけて粗い削り痕が残る。樹種はシイである。

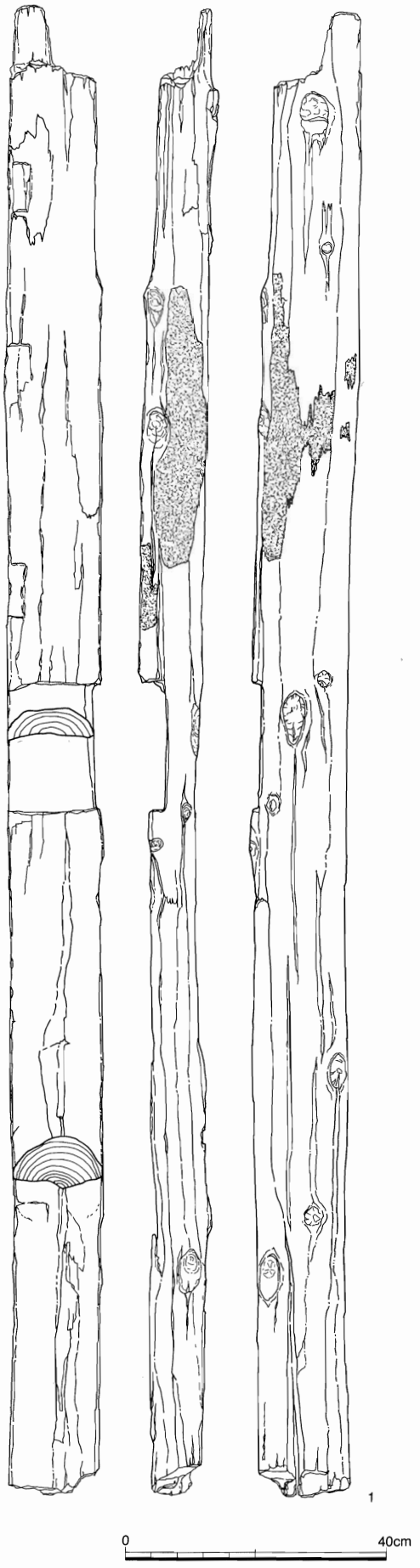
第88図１は両端部を欠き、タテ方向にほぼ真っ二つに欠損しているが、長さ228cm、幅15cm、厚さ８cmを測り、遺跡内で検出された木製品の中で最大の大きさを測る。また外面は樹皮や枝跡が残るなど丁寧に整形されておらず、全体的な形状は丸太ん棒である。しかしながら、ほぼ中央付近に長さ20cmの方形のほぞ穴が穿たれており、その大きさから何らかの建築部材と推測されるものである。樹種はアスナロである。



第86図　田中谷遺跡Ⅱ－1区第3しがらみ状遺構出土遺物実測図（2）（S＝1／4）



第87図　田中谷遺跡Ⅱ－1区第3しがらみ状遺構出土遺物実測図（3）（S＝1／6）



第88図　田中谷遺跡Ⅱ－ 1 区第 3 しがらみ状遺構
出土遺物実測図（4）（S＝1／10）

第89図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第４しがらみ状遺構実測図（S＝1／40）

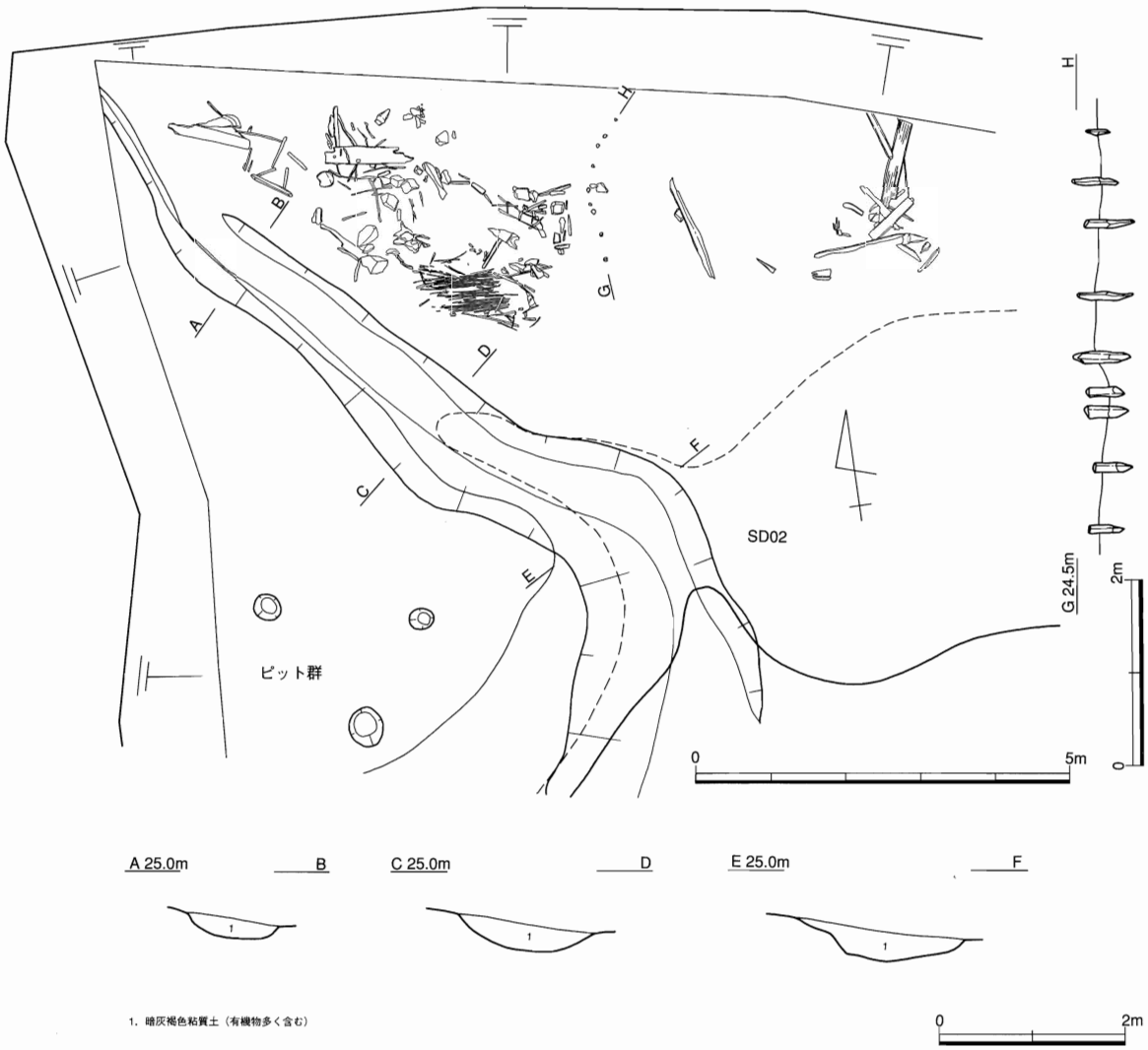
第４しがらみ状遺構（第89図）

調査区の北端部で検出された遺物集中地点である。第３層の上面で検出され、遺物は12.5×4.5ｍの範囲で広がっている。旧河道のこの付近は両谷奥から流れ出た河道の合流地点とみられ、これらの遺物はその出土状況から左谷奥から流出したものとみられる。出土した木製品には農具や容器類がみられるが、その他長さ約60㎝前後・幅１㎝程度の細長い板きれ状のものが40点以上まとまって検出されており興味深い。

杭列・ＳＤ02・ピット群（第90図）

第４しがらみ状遺構の中央付近からは、南北方向に平行する形で杭列が検出されている。杭列はおよそ20㎝間隔で弧状に穿たれている。第４しがらみ状遺構の検出状況から、遺物群はこの杭列に引っかかって堆積したと見えなくもない。

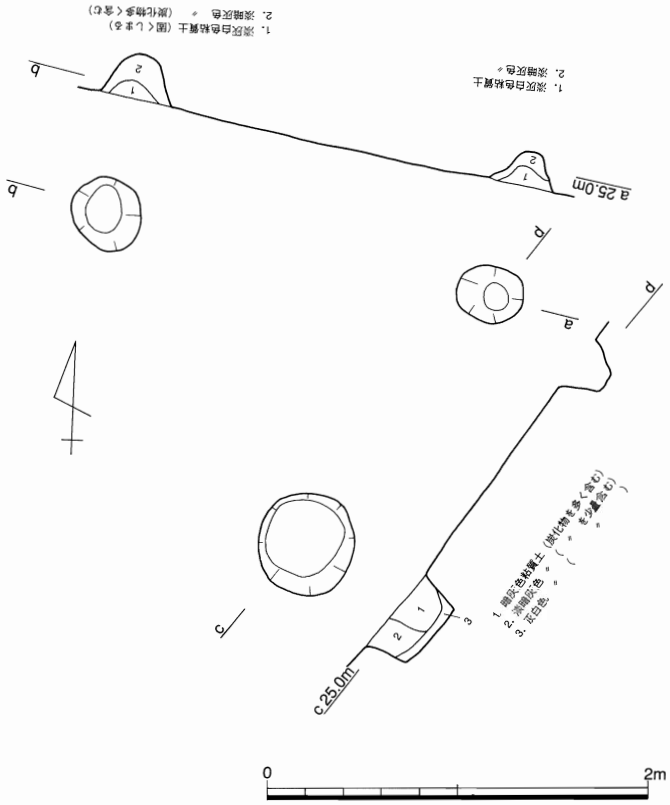
また、第４しがらみ状遺構のすぐ南側からは、川岸に沿って別の小規模な流路が検出されている。その検出状況から人工的な流路と判断されたので、ＳＤ02と称した。ＳＤ02は旧河道内ではなく川岸の端部に掘り込まれており、長さは約10ｍ、幅２ｍを測る。ＳＤ02からは弥生土器が数点出土し



第90図　田中谷遺跡Ⅱ－１区ＳＤ02、杭列検出状況実測図（平面：Ｓ＝1／100、断面：Ｓ＝1／80）

ている。さらに、川岸の上面からは径40㎝前後のピットが、あたかも三角形を組むようなかたちで３点検出されている。ピット内から遺物は出土していない。

このＳＤ02と杭列、そして第４しがらみ状遺構はそれぞれ関連があるとみられる。すなわち左谷奥からの自然流路を杭列によって堰き止め、ＳＤ02から水を流すといった意図が感じられるといえる。ピット群もこれらを補完する何らかの施設とも考えられるだろう。



第91図　田中谷遺跡Ⅱ－１区ピット群実測図（Ｓ＝1／40）

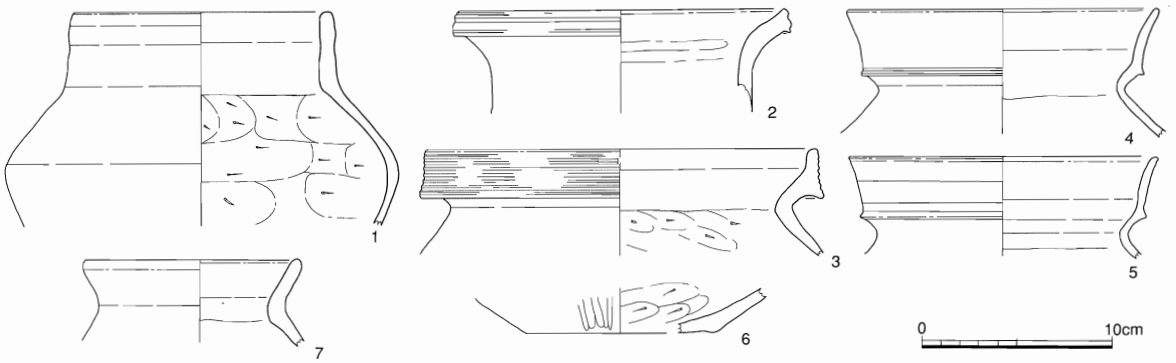
ＳＤ02出土遺物（第92図）

７点図化している。１は短頸壺である。算盤玉状の胴部から口縁が垂直に立ち上がる。２は壺である。口縁は外反し、口唇部は若干上下に肥厚する気配がある。拡張部の平坦面はやや内傾し、外面に凹線が施される。頸部の内面はミガキが施されている。３は口縁部が内傾気味に垂直に立ち上がり、平行短線文が施される。４・５は薄手で無文の複合口縁をもつ甕である。４は先端が尖り気味に丸くおさまるが、５は先端が屈曲し平坦面をもつ。６は壺・甕類の底部である。復元底径は7.5㎝を測る。外面にはミガキが施されている。７は小型の壺である。口縁は「く」の字に屈曲する単純なものである。

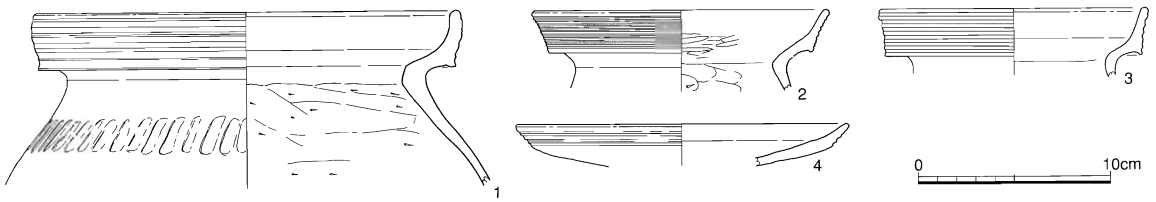
これらの遺物の時期は、２・３が草田２期、４・５が草田４～５期、７が古墳時代中期以降のものとみられる。ばらつきがあるが、主体をなすのは弥生時代後期前葉と後期末～古墳時代初頭といえる。

第４しがらみ状遺構出土遺物（第93・94・95図）

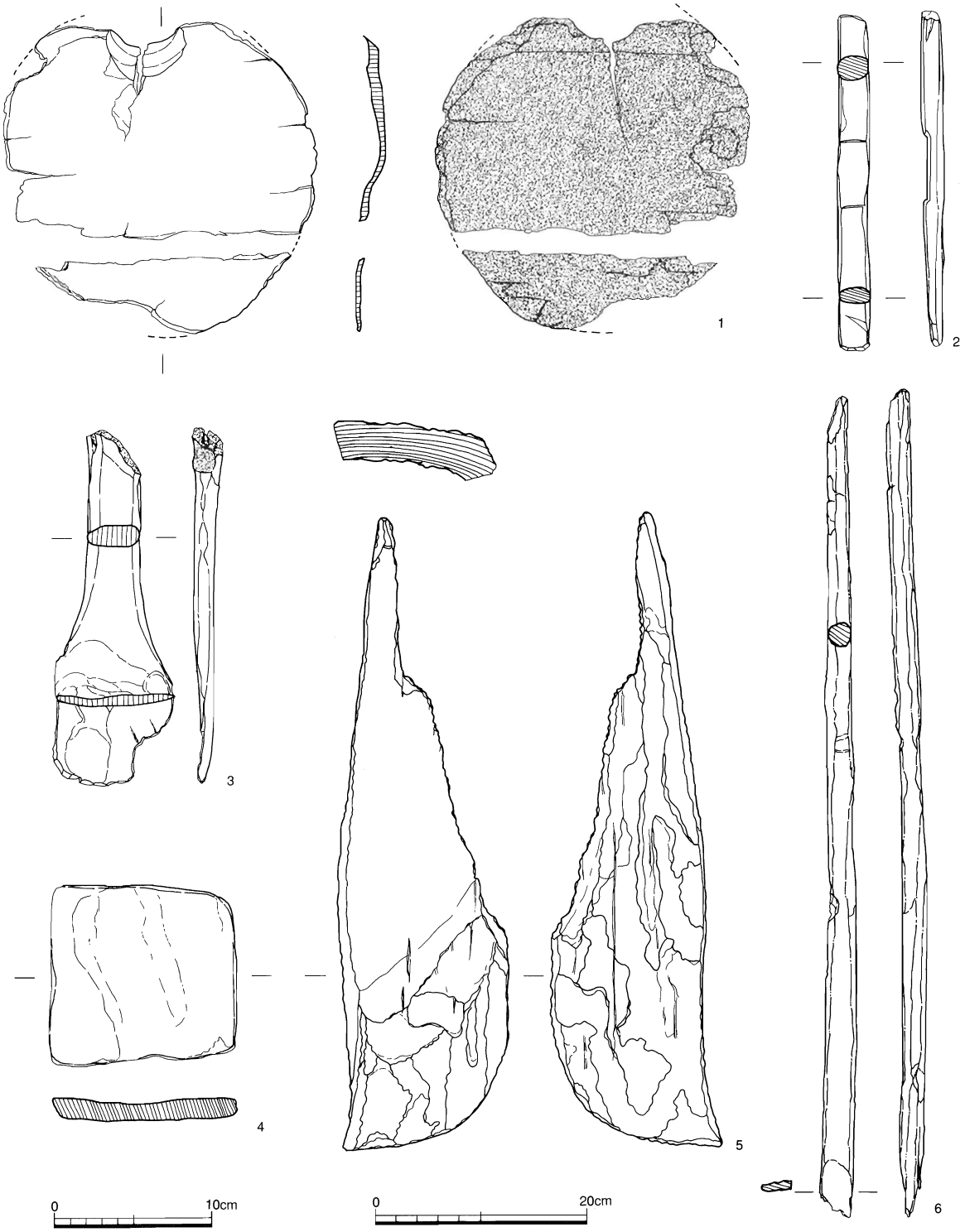
第93図は土器である。１～３は複合口縁を呈する甕である。１は甕が内傾気味に上方に立ち上がり、端部は丸くおさめられている。口縁外面には凹線が６条施され、肩部には板状工具によるナナ



第92図　田中谷遺跡Ⅱ－１区ＳＤ02出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）



第93図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第４しがらみ状遺構出土遺物実測図（1）（S＝1／4）

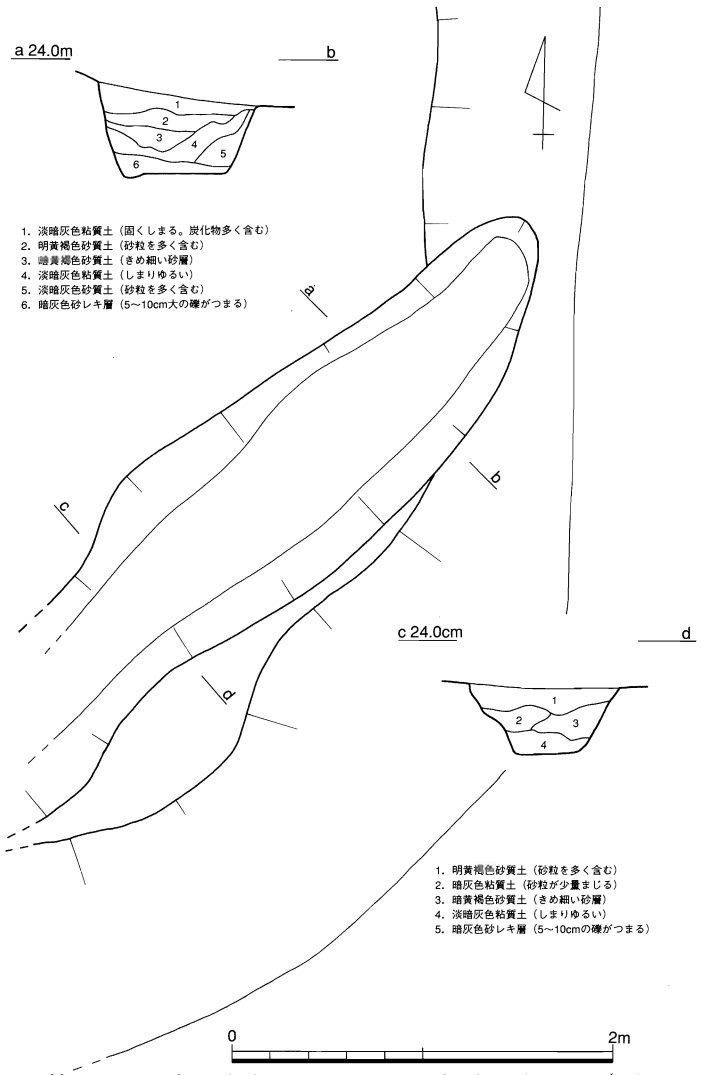


第94図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第４しがらみ状遺構出土遺物実測図（2）（1～4：S＝1／4、5･6：S＝1／6）

第95図　田中谷遺跡Ⅱ－１区第４しがらみ状遺構出土遺物実測図（3）（S＝1／6）

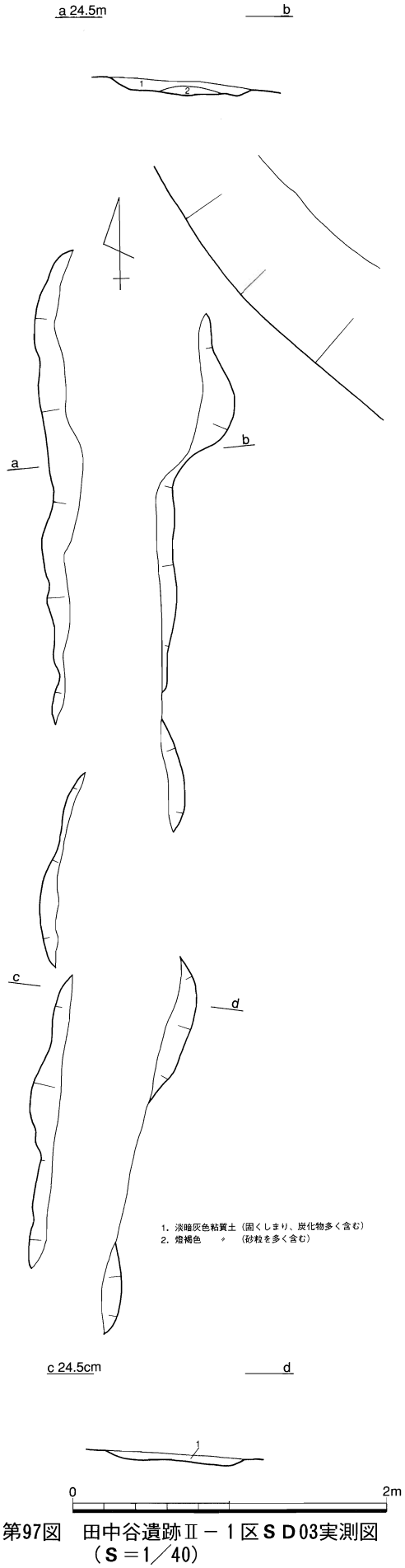
メ方向からの連続刺突文が施されている。２は外反する口縁に平行短線文が施されており、内面にはミガキ調整が施されている。３は口縁がやや外反しながら垂直気味に立ち上がり、平行短線文が施されている。４は扁平な受部の高坏とみられる。若干立ち上がる口唇部外面に平行短線文が施されている。これらの時期はいずれも草田２期に相当すると考えられる。

第94・95図は木製品である。１は取り上げ時に乾燥が進んで若干ひん曲がってしまったが、本来の形状は扁平で、平面形も円形を呈していた。その形状から泥除けと考えられる。長さ19.8cm、幅19.5cmを測る。柄孔がかなり上方に穿たれており、上方は肥厚して端部はカギ状に曲がっている。また、裏面は焼けてほぼ全面にススが付着する。樹種はアカガシである。２は用途不明の小型の板材である。上下端部を欠くが、現状で長さ21.3cm、幅2.0cmを測る。断面は扁平で、中央付近はカギ状に加工されている。樹種はスギである。３は杓子状の木製品である。柄はかなり扁平に加工されているが、柄部は焼失したらしく破面にススが付着する。長さ22.6cm、幅7.4cmを測る。樹種はアカガシである。４は板状木製品の破片で、用途は不明である。長さ11.5cm、幅11.7cm、厚さ1.4cmを測り、角は丸く加工されている。樹種はスギである。５は残存状況はよくないが、縁が肥厚していることから槽とみられる。現状で長さ59.7cm、幅15.5cm、底部の厚さ3.9cmを測り比較的大ぶりなものである。樹種はスギである。６は上下端部を欠いており、全体の形状は不明であるが長さ78.1



第96図　田中谷遺跡Ⅱ－１区ＳＤ01実測図（Ｓ＝1／40）

cmを測る棒製品である。厚さ2.4cmを測る断面はほぼ円形であるが、先端部は杓子状に扁平に整形されている。樹種はヒノキである。第95図１～６は同じ方向でまとまって検出された、小型で細身の板きれ状のものである。30点以上検出されているが、比較的残りがよく、特徴がわかる６点について図化した。うち６は最も長いもので、現状で長さ78.3cm、幅1.2cmを測る。等間隔で凹んだ箇所がみられるが、或いは紐のようなものが結ばれていた痕跡かもしれない。１～５にも所々紐ズレのような凹みがあることから、これらは互いに連結し簾状を呈していたと推測される。そうであるならば、このような細身な板きれがまとまって検出されたことの説明がつくといえる。樹種はいずれもヒノキであった。



第97図　田中谷遺跡Ⅱ－１区ＳＤ03実測図（Ｓ＝1／40）

3．溝状遺構

ＳＤ01（第96図）

調査区西壁北側寄りの川岸で検出された溝状遺構である。西壁から旧河道に向けて、北東方向にほぼ直線状にのびている。底面は平坦で逆台形状に掘り込まれており、現状で長さ約２m、幅1.5m、深さ50cmを測る。遺物は出土しておらず性格は不明であるが、旧河道に関連した遺構と考えられる。

ＳＤ03（第97図）

調査区中央付近の西壁にかかる川岸の上面で検出された溝状遺構である。旧河道に平行した形で南北方向にのびている。上方は削平されたのか非常に残りが悪く、途中２ヶ所が途切れて３つに分かれている。全長は8.7m、最大幅1.1mを測り、深さは８cmと浅い。遺物は出土しておらず性格は不明である。

Ⅱ．Ⅱ－２区の調査

Ⅱ－２区は長さおよそ80m、最大幅20mを測り、面積は1385㎡とⅡ－１区より一回り大きい調査区である。北端部が一番深く1.6mを測るが、南側に行くにつれて浅くなり、南端部では深さ0.8mになる。旧河道が２か所検出された他（旧河道２・旧河道３）、溝状遺構も１か所検出されている（ＳＤ04）。

1．基本層序

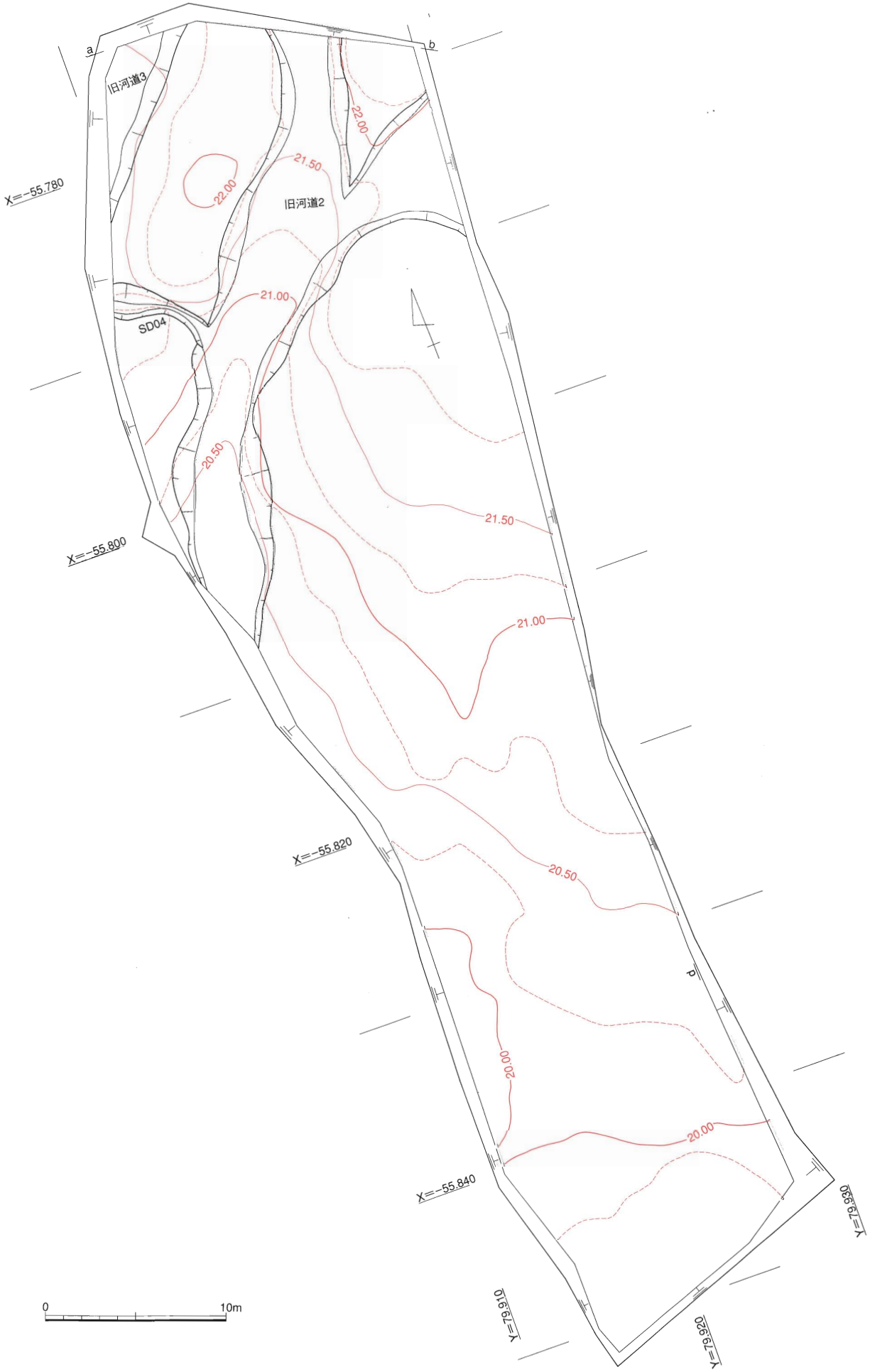
Ⅱ－１区と同様、近世以前の水田層は調査対象とせず重機で除去している。遺物の有無にかかわらずおおよそⅢ層に分類できる。

第Ⅰ層　－暗灰色粘質土。きめ細かく、有機物や遺物を含む。旧河道２の堆積土。
第Ⅱ層　－暗灰色粘質土。きめ細かく、有機物や遺物を含む。旧河道３の堆積土。
第Ⅲ層　－茶褐色砂礫層。砂粒や有機物も混じるが、礫が拳大～人頭大と大きく、遺物は上面のみで検出される。遺跡の基盤層になり、調査区内の全面で検出される。

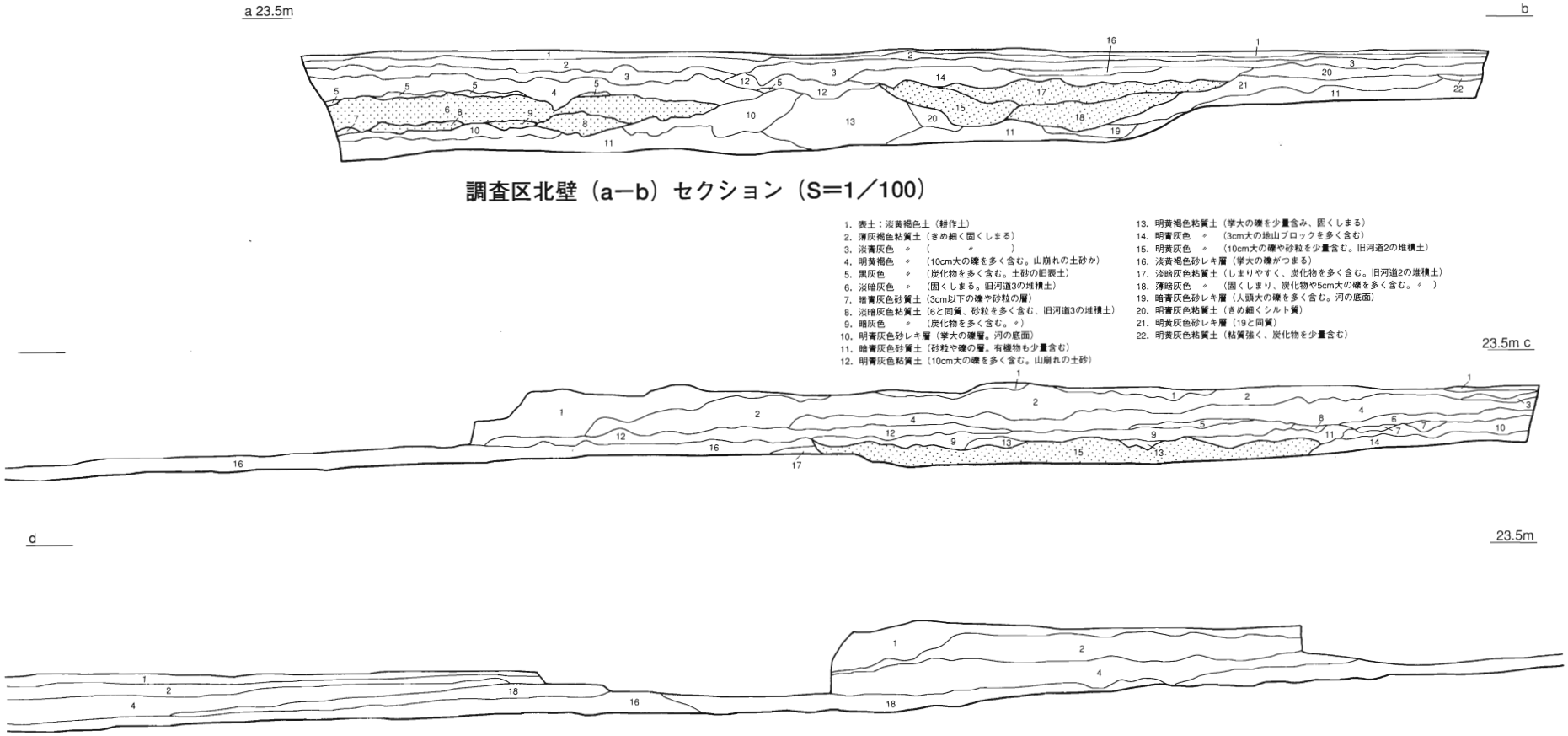
2．遺構に伴わない出土遺物

第Ⅲ層出土遺物（第100図）

遺物は調査区南側ではほとんど検出されず、旧河道２のすぐ南側の第Ⅲ層上面でまばらに検出されている。１・２は複合口縁を呈する甕・壺類である。１は甕で、口縁はやや外反しながら立ち上がり、外面下半には平行短線文が施されている。２は壺で、口縁は無文である。３は鼓形器台の筒部とみられる。４は壺の頸部で、頸部と肩部の境に突帯が上向きに貼り付けられている。５は複合口縁がくずれた形態の甕である。６・７は高坏である。６は坏部底面は円盤充填法で作られ口縁が緩やかに立ち上がるタイプで、７は坏部が椀形を呈するタイプである。８・９は口縁が「く」の字に外反する単純口縁の甕である。10は坏である。11～15は須恵器である。11は坏身、12は坏蓋である。13・14は高坏である。15は甕の口縁である。16は石器で、黒曜石製のスクレイパーである。こ



第98図　田中谷遺跡Ⅱ－ 2 区調査区設定図（S ＝1／300）



調査区北壁（a－b）セクション（S=1／100）

1．表土：淡黄褐色土（耕作土）
2．薄灰褐色粘質土（きめ細く固くしまる）
3．淡青灰色　〃　（　　〃　　）
4．明黄褐色　〃　（10cm大の礫を多く含む。山崩れの土砂か）
5．黒灰色　〃　（炭化物を多く含む。土砂の旧表土）
6．淡暗灰色　〃　（固くしまる。旧河道3の堆積土）
7．暗青灰色砂質土（3cm以下の礫や砂粒の層）
8．淡暗灰色粘質土（6と同質、砂粒を多く含む、旧河道3の堆積土）
9．暗灰色　〃　（炭化物を多く含む。〃）
10．明青灰色砂レキ層（挙大の礫層。河の底面）
11．暗青灰色砂質土（砂粒や礫の層。有機物も少量含む）
12．明青灰色粘質土（10cm大の礫を多く含む。山崩れの土砂）
13．明黄褐色粘質土（挙大の礫を少量含み、固くしまる）
14．明青灰色　〃　（3cm大の地山ブロックを多く含む）
15．明黄灰色　〃　（10cm大の礫や砂粒を少量含む。旧河道2の堆積土）
16．淡黄褐色砂レキ層（挙大の礫がつまる）
17．淡暗灰色粘質土（しまりやすく、炭化物を多く含む。旧河道2の堆積土）
18．薄暗灰色　〃　（固くしまり、炭化物や5cm大の礫を多く含む。〃　）
19．暗青灰色砂レキ層（人頭大の礫を多く含む。河の底面）
20．明青灰色粘質土（きめ細くシルト質）
21．明黄灰色砂レキ層（19と同質）
22．明黄灰色粘質土（粘質強く、炭化物を少量含む）

調査区東壁（c－d）セクション（S=1／100）

1．表土：淡黄褐色土（耕作土）
2．淡灰褐色粘質土（しまり弱くパサパサしている）
3．暗灰褐色　〃　（粘質強く固くしまる）
4．淡暗灰　〃　（固くしまる。砂粒を少量含む）
5．暗灰色　〃　（　　〃　　）
6．薄青灰色　〃　（しまり弱く、挙大の礫を少量含む）
7．淡青灰色　〃　（しまり弱く、パサパサしている）
8．黒灰色　〃　（砂粒を多く含む）
9．淡灰褐色　〃　（固くしまる。挙大～人頭大の礫を少量含む）
10．薄青灰色　〃　（10cm大の礫や砂粒を多く含む）
11．淡暗青灰色　〃　（固くしまり、挙大の礫を多く含む）
12．暗灰色粘質土（しまり弱く、パサパサしている）
13．淡青灰色　〃　（　　〃　　）
14．明青灰色砂レキ層（砂礫の層。基盤の相当）
15．暗灰色粘質土（有機物を多く含む。旧河道2の堆積土）
16．淡茶褐色　〃　（砂粒や挙大～人頭大の礫を多く含む）
17．明黄灰色　〃　（固くしまり、礫を含まない）
18．黒灰色　〃　（固くしまり、挙大の礫を多く含む）

第99図　田中谷遺跡Ⅱ－2区調査区セクション実測図（S＝1／100）

れらの時期は、１・２・３が草田２期、５・６は古墳時代前～中期、７～10は後期以降、11～15は７世紀代とみられる。

３．旧河道２・３

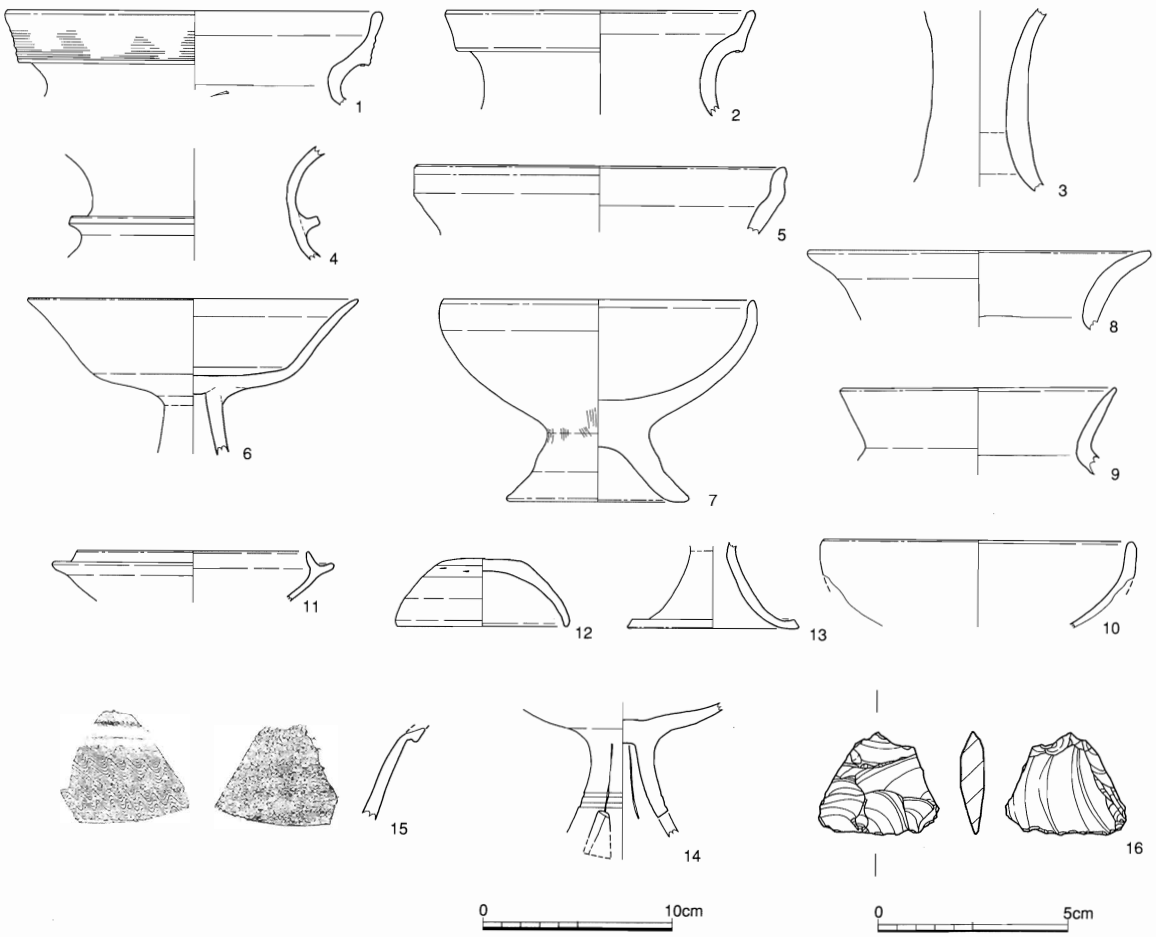
Ⅱ－２区では、旧河道とみられる自然流路が２本検出された、それぞれ検出順に旧河道２、旧河道３とした。

旧河道２（第98・101図）

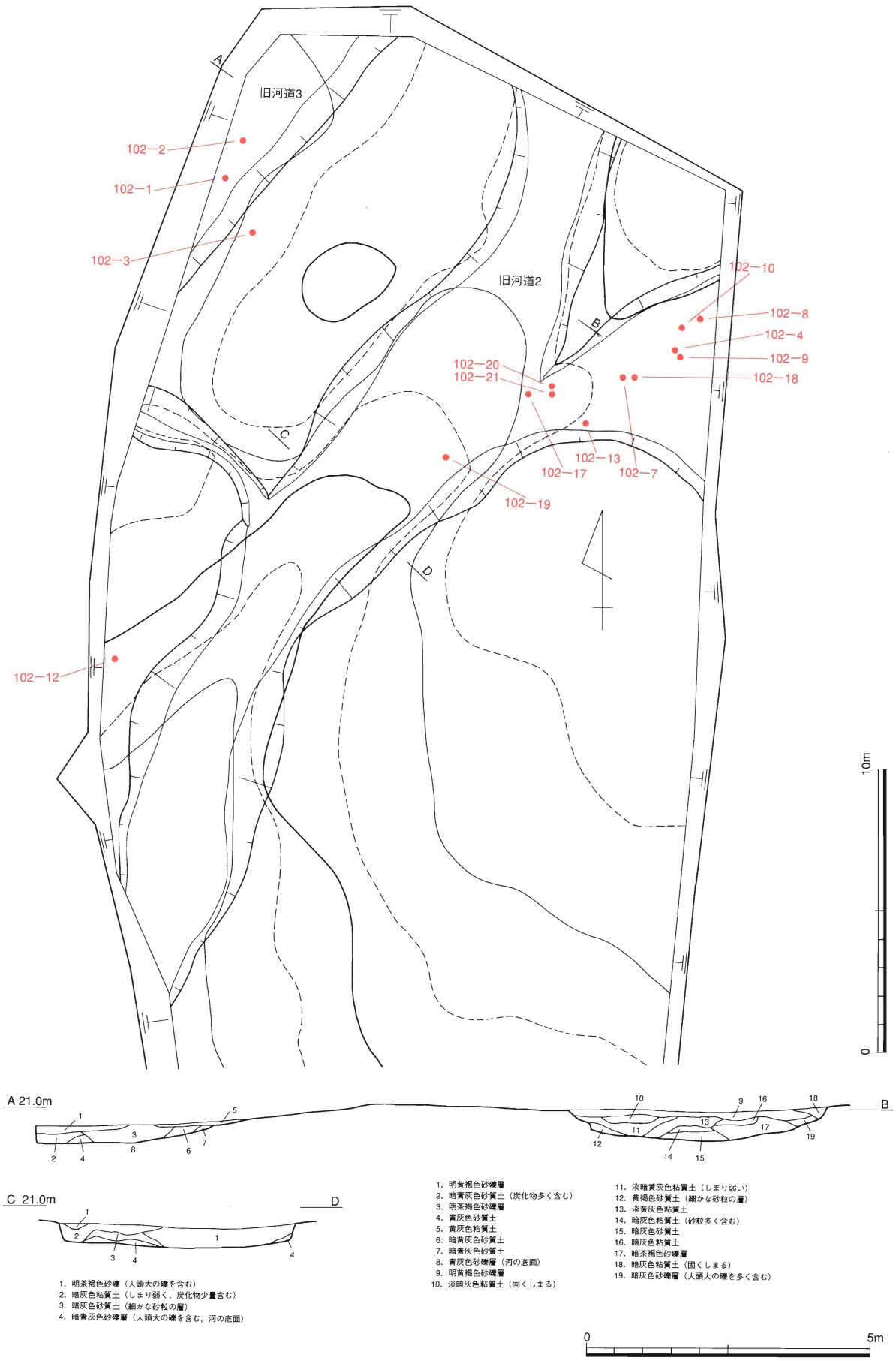
旧河道２は調査区北端部の右側から、そのまま南西方向にほぼ直線上にのびた状態で検出された。２つの支流が合流しており、俯瞰すると「Ｙ」字状にみえる。長さはおよそ31ｍ、最大幅は６ｍ、最大深40㎝を測る。

旧河道２出土遺物（第102図１～22）

多種多様の土器・石器類が出土しているが、木製品は検出されなかった。１～12は土師器類である。１は磨滅が著しいが、複合口縁を呈する甕である。２・４は単純口縁の甕である。２は口縁先端部にかけて内傾気味に立ち上がる。４は肩部はなで肩で、胴部が最も張り出す。３は小片であるが、復元口径の大きさから甑、もしくは竈とみられる。５は低脚杯の脚部、６は鼓形器台の筒部である。７は坏である。口縁端部に明瞭な面をもつが、磨滅しているものとみられる。８は高坏である。口唇部を欠くが、坏部の底面から口縁にかけて明瞭な段をもち、内外面とも丁寧なミガキが施



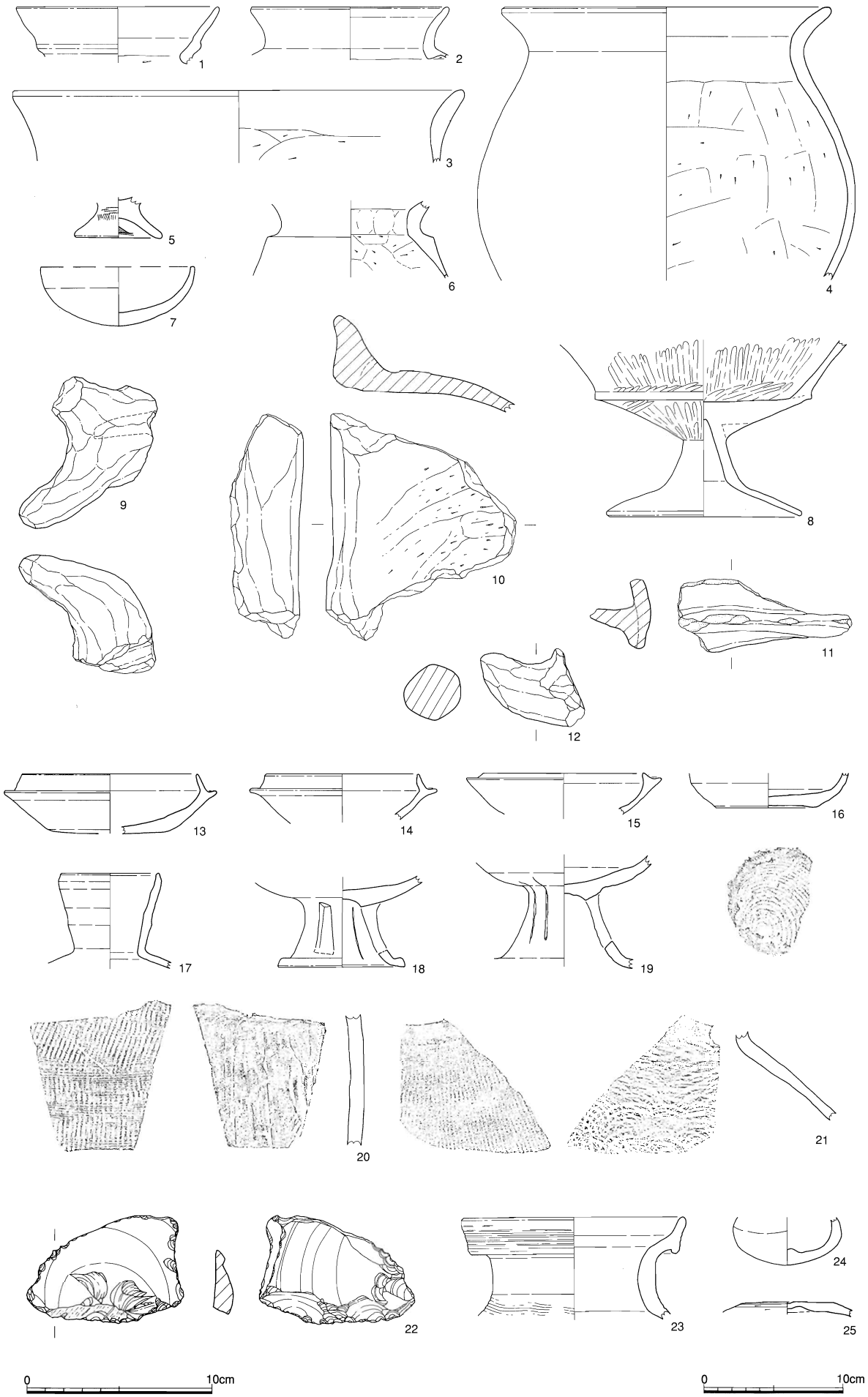
第100図　田中谷遺跡Ⅱ－２区第Ⅲ層出土遺物実測図（1～15：Ｓ＝1／4、16：Ｓ＝1／3）



1. 明茶褐色砂礫（人頭大の礫を含む）
2. 暗灰色粘質土（しまり弱く、炭化物少量含む）
3. 暗灰色砂質土（細かな砂粒の層）
4. 暗青灰色砂礫層（人頭大の礫を含む。河の底面）

1. 明黄褐色砂礫層
2. 暗青灰色砂質土（炭化物多く含む）
3. 明茶褐色砂礫層
4. 青灰色砂質土
5. 黄灰色粘質土
6. 暗黄灰色砂質土
7. 暗青灰色砂質土
8. 青灰色砂礫層（河の底面）
9. 明黄褐色砂礫層
10. 淡暗灰色粘質土（固くしまる）
11. 淡暗黄灰色粘質土（しまり弱い）
12. 黄褐色砂質土（細かな砂粒の層）
13. 淡黄灰色粘質土
14. 暗灰色粘質土（砂粒多く含む）
15. 暗灰色砂質土
16. 暗灰色粘質土
17. 暗茶褐色砂礫層
18. 暗灰色粘質土（固くしまる）
19. 暗灰色砂礫層（人頭大の礫を多く含む）

第101図　田中谷遺跡Ⅱ－２区旧河道２、３実測図（平面：Ｓ＝1／200、断面：Ｓ＝1／100）



第102図　田中谷遺跡Ⅱ－２区旧河道２，３出土遺物実測図（1～21、23～25：S＝1／4、22：S＝1／3）

されている。９は土製支脚で、側面からの穿孔は貫通していない。10・11は竈である。12は甑形土器の把手とみられる。13～21は須恵器である。13～16は坏身である。16は底部に回転糸切り痕が残る。17は長頸壺である。18・19は高坏の脚部である。20・21は甕類の胴部・肩部片とみられる。20の内面は同心円タタキ痕をナデ消している。22は黒曜石製のスクレイパーである。

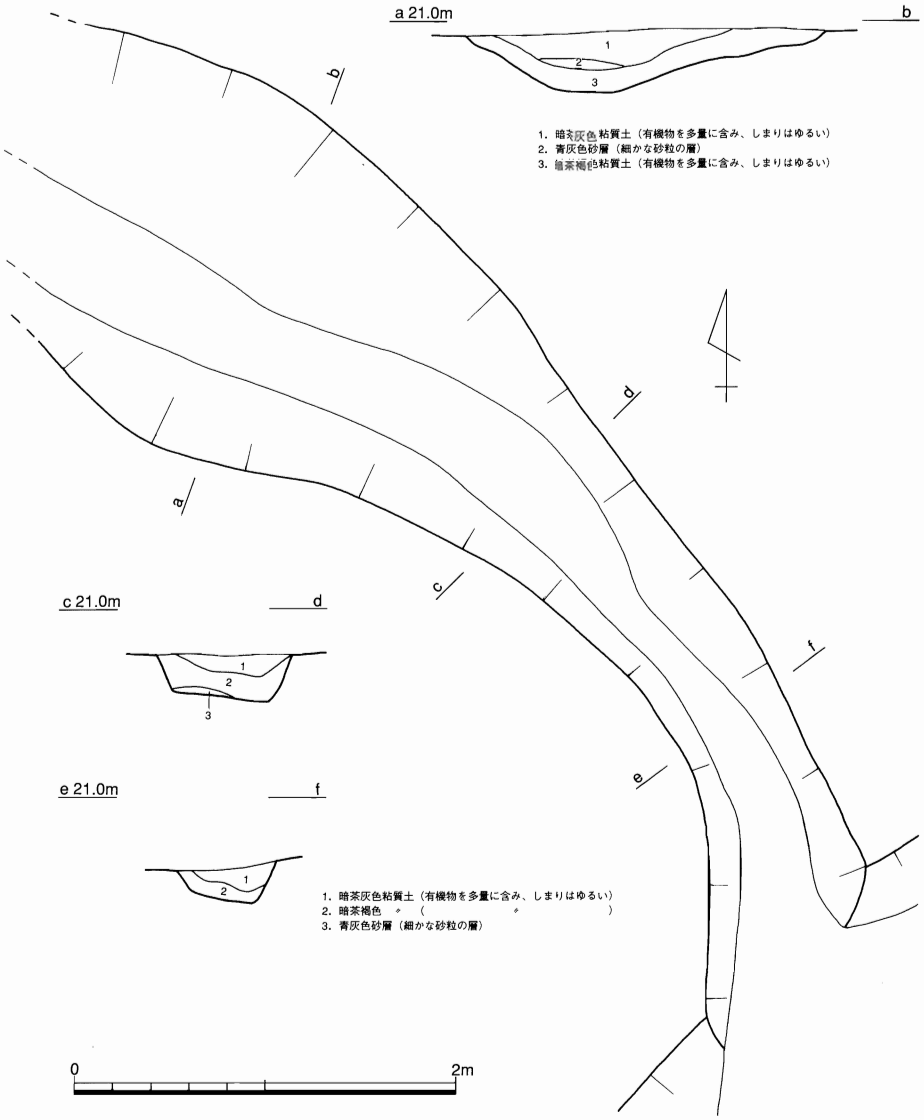
これらの遺物は時期のばらつきがあるが、１・５・６・８・21を除き、おおむね７世紀以降のものと見受けられる。従って、旧河道２の盛行時期は古墳時代後期以降と推定される。

旧河道３（第101図）

旧河道２と同様、調査区の北端部で検出された。北端部の左端をかすめるように流れており、調査範囲内では正確な川幅などは不明である。現状で長さおよそ11m、最大深20cmを測る。ただしⅡ－１・２区を合わせて俯瞰すると、Ⅱ－１区で検出された旧河道１と方向を同じくしており、旧河道３は旧河道１と同一の流路と考えられる。

旧河道３出土遺物（第102図23～25）

遺物はわずか３点ほど出土した。23は風化が著しいが、複合口縁を呈する壺である。外面に平行



第103図　田中谷遺跡Ⅱ－２区ＳＤ04実測図（Ｓ＝1／40）

短線が、肩部には波状文が施される。草田2期とみられる。24は手捏土器の底部である。25は須恵器の坏蓋である。回転ヘラケズリが施されている。

遺物は時期幅があるが、旧河道3の時期は旧河道1と同一流路とみられることから、その盛行期は弥生時代後期と考えられる。

4．溝状遺構

ＳＤ04（第103図）

調査区北側の西壁から、南東方向に弧状を描いてのびる溝状遺構である。断面は逆台形を呈し、長さおよそ6.4m、最大幅1.8m、最大深40cmを測る。遺物は出土しておらず性格は不明であるが、その位置から旧河道2と旧河道3をつなぐ機能があったとも見受けられる。

5．小　結

以上、田中谷遺跡Ⅱ－1・2区を外観してみた。本調査前のトレンチ調査で弥生時代後期や古墳時代後期の土器が検出されたので、当初は山際に立地する弥生～古墳時代の集落跡と想定していた。しかしながら本調査の結果、ピット群や溝状遺構が数基が検出されたが、遺跡の大部分を占めていたのは旧自然河道であった。河道内堆積土からは多量の土器とともに、しがらみ状に堆積した木製品が多く出土している。ここでは、旧河道と出土した木製品について若干の考察を加えてみたい。

1．旧河道について

旧河道はⅡ－1区で1条（旧河道1）、Ⅱ－2区で2条（旧河道2・3）の計3条検出されており、うち旧河道1・3は同一流路と考えられる。これらの時期について、層位別の出土遺物の時期についてまとめると以下のとおりになる（土層は第68・101図参照）。

旧河道1・3：第Ⅰ層（旧河道が埋まった後に堆積した層）・・・古墳時代前期～後期末
　　第Ⅱ層（旧河道内堆積土）・・・弥生時代後期前葉～古墳時代後期（中心は草田2期）
　　第Ⅲ層（旧河道底面）・・・弥生時代後期前葉～古墳時代後期（中心は草田2期）
旧河道2　　：第1層（河道内堆積土）・・・古墳時代前期～終末期（中心は後期～終末期）

旧河道1・3について、出土土器の時期幅が広く、また層位的にはきれいに区分できていない。ただ、田中谷遺跡が立地するような狭い谷を流れる自然河道は、洪水などにより激しく流出と堆積を繰り返すとみられるので、自然な結果といえるだろう。河道内出土遺物で最も数が多いのは弥生後期前葉から中葉にかけてのものであり、この時期に周辺で集落が営まれ、活発な生産活動を繰り返したものと想定される。Ⅱ区からは明確な建物跡は検出されていないが、Ⅰ区やⅤ区で集落の一端が調査されている。その後も遺物は時期を連続して出土するが数は減少傾向であり、古墳時代終末期には完全に埋まったと考えられる。また、弥生中期以前の土器もみられるが、数は極めて少なく二次的な流れ込みである可能性が高い。しかしながら、少なくとも付近にこの時期の集落等が存在していたことを示している。旧河道2では弥生期の遺物はみられず、旧河道1・3とは時期を異にするのが明確である。中心時期が古墳後期以降なので、この谷部周辺に営まれた集落の時期は、大きく弥生時代後期と古墳時代後期～終末期に区分されることを示唆するものかもしれない。

なお、Ⅱ－1区の調査区西壁では崖錐堆積物がみられ、これが旧河道1の河岸の基盤となっている。この崖錐堆積物の3ヶ所についてトレンチを入れたが（第68・69図）、下層から腐食した植物遺体の層が検出された。この崖錐堆積物が形成された年代を明らかにするべく、検出された植物遺体について^{14}C年代測定を行った。分析の詳細は後章に譲るが、2点が最終氷期、1点が縄文時代後～晩期頃の年代が想定されている。これは崖錐堆積物が少なくとも縄文時代以前に2度に渡って形成された可能性を示している。この結果は、大袈裟にいえば旧石器時代期には断面V字状の渓谷だったこの田中谷が、温暖化に伴い徐々に谷底が埋まり、弥生時代後期に至り人が住み始める環境になったことを裏付けるといえるのではないか。

2．旧河道1出土の木製品について

旧河道1からは、しがらみ状に堆積した木製品が弥生時代後期（草田2期）の土器を伴って出土している。主に農具・工具・容器類・雑具・運搬具・建築部材等に分類[2]でき、その種類は多岐に渡る。最も多いものは容器類で刳物桶（82－5，86－2）、蓋（75－2，86－1）、四脚盤（79－1）、槽（83－2，94－5）などがある。継いで農具類が多く、直柄狭鍬（86－9）、又鋤（82－1）、組合せ鋤（87－1）、泥除け（94－1）、鎌柄（82－3）などがみられる。中でも泥除け未製品（87－2）は鉄アレイ状に2点連結しているものであり、製作工程がわかる資料である。また工具類には鉄斧を装着していたとみられる斧柄がある（82－4）。鉄器の普及が説かれる弥生時代後期の特性を表しているといえる。さて、松江市内では大量に木器が出土した朝酌川遺跡群の西川津遺跡（島根県1988ほか）、タテチョウ遺跡（島根県1990ほか）、原の前遺跡（島根県1995）が著名であるが、出土品の細別時期が押さえられていないものも多い。本遺跡の出土例は数は劣るが、弥生時代後期における貴重な資料を追加したといえる。

注

1）完形のものは、出雲市・姫原西遺跡（島根県1999）で出土している。

2）木器の分類は『木器集成図録　近畿原始篇』（奈良国立文化財研究所1993）による。

第3節　Ⅳ区の調査結果

1．調査の経過と方法

Ⅳ区は、田中谷遺跡の中でも谷の南東側の入り口付近に当たる。東側には南北にのびる丘陵があり、その裾部から西側の水田部分にかけて、南北85m×東西35mの範囲で発掘調査を実施した。調査期間は平成12（2000）5月19日から8月4日で、調査面積は2300㎡になる。なお、Ⅳ区の北側のⅢ区では平成12（2000）年に（財）松江市教育文化振興事業団が調査しており、掘立柱建物跡や土坑、弥生時代後期の旧河道などが検出された（松江市2001）。また、南側には古墳時代中期の方墳である塚山古墳が位置している。

2．発掘調査の結果

遺跡の層序（第106図）

遺跡の南北壁面について土層を観察したが、水田部では灰褐色もしくは灰赤褐色粘質土、青灰色粘質土（耕作土）を掘り下げると遺構面となる黄褐色土層や、無遺物の砂礫層が確認できた。調査区北壁では耕作土の下層で弥生時代後期の旧河道の一部が検出でき、南壁では弥生土器小片を含む地山の落ち込みが見られた。ただし、この落ち込みは調査区内で平面的に確認することはできなかった。遺跡のやや南側で丘陵裾が西側にやや張り出している部分では、遺構検出面上に古墳時代後期から奈良・平安時代の土器を含む遺物包含層が確認できた。

旧河道（第105～107図、図版82・85）

調査区の北西隅で、東西5m、南北20mの範囲で北東から南西方向に下る弥生時代後期の旧河道が確認できた。土層断面では半月形の土層の堆積がいくつも見られ、大小の河道が切り合っている

第104図　田中谷遺跡Ⅳ区調査区設定図（S＝1／2000）

第105図　田中谷遺跡Ⅳ区全体図（S＝1／400）

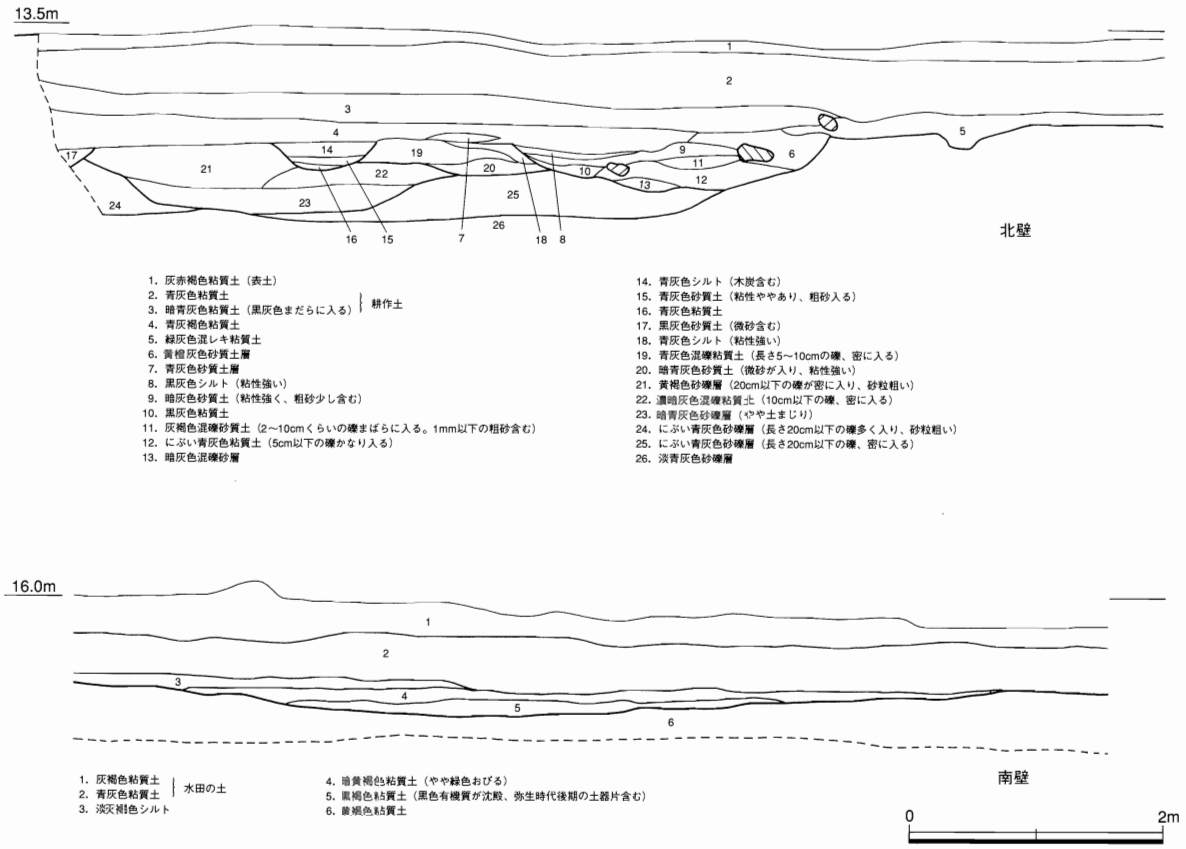
状態が観察できた。北側で調査されたⅢ区の旧河道の状況とよく似ており、河道は一時期に流れていたのではなく、通常は小規模な流れが大量の降雨があったときなどに水量が増したり、流れを変えたりすることが繰り返されたと思われる。切り合い関係が複雑であるため、河道の一つ一つの流れを平面的に確認することはできなかった。

旧河道中から弥生土器が出土している。1～7は甕の口縁部である。1～3の口縁部は平行沈線が施されており、直線的に外傾している。6は無文の口縁部が弱く外反しながら立ち上がっている。1～3・6は草田2期に位置づけられる。4は平行沈線が施された口縁部が外反しながら長くのびるもので、草田3期まで下る。5・7は口縁部が無文で、直線気味に長く立ち上がるもので、5は肩部に波状文が施されている。7は口縁端部が丸く収められている。7が草田編年5期、5は5期以降と考えられる。8は壷もしくは甕の底部で、厚手のものであり、Ⅰ様式からⅡ様式にさかのぼるものと思われる。

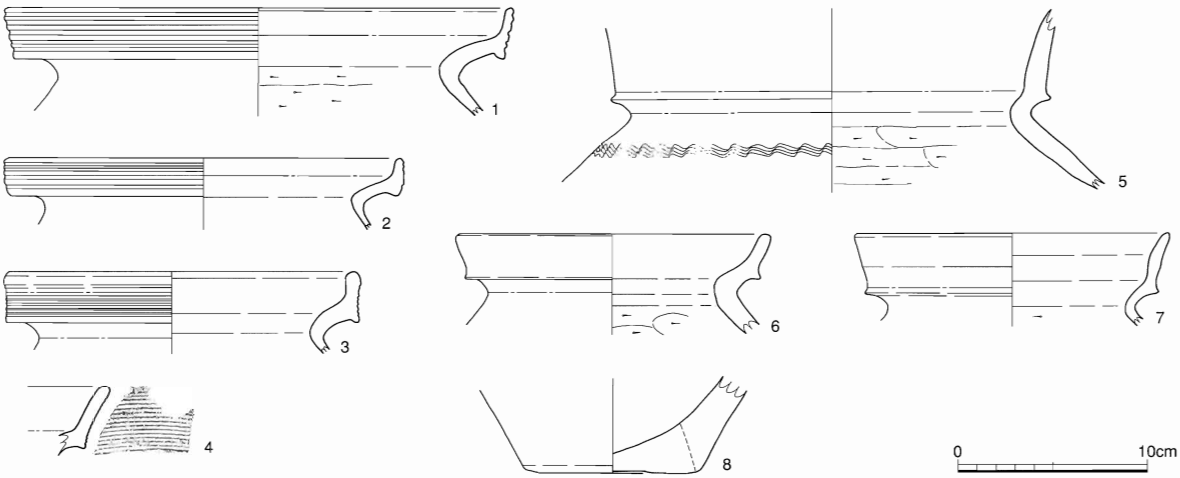
ＳＩ01（第108・109図、図版82・83）

調査区の南側の丘陵裾部の平坦面に位置する平面形が隅円方形もしくは多角形の竪穴建物跡で、4本の主柱穴と、壁体溝および周溝の一部が残っている。主柱穴の間隔は東西で2.0m、南北で2.14mになり、建物の主軸はＮ－9°－Ｅを向く。壁体溝の残存している部分は、南北4.5mになる。建物内に当たる位置にいくつかピットが見られるがこれらとＳＩ01との関係は分からない。周溝は現状で幅0.2m～0.3mで、建物跡の北側にのみ認められた。

遺物は、壁体溝から弥生土器もしくは土師器小片が出土しているのみで、遺物から時期を決めることはできないが、建物の構造から弥生時代から古墳時代前期の遺構と思われる。



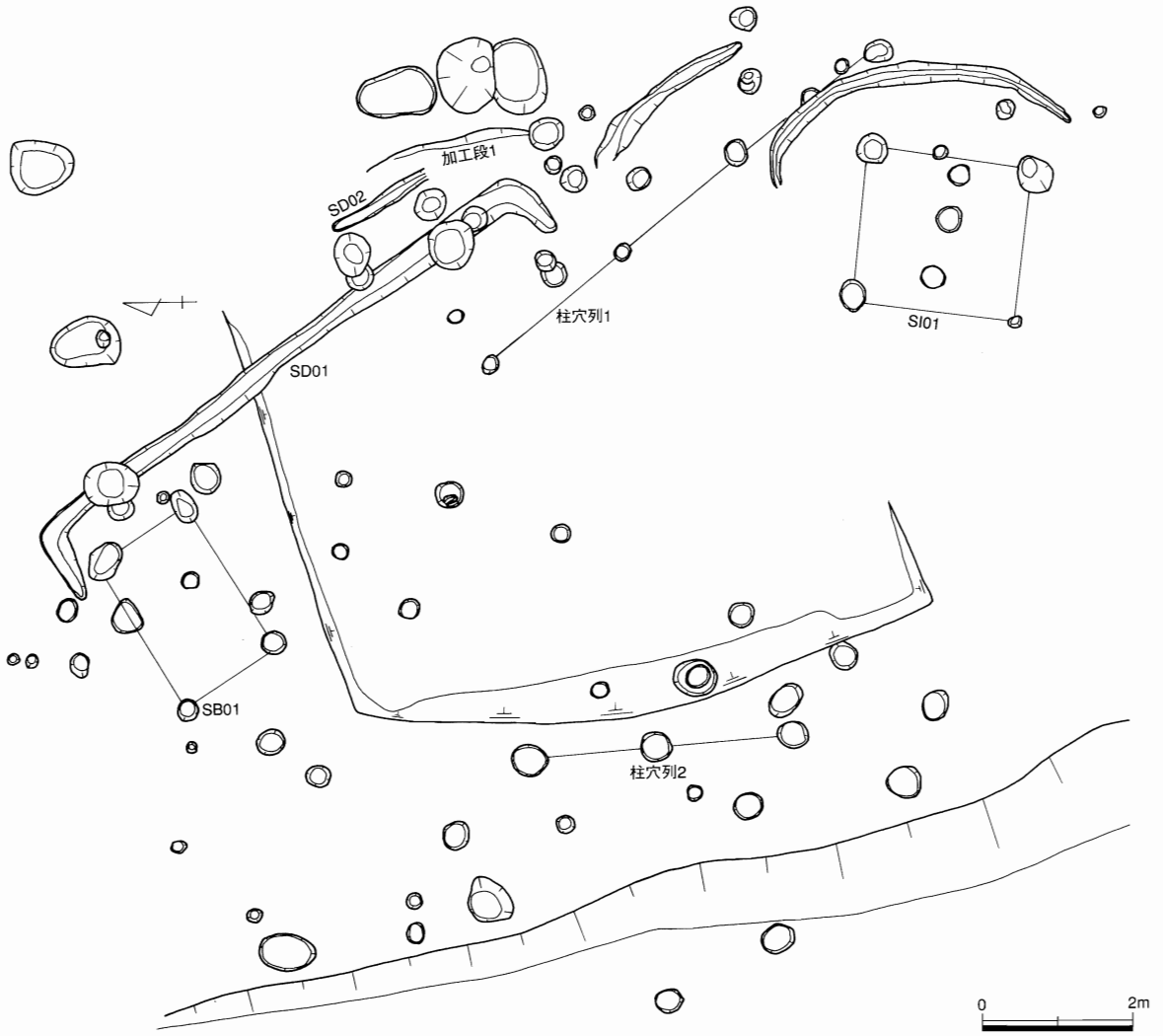
第106図　田中谷遺跡Ⅳ区北壁・南壁土層図（Ｓ＝1／60）



第107図　田中谷遺跡Ⅳ区旧河道出土遺物（S＝1／4）

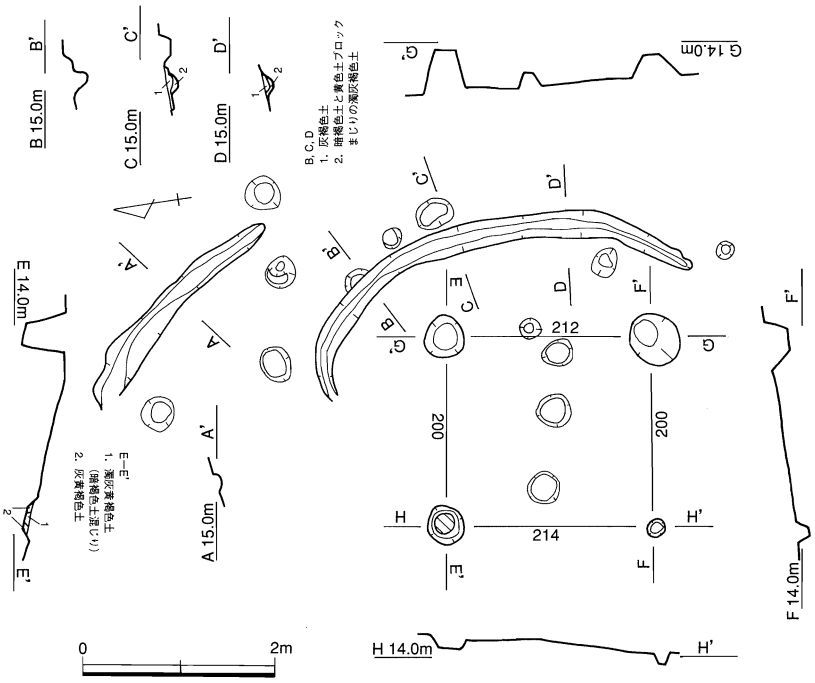
ＳＢ01・ＳＤ01（第108・110図、図版82）

ＳＢ01は調査区南側の丘陵裾部の平坦面に位置する東西１間×南北１間以上の掘立柱建物である。ＳＢ01東辺はＮ－32°－Ｗを向き、この東側にはＳＤ01が平行してのびている。ＳＢ01は南北の長さが8.2mの「コ」の字状の溝で、ＳＢ01の北東隅に当たる部分で西側に折れ曲がることから、



第108図　田中谷遺跡Ⅳ区柱穴群実測図（S＝1／100）

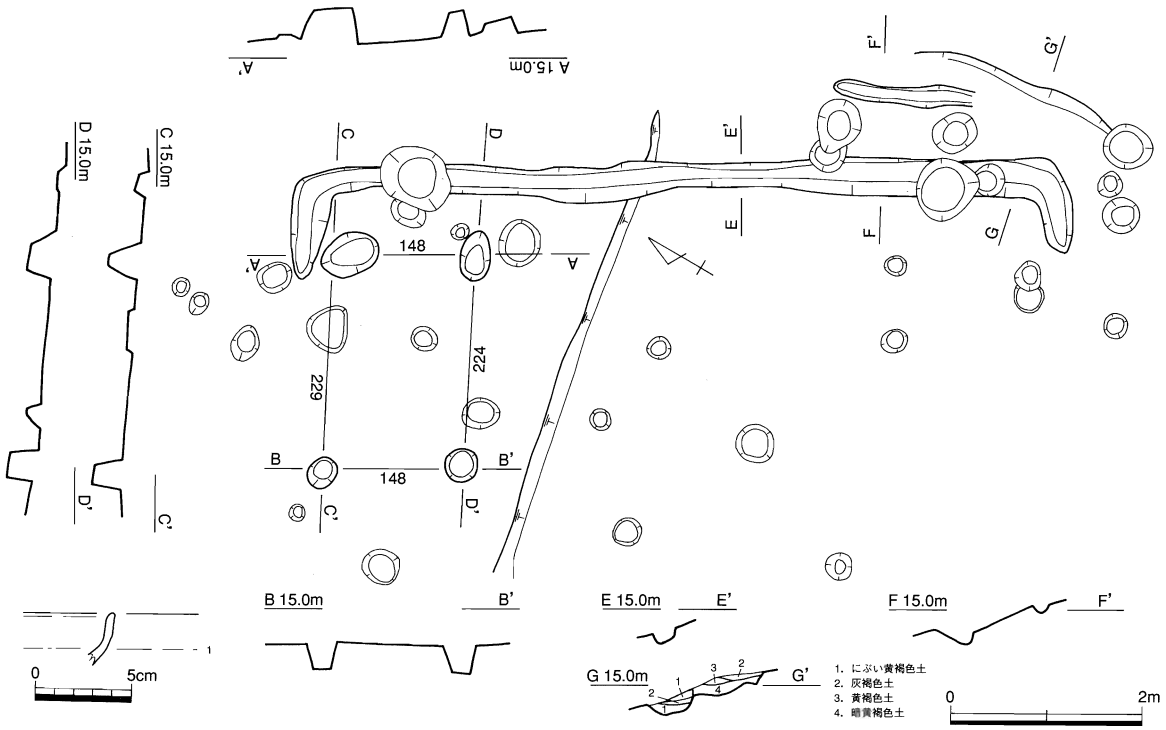
ＳＢ01に伴う溝と考えられる。現状でのＳＢ01の規模は、東西2.29m×南北1.49mであるが、ＳＤ01がこれよりも南側に長くのびていること、ＳＢ01の南側は遺構面を掘りすぎてしまったために柱穴が失われた可能性もあるため、本来は現状よりも南北方向に長くのびていたと考えたい。ＳＤ01は加工段１覆土を切っているため、これよりも新しい遺構と言える。遺物を伴わず時期は特定できないが、この周辺で奈良・平安時代の遺物包含層が広がっていたことから、この時代の遺構になる可能性が考えられる。



第109図　田中谷遺跡Ⅳ区ＳＩ01実測図（Ｓ＝1／80）

ＳＤ02（第108・110図、図版82）

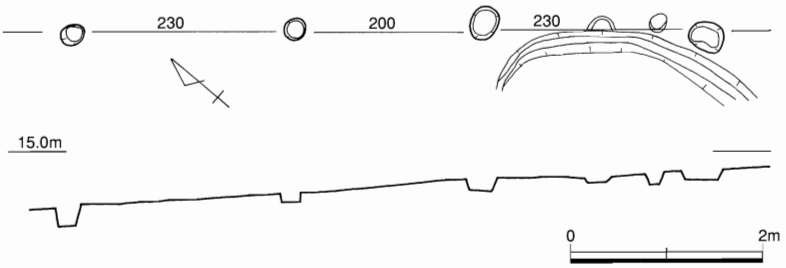
調査区南側の丘陵裾平坦面上で、ＳＤ01の東側に位置する。長さ1.5m、幅25cm、深さ５cmの溝で、建物跡との共存関係はつかめなかったが、西側のピット群と関連する可能性がある。加工段１と重複する部分があるが前後関係は不明である。この周辺で奈良・平安時代の遺物包含層が広がっており、この時代の遺構の可能性が考えられる。



第110図　田中谷遺跡Ⅳ区ＳＢ01、加工段１、ＳＤ01,02・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／80、遺物：Ｓ＝1／4）

加工段１（第108・110図、図版82）

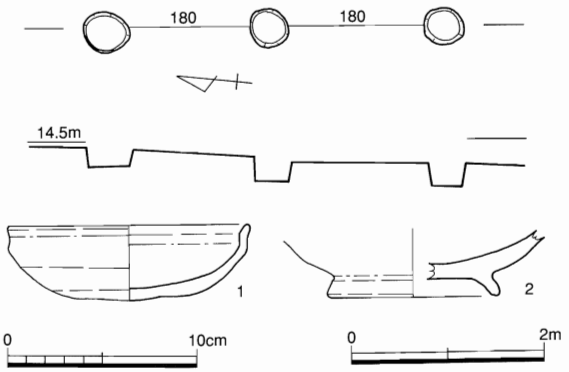
調査区南側の丘陵裾の平坦面に位置する。南北の長さは現状で2.2mである。覆土はＳＤ01に切られていることから、これより古いことが分かる。加工段１よりも西側にはいくつか柱穴が見られるが、これに伴うのか明確ではない。遺物は、覆土中から８世紀代の須恵器塊の口縁部片（110－１）が出土している。



第111図　田中谷遺跡Ⅳ区柱穴列１実測図（Ｓ＝1／80）

柱穴列１（第111図、図版82）

調査区南側の丘陵裾の平坦面に位置する。４基の柱穴で構成され、長さ6.6mになる。Ｎ－40°－Ｗの方向に柱穴は並んでおり、柵列のようなものと考えておきたい。柱穴内から遺物は出土しておらず時期は特定できないが、周辺の包含層から出土した遺物から考えると奈良・平安時代の遺構になるかもしれない。



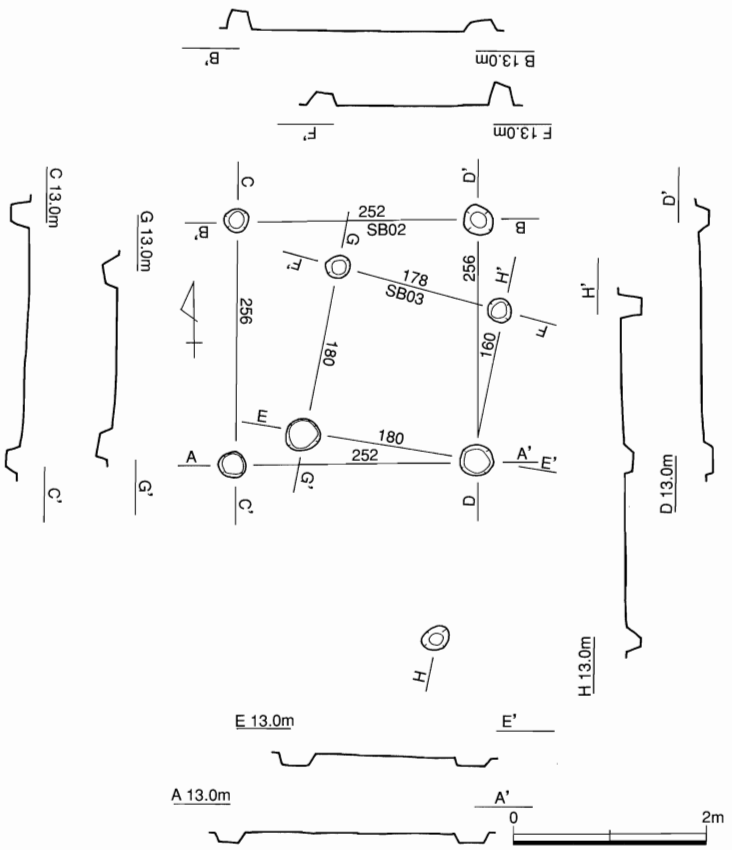
第112図　田中谷遺跡Ⅳ区柱穴列２・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／80、遺物：Ｓ＝1／4）

柱穴列１（第112図、図版82）

調査区南側の丘陵裾の平坦面に位置する。３基の柱穴からなり、全長は3.6mになる。Ｎ－７°－Ｗ方向にのびる。柱穴列としているが、本来は掘立柱建物で、西側が水田の造成で削られて柱穴が失われた可能性も考えられる。Ｐ２から須恵器塊（112－１・２）が出土している。１は体部が丸みを持って立ち上がり口縁部が屈曲するもので、底部はヘラ切りされている。２は体部が丸みを持ち、底部には高台が付く。これらは７世紀中葉～末に位置づけられ、遺構の時期もこの頃と考えられる。

ＳＢ02（第113図、図版83）

調査区南西端付近で検出された１間×１間の掘立柱建物である。梁行2.56m、桁行長2.52mで、床面積は6.5㎡である。棟方向はＮ－１°－Ｅになる。ＳＢ03と重複し、Ｐ４をこれと共有する。柱穴内から遺物は出土しておらず、時期は特定できない。



第113図　田中谷遺跡Ⅳ区ＳＢ02,03実測図（Ｓ＝1／80）

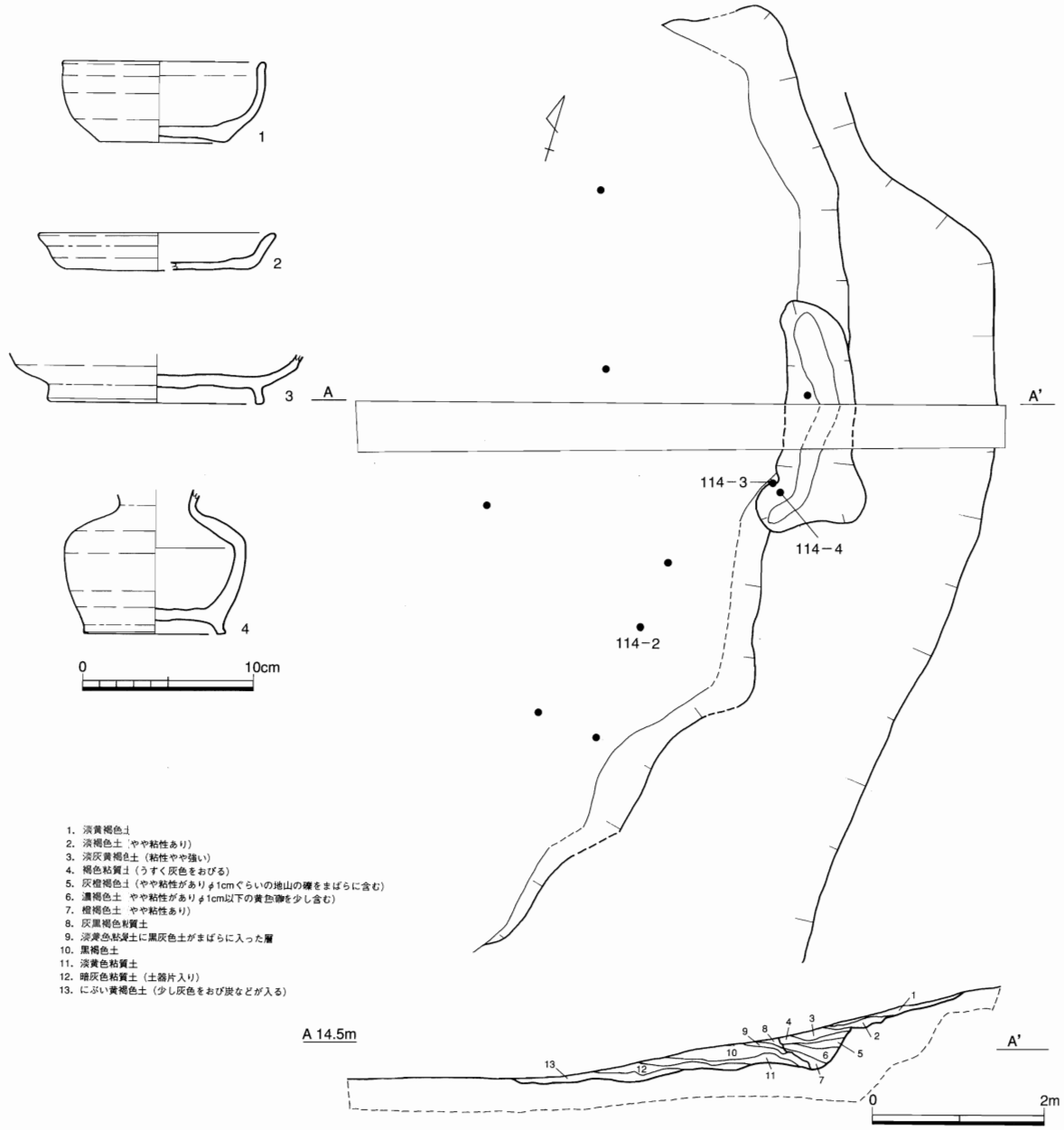
ＳＢ03（第113図、図版83）

調査区南西端付近で検出された１間×１間の掘立柱建物である。梁行1.80m、桁行長1.80mで、床面積は3.2㎡である。棟方向はＮ－79°－Ｗになる。ＳＢ02と重複し、Ｐ４についてはこれと共有している。柱穴内から遺物は出土していないため、時期は特定できず、ＳＢ02・03の前後関係についても不明である。

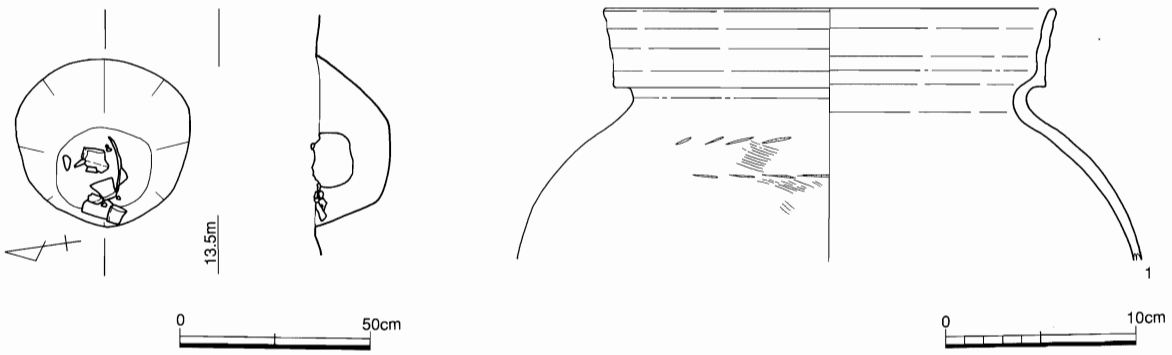
加工段２（第114図、図版84・86）

調査区の中央部、丘陵裾と水田部の境に位置する。確認できた遺構の規模は、南北11.1m、東西４mであるが、西側は水田の造成によりいくらか削られたと思われる。後背部の丘陵裾を削り込んで平坦面が造られ、遺構底面は西側の低地部分と水平になっており、東側はＳＸ01に切られている。この遺構は柱穴を伴っていない。

遺物は弥生土器小片、土師器小片、須恵器が出土しており、ここでは須恵器４点を図示した。１は埦、２・３は皿、４は壷である。これらは８世紀中葉から後半に位置づけられるものであり、遺



第114図　田中谷遺跡Ⅳ区加工段2・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／80、遺物：Ｓ＝1／4）



第115図　田中谷遺跡Ⅳ区ＳＫ01・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／20、遺物：Ｓ＝1／4）

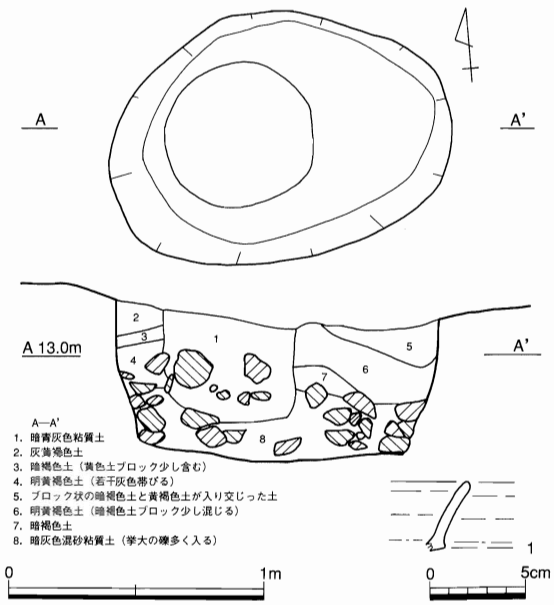
構の年代もこの頃と考えてよいであろう。

ＳＸ01（第114図）

調査区の中央部で、丘陵裾に位置する。南北2.7m、東西0.9～1.2mのやや不整形な土坑である。加工段１の覆土を切って掘り込まれている。遺構覆土は淡灰黄褐色から濃い褐色の比較的粘性の強い土で、基盤層の土層と類似しており、平面でのプラン確認は困難であったため、サブトレンチを設けて遺構の掘り下げを行った。遺物は出土しておらず、遺構の時期は特定できい。

ＳＫ01（第115図、図版84・86）

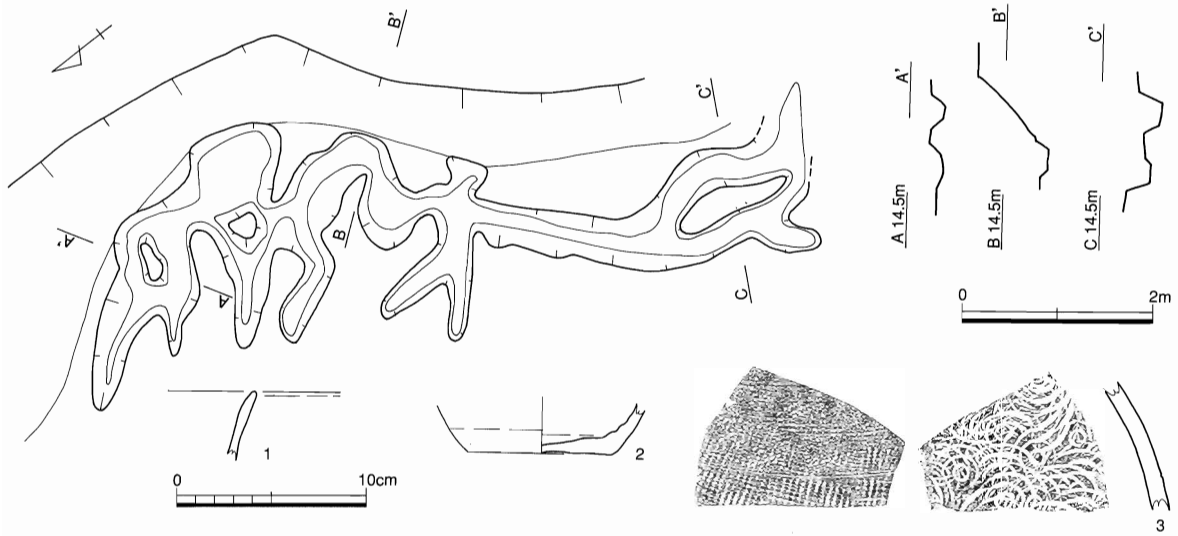
調査区南側の丘陵裾部に位置する。直径0.45m、深さ0.2mの円形の土坑で、弥生土器甕が埋められていた。１は口縁部が直線的に立ち上がり、端部に面を持つもので、肩部にはヘラ状の工具による刺突が施されている。草田編年の６期に位置づけられよう。



第116図　田中谷遺跡Ⅳ区ＳＫ02・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／30、遺物：Ｓ＝1／4）

ＳＫ02（第116図）

調査区南側の低地部分で検出できた長さ1.34m、幅0.9m、深さ0.6mの長楕円形の土坑で、下層

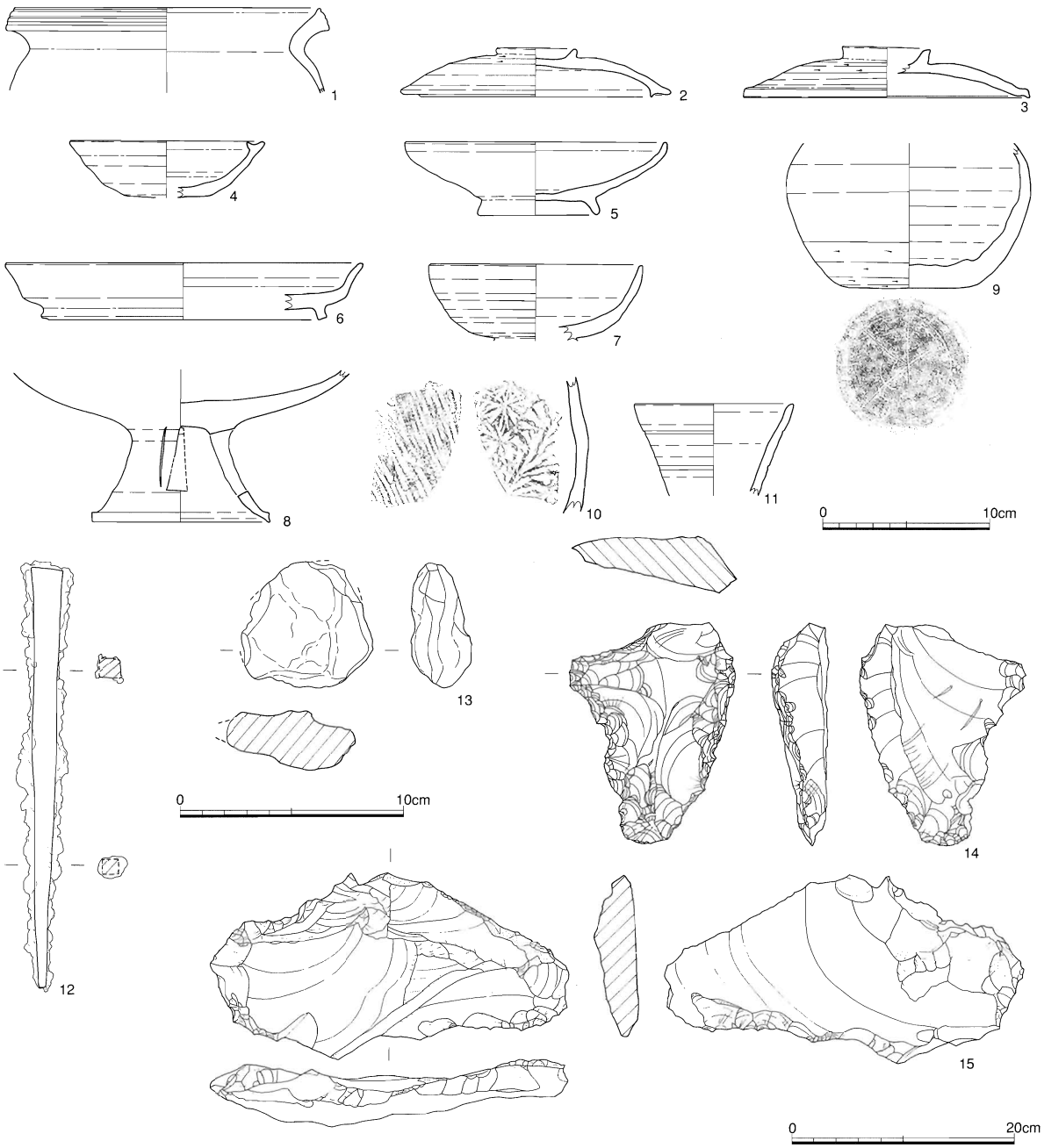


第117図　田中谷遺跡Ⅳ区ＳＸ01・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／80、遺物：Ｓ＝1／4）

には拳大の礫が密に入っている。中央からやや西よりには、暗青灰色粘質土の入った直径55㎝のピットが重複しており、この部分が柱痕のようにも見える。しかし、周囲に対応するような柱穴は見られず、このピットの性格についてはよく分からない。１の弥生土器甕の口縁部が出土し、このほか小片のため図示しなかったが胴部片も出土している。

ＳＸ02（第117図、図版84・85）

調査区のほぼ中央に位置する。丘陵裾の傾斜変換線に沿うように南北にのびる溝状遺構である。南北の長さは８ｍ、深さは20㎝前後あるが、水田の造成により上部は削られたと考えられ、本来はこれより大きいものと思われる。不整形に曲がったり、枝分かれしたり、溝の中でも島状に高まる部分があり、人為的に掘り込まれたものか疑問がある。遺構内から須恵器小片が出土している。１は須恵器埦の口縁部、２は埦底部片、３は甕胴部片である。



第118図　田中谷遺跡Ⅳ区遺構外出土遺物実測図（1～11：Ｓ＝1／4、12・13：Ｓ＝1／3、14・15：Ｓ＝2／3）

遺構外出土遺物（第118図、図版81）

1は弥生土器の甕で、口縁部は内傾し、3条の凹線が施されている。草田1期に位置づけられる。2～11は須恵器である。2・3は天井部に輪状つまみを持つ蓋である。2は口縁部にかえりをもつもので、3は口縁部がかえりを持たず、小さく下方に屈曲する。4は古墳時代終末期の小型化した坏身で、5は体部の内弯する高台付坏である。6は高台付皿。7・8は高塊で、7は脚部を欠き、8は三角形の透孔と切り込み状の透孔が2方向に入る。9は壷底部から胴部で、底部に「木」のヘラ記号が入る。10は甕胴部で内面には放射状のタタキが入る。11は壷口縁部である。これらの年代を整理すると、4・7・8が古墳時代終末期の遺物で、4は大谷編年出雲6期で7世紀初頭～前葉、2・5は7世紀中葉～末、3は7世紀末～8世紀中葉頃、6が8世紀中葉～9世紀前半、10が9世紀中葉以降に位置づけられよう。これらのうち、1～5、7～9・11は調査区南側の丘陵裾の一段高い部分の遺物包含層で出土している。

12・13は水田耕作土の下部から出土した。12は大型の鉄製の釘で、長さ26.0cm、幅3.4cm、厚さは2.5cmである。13は椀形鍛冶滓で、周囲は若干欠損しているが、完形に近いと思われる。金属部分は含まない。

14・15は黒曜石製のスクレーパーで、刃部に二次調整が見られる。

3．小　結

Ⅳ区の遺構・遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期と、奈良・平安時代の大きく2つの時代の時代に分けることができる。

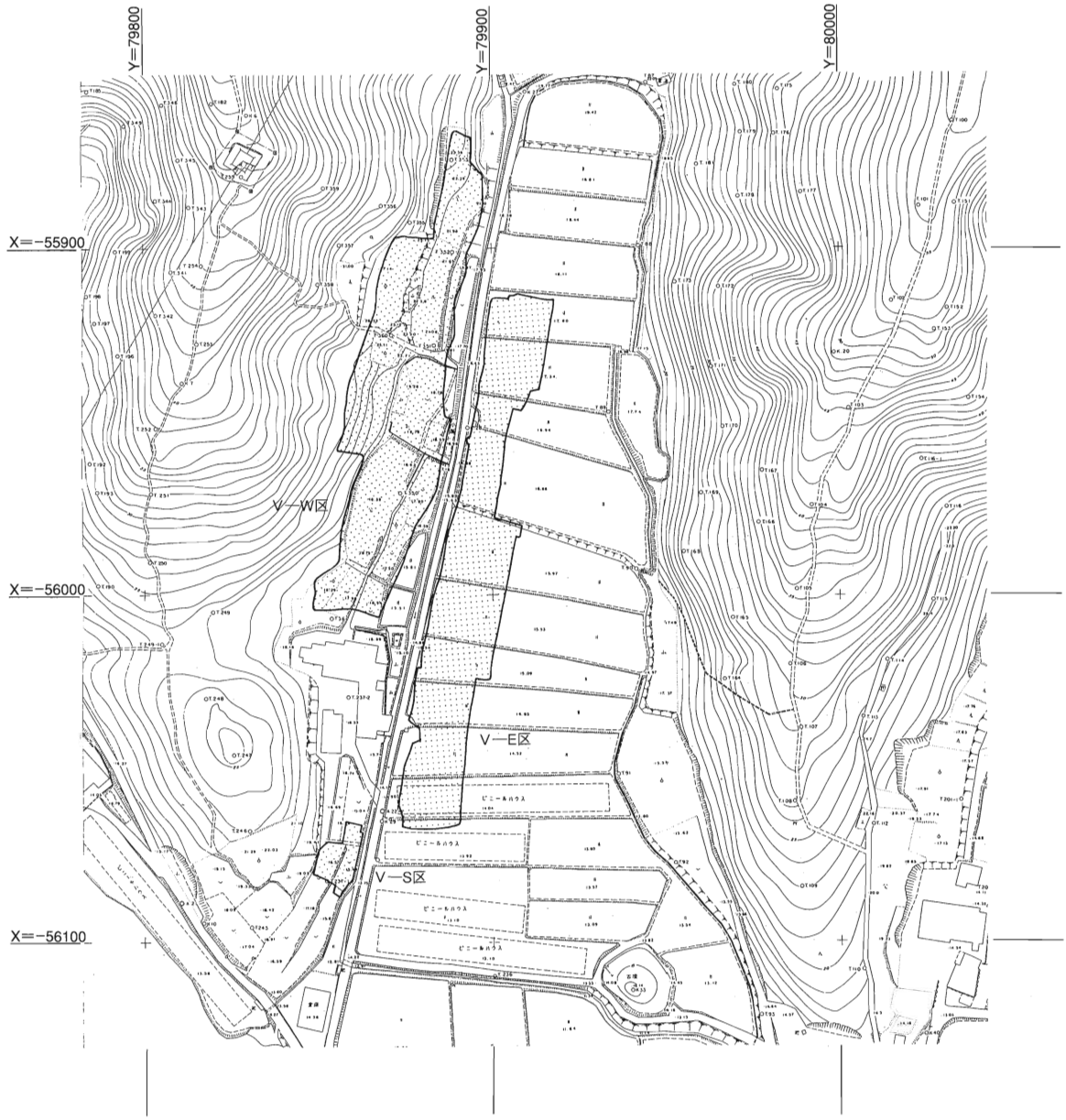
弥生時代後期には、Ⅳ区の北西隅をかすめるかたちで旧河道が流れていた。この河道は常時一定の水量を持って流れていたのではなく、通常は小規模な水流であったものが大雨の時などに水量が増したり、流れを変えたりすることが繰り返されたと推測される。こうした状況は北側で調査されたⅢ区の状況と類似しており（松江市2001）、Ⅲ区の河道がこの部分につながる可能性が高いと思われる。時期的にも草田2期～古墳時代前期の遺物が出土しておりⅣ区の旧河道と矛盾しない。Ⅲ区の旧河道は北から南へ流れていたが、Ⅳ区の北側で北東から南西方向に流れが変わったと考えられる。こうしたことから旧河道の東側の丘陵裾部は当時は現状よりももう少し西に緩やかに張り出していたが、のちの水田整備のために旧地形が削られた可能性もある。なお、後述するⅤ区の旧河道4でも北東から南西方向に流れていたが、Ⅳ区の旧河道は谷を斜めに横切ってこれにつながったと思われる。このほかに弥生時代後期～古墳時代前期の遺構として、ＳＩ01やＳＫ01が確認されており、ＳＢ02・03は遺物を伴わないが、建物の構造からこの時代の遺構の可能性がある。旧河道の東側では丘陵裾からその下の低地にかけて集落が営まれていたが、遺構の密度は旧河道の西側のⅤ区と比べてかなり低いようである。

奈良・平安時代の集落は、丘陵裾部の低地からやや上がった位置に営まれている。現状ではこの時代の建物跡はあまり確認できなかったが、平坦面の東側が大きく削平されていることからこの部分にも遺構が広がっていた可能性も考えられる。なお、塚山古墳の北側の2トレンチではこの時代の水場遺構が確認されており、ここでは墨書土器も出土している。Ⅳ区の遺構もこれと何らかの関連性があったのかもしれない。

第4節　Ⅴ区の調査結果

1．調査の方法と経過

Ⅴ区は、田中谷遺跡の中でも南西側の谷の入り口付近に当たる。調査区は西側に南北にのびる丘陵の中腹からその東側の水田部1／3程度にかけてである。調査面積が広く、丘陵裾と水田部の間には水路が流れているため、丘陵先端付近の南東裾がⅤ－Ｓ区と、調査区東側で水田部分がⅤ－Ｅ区、調査区西側の丘陵裾から中腹にかけてのⅤ－Ｗ区に分けて調査した。調査面積は5,319㎡で、平成12年4月10日から13年1月12日にかけて調査を実施した。なお、北側ではⅡ区が、谷中央部を挟んで東側ではⅣ区が調査されている。



第119図　田中谷遺跡Ⅴ区調査区設定図（S＝1／2000）

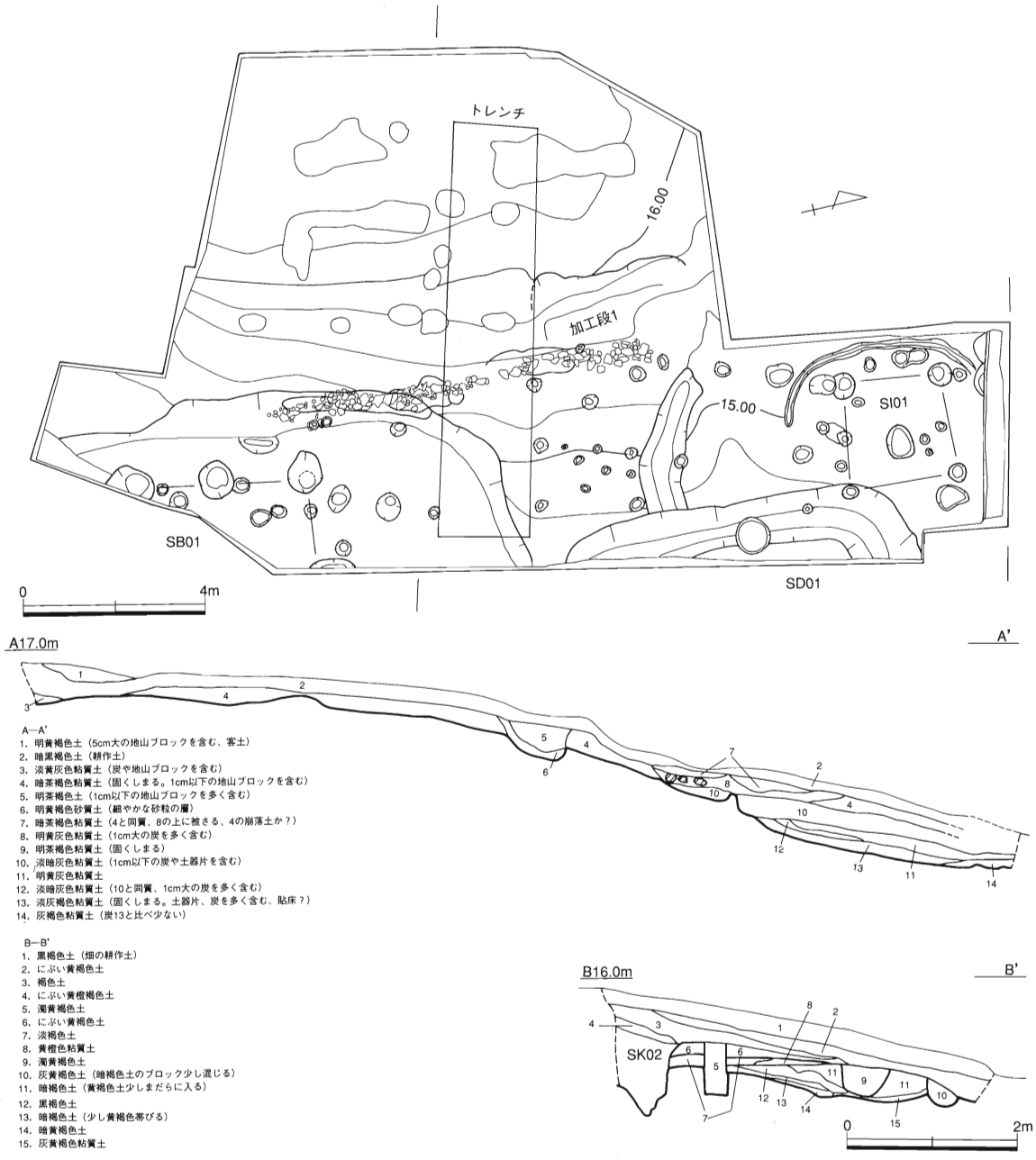
２．Ｖ－Ｓ区の調査

(1) 調査区の概要

Ｖ－Ｓ区は、南北にのびる丘陵尾根先端付近の南東裾に設定した調査区である。西側の丘陵尾根上には田中谷古墳が位置する。

９ｍ×２ｍトレンチを設定したところ、遺物がまとまって出土したほか、石列や遺構と思われる落ち込みが確認できたため、東西約11m、南北約22mの範囲を発掘調査することとなった。

調査の結果、弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる竪穴建物跡１、溝１、７世紀代の掘立柱建物跡１、加工段１のほか、時期不明の土坑１、石列、溝状遺構３、焼土坑１などを検出できた。



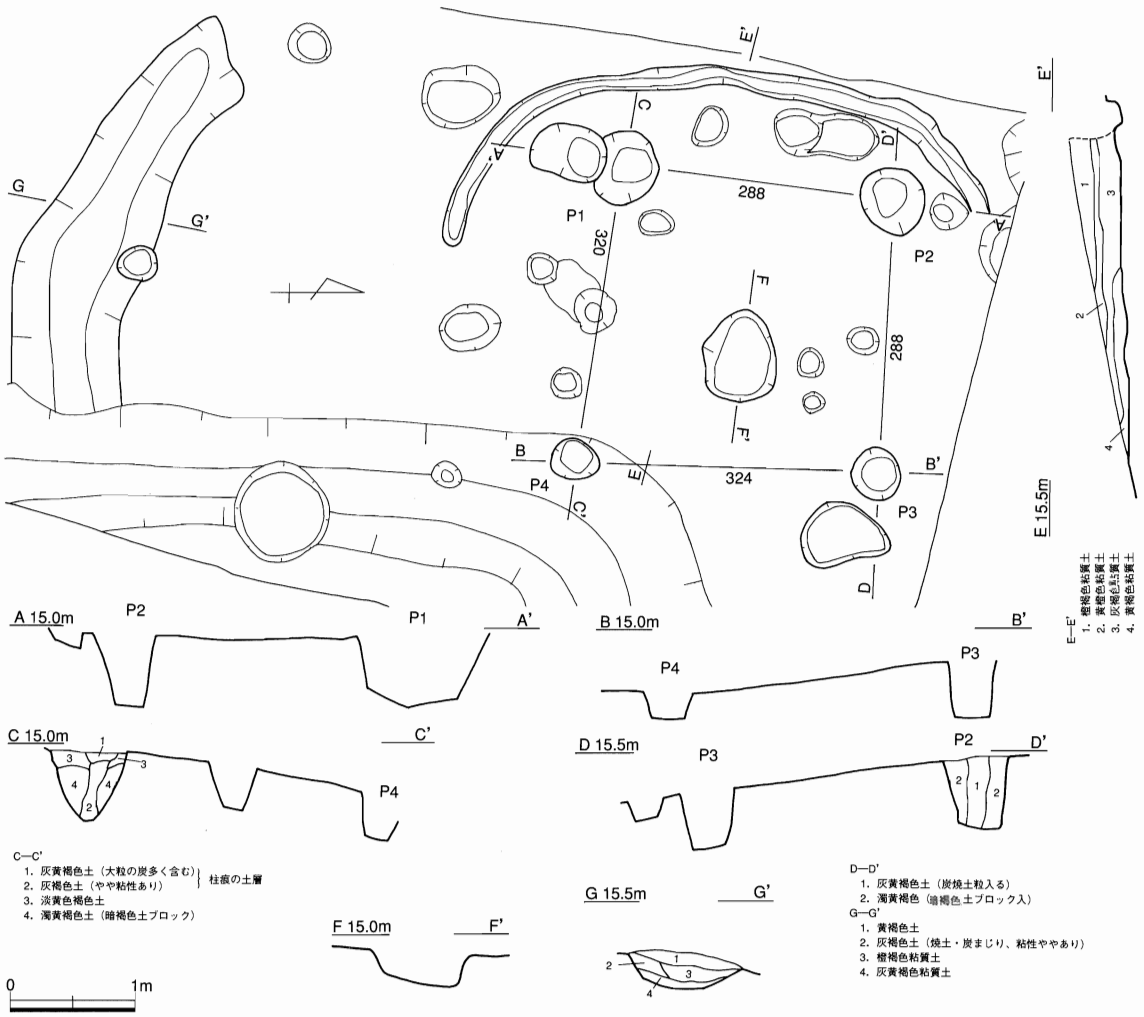
第120図　田中谷遺跡Ｖ－Ｓ区全体図、土層断面図（全体図：Ｓ＝1／150、断面図：Ｓ＝1／80）

(2) 竪穴建物

ＳＩ01（第121～123図、図版89・109）

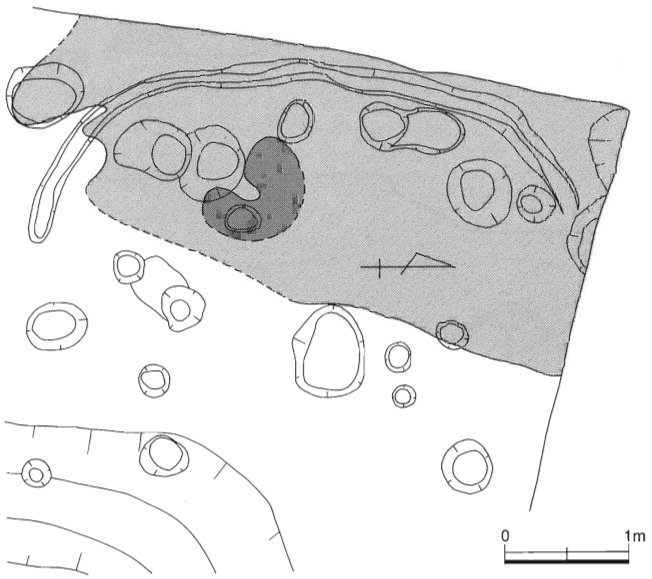
調査区の東側に位置する。上面は削平されたためか壁面の立ち上がりは確認できず、床面で検出できた。４本の主柱穴と中央土坑、それに壁体溝と周溝の一部が残存しており、壁体溝から南北4.4m以上の隅円方形の建物であったと考えられる。柱間距離はＰ１－Ｐ２、Ｐ２－Ｐ３が2.88m、Ｐ３－Ｐ４が3.24m、Ｐ１－Ｐ４が3.20mで、柱配置はやや不整形な方形になる。Ｐ４はＳＤ01と重複している。床面には貼床粘土と思われる黄褐色粘質土が残っており、この上面の標高は15.0mであった。中央土坑は建物の東の柱間よりの位置で検出され、内部には焼土ブロックや炭が含まれており、炉として機能したものと思われる。周溝は西側の方が削平されていたためか残っていないようであるが、南側では残存しており、ＳＤ01に切られていた。ＳＩ01では時期の分かる遺物は出土していないが、周溝を切っているＳＤ01から古墳時代前期の土器が出土していること、平面プランや構造から弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と思われる。

なお、ＳＩ01の上層では、黄橙色粘質土による貼床面が検出できた。貼床面は検出できた範囲で南北5.3m、東西２mであるが、調査区北壁や西壁よりも外に広がりそうである。貼床面の標高は15.3mである。ＳＩ01の壁面の立ち上がりが残っていなかったのはこの貼床面を持つ建物もしくは加工段の造成によって削られたものと思われる。貼床面では赤色に酸化した焼土も認められる。この面の上から７～８世紀の土器や鉄滓が出土している。１は擬宝珠つまみを持つ須恵器蓋で口縁部



第121図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区ＳＩ01実測図（Ｓ＝1／80）

にはかえりがつく。２は須恵器腺で底部は平底で、口頸部に緩やかな段がつく。３は把手付の大型鉢である。４は楕円形状の鉄滓で金属部分は含まない。鍛冶滓と思われる。



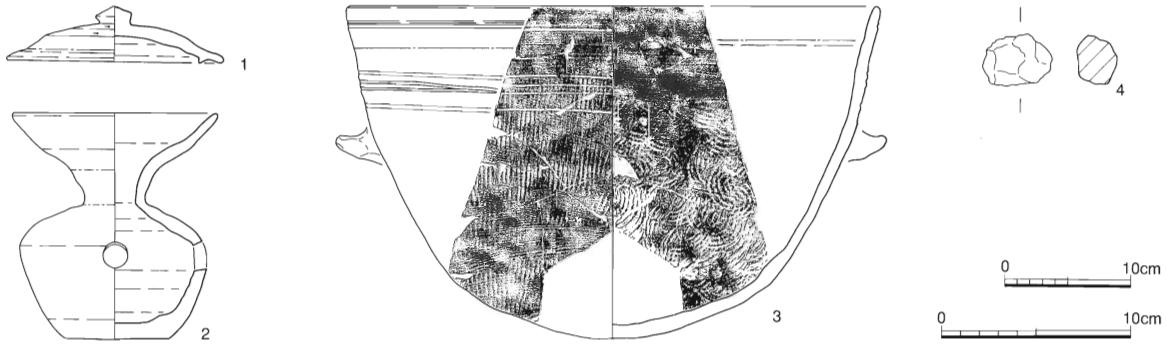
第122図　田中谷遺跡Ｖ－Ｓ区ＳＩ01上層貼床面実測図（Ｓ＝1／60）

（3）掘立柱建物

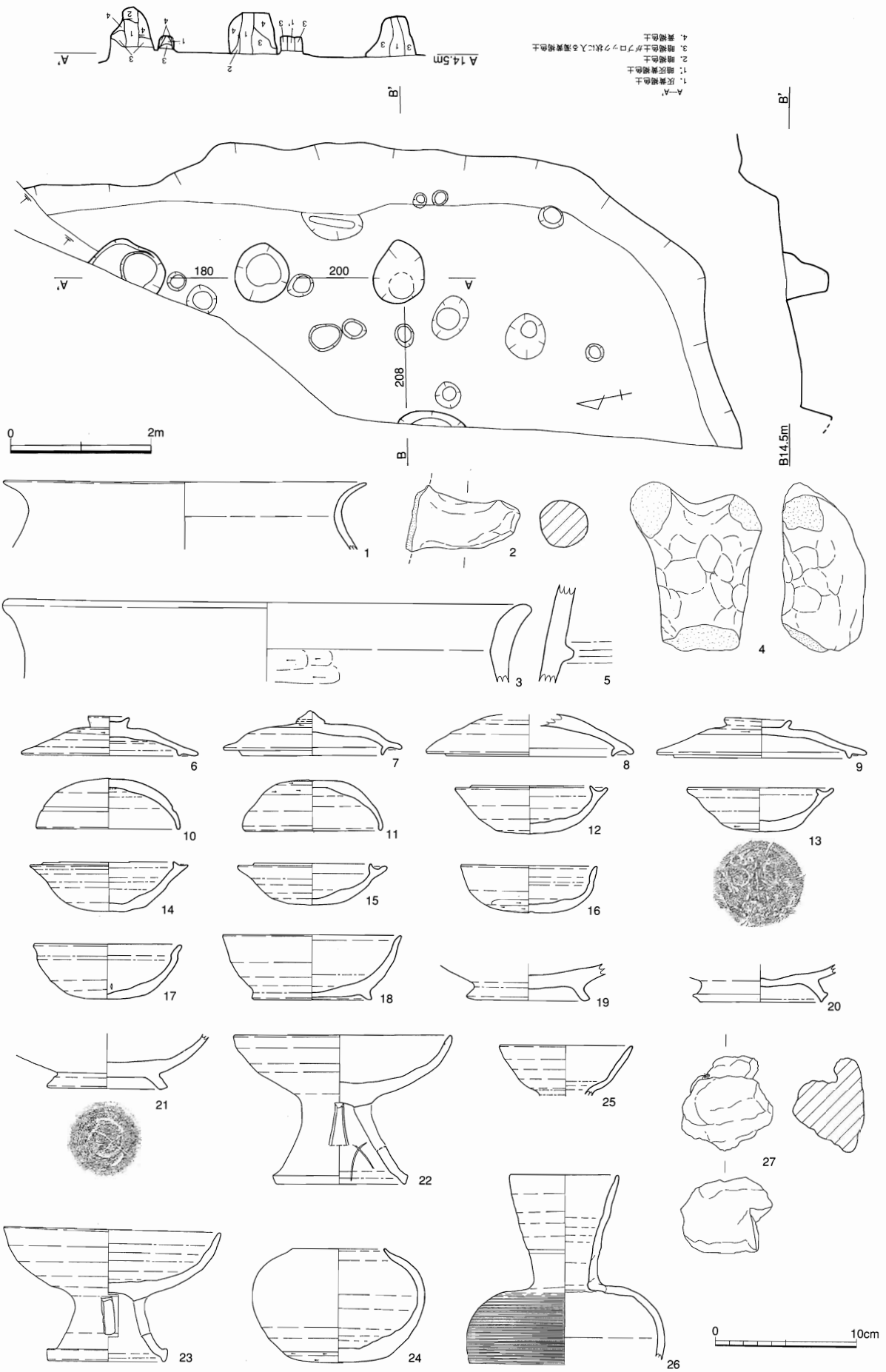
ＳＢ01（第124図、図版89・90・109～111）

調査区の南東に位置する。南北10.3m以上、東西４ｍ以上の加工段を伴う、南北２間以上×東西１間以上の掘立柱建物跡である。規模は南北3.8m以上、東西2.8m以上で、軸はＮ－９°－Ｅを向く。柱穴は長径0.7m～１ｍ程度、深さ約0.6ｍと大きく掘り込まれている。ＳＢ01の建てられた加工段は、掘り込みの深さ約0.7mで、立ち上がりは不明瞭である。加工段底面の標高は約14.5mである。加工段下端とＳＢ01西壁までの間隔は約１ｍで狭いが、北側には約４ｍの広い空間が見られる。

加工段の覆土中から１～27の遺物が出土した。１は土師器甕の口縁部で、大きく外反する。２は甑の把手、３は移動式竈の口縁部、４は土製支脚の破片である。５は円筒埴輪の破片で凸帯は断面台形で、高さは８㎜ある。北西の丘陵尾根上に位置する田中谷古墳から転落してきた可能性が考えられる。６～26は須恵器である。６～９は蓋、10・11は坏蓋である。10の口縁部外面には１条の沈線が巡っている。６～９は口縁部にかえりが付き、天井部につまみがつく（と思われる）ものである。６・９は輪状つまみを、７には擬宝珠つまみをもつ。12～15は坏身、16・17は埦、18～21は高台付埦である。12～15は口縁部に蓋受けが付くもの、16・17は口縁部に受部を持たず底部が丸いもの、18～21は底部に高台が付き体部が内湾しながら立ち上がるものである。10の底部には円形竹管状のスタンプが見られる。22・23は高坏で、22には三角形の透孔が、23には方形の透孔が２方向に入れられている。22には脚部内面に「×」のヘラ記号が見られる。24は短頸壺、25は腺の口縁部と思われる。26は長頸壺で風船技法で作られている。口縁部の下部には粘土帯の巻き上げ痕が残る。27は鉄滓で、金属部分は含まない。椀形鍛冶滓と思われる。須恵器の器種構成からみて、ＳＢ01は大谷編年出雲６Ｂ期の遺構と考えられる。



第123図　田中谷遺跡Ｖ－Ｓ区ＳＩ01上層出土遺物実測図（1～3：Ｓ＝1／4、4：Ｓ＝1／6）



第124図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区ＳＢ01・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／80、遺物：Ｓ＝1／4）

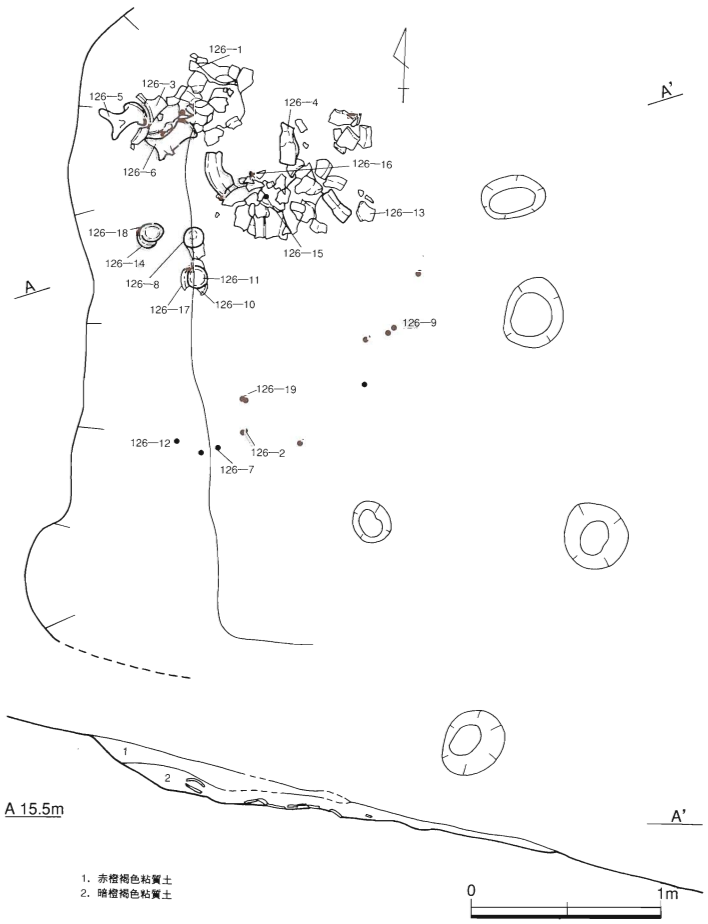
（4）加工段

加工段１（第125・126図、図版90・112・113）

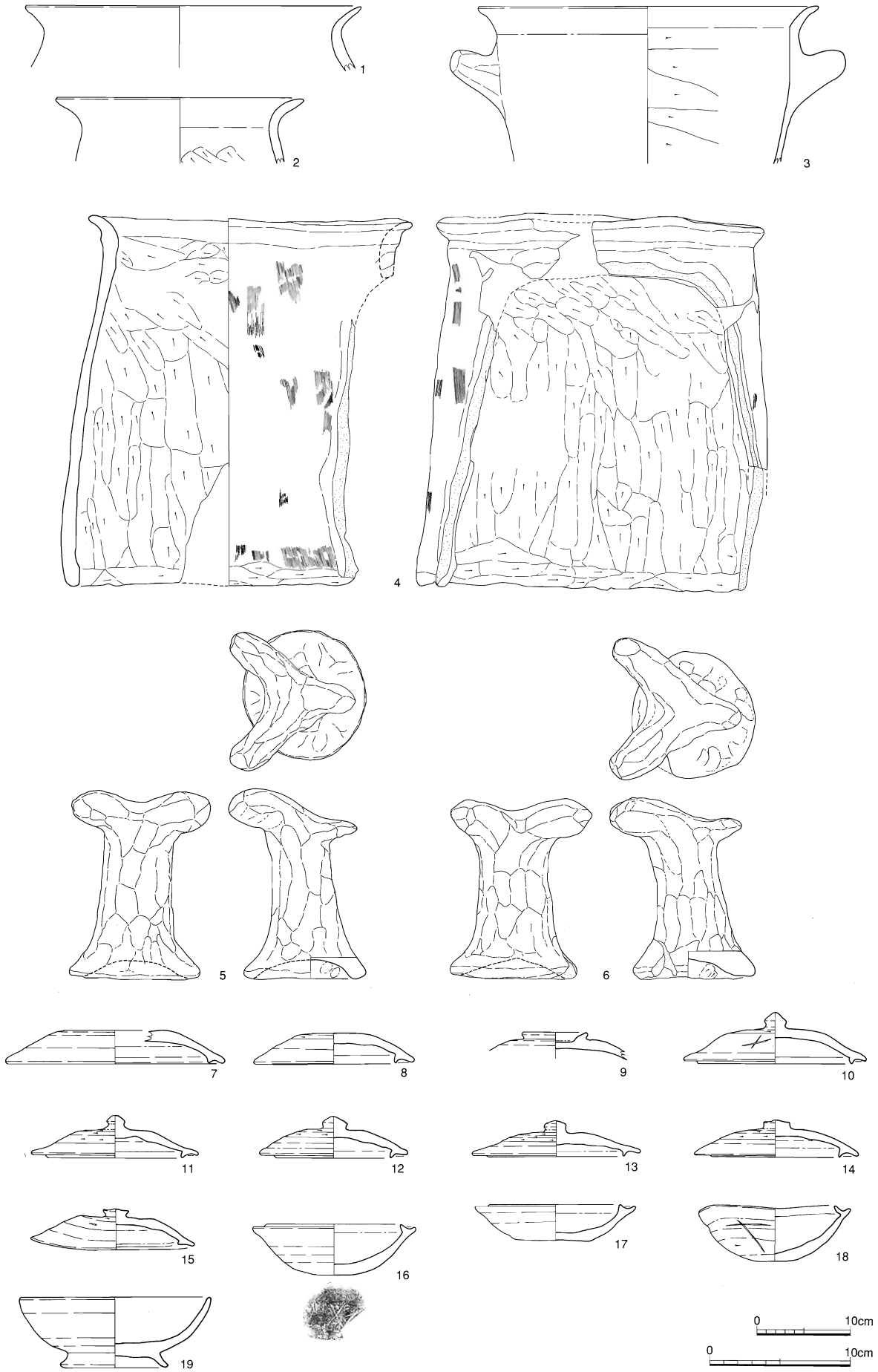
調査区のほぼ中央、ＳＢ01の北西に位置する。現状では南北3.5mの加工段であるが、北側が後世に削られているようであり、本来はもう少し広かったかもしれない。加工段に確実に伴うと思われるような柱穴はなく、建物を伴わない可能性が考えられる。段の高さは現状で0.3m程度で、立ち上がりは不明瞭である。加工段の床面は地山で、貼床はされていない。床面の標高は15.6mである。遺構の北側で、移動式竈が原位置と思われる状態で倒れており、その西側には土師器甕、甑、土製支脚が加工段の立ち上がり上面に横たわるような状態で密集しており、これも遺棄された状態をよくとどめているように思われた。須恵器蓋坏類は若干地山面から浮いた状態で出土しているものもあるが、この遺構に伴うものとみても差し支えなさそうである。

１・２は土師器甕で大小がある。３は土師器甑である。１・３は土製支脚などとともに原位置につぶれた状態で出土しており、本来の残存部位はこれよりも大きいと思われるが、風化が著しく、細片化していたため取り上げや接合がうまくできなかった。４は移動式竈で、原位置で出土している。体部が直立気味に立ち上がり、裾があまり開かない器形をしており、器壁も通常みられる移動式竈と比べて薄手の印象を受ける。体部外面に縦方向のハケが、体部内面の基部に横方向のケズリ、下半に縦方向のケズリ、上部に斜め方向のケズリが施されている。庇部を欠くが、遺構内では出土していないことから、この遺物が遺棄される以前にはがれ落ちたと思われる。５・６は土製支脚で、三又突起のものである。７～19は須恵器である。７・８は坏蓋、９～15は蓋である。９は口縁部を欠くが、そのほか口縁部にかえりを持つ。７は天井部を欠き、８はつまみを持たない。９は輪状つまみを持つが、その他は擬宝珠つまみを持つ。７は他と比べて大型である。10は外面に「×」のヘラ記号が刻まれている。16～18は坏身で、18の外面には「×」のヘラ記号が見られる。19は高台付埦で、体部が内弯しながら開く器形をしている。

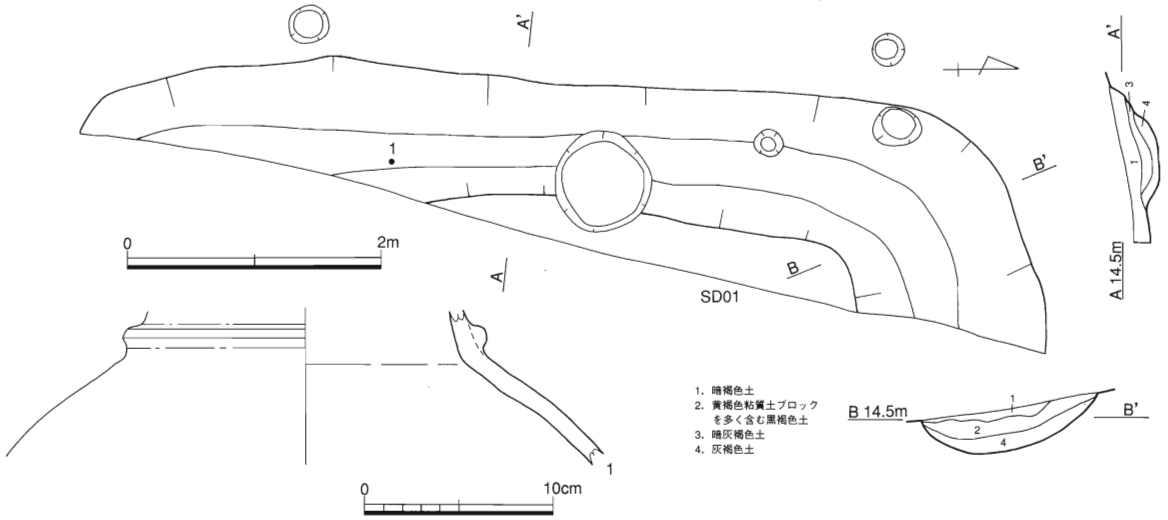
遺構の時期は、遺物から大谷編年出雲６Ｂ期で、ＳＢ01と同時期と考えられる。遺構の性格については、ＳＢ01の付近に設けられていることから、これに付属する施設と考えられ、遺物の出土状態などから炊事場の機能を持っていた可能性が想定される。



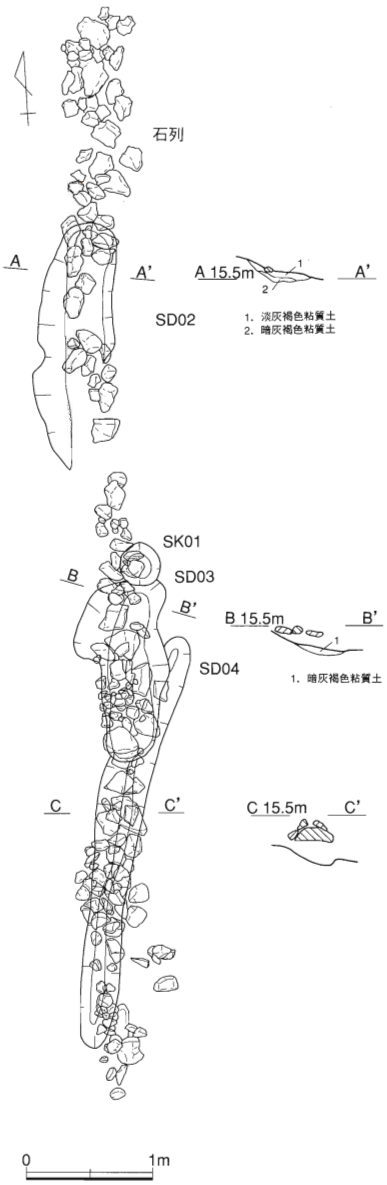
第125図　田中谷遺跡Ｖ－Ｓ区加工段１実測図（Ｓ＝1／40）



第126図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区加工段１出土遺物実測図（1～3・7～19：Ｓ＝1／4、4～6：Ｓ＝1／6）



第127図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区ＳＤ01・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／60、遺物：Ｓ＝1／4）



第128図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区石列、ＳＤ02～04実測図（Ｓ＝1／60）

（5）溝

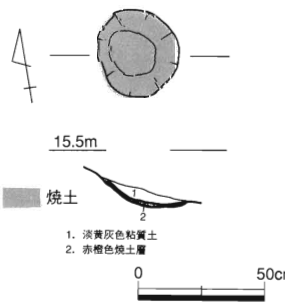
ＳＤ01（第127図、図版91・113）

調査区の北東、ＳＩ01の東に位置する。幅0.9～1.5m、深さ0.5mの溝である。確認できた南北の長さは7.6mだが、東側の調査区外にさらにのびている。北側では角を持つように東へ折れ曲がっており、南側も上端の様子から東へ折れ曲がるように思われる。覆土中から頸部付け根に凸帯が巡る大型壺の肩部破片（１）が出土している。古墳時代前期の遺構で、方形の溝を巡らせる墳墓の可能性も考えられる。

石列、ＳＤ02～04（第128図、図版91）

調査区の中央に位置する。石列は拳大から20㎝大の石が用いられ南北8.7mの長さでのび、ＳＢ01の加工段、ＳＤ02～04、ＳＫ01の上に作られている。遺構の時期・性格は明らかではないが、道路遺構の可能性が考えられる。

ＳＤ02は石列を取り外して検出できた長さ２m、幅0.6mの溝で、石列と同じように南北にのびている。時期・性格は不明だが、石列を据えるための溝とも思われる。ＳＤ03，04も石列の下から検出された遺構でＳＤ03はＳＤ04を切って、ＳＫ01に切られている。ＳＤ03，04は石列とほとんど同じ位置に作られており、何らかの関連があるかもしれない。

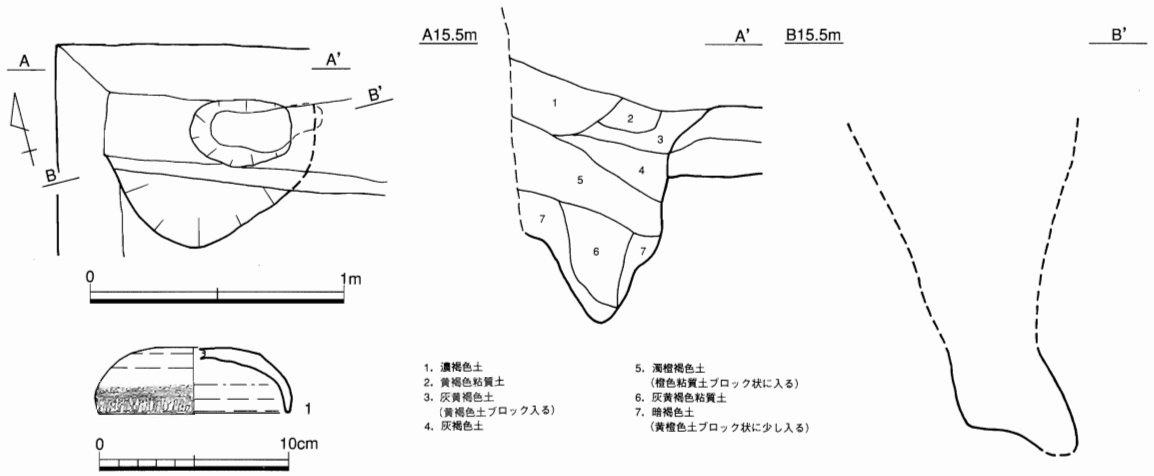


第129図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区ＳＫ01実測図（Ｓ＝1／30）

（6）土坑

ＳＫ01（第129図、図版113）

石列の下から検出された径0.3mの焼土坑。ＳＤ03を切っている。



第130図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区ＳＫ02・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／30、遺物：Ｓ＝1／4）

ＳＫ02（第130図、図版114）

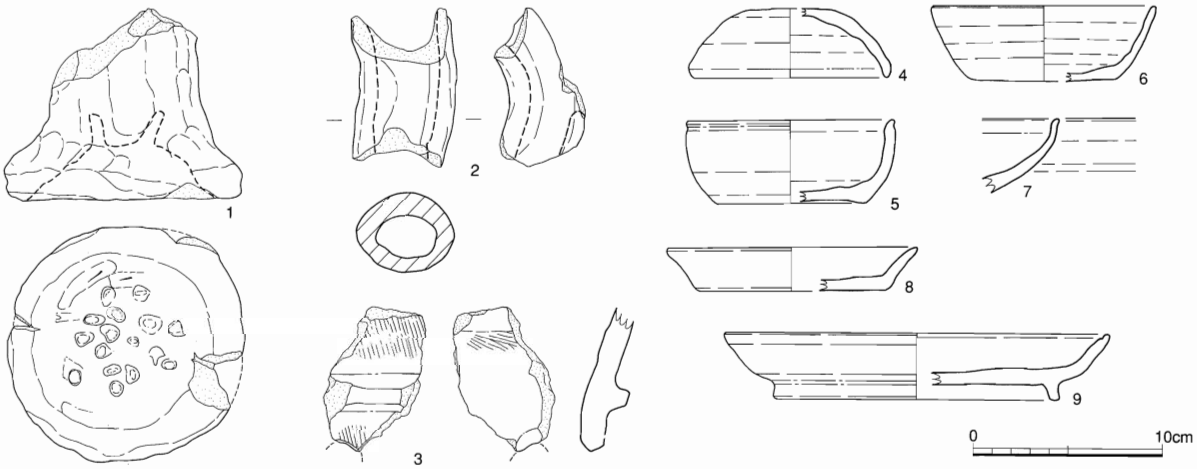
調査区の北端に位置し、調査区北壁の断面にも遺構はかかっている。遺構の北側はサブトレンチによって断ち割られているが、底部付近はかろうじて残っており、深さはおよそ1.2mになる。底部は先細りになりオーバーハングしている。１の須恵器蓋が出土している。口縁端部には細かいタタキ目のような調整が見られる。ＳＩ01上層貼床面を切っており、これより新しい遺構と考えられる。

１トレンチの遺物（第131図、図版114）

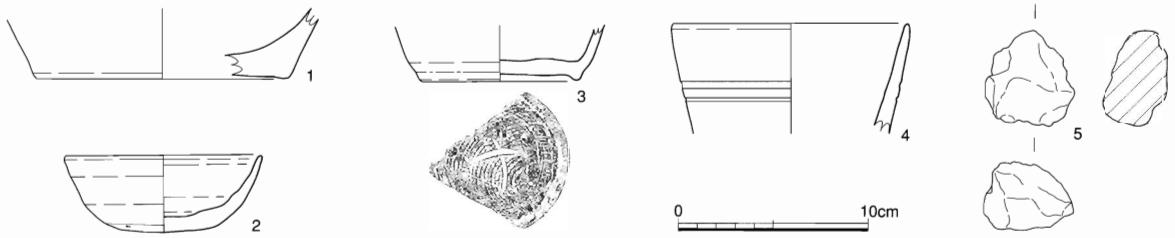
１は土製支脚で下面に棒状の刺突痕が多く見られる。２は中空に作られた土製品で、形象埴輪の腕の部分か。３は埴輪片で凸帯の高さは1.0cmである。２・３は田中谷古墳から転落したものか。４～９は須恵器で、４は坏蓋、５～７は埦、８・９は皿で、９には高台が付く。

遺構外の遺物（第132図、図版113）

１は厚手の平底で弥生土器と思われる。２・３は須恵器埦、４は壷口縁部。５は鉄滓である。



第131図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区１トレンチ出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）



第132図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｓ区遺構外出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）

3．V－E区の調査

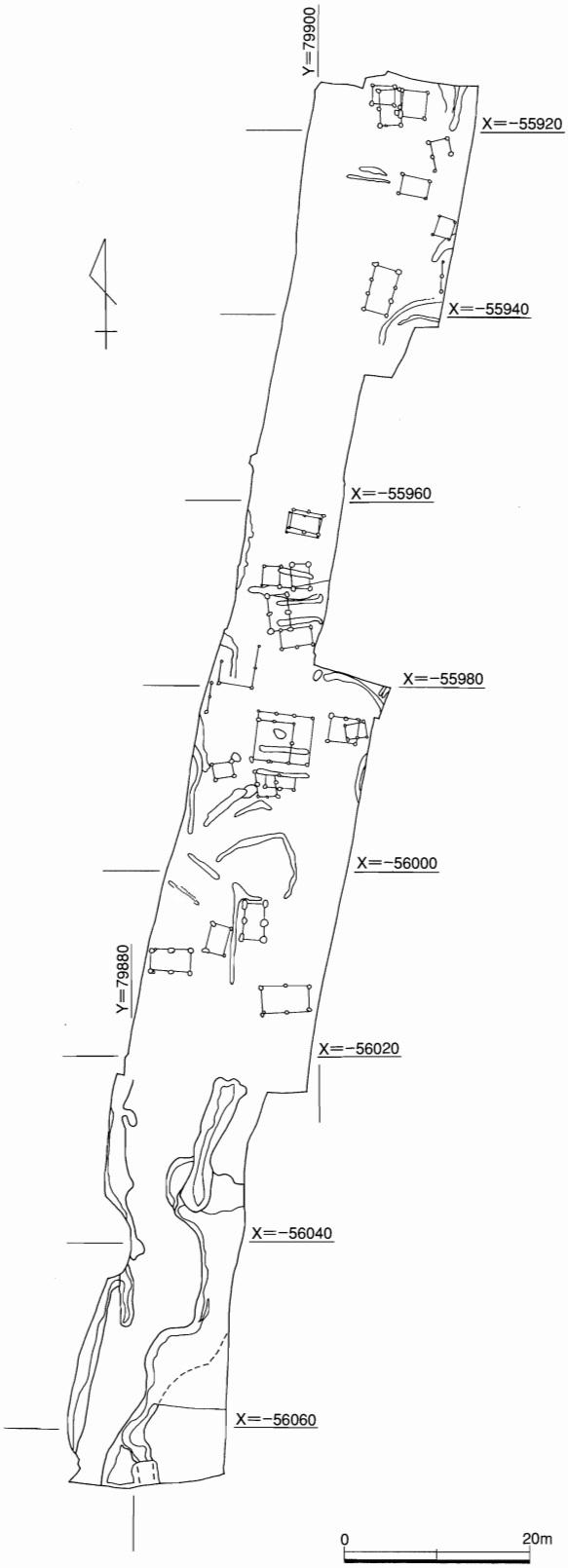
(1) 調査区の概要

V－E区は、東側の水田部に設定した調査区である。南北の長さ155m、東西の幅20mと南北に細長い。基本層序は、水田耕作土・造成土、弥生時代後期の遺物を含む黒褐色土層（遺物包含層）、少量の弥生土器片や木炭を含む灰黄褐色土層（漸移層）、遺物を含まない黄褐色～褐色土の基盤層に大きく分けられる。このうち弥生時代後期の遺物包含層、漸移層は部分によっては確認できず、圃場整備などで削られたものと思われる。なお、漸移層から掘り込まれた遺構もある。

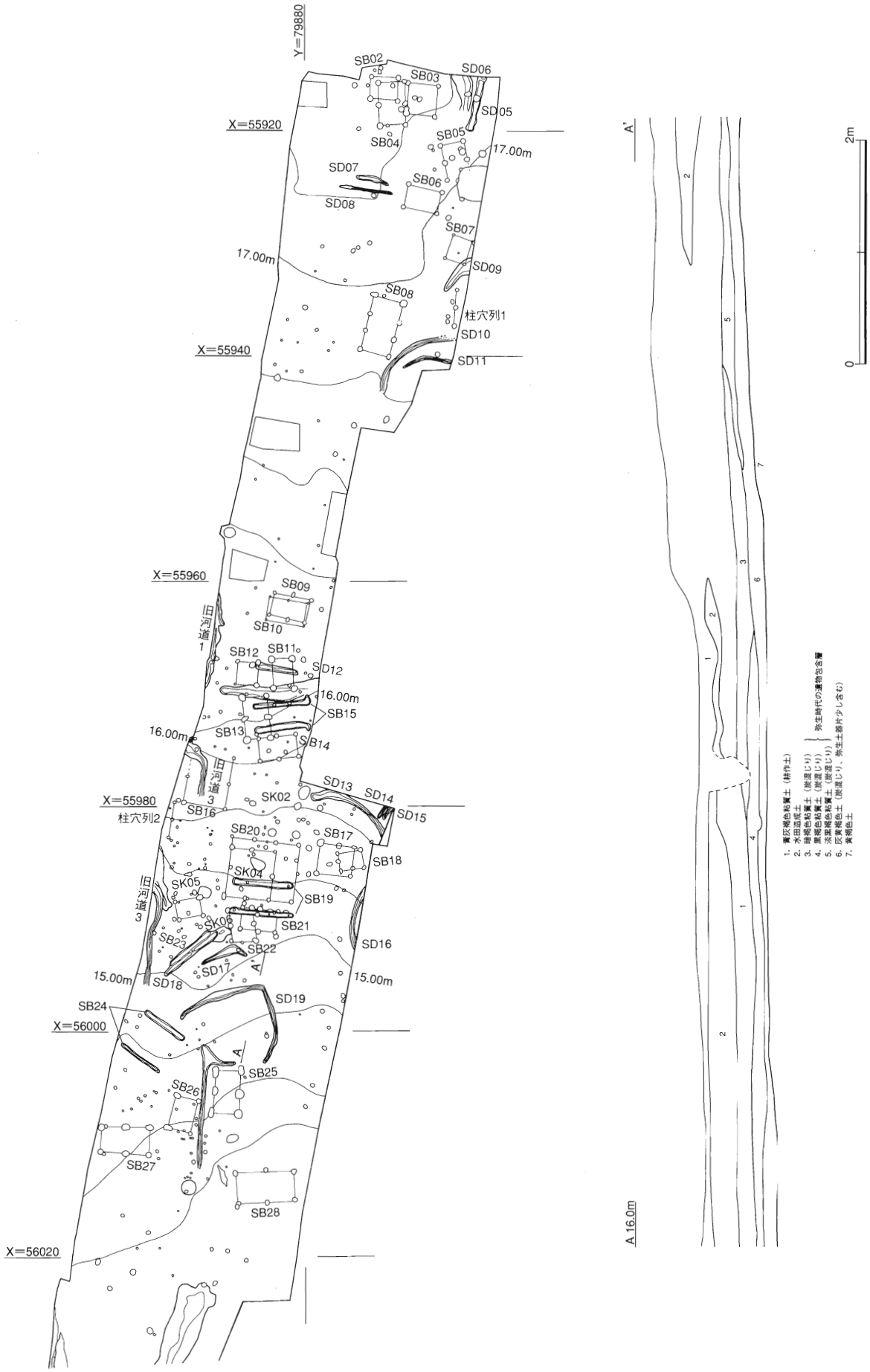
調査の結果、掘立柱建物跡27棟、溝、土坑、旧河道、井戸跡などの遺構が検出された。掘立柱建物跡は、調査区の北側2/3程度の範囲にまとまって確認されており、弥生時代後期の遺物包含層を掘り下げて遺構が検出できること、ピット内から出土した遺物で時期の分かるものは弥生時代後期と思われるものが主であり、これより新しい遺物を含むものはほとんど見られないこと、1間×1間、もしくは2間×1間の単純な構造のものが多い、といった理由から、これらの多くが弥生時代後期のものと考えられる。なお、掘立柱建物跡の中には、溝状の柱掘り方を平行に配置した布掘建物跡が3棟検出された。

調査区南側約1/3の範囲では弥生時代後期の旧河道や井戸跡が確認できたほか、調査区の西側で古墳時代後期から中世にかけての遺物を含む旧河道が検出された。旧地形や集落構造を考える上で貴重なデータが得られた。

なお、平成12（2000）年9月17日の段階で現地説明会を開催し、80人の参加者があった。



第133図　田中谷遺跡V－E区全体図（S＝1／800）



第134図　田中谷遺跡Ⅴ－E区遺構配置図（建物群）、土層断面図（配置図：S＝1／500、断面：S＝1／50）

(2) 掘立柱建物跡・柱穴列

ＳＢ02（第135・136図、図版94）

調査区北端に位置する。1間×1間の掘立柱建物跡と思われるが、北側の調査区外に建物がのびていた可能性もある。現状での東西長は2.4mで、南北長2.08m、床面積は4.8㎡になる。長軸は真東を向いている。柱穴はいずれもほぼ円形で、径0.4～0.5m前後、深さは0.25m前後である。ＳＢ04とは重複しているが前後関係は不明である。このほか、ＳＢ03とも近接している。遺物は、柱穴内から弥生土器らしきものの小片が出土しているのみで時期は特定できない。

ＳＢ03（第135・137図、図版94・120）

調査区北端に位置する。1間×1間の掘立柱建物跡と思われるが、北側の調査区外に建物がのびていた可能性もある。現状での東西長は2.68mで、南北長2.76m、床面積は7.48㎡になる。長軸方向はＮ－5°－Ｅである。柱穴は、Ｐ3が他のピットと重なったようで瓢箪形に見えるが、他はいずれもほぼ円形で、径0.3～0.4m前後、深さは0.2～0.4mである。Ｐ1はＳＢ04の柱穴に切られていることから、ＳＢ04よりも古いことが分かる。ＳＢ08との距離は0.8mと近接しており、これとも時期が異なる可能性が考えられる。

なお、Ｐ4から黒曜石製のスクレーパーが1点出土している。

ＳＢ04（第135・138図、図版94）

調査区北端に位置する2間×1間の掘立柱建物跡である。桁行長3.88m、梁行長2.36m、床面積は9.2㎡になる。棟方向はＮ－3°－Ｗである。柱穴はいずれもほぼ円形で、径0.4m前後、深さは0.2～0.4m前後である。Ｐ4・5・6には柱痕が認められた。柱痕の径は15㎝である。Ｐ4がＳＢ03の柱穴を切っていることから、ＳＢ03よりも新しいことが分かる。また、ＳＢ02とも一部が重複しているが前後関係は分からない。遺物は柱穴内から弥生土器らしきものの小片が出土している。

ＳＢ05（第139図）

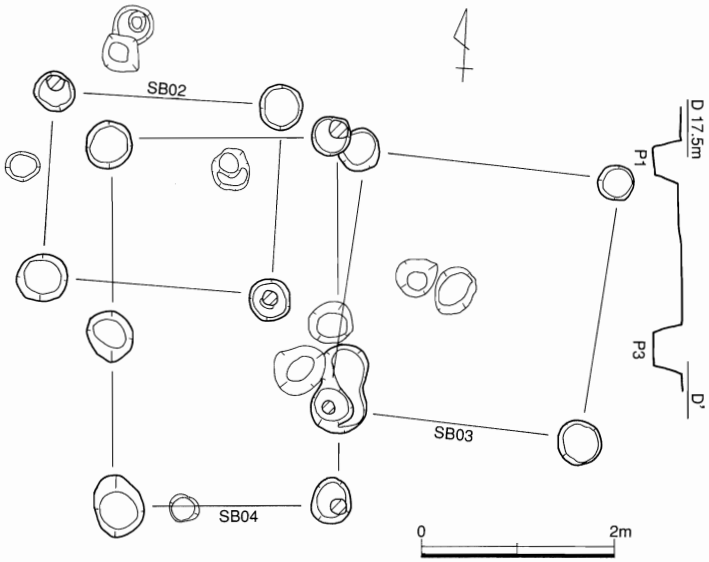
調査区の北東に位置する2間×1間の掘立柱建物跡である。南東側の柱穴は攪乱によって失われている。桁行長3.16m、梁行長2.00m、床面積は6.3㎡になる。棟方向はＮ－14°－Ｗである。柱穴はいずれもほぼ円形で、径0.4m前後、深さは0.1～0.3m前後である。Ｐ1には径15㎝の柱痕が認められた。遺物は出土しておらず、時期は特定できない。

ＳＢ06（第140図、図版94）

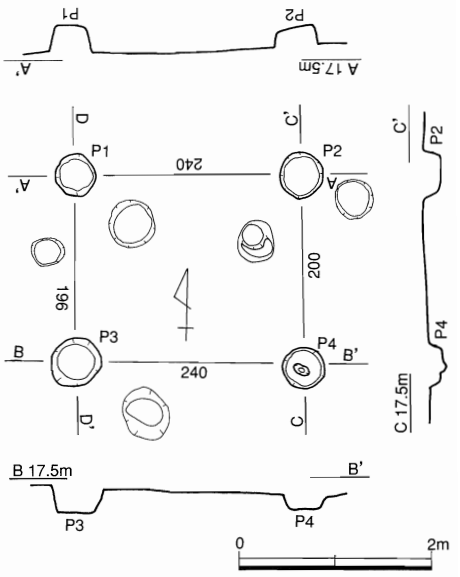
調査区の北側に位置し、北東へ1.4m先にはＳＢ05がある。1間×1間の掘立柱建物跡で、桁行長3.00m、梁行長は2.00m、床面積は6.0㎡になる。棟方向はＮ－76°－Ｗである。柱穴はいずれもほぼ円形で、径0.4m前後、深さは0.2m前後である。Ｐ1には径10㎝の柱痕が残されている。遺物は、柱穴内から弥生土器片が出土している。

ＳＢ07（第141図、図版95）

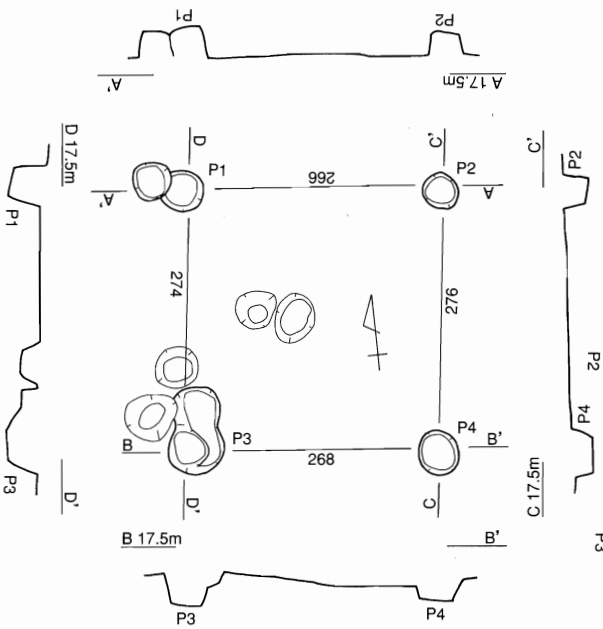
調査区の北東に位置し、Ｐ3は調査区の東壁面にかかっている。北西へ約2mのところでＳＢ06がある。1間×1間の掘立柱建物跡のように思われるが、東側の調査区外へ建物がのびる可能性も考えられる。現状で確認できる南北の長さは2.24m、東西の長さは1.84mで、床面積は4.1㎡になる。長軸の方向はＮ－18°－Ｅである。柱穴はいずれもほぼ円形で、径は0.25m前後、深さは0.4m前後である。遺物は、柱穴内から弥生土器片と思われるものが出土している。

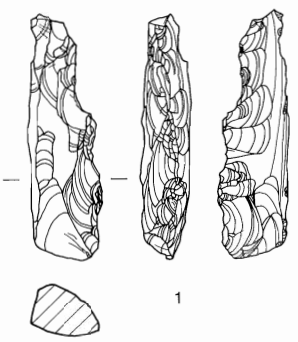


第135図　田中谷遺跡Ⅴ－E区ＳＢ02～04平面図（Ｓ＝１／80）

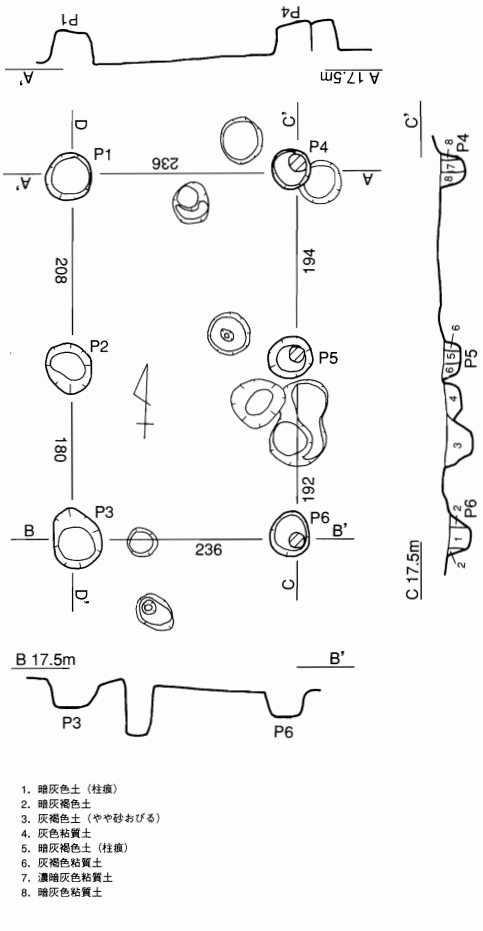


第136図　田中谷遺跡Ⅴ－E区ＳＢ02実測図（Ｓ＝１／80）





第137図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ03・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／80、遺物：Ｓ＝2／3）



第138図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ04実測図（Ｓ＝1／80）

ＳＢ08（第142図）

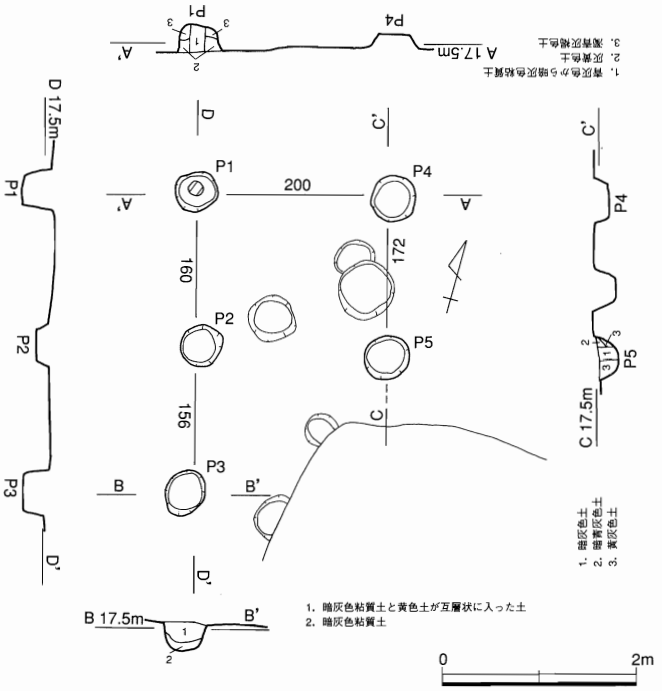
調査区の北側に位置する南北３間×東西１間の掘立柱建物跡である。この南東にはＳＤ10・11がある。桁行長5.04m、梁行長は2.70m、床面積は13.6㎡で、棟方向はＮ－17°－Ｅである。桁行の柱間距離は、建物の両端側では1.6～1.8mであるのに対して、中央の柱間は1.5m前後とやや狭いように思われる。Ｐ３・６は一部が暗渠によって切られている。柱穴は楕円形および円形のものがあり、長さは0.4～0.7m、深さは0.2m弱～0.3m前後である。Ｐ５には径0.2mの柱痕が認められた。遺物は出土しておらず、時期は明確ではない。

ＳＢ09（第143図）

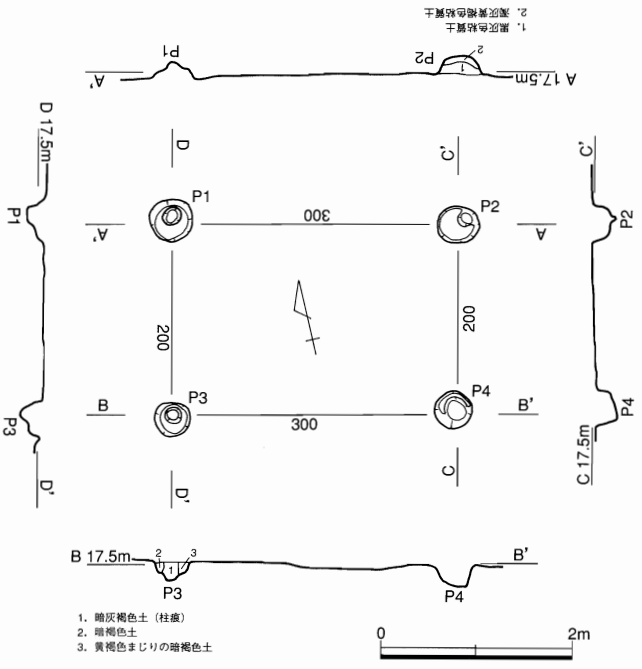
調査区の中央から北よりに位置する東西２間×南北１間の掘立柱建物跡である。桁行長3.32m、梁行長は2.04m、床面積は6.8㎡になる。棟方向はＮ－76°－Ｗである。柱穴は楕円形から円形で、長さ0.3～0.6m弱、深さは0.2m前後である。Ｐ１・２・３・６には径15㎝の柱痕が残されている。Ｐ６は暗渠やＳＢ10の柱穴に切られており、このことからＳＢ10より古い時期の建物であることが分かる。遺物は、柱穴内から弥生土器と思われる土器小片が出土している。

ＳＢ10（第143図）

調査区の中央から北よりに位置し、ＳＢ09と重複する。東西２間×南北１間の掘立柱建物跡と思われ、桁行長3.44m、梁行長は2.08m、床面積は7.2㎡になる。棟方向はＮ－81°－Ｗである。建物南側の柱列には中央の柱穴がなく、柱穴はいずれも径0.15m前後、深さは0.2m弱と小さいこと、柱穴埋土が他の建物柱穴の埋土と異なることから、掘立柱建物跡とするにはやや疑問もある。Ｐ５はＳＢ09の柱穴を切っており、ＳＢ09よりも新しい遺構であることが分かる。遺物は、出土していない。



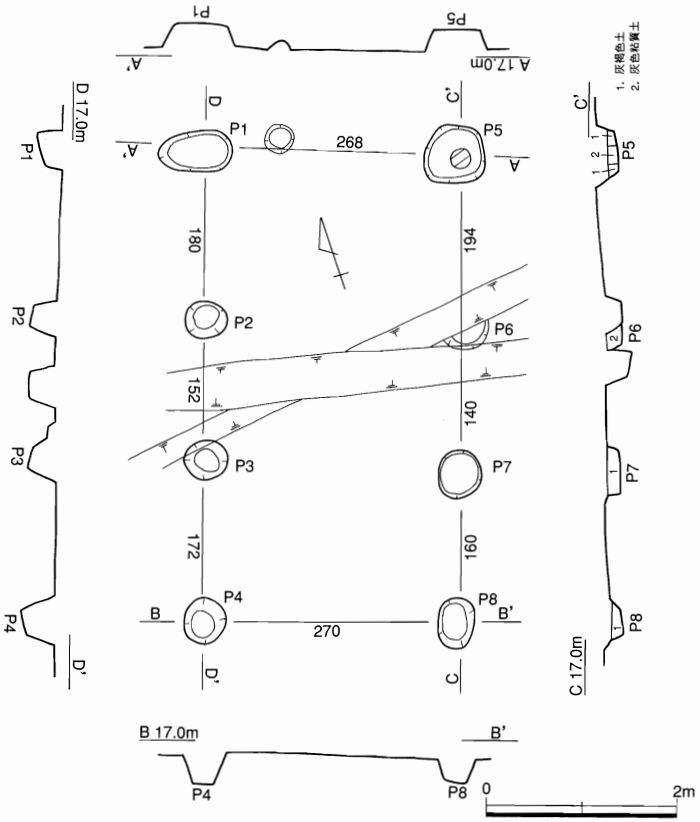
第139図　田中谷遺跡Ｖ－Ｅ区ＳＢ05実測図（Ｓ＝１／80）



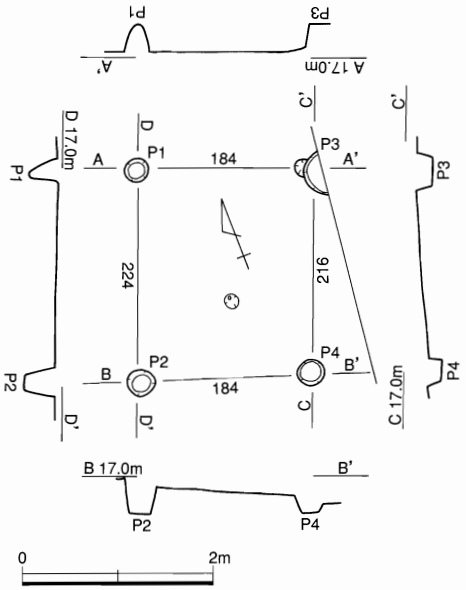
第140図　田中谷遺跡Ｖ－Ｅ区ＳＢ06実測図（Ｓ＝１／80）

ＳＢ11（第144・145図、図版93）

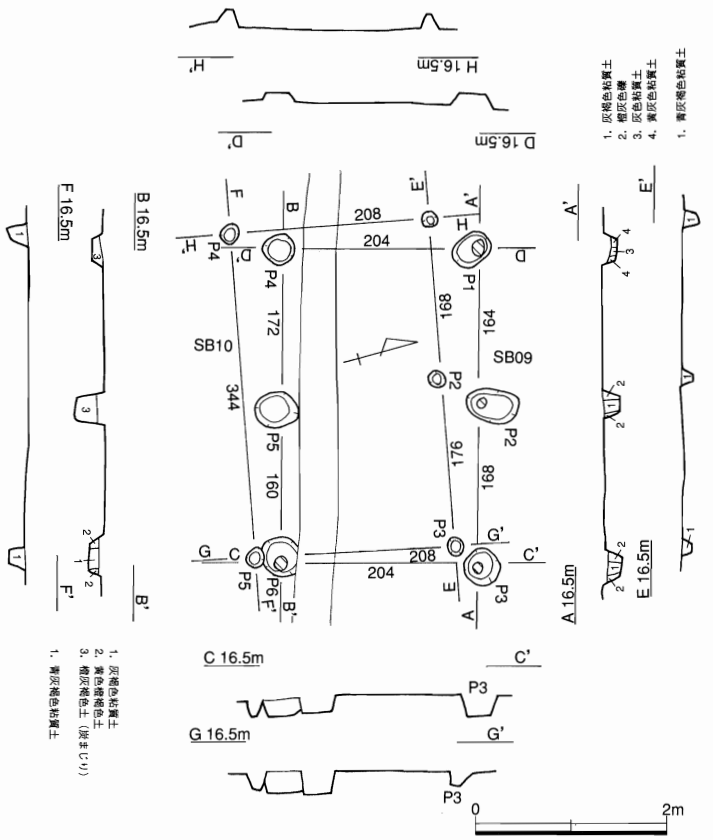
調査区の中央からやや北よりに位置する１間×１間の掘立柱建物跡である。ＳＤ12と重複しており、Ｐ３・４はＳＢ15の溝を切っている。また、ＳＢ12・13とも近接している。桁行長2.60m、梁行長は1.84m、床面積は4.1㎡になり、棟方向はＮ－１°－Ｗである。柱穴はいずれもほぼ円形で、径0.5～0.6m前後、深さは0.2m前後である。遺物は、小片のため図示しなかったが柱穴内から草田１期の土器が出土している。なお、ＳＢ11の柱穴に切られているＳＢ15の溝で草田２期と思われる土器が出土していることから、本遺構はこれよりも新しい時期の建物跡と考えられる。



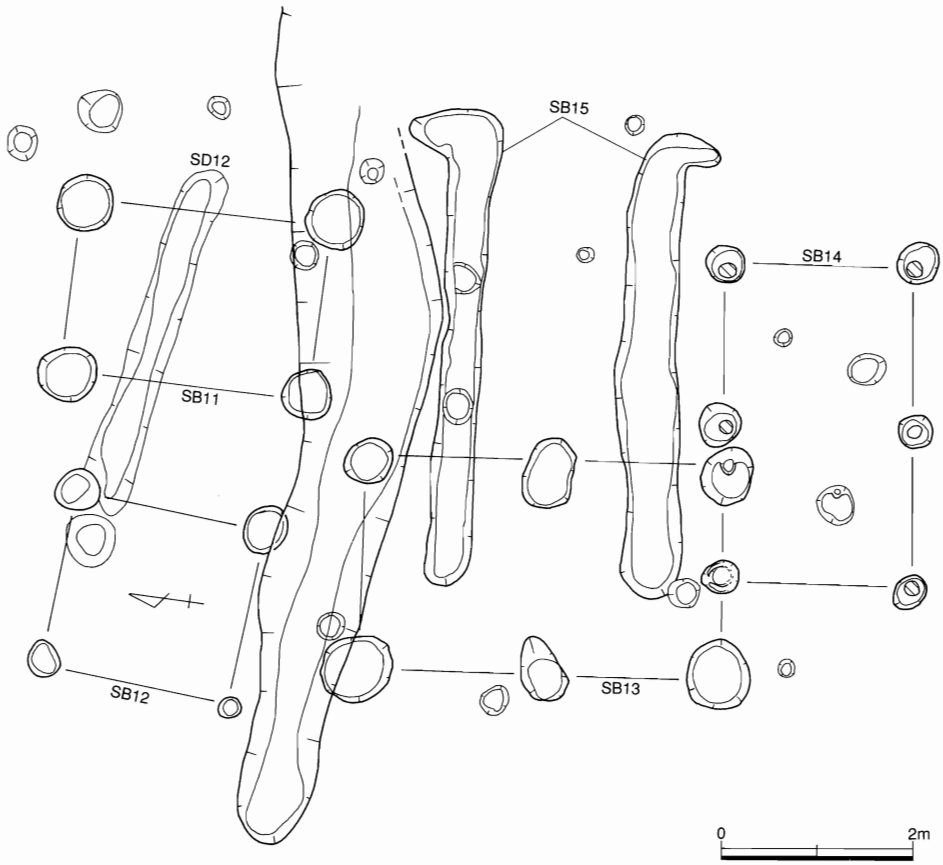
第142図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ08実測図（Ｓ＝１／80）



第141図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ07実測図（Ｓ＝１／80）



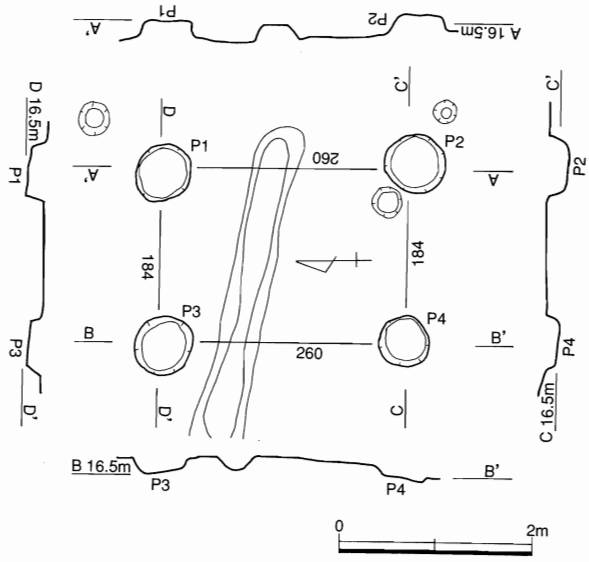
第143図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ09,10実測図（Ｓ＝１／80）



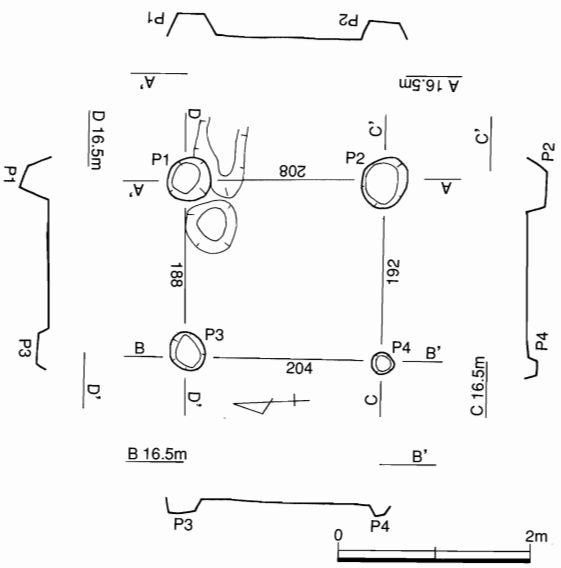
第144図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ11～15、ＳＤ12平面図（Ｓ＝1／80）

ＳＢ12（第144・146図）

調査区中央からやや北よりに位置する１間×１間の掘立柱建物跡である。Ｐ２がＳＤ12を切っており、Ｐ１はＳＢ15の溝に切られている。また、ＳＢ11・15とも近接している。桁行長2.08m、梁行長1.92m、床面積は4.0㎡になる。棟方向はＮ－３°－Ｅである。柱穴はいずれもほぼ円形で、径0.2～0.6m弱、深さは0.15～0.３m前後である。遺物は出土していないため詳しい時期は分からないが、切り合い関係からＳＢ15よりも古い建物跡と考えられる。



第145図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ11実測図
（Ｓ＝1／80）



第146図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ12実測図
（Ｓ＝1／80）

ＳＢ13（第144・147図、図版93・94）

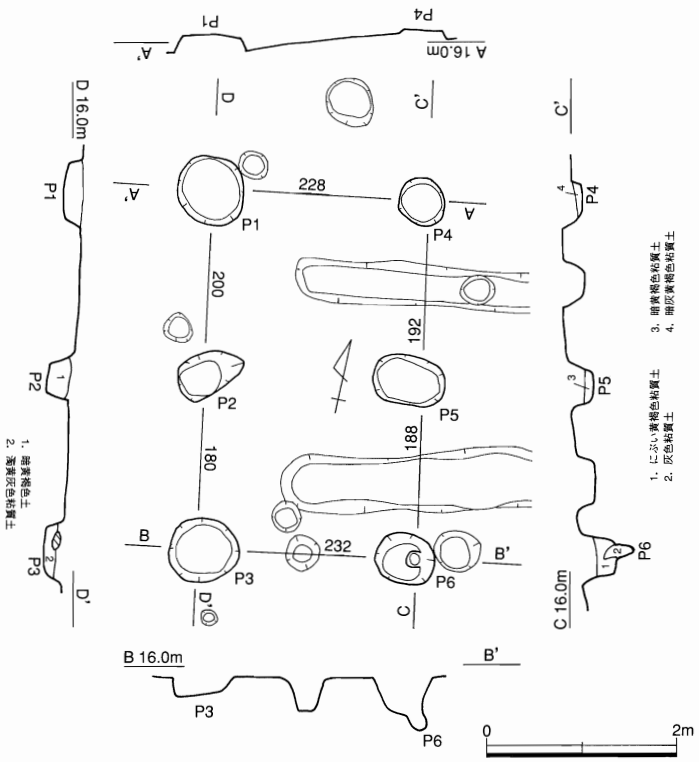
調査区中央からやや北よりに位置する南北２間×東西１間の掘立柱建物跡である。Ｐ１・４がＳＢ15の溝を切っている。また、ＳＢ14とも近接している。桁行長3.80m、梁行長2.32m、床面積は8.8㎡になる。棟方向はＮ－７°－Ｗである。柱穴は楕円形から円形をしており、長さ0.5～0.8m、深さは0.2～0.6mである。Ｐ５から土器小片が出土している。ＳＢ15溝との切り合い関係からこれより新しい時期の建物跡と考えられる。

ＳＢ14（第144・148図）

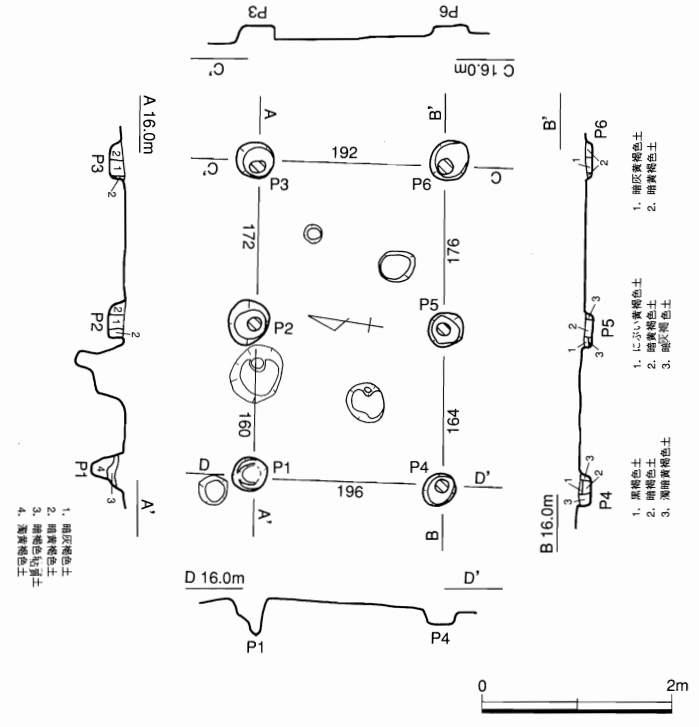
調査区中央からやや北よりに位置する東西２間×南北１間の掘立柱建物跡である。一部でＳＢ13と重複しており、ＳＢ15とも近接している。桁行長3.40m、梁行長1.96m、床面積は6.7㎡になる。棟方向はＮ－82°－Ｅである。柱穴はいずれもほぼ円形で、径0.4m前後、深さは0.1～0.3m前後である。Ｐ１・２・４～６で径20㎝前後の柱痕が検出された。遺物は出土していないため詳しい時期は分からない。

ＳＤ12（第144・149図）

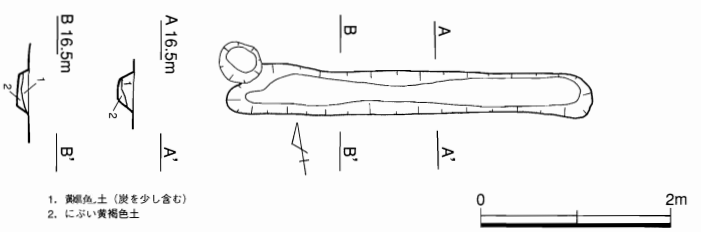
調査区中央からやや北よりに位置する東西方向にのびる溝状遺構である。長さ3.8m、幅0.45m、深さ0.2mで、断面は逆台形である。ＳＢ12の柱穴に切られている。また、ＳＢ11と重複しているほか、ＳＢ15の溝とも近接している。遺物は土器小片が出土している。遺構の性格は明らかでないが、後述する布掘建物の柱掘り方と形態が類似している。布掘建物で、南に同様の柱掘り方となる溝があったが、削平や他の遺構との切り合いで失われたのかもし



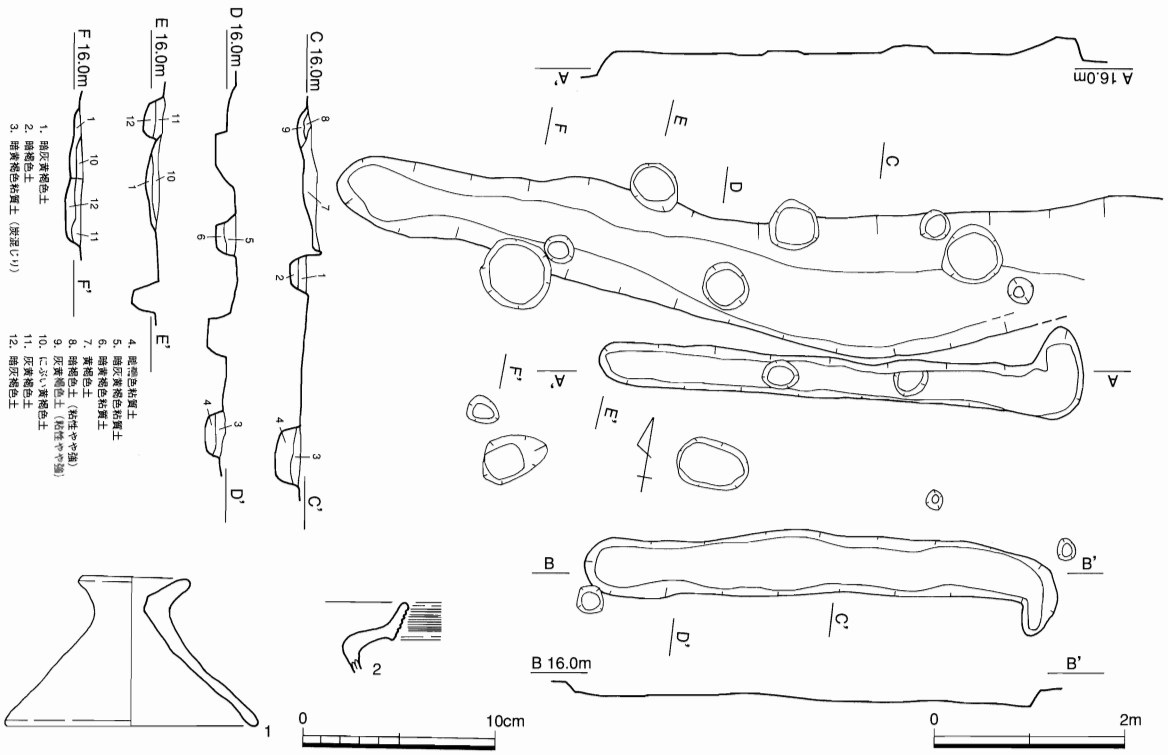
第147図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ13実測図（Ｓ＝１／80）



第148図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ14実測図（Ｓ＝１／80）



第149図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ12実測図（Ｓ＝１／80）

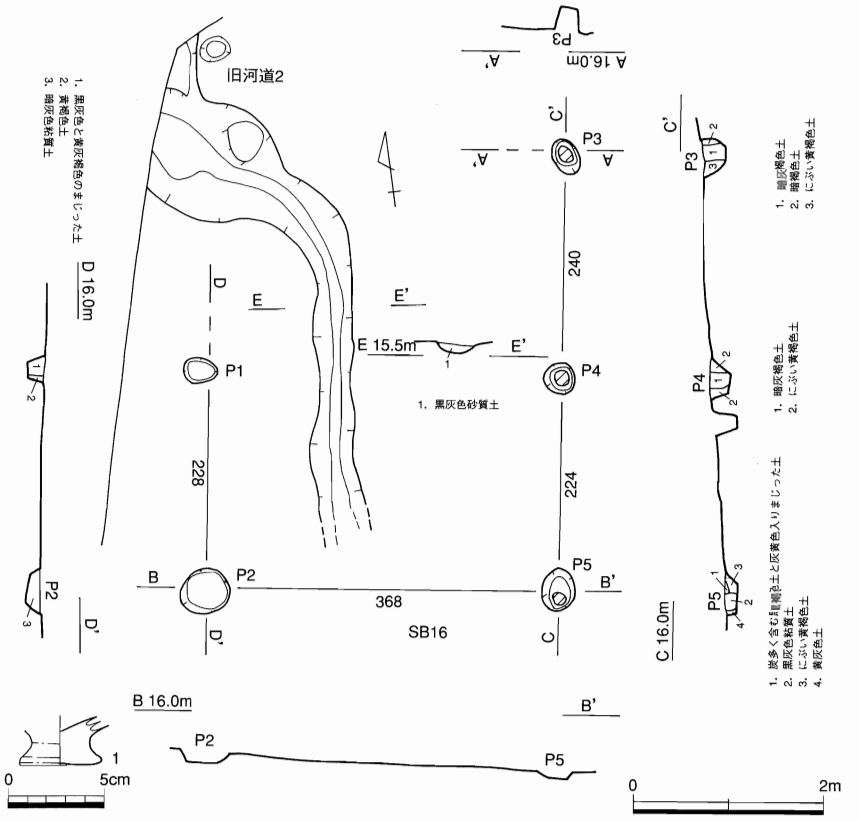


第150図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ15・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／80、遺物：Ｓ＝1／4）

れない。

ＳＢ15（第144・150図、図版93・95・96・115）

調査区の中央からやや北よりに位置する。平行する溝状の柱掘り方を持つ布掘建物で、北側に最大幅1.5mの雨落ち溝もしくは区画溝と思われる溝を伴う。溝やＳＢ15は、周辺にあるＳＢ11～14と切り合ったり、重複している。掘り方から推定される桁行長は4.9m、梁行長2.6m、床面積13㎡で、棟方向はＮ－80°－Ｅである。柱掘り方の幅は0.4m、深さ0.2～0.3mで、断面形は逆台形である。掘り方には柱痕が認められなかったため、柱の数や柱間隔は明らかではない。ただ、南北の掘り方の北端部はそれぞれ建物の外方向に直角に広がっており、これが柱の設置に関わるかもしれない。また、北掘り方底面に２ヶ所の落ち込みが

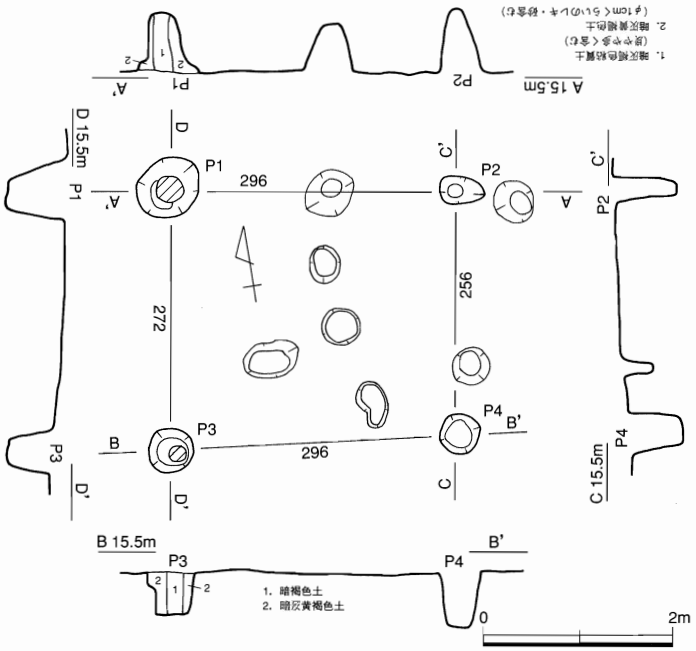


第151図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ16、旧河道２・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／80、遺物：Ｓ＝1／4）

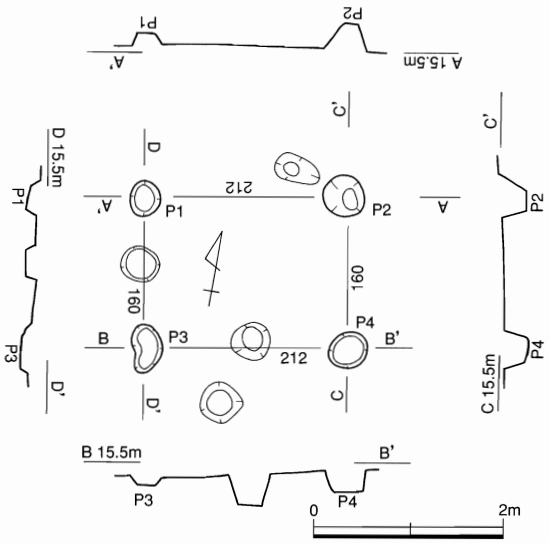
見られ、これらは柱の据え方に相当する可能性も考えられる。遺物は、北側の溝や柱掘り方から弥生土器が出土している。１は蓋で溝から、２は甕口縁部で北掘り方から出土している。これらから、この遺構は草田２期に位置づけられよう。

ＳＢ16・旧河道２（第151図）

ＳＢ16は調査区の中央付近、ＳＢ15などの南西に位置する南北２間×東西１間の掘立柱建物である。桁行長4.64m、梁行長3.68m、床面積は17.1㎡で、棟方向はＮ－11°－Ｅであるが、柱穴は楕円形から不整円形で、径0.3～0.5m弱、深さは0.2m前後である。Ｐ３～５には径約15㎝の柱痕が認められた。遺物は弥生土器小片が出土しているが、梁行の柱間が他の建物と比べて広いことから、これらと異なる時期に属する可能性も考えられよう。なお、北西側の柱穴は旧河道２に削られたためか確認できなかった。旧河道２は調査区の中央西に位置し、上流側は調査区外へのびる。砂礫が堆積しており水が流れていたことは明らかである。遺物として、１の土師器柱状高台皿のほか、須恵器小片が出土している。後述する旧河道５から枝分かれしたものと思われる。



第152図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ17実測図（Ｓ＝1／80）



第153図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ18実測図（Ｓ＝1／80）

ＳＢ17（第152図）

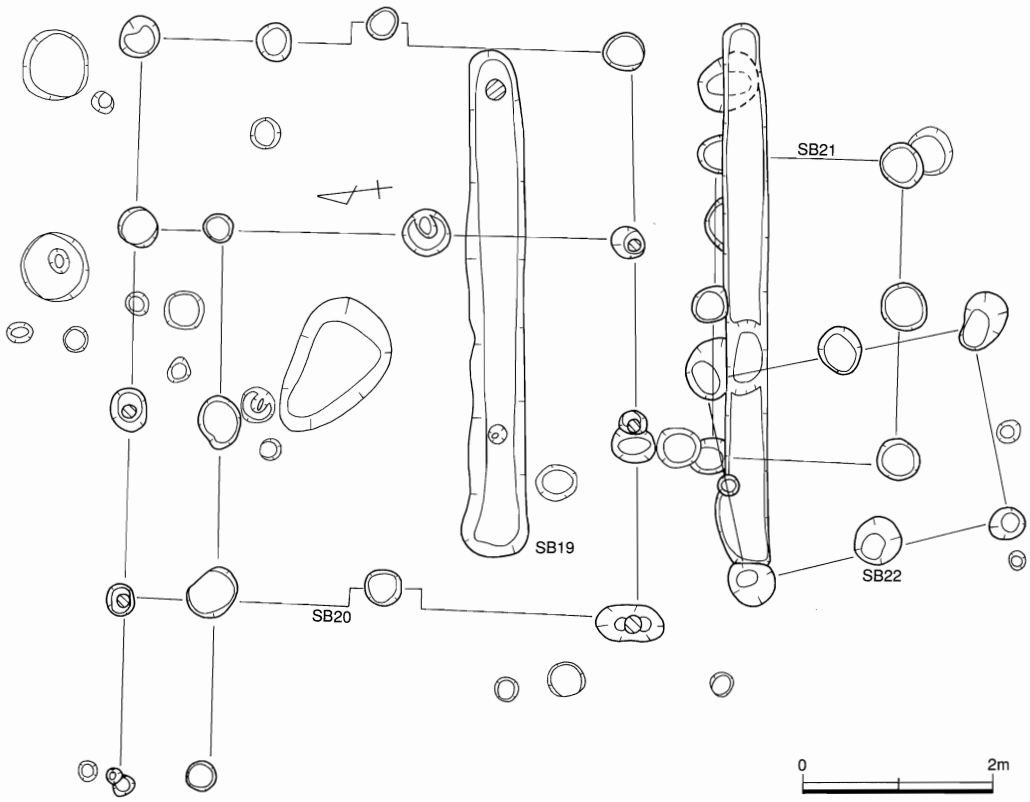
調査区中央から東よりに位置する１間×１間の掘立柱建物跡である。ＳＢ18と重複し、またＳＢ19・20と近接している。桁行長2.96m、梁行長2.72m、床面積8.1㎡で、棟方向はＮ－84°－Ｗである。柱穴は楕円形から円形をしており、長さ0.4～0.7m、深さ0.5～0.6mで、掘り込みはしっかりしている。Ｐ１・３では径20㎝弱の柱痕が認められた。柱穴内から土器小片が出土しているが時期は特定できない。

ＳＢ18（第153図）

調査区中央から東よりに位置する１間×１間の掘立柱建物跡で、ＳＢ17と重複している。桁行長2.12m、梁行長1.60m、床面積3.4㎡で、棟方向はＮ－81°－Ｅである。柱穴は円形から不整形な楕円形をしており、長さ0.4～0.5m、深さ0.1～0.3mである。遺物は出土していない。

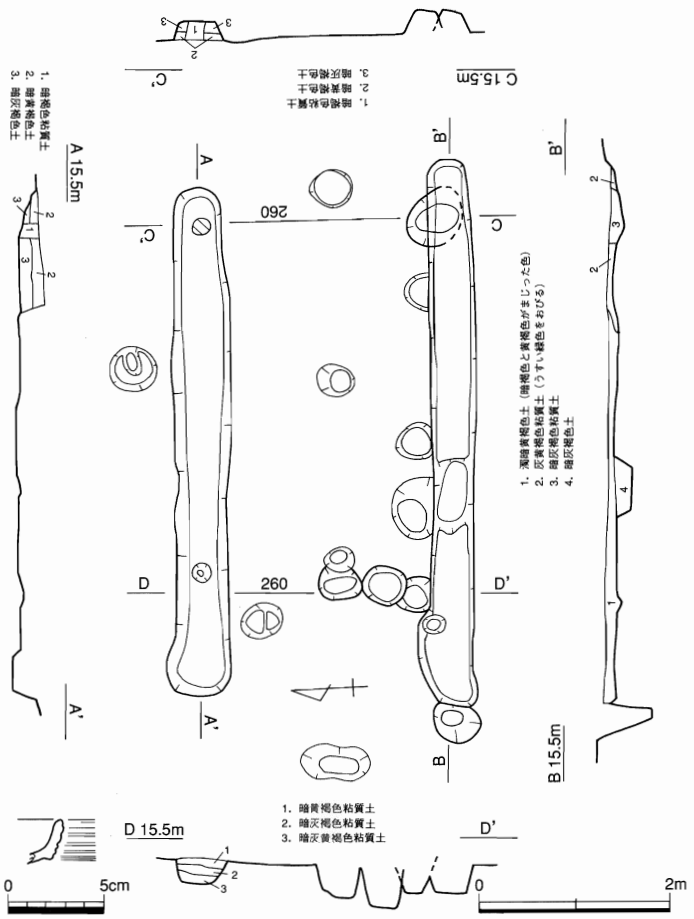
ＳＢ19（第154・155図、図版93・115）

調査区のほぼ中央に位置する。平行する溝状の柱掘り方を持つ布掘建物である。南側の柱掘り方はＳＢ21の柱穴を切っており、これより新しいことが分かる。また、ＳＢ22の柱穴ともわずかに切

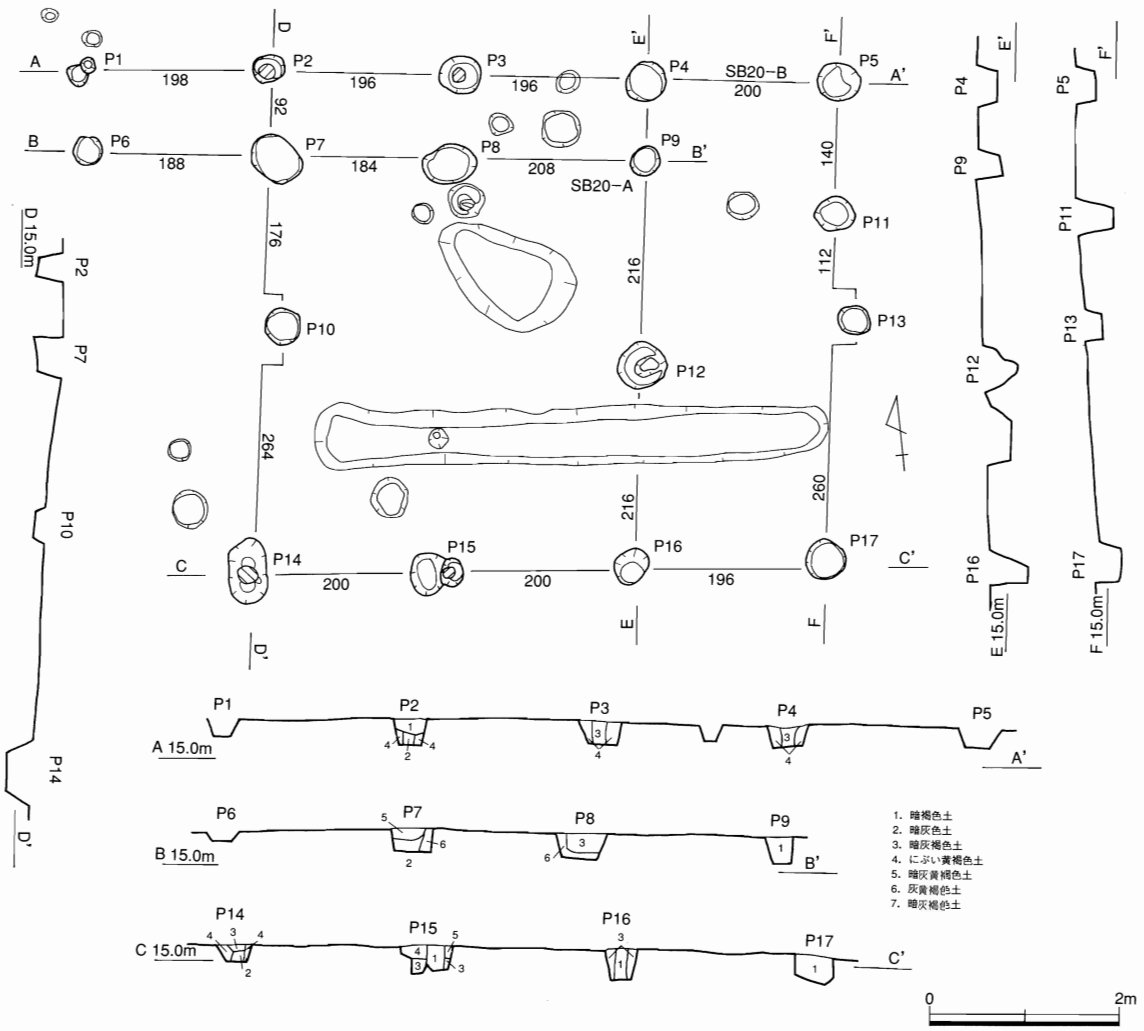


第154図　田中谷遺跡Ⅴ－E区SB19～22平面図（S＝1／80）

り合っているが、両者の埋土がよく似ていることから前後関係はつかめなかった。柱痕は、北掘り方東端から40㎝の位置で検出しただけで、柱の数や、柱間隔は不明である。検出できた柱痕の径は15㎝である。あえて建物の規模を推測するならば、桁行長約4.6m、梁行長約2.6m、床面積はおよそ12.0㎡になると思われる。棟方向はN－88°－Wである。柱掘り方は幅0.4～0.6m、深さ0.2m前後で、断面形は逆台形になっている。南掘り方では中央部で1段深くなっているが別の柱穴と切り合ったためと考えられる。遺物は南北の掘り方から弥生土器の小片が出土している。1は甕の口縁部片である。本遺構の時期は草田2期以降と考えられる。



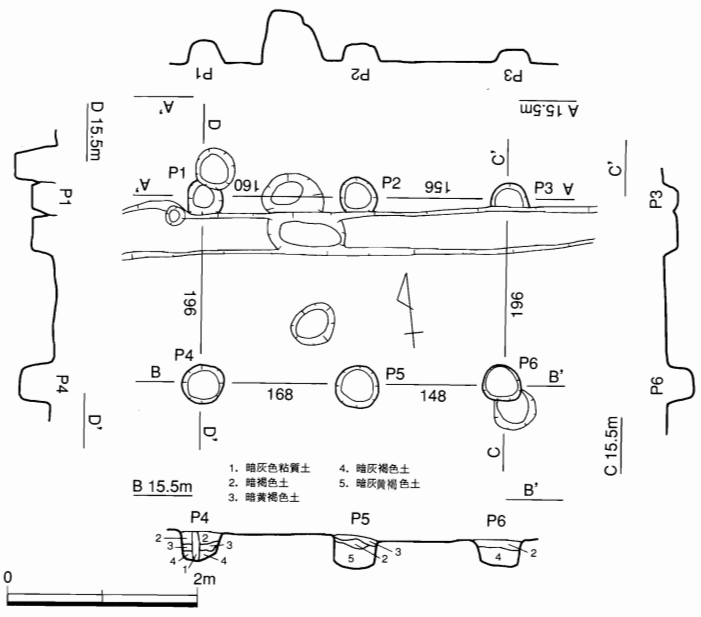
第155図　田中谷遺跡Ⅴ－E区SB19・出土遺物実測図（遺構：S＝1／80、遺物：S＝1／4）



第156図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ20実測図（Ｓ＝1／80）

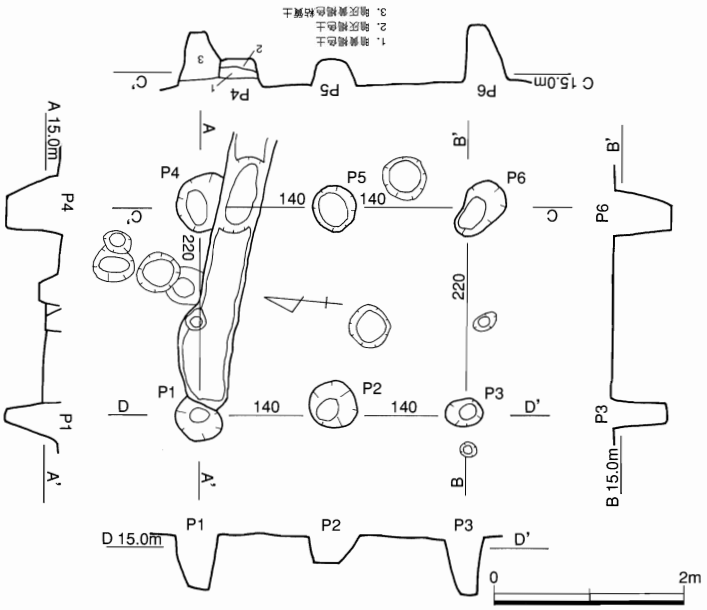
ＳＢ20（第154・156図、図版93・96）

調査区のほぼ中央に位置する掘立柱建物跡である。ＳＢ19などと重複し、ＳＢ21・22とも近接する。柱穴の並びから２通りの建物の復元が可能である。ＳＢ20AはＰ２～５・10・13・14～17の11基の柱穴によって構成される東西３間×南北２間の構造で、桁行長5.96m、梁行長5.32m、床面積31.7㎡で、棟方向はＮ－85°－Wになる。この場合、Ｐ７－Ｐ８－Ｐ９、及びＰ９－Ｐ12－Ｐ16の柱穴の並びは、建物内を仕切る柱穴と考えることもできる。あるいは、Ｐ６－Ｐ７－Ｐ８－Ｐ９－Ｐ12－Ｐ16はＳＢ20Ａとは別の時期の柵列と考



第157図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ21実測図（Ｓ＝1／80）

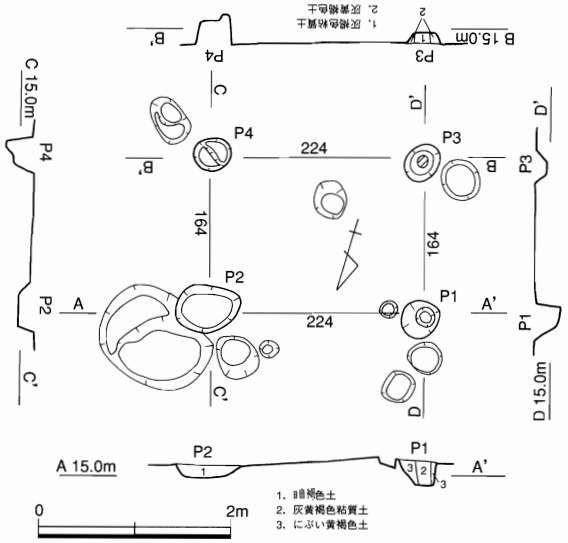
えることも可能であろう。ＳＢ20ＢはＰ７～９・10・12・14～16の８基の柱穴によって構成される東西２間×南北２間の構造で、桁行長4.40m、梁行長4.00m、床面積17.6㎡で、棟方向はＮ－85°－Ｗになる。この場合、Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３－Ｐ４－Ｐ５の柱穴の並びはＳＢ20Ｂに付随する柵列、もしくは塀の跡と考えられる。柱穴は楕円形から円形で、長さ0.3～0.7m、深さ0.1～0.4mで、ＳＢ20Ａの棟持柱に当たるＰ10・13は浅くなっている。なお、Ｐ２・３・４・14・15・16では径15㎝前後の柱痕が認められた。遺物は出土しておらず、時期は特定できないが、建物の構造が他と異なることから、古代以降に下る可能性もある。



第158図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ22実測図（Ｓ＝1／80）

ＳＢ21（第154・157図、図版93）

調査区のほぼ中央に位置する東西２間×南北１間の掘立柱建物跡である。Ｐ１・２・３はＳＢ19の柱掘り方に切られており、これより古い遺構であることが分かる。また、ＳＢ22と重複している。桁行長2.80m、梁行長2.20m、床面積6.2㎡で、棟方向はＮ－６°－Ｗである。柱穴はいずれもほぼ円形で、径0.4m前後、深さ0.1～0.3mである。柱穴内から土器小片が出土しているが、時期を特定するには至らない。



第159図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ23実測図（Ｓ＝1／80）

ＳＢ22（第154・158図、図版93）

調査区のほぼ中央に位置する南北２間×東西１間の掘立柱建物跡である。Ｐ１・４はＳＢ19の柱掘り方とわずかに切り合っているが、両者の土層が類似していることもあり前後関係は不明である。ＳＢ21と重複し、ＳＢ20と近接している。桁行長3.16m、梁行長1.96m、床面積6.2㎡で、棟方向はＮ－６°－Ｗである。柱穴は円形から楕円形で、長さ0.4～0.6m前後、深さ0.3～0.6mで、両桁行の中央の柱穴はいずれも浅くなっている。柱穴内から弥生土器と思われる小片が出土しているが、時期を特定するには至らない。

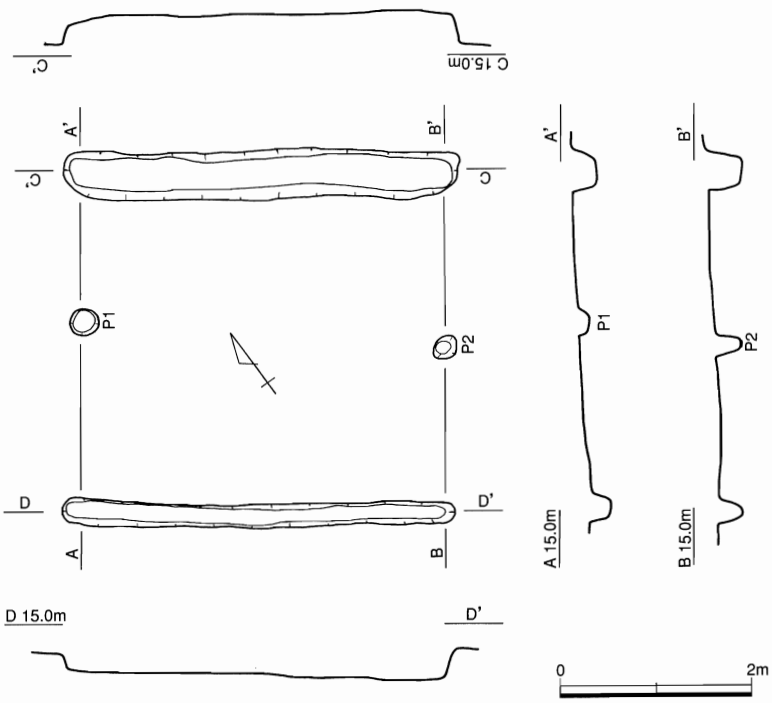
ＳＢ23（第159図）

調査区のほぼ中央、ＳＢ19の西側に位置する１間×１間の掘立柱建物跡である。Ｐ２はＳＫ03を切っており、これより新しい遺構であることが分かる。桁行長2.24m、梁行長1.64m、床面積3.7㎡で、棟方向はＮ－76°－Ｅである。柱穴は不整楕円形から円形で、長さ0.4～0.6m強、深さ0.1～0.3

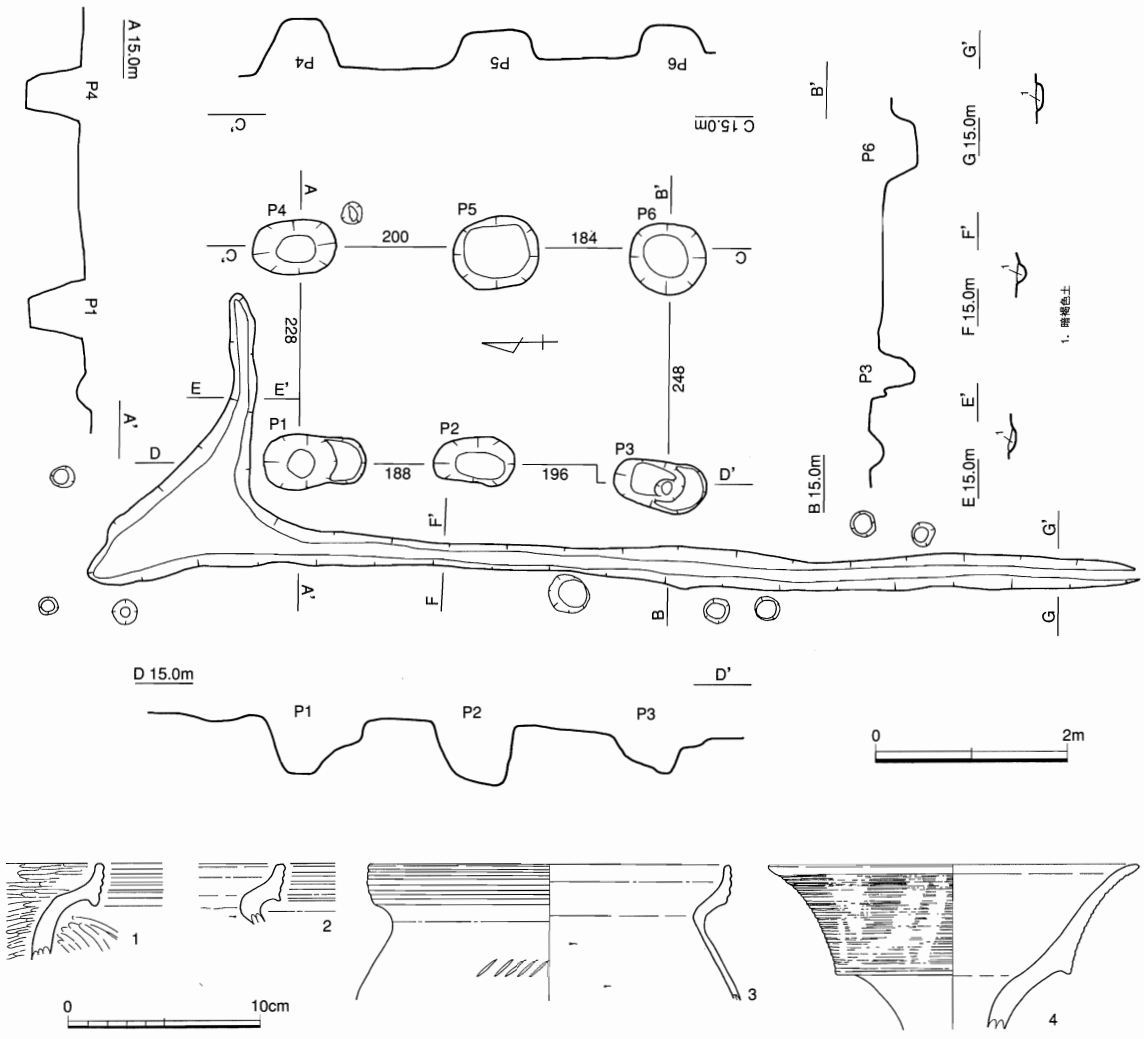
mである。柱穴内から土器小片が出土している。なお、この建物の柱穴に切られているＳＫ05から草田４期もしくはそれよりも下る土器が出土していることから、この遺構はさらに新しいものと考えられる。

ＳＢ24（第160図、図版97）

調査区の中央からやや南よりに位置する２本の溝状の柱掘り方を持つ布掘建物跡である。溝状の柱掘り方では柱痕は確認できなかったが、南北の柱掘り方の中間には、棟持柱と考えられる柱穴が検出された。桁行長3.90m、梁行長3.60m、床面積



第160図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ24実測図（Ｓ＝1／80）

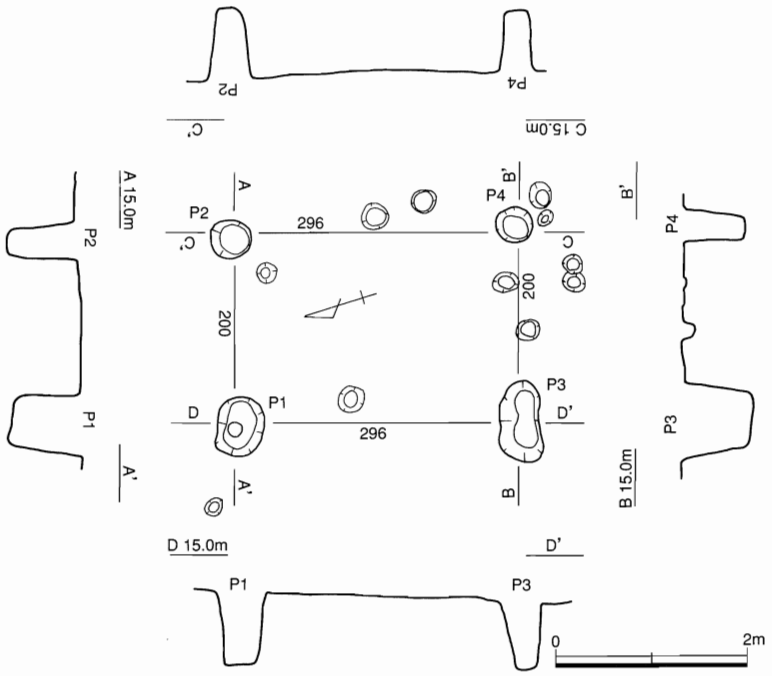


第161図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ25・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／80、遺物：Ｓ＝1／4）

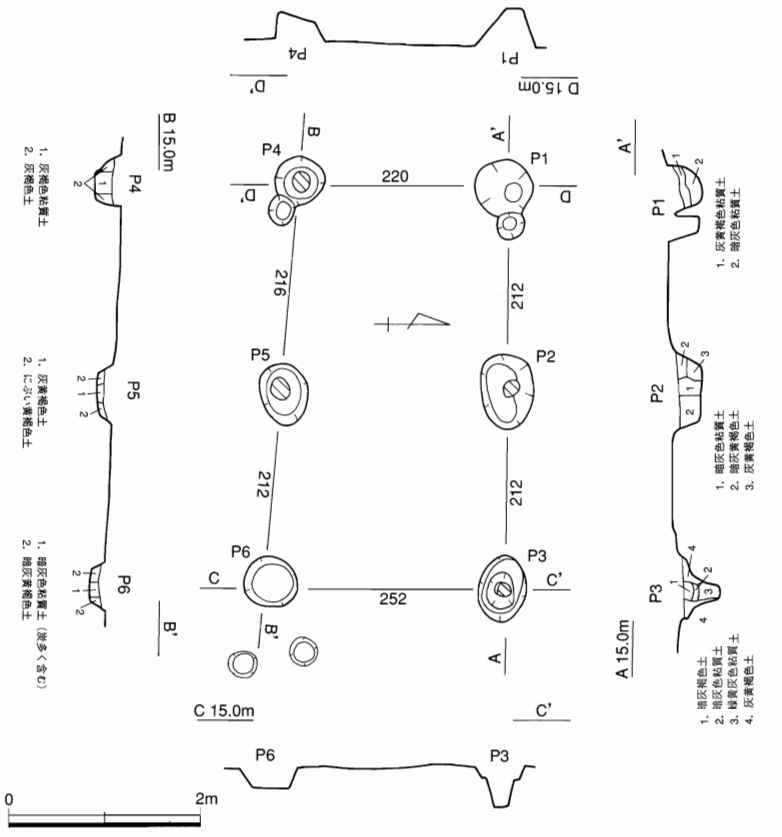
14.0㎡で、棟方向はＮ－53°－Ｗである。北側の柱掘り方は幅0.5m、深さ0.3m前後、南側の柱掘り方は幅0.25m前後、深さ0.2m前後で、断面形は両者とも逆台形になっている。柱掘り方内から土器小片が出土しているが、時期を特定するには至らない。

ＳＢ25（第161図、図版95・115）

調査区の中央からやや南よりに位置する南北２間×東西１間の掘立柱建物跡で西側ではＳＢ26と近接している。建物の北から西側にかけては、Ｌ字状の溝を伴う。桁行長3.84m、梁行長2.48m、床面積9.5㎡で、棟方向はＮ－3°－Ｅである。柱穴は楕円形からやや不整円形で、長さ0.8m弱～１m強、深さ0.3m強～0.6mで、掘り込みはしっかりしている。溝や柱穴内から弥生土器片が出土している。１・２はＰ５から出土したもので、１は壷口縁部、２は甕口縁部である。３・４は柱穴内から出土したもので、３は甕の口縁部から胴上部にかけての破片、４は鼓形器台口縁部の破片である。これらはいずれも草田２期に位置づけられるものであり、遺構の時期もこの頃と考えられる。



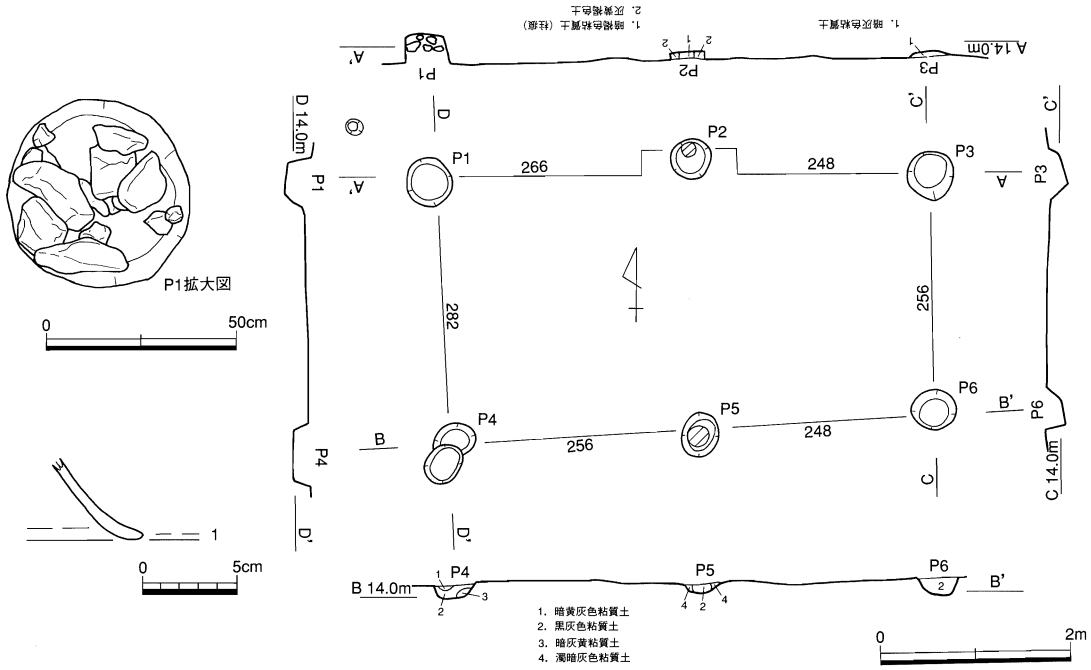
第162図　田中谷遺跡Ｖ－Ｅ区ＳＢ26実測図（Ｓ＝１／80）



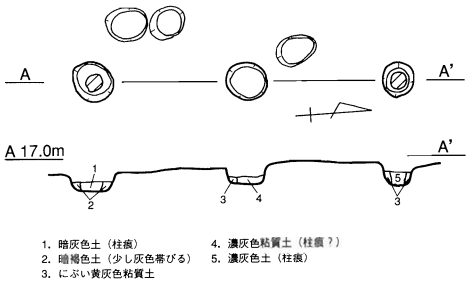
第163図　田中谷遺跡Ｖ－Ｅ区ＳＢ27実測図（Ｓ＝１／80）

ＳＢ26（第162図）

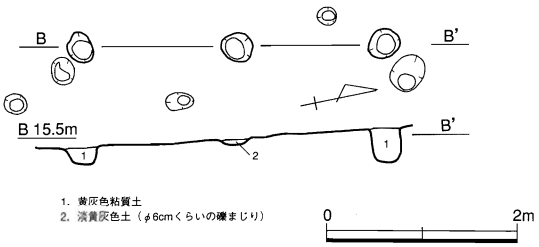
調査区の中央からやや南よりに位置する１間×１間の掘立柱建物跡である。東側にはＳＢ25、北西にはＳＢ24、南西にはＳＢ27がある。桁行長2.96m、梁行長2.00m、床面積5.9㎡で、棟方向はＮ－18°－Ｅである。柱穴は楕円形から円形で、長さ0.4～0.8m強、深さ0.6m～0.8mで、掘り込みはしっかりしている。遺物は出土していない。



第164図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＢ28・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝１／80、遺物：Ｓ＝１／４）



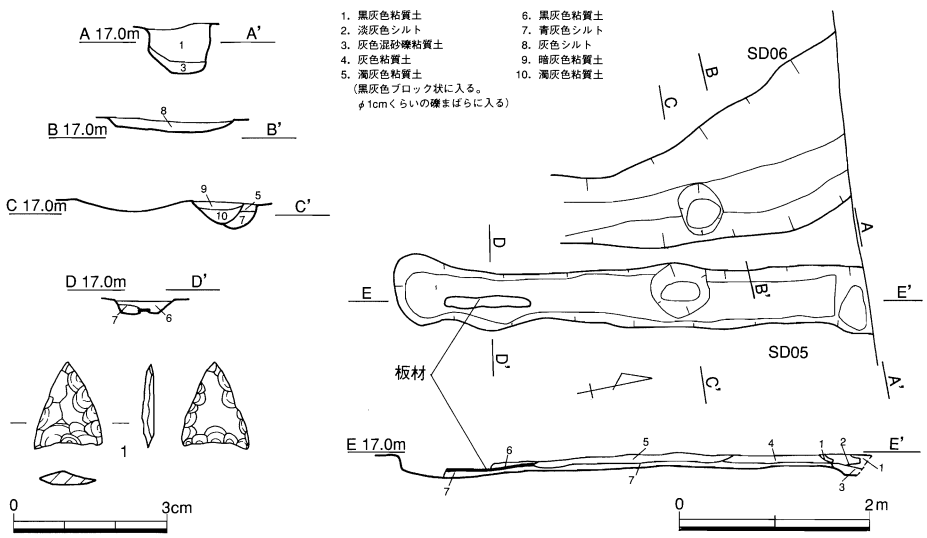
第165図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区柱穴列１実測図（Ｓ＝１／80）



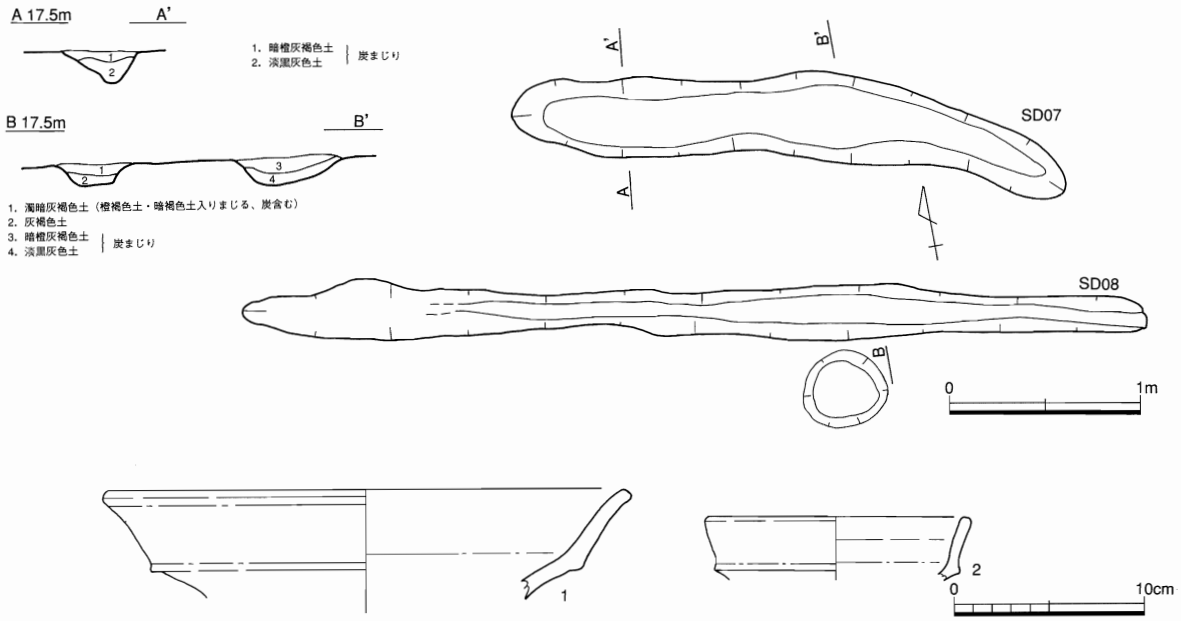
第166図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区柱穴列２実測図（Ｓ＝１／80）

ＳＢ27（第163図）

調査区の中央からやや南西よりに位置する東西２間×南北１間の掘立柱建物跡である。北側にはＳＢ25があり、東にはＳＢ26が近接している。桁行長4.28m、梁行長2.52m、床面積10.8㎡で、棟方向はＮ－87°－Ｅである。柱穴は楕円形から円形で、長さ0.5m～0.8m、深さ0.2m～0.4mである。建物西端の柱穴であるＰ１・４の東側には径0.3mの小形のピットが接しているが、この建物の補助的な柱穴だったのかもし



第167図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ05,06・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／80、遺物：Ｓ＝2／3）



第168図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ07,08・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／40、遺物：Ｓ＝1／4）

れない。Ｐ２～５で径20㎝弱の柱痕が認められた。柱穴内から弥生土器小片が出土している。

ＳＢ28（第164図、図版115）

調査区の中央から南より、ＳＢ25の南東に位置する、東西２間×南北１間の掘立柱建物跡である。桁行長5.14m、梁行長2.82m、床面積14.5㎡で、棟方向はＮ－87°－Ｅである。柱穴は不整楕円形から円形で、長さ0.4～0.5m、深さ0.1m弱～0.2mで、現状での掘り込みは浅い。Ｐ１の中には長さ25㎝以下の礫が入れられていた。Ｐ２・５では径20㎝前後の柱痕が認められた。また、Ｐ４では立て替えに伴うものか、新旧のピットが切り合っている。Ｐ４新から１が出土している。１は鼓形器台の基部もしくは口縁部の破片と思われ、草田４期～５期に位置づけられよう。

柱穴列１（第165図）

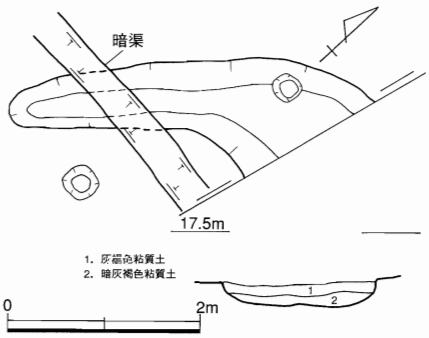
調査区の北東、ＳＢ07の南、ＳＢ08の東に位置する。0.4～0.8m東へ行くと調査区東壁になる。Ｐ１～Ｐ３の３基の柱穴がＮ－５°－Ｅ方向に直線的に並んでおり、南北の長さは3.2mである。柱穴列としているが、調査区外にこれに対応する柱穴があり、２間×１間の掘立柱建物跡になる可能性も考えられる。柱穴はいずれもほぼ円形で、径0.3～0.4m、深さ0.2m前後である。Ｐ１・３には径20㎝の柱痕が残っている。遺物は出土していない。

柱穴列２（第166図）

調査区の中央西よりで、ＳＢ16の南に位置する。0.5m西へ行くと調査区西壁になる。Ｐ１～Ｐ３の３基の柱穴がＮ－12°－Ｅ方向に直線的に並んでおり、南北の長さは3.2mである。柱穴列としているが、調査区外にこれに対応する柱穴があり、２間×１間の掘立柱建物跡になる可能性も考えられる。柱穴はいずれも不整円形で、径0.3m、深さ0.1m弱～0.3mで、中央のＰ２が浅くなっている。遺物は柱穴内から小片の土器が出土している。

（3）溝

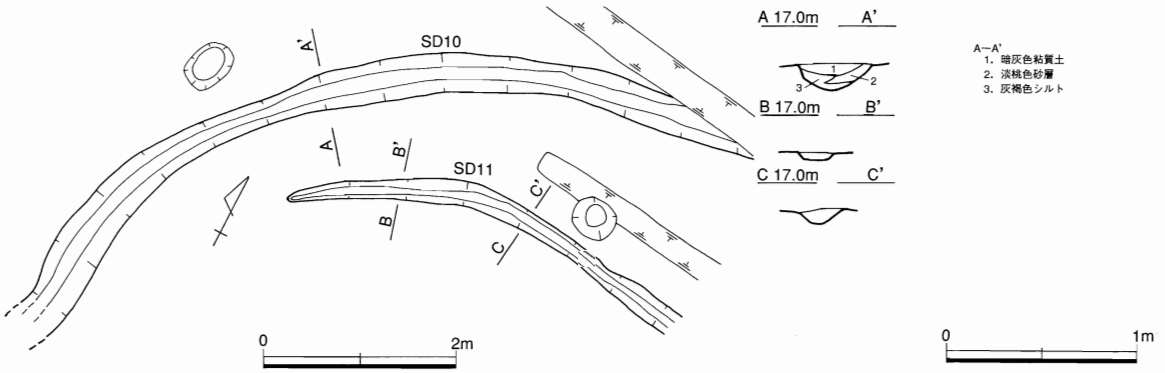
ＳＤ05、06（第167図、図版97・120）



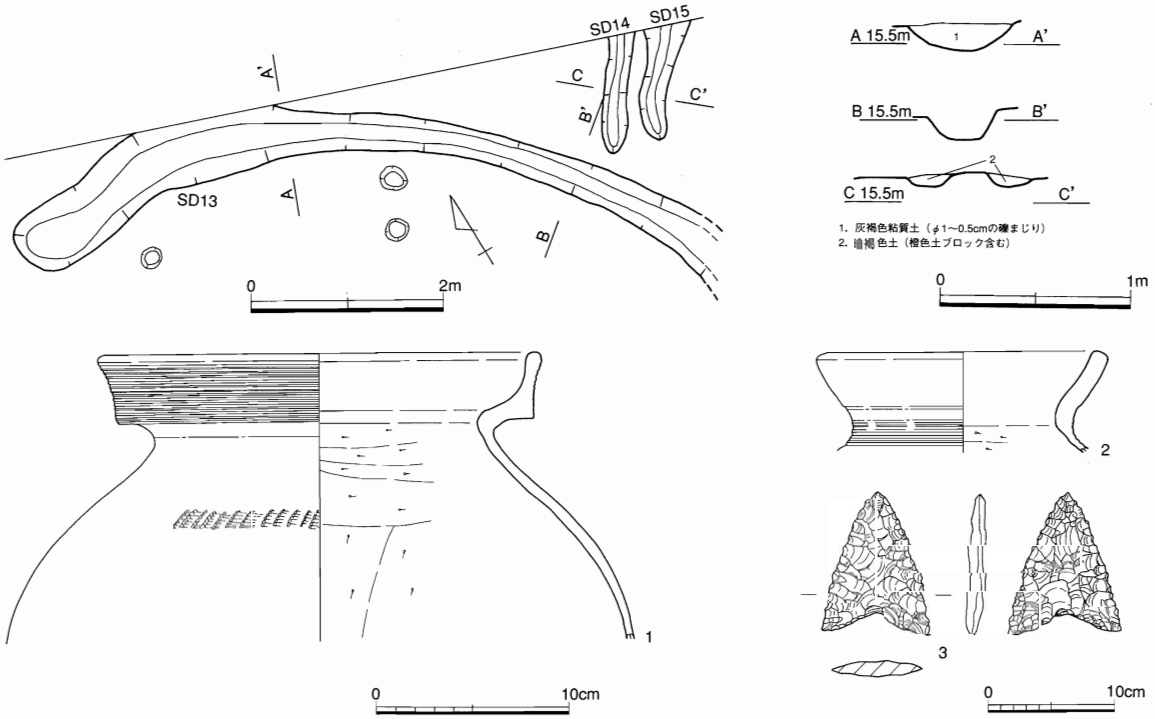
第169図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ09実測図（Ｓ＝1／80）

調査区の北端に位置し、さらに調査区外にものびる溝状遺構である。ＳＤ05は確認できた部分で南北５ｍ、幅0.6ｍ、深さ0.15～0.3ｍで、断面形は逆台形からＵ字形をしている。南端付近には長さ約0.8ｍの板材が出土している。調査区北壁にかかる部分は１段深くなっているが他の遺構と切り合っている可能性もある。覆土中から安山岩製の凹基無茎石鏃が出土している。

ＳＤ06はＳＤ05の西側に位置し、幅0.6～1.8ｍ、深さ0.1ｍで溝の底面からの立ち上がりは非常に緩やかである。これらの遺構について性格は明らかでないが、ＳＤ05は布掘建物の柱掘り方に類似しており、調査区外にこれに対応する遺構があった可能性も考えられる。



第170図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ10,11実測図（平面：Ｓ＝１／80、断面：Ｓ＝１／４）



第171図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ13～15・出土遺物実測図（平面：Ｓ＝1／80、断面：Ｓ＝1／40、遺物：1・2：Ｓ＝1／4、3：Ｓ＝2／3）

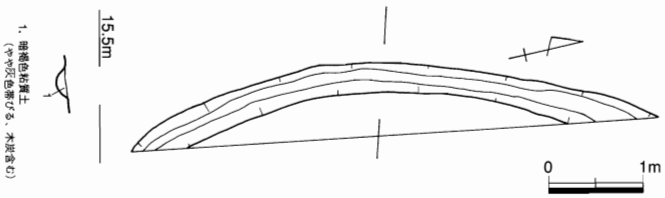
ＳＤ07，08（第168図、図版115）

調査区の北より、ＳＢ06の西に位置する南北にのびる溝状遺構である。ＳＤ07は長さ2.9m、幅0.5m、深さ0.3mで、断面形はＵ字形をしている。覆土中から土師器壷（１）や土師器甕（２）が出土しており、これらから松山編年Ⅰ期の遺構と考えられる。

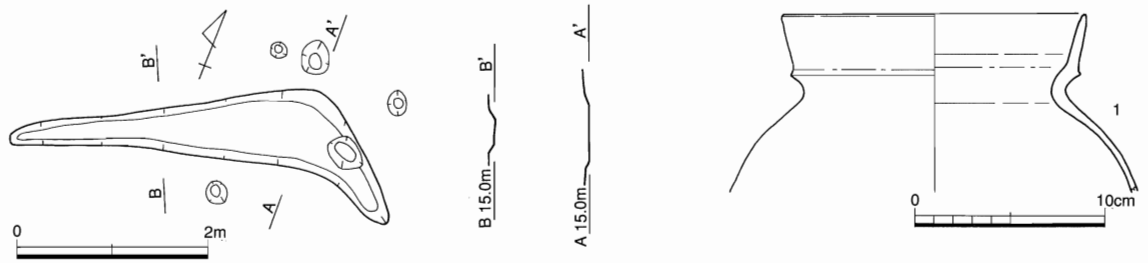
ＳＤ08はＳＤ07の南へ0.7mに位置し、長さ4.7m、幅0.3m、深さ0.2mで断面形は立ち上がりの緩やかなＵ字形をしている。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

ＳＤ09（第169図）

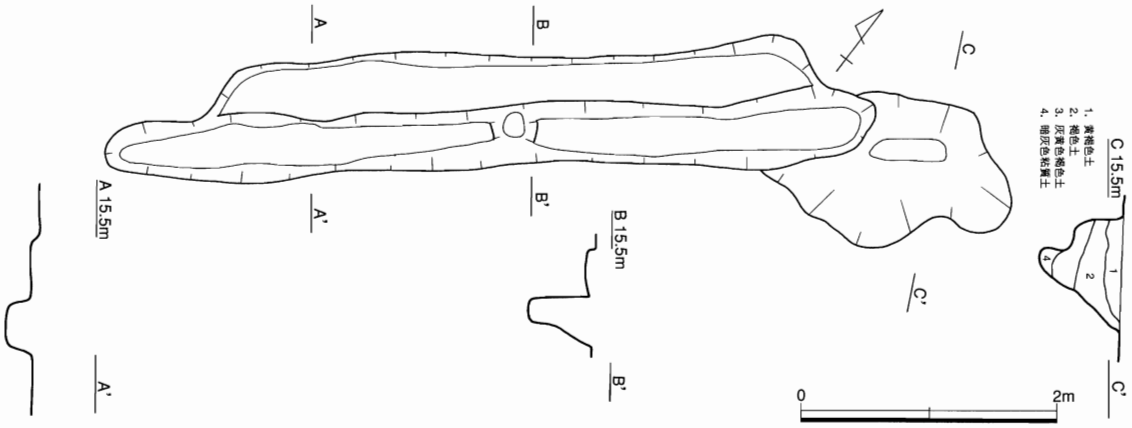
調査区北東端に位置し、さらに調査区から東にのびる溝状遺構である。Ｓ



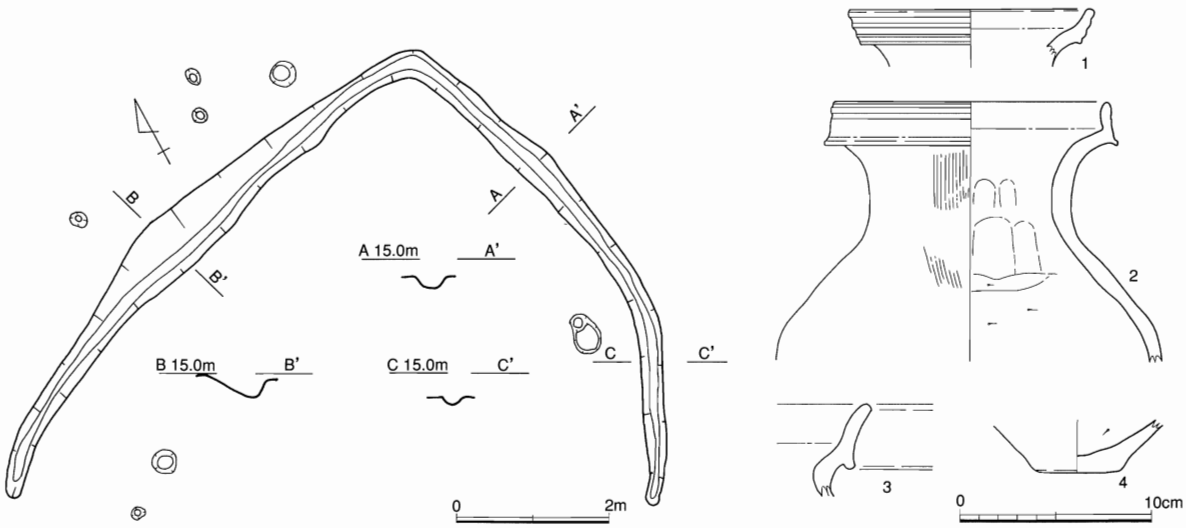
第172図　田中谷遺跡Ｖ－Ｅ区ＳＤ16実測図（Ｓ＝1／80）



第173図　田中谷遺跡Ｖ－Ｅ区ＳＤ17・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝１／80、遺物：Ｓ＝１／４）



第174図　田中谷遺跡Ｖ－Ｅ区ＳＤ18、ＳＫ06実測図（Ｓ＝１／60）



第175図　田中谷遺跡Ｖ－Ｅ区ＳＤ19・出土遺物実測図（平面：Ｓ＝１／100、断面：Ｓ＝１／４）

B07の柱穴と切り合っているが前後関係は分からなかった。南西から北東へ弧状にのび、調査区東壁にかかる部分で幅0.8m、深さ0.2mになり、断面形は皿状である。遺物は出土していない。

ＳＤ10，11（第170図、図版97）

ＳＤ10は調査区北東端に位置し、南西から北東の調査区外へのびる溝状遺構である。断面形はU字形である。ＳＢ11はＳＤ10の南に位置し、ＳＢ10と同様、南東から北西へ弧状にのびる。幅0.2m前後、深さ0.1m前後で、断面形はU字形である。ＳＤ10・11ともに遺物は出土していない。

ＳＤ13～15（第171図、図版115・120）

ＳＤ13は調査区中央付近から東よりに位置し、西から東の調査区外へ弧状にのびる。覆土中から有段口縁の甕（１）、単口縁の壷（２）、黒曜石製の凹基無茎石鏃（３）が出土している。

ＳＤ14・15はＳＤ13の北を南北にのびる溝で、北側は調査区外になる。遺物は出土していない。

ＳＤ16（第172図）

調査区中央の東側を南北に弧を描きながら、さらに東側の調査区外にのびる溝である。断面形はU字形である。遺物は出土していない。

ＳＤ17（第173図、図版115）

調査区の中央に位置する「く」の字形に曲がった溝で、断面形は皿形である。弥生土器甕（１）が出土している。草田編年５期に位置づけられる。

ＳＤ18、ＳＫ06（第174図）

調査区のほぼ中央に位置する。ＳＤ18は東西に直線的にのびる溝で、ＳＫ06を切っている。断面は２段になっている。溝の中央にはピットが掘られており、深くなっている。

ＳＫ06は長さ２ｍの不整形な土坑で、覆土中に炭を多く含む。土器小片が出土している。

ＳＤ19（第175図、図版115）

調査区中央からやや南よりに位置する。西端からやや北東方向へ直線的にのび、そこから「く」の字状に折れ曲がって南へ弧状にのびる。断面形はU字形である。外傾する口縁部に３条の凹線を巡らす甕（１）、口縁部短く内傾する壷（２）、口縁部無文の甕（３）、平底の底部が出土している。

（4）土坑

ＳＫ03（第176図、図版115）

調査区中央付近に位置する長径1.35m、短径１m、深さ0.15mの土坑。草田２期の甕（１～３）と、草田４期以降に下る壷口縁部（４）、鼓形器台（５）、低脚坏が出土している。

ＳＫ04（第177図）

調査区中央に位置し、ＳＢ20と重複する長径1.5m、短径１m、深さ0.2mの土坑である。土器小片が出土しているが時期は特定できない。

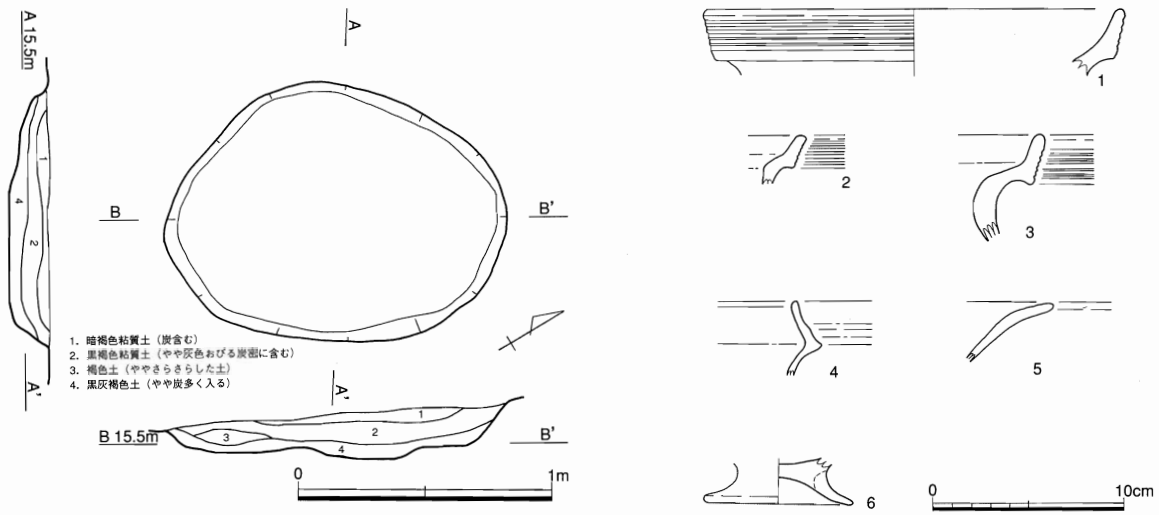
ＳＫ05（第178図、図版115）

調査区中央に位置し、ＳＫ05の柱穴に切られている。長径1.2m、短径0.95m、深さ0.2mの土坑である。弥生土器片が出土している。１は鼓形器台の破片で口縁部もしくは基部になる。

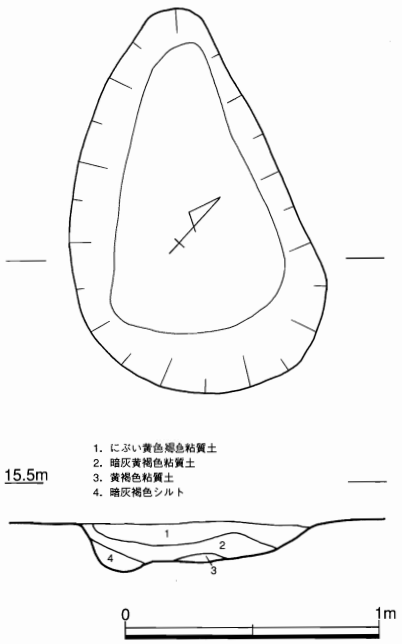
（5）旧河道

旧河道１（第179図、図版117）

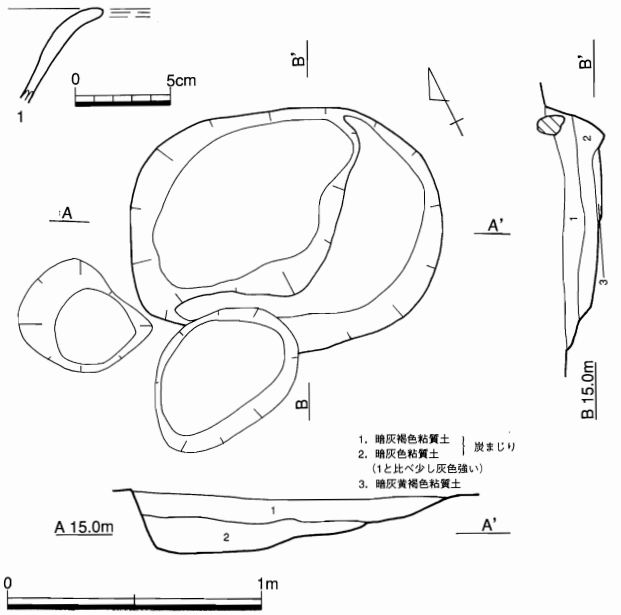
ＳＢ12の西側に位置し、わずかに調査区内にかかっている。深さは確認できる部分で0.8mで、灰色から暗灰色の粘質土層が堆積している。須恵器壷（１）が出土した。後述する旧河道５の一部



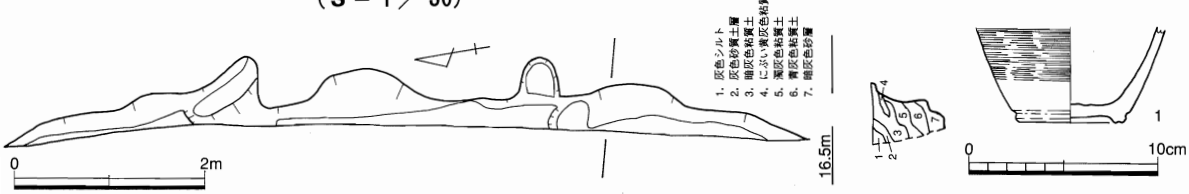
第176図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＫ03・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝１／30、遺物：Ｓ＝１／４）



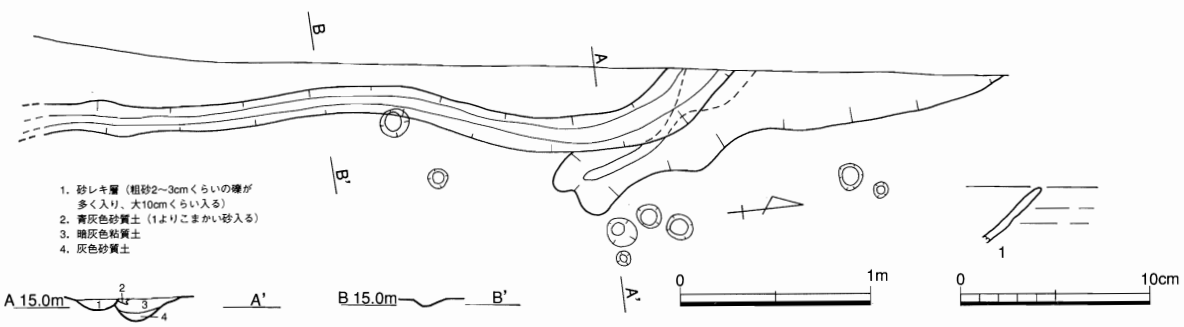
第177図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＫ04実測図（Ｓ＝１／30）



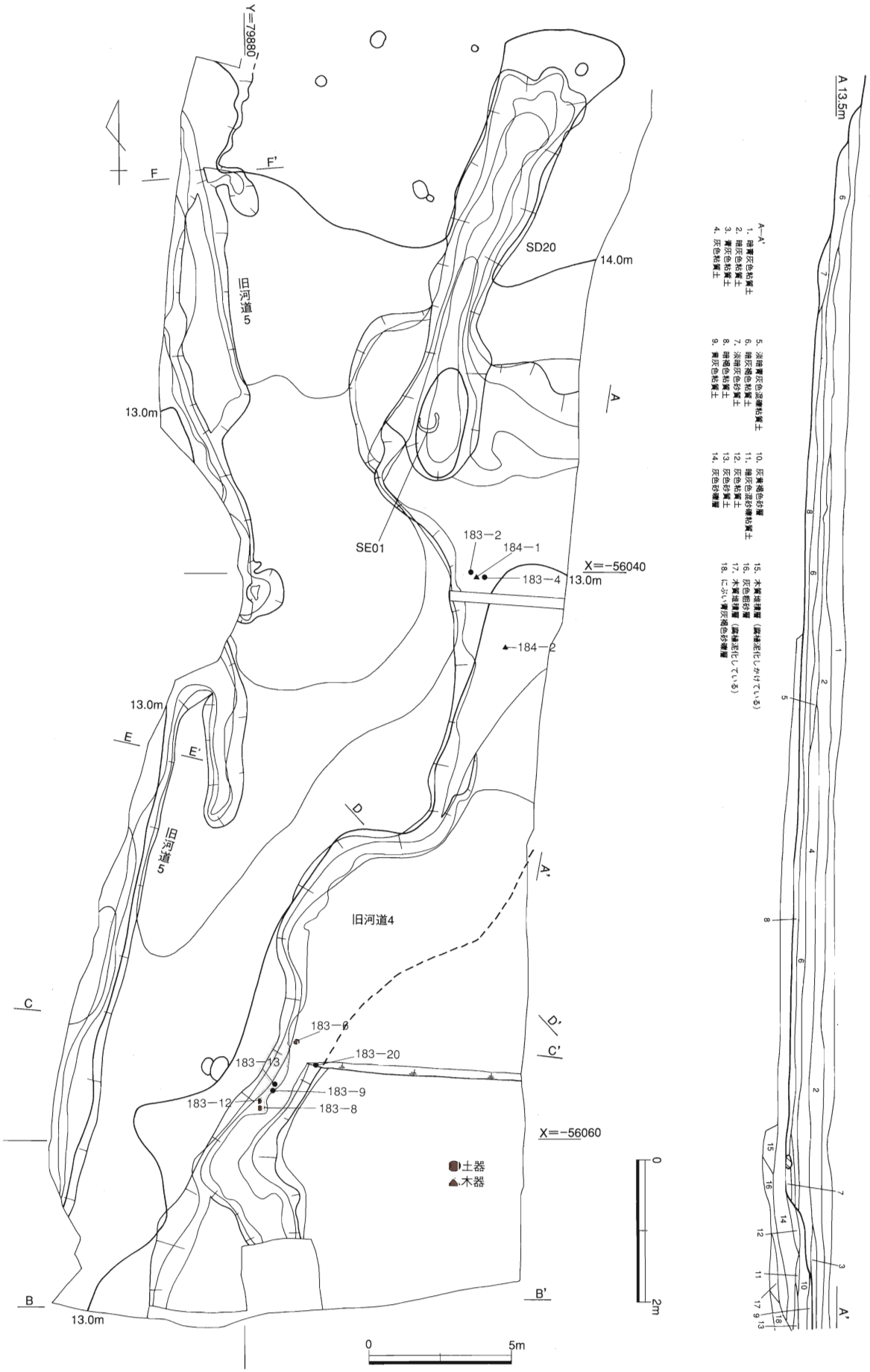
第178図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＫ05・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝１／30、遺物：Ｓ＝１／４）



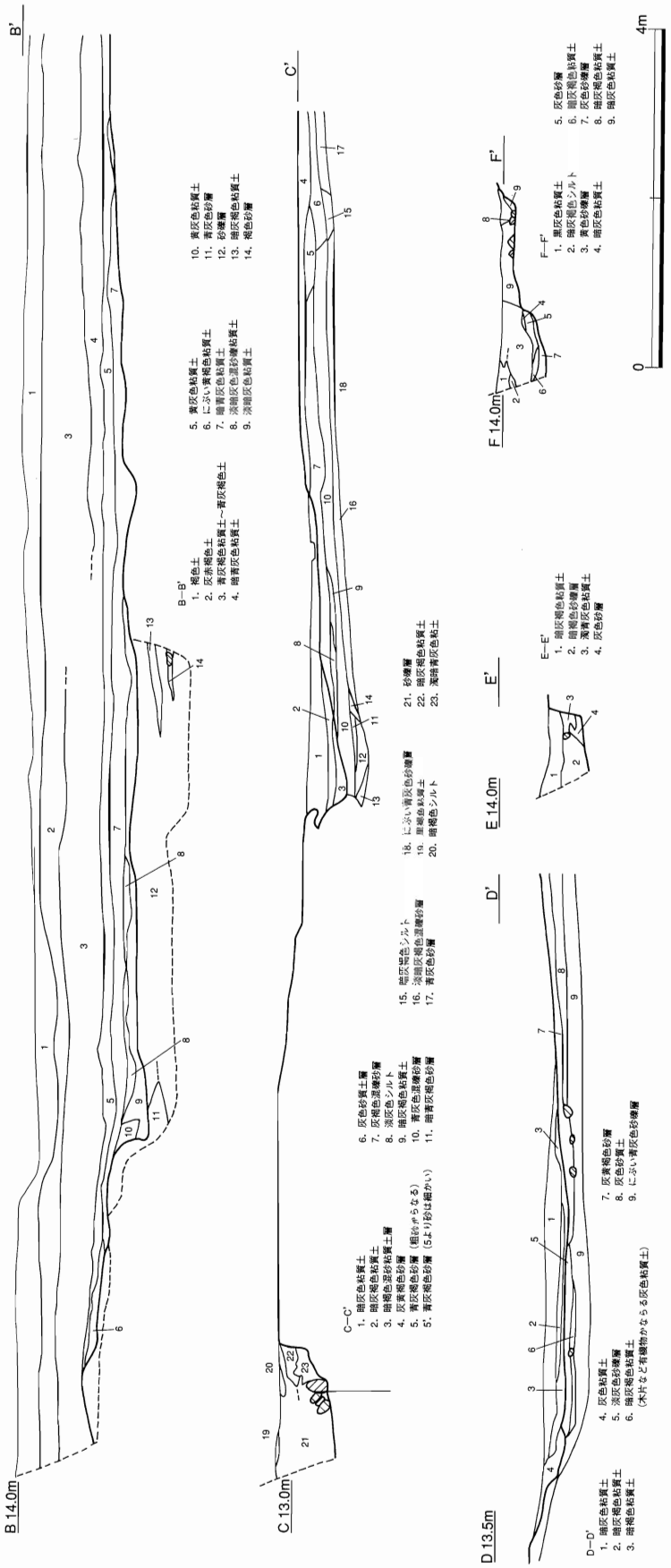
第179図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区旧河道１・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝１／80、遺物：Ｓ＝１／４）



第180図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区旧河道３・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝１／60、遺物：Ｓ＝１／４）



第181図　田中谷遺跡Ⅴ－E区SD20、旧河道4,5実測図・土層断面図（平面：S＝1／200、断面：S＝1／80）



第182図　田中谷遺跡Ｖ－Ｅ区旧河道４，５土層断面図（Ｓ＝1／80）

と思われる。

旧河道３（第180図、図版117）

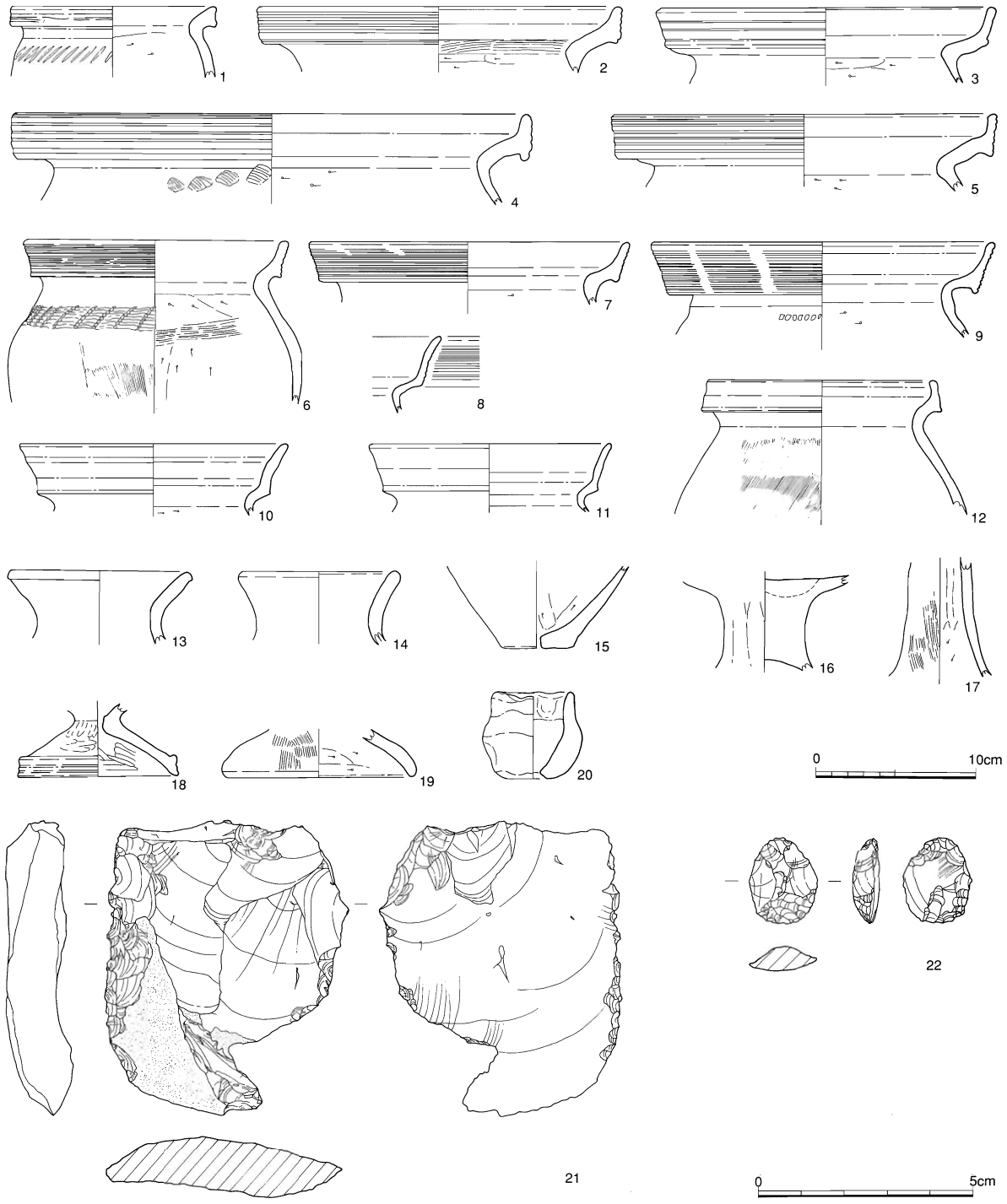
調査区中央西側で検出された。後述する旧河道５が枝分かれしたものと思われ、新旧の河道が重複する。古段階は暗灰色粘質土が堆積し、流れがとどこおっていたと思われる。新段階は古段階の覆土を切って砂礫が堆積しており、ある程度の水流があったことが分かる。新段階から１の土師器埦が出土している。

旧河道４（第181～184図、図版98・99・116・120）

調査区の南側に位置する。北東から南西方向に向かって流れており、北東側は調査区東壁からさらに北東へ、南西側も調査区南壁からさらに南側へのびる。旧河道は幅約1.6～5.8m、深さ0.4mで、有機質を含む暗灰色～黒色の粘質土が堆積しており、埋没時は流れが止まり、よどみのようになっていたと思われる。この土層から弥生時代の遺物が多く出土している。なお、Ｃ－Ｃ´ラインよりも北側については粘質土の下層に古い時期の河道がある可能性を考え砂層・砂礫層を掘り下げたが、遺物はほとんど出土しなかった。

183－１～20は弥生土器である。１は口縁部の立ち上がりが小さく草田１期と考えられる。２～７・９は３条から10条前後の平行沈線が施された外傾する口縁をもち草田２期のものである。８は２～７・９と比べ外反度が強くなっており草田３期まで下りそうである。10・11は口縁部が外反する無文のものである。２点ともＳＤ20付近で出土しており、そ

ちらに伴うものかもしれない。12は口縁部が無文で内傾しており、草田１期のものと見ておきたい。13・14は単口縁の壺。15は平底の底部で、穿孔されている。16は円柱状の脚部を持つ高坏、17は脚部が中空に作られた高坏である。18・19は蓋で、18は口縁部端部に面を持ち凹線が施され、天井部には孔が貫通する。20は手捏土器で底部は穿孔されている。21は黒曜石製のスクレーパー。22は平面形が楕円形の黒曜石製の石鏃である。旧河道４の下層の砂礫層から出土した。184－１・２は木製品である。１は桶の破片、２は板状の木製品であるが、下面には脚のようなものがはがれた痕跡が見え、容器類であった可能性も考えられる。

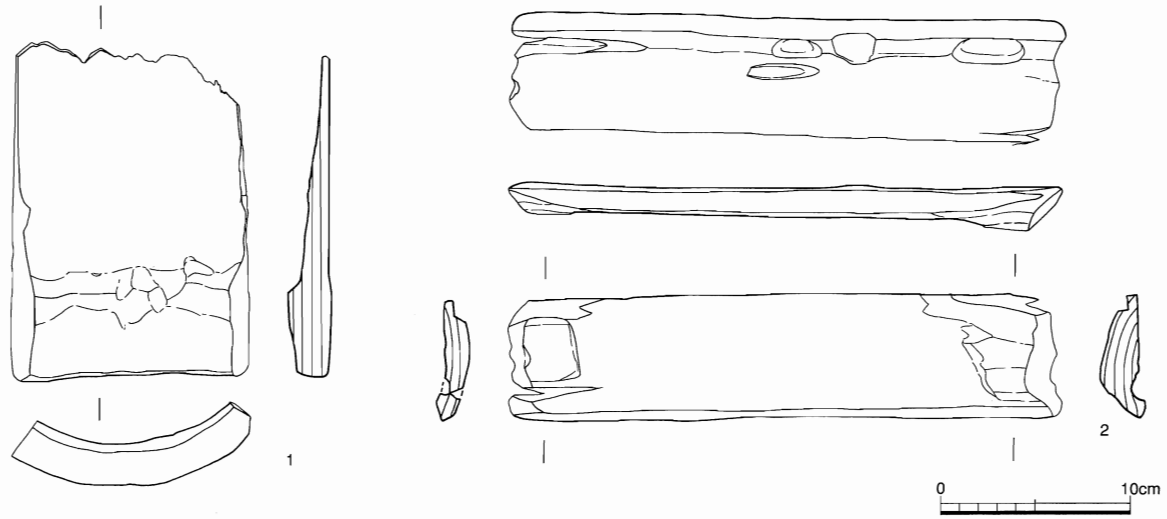


第183図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区旧河道４出土遺物実測図（1）（1～20：Ｓ＝1／4、21・22：Ｓ＝2／3）

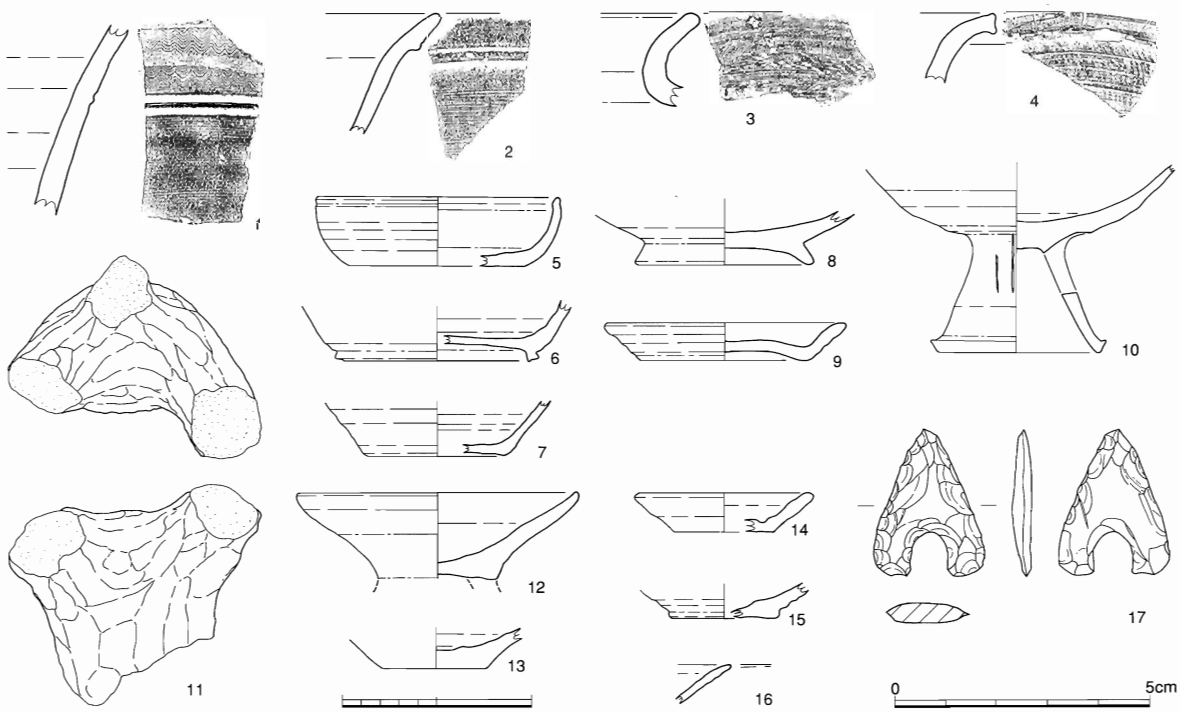
旧河道５（第181・182・185図、図版98・99・117・120）

調査区の南側の西壁に沿って一部が検出されたのみであり、河道の中心部はＶ－Ｅ区とW区の間を流れていたと考えられる。河道は確認できた部分で最大の深さ0.7ｍで、下層は砂層・砂礫層が堆積し、上層は粘質土が堆積していた。このことからある期間には流水があって砂や礫が上流から運ばれてくる状況にあったことが分かる。

遺物は、石器や古墳時代終末から平安時代・中世の土器が出土している。１～10は須恵器である。１～４は甕の口縁部で、１は口縁部に沈線や波状文が施されており、２は口縁上部に段を持つ。３・４には口縁部外面にタタキの痕跡がわずかになで消されずに残っている。５・７は埦、６・８は高台付埦、10は高坏で脚部に切り込み状の透孔が２方向に入っている。11は土製支脚で、三叉突起のものである。12～16は土師器の埦・皿類である。12～15はいずれも底部は回転糸切りがされている。12は底部に高台のはがれた痕跡が残り、10～11世紀代のものと思われる。



第184図　田中谷遺跡Ｖ－Ｅ区旧河道４出土遺物実測図（2）（Ｓ＝1／4）



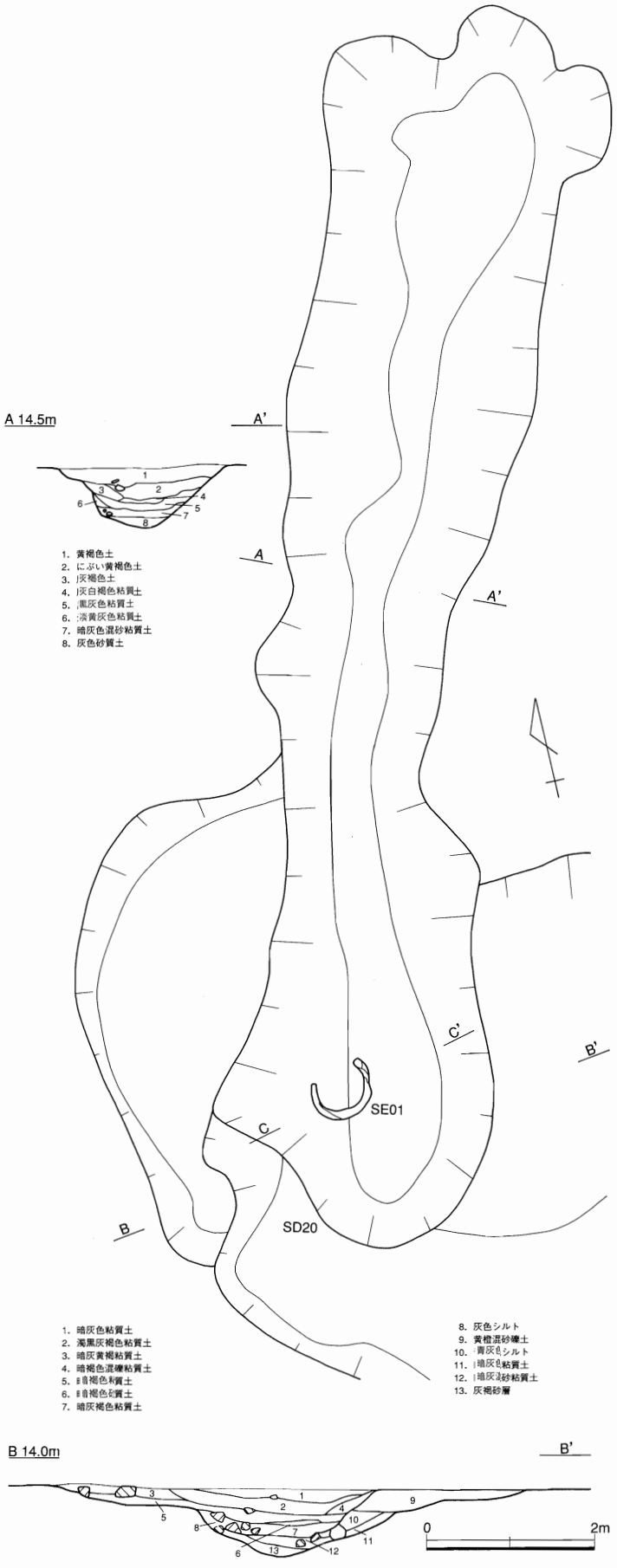
第185図　田中谷遺跡Ｖ－Ｅ区旧河道５出土遺物実測図（1～16：Ｓ＝1／4、17：Ｓ＝2／3）

（6）井戸跡

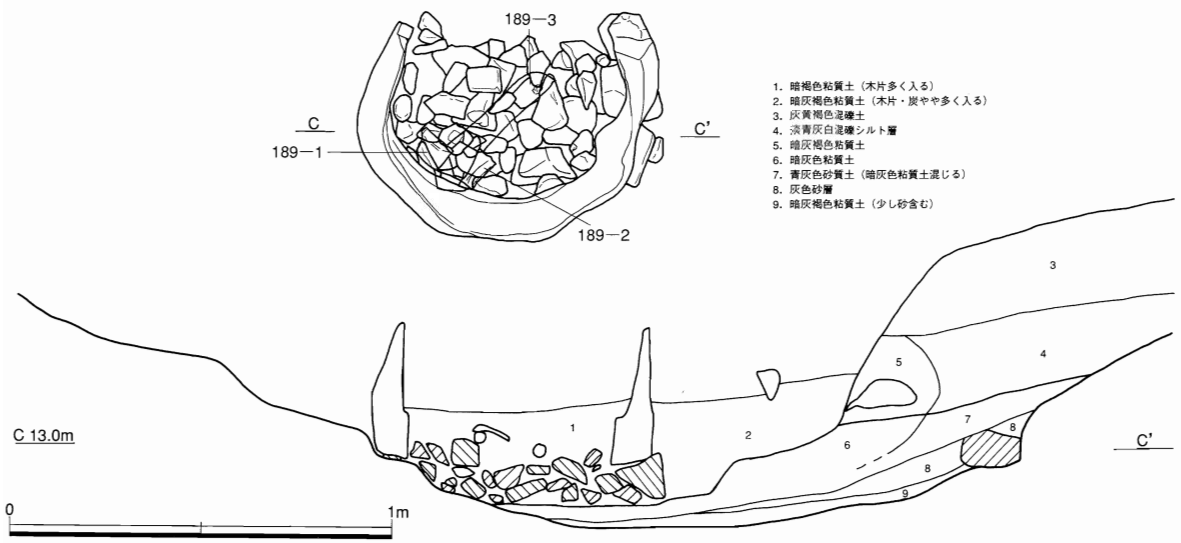
ＳＤ20・ＳＥ01（第186～191図、図版99～101・118～121）

ＳＤ20は調査区の南側に南北にのびる溝状遺構で、南端は旧河道４と切り合っていたと思われるが、上面を検出した時点では両者の切り合い関係は分からなかった。長さ15.2m、最大幅約3.0m、深さ0.8mで、断面はU字形になっている。底面の標高は北端で13.6m、南端で12.8mで、北から南へ行くにつれて低くなっている。ＳＤ20と切り合っている部分の旧河道４の底面は標高約13.0mで、ＳＤ20の南端の底面の方が低くなっている。土層を見ると部分的に砂層が見られるものの、ＳＤ20から旧河道４に向かって流水があったのではなく、降雨時などにＳＤ20内部で北から南へ水が流れていく過程で形成されたものであろう。

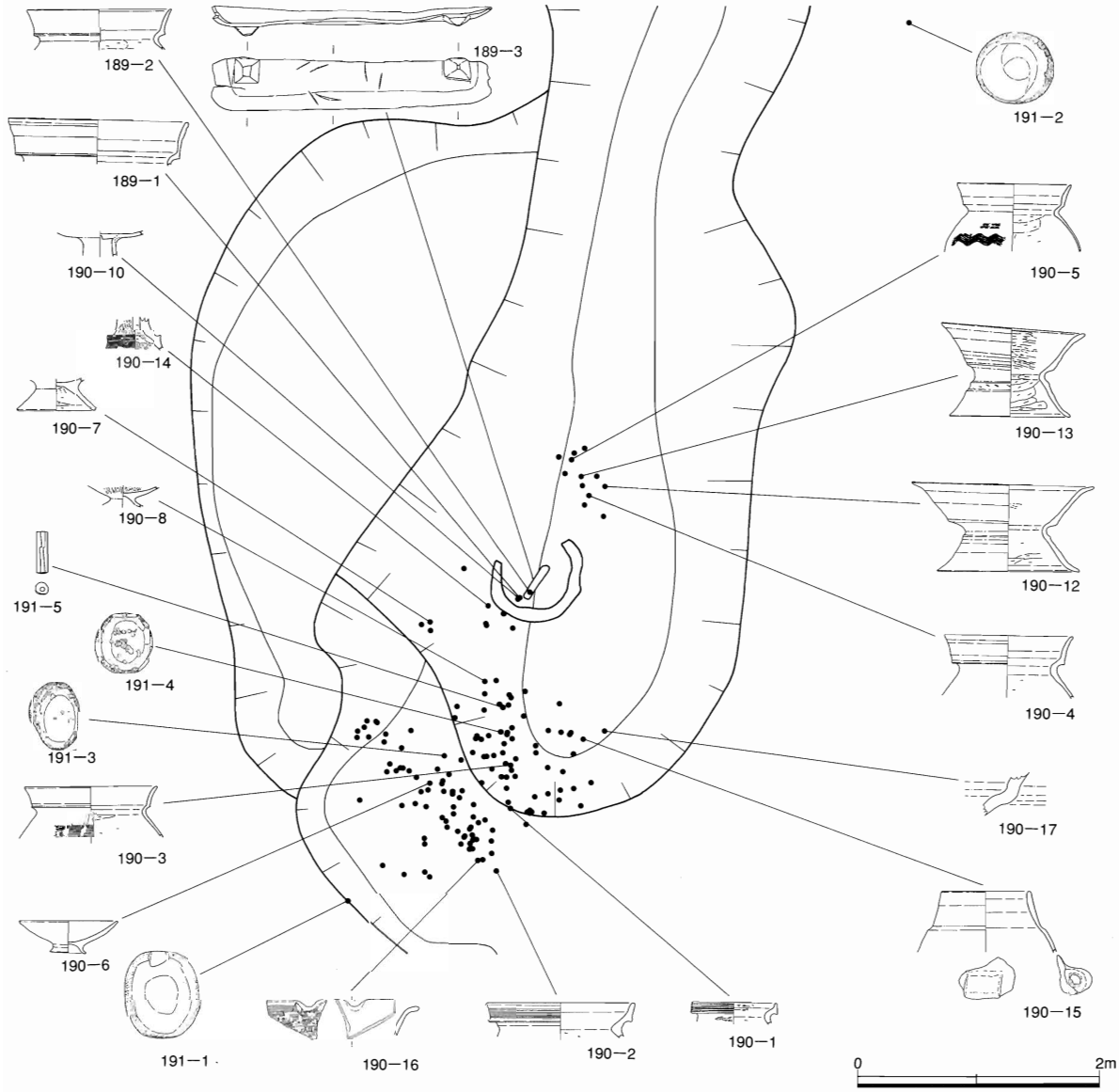
ＳＤ20の南端には木製の井戸枠をもつ井戸跡、ＳＥ01がある。土層の状況から見ると、ＳＤ20は１度埋まってから（埋められてから）再び掘り直され、ＳＥ01が設けられたと考えられる。掘り残されたＳＤ20の古段階の覆土の上に、拳大の礫が敷き詰められ、その上に井戸枠が置かれている。礫敷きは、井戸枠を据えやすくし、また、下から湧き出す水を濾過する機能を持っていたと思われる。井戸枠は（189－４）は、大型の木材を刳り抜いて作られた桶を転用したもので、内面には下から10cmくらいの位置に高さ２cm前後の段が付いている。現状で直径77.2cm、残存高は45.2cmであるが、腐朽がひど



第186図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ20実測図（Ｓ＝1／80）



第187図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＥ01実測図（Ｓ＝１／20）



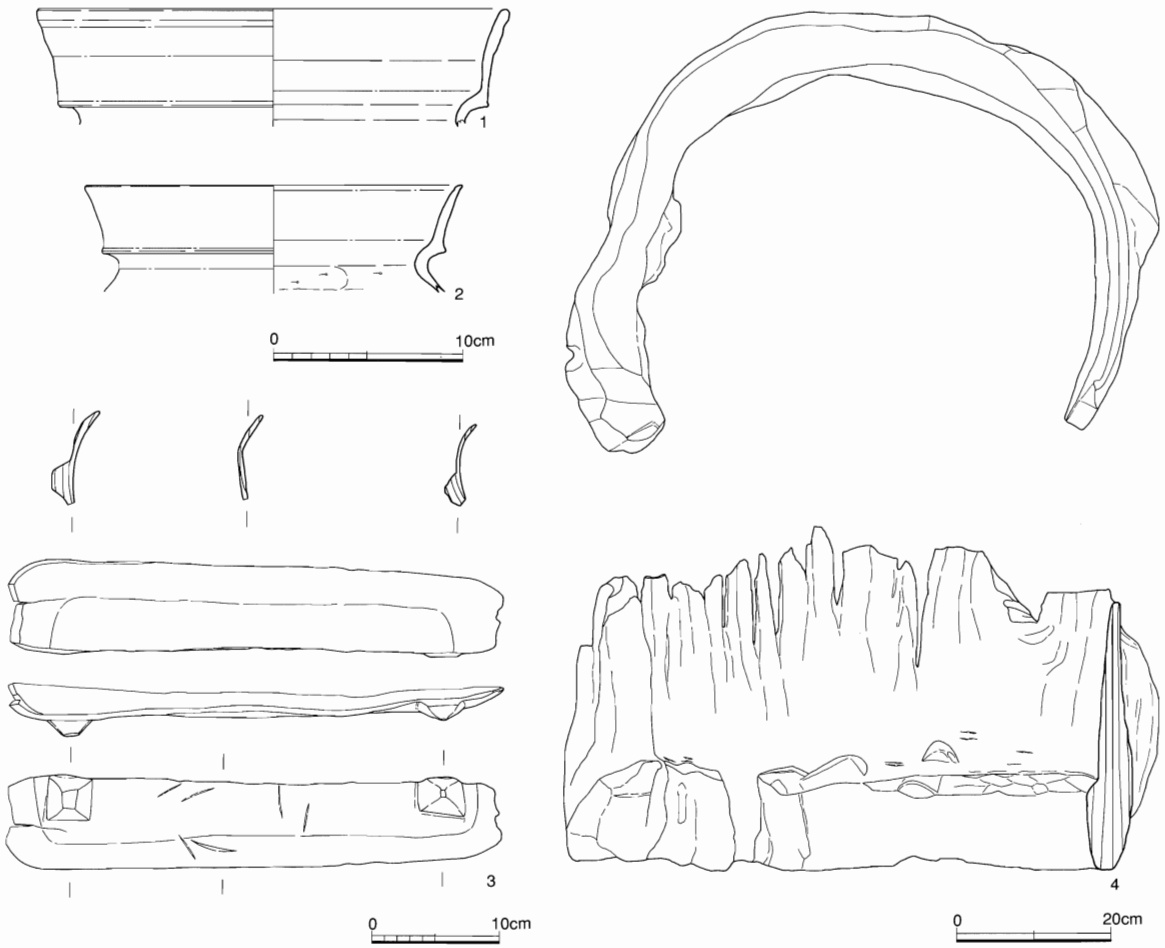
第188図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＤ20、ＳＥ01周辺遺物出土状況図（Ｓ＝１／60）

ひどく本来はもっと高かったと思われる。井戸枠の北側1／3は欠損していたが、井戸枠内から朽ちた木片が認められ、井戸枠の北側のものが腐朽して内側に倒れ込んだ可能性も考えられる。井戸枠の樹種はケヤキである。

井戸枠内の底面付近から、弥生土器や木製品が出土している。1・2は甕で、1は口縁部が直線的にのびるのに対し、2は外反しながらのびるている。3は木製の盤もしくは槽と思われ、下面には四角形の脚が付く。樹種はクワである。

ＳＤ20・ＳＥ01の周辺には多くの遺物が出土しており、特にＳＥ01の上部から南側の旧河道4と接するあたりの遺構覆土の上層に密集していた。遺物の種類を見ると、弥生土器（190－1～17）のほかに磨石・凹石類（191－1～4）や、管玉（191－5）なども出土している。

1～5は甕の口縁部で、1は口縁部が短く内傾気味に立ち上がり、4条の凹線が施されたものである。2は口縁部が外傾する平行沈線が施されている。3～5は口縁部は外反しながらのびる無文のもので、3は肩部に横方向のハケ目が、5は肩部に波状文が施されている。6～8は低脚坏で、8は底径11.0㎝とかなり大型のものである。9～11は高坏の破片である。10は円盤充填技法で作られており、坏部の下面には棒状の刺突が見られる。12～14は鼓形器台である。12・13は完形に近い形で残っていた。両方とも沈線は施されていない。12はやや大形である。13は脚上部にヘラ状工具による刺突が施されている。14は脚部にヘラ描の多条沈線が施されている。15は山陰型甑型土器で、口縁部は段がついてすぼまり、口縁部の下に把手が付く。16は片口の付く土器である。内面には水銀朱と思われる鮮やかな色の赤色顔料がわずかながら付着しているのが見てとれる。外面は丁寧な



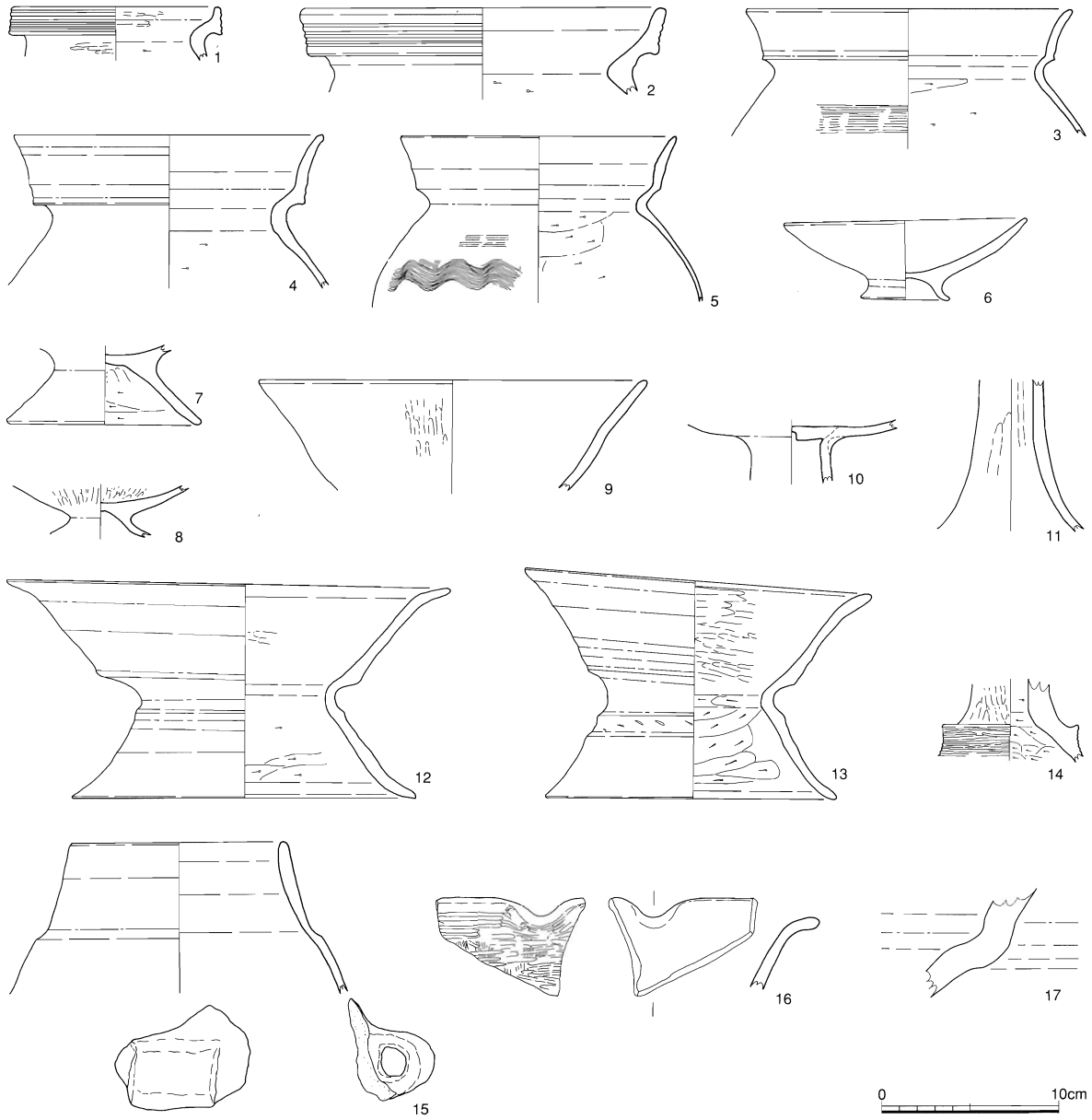
第189図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＥ01内出土遺物実測図（1・2：Ｓ＝1／4、3：Ｓ＝1／6、4：Ｓ＝1／10）

ヘラ磨きがされており、煤の付着が著しい。これらの点は水銀朱を生成した土器の特徴を備えている（本田1994）。17は器種不明の土器で破片を見る限り大形のものになりそうである。破片の中間部に段が付いて、屈折している。器壁は厚く、胎土は砂礫を多く含む。

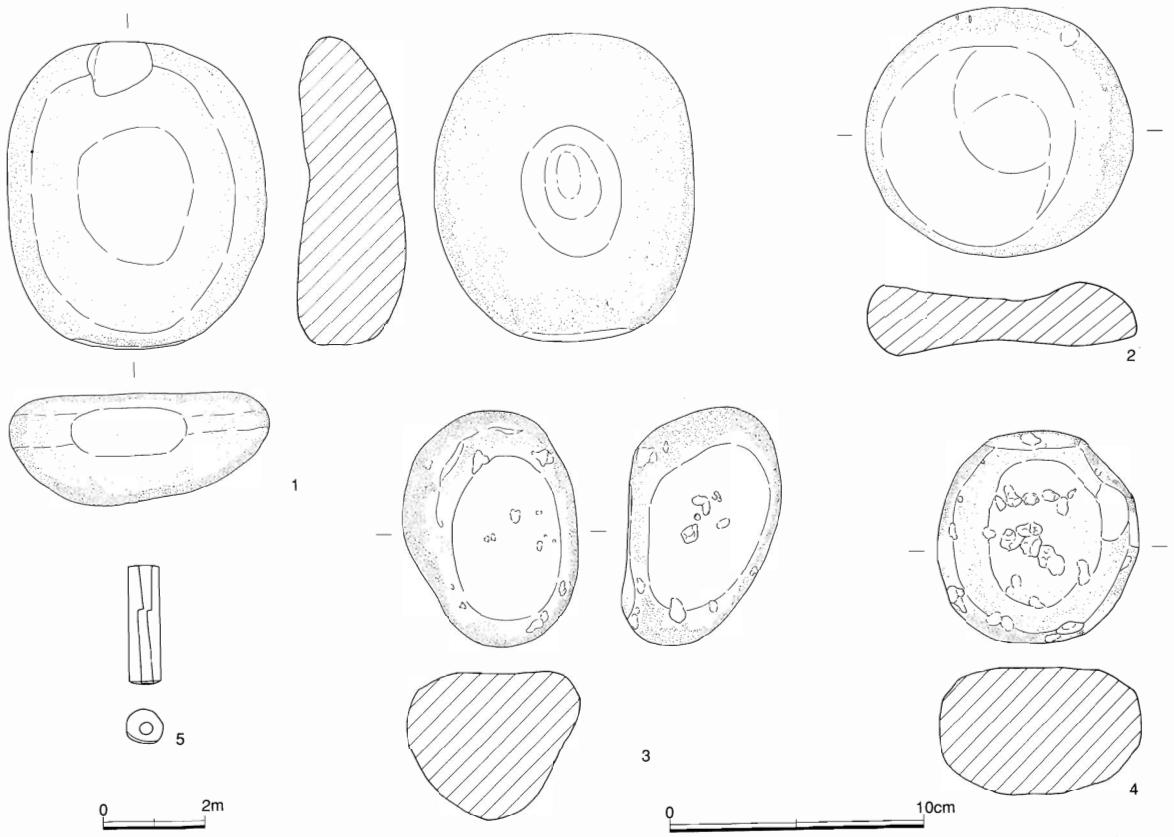
191－１～４は磨石・凹石類である。１は表裏面が使用により窪み、上下面が磨り減っている。２は表裏面が窪み、３は使用により３面が平坦になっている。４は表面及び側面全面が使用により磨り減っている。

５は碧玉製の管玉で、長さ2.35cm、径0.7cmである。両面から穿孔されている。

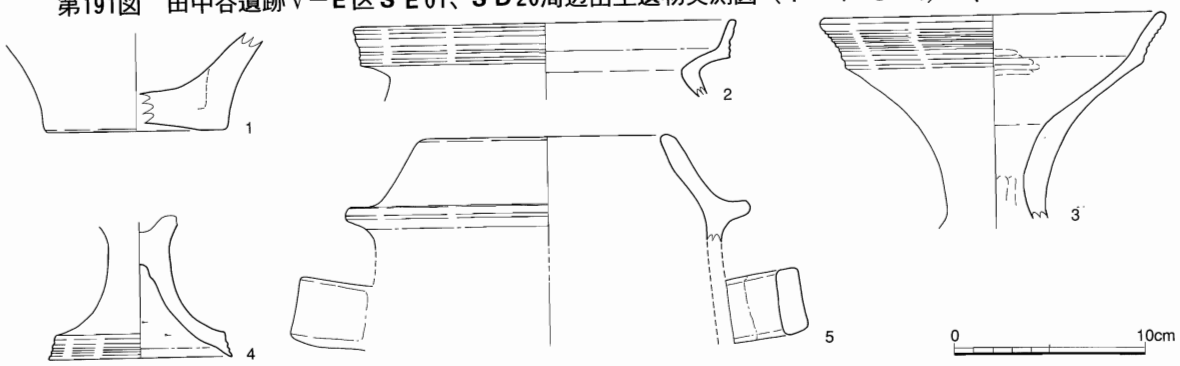
出土した土器の多くが草田４～５期に位置づけられるものであり、旧河道４から出土した土器と比べて新しい様相が見て取れる。このことからＳＤ20・ＳＥ01は、旧河道４が埋没したのち、掘り込まれた遺構と考えられる。また、多量の土器が投棄されていることや、片口の朱付着土器、管玉が出土していることから、この遺構が単なる取水施設として機能したものではなく、祭祀的な場でもあったと推測される。



第190図　田中谷遺跡Ｖ－Ｅ区ＳＥ01、ＳＤ20周辺出土遺物実測図（1）（Ｓ＝1／4）



第191図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区ＳＥ01、ＳＤ20周辺出土遺物実測図（１～４：Ｓ＝1／3、５：Ｓ＝2／3）



第192図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｅ区遺構外出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）

（7）遺構外の遺物（第192図、図版119）

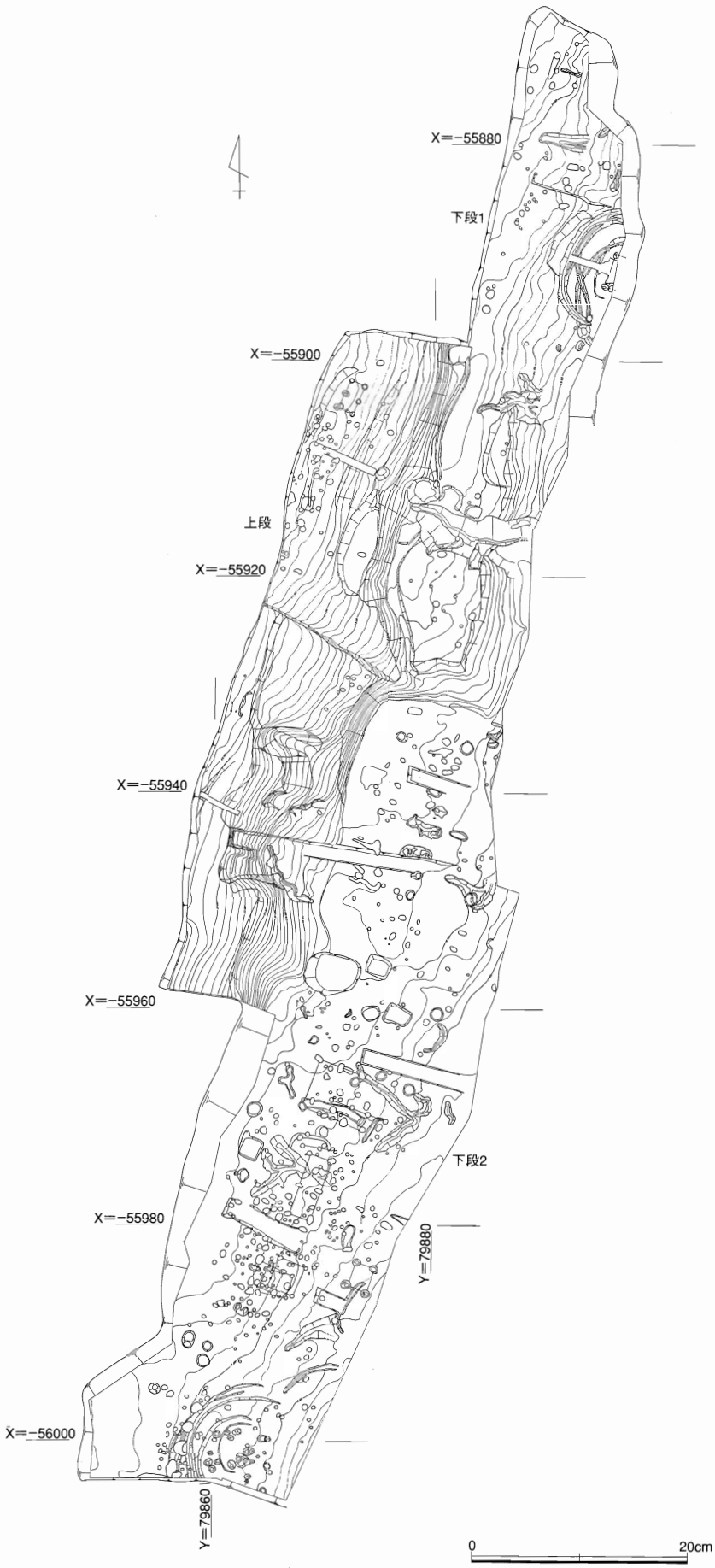
１～５はいずれも弥生土器である。１は壷もしくは甕の底部で、平底で厚手に作られている。Ⅰ様式までさかのぼる可能性が考えられる。２は甕の口縁部で、草田２期に位置づけられる。１・２は遺物包含層中で、ＳＢ19の南北の柱掘り方の間から出土している。３は鼓形器台で口縁部は短く外反する。ＳＫ03よりもやや南側で出土した。４は高坏の脚部で、ＳＢ22のＰ６の検出面で出土しており、これに伴う可能性も考えられる。３・４も草田２期に位置づけられる。５は山陰系甑形土器でＳＢ08とＳＢ07の間で出土した。

4．Ⅴ－W区の調査

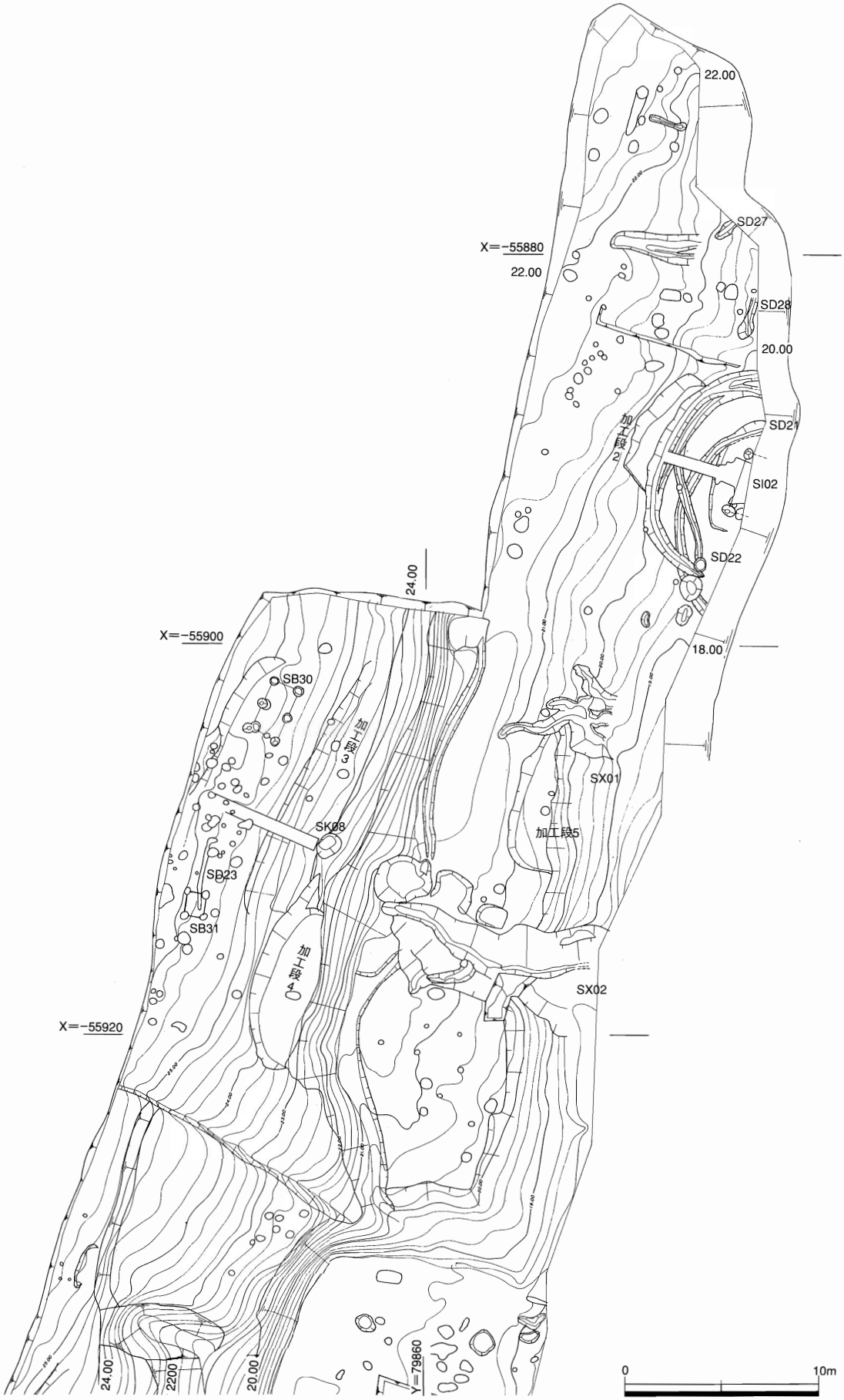
(1) 調査区の概要

Ⅴ－W区は、Ⅴ－E区から水路を挟んで西側に位置する、丘陵裾から中腹の標高15～27mの部分に設定された調査区である。南北の長さ140m、東西の幅30mと南北に細長い。調査面積は2,770㎡である。調査区の地形は、削平によるものと思われる平坦面があり、大きく見て、西側の丘陵中腹部、そこから東側へ一段下った部分に位置する標高約21mの北側平坦面、この南側のさらにもう一段低い平坦面に分かれる。ここでは便宜的に丘陵中腹部の平坦面を「上段」、北側の平坦面を「下段1」、南側の平坦面を「下段2」と呼ぶこととしたい。

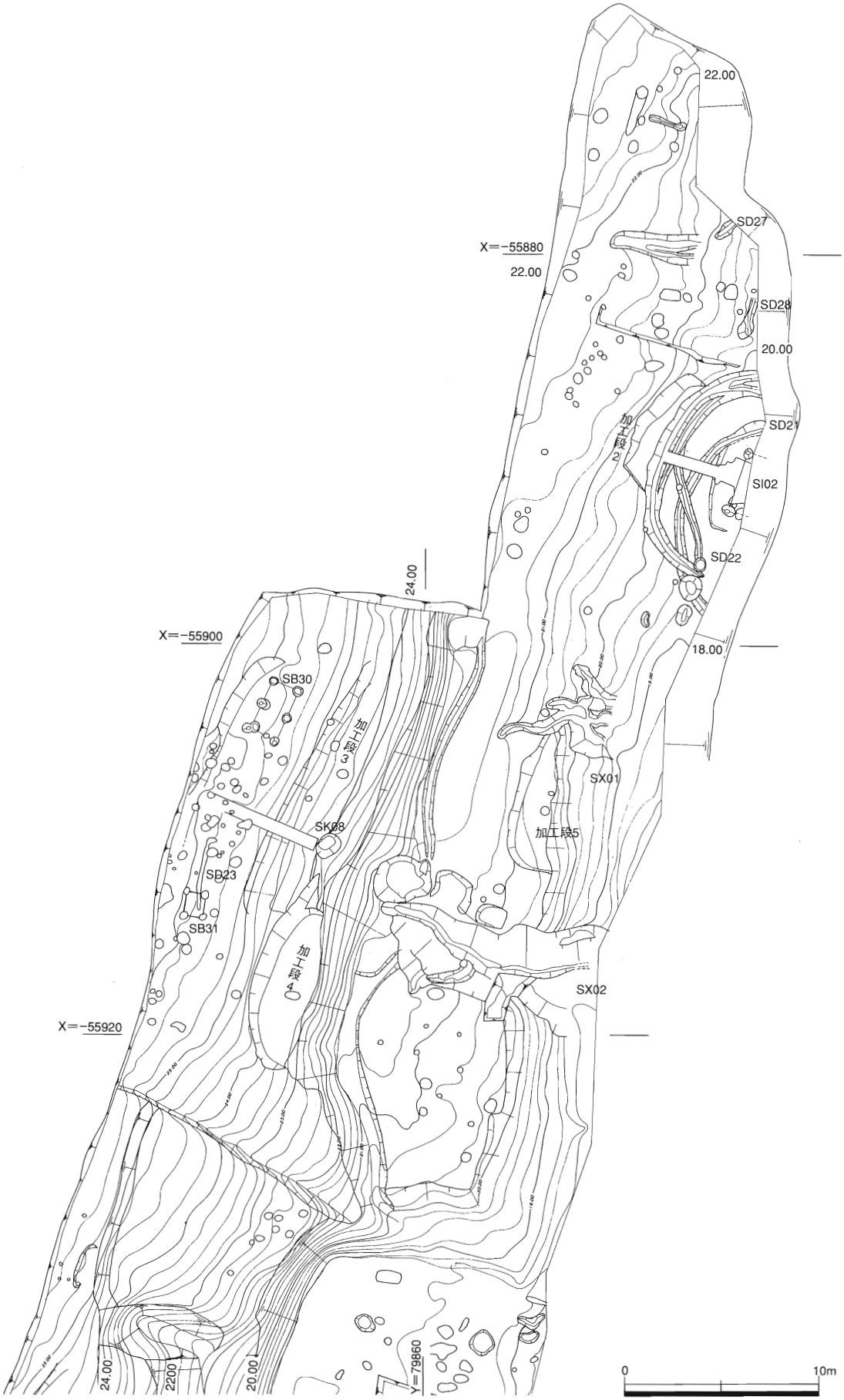
調査の結果、竪穴建物跡3、掘立柱建物跡8、加工段、溝状遺構、土坑など弥生時代後期や、古墳時代終末期から平安時代・中世までの遺構を確認することができた。また、遺物には弥生時代中期から後期、古墳時代終末から奈良・平安時代、中世の土器があり、特に奈良時代から平安時代の土器が量的に多く見られる。また、墨書土器や石帯なども出土している。



第193図　田中谷遺跡Ⅴ－W区全体図（S＝1／600）



第194図　田中谷遺跡Ⅴ－W区遺構配置図（1）（S＝1／300）



第194図　田中谷遺跡Ⅴ－W区遺構配置図（1）（S＝1／300）

第195図　田中谷遺跡Ⅴ－W区遺構配置図（2）（S＝1／300）

（2）竪穴建物跡

ＳＩ02、ＳＤ21・ＳＤ22、加工段２（第196・197図、図版103・122）

ＳＩ02は調査区下段１の北東の斜面に位置する竪穴建物跡で、遺構東側は調査区外まで広がっている。建物北西隅はＳＤ21と切り合っているが、遺構の境界を区別できずに掘り下げた。また、東側は地崩れで失われた部分もあり遺構の残存状況はあまり良好ではない。全体の形状・規模は明確ではないが、一辺約５ｍの隅円方形と推測され、西壁の立ち上がりの高さは約0.4ｍである。柱穴は西壁よりにＰ１・Ｐ２の２基が確認でき、両者の柱間距離は3.20ｍになる。Ｐ１の周辺から建物の南西隅にかけては焼土面が広がっていた。建物の西側には新旧２本の周溝が切り合いながら弧状に巡っている。古段階の溝は深さ約0.5ｍ、幅0.8ｍであるのに対し、新段階の溝は幅0.4ｍ、深さ約0.2ｍとやや小さく、古段階の溝の内側を切るように掘り込まれている。周溝の状況から考えると、ＳＩ02は建て替えがされた可能性も考えられる。

遺物は、周溝内や焼土面周辺から弥生土器・石器が出土している。１・２は焼土面周辺から出土したもので、１は壷もしくは甕の底部、２は大形の低脚坏で、脚部先端は欠損しているかもしれない。３～７は新段階の周溝から出土した。３・４は甕で、３は口縁部が直線的にのび、端部を丸く収めており、４は口縁端部が強く面取りされている。５は単口縁の甕。６は甕の胴部の破片で、外面にはタタキ目が施されている。７は磨製石器の未成品で、右側面には擦り切りの痕跡が認められ、裏面は石材の剥離面の上に研磨が施されている。表面は被熱を受けている。偏平な磨製石斧の未成品であろうか。８は磨石で、表裏面は使用により少し窪んだ状態になっており、側面も全体として平坦になっている。

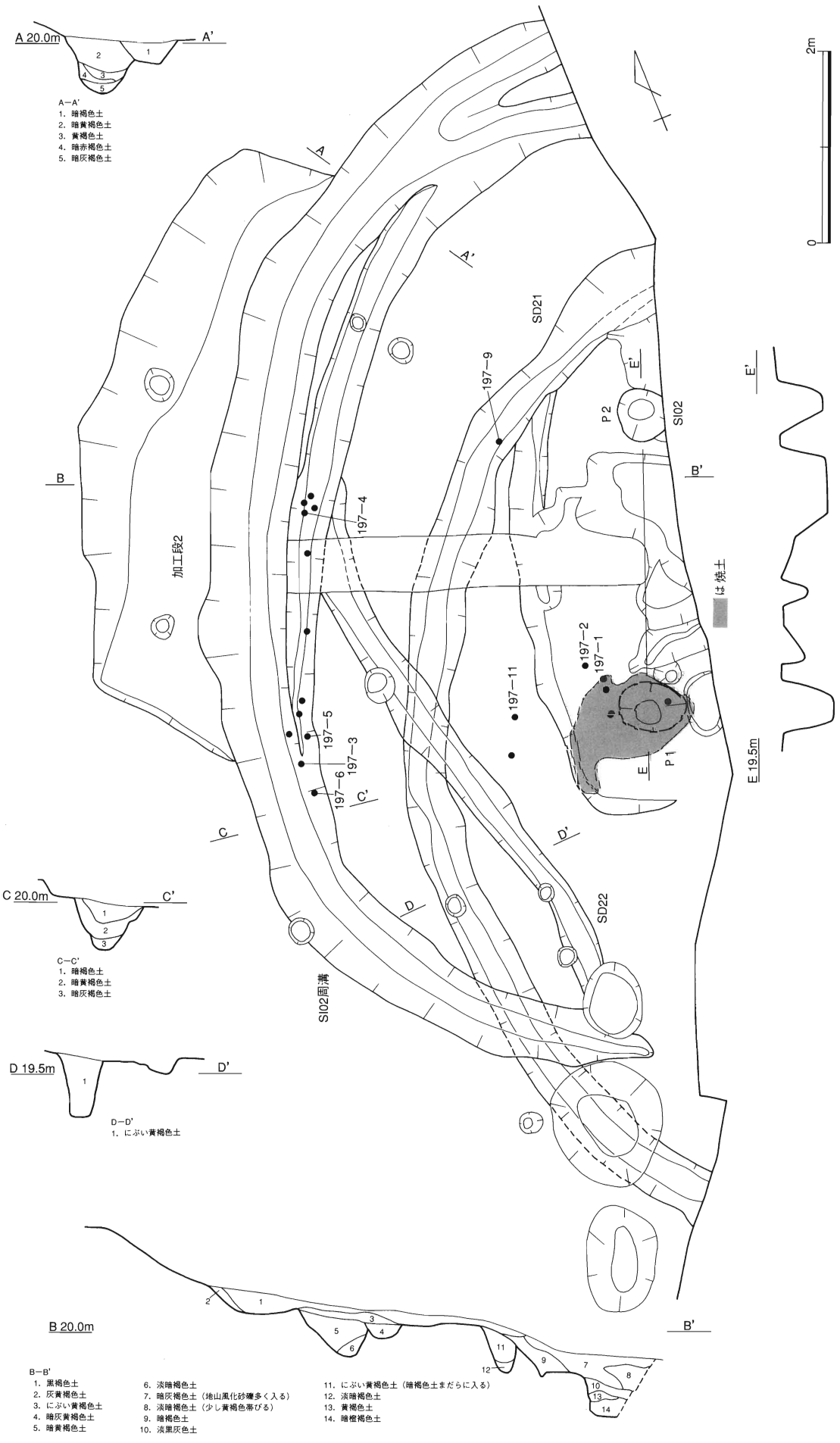
これらの遺物からＳＩ02は草田編年の５～６期に位置づけられよう。

ＳＤ21はＳＩ02の南から西側を弧状に巡る溝状遺構で、南北の端は調査区外にのびる。ＳＩ02の北西壁で切り合っているほか、ＳＩ02周溝に切られ、ＳＤ22を切っている。幅0.5ｍ前後、深さは最大で0.65ｍあり、幅に対してかなり深く掘られている。遺構の形態から見て、竪穴建物の周溝の可能性がある。遺物は弥生土器（９・10）が出土している。９は壷甕類の胴部で、肩部に平行沈線、その下には波状文が施されている。10は壷甕類の底部で平底のものである。

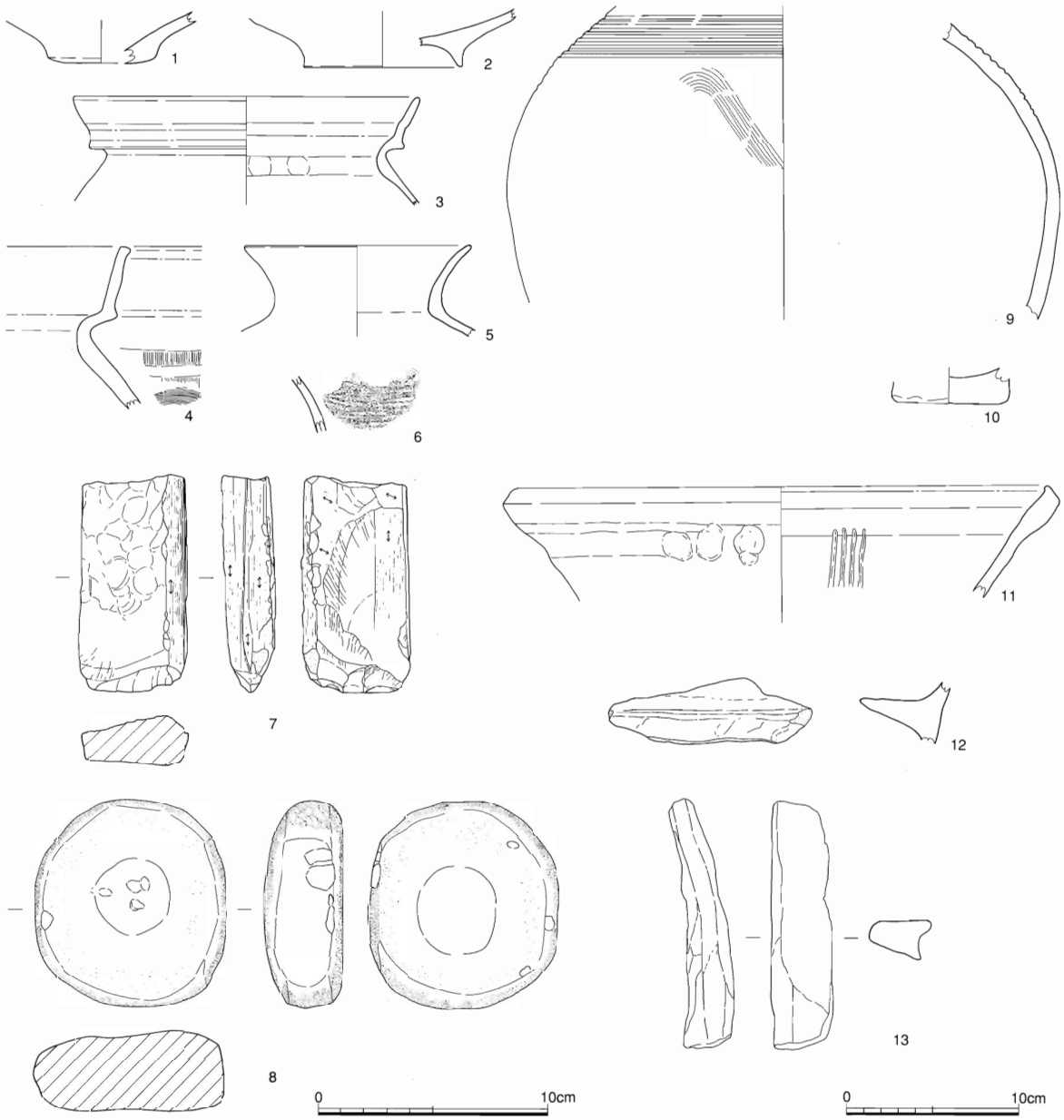
ＳＤ22はＳＩ02の西側にのびる溝で、ＳＩ02の周溝やＳＤ21に切られている。幅は0.4ｍ、深さ0.15ｍ前後で断面形はＵ字形になっている。遺構の形状から見て、竪穴建物に伴う周溝であったと思われる。遺物は出土していない。

加工段２はＳＩ02、ＳＤ21・22が埋没した後に造られた遺構で、南北約６ｍの規模を持つ。立ち上がりはやや不明瞭で、西側の壁面の高さは床面から1.1ｍ程度である。加工段の東には柱穴と思われるものも見られるが、建物が建っていたようには思われない。遺物はこの遺構に直接伴うものかどうか不明であるが、竈の破片（12・13）や土師器擂鉢（11）が出土している。

以上、上記の遺構の関係を整理すると、切り合い関係からＳＤ22→ＳＤ21→ＳＩ02→加工段２の順番で造られたと考えられる。ＳＩ02には草田編年５～６期の遺物が出土しており、ＳＤ22・21はそれ以前の遺構ということになる。また、ＳＤ21・22の存在からさらにこの東側に数棟の竪穴建物が存在した可能性が考えられる。



第196図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＩ02、加工段2、ＳＤ21,22実測図（Ｓ＝1／60）

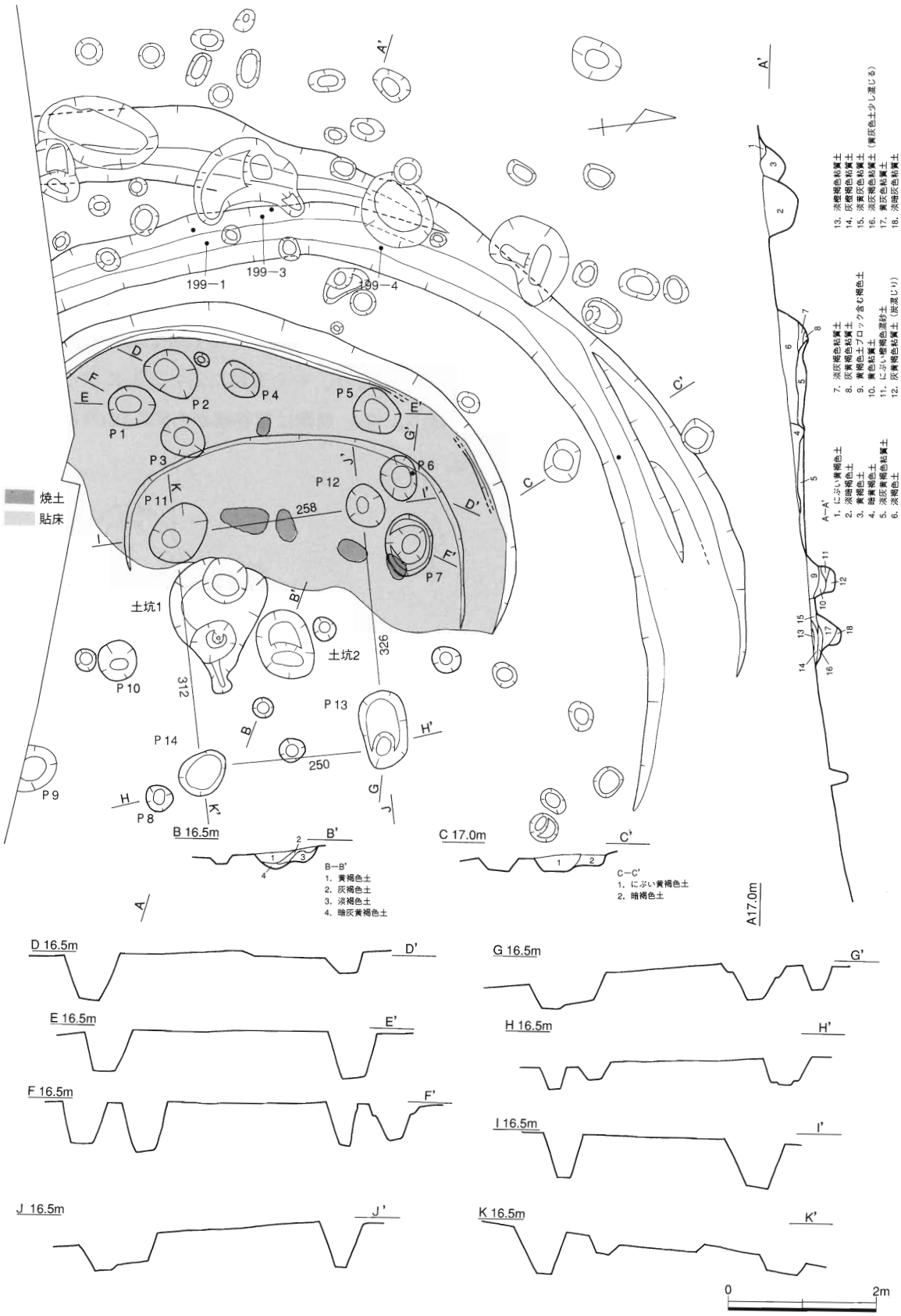


第197図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＩ02、加工段2、ＳＤ21,22周辺出土遺物実測図（1～6，9～13：Ｓ＝1／4、7，8：Ｓ＝1／3）

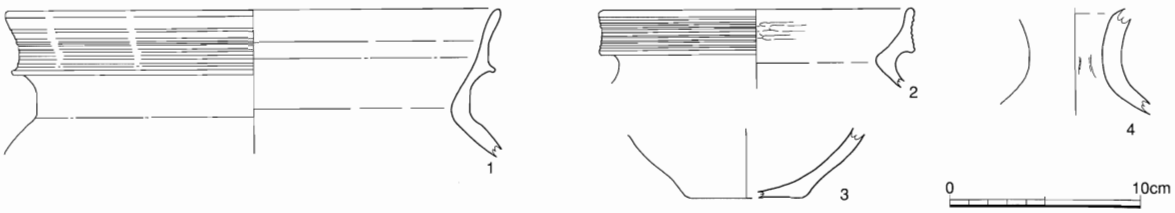
ＳＩ03（第198・199図、図版104・122）

調査区下段２の南端に位置し、北から西側にかけて周溝を伴う竪穴建物跡である。建物と周溝の一部は南側の調査区外に広がる。遺構は、近世のピットや土坑に切られて一部が壊されており、建物跡の東半分は削平されたためか壁面が残っていなかった。建物跡・周溝は新旧２時期のものが切り合っており、建物跡・周溝のどちらを見ても、大きいものから小さいものへ建て替えされたことが窺える。

古段階の建物跡は推定の長さ約７ｍの規模を持つ、平面プランが隅円方形、もしくは多角形のものである。古段階に伴う柱穴は、Ｐ１～10がその候補に挙げられるが、どのような配置で柱が建てられていたのか断定はできない。柱穴が近接しあっている部分も見られることから、さらに何度かの建て替えがあった可能性も考えられる。建物内の西側には黄褐色粘質土による貼床面が残っていた。床面の標高は16.5ｍである。建物中央には、東西長１ｍ、南北幅0.6ｍの土坑１がある。土坑１の東・西のそれぞれに径60㎝前後、深さ約40㎝の掘り込みが見られ、土層の状況から見ると西側



第198図　田中谷遺跡Ⅴ−W区ＳＩ03実測図（Ｓ＝1／80）

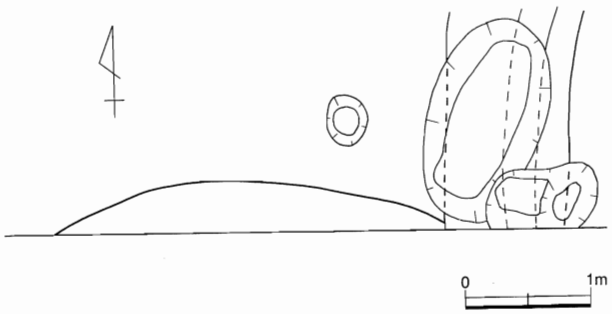


第199図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＩ03出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）

の方が新しいようである。このことから中央土坑が掘り直しされたと思われる。土坑１は、覆土に炭を含んでおり、炉として機能したと考えられる。なお、貼床面の数か所に焼土面が認められた。周溝は建物から約２ｍ外側を弧状に巡っている。

新段階の建物跡は、一辺4.5mの規模を持ち、隅円方形のもので、古段階の建物掘り方内に収まっている。床面は古段階の床面と高低差はなく、貼床の状態も似ていることから、古段階の建物が埋没した後に掘り込まれたのではなく、古段階の建物の一部を埋め戻して建物を縮小した可能性が考えられる。柱配置は、Ｐ11～Ｐ14の４基が主柱穴となるもので、Ｐ11－Ｐ12が2.58m、Ｐ－Ｐ13は、3.26m、Ｐ13－Ｐ14は2.48m、Ｐ11－Ｐ14は3.12mとなり、やや東西に長い方形になる。建物中央には、長さ0.8m、深さ0.4mの土坑２が設けられている。周溝は建物跡から約2.4m外側を弧状に巡っており、古段階の周溝の内側を切っている。

新段階の周溝内から弥生土器(199－１～４）が出土している。１・２は甕の口縁部、３は壷・甕類の底部、４は器台の筒部である。これらからＳＩ03新段階は草田２期に位置づけられる。



第200図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＩ04実測図（Ｓ＝１／60）

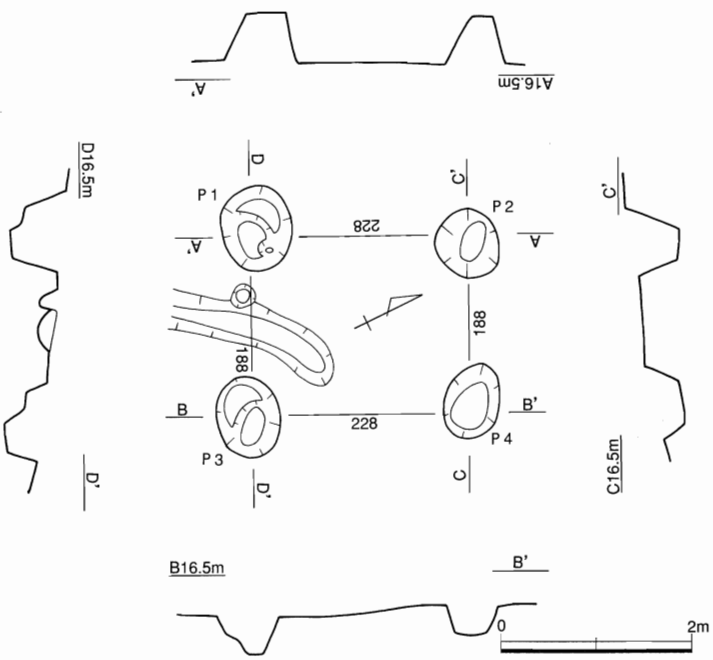
ＳＩ04（第200図）

ＳＩ03の南西側に位置し、東西3.1m、南北0.4mの範囲で平面プランのみ確認した。竪穴建物跡、もしくはそれに伴う周溝で、遺構の大半は南側の調査区外に広がると考えている。ＳＩ03古段階の周溝とわずかに切り合っているが、前後関係は分からない。

(3) 掘立柱建物跡

ＳＢ29（第201図）

調査区下段２の南東側に位置する１間×１間の掘立柱建物跡で、ＳＤ26と重複している。桁行長2.28m、梁行長1.88m、床面積は4.3㎡になる。棟方向はＮ－23°－Ｅである。



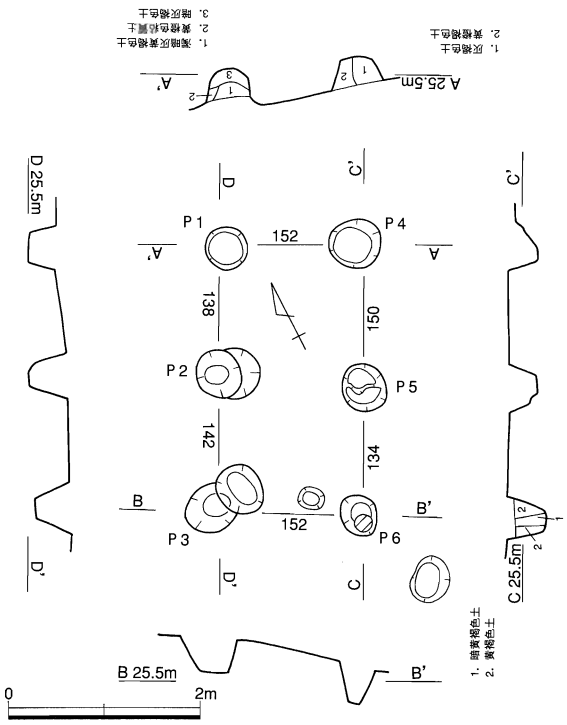
第201図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＢ29実測図（Ｓ＝1／80）

第202図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＢ30,31、加工段3、ＳＫ07周辺遺構実測図（Ｓ＝1／80）

柱穴は楕円形から円形をしており、長さ0.7～0.9m、深さは0.4～0.6mあり、掘り込みはしっかりしている。柱穴内から弥生土器小片が出土している。弥生時代の遺物包含層を掘り下げた後に検出された遺構であり、弥生時代の建物跡と考えられる。

ＳＢ30（第202・203・206、図版105・123）

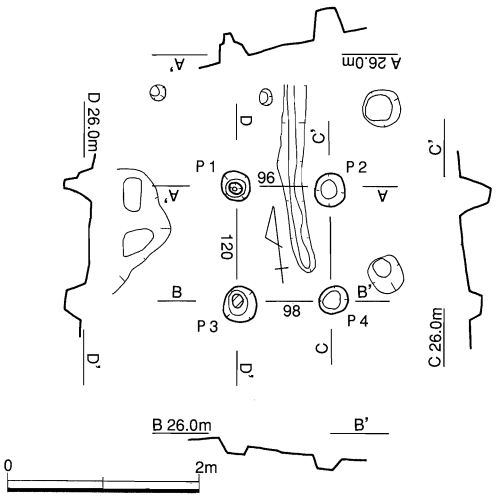
調査区上段の北側に位置する南北２間×東西１間の掘立柱建物跡で、加工段に設けられている。桁行長2.84m、梁行長1.52m、床面積は4.3㎡になる。棟方向はＮ－28°－Ｅである。柱穴は円形もしくは不整円形で、径0.5m前後、深さは0.4m前後あり、掘り込みはしっかりしている。Ｐ２・３は建て替えのためか新旧のピットが切り合っている。ＳＢ30に伴う加工段は南北10.4m以上で、南西側は調査区外になっている。加工段の立ち上がりは不明瞭である。後述するＳＢ31なども同一の加工段に建てられた可能性がある。ＳＢ30の南側２mのあたりには焼土面が見られる。加工段から須恵器（206－１～３）が出土しており、これらは大谷編年出雲６Ｂ期に位置づけられる。



第203図　田中谷遺跡ＳＢ30実測図（Ｓ＝１／80）

ＳＢ31（第202・204図）

調査区上段、ＳＢ30の南側に位置し、ＳＤ07と重複している。桁行長1.20m、梁行長0.98m、床面積は1.2㎡、棟方向はＮ－28°－Ｅである。極めて小規模であり、建物跡とするには疑問もある。



第204図　田中谷遺跡Ｖ－Ｗ区ＳＢ31実測図（Ｓ＝1／80）

ＳＤ23（第202図）

調査区上段、ＳＢ30の南側に位置し、ＳＢ31と重複している。長さ3.7m、幅0.3m弱、深さ0.2mで、北側ではL字状に折れ曲がっている。

ＳＫ07（第202・205・206図、図版105・123）

ＳＢ30を伴う加工段に設けられた長径34㎝、短径30㎝、深さ36㎝の土坑である。内部には高坏（206－４）と土製支脚（５）が埋められていた。４は切り込み状の透孔が２方向に入れられている。５は三叉突起のものである。

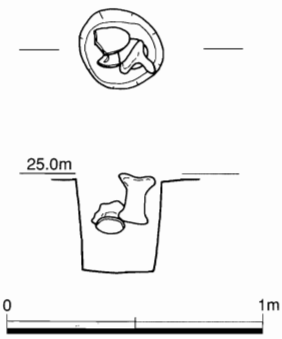
加工段３、ＳＫ08（第202・207図、図版123）

加工段３は調査区上段の北側で、ＳＢ30の東側に位置する。ＳＢ30の加工段よりも一段低く、床面の標高は24.3mである。現状での規模は南北約14m、東西2.2mであるが、東側は下段２が造ら

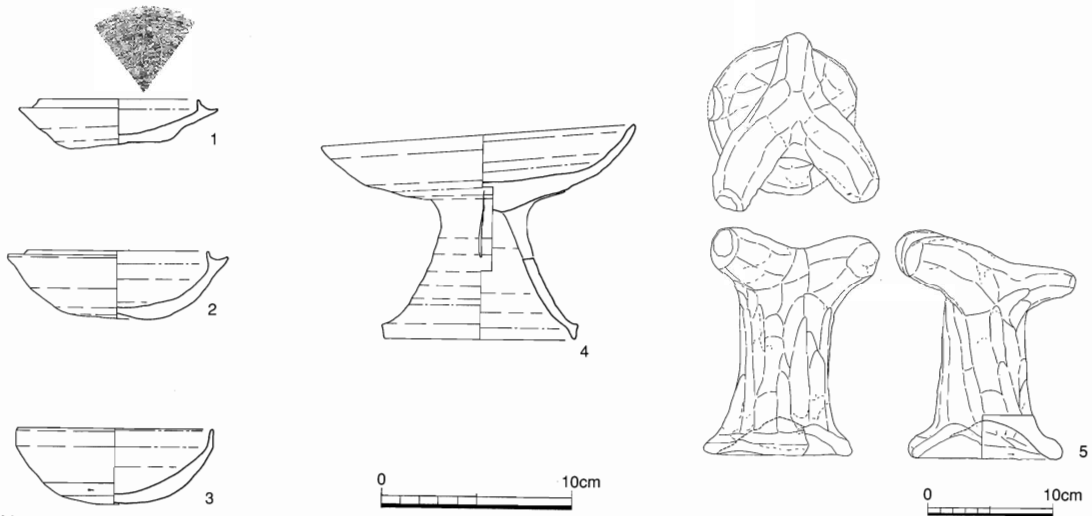
れる際に削られたと思われる。現状では明確に建物の柱穴といえるものはないが、削平された部分に建物が建てられていた可能性も考えられる。段の立ち上がりはやや不明瞭である。

ＳＫ08は加工段３のやや南よりに位置する土坑である。長径1.35m、短径1.1mの楕円形をしており、深さは1.7mもある。遺構の性格は不明である。

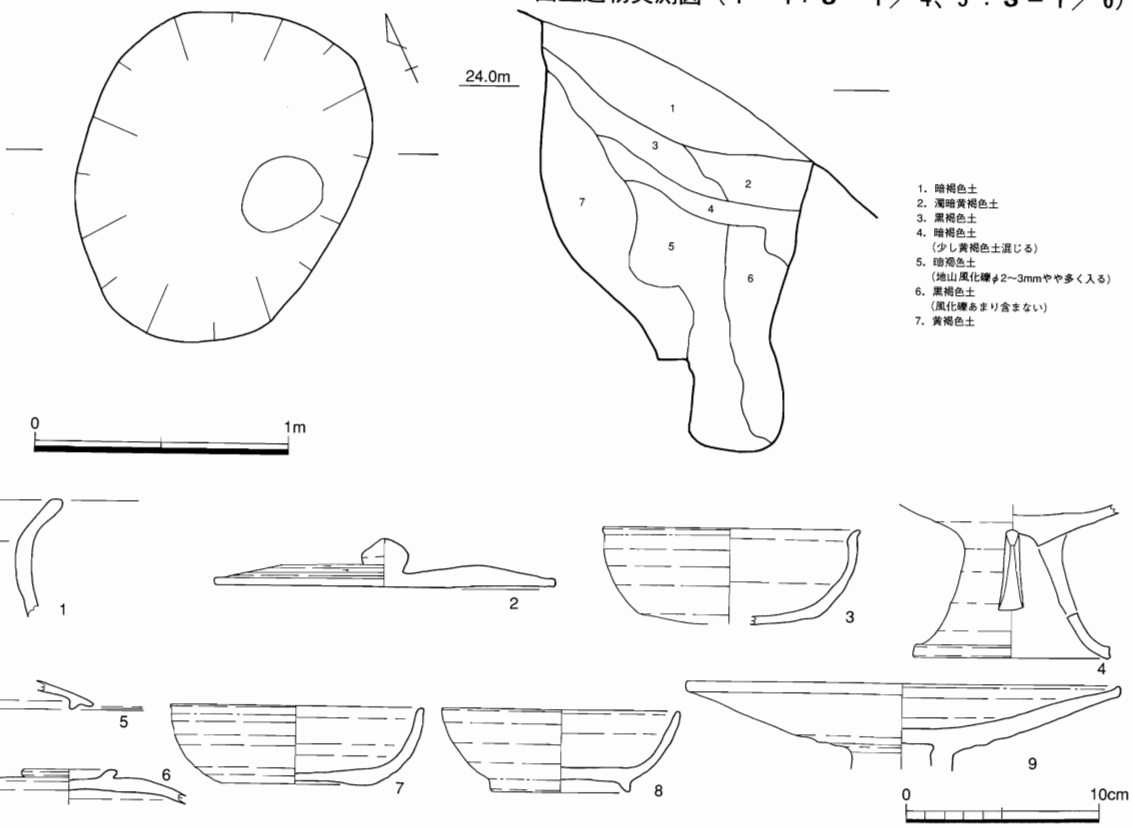
加工段３の東側の斜面から207－１～４が、ＳＫ08から５～９が出土している。１は土師器甕。２～９は須恵器である。２・５・６は蓋で、２は天井部に擬宝珠つまみをもち口縁部にかえりは持たない。５は口縁部にか



第205図　田中谷遺跡Ｖ－Ｗ区ＳＫ07実測図（Ｓ＝1／30）



第206図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｗ区ＳＢ30周辺、ＳＫ07出土遺物実測図（１～４：Ｓ＝１／４、５：Ｓ＝１／６）



第207図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｗ区ＳＫ08実測図・加工段3、ＳＫ08出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／30、遺物：Ｓ＝1／4）

えりがつき、６は天井部に輪状つまみを持つ。３・７・８は埦で、８は底部に高台が付く。４は高坏で三角形の透孔が２方向に入れられている。９は盤で長い脚部が付くと思われる。

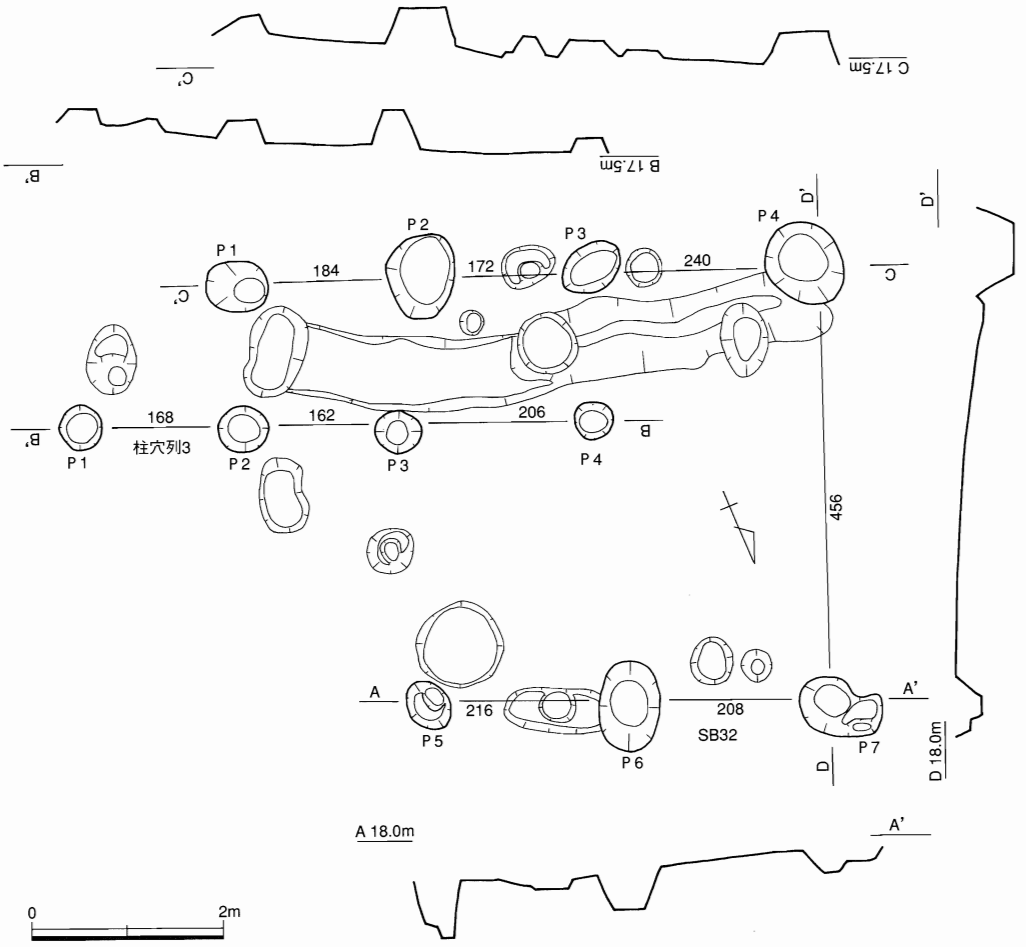
これらの遺物から加工段３は８世紀代を中心とする時期に営まれたと考えられる。

ＳＢ32（第208図）

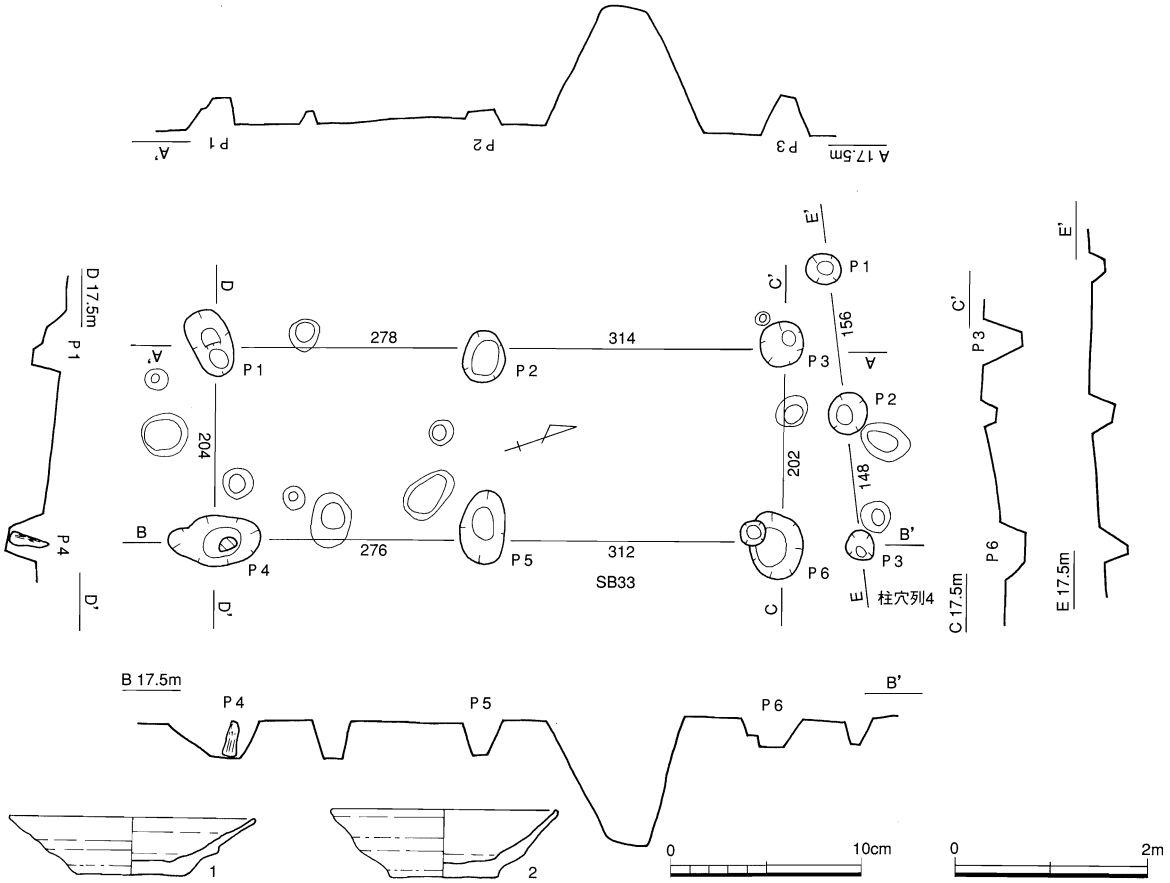
調査区下段２のほぼ中央に位置し、ＳＤ33を切っており、柱穴列３と重複している。北東隅の柱穴が確認できていないが、これはＳＤ33の覆土に掘り込まれた柱穴に気付かなかったためと思われ、東西３間×南北１間の掘立柱建物跡と推測される。建物の規模は桁行長5.96m、梁行長4.56m、床面積は27.2㎡になる。棟方向はＮ－68°－Ｗである。柱穴は不整楕円形で、長径0.6～1.0m、深さは0.2～0.6m前後ある。柱穴内から遺物は出土していない。

柱穴列３（第208図）

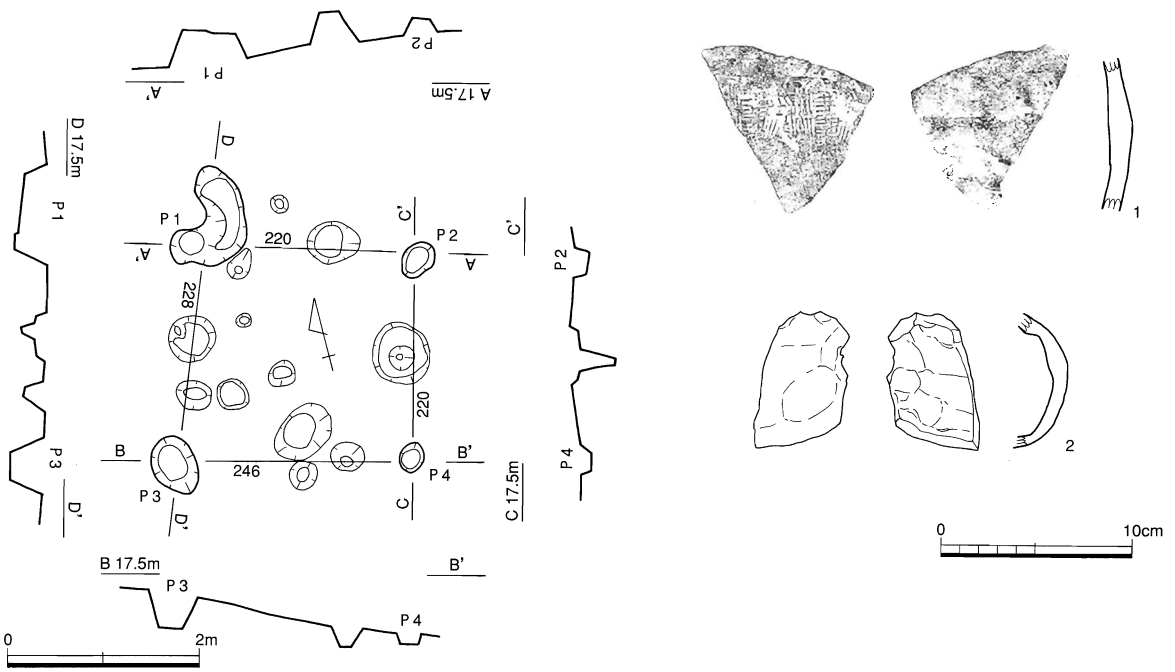
調査区下段２のほぼ中央に位置し、ＳＢ32と重複するが、切り合いがないため前後関係は不明である。Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３－Ｐ４がＮ－68°－Ｗの方向に直線的に並んでおり、長さは5.36mになる。柱間隔はＰ１－Ｐ２、Ｐ２－Ｐ３がそれぞれ５尺５寸前後であるのに対し、Ｐ３－Ｐ４が約７尺と広くなっている。柱穴は、いずれもほぼ円形で、径0.4～0.5m、深さ0.2m弱～0.4mである。遺物は出土していない。



第208図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｗ区ＳＢ32、柱穴列3実測図（Ｓ＝1／80）



第209図　田中谷遺跡Ⅴ―W区ＳＢ33、柱穴列４・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝１／80、遺物：Ｓ＝１／４）



第210図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＢ34・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／80、遺物：Ｓ＝1／4）

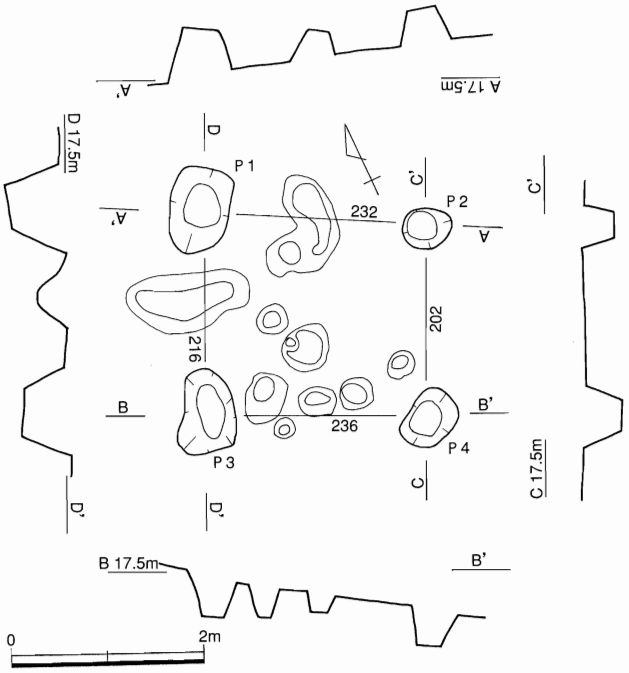
ＳＢ33（第209図）

調査区下段２のほぼ中央に位置する南北２間×東西１間の掘立柱建物跡である。ＳＫ13、ＳＸ03と重複している。また北側には柱穴列４がある。建物の規模は桁行長5.92m、梁行長2.04m、床面積12.0㎡になる。棟方向はＮ－19°－Ｅである。桁行の柱間隔は南側のＰ１－Ｐ２、Ｐ４－Ｐ５が

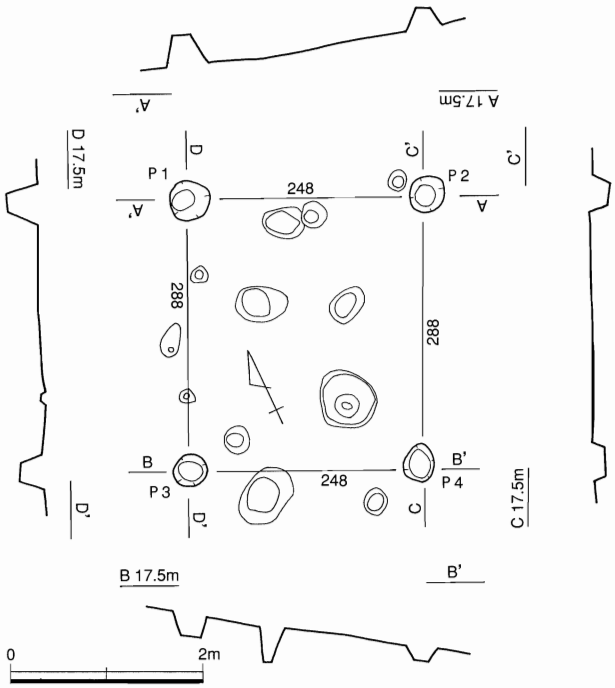
9尺を指向していると思われるのに対し、北側のP2－P3、P5－P6は10尺5寸を指向しているようである。梁行の柱間は7尺近い。柱穴は長楕円形から円形に近いものまであり、長径0.5～1.0m、深さは0.2m弱～0.4m前後ある。P4には径20cmの柱根が残っていた。柱穴内から遺物は出土していない。

柱穴列4（第209図、図版124）

調査区下段2のほぼ中央に位置する。SB33の北辺から1～1.6m北に位置しており、これに伴う可能性も考えられるが、両者の柱列は平行していない。P1－P2－P3がN－78°－Wの方向に直線的に並んでおり、長さは3.04mになる。柱間は5尺を指向していると思われる。柱穴はやや不整な円形で、径0.4m前後、深さ0.2m前後である。P3の中から土師器埦が3点出土している。1点は底部のみの破片であるため図示しなかったが、残る2点（1・2）は全体の器形が分かるほど残存していた。これらは12世紀代に位置づけられよう。



第211図　田中谷遺跡Ⅴ－W区SB35実測図（S＝1／80）



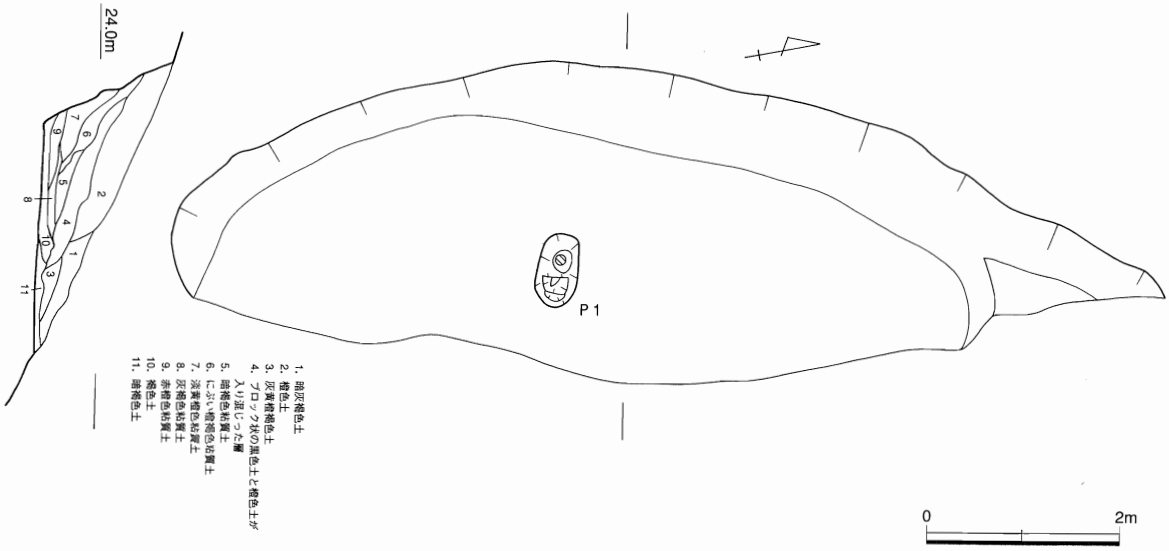
第212図　田中谷遺跡Ⅴ－W区SB36実測図（S＝1／80）

SB34（第210図、図版124）

調査区下段2の中央からやや南よりに位置する1間×1間の掘立柱建物跡である。SB35・36と重複している。建物の規模は、桁行長2.46m、梁行長2.28m、床面積5.6㎡になる。棟方向はN－74°－Wである。柱穴は、P1が他の遺構と切り合っているため本来の形が分からないが、ほかは長径0.3～0.6mの楕円形で、深さは0.1～0.4m前後である。遺物は、P3から1・2が出土している。1は瓷器系陶器の甕で、外面にタタキ目の上下がナデ消され、帯状の文様のようになっている。内面には煤が付着している。13世紀後半から14世紀前半のものと思われる。2は器種不明の陶器で焼成は須恵質である。内面は回転ナデの後、指頭圧痕が顕著に見られる。

SB35（第211図）

調査区下段2の中央からやや南よりに位置する1間×1間の掘立柱建物跡である。SB34・36と重複している。建物の規模は、桁行長2.36m、梁行長2.16m、床面積5.1㎡になる。棟方向はN－66

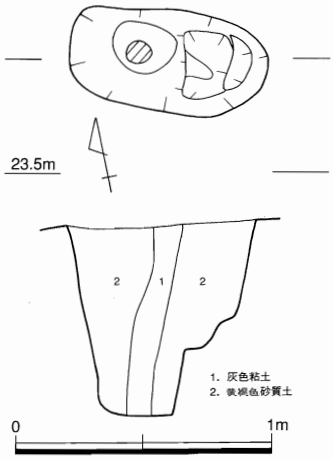


第213図　田中谷遺跡Ⅴ－W区加工段４実測図（S＝1／80）

°－Eである。遺物は出土していない。

ＳＢ36（第212図）

調査区下段２の中央からやや南よりに位置する１間×１間の掘立柱建物跡である。ＳＢ34・35と重複している。建物の規模は、桁行長2.88m、梁行長2.48m、床面積7.1㎡になる。棟方向はＮ－25°－Ｅである。遺物は出土していない。

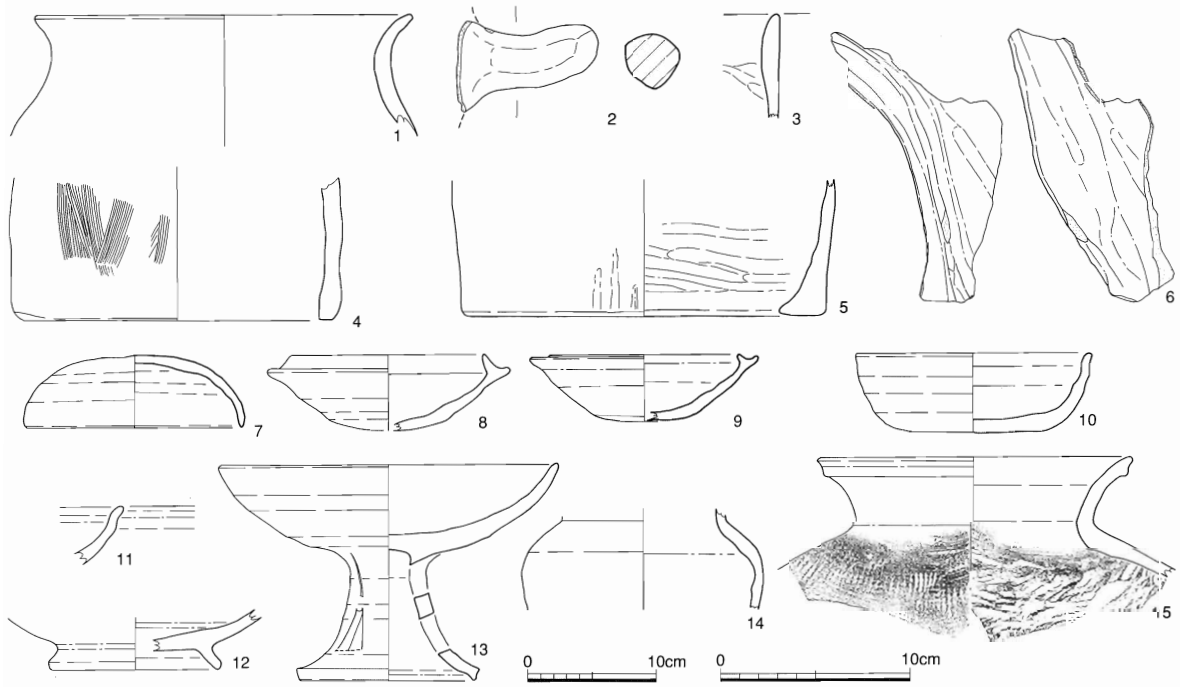


第214図　田中谷遺跡Ⅴ－W区加工段４Ｐ１実測図（S＝1／30）

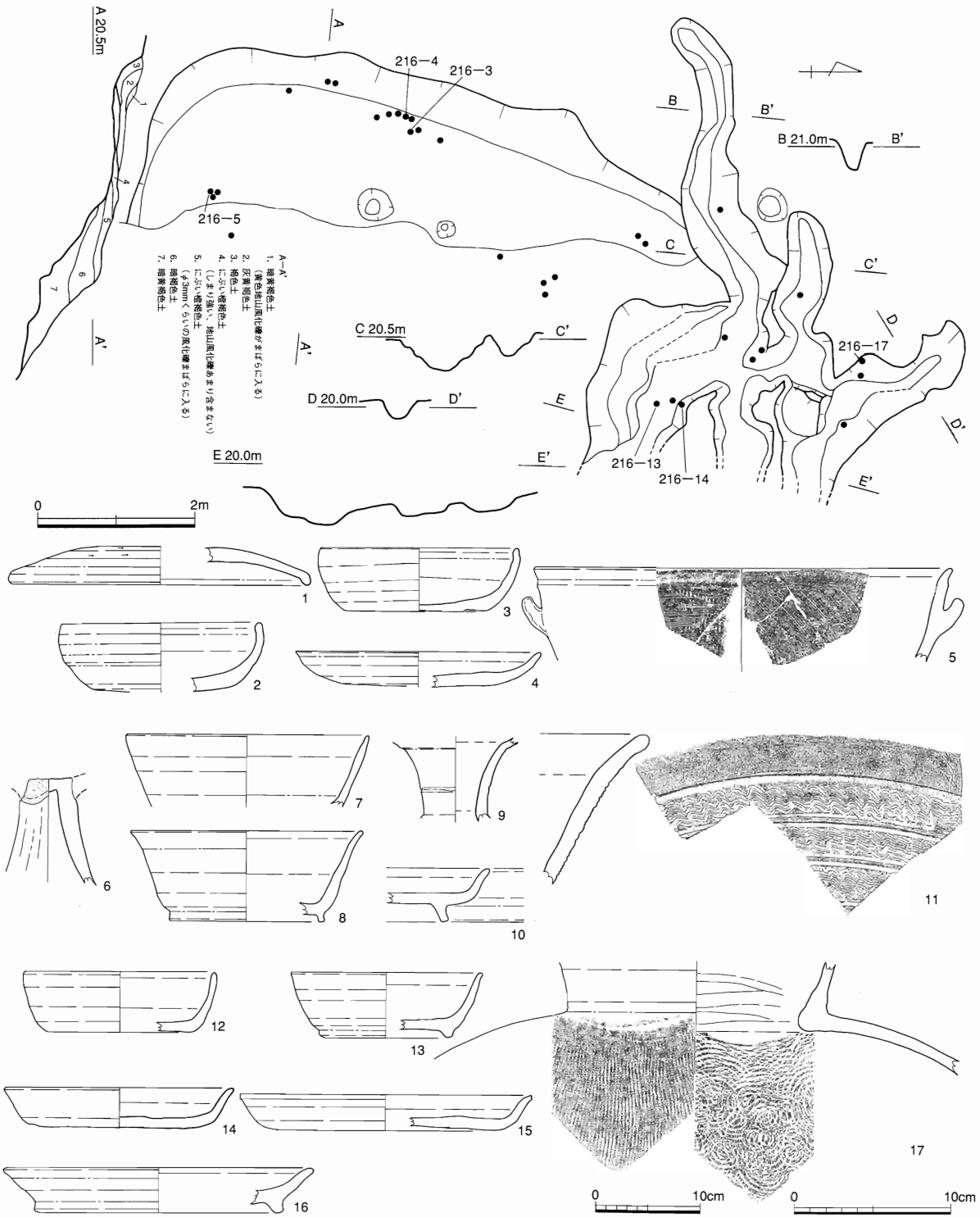
（4）加工段

加工段４（第213～215図、図版106、124、125）

調査区上段の北側に位置する。加工段３の南に接しており、両者は切り合っていたと思われるが、土層の前後関係を把握することは



第215図　田中谷遺跡Ⅴ－W区加工段４出土遺物実測図（1・2・7～15：S＝1／4、3～6：S＝1／6）



第216図　田中谷遺跡Ⅴ－W区加工段５、ＳＸ01・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／80、遺物：1～4・6～16：Ｓ＝1／4、5・17：Ｓ＝1／6）

できなかった。現状での規模は、南北8.2m、東西2.4mであるが、東側は下段１の平坦面が造られる際に削られた可能性がある。加工段は丘陵上部の地山を削り出して造られており、壁面の高さは最大で1.4mもある。壁面の立ち上がりは明瞭である。加工段の中央には長径0.77m、短径0.4m、深さ0.75mのＰ１が設けられている。Ｐ１には径0.1mの柱痕と思われるような土層が認められるが、建物に伴うものかどうかは分からない。遺物は覆土から多く出土しており、土師器には甕（215－１）、甑（２）、移動式竈（３～６）が見られ、須恵器には坏蓋（７）、坏身（８・９）、埦（10・11）、高台付埦（12）、高坏（13）、壷（14）、甕（15）がある。10は覆土上層から出土した

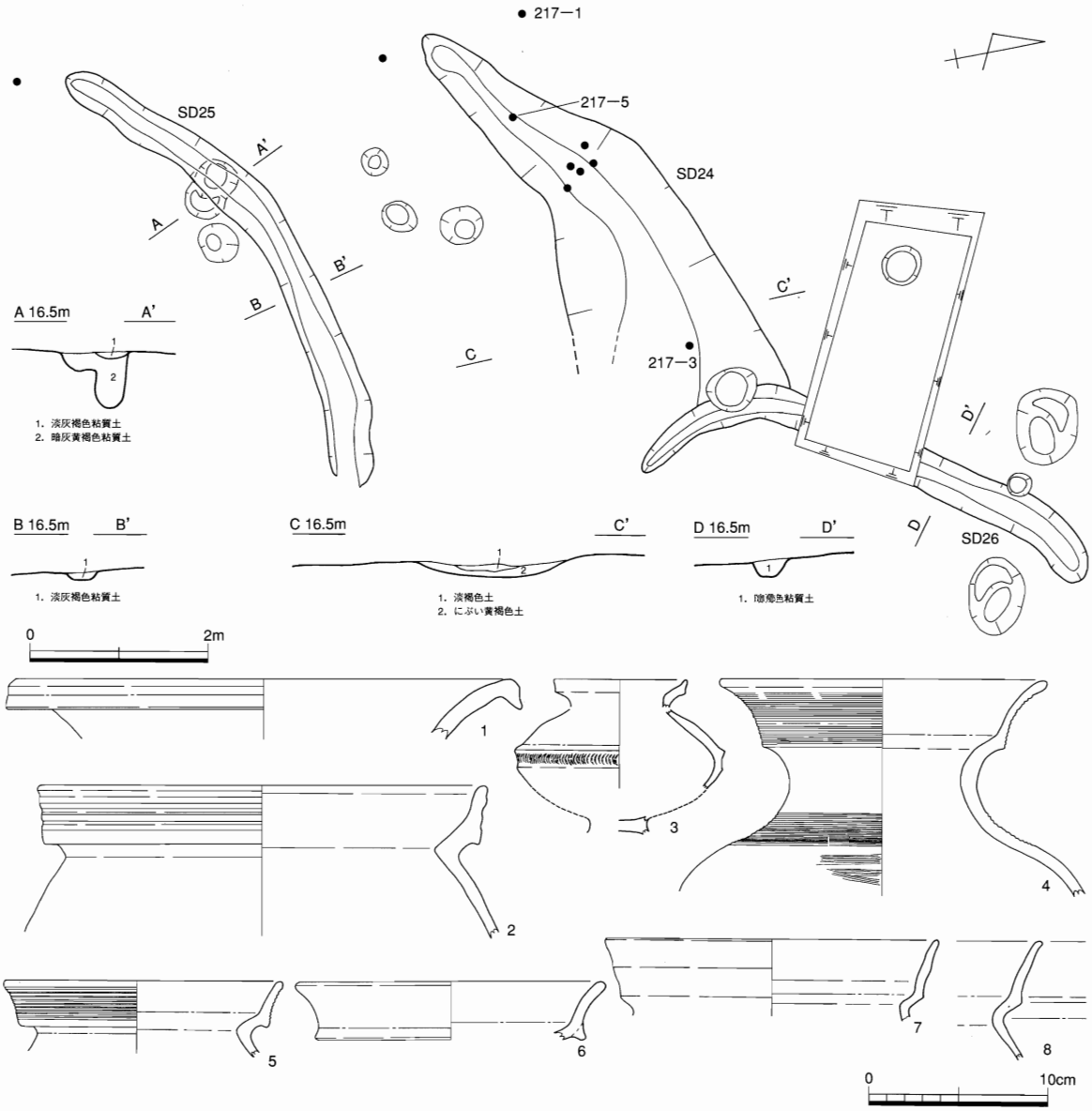
 もので、底部に回転糸切りが施されているが、これ以外のものは大谷編年6期に位置づけられる。この遺構の埋没時期もこのころであったと思われる。

加工段5、SX01（第216図、図版106、125、126）

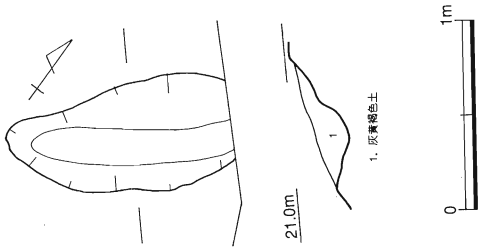
下段1のほぼ中央に位置する。加工段5は現状では南北7m、東西2.5mであるが、北側でSX01に切られており、流出や削平により本来の形は大きく失われている。壁面の立ち上がりは不明瞭で、現状での壁面の高さは0.3mである。東の斜面側は盛土で造成されている。ピットが2基検出されているが、建物に伴うものかどうか現状では判断できない。

SX01は加工段5の北側を流れる流水跡で、複雑に枝分かれしたり、合流したりしている。覆土には地山岩盤の風化土を含んでいる。

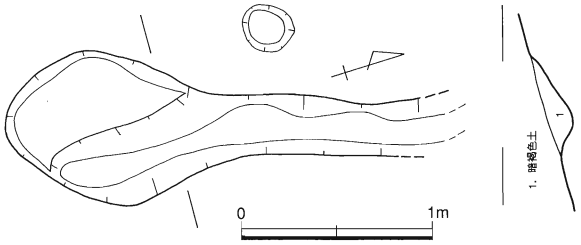
加工段5に伴って1～5が、加工段5の東から北東にかけての斜面で6～11が、SX01内で12～17が出土している。これらの遺物から加工段5は8世紀代に位置づけられよう。



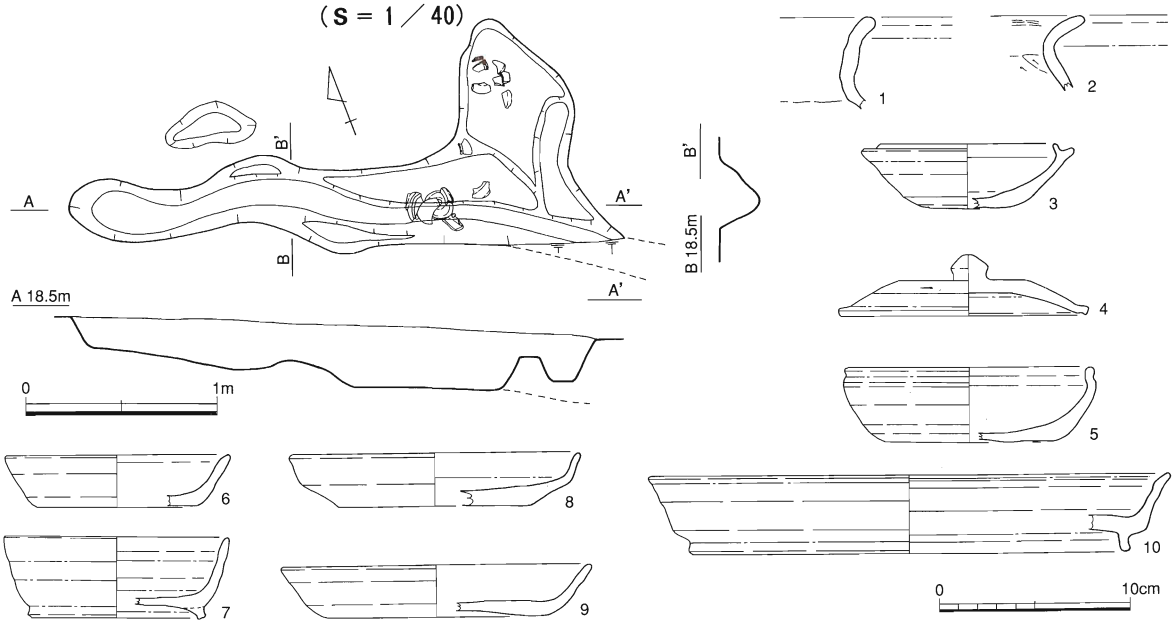
第217図　田中谷遺跡V－W区SD24～26・出土遺物実測図（遺構：S＝1／80、遺物：S＝1／4）



第218図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＤ27実測図（Ｓ＝１／40）



第219図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＤ28実測図（Ｓ＝１／40）



第220図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＤ29・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝１／40、遺物：Ｓ＝１／4）

(5) 溝

ＳＤ24～26（第217図、図版126）

調査区下段２の南東側で、ＳＩ03の北東に位置する。いずれも弥生時代の遺物包含層を取り除いた後に検出された。１・２は遺構周辺の包含層で出土した弥生土器である。１は広口壷で、Ⅲ様式までさかのぼると思われる。２は草田２期の甕である。

ＳＤ24は南西から北東へ弧状にのびる溝である。北東側へいくにつれて次第に幅が大きくなり、約２ｍまで広がる。北側でＳＤ26と切り合っているが、前後関係は把握できなかった。覆土中から弥生土器が出土した。３は胴部が算盤玉のようなかたちをした壷である。胴部中央に凸帯が巡り、その上に爪形の文様が施されている。底部の破片から脚部が付くことが分かる。４は壷で、口縁部と肩部に平行沈線が施されている。５・６は甕で、５は口縁部に平行沈線が施されており、６は無文である。これらの遺物から、この遺構は草田３期の遺構と考えられる。

ＳＤ25はＳＤ24の南に位置しており、南西から北東へ弧状にのびる溝で、幅40㎝前後、深さ約10㎝である。弥生時代後期の土器片が出土している。７・８は口縁部が無文で直線的に立ち上がり、端部を丸く収めている。草田編年５期に位置づけられよう。

ＳＤ26はＳＤ24の北東を「く」の字状に曲がりながらのびる、長さ約５ｍ、幅0.4ｍ前後、深さ約0.2ｍの溝である。ＳＢ29と重複している。遺物は小片のため図示しなかったが、草田４期以降の弥生土器片が出土している。

ＳＤ27（第218図）

調査区下段１北端付近の東側斜面に位置する。南西から北東方向にのびており、北側は調査区外になる。確認できた長さは1.2mで、幅0.6m、深さはおよそ0.25mである。等高線に対して平行に近いかたちでのびており、加工段などに伴って掘られたものかもしれない。遺物は出土していない。

ＳＤ28（第219図）

調査区下段１北端付近の東側斜面で、ＳＩ01の北側に位置する。南北方向にのびており、北側で遺構の輪郭は不明瞭になる。長さは2.2mで、幅0.3～0.8m、深さは約0.2mである。等高線に対して平行しており、加工段などに伴って掘られたものかもしれない。遺物は弥生時代後期から古墳時代前期のものと思われる土器小片が出土している。

ＳＤ29（第220図、図版127）

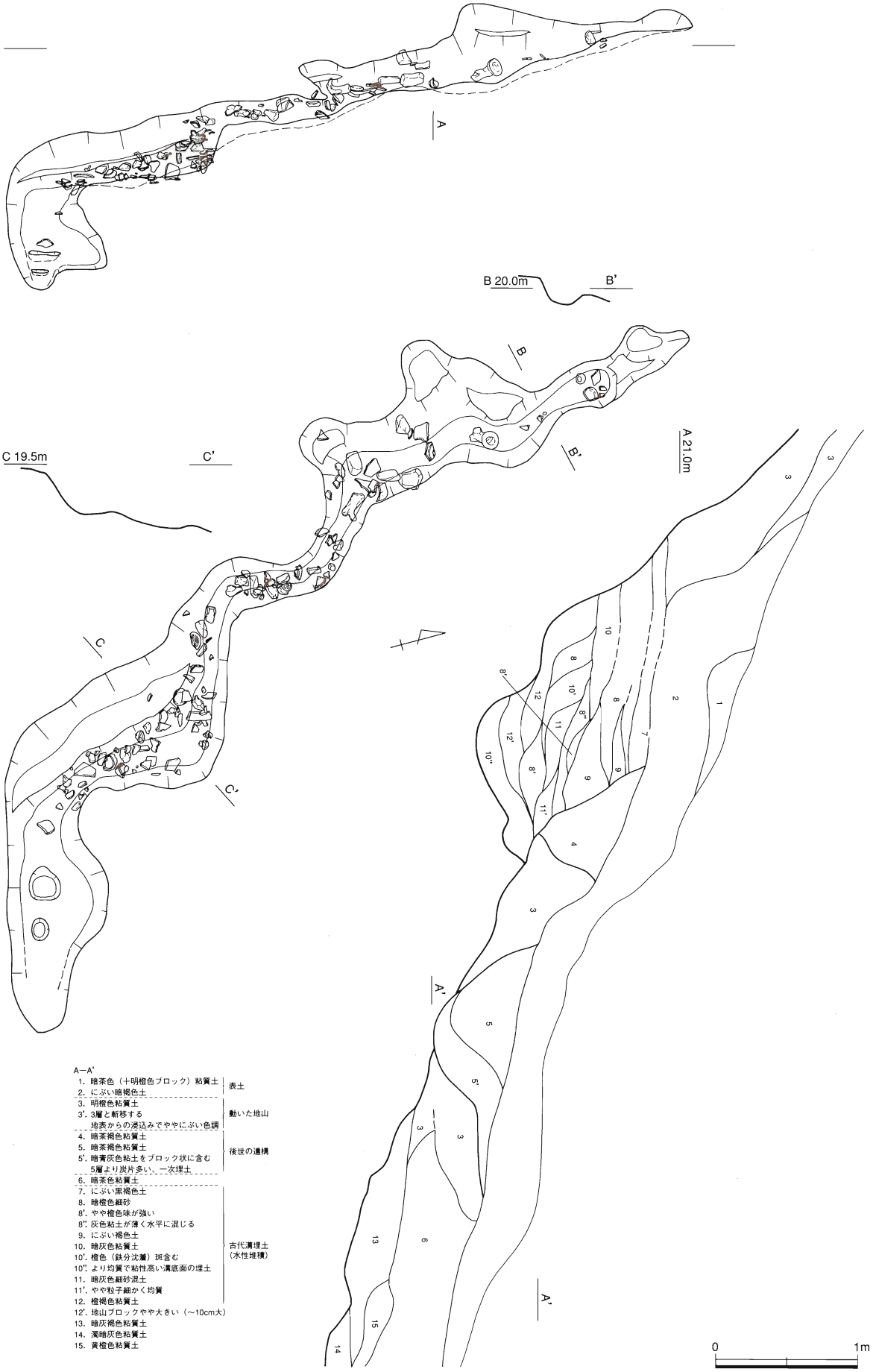
調査区下段２の北よりに位置する。東西方向に不整形にのびる溝状の遺構で、東側はトレンチによりどのようにのびるか不明だが、後述するＳＫ12につながるかもしれない。溝の底には、水性作用による細砂・粘土が堆積しており、水が恒常的に流れていたと思われる。覆土中から土師器（１・２）、須恵器（３～10）が出土しており、これらはこの遺構が埋没しかけた段階で投棄されたものと思われる。１・２は土師器甕である。３は受部を持つ坏身で、４は須恵器蓋で擬宝珠つまみをもち、口縁端部がわずかに屈曲するもの、５は体部丸みもつ埦、６は体部が直線的に立ち上がる埦、７は体部が比較的直線的に立ち上がる高台付埦、８・９が皿、10は高台付皿で体部は直線的に立ち上がる。これらの年代は、３が７世紀初頭から前葉、５・７・８が８世紀中葉から後半、４・６・９・10が８世紀末から９世紀前半に位置づけられる。この遺構の埋没年代は８世紀中葉から９世紀前半になろう。

ＳＤ30（第221・222図、図版107、127、128）

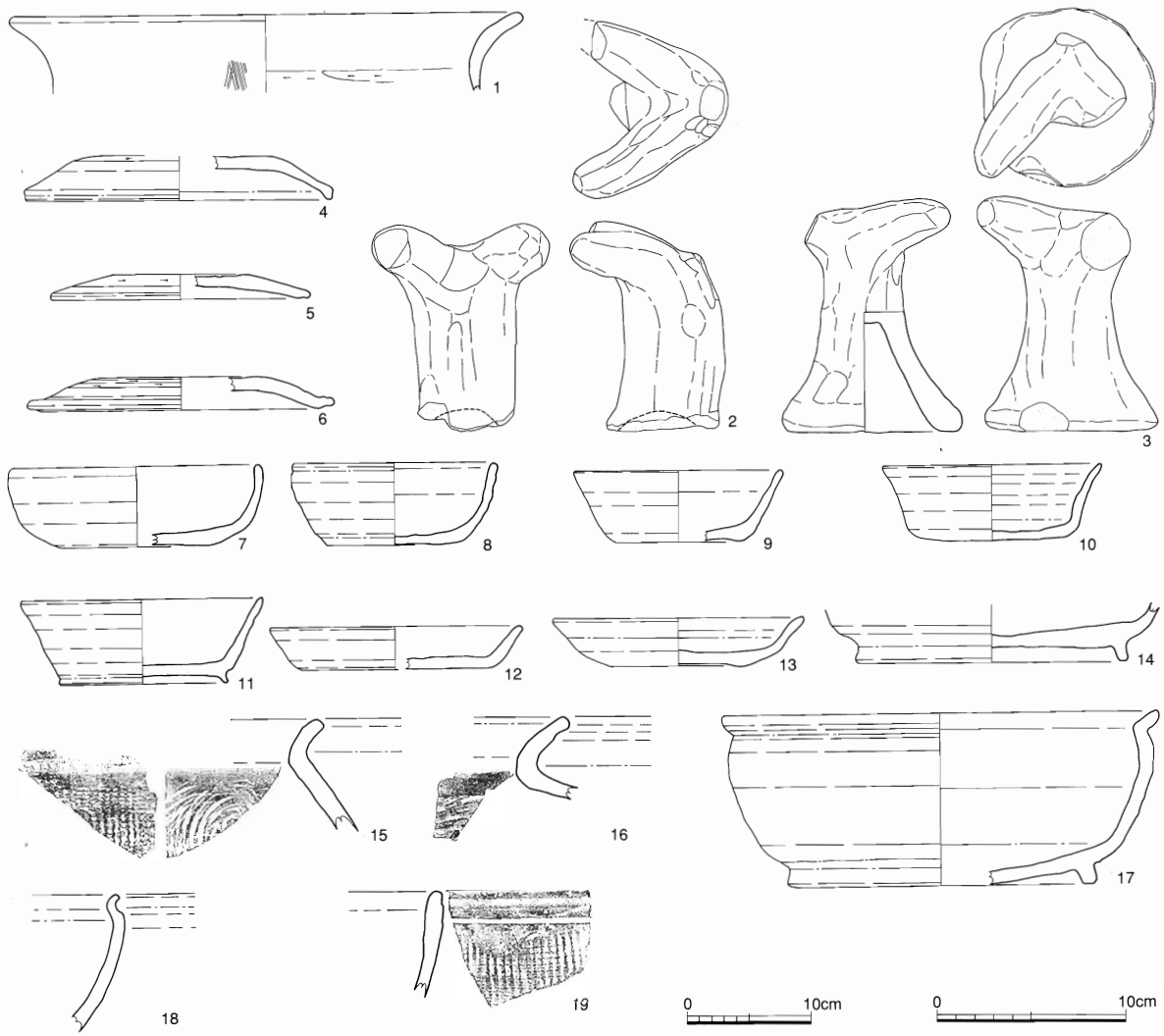
調査区下段２と上段の間の斜面に位置し、北西から南東へ斜面を下る溝状遺構である。遺構の形状は全体としては弧状にのびているが、小さく蛇行しており、整った形はしていない。この周辺では遺構検出前から多くの遺物が出土していたが、当初は上段に位置した遺構や遺物包含層が地崩れにより崩れ落ちた結果と考え、土層ベルトを残して全体を掘り下げた。しかし、この「遺物包含層」をかなり掘り下げた段階で土層の断面を観察したところ、断面に溝状の落ち込みが見られたためようやくこの遺構の存在に気が付いた。土層の堆積状況は、最下層は水流が弱い状態で堆積した黒灰色系の粘質土で、その上に水流が一次的に強くなった段階で堆積したと思われる地山ブロックを多く含む層や細砂層、再び水流が緩やかな状態で堆積したと見られる黒灰色系の粘質土が見られる。この溝は埋没した後に地滑りが起きているようで、上方から崩れ落ちた地山土の塊がこの上に堆積している。また、このような地崩れに伴い斜面の下側の遺構の肩も崩れ落ちたと思われる。この遺構の性格については、遺構が不整形であることから自然流路という見方もできるが、溝底面から遺物がまとまって出土していることから加工段などに伴う溝の可能性も考えられる。

なお、斜面の堆積土中にＳＤ30とは別の遺構が掘り込まれているようにも見えるが、堆積土を一度に掘り下げたため平面では遺構の形状を確認することはできなかった。

遺物は溝底面を中心にまとまって出土している。１は移動式竈の口縁部、２・３が土製支脚。４～19は須恵器である。４～６が蓋で、４は口縁部が短く直立し、５・６は口縁端部が平坦な面を持つ。７～11が埦で、７・８は体部丸み持ち、９・10は体部が直線的に立ち上がり、11は底部に高台



第221図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＤ30実測図（Ｓ＝1／40）



第222図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＤ30出土遺物実測図（1～3：Ｓ＝1／6、4～19：Ｓ＝1／4）

がつき直線的体部が立ち上がる。12～14は皿、15・16は甕。7～19が鉢である。これらの遺物はおおよそ８世紀中葉から９世紀前半に位置づけられよう。

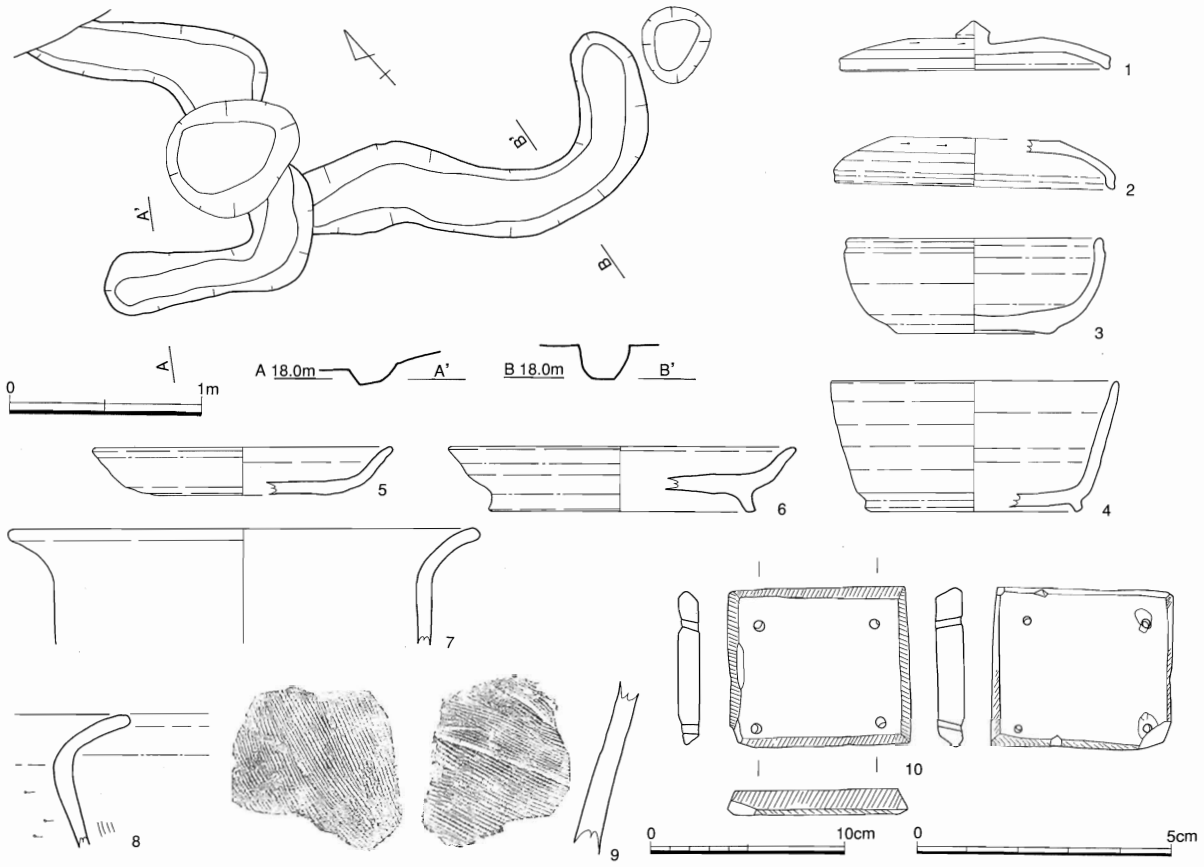
ＳＤ31（第223図、図版128）

調査区下段２の北よりに位置する。北にはＳＤ29、東側の斜面にはＳＤ30がある。幅0.4m前後、深さ0.15m前後の不整形に曲がりくねった溝状遺構である。西側は南北２本に枝分かれしており、北側はトレンチに切られているためどのようにのびていたのか不明である。

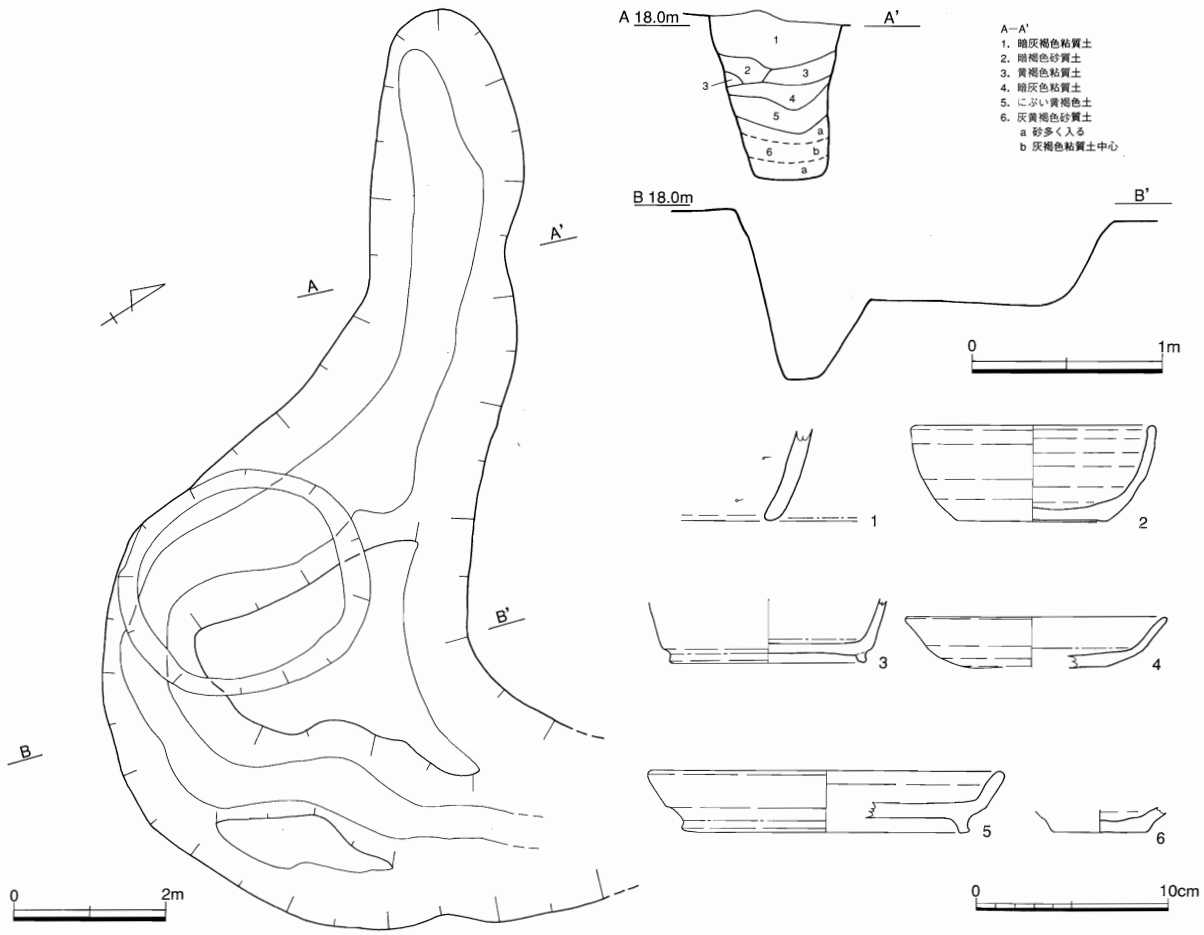
遺物は須恵器蓋（１・２）、埦（３・４）、皿（５・６）、土師器甕（７・８）、埴輪片（９）、石製品（10）が出土している。２が７世紀末～８世紀前葉、３が８世紀中葉～後半、４・５・６が８世紀中葉～９世紀前半、１が８世紀末～９世紀前半、７・８は８～９世紀代にに位置づけられよう。９は内外面にハケ目が施されており、焼成は須恵質になっている。破片上部に横方向のナデが見られることから埴輪片と考えた。10は石帯で、長さは3.5cm、幅3.1cmである。

ＳＤ32（第224図、図版129）

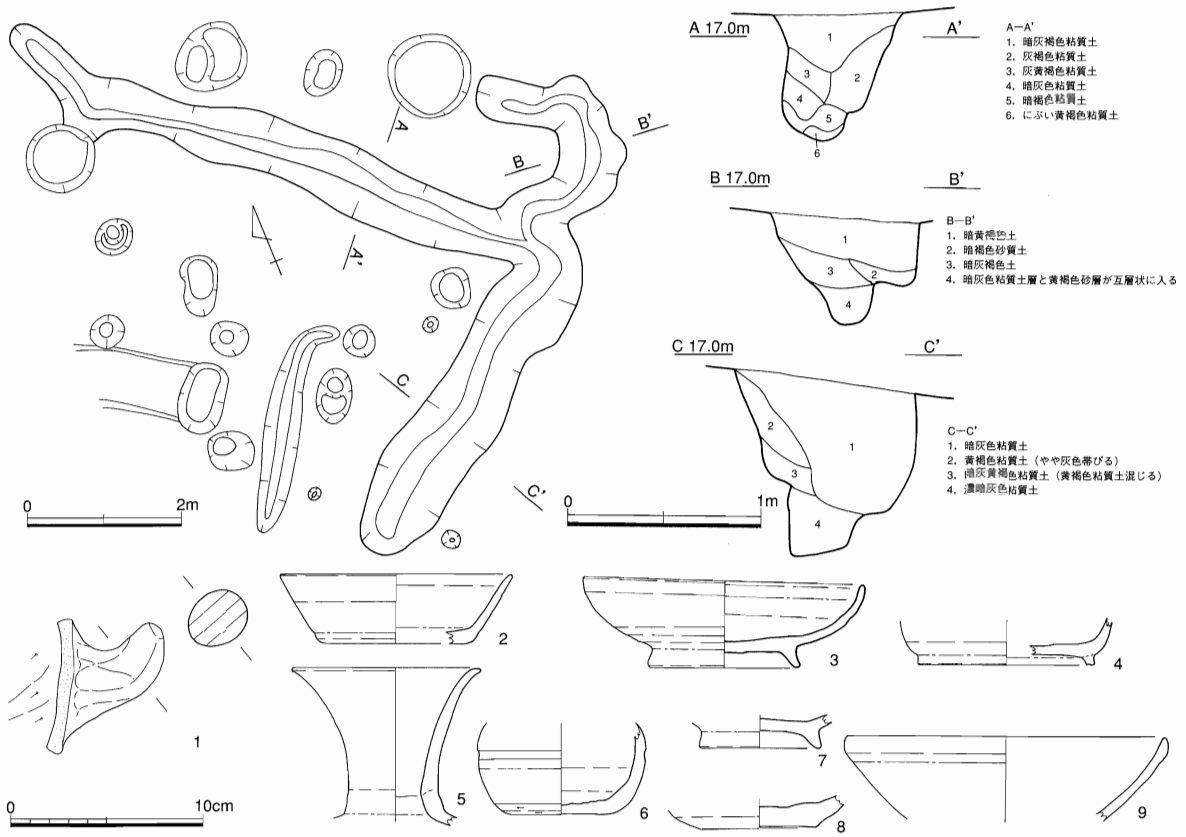
調査区下段２の北東よりに位置する。西から東へ不整形に蛇行する溝状遺構で、東側は調査区外までのびる。遺構の深さは90cm近くあり、覆土下層は細砂を含む層と粘質土の層が互層状になっており、流水があったことが窺われる。溝底面の標高は東へいくにつれて低くなり、形状などから見



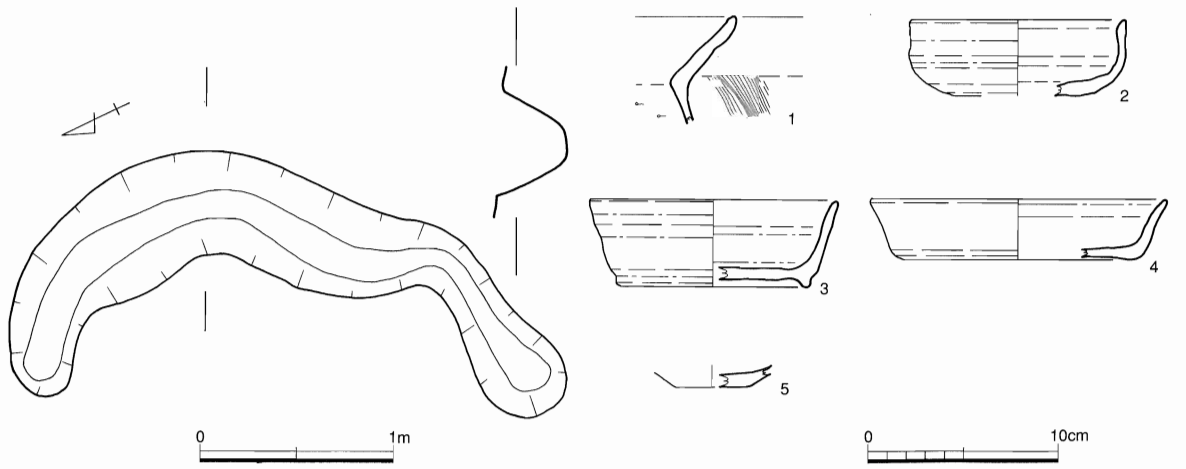
第223図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＤ31・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝１／40、遺物：１～９：Ｓ＝１／４、10：Ｓ＝２／３）



第224図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＤ32・出土遺物実測図（平面：Ｓ＝1／100、断面：Ｓ＝1／40、遺物：Ｓ＝1／4）



第225図　田中谷遺跡Ⅴ—W区ＳＤ33・出土遺物実測図（平面：Ｓ＝１／100、断面：Ｓ＝１／40、遺物：Ｓ＝１／４）



第226図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＤ34・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝１／40、遺物：Ｓ＝１／４）

て自然流路であったと考えられる。覆土中から土師器・須恵器が出土している。１は土師器甑、２・３は須恵器埦、４・５は須恵器皿、６は土師器埦底部片である。２は８世紀中葉～後半、３～５は８世紀中葉～９世紀前半、６は10世紀以降のものと思われる。

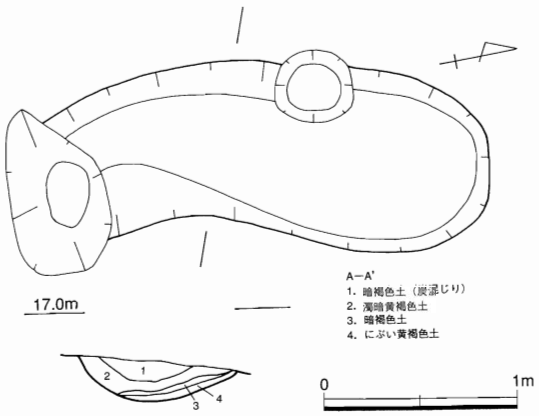
ＳＤ33（第225図、図版129）

下段２のほぼ中央に位置し、ＳＢ32の柱穴に切られている。西から東に7.5m直線的にのび、そこから南北へ二手に分かれる。覆土には水性堆積と思われる細砂が入る部分も認められ、流水があったと思われるが、最も底面の標高が低い南端で行き止まりになっている。流路の上部が削平されたものであろうか。遺物は土師器甑（１）、須恵器埦（２～４）、須恵器壷（６・７）、土師器埦（７・８）、白磁Ⅳ類碗（９）が出土している。３が７世紀中葉、４が８世紀中葉～後半、２が８世紀

後半～９世紀前半、７は10世紀代のものと思われる。９は12世紀前半になる。

ＳＤ34（第226図、図版130）

下段２のほぼ中央に位置する。長さ2.9m、幅0.6m、深さ0.4mの曲がりながら南北にのびる溝である。遺構覆土は地山とよく似ており、遺物が出土しなくなったところで遺構の端と判断したが、あるいは南北両端はもっとのびるかもしれない。人為的に掘られた遺構か疑問がある。遺物は土師器甕（１）、須恵器椀（２・３）、須恵器皿（４）、土師器椀もしくは皿（５）が出土している。

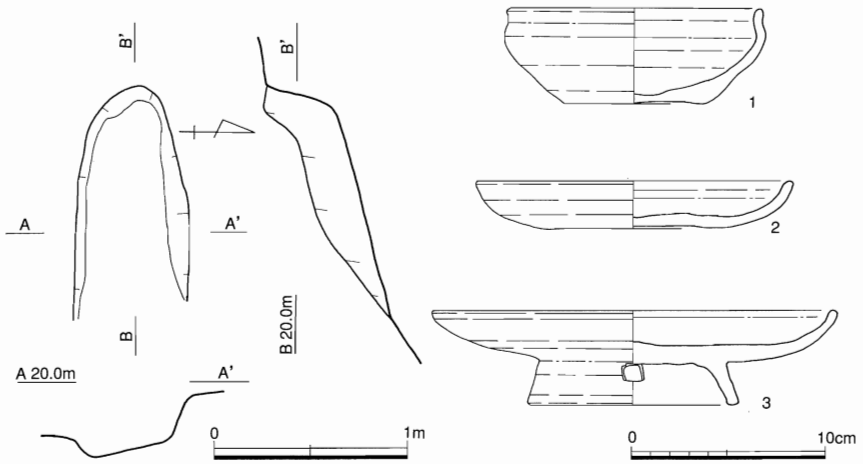


第227図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｗ区ＳＫ09実測図（Ｓ＝1／40）

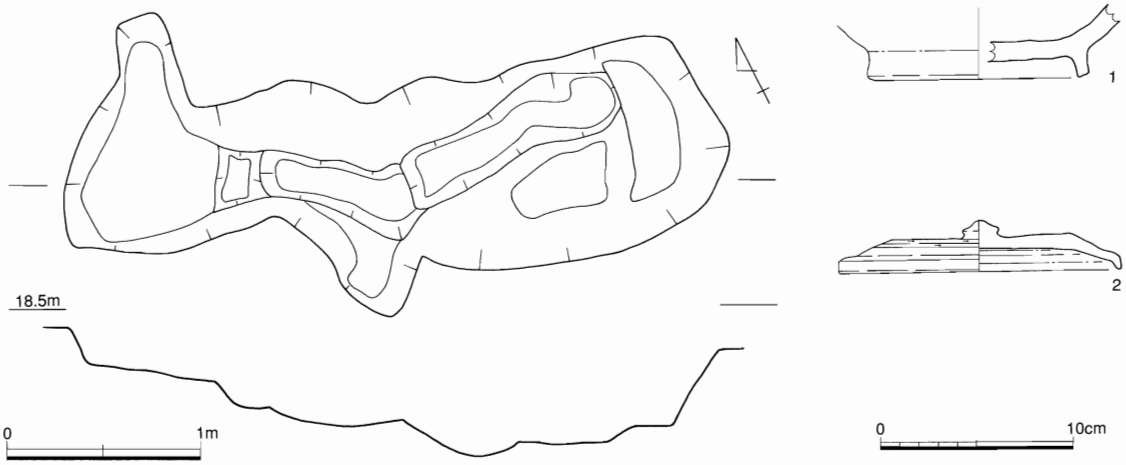
（6）土坑

ＳＫ09（第227図）

下段２の中央からやや南よりに位置する長さ1.8m、幅0.7m、深さ0.15mの土坑である。遺物は小片のため図示しなかったが、草田４期頃の土器片が出土している。



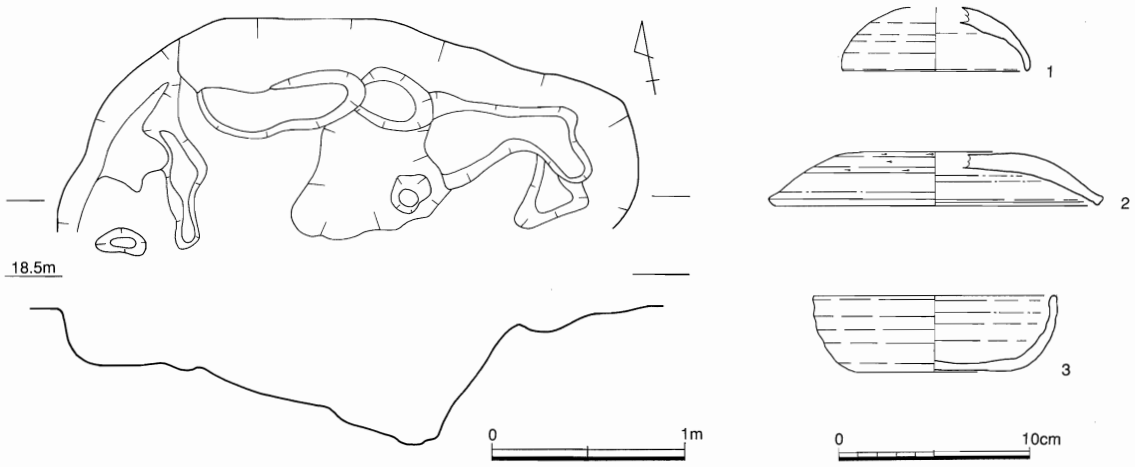
第228図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｗ区ＳＫ10・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／40、遺物：Ｓ＝1／4）



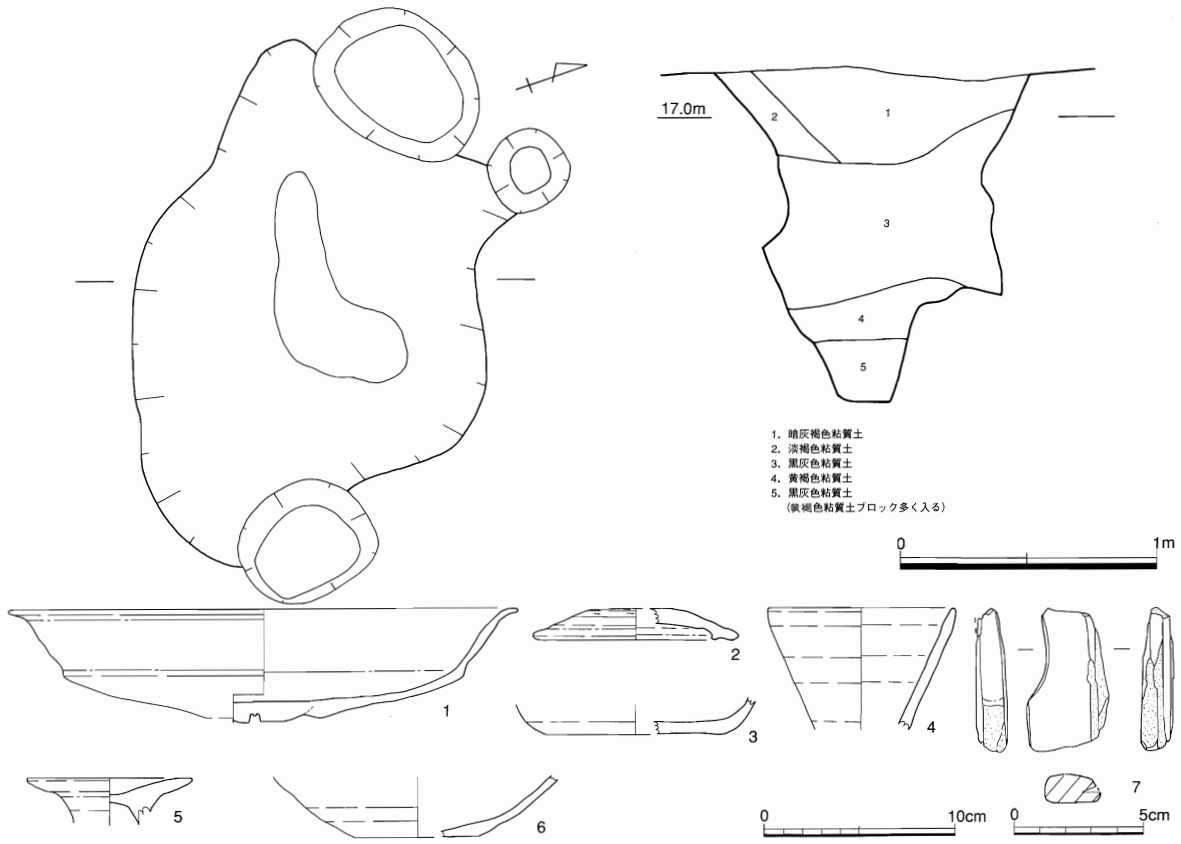
第229図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｗ区ＳＫ11・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／40、遺物：Ｓ＝1／4）

ＳＫ10（第228図、図版130）

上段と下段２の間の斜面で、ＳＤ30の北側に位置する。現存長0.9m、幅0.45m、深さ0.3mで、遺構の東側は地崩れのためか立ち上がりが見られない。遺物は土師器・須恵器が出土している。土師器は図示しなかったが甕片が出土している。須恵器は椀（１）、皿（２）、盤（３）が出土している。３は「ハ」の字状に直線的に開く高台に四角形の透孔が２方向に穿たれている。これらは８世紀後半に位置づけられよう。



第230図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＫ12・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝１／40、遺物：Ｓ＝１／４）



第231図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＫ13・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／30、遺物：1～6：Ｓ＝1／4、7：Ｓ＝1／3）

ＳＫ11（第229図、図版130）

下段２の北側に位置する長さ3.5m、深さ0.55mの不整形な土坑で、底面は部分的に深くなったり浅くなったりしている。遺構の性格については不明。須恵器片が出土している。１は壷で底部に高台が付き、外面にはわずかながらタタキ目が見られる。２は蓋で天井部に擬宝珠つまみを持ち、口縁部が小さく立ち上がる。８世紀後半頃と思われる。

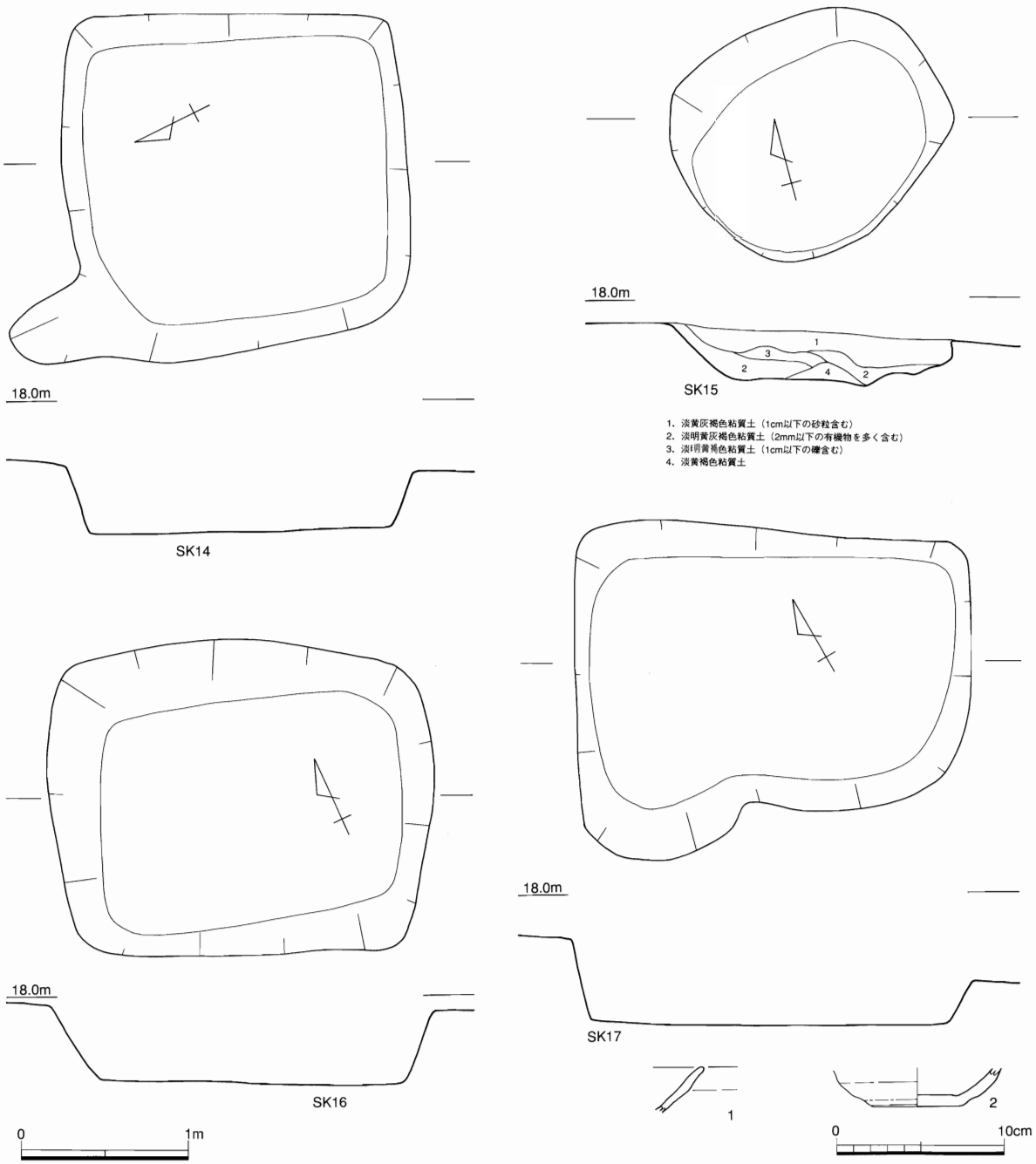
ＳＫ12（第230図、図版130）

下段２の北側に位置し、北にはＳＫ11が、西にはＳＤ29がある。長さ2.2m、深さ0.55mの不整形な土坑で、底面は部分的に深くなったり浅くなったりしている。遺構の南側はトレンチにより本来の形状が分からなくなっている。遺構の性格については不明。須恵器片が出土している。１は小

型化した天井部丸み持つ坏蓋で大谷編年出雲６期。２は口縁端部が平坦になっている蓋、３は底部回転糸切り底の埦で、体部は丸みを持つものである。８世紀後半に位置づけられよう。

ＳＫ13（第231図、図版131）

下段２のほぼ中央、ＳＸ03の東に位置し、ＳＢ33と重複する。長さ2.1m、幅1.4m、深さ1.3mのやや不整形な土坑である。遺構の性格は不明。土器や石製品が出土している。１は古墳時代中期の土師器高坏。２～４は須恵器である。２は７世紀前葉～中葉の須恵器蓋で口縁部にかえりが付く。３は須恵器埦底部で回転糸切りされている。４は壷口縁部。５は土師器の柱状高台皿で12世紀代、６は土師器埦の底部片で、断定できないが、５とほぼ同時期と思われる。７は玉作に使用する内磨き砥石である。



第232図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｗ区ＳＫ14～17・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／40、遺物：Ｓ＝1／4　ＳＫ16：1、ＳＫ17：2）

ＳＫ14（第232図）

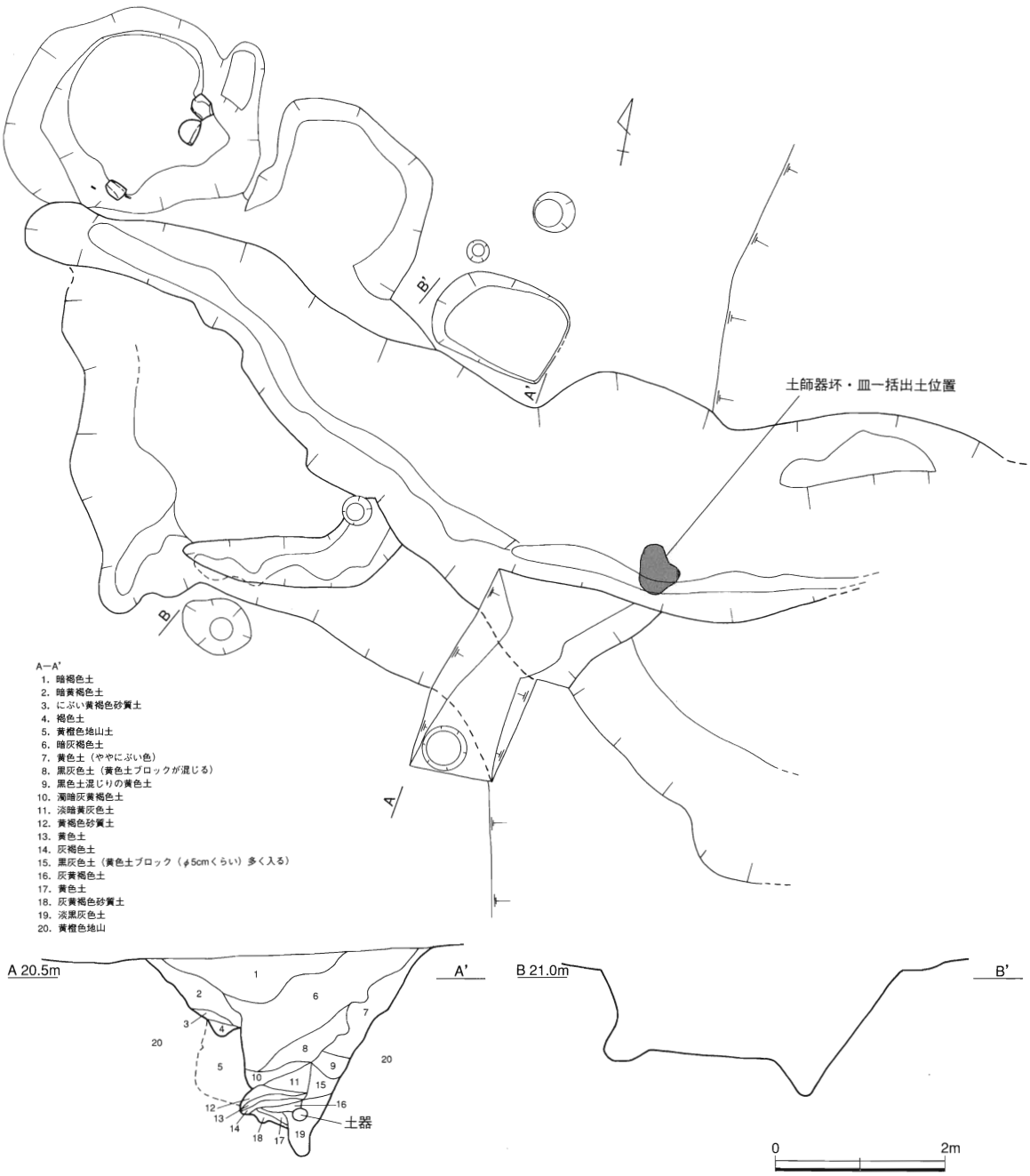
下段２のほぼ中央、ＳＸ03の西に位置する。東西2.1m、南北2.08m、深さ0.4mの隅円方形の土坑である。遺物は出土していない。

ＳＫ15（第232図）

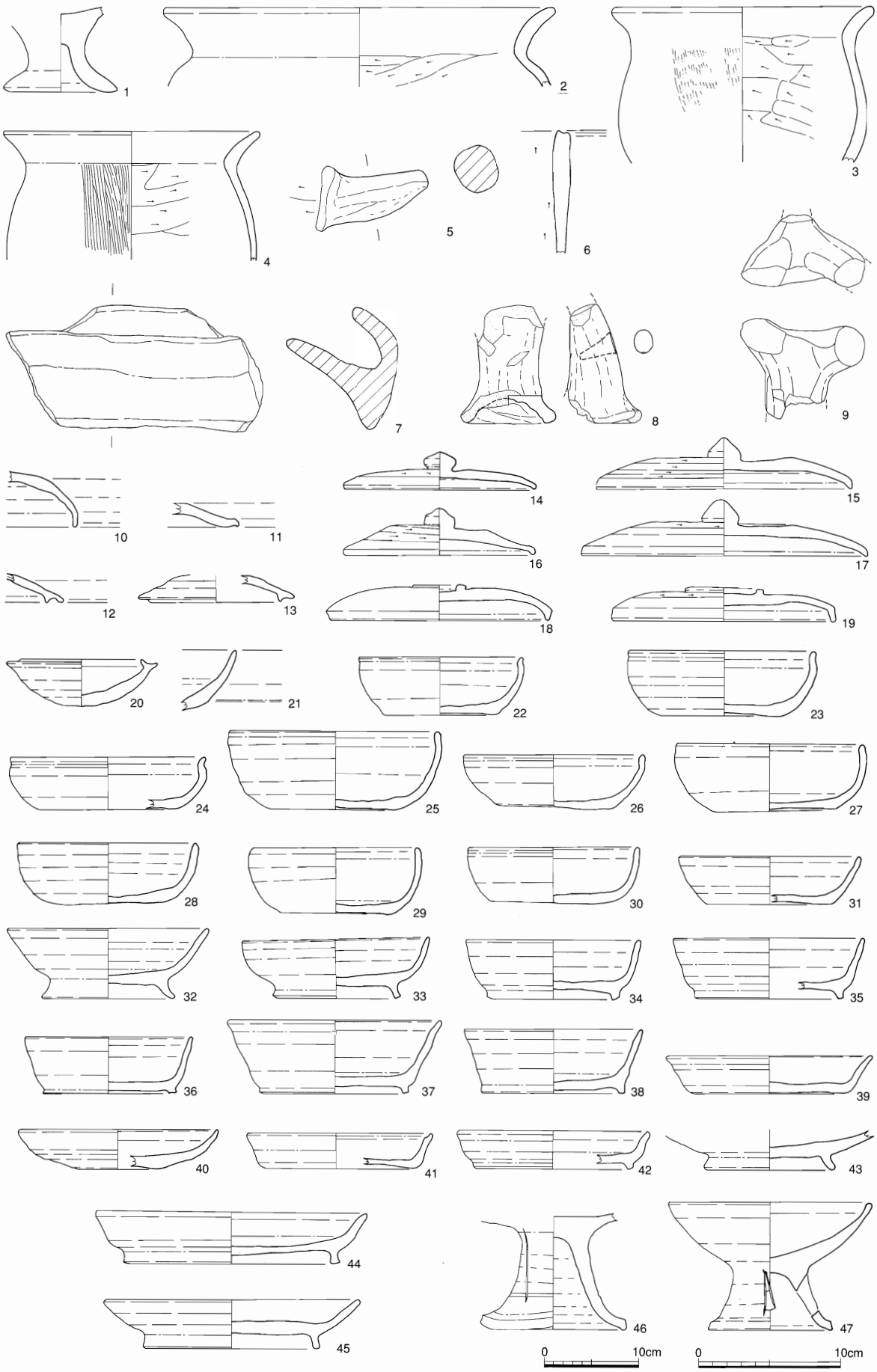
下段２のほぼ中央からやや北よりに位置する。東西1.7m、南北1.5m、深さ0.3mの楕円形の土坑である。形状はＳＫ16・17と似ている。遺物は出土していない。

ＳＫ16（第232図、図版131）

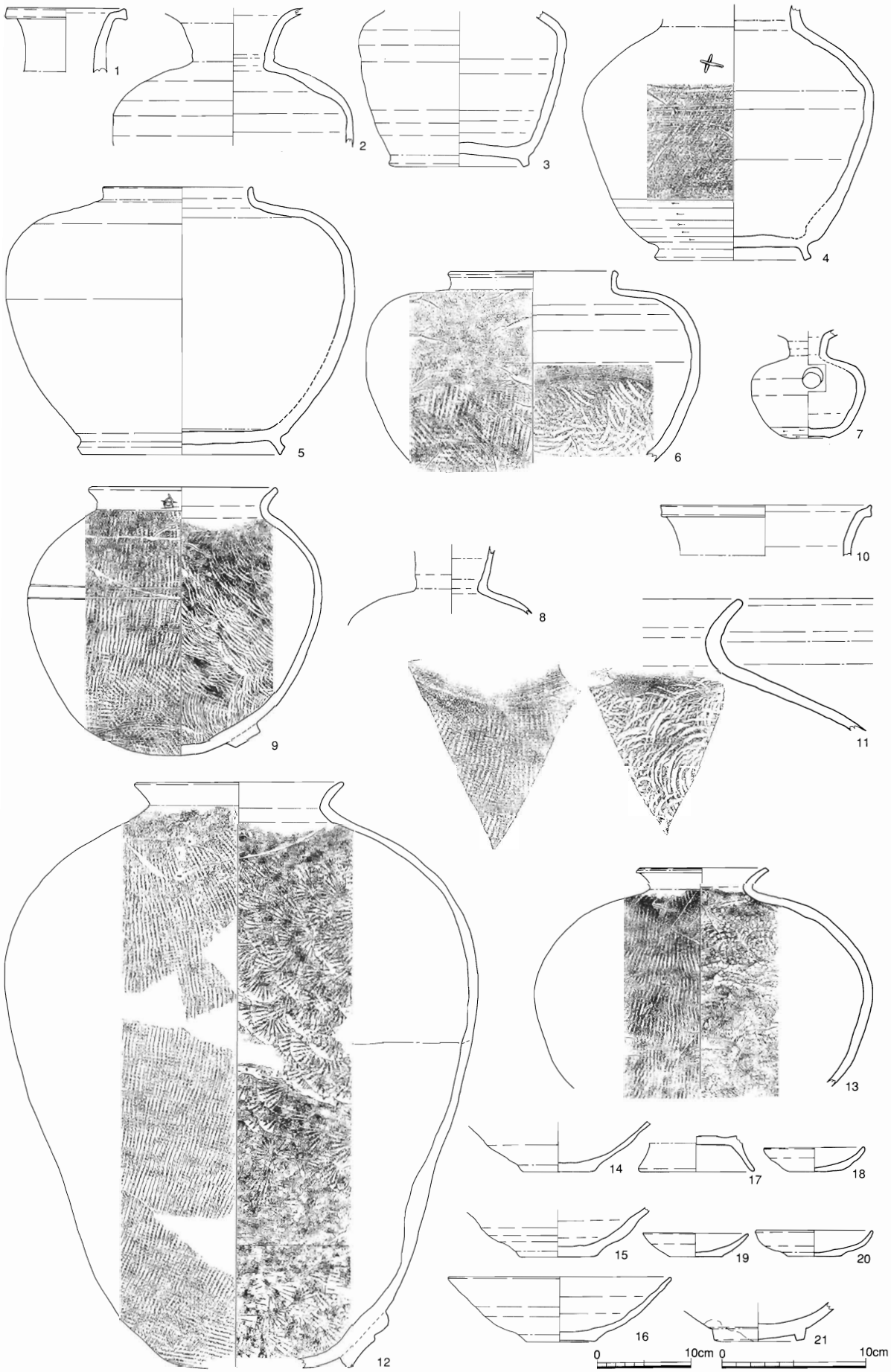
下段２のほぼ中央からやや北よりに位置する。東西2.3m、南北1.92m、深さ0.5mの隅円方形の土坑。須恵器片や備前系陶器、土師器埦の口縁部片（１）が出土しており、中世の遺構と思われる。



第233図　田中谷遺跡Ｖ－Ｗ区ＳＸ02実測図（Ｓ＝1／80）



第234図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＸ02出土遺物実測図（1）（1～7・10～47：Ｓ＝1／4、8・9：Ｓ＝1／6）



第235図　田中谷遺跡Ⅴ－W区ＳＸ02出土遺物実測図（2）（1～8・10・11・14～21：Ｓ＝1／4、9・12・13：Ｓ＝1／6）

ＳＫ17（第232図、図版131）

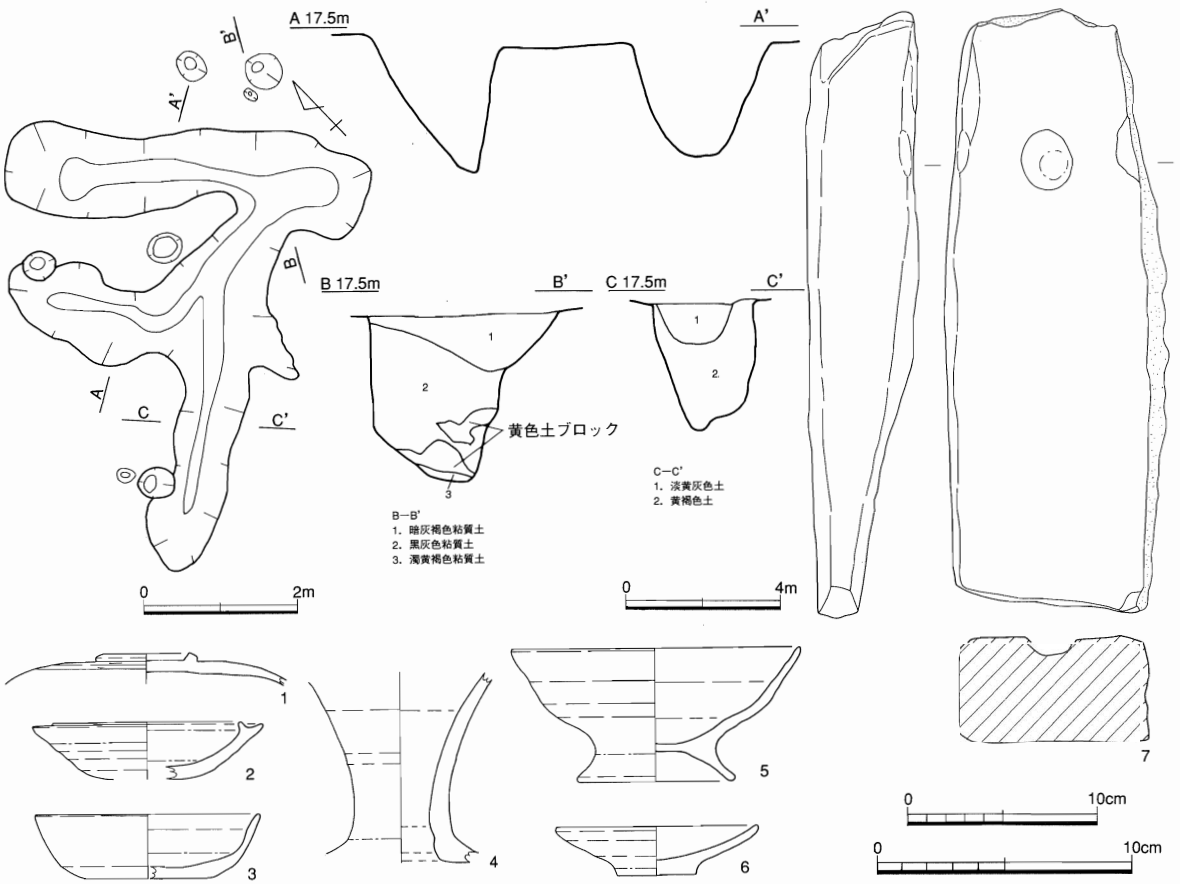
下段２のほぼ中央からやや北よりに位置する。東西2.38m、南北1.65m、深さ0.5mの隅円方形の土坑で、南西側が0.4m張り出している。土師器埦もしくは皿の底部片（２）が出土している。

（7）その他の遺構

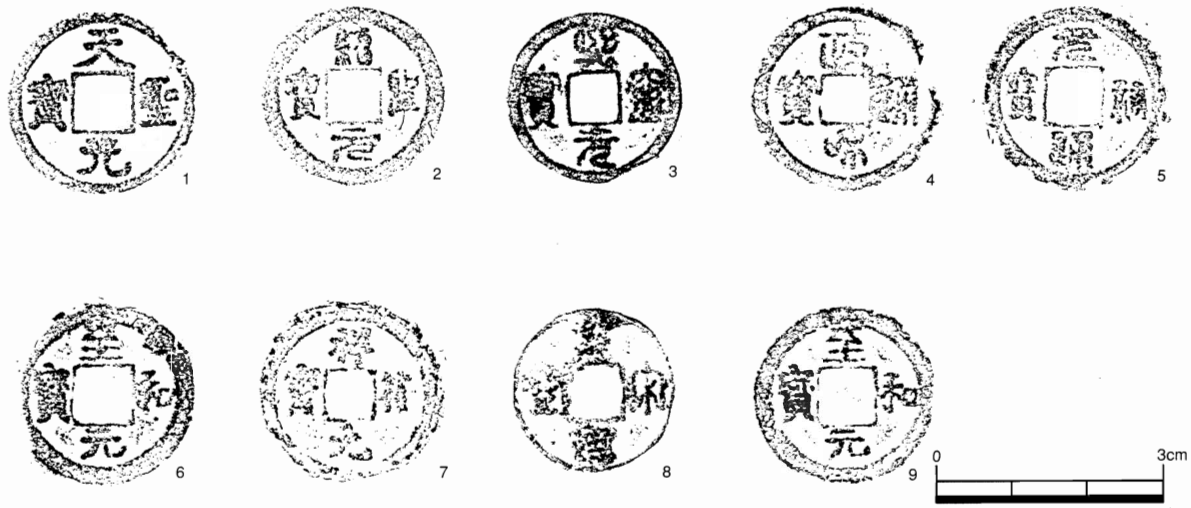
ＳＸ02（第233～235図、図版108、131～136）

下段１のやや南よりの平坦面上から東側の斜面にかけて位置する。底面は西から東に行くにつれて低くなっている。部分的にオーバーハングしている。土層は下層で砂が薄い層状に入っており、水が流れていた様子が窺われる。上層は黒色から黒灰色土に地山ブロックを含んだ層や地山土と似た黄色土層が見られ、地崩れ状に土層が堆積したと思われる。深さはＡ－Ａ’ラインで2.4m、Ｂ－Ｂ’ラインで1.5mあるが、上部が下段２の平坦面の造成に伴い削平された可能性があり、本来はもっと深かったと思われる。覆土中から土師器（234－１～９）・須恵器（234－10～235－13）・中世土師器（235－15～20）・白磁（21）など多くの遺物が出土している。

234－１は高坏、２～４は甕、５は甑把手、６は甑口縁部、７は竈の口縁部から庇、８・９は土製支脚。８は背後に穿孔もつもので、９は三叉突起のものである。10～19は蓋で、10は天井部が丸みをもつもので古墳時代終末期、12・13は口縁部にかえりもつもので７世紀前葉～末、18・19は天井に輪状つまみが付き口縁部が直立するもので７世紀末～８世紀前葉、11・14～17は口縁端部が平坦で小さく屈曲するもので、８世紀末～９世紀前半に位置づけられる。20は坏身。21～31は埦。20は７世紀初頭～前葉、21は７世紀前葉～中葉、22～30は８世紀中葉～後半、31は８世紀後半～９世紀前半のものである。32～38・43は高台付坏で、32・43が７世紀代、33が７世紀末～８世紀後半、



第236図　田中谷遺跡Ⅴ－Ｗ区ＳＸ03・出土遺物実測図（平面：Ｓ＝1／100、断面：Ｓ＝1／50、遺物：Ｓ＝1／4、7：Ｓ＝1／3）

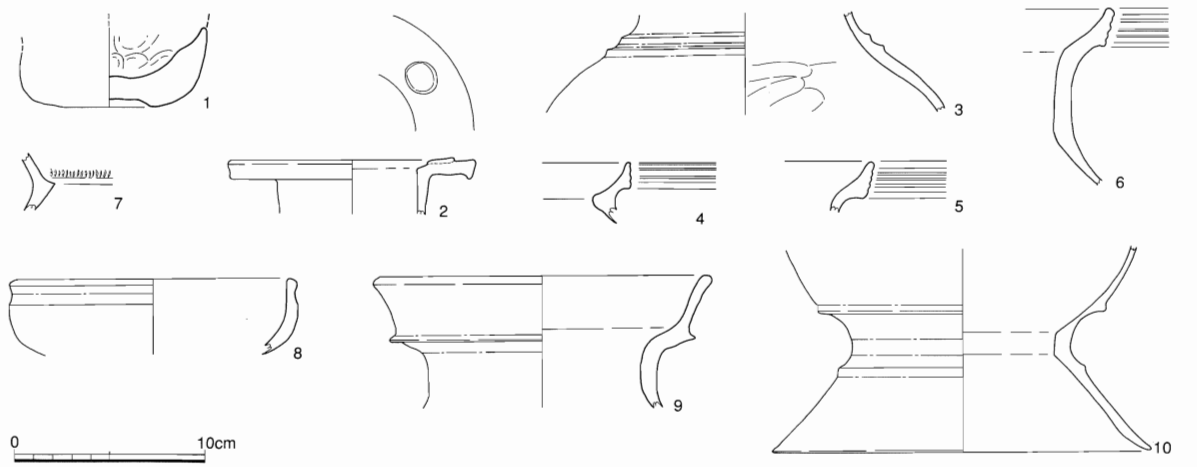


第237図　田中谷遺跡Ｖ－Ｗ区ＳＸ03出土古銭拓影（Ｓ＝1／1）

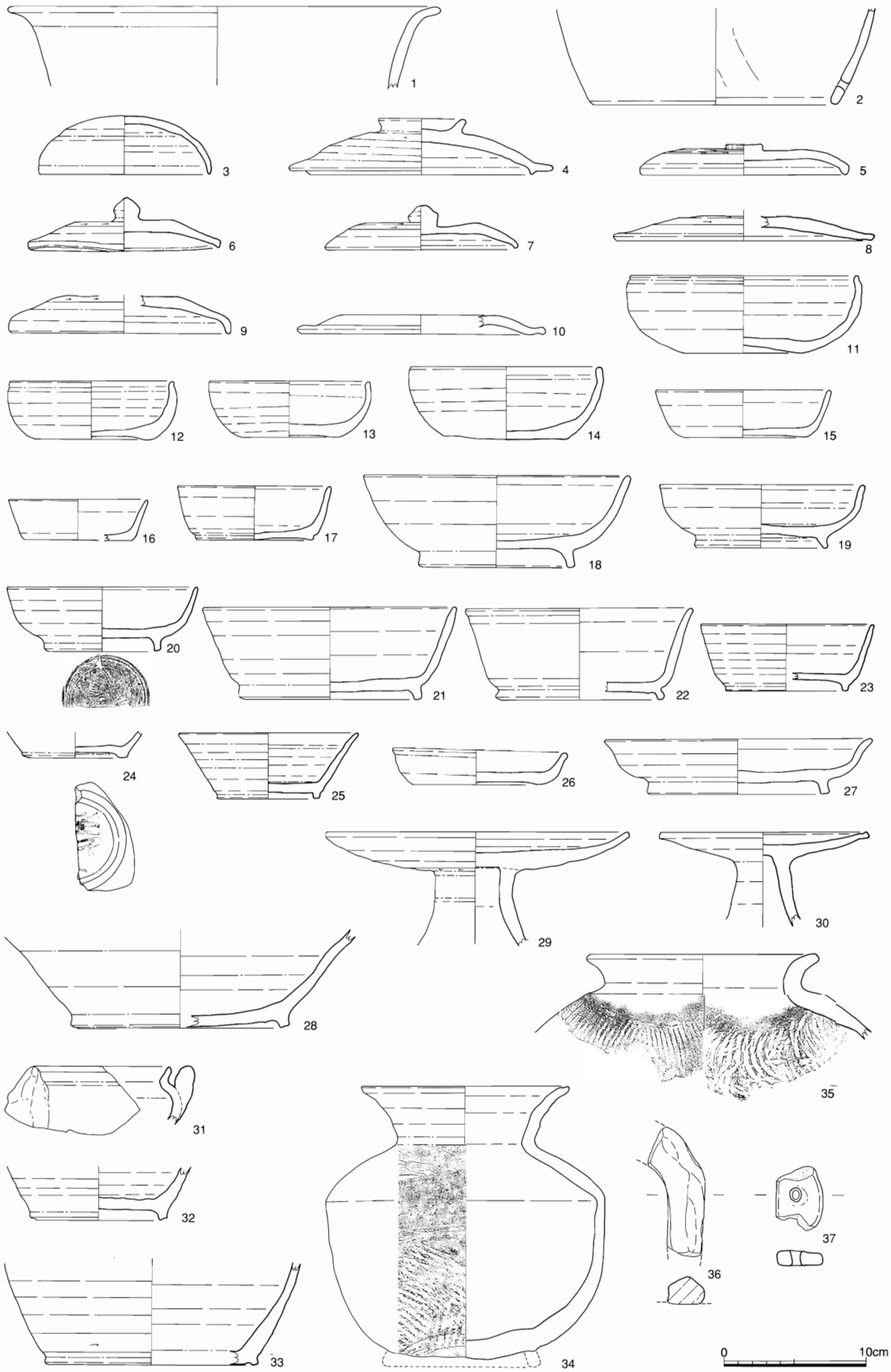
34・35が８世紀中葉～後半、36～38が８世紀末～９世紀前半に位置づけられる。39～41は皿、42・44・45は高台付皿である。46・47は高坏。235－１～４は壷で、４には肩部に「×」のヘラ記号が刻されている。５・６は短頸壷、７は腺、８は平瓶である。８は円盤閉塞による風船技法で作られている。９～12は甕で、９は口縁部にヘラ記号が刻されている。９・12の底部には焼き台と思われる須恵器片が溶着している。12は内面放射状の当て具痕が見られ、９～10世紀のものと思われる。13は横瓶で、肩部に「×」のヘラ記号が刻されている。14～20は中世土師器である。中世土師器の多くは遺構上層において一括して出土しており、底部片から個体数は土師器埦が25点、皿が33点以上と推定される。14～16は底径５㎝前後で体部が大きく開くもので、一括出土している埦はいずれもこの形態のようである。18～20は皿で口径6.8～８㎝前後、底径3.8㎝前後、器高1.8㎝前後の大きさにまとまっており、他のものも同様のかたち、大きさをしている。14～16・18～20は12世紀に位置づけられよう。17は足高の高台が付く埦で11世紀代と思われる。21は白磁碗Ⅳ類の底部片で12世紀前半に位置づけられよう。

ＳＸ03（第236・237図、図版137）

下段２のほぼ中央に位置し、ＳＢ33と重複している。溝状の遺構が大きく見て３本に枝分かれしている。北溝は東西の長さ4.8mで、この東端付近から南溝が枝分かれするように５mの長さまでのび、さらに南溝の中程で中央の溝が西へ2.6mのびている。遺構の最も深い部分は北溝の東端付



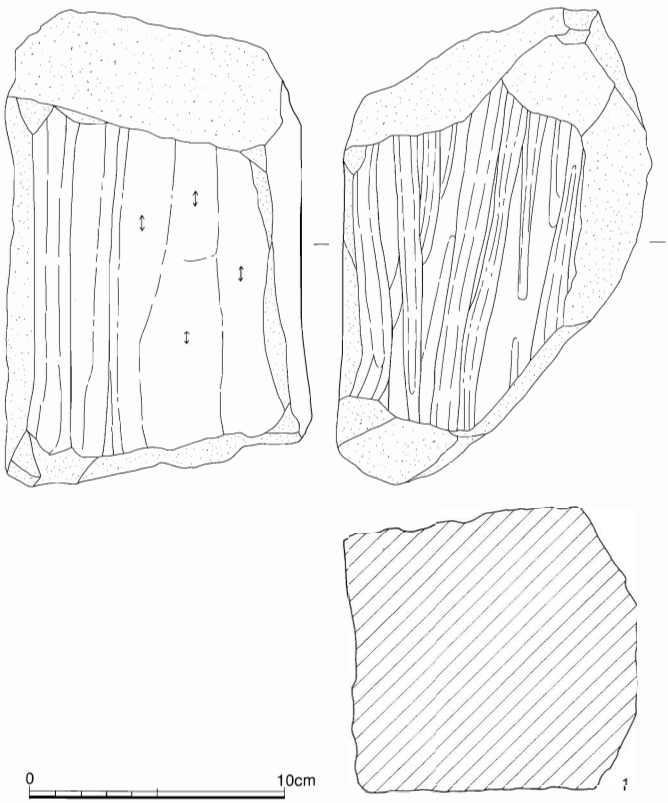
第238図　田中谷遺跡Ｖ－Ｗ区包含層出土遺物実測図（1）（Ｓ＝1／4）



第239図　田中谷遺跡Ⅴ－W区包含層出土遺物実測図（2）（S＝1／4）

近で、深さが1.1mある。遺構の性格については粘土採掘坑などの可能性が考えられる。

遺物は須恵器（236－1～4）、古代～中世の土師器（5・6）、石製品（7）、銭貨（237－1～9）が出土している。1は蓋、2は坏身、3は底部ヘラ切りの埦、4は長頸壺で、1～3は7世紀代を中心とする時期に位置づけられる。5は土師器高台付埦で11世紀代、6は土師器皿で12世紀代のものと思われる。7は用途不明の石製品で、上面には長径2.4cm、短径2cm、深さ0.7cmの窪みが見られる。古銭は南溝覆土中から束ねられたような状態で出土した。銭種は天聖元寶（1）、紹聖元寶（2）、熙寧元寶（3）、政和通寶（4）、元祐通寶（5）、至和元寶（6・9）、祥符元寶（7）、皇宋通寶（8）で、いずれも北宋銭である。



第240図　田中谷遺跡V－W区包含層出土遺物実測図（3）（S＝1／3）

（8）遺構外の出土遺物（第238～240図、図版108、137～140）

1～10は弥生土器である。1は壺もしくは甕の底部で厚手に作られている。Ⅰ様式まで遡る可能性が考えられる。2・3は壺である。2は口縁部がL字状に屈折して広がり、上面に円形浮文が付けられている。3は肩部に断面三角形の凸帯をもつ。2・3はⅢ様式の土器である。4は口縁部に凹線が施されて短く立ち上がり草田1期。5は草田2期の甕、6は草田2期の壺である。7は胴部に断面三角形の凸帯が付き、刺突文が施されている。台付装飾壺の破片で草田2期と考えられる。8は体部が内弯する器形で、鉢か高坏の坏部と思われる。時期は不明。9は口縁部は無文だが、器壁が厚い印象を受ける。草田3期に位置づけられよう。10は鼓形器台で、草田編年4～5期と考えられる。

1・2は古墳時代後期以降の土師器で、1が甕口縁部、2は甑底部である。3～34は須恵器。3～10は蓋で、3が7世紀初頭～前葉、4はつまみをもち、口縁部にかえりが付くもので7世紀中葉～8世紀前半、5・9は口縁端部が短く立ち上がるもので7世紀末～8世紀後半、6～8、10は8世紀末～9世紀前半に位置づけられよう。11～17は坏で、11～14は体部が内弯するもので8世紀中葉～後半、15・16が体部が直線的に立ち上がるもので8世紀中葉～9世紀代のものである。17～25は高台付埦である。18・19は底部静止糸切りで、7世紀末～8世紀前葉、20は回転糸切りのようであり、8世紀中葉～後半に下ると思われる。なお、20の底部には幅の狭い工具で刺突した痕跡がいくつも見られる。21～23は8世紀中葉～9世紀前半、24・25は9世紀代に位置づけられる。25の底部には「若□」の墨書がある。26・27は皿、28は高台付の鉢と思われる。29・30は盤で大小が見られる。8世紀後半のものと考えられる。31は把手付鉢で、8世紀末～9世紀初頭。32・33は壺底部

であろう。34は高台付の壷だが、高台ははがれている。35は甕。36・37は用途不明の土製品である。36は平面「く」の字状で、断面が五角形をしており、下面は剥離面になるかもしれない。37は平面形が半円形状であったと思われ、中央には長径0.6㎝の孔が穿たれている。

５．小　結

以上、田中谷遺跡Ｖ－Ｓ、Ｅ、Ｗ区の遺構・遺物について述べてきたが、ここではＶ区における各時期の遺構の様相をまとめることとしたい。

１）弥生時代後期～古墳時代前期初頭

弥生時代前期～後期初頭（Ⅰ～Ⅴ－１様式）

これらの時期の遺構は確認できていない。遺物では、弥生時代前期にさかのぼりうるものが底部片のみだが出土している。Ⅲ様式の遺物はＶ－Ｗ区の包含層でわずかだが確認された。Ⅴ－１様式（草田１期）の土器はＶ－Ｅ・Ｗ区で散見される。遺構の切り合いなどから草田１期までさかのぼる可能性のある遺構はあるが、時期を特定できる遺物を伴っていない。

弥生時代後期中葉（草田２期）　ＳＩ03新段階、ＳＢ15・22・25、ＳＤ13・19

この時期から遺構がまとまって見られる。Ｖ－Ｅ区では掘立柱建物・布掘建物が建てられている。ＳＩ03新段階は古段階から縮小した形態をとっている。旧河道４はⅣ区の河道とつながると思われるが、ここではこの時期に埋没したようである。松江市が調査したⅢ区の旧河道には草田３～４期の土器も出土しており、この時期の河道は旧河道４から流れを変え、谷中央に位置したのかもしれない。

弥生時代後期後半（草田３期）　ＳＤ21・24

この時期は草田２期と比べて遺構・遺物が少ないように思われる。ただし、ＳＤ21は竪穴建物の周溝と思われ、この時期にも集落は営まれていたと推測される。なお、ＳＤ22も竪穴建物の周溝と考えられるもので、ＳＤ21に切られているが、その時期は不明である。

弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭（草田４～７期）　ＳＩ02、ＳＢ23・28、ＳＤ01・07・17・25、ＳＫ03・05

Ｖ－Ｅ区の掘立柱建物はこの時期にも見られる。草田２期に埋まった旧河道が草田４～５期に掘り返され、井戸としてＳＤ20、ＳＥ01が設けられる。この遺構には土器が一括投棄され、水銀朱精製土器・管玉も出土していることから祭祀的な性格ももっていたと思われる。Ｖ－Ｓ区のＳＤ01は古墳時代前期の遺構で、方形に溝を巡らせた墳墓の可能性も考えられる。

このほか、詳細な時期は特定できないが、ＳＩ01は周溝を伴う隅円方形の竪穴建物で、中央土坑をもつことから弥生時代後期から古墳時代前期のいずれかに時期に属すると思われる。

Ｖ－Ｅ区の掘立柱建物について多くはその時期を特定できていないが、遺構内や周辺から出土した土器から多くは弥生時代後期から古墳時代前期初頭のものと思われ、遺構の重複関係から考えると３～４時期くらいに分かれると考えられる。建物構造は２間×１間もしくは１間×１間のものが主である。ＳＢ20については３間×２間、もしくは２間×２間の大型の掘立柱建物と想定されるが、これについては他の時代の建物になる可能性も考えておくべきかもしれない。弥生時代の建物とするなら、他と構造が異なるものであり、特別な役割をもっていたと思われる。

Ｖ－Ｗ区では弥生時代の遺構は下段２の南側と下段１の東側の斜面でしか確認できていないが、

下段の平坦面が削り出される際にかなりの部分で遺構が壊されたためで、本来は丘陵の斜面に広く集落が形成された可能性が高いと思われる。

弥生時代の遺構配置に関して、掘立柱建物が谷の中央部に多く認められるのに対し、竪穴建物は丘陵斜面側でしか検出されていない。これについては、谷中央部にも竪穴建物が存在したが後世の水田耕作によって遺構上部が失われた可能性も否定できないが、丘陵側が居住域で、低湿な谷部が倉庫群といった集落内での機能差があったと考えることもできる。

また、布掘建物が3棟確認されたこともこの調査区で注目すべき点である。ここでは布掘建物は通常の掘立柱建物と混在しているが、こうした建物構造の違いが何を示すのか今後の課題といえよう。布掘建物のＳＢ15と、掘立柱建物のＳＢ22・25は土器型式の上では共存しており、時期差とは異なる要因を考えるべきかもしれない。なお、島根県内の弥生時代の布掘建物の確認例は、湖陵町庭反Ⅱ遺跡（湖陵町1987）、鹿島町南講武草田遺跡（鹿島町1992）、安来市渋山池遺跡（島根県1997）、安来市柳遺跡（島根県1998）、出雲市下古志遺跡（出雲市2001）、上野Ⅱ遺跡（島根県2001）であり、これらはいずれも弥生時代後期のものと考えられる。

この時代の集落の範囲について、トレンチ調査の段階では遺跡の東側の広がりはⅤ－Ｅ区に収まると思われたが、本調査の結果、調査区外にもさらに広がり、また松江市の調査したⅢ区の状況から見ても旧河道に近い部分まで建物群があったと考えられる。Ⅱ区の旧河道でも当該期の遺物がまとまって出土しており、本来は谷の中に広く集落が展開していたと思われる。

2）古墳時代終末以降

古墳時代終末期　ＳＢ01・30、加工段1・加工段4

Ⅴ区では古墳時代中期～後期にかけての遺構は検出されておらず、遺物の出土も少ない。後世の削平で壊された可能性と、もともとこの位置に遺構がなかった可能性が考えられる。後者であるとすれば古墳時代前期から後期にかけて集落が他の場所へ移転したことになる。塚山古墳などの築造に関わった集落がどこに営まれたのか興味深いところである。古墳時代終末期になるとⅤ－Ｓ・Ｗ区の丘陵斜面や裾に加工段を伴う掘立柱建物が設けられる。ＳＢ01は建物を伴わない加工段1と共存しており、ＳＢ01を住居とするならば、加工段1は炊事場のような機能が考えられる。

奈良・平安期　ＳＩ01上層貼床面、加工段3、ＳＫ08・10・11・12、ＳＤ29・30・31、ＳＸ02下層

Ⅴ－Ｗ区の斜面・平坦面に不整形な溝・土坑が検出された。これらの遺構の性格についてはよく分からないものもあるが、中には流水跡もある。この時代の建物は認識できていないが、下段2では多数の柱穴が検出されており、これらの中には建物になるものがあるかもしれない。仮にこの時期の建物がここにあったとすれば、大規模な平坦面の造成は、この頃に行われたことになる。遺構の覆土中・包含層中から多くの須恵器・土師器などの遺物が出土している。須恵器の器種は豊富であり、また石帯や墨書土器なども見られ、この地に官人が存在したことも窺わせる。

中世以降　ＳＢ34、柱穴列4、ＳＤ32～34、ＳＫ13・16・17、ＳＸ02上層、03、旧河道5

Ｗ区下段2でこの時代の遺物を伴う建物、柱穴列が見られることから、この頃には平坦面の造成がされていたと考えられる。柱穴が多数見られるにもかかわらず建物として復元できたものが少なく、もう少し検討の余地があるかもしれない。奈良・平安時代にも見られた不整形な遺構はこの時期にも存在するが、人為的のものかどうか明確ではない。Ｅ区とＷ区の間を流れる旧河道5は古墳時代後期から中世の遺物を含んでおり、Ⅱ区の旧河道2とつながる可能性も考えられる。

本遺跡は、その規模や内容から法吉地域の中でも中心的な位置を占めていたと考えられる。一つの谷のまとまった範囲の中で集落を変遷をたどることができ、旧河道など周辺地形と居住域の関係など集落の構造・景観を考える上でも重要な資料が得られたと思われる。

引用・参考文献

横田賢次郎·森田勉1978　「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館

大阪府教育委員会1978　『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯

田辺昭三1981　『須恵器大成』角川書店

湖陵町教育委員会1987　『庭反Ⅱ遺跡·他　昭和61年度調査報告書』

島根県教育委員会1988　『朝酌川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ(海崎地区2)』

島根県教育委員会1990　『朝酌川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書』Ⅲ

松山智弘1991　「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌』第8集

鹿島町教育委員会1992　『南講武草田遺跡』講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5

正岡睦夫·松本岩雄1992　『弥生土器の様式と編年－山陽·山陰編－』木耳社

鹿島町教育委員会1992　『南講武草田遺跡』

奈良国立文化財研究所1993　『木器集成図録　近畿原始篇』奈良国立文化財研究所史料第36冊

大谷晃二1994　「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集

松江市教育委員会1994　『釜代1号墳外発掘調査報告書Ⅰ』(財)松江市教育文化振興事業団文化財調査報告書第1集

本田光子1994　「内面朱付着土器」『庄内式土器研究』Ⅷ　庄内式土器研究会

中世土器研究会1995　『概説　中世の土器·陶磁器』真陽社

島根県教育委員会1995　『原の前遺跡』

中川寧1996　「山陰の後期弥生土器における編年と地域関係」『島根考古学会誌』第13集

松井潔1997　「東の土器、南の土器」『古代吉備』第19集

中川寧1997　「いわゆる「山陰系土器」についての若干の考察」『立命館大学考古学論集』Ⅰ　立命館大学考古学論集刊行会

島根県教育委員会1997　『渋山池遺跡·原ノ前遺跡　一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅶ』

山本信夫1998　「中世前期の貿易陶磁器」『第26回　山陰考古学研究集会資料　山陰における中世前期の貿易陶磁器』山陰考古学研究集会

島根県教育委員会1998　『塩津丘陵遺跡群』

島根県教育委員会1999　『姫原西遺跡』

島根県教育委員会2000　『三田谷Ⅰ遺跡(Vol.2)』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ

松山智弘2000　「小谷式再検討」『島根考古学会誌』第17集

島根県教育委員会a 2001　『上野遺跡·竹ノ崎遺跡』

島根県教育委員会b 2001　『上野Ⅱ遺跡』

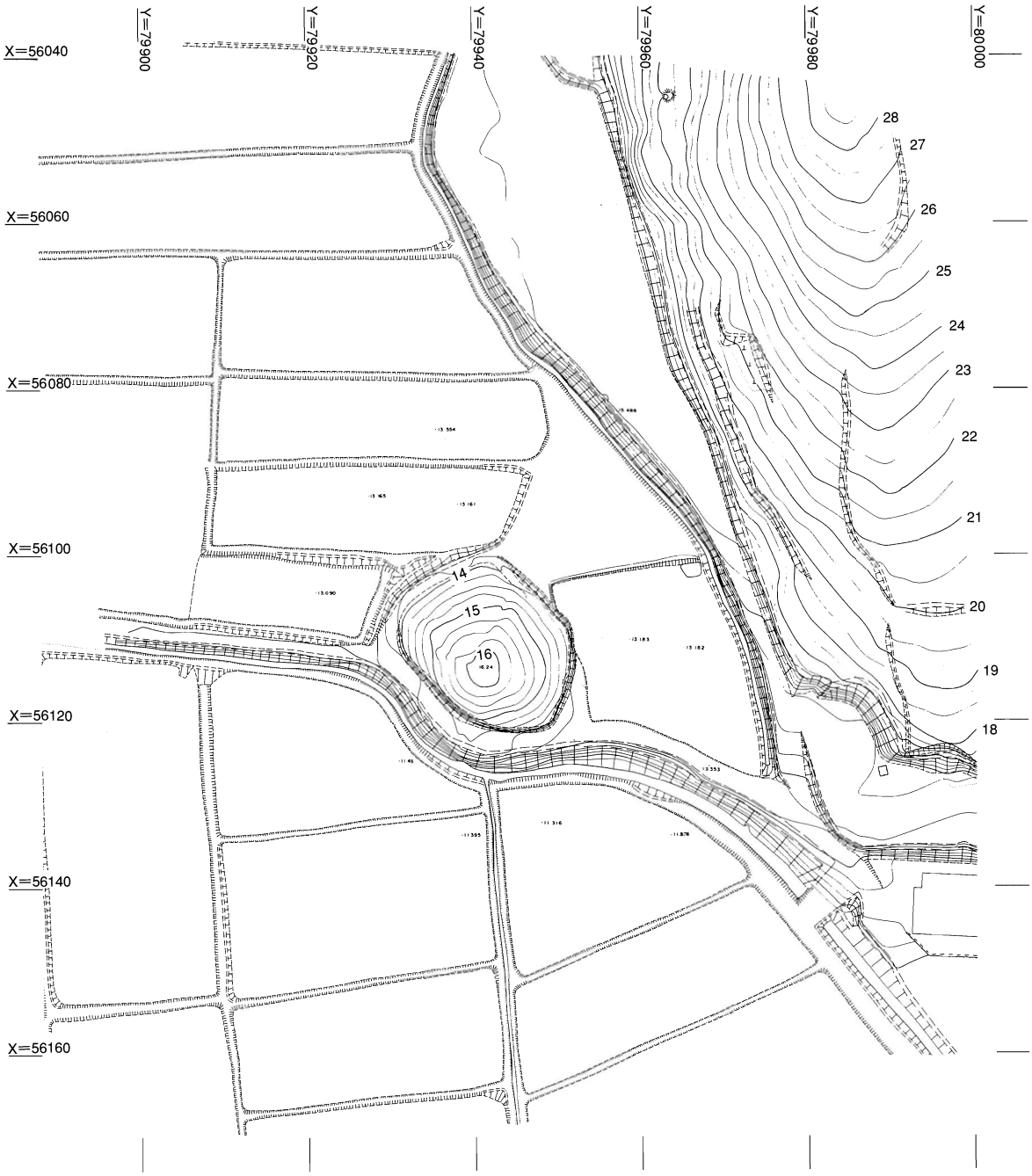
出雲市教育委員会2001　『一般県道多岐江南出雲線改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　下古志遺跡』

第5章　塚　山　古　墳

第1節　調査に至る経緯及び調査の経過

1．調査前の状況

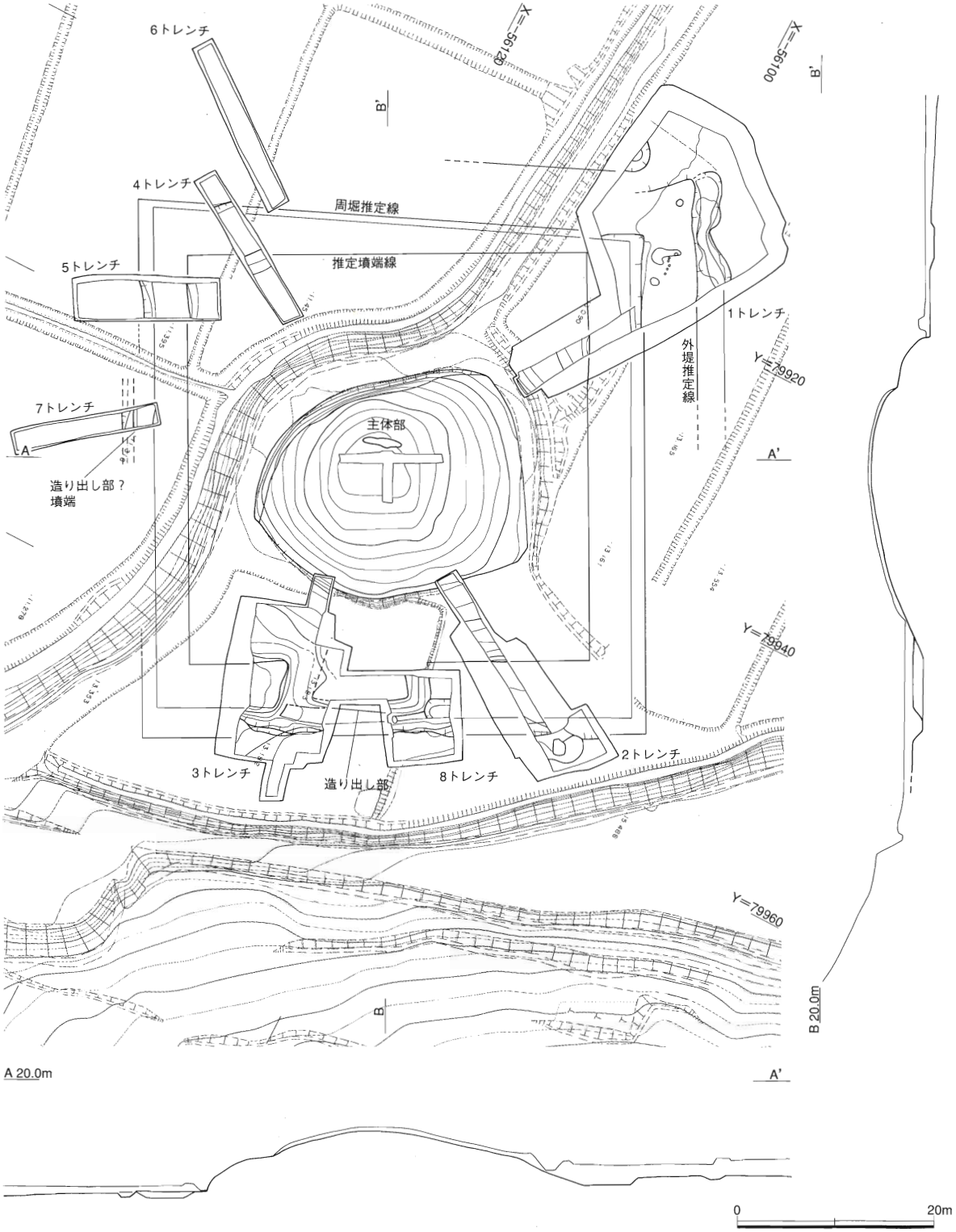
塚山古墳は、松江市の北郊、法吉町字下り松721－1番地外に所在する。南北に長い2本の丘陵に挟まれた谷の出口近くに位置している。発掘調査以前は、直径約20m、高さ約2.5mの墳丘が認められた。墳丘上は畑地や茶畑として利用されており、現状での墳頂の標高は約16.2mであった。



第241図　塚山古墳調査前地形測量図（S＝1／800）

墳丘の周囲は圃場整備された水田で、墳丘の北側裾の水田面の標高はおよそ13.1～13.2mであるのに対し、墳丘南側水田面の標高は11.3～11.4mと低くなっていた。周辺地形は大きく改変を受けているため、墳丘の範囲は不明瞭であり、墳形についても円墳であるのか方墳であるのか判断しづらい状況であった。

なお、地元住民の話によると、「いつ頃のことかはっきりしないがかなり以前に、墳丘が崩れて石棺の蓋と思われる石が転落し、その南側の水田の畦に埋められた」と言い伝えられている。また、



第242図　塚山古墳調査後全体図（S＝1／500）

「水田の耕作の時にはその石が埋まっていたところで、機械がよく石に当たった」といった話もあり、少なくとも古墳の南側の畔に大きな石材が埋まっていたことは間違いないようである。なお、この石は10数年前に動かされ、別の場所に埋められたと言われており、範囲確認調査にあたって石が埋め直されたと思われる周辺を重機で掘り返したが、そのような石材は確認できなかった。

２．調査経過と保存に至る経緯

平成11（1999）年度の調査

調査以前の段階で塚山古墳の取り扱いについては、島根県住宅供給公社から「墳丘部分（現状で見える）については公園として保存する」と伝えられたが、島根県教育委員会は「古墳の範囲が不明瞭であるため、トレンチ調査で古墳の範囲・形状を確認してから保存する区域について協議したい」と回答し、古墳周辺のトレンチ調査を行うこととした。

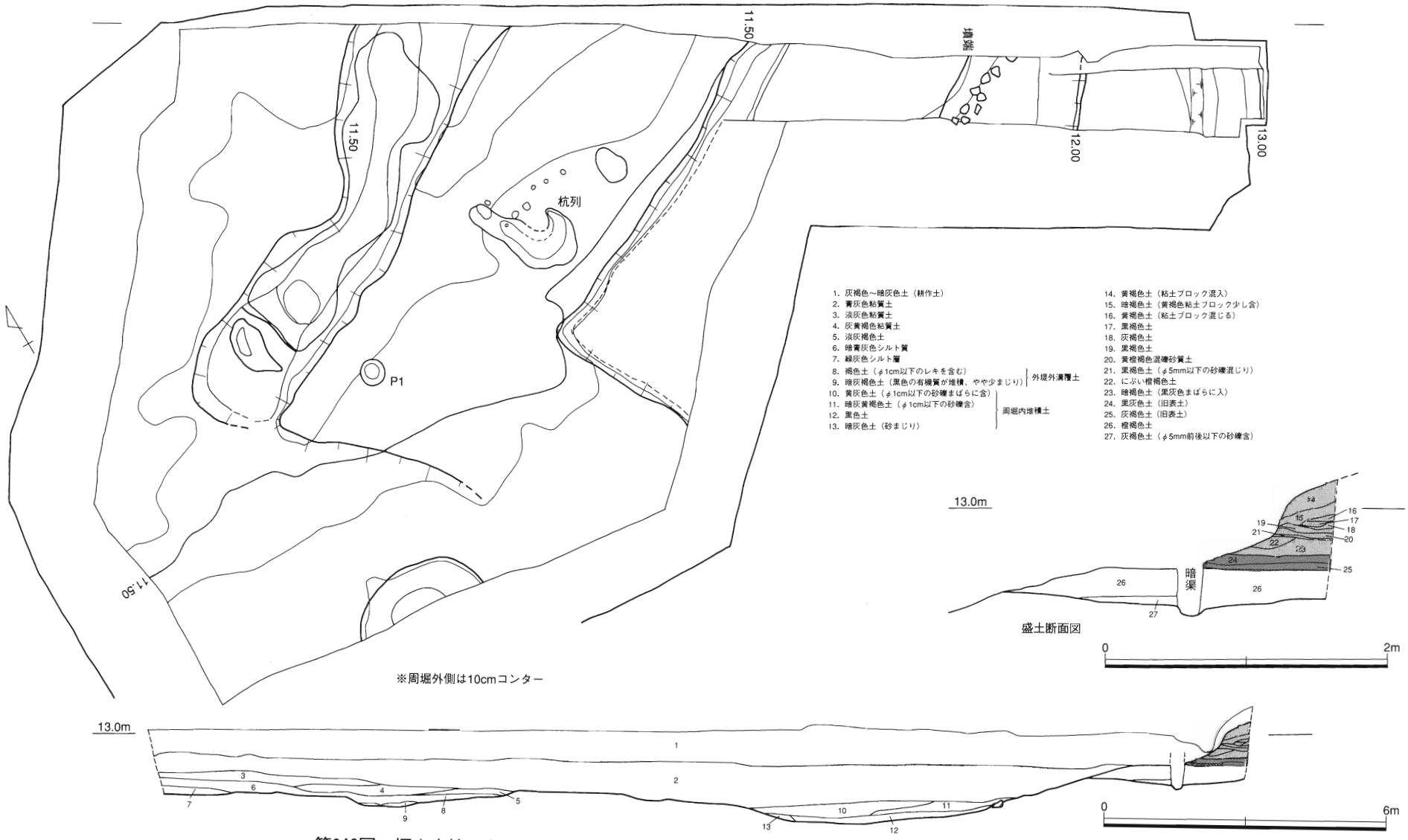
墳丘及びその周辺の現状を把握するため測量調査を1999年５月から行い、７月から墳丘の規模・構造の把握、外部施設の有無の確認を目的に１～５トレンチを設定し、調査を実施した。調査面積は１トレンチが294㎡、２トレンチが90㎡、３トレンチが130㎡、４トレンチが28㎡、５トレンチが42㎡である。トレンチ調査の結果、墳丘規模が一辺約33ｍの方墳で、墳丘の東側に造り出し部を伴い、墳丘の周囲には堀が巡ることが分かった。また古墳の北西側では外堤が存在する可能性も想定できた。

試掘調査の結果から、島根県教育委員会は推定される周堀の範囲から外側へ６ｍ広がる区域の保存する方向で協議したところ、島根県住宅供給公社から「松江市道にかかる北西隅の一部分のみは設計変更は困難であるが、ほかは設計変更して古墳の範囲を公園として保存・整備する。また古墳の周辺には案内板を設置する」として了解を頂いた。なお、10月30日に現地説明会を開催し、11月30日に調査を終了した。

平成12（2000）年度の調査

古墳の南西における外堤の有無を確認するため６トレンチを、南東における外堤の有無の確認するため７トレンチを、前年に検出した造り出し部の規模を確認するため８トレンチの調査を行った。調査面積は６トレンチが30㎡、７トレンチが24㎡、８トレンチが56㎡である。

塚山古墳を団地内の公園として整備する上で、盛土によって墳丘を保護するとともに古墳の形状を復元する必要があった。盛土で整備した後に草木が再び繁茂しないようにするため、古墳表面の草木の根を除去する作業を、法吉団地の発掘調査終了後の2001年１月29日から着手した。この作業中に、墳丘の頂上中央付近で原位置を保っていると思われる副葬品と主体部の輪郭が露出した。このため露出した遺物の保護と主体部構造の最小限の把握を目的として２月５日から調査を開始した。冬の天候不順な時期と重なったため、主体部を覆うかたちで墳頂部に風雨・積雪を防ぐためのパイプテントを設置して調査を進めた。３月11日には現地説明会を開催し、３月15日には主体部を埋め戻し調査を終了した。



第243図　塚山古墳1トレンチ実測図（平面図、トレンチ断面図：S＝1／120、盛土断面図：S＝1／40）

第２節　調査の結果

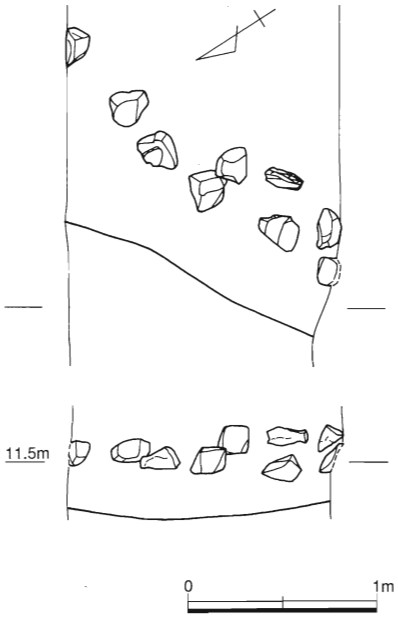
１．墳丘及び外部施設の調査

１トレンチ（第243～246図、図版142,143,168）

１トレンチは墳丘の西側における墳端と周堀の検出、外堤の有無を確認するため、当初幅２ｍ、長さ26ｍの範囲で調査区を設定した。墳端・周堀を検出した後、県教育委員会が住宅供給公社に保存を要請していた範囲のうち、北西隅の一部が松江市道にかかり設計変更が困難な状況にあること、また周堀の走行方向や、外堤の有無を確認するにはより面的な範囲の調査が必要であるため、南側へ最大７ｍ調査区を拡張した。

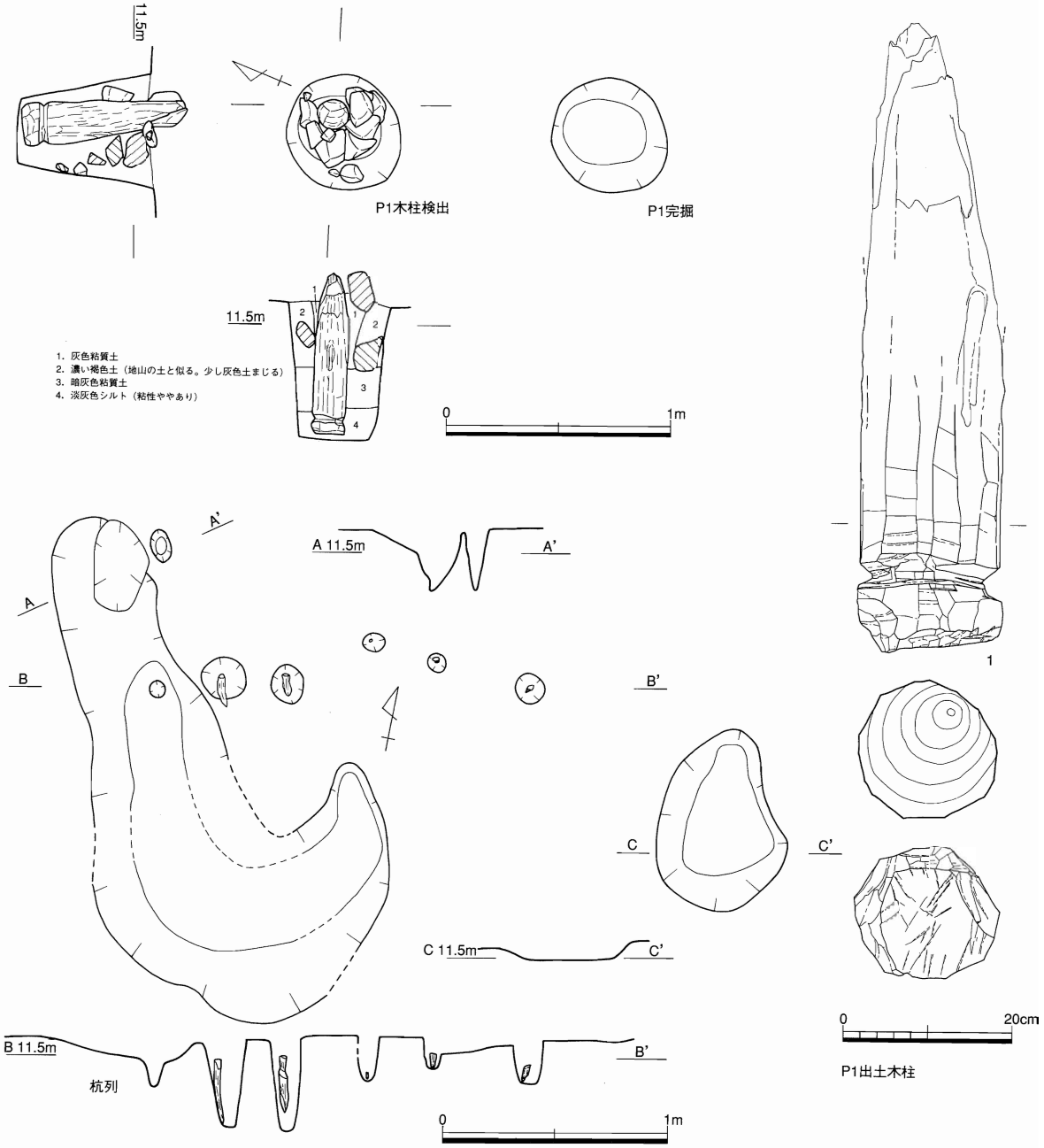
調査の結果、調査区東側から墳丘斜面、墳端、周堀、外堤と考えられる部分（以下、外堤）、外堤の外部に幅約２ｍの溝（以下、外溝）が検出された。また、外堤上において、Ｐ１や杭列が確認できた。

墳丘は、トレンチ東端から1.5ｍまでがやや急な立ち上がりとなっており、そこから幅1.1ｍの平坦面をはさんで、再び斜面となる。ただし、墳丘斜面上方は後世の耕作や整地によって改変を受けたため本来の形状をとどめていないと考えられる。また、平坦面についても後世の同様に削平によって作られた可能性が高い。



第244図　塚山古墳１トレンチ葺石実測図（Ｓ＝1／40）

第245図　塚山古墳１トレンチ遺物出土状況図（Ｓ＝1／100）



第246図　塚山古墳１トレンチＰ１、杭列、Ｐ１出土木柱実測図（遺構：Ｓ＝1／30、遺物：Ｓ＝1／8）

なお、墳丘の盛土部分については断ち割りを行った結果、旧表土面上に厚さ10～20㎝程度の暗褐色土が盛られた後、黄褐色土を主体とする土と、暗褐色～黒褐色を主体とする土で、互層状に細かい単位で版築されていることが分かった。旧表土面の標高は12.5mである。

墳丘斜面の下方は本来の形状をとどめていると考えられる。墳丘の立ち上がりは緩やかであり、傾斜度は17°である。墳丘斜面下方では長さ20㎝程度の石を用いた葺石が確認できた。葺石の並び方は散漫であるため、斜面上方から転落してきた石のようにも見える。しかし、第244図で示した石については、地山面に食い込むように接しており、原位置を保っている可能性があると思われる。

墳端は北東－南西方向に走行する形で検出できた。墳端の標高は11.25mである。墳端における墳丘の立ち上がりは不明瞭である。周堀底面の幅は3.5m、墳端から周堀上端までの幅は4.5mになる。周堀の最深部の標高は11.15mになる。外堤最高所から周堀の深さは0.5mになる。なお、トレ

ンチ拡張部で北東から南西方向に直線的にのびていた周堀上端が、南東方向へ直角に折れ曲がり、コーナーが形成されている。

周堀の西側には幅が4.5mの高まりが見られ、さらにその西側には周堀と平行して深さが最大で30cm程度の緩やかに窪んだ溝が北東－南西方向にのびている。溝周辺からは弥生時代後期の土器片が若干出土しているが、かなり摩滅しており、混入したものと思われる。この溝の性格は周堀との位置関係から、古墳築造に伴い外堤の外部に設けられた溝と考えたい。外溝や外堤はコーナー部分から折れ曲がった部分では、とぎれたり、不明瞭になっている。

外堤上では、Ｐ１や杭列を検出した。Ｐ１は周堀コーナーから外堤コーナーの延長上にちょうど位置する直径50cm、深さ60cmのピットである。内部には木柱が埋め込まれており、木柱上部の周囲は石で根固めされていた。建物の柱穴になる可能性も考慮して、この周囲も精査してみたが、これに対応するようなピットは確認できず、ここに建物があったとは考えにくい。外堤上における位置などを考慮すると古墳に伴って設けられた「立柱」もしくは「木の埴輪」に相当するものとも考えられる。246－１はＰ１に埋め込まれていた木柱で、現存長74cm、太さ16cmある。断面は円形に近いが、手斧により４cmの間隔で面取りされている。基部には縄掛のためのくり込みが見られる。

杭列は、Ｐ１の東約５mの位置に見られる。杭もしくは杭跡と考えられるものは確認できただけで６か所あり、やや不規則な並びながら一つのまとまりと捉えて良さそうである。西端の杭跡から東端の杭跡までの長さは1.65mある。杭跡は径20cm以下で、杭が完全に腐ると遺構としては検出しづらいため、本来はこのほかにもあったが見つけられなかった可能性もある。遺構の性格については明確に言えないが、周堀と平行に近い形でのびることから古墳に伴う遺構と考えることもできる。

古墳に伴う遺物として、周堀内や外堤周辺を中心に埴輪片が出土している。周堀内でも外堤に近い部分や、外堤部分で出土した中にも比較的大きな破片が見られることから、外堤上にも埴輪が立てられていた可能性が高いと思われる。このほか弥生土器片や、須恵器片が若干出土している。

２トレンチ（第247図　図版143）

墳丘の東側における墳端の検出と周堀の確認を目的として、当初長さ18m、幅２mのトレンチを設定した。トレンチ東端付近で古代の水場遺構、ＳＸ01の一部を確認したため西側へ３m拡張した。

ここでは塚山古墳の墳丘及び外部施設について主に触れることとし、ＳＸ01については後ほど詳しく述べたい。

調査の結果、トレンチの西側から墳丘斜面、墳端、周堀を確認した。

墳丘斜面にはトレンチ西端から、1.4～5.5mの範囲で平坦面が認められるが、後世の耕作・削平によってできた可能性が考えられる。これより東の部分については、周堀内堆積土に覆われており、墳丘面は原状をとどめているようである。傾斜度は18°である

なお、墳丘の盛土部分の断ち割りを行った結果、旧表土面上に厚さ10～20cm程度の暗褐色土が盛られた後、黄褐色土を主体とする土と、暗褐色～黒褐色を主体とする土で交互に細かい単位で版築されていることが分かった。旧表土面の標高は12.7mである。

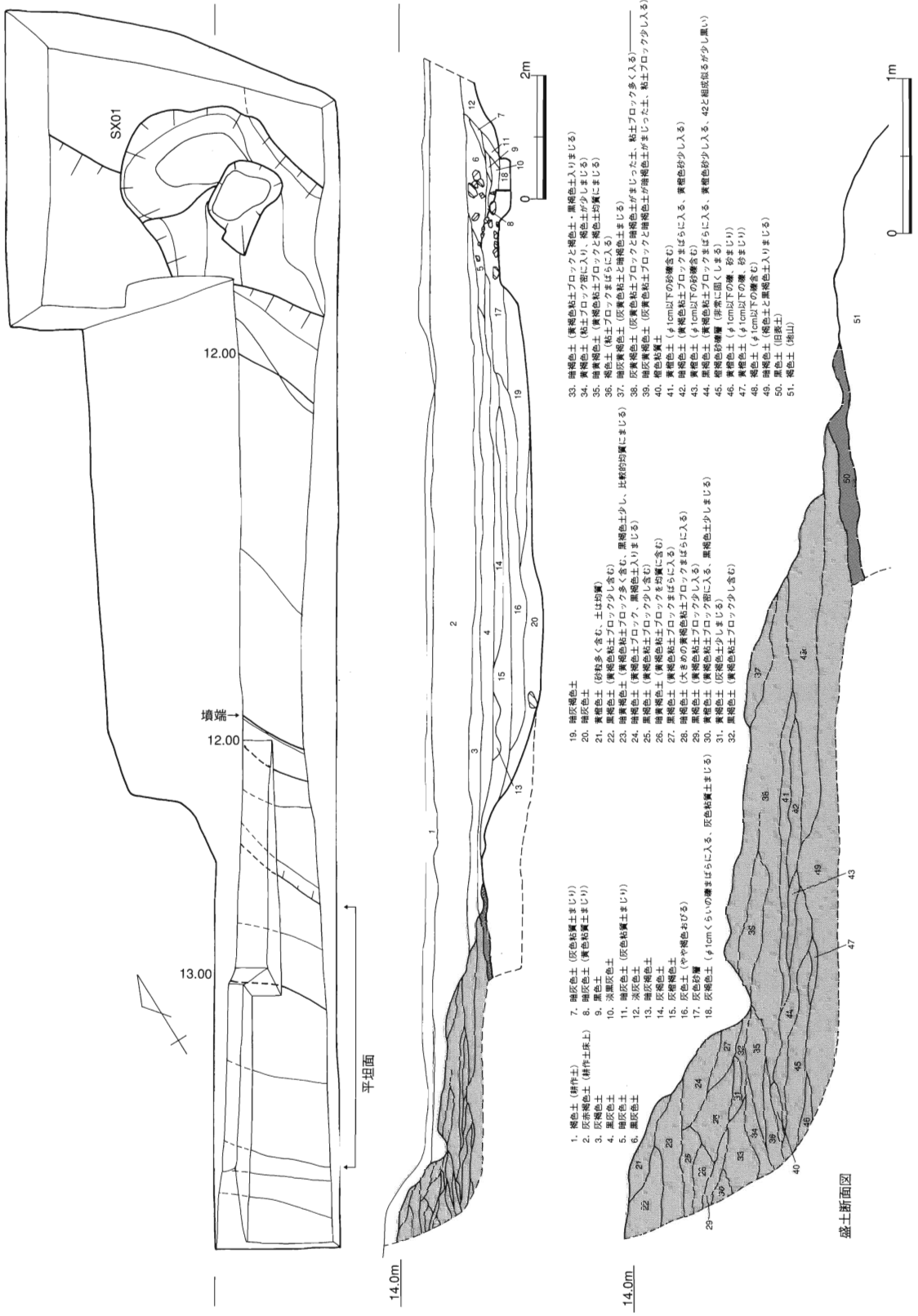
葺石は、転落したと思われるものは少し見られたが、原位置をとどめているものはなかった。

墳端はトレンチ西端から8.6mの部分に位置し、標高は11.7mである。ここでの墳丘の立ち上がりはやや不明瞭である。周堀の幅は、底面で5.4m、墳端から周堀上端にかけては6.4mに復元される。周堀上端から底面の深さは0.7mである。

遺物には、埴輪片が出土しているほか、古墳時代終末から奈良・平安時代の土師器・須恵器片が出土している。

3，8トレンチ（第248～251図　図版144～146）

1999年度の調査では、墳丘の東側における墳端の検出と周堀の確認を目的として、当初長さ19m、幅2mの範囲で3トレンチを設定した。しかし、トレンチを設定した箇所はちょうど造り出し部南



第247図　塚山古墳2トレンチ実測図（平面、トレンチ断面図：S＝1／100、盛土断面図：S＝1／40）

側面に当たったため、墳端について明確に把握できなかった。このため、南側に調査区を拡張し広い範囲で墳端の走行方向を確認することとした。その結果、当初設定したトレンチと拡張した部分で周堀底面に高低差があることが明らかとなった。このことついて、墳丘に、造り出し部もしくは陸橋が付帯する可能性が考えられたため、北側もトレンチを拡張してこの部分の構造を確認することとなった。

調査の結果、墳端は北西－南東方向に直線的にのび、3トレンチの北側には造り出し部がかかっていることがわかった。造り出し部は墳裾に対して4m突出しており、造り出しの先端は墳丘外に向かって開いている。墳端の標高は、調査区南壁で10.7m、造り出し部の南側裾で10.8mであるのに対し、造り出し部前面では11.5mとなり、造り出し部の南側で0.7mの段差がつくことが明らかになった。造り出し部上面は現況で標高12.4mであるが、この部分には旧表土が残っており、この上にさらに高く盛土が施されていたと考えられる。なお、遺構図では造り出し部の南側面で等高線の間隔が大きくなりテラス状になっているように見えるが、これは当初のトレンチを発掘した段階で造り出し部の存在に気付かずに掘りすぎてしまったためである。

造り出し部の南側の墳丘斜面には、標高11.7～12.0mの平坦な面が見られる。ただし、この部分の上層は耕作土であることから、墳丘テラスではなく耕作時の削平されてできた可能性が高い。これより下の墳丘斜面は周堀堆積土に覆われており、本来の形をとどめていると考えられる。ここでの傾斜は25°である。

周堀上端の標高は3トレンチ北側で12.3m、南側で11.7mと南側へ向かうにつれて低くなっている。

2000年の調査では、3トレンチで検出した造り出し部の幅を確認するため8トレンチを設定した。最初に3トレンチ北端から、北へ長さ10m、幅2.5mの範囲で調査区を設け、造り出し部北側面の墳端を確認したのち、東側へ調査区を拡張して、造り出し部の北側コーナーを検出した。

8トレンチで検出された造り出し部北側面の墳端は、主丘部の墳端に対して直角に近い角度で折れ曲がっており、そこから4mの長さで北東方向にのびる。造り出し部北側面での墳端の標高は11.65m、造り出し部前面での墳端の標高は11.6mである。造り出し部前面での周堀底面の幅は0.4m、墳端から周堀上端までの幅は2.6mになる。周堀底面は、造り出し部北コーナーよりも北で若干浅く窪んでいるものの、3トレンチで確認できたような明瞭な段は見られない。

墳裾付近には崩落した葺石が多く検出されたが、原位置をとどめているものは見られなかった。

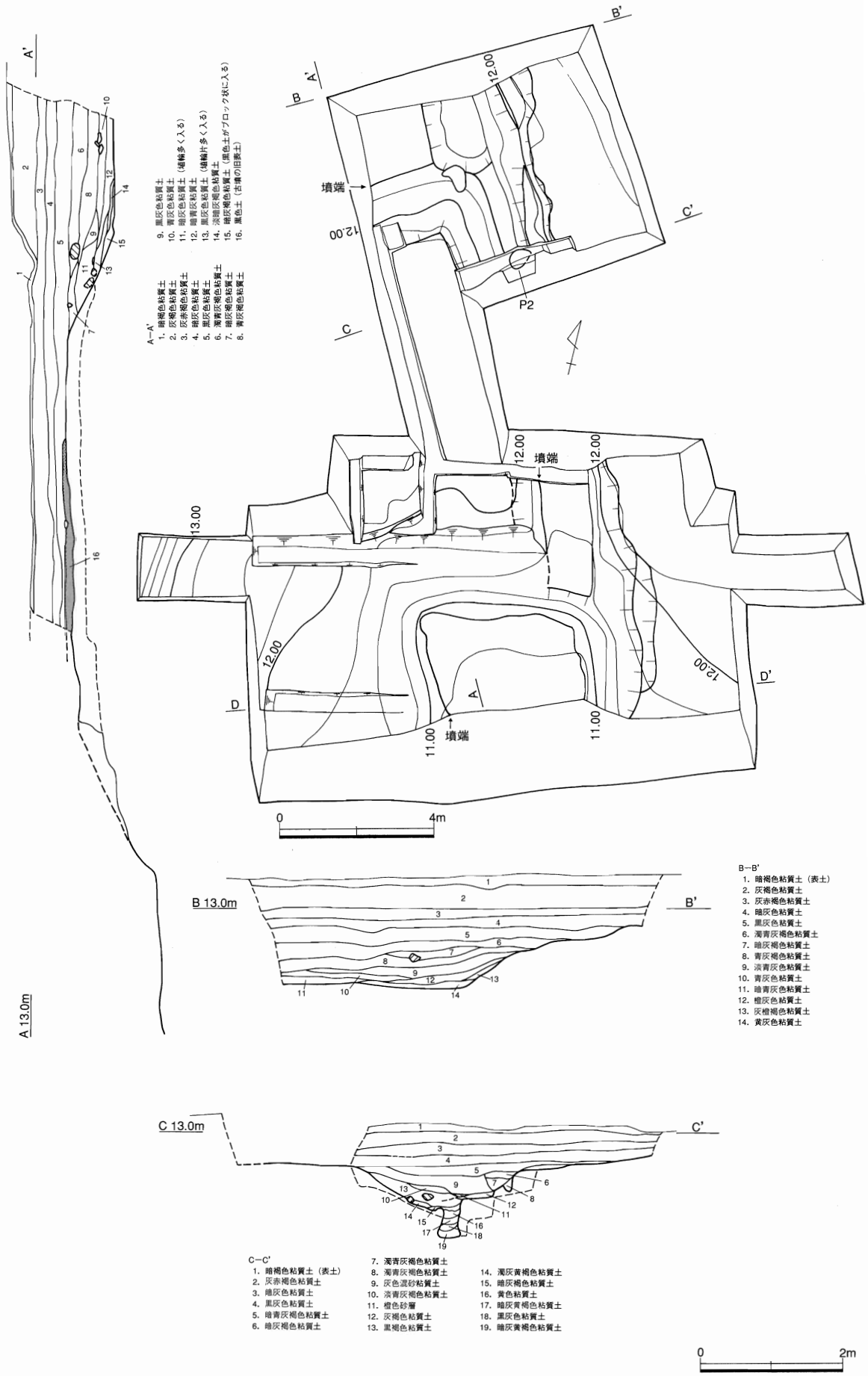
8トレンチの拡張部南壁付近ではＰ2が検出された。平面形は、60㎝×50㎝の不整楕円形で、底面は部分的にオーバーハングしている。覆土は黄褐色粘質土や黒色粘質土がブロック状に入り込んだもので、人為的に埋め戻された土層のように思われる。埋土中から埴輪片が数点出土している。Ｐ2は地山面から掘り込まれており、周堀覆土を切り込んでいない。こうしたことから、古墳築造時か、古墳築造後でもあまり時間を経ない段階に掘られた遺構と考えられる。

3，8トレンチでは、古墳に伴う遺物として円筒埴輪のほか、人物埴輪や、家形埴輪と思われる埴輪片、須恵器壺もしくは瑞・高坏・器台が出土している。形象埴輪は造り出し部の北側の8トレンチで多く出土しているのに対し、須恵器片は3トレンチで多く出土している。

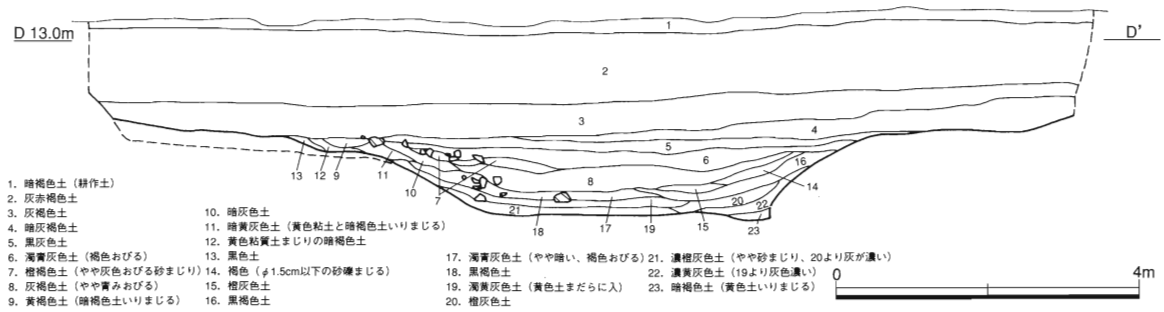
古墳に伴わない遺物には、奈良・平安時代の須恵器片や、白磁小片が出土している。

4トレンチ（第252図、図版146）

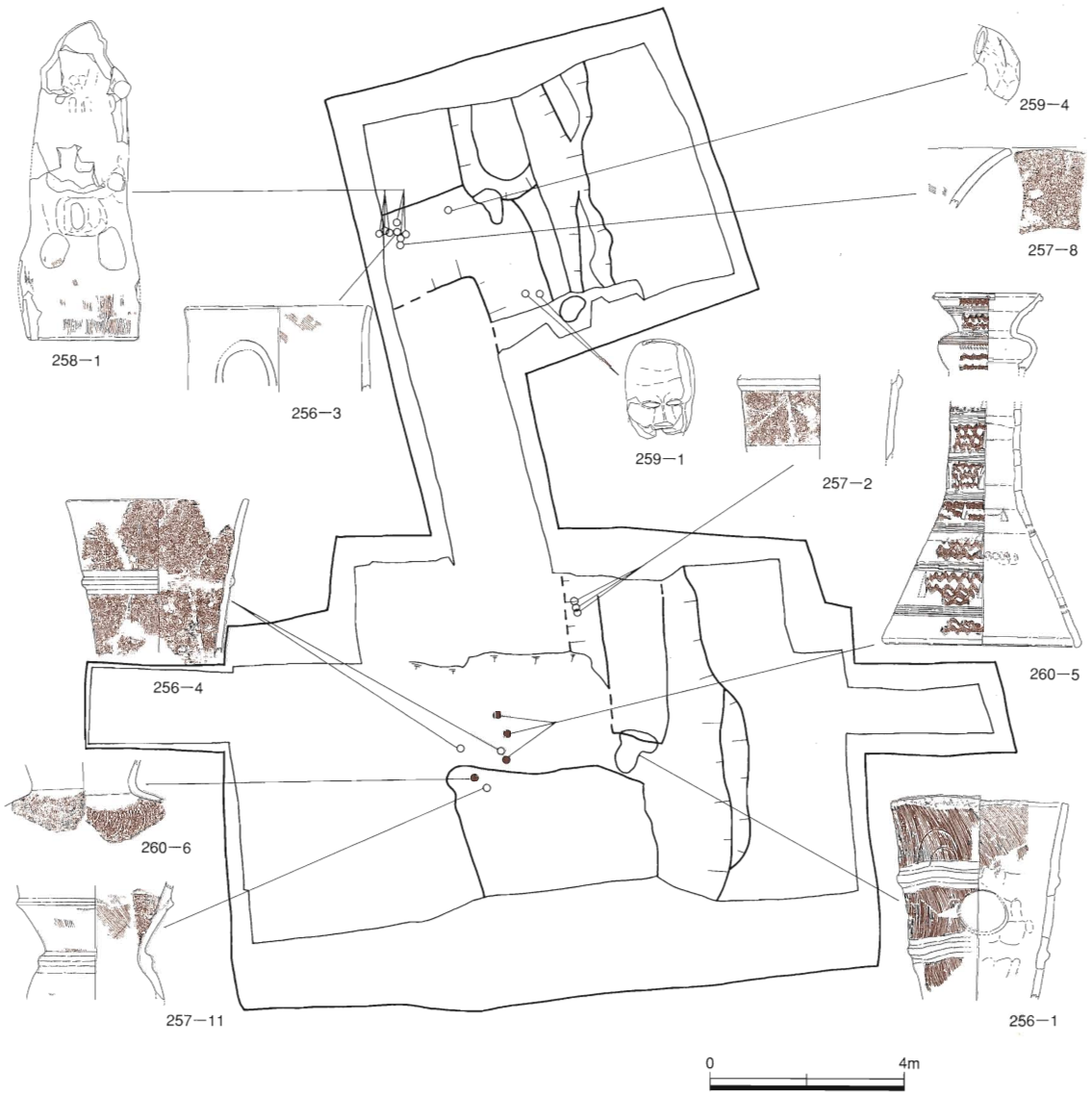
墳丘の西側の墳端、周堀の有無を確認するため、長さ14m、幅2mのトレンチを設定した。



第248図　塚山古墳3，8トレンチ実測図（平面：**S**＝1／150、断面：**S**＝1／80）

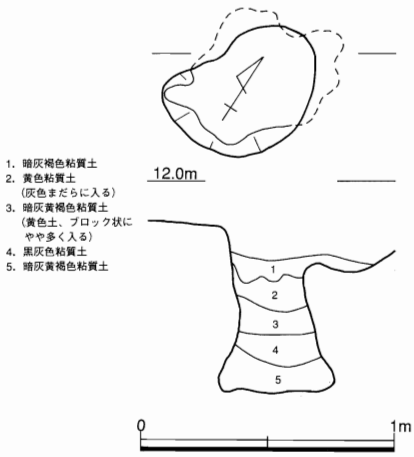


第249図　塚山古墳３トレンチＤ－Ｄ’ライン土層断面図（Ｓ＝1／100）



第250図　塚山古墳３，８トレンチ遺物出土状況図（Ｓ＝1／150）

調査の結果、トレンチ東端から約6.5mの位置で墳端を検出した。墳端は南東－北西方向に走行している。墳端の標高は10.6mである。墳丘は水田のため大きく削平されており、墳端から標高10.95mまでがかろうじて旧状をとどめていた。墳丘の立ち上がりは緩やかである。墳丘斜面から周堀にかけては崩落した葺石が多く見られたが、原位置を保っている葺石は見られなかった。周堀は、墳端から周堀上端にかけて4.4m、深さは0.2mであるが、周堀の上部が削平された可能性があり、幅・深さともこれより大きかったかもしれない。周堀外部に遺構は確認できなかった。



第251図　塚山古墳8トレンチP 2実測図（S＝1／30）

遺物には、埴輪片が出土している。

5トレンチ（第253図、図版146）

墳丘の南側の墳端、周堀の有無を確認するため、当初長さ12m、幅2mのトレンチを設定したが、トレンチの東側の遺構が近世以降の水路で破壊されていたため、西側にトレンチを1.5m拡張した。

調査の結果、トレンチ北端から2.7mの位置で、北東－南西方向に走行する墳端を検出した。墳端の標高は10.4mである。墳丘は水田のため大きく削平されており、墳丘斜面が残存していた部分は墳端から標高10.80mまででであった。墳丘斜面の傾斜は24°である。残存している墳丘斜面から周堀にかけては崩落した葺石が多く見られたが、原位置を保っているものは見られなかった。墳端から周堀上端までの幅は3.8m、深さは0.25mであるが、周堀上部が削平されている可能性がある。周堀外部には遺構は確認できなかった。

遺物には、埴輪片が、特に墳裾から周堀を中心として出土している。

6トレンチ（第254図、図版147）

古墳の西側の外堤の有無を確認するため4トレンチの北西に長さ15m、幅2mのトレンチを設定した。調査の結果、古墳に関わるような遺構は確認できなかった。トレンチで確認できた地山の標高は、トレンチ東端では10.5m、西端では10.4mであった。ただし、水田のために本来の遺構面が削平され、遺構が失われた可能性もある。遺物として、少量の埴輪片が出土した。

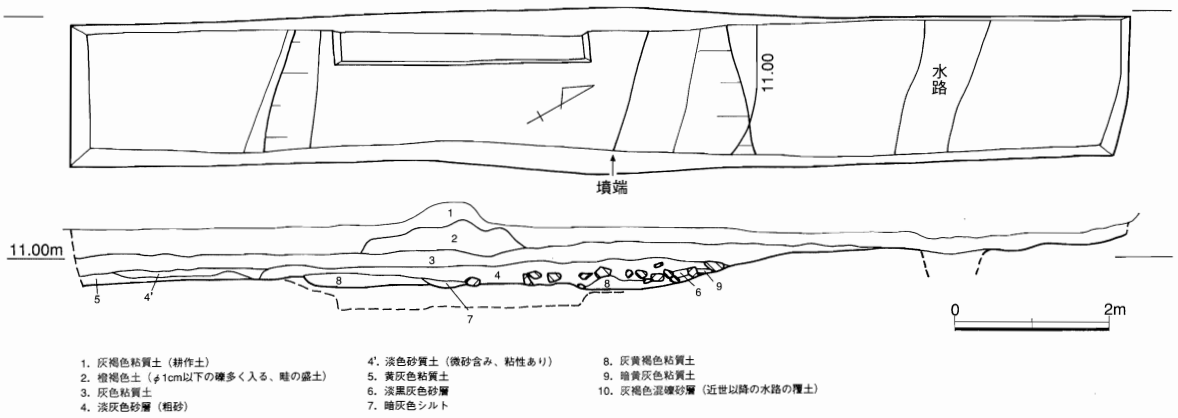
7トレンチ（第255図、図版147）

墳丘の南側の外堤の有無を確認するため、5トレンチから東へ7mの部分に長さ12m、幅2mのトレンチを設定した。

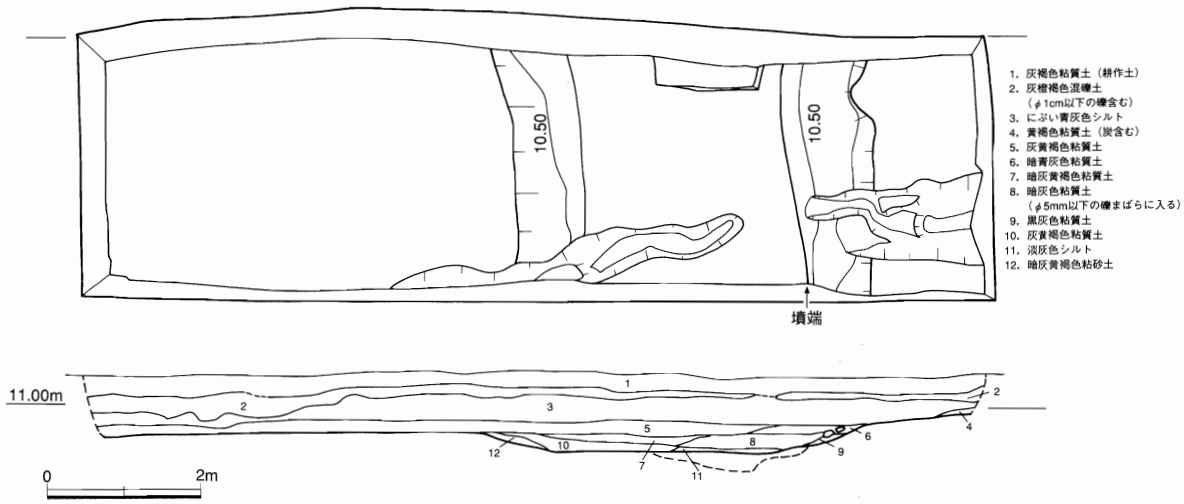
調査の結果、トレンチ北端から1.9mの位置で、北東－南西方向に走行する墳端と思われる部分（以下、墳端）を検出した。墳端の標高は10.5mである。墳丘は水田のため大きく削平されており、墳端から標高10.90mまでがかろうじて旧状を保っていた。墳丘斜面の傾斜は41°で、墳丘の立ち上がりは明瞭である。残存している墳丘斜面から周堀にかけては崩落した葺石が多く見られたが、原位置を保っている葺石は見られなかった。周堀は、墳端から周堀上端まで幅0.9m、深さは0.2mで、周堀の立ち上がりは緩やかである。周堀の上端は削平されており、本来はこれより周堀が大きかった可能性も考えられる。周堀外部には、遺構は確認できなかった。

遺物には、墳裾から周堀を中心に埴輪片が出土している。

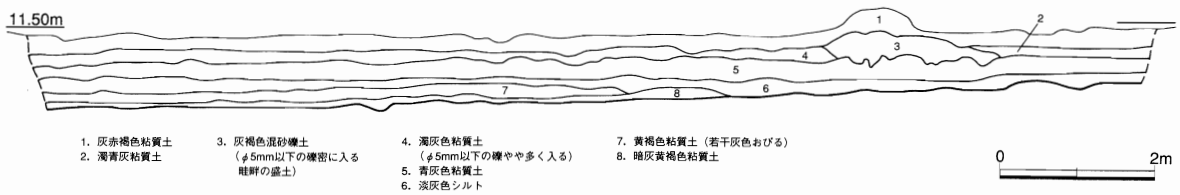
なお、7トレンチで検出された墳端は、5トレンチから推定復元される墳端よりも4.5mも南側に張り出しており、5トレンチからこの部分に墳端が続いていたのかが問題となる。しかし、墳端の標高が5トレンチのそれと近いこと、墳裾周辺で葺石の崩落石と考えられる石がまとまって確認され、埴輪片が多く出土していることは、他のトレンチの墳端の状況と共通している。このようなことから、この部分は古墳とは無関係のものではなく、古墳に伴うものと考えるべきであろう。墳丘の南側に設けられた造り出し部の墳端の可能性が高い。



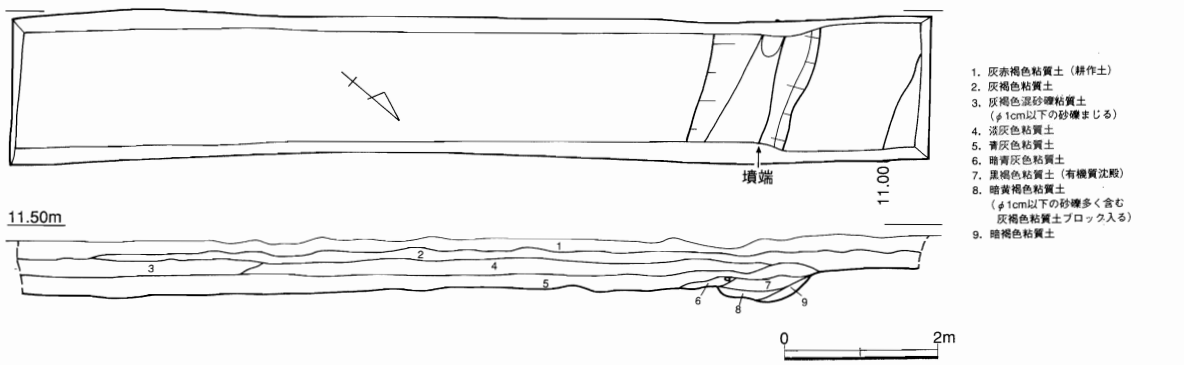
第252図　塚山古墳 4 トレンチ実測図（S = 1／100）



第253図　塚山古墳 5 トレンチ実測図（S = 1／100）



第254図　塚山古墳 6 トレンチ西壁土層図（S = 1／100）



第255図　塚山古墳 7 トレンチ実測図（S = 1／100）

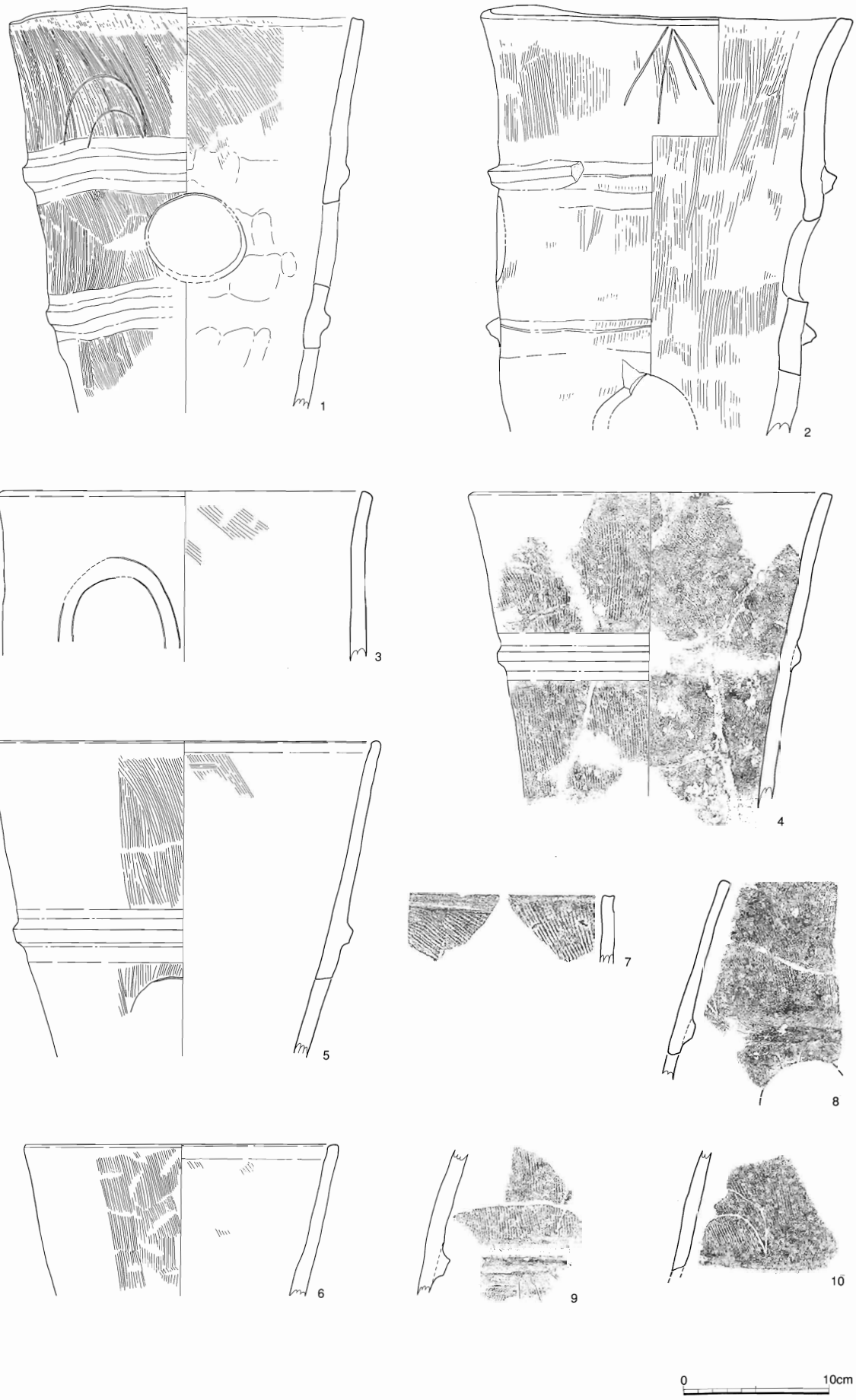
2．古墳に伴う遺物（第256～260図、図版162～167）

256－1～10は円筒埴輪で、口縁部の残るもの、もしくは口縁部付近と思われるものである。口縁端部の残るもの（1～8）は、いずれも端部が強くなでられており、断面形が「コ」の字状に面取りされている。口縁部にヘラ記号が施されているものがある。256－1・10は「⌒」のヘラ記号が入れられており、ヘラ記号の一部しか残っていないが8・9も同様の可能性が考えられる。3は「⌒」のヘラ記号が入れられており、2には傘形のヘラ記号が見られる。胎土・色調・焼成については大きく分けて橙色系（1・3・5～10）のものと、白色～黄白色系（2・7）のものがあり、中には須恵質の焼成のもの（7）も見られる。以下に特徴的なものについて個別にふれたい。

256－1は、口縁部から3段目までが残っており、口縁部には「⌒」のヘラ記号が入っている。上から2段目と3段目には円形の透孔が千鳥方向に入れられており、このことから少なくとも4段以上に作られていたことがわかる。調整は、外面に主に右下がりのハケ目が1次調整で施されており、内面は上段が右下がりのハケ目、上から2・3段目がユビナデが施されている。凸帯の断面形は台形である。色調は橙褐色である。2も口縁部から3段目までが残っており、口縁部には傘形のヘラ記号が入っている。上から2段目と3段目には円形の透孔が千鳥方向に入れられており、このことから少なくとも4段以上に作られていたことがわかる。調整は、外面に縦方向のハケ目が1次調整で施されており、内面も縦方向にハケ目が施されている。凸帯は断面形が台形で、上面はなでられて少しへこんでいる。凸帯のはがれた部分には沈線が見られるが、これは凸帯を貼り付けるための割付線か、凸帯を接着する際に接合面を広げる投錨効果をねらったものと思われる。色調は白褐色で1とは胎土が異なるようである。3は口縁部のみ残存のもので「⌒」のヘラ記号が見られる。4は外面に縦方向のハケ目が、内面には口縁部に右下がりのハケ目が施されている。5・6は外面と口縁部内面に右下がりのハケ目が施されている。

257－1～3は円筒埴輪もしくは朝顔形埴輪の胴部の破片である。1は1次調整に縦方向のハケ目が、2次調整にB種ヨコハケが施されている。内面はナデや縦方向のハケ目が施されている。色調は淡赤褐色である。2は外面に縦方向のハケ目が施されている。破片の上端は凸帯がついており、ここで接合面が剥離している。凸帯よりも上部の粘土帯を積み上げる際、凸帯を補強材にして成形している様子がうかがわれる。色調は黄白色である。3は外面にB種ヨコハケが施されており、焼成は須恵質である。257－4～7は底部の残る埴輪片である。4は外面全体にB種ヨコハケが、内面には上から下へ強いナデが施されており、底部調整はされていない。焼成は須恵質である。5は外面に横方向の断続的なハケ目ののち縦方向のハケ目が施されている。内面はなでられており底部調整はされていない。色調は淡黄褐色である。6は底部から2段目までが残る。外面は縦方向のハケ目が施されており、内面は特に最下段で上から下方向へ強いナデが見られるが、底部調整はされていない。色調は特色である。7は底部から3段目までが残る外面は縦方向のハケ目が施されており、内面はナデ、ユビオサエが確認できる。底部調整はされていない。色調は淡黄褐色である。塚山古墳ではこのほかにも埴輪の底部片はあるが、底部調整の施されたものは出土していない。

257－8～11は朝顔形埴輪の破片である。1は口縁部の破片で、大きく外反しながら開き、端部は「コ」の字状の面を持つ。9は頸部の破片と思われる。小片であり実測図の天地、傾きについては誤りがあるかもしれない。凸帯ははがれてしまったためか見られない。内外面に横方向のハケ目が施されている。焼成は須恵質で、外面まで灰色になっている。10は口縁段部の破片である。口縁



第256図　塚山古墳円筒埴輪実測図（S＝1／4）

第257図　塚山古墳円筒埴輪・朝顔形埴輪実測図（S＝1／4）

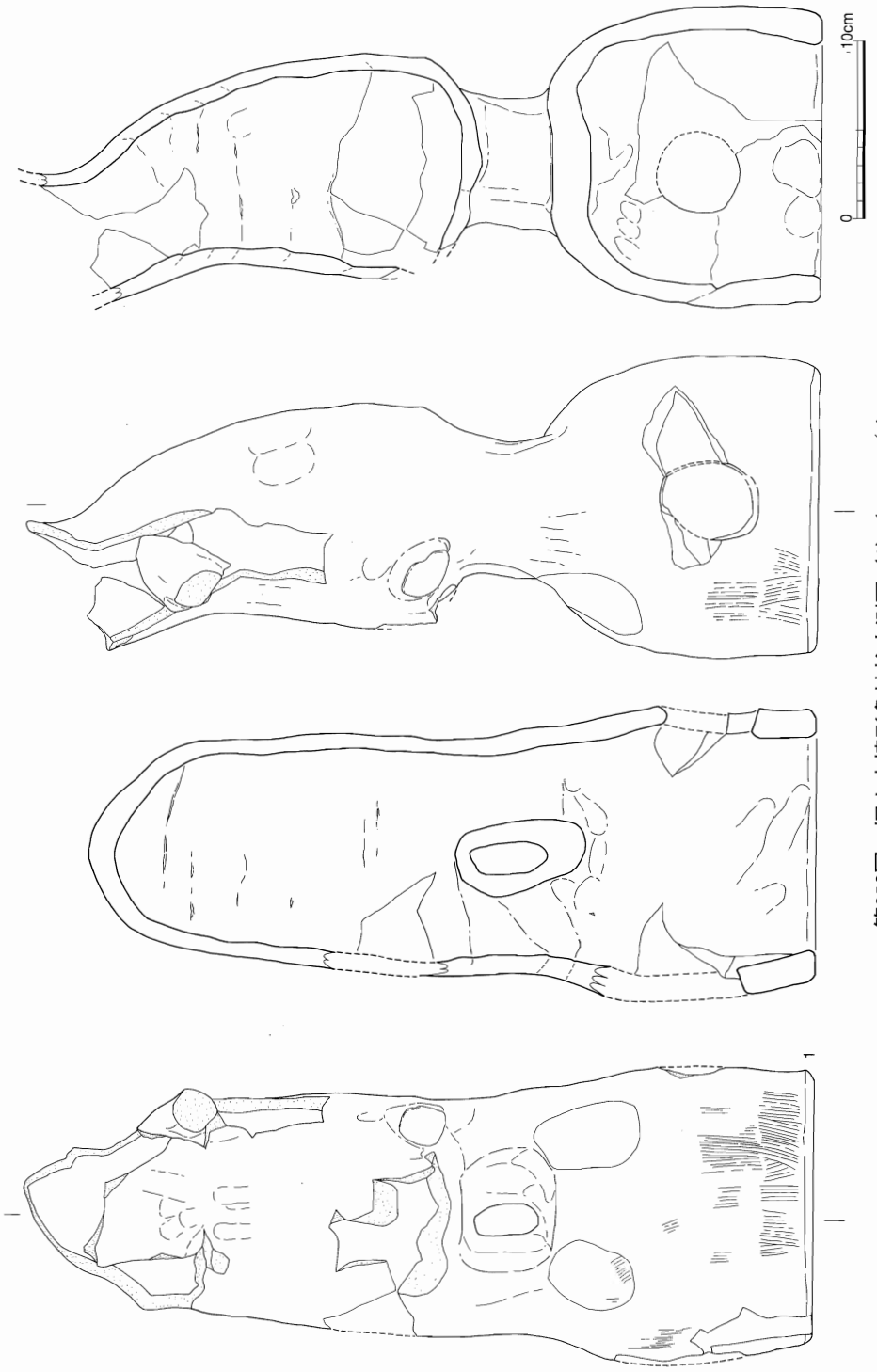
部下段の粘土帯に次いで凸帯を貼り付けて、口縁部上段を積み上げる際の補強材にしている様子が断面からうかがえる。11は朝顔形埴輪の壷部上半から口縁段部にかけての破片である。10と同様、凸帯を口縁部上段の粘土帯を積み上げる際の補強材として利用している様子がうかがえる。口縁部の剥離面には長さ2.3cm前後のヘラ状工具による刺突痕が見られるが、これは口縁部上段を貼り付ける際に投錨効果をねらったものと考えられる。

258－1～259－11は形象埴輪と考えられるものである。いずれも、墳丘東側の造り出し部周辺に設定された3，8トレンチで出土した。

258－1は人物埴輪で台部から胴部上部まで残存しており、頭部と腕部の大半は欠損している。残存高は44cmである。台部の高さは15cmで、左右には円形の透孔が入れられている。台部の上には高さ5cm程度の2本の筒状の脚部が作られている。脚部前面の下の台部には粘土がはがれた痕跡が見られるが、これは足を貼り付けていた部分と見られる。胴部下半は前後に丸みを持って作られており、前面の左脚部の上部には楕円形に何かがはがれた跡が見られる。また、胴下部の前面中央は、欠損部位が多いため本来どのような形になっていたのか分からないが、前方に突出している部分がわずかに残っている。胴部上半はなで肩で、背中が猫背気味に丸くなって前傾している。左腕部の付け根がわずかに残存し、右側も胴部前面が前方向に反り返っており、両腕とも前方に突き出していたように思われる。なお、胴部から脚部にかけて明確な着衣の表現は見られない。色調は濃い橙色である。この埴輪は、その形態から力士を模したものではないかと思われる。

259－1は人物埴輪の頭部で、頭頂部から鼻の下までが残存している。目は棗形に穿孔され、鼻は三角形の粘土を貼り付けて表現されている。鼻の下には口が穿孔によって作られていたようであるが、欠損しているためその形状は分からない。顔面にはわずかだが赤色顔料が付着している部分が見られる。頭部左側面には粘土がはがれた痕跡が認められ、耳もしくは、みずらなど頭髪の表現があったと思われる。頭部右側面には粘土のはがれた痕跡は認めがたいが、摩滅が激しいためはがれの痕跡が残存していないと考えることもできる。また、額の部分から右側面にかけても、ひも状の粘土が貼られていた痕跡があり、これは冠帽もしくは、はちまきのようなものを表現したのではないかと思われる。頭部は縦方向に長くなっているがこれは冠帽を被っている状態を表現しているのであろう。こうした埴輪は男性の埴輪に見られることから、この埴輪も男性と推測される。なお、色調は淡橙色で258－1とは若干胎土が異なるようであり、別個体のものと考えたい。

2は形象埴輪の一部で、人物埴輪の指、もしくは勾玉など装身具を表現したものと思われる。3は棒状になっているが、人物埴輪の一部か家形埴輪の鰹木になる可能性を考えたい。4～7は人物埴輪の腕と考えられる。4は湾曲した腕部で、外面にはヘラ記号と思われる「×」の線刻がされている。中空に作られた上腕部に中実の下腕部を差し込んで作られている。5は直線的にのびた腕部である。断面形は楕円形で、中空に作られているが、4と同様に下腕部を差し込んだのであろう。4・5の色調は淡橙色で、258－1と胎土は近いようであり、それぞれ同一個体になる可能性もある。6も上腕部側が筒状に作られ、中実の下腕部を差し込んで作られている。4・5とは色調が異なり別個体であろう。7も筒状に作られた腕の破片と思われる。8は人物埴輪の腕の部分か、高床式の家形埴輪の柱になると考えられる。9・10は家形埴輪の屋根と思われ、庇部は剥落、欠損している。10には屋根部分に網代状の文様が線刻されている。11は横方向に4本の線刻と斜め方向に交叉する2本の線刻が施されている。家形埴輪の壁であろうか。



第258図　塚山古墳形象埴輪実測図（1）（S＝1／4）

260－1～7は古墳に伴うと考えられる須恵器である。いずれも墳丘東側造り出し部周辺に設定された3，8トレンチから出土している。

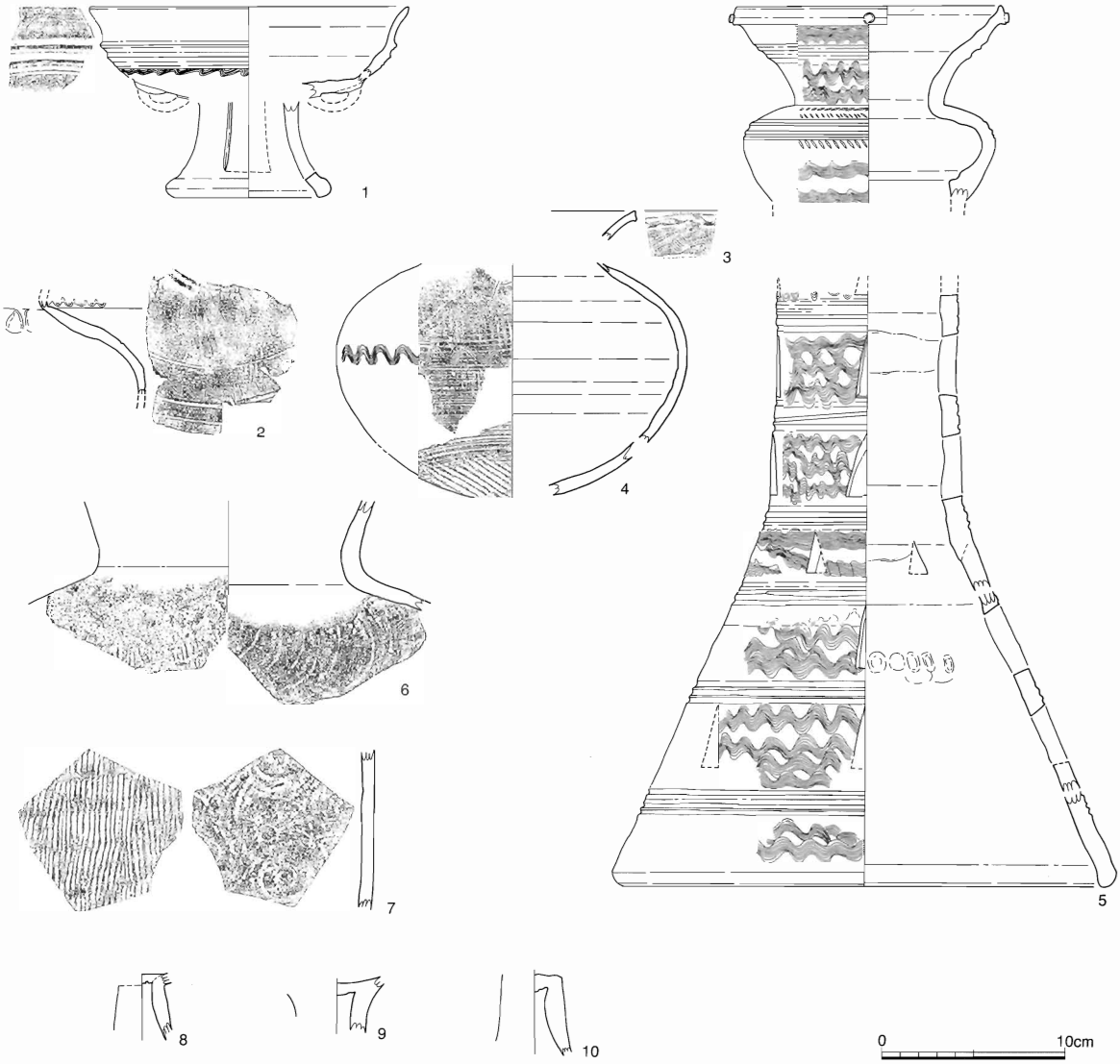
1は無蓋高坏であるが、図は残存度1/10程度の3点の破片を合成して復元実測したものであるため、各部の計測値についてはこれに前後するかもしれない。坏部の口縁上部は外反しながら広がり、下部には2本の鋭い稜が見られ、その下には櫛描の波状文が施されている。坏部の外面下部には把手が貼り付けられていた。脚部は、端部がやや丸みを持ち、透孔が4方向にあけられていたと思われる。内外面は青灰色だが、断面は赤紫色をしている。

2～4は壷もしくは瑞である。2は胴部に3本の沈線あり、上から1本目と2本目の沈線の間に

第259図　塚山古墳形象埴輪実測図（2）（S＝1／4）

波状文が施されている。残存状態は悪いが口縁部にも波状文が施されている。３は口縁部片で外面には波状文が施されており、端部は面取りされている。４は胴部で外面に平行タタキのちカキ目が施され、上半は調整がなで消されている。胴部中央には波状文が巡る。３と胎土・色調が類似しており同一個体の可能性がある。

５は筒形器台である。これも複数の破片をもとに復元実測したものであり、大きさなどに若干の相違があるかもしれない。この器台は壷部と台部が一体となったもので、壷部の底は抜けている。壷部の口縁部は、端面に円形の粘土粒が貼り付けられ、上半に波状文、２本の沈線を挟んで下半に２段の波状文が施されている。胴部は上部から、波状文と同じ原体と思われる工具による２段の斜行刺突、４条の沈線、斜行刺突、２段の波状文が施されている。台部は全体が復元できなかったが、２～３条の沈線による区画が７段以上あり、各段には２～４段の波状文が施され、最下段を除いては三角形の透孔が入れられている。復元実測図では、最下段から上へ４段目までが「ハ」の字状に



第260図　塚山古墳須恵器・土師器実測図（S＝1／4）

広がっており、そこから上部は直線的に立ち上がっている。波状文は、幅1㎝程度の櫛歯状の施文原体を器面に当て、器を回転させながら原体を上下に動かして施文されている。波状文が器面を一周したところで、原体を器面につけたまま上もしくは下へ移動して、再び波状文を一周させている。このため波状文は螺旋状に器面を巡っている。ここでは波状文の切り合い関係が注目される。最下段から上へ3段目までは上から下へ施文され、（つまり、下の波状文が上の波状文を切っており）右回転で施文されている。これに対し4段目以上では口縁部の下半部も含めて、下から上へ施文されて（上の波状文が下の波状文を切って）おり、左回転で施文されていることが分かる。

6・7は甕の破片で、同一個体になる可能性もある。外面は平行タタキが施され、内面には同心円の当て具痕がなで消されかけている。

8～10は土師器高坏の破片である。いずれも脚部上部のみ残存しており、坏部下面には竹管状の円形の刺突が見られる。松山編年Ⅰ期のもので、この古墳に直接伴うものではない。

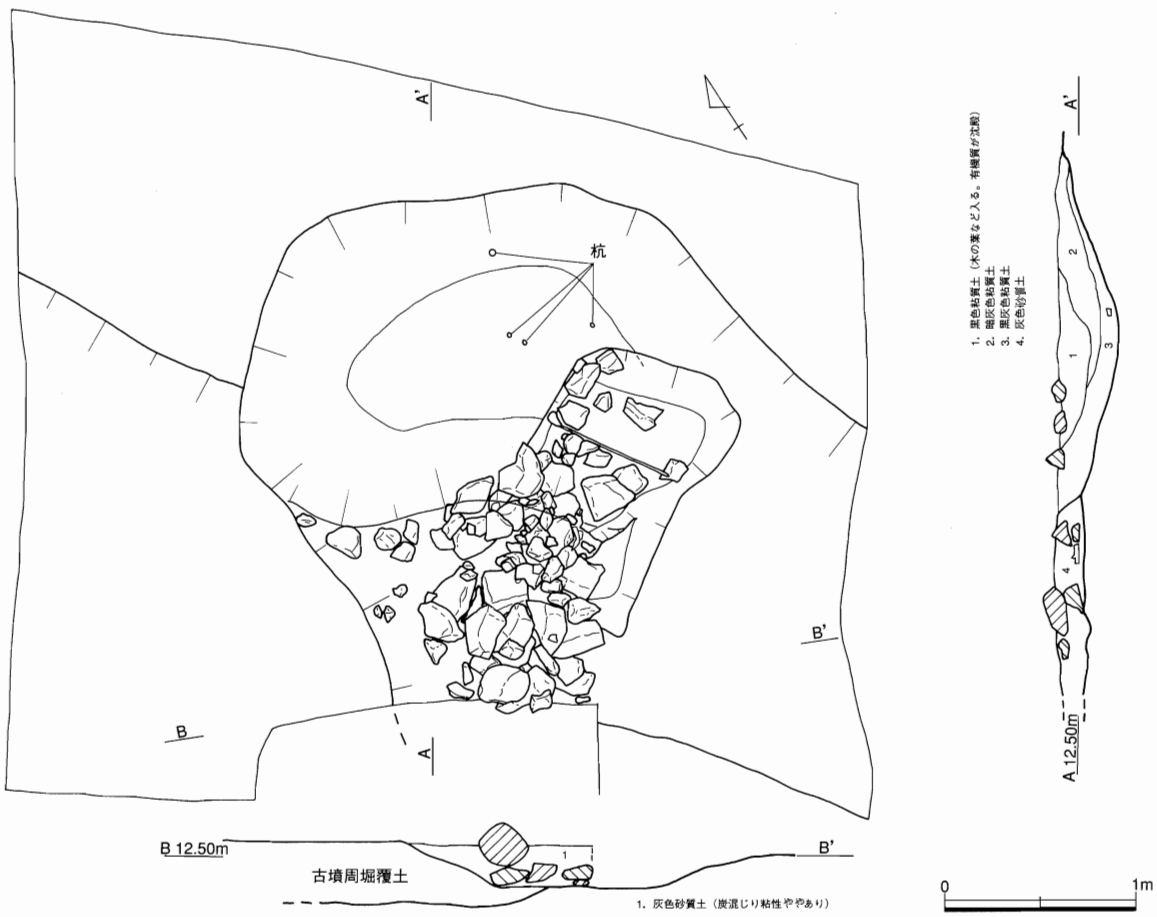
３．古墳に伴わない遺構

ＳＸ01（第247，261～265図、図版148・149）

塚山古墳２トレンチで確認できた奈良時代～平安時代の水場遺構である。

２トレンチでは、当初長さ18m、幅２mのトレンチを設定し、墳丘の北側における墳端の検出と周堀の確認をしようとしていたが、この過程でトレンチ北端付近では礫が密集しており、ここから８～９世紀代の須恵器がまとまって出土していた。当初からトレンチを設定していたこの部分については、礫や遺物の出土状態について記録を取らずに掘り進めていたが、地山面に到達するところで土坑内に板が据え付けられているような状況が確認され、また、トレンチ西壁の土層断面を観察したところ、黒色の腐植土がレンズ状に堆積した部分とその南側には礫や砂の入る土層が認められた。黒色腐植土の堆積した部分が水をためていた部分で、礫や砂の入る層が水をせき止めていた部分になると考え、この部分をＳＸ01と呼ぶこととした。しかし、この時点ではこの遺構の性格や規模が十分把握できていなかったため、北側へ0.5～２m、西側へ３mトレンチを拡張して、この遺構について面的に調査することとなった。

当初の２トレンチの西壁から西へ1.8m、南北の幅1.7mの範囲で黒色腐植土が堆積した深さ0.3mのくぼみと、この南側には南北1.2m以上の範囲で拳大から人頭大の礫が多く密集した砂礫層が確認できた。黒色腐植土は、密集している礫よりも後に堆積したものであり、中には木の葉や木の枝などを含み、水が流れているような形跡は確認できなかった。このことから、礫の密集している部分で水をせき止めて、窪みの部分に水を溜めていたが、水場として利用されなくなって黒色土が堆



第261図　塚山古墳２トレンチＳＸ01礫検出時実測図（Ｓ＝1／40）

積したと考えられる。窪みの中には4か所に杭の痕跡が見られたが、いずれも上部が失われており、どのような機能を持ったものかは分からない。

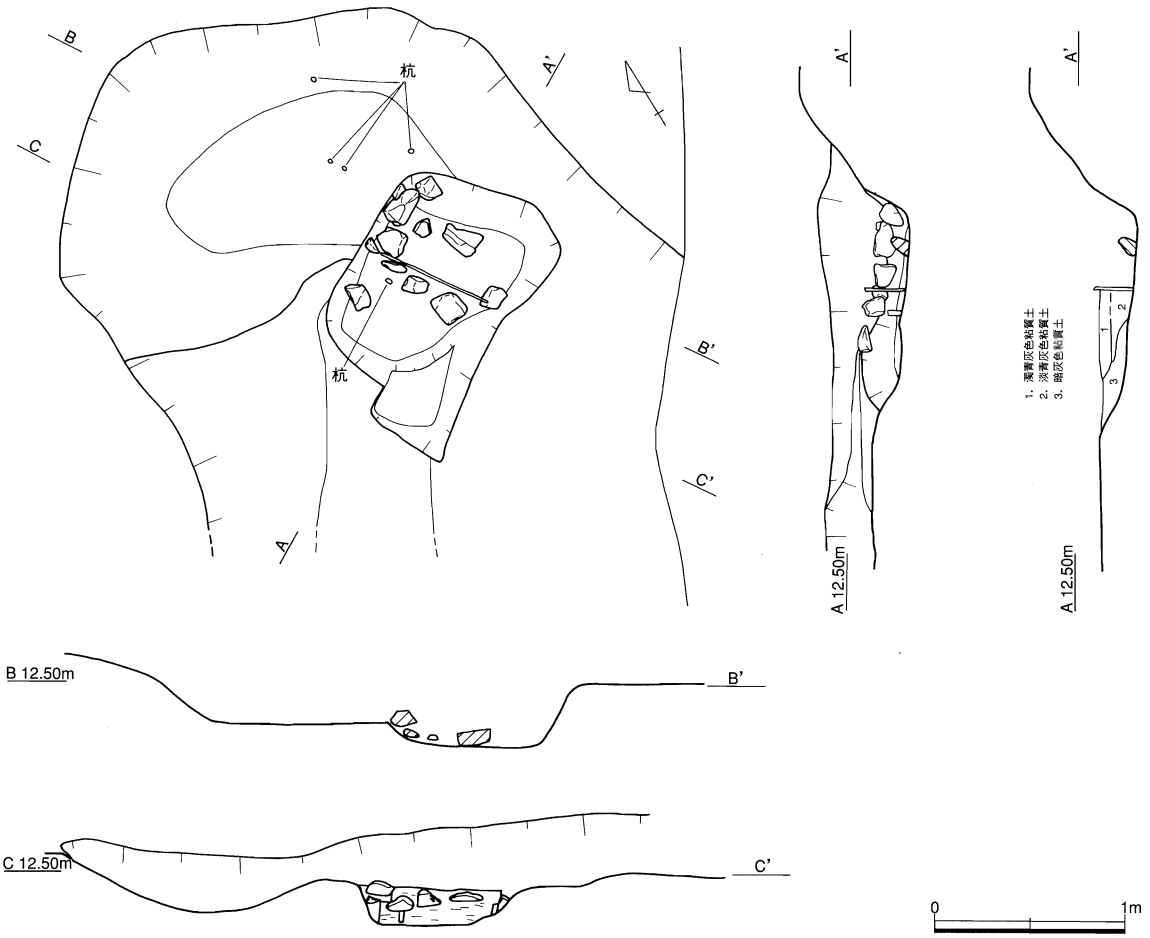
また、黒色腐植土や礫を取り除いたところ、その下層から長さ1.2m、幅0.9m、深さ0.2mの土坑が検出できた。土坑の中央には長さ60cm、幅20cmの板材（第265－8）が石に支えられて立てられており、その南側には断面方形の杭が残っていた。この土坑についてはどのように機能していたのか分からないが、ＳＸ01の古い段階の遺構で、水場に関わるものであったと考えておきたい。

なお、ＳＸ01は塚山古墳の周堀の覆土や上端を切って掘られており、ＳＸ01が設けられた段階には古墳の周堀はほとんど埋没していたことが窺われる。

ＳＸ01周辺からは8世紀以降の須恵器を中心として多くの遺物が出土している。このうち当初設定したトレンチ内で出土したものについては厳密な出土位置を押さえられていないが、調査区を拡張した部分で出土したものについては、多くが砂礫層中から出土している。遺物には坏・皿などの食膳具や、壷・甕・把手付の大型鉢など多様な器種が見られる。また中には墨書土器なども出土している。

1～4は須恵器蓋である。1は口縁部にかえりがあり、天井部には輪状つまみを持つ。内面には「×」のヘラ記号が入れられている。7世紀代に位置づけられる。2は口縁端部が垂直に折れ曲がるもので、天井部には輪状つまみを持つ。8世紀中葉のものである。3・4は口縁端部がわずかに下方につきだしており、天井部には擬宝珠つまみがつく。8世紀後半～末に位置づけられる。

5～11は須恵器埦で口縁部が内湾しながら立ち上がるものである。5・6のように口縁端部の下



第262図　塚山古墳2トレンチＳＸ01礫除去後実測図（Ｓ＝1／40）

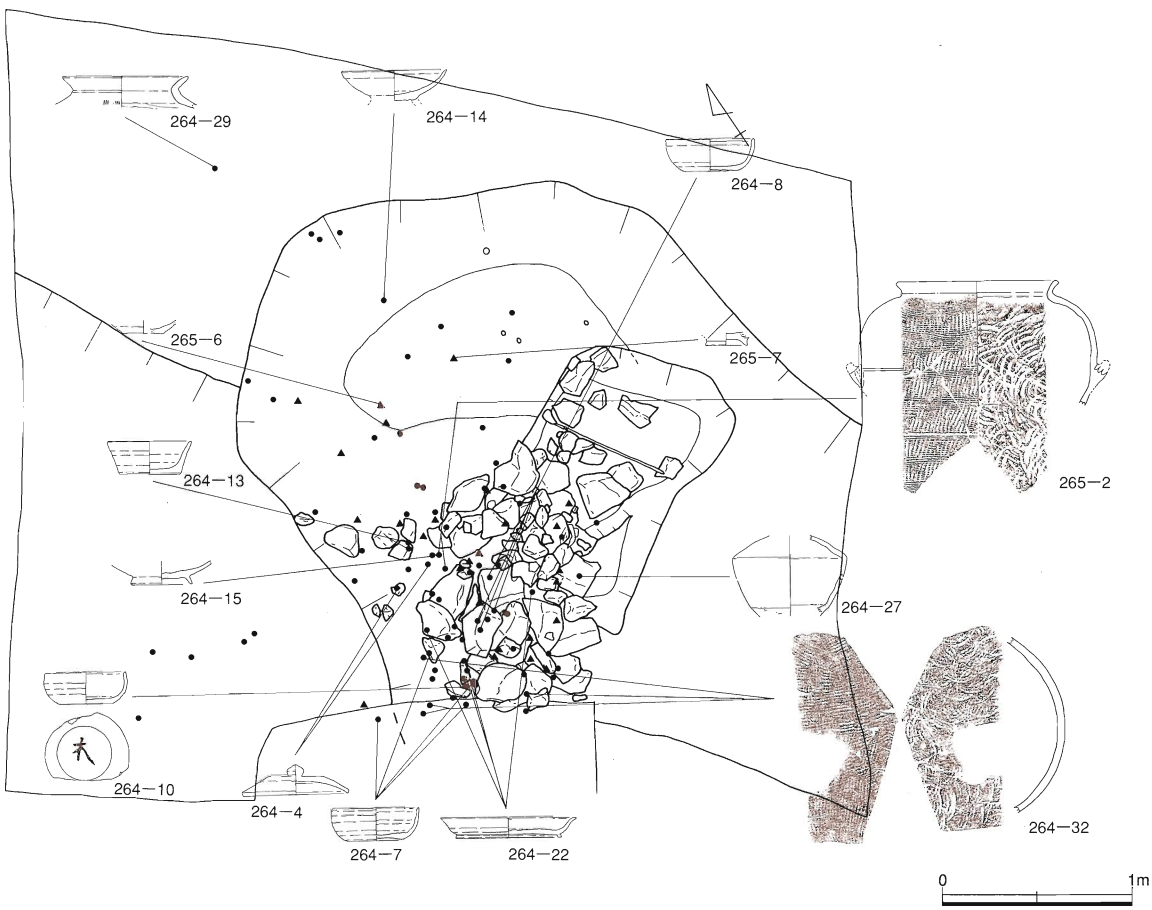
に沈線が入れられたものと、７～10のように丸みを持つものが見られる。これらは８世紀中葉～後半に位置づけられよう。５の底部内面に「×」のヘラ記号が施されている。また、10・11には底部外面に「木」の墨書が見られる。12・13は須恵器埦で口縁部が外傾しながら直線的に立ち上がるものである。12と比べて13の方が体部の立ち上がりの角度が急になっており、焼成も悪い。12が８世紀中葉～９世紀前半、13は９世紀中葉～後半になる。

14～19は高台付埦である。14・15は埦部が丸みを持って内湾するもので、15の高台は高く端部は丸みを持っている。これらは７世紀中葉～８世紀前葉のものである。16～19は口縁部が直線的に立ち上がるものである。18・19は高台が底部外縁に貼り付けられている。17の高台は低くつぶれたような形をしており、他の遺物と比べて特徴的である。

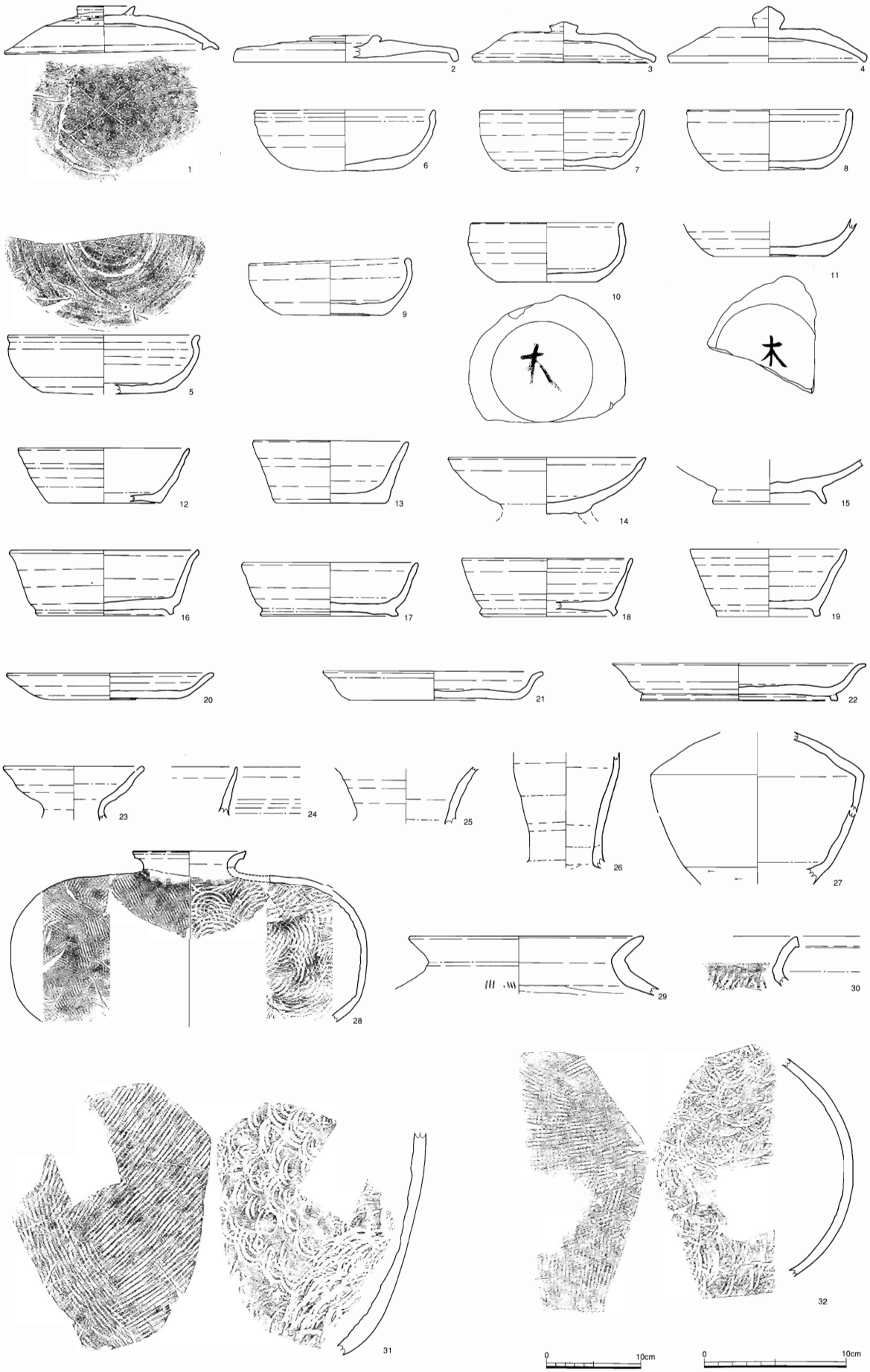
20・21は皿、22は高台付皿で、20は口縁部が直線的に立ち上がるのに対し、21・22は外反しながら立ち上がる。これらは８世紀中葉～９世紀前葉に位置づけられよう。

23～26は須恵器壷の口縁部である。23は口縁部が内湾しており蓋になると思われ、下っても８世紀前葉で収まると思われる。27は壷の胴部片で胴部と肩部の境に鋭い稜を持って屈折する。７世紀の遺物である。

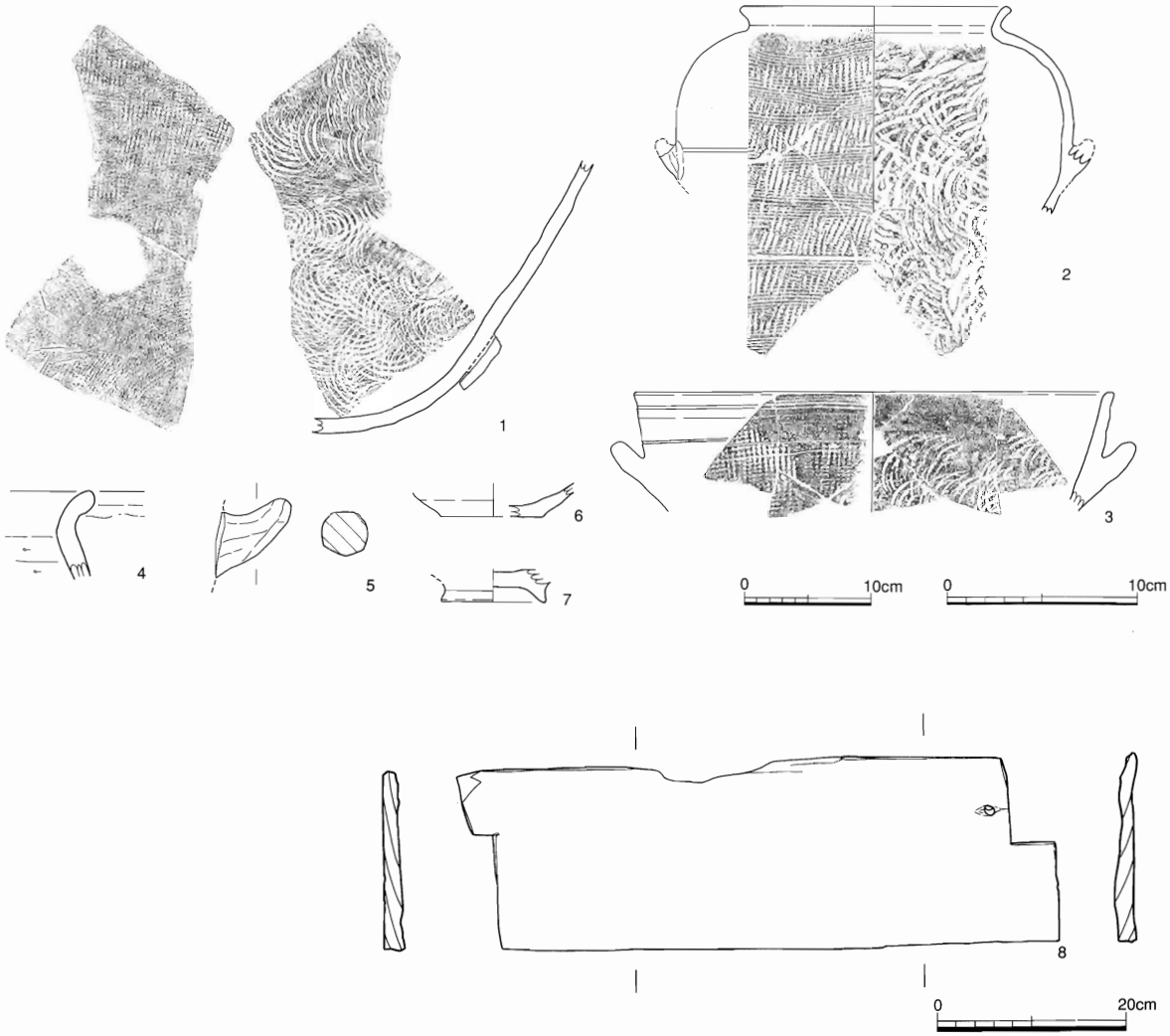
28は横瓶である。直接接合しない２点の破片をもとに復元実測した。29・30は須恵器甕の口縁部片である。31・32、265－１は甕の胴部片で、いずれも外面は平行タタキ、内面に同心円の当て具痕が見られる。265－１の底部付近には輪状つまみを持つ須恵器蓋の破片が熔着していたが、これは焼き台に利用された可能性がある。２は須恵器の把手付の甕、３は把手付の大型鉢である。



第263図　塚山古墳２トレンチＳＸ01遺物出土状況図（Ｓ＝1／40）



第264図　塚山古墳2トレンチSX01周辺出土遺物実測図（1）（1～27，29，30：S＝1／4、28，31，32：S＝1／6）



第265図　塚山古墳２トレンチＳＸ01周辺出土遺物実測図（2）（1～3：Ｓ＝1／6、4～7：Ｓ＝1／4、8：Ｓ＝1／8）

４は土師器甕、５は甑把手である。

６・７は土師器埦の底部片である。７には高台が付くが、端部は欠損しているかもしれない。これらは小片のためその時期は明確に言えないが、10世紀以降に下るものである。

これらの遺物から、遺構の年代は、最も古い時期は７世紀中葉までさかのぼり、新しい時期になると10世紀以降まで下ると考えられる。砂礫層には８～９世紀代の須恵器片が多く含まれているが、これらはこの遺構が何度か改修された時期を示すものであろう。そして、土師器埦の265－６・７がＳＸ01の黒色腐植土中から出土しているが、これらがこの遺構の最終的な埋没時期を表しているもので、ＳＸ01はかなり長期間にわたって利用された遺構であったと考えられる。なお、多様な器種の遺物が出土しており、中には墨書土器が出土していることから、単なる貯水・取水施設ではなく祭祀的な意味合いも持つ場であった可能性もある。

４．主体部の調査

主体部の構造

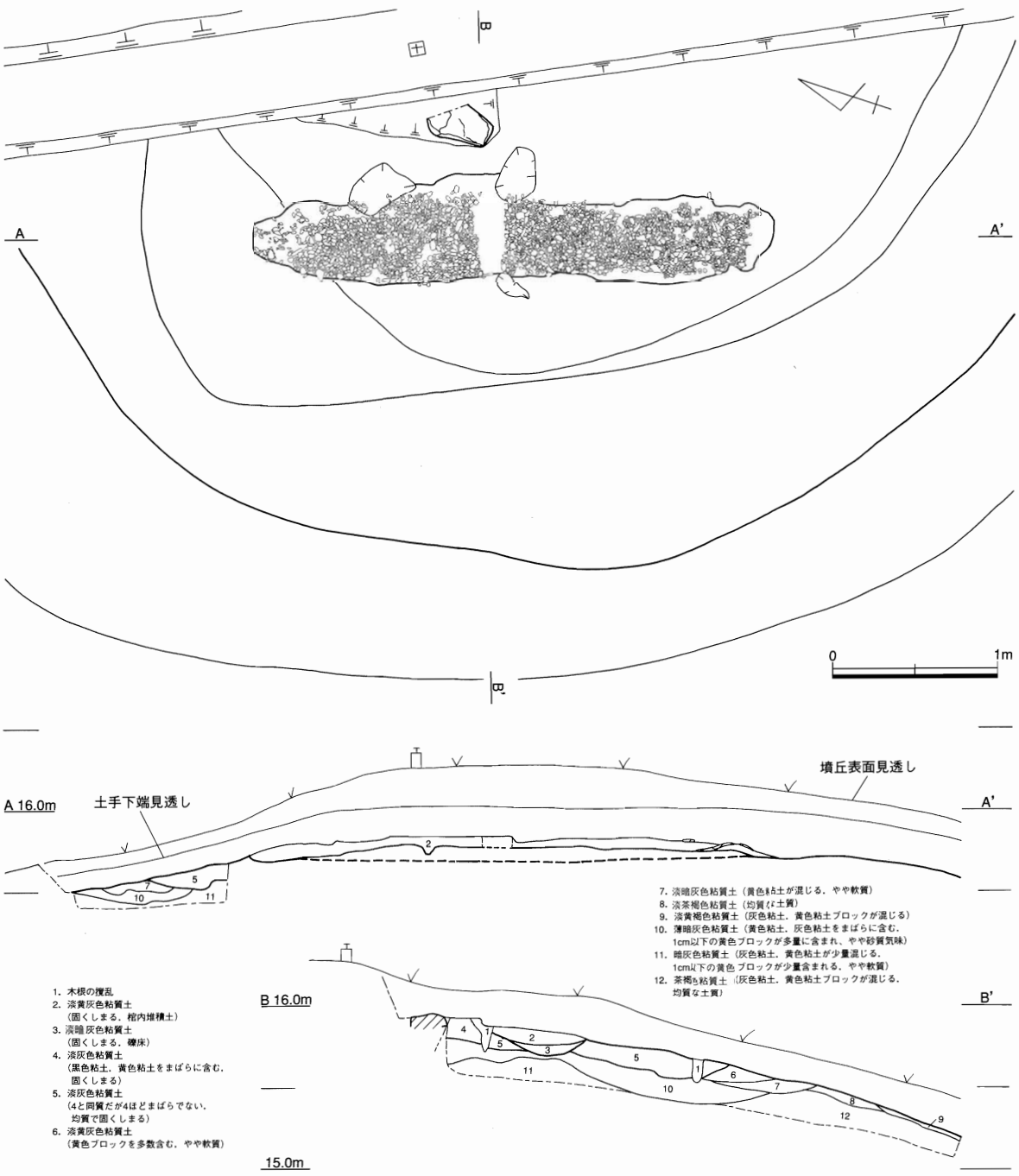
発見の経緯でも述べたように地表下約30㎝で副葬品と礫床の一部が露出したことから、盛土はかなり流失している。また、耕作などの攪乱が主体部の各所に及んでおり、本来の形状は不明である。従って、規模は現状での実測値で、構造等は攪乱の有無に留意した上である程度復元的述べる。

主体部は、想定される古墳の中心（第266図の杭印）からやや西にずれて位置する。鏡を置く北

側を頭側とすると頭位はN－17°－Wで、主体部主軸は東の造り出しに直交し、墳丘南北主軸に対し8°東に偏る。掘形は長さ3.15m、幅は最大0.66m、深さは最大20cmで、平面形は、北端がやや不整形だが、棺底の墓壙ラインにほぼ相当している。横断面の截ち割りで見る限り墓壙底は緩やかなU字状に掘り込まれており、箱形木棺のように側板を立てるような溝状の掘り込みはなかった。

棺床は壙底に黒色の円礫を厚さ5cm程度敷き詰めた礫床である。円礫の大きさは1～8cmだが大半は2，3cmの小粒なものであり、白色のものが数個混じるほかはほぼ黒1色で、均質でまとまった印象を受ける。礫敷の範囲は長さ3.14mで南側で掘形ラインとの間に空白が認められるが、本来は副葬された短甲の押付板の南側にも礫床が続いていたものと思われる。

礫床下部に特別な施設はなく、後述する灰白色の盛土を浅く掘り込んだ中に礫を敷きつめた様子が見られた。



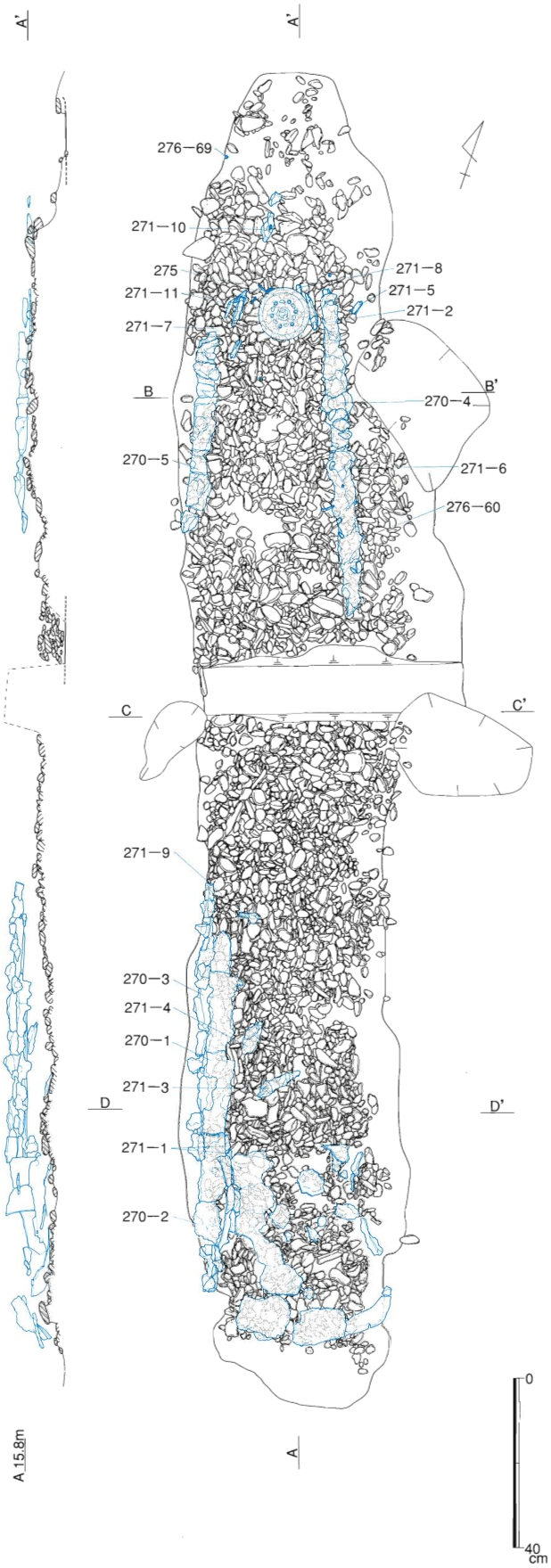
第266図　塚山古墳主体部実測図（S＝1／40）

礫床上面の形状は北と南でかなり異なる。まず北側を見ると棺中央に位置すると思われる鏡周辺とその西側の剣付近でほぼ平坦であった。それに比べ主体部南半は礫床中央付近が左右両側辺側に比べ若干窪み、礫床上面に凹凸があり、面をなしていない。次に主体部中軸線上で礫床の厚さを見ると、北側では厚さ５㎝程度なのに対し南側では２㎝と薄い場所もある。南側では刀子が浮いた状態で出土していることから、耕作など後世の攪乱が及んでいるものと思われる。後述するように短甲の後胴と前胴の大半が失われていることから、攪乱はこの部分にも及んでいることが窺える。従って礫床の本来の形状は断面Ｂ－Ｂ’、Ｃ－Ｃ’（同）に見られるように平坦か僅かに窪む程度だったと思われる。

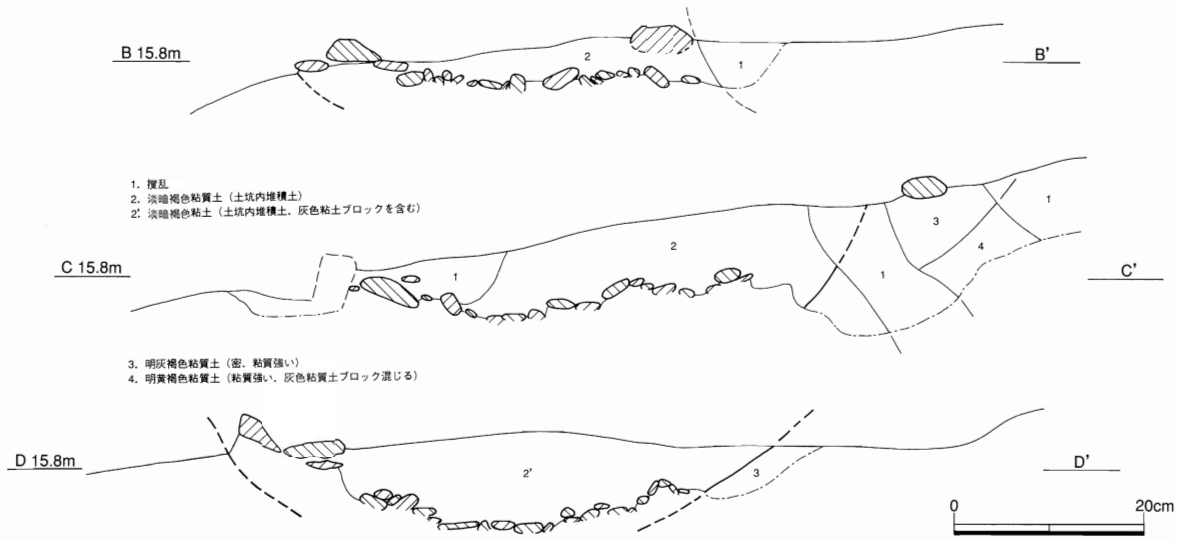
棺の両側辺での礫床の状況は攪乱等により十分把握できないが、主体部中央付近の東側では礫床面が僅かに湾曲して立ち上がることから、棺の両側面の形状は丸みを帯びていたと考えられる。以上から棺は、側板を立てる組み合わせの箱形ではなく外底が平たい舟形と想定できる。

次に礫床の南北の高さを比較すると、短甲前胴が礫床に密着するように出土しているのでほぼ原位置と認められるので、鏡付近との高低差は６㎝で頭位側を僅かに高くしている。

主体部発見の経緯から、調査を遺物の保護と主体部構造の最小限の把握という緊急避難的な措置に限定したため、主体部と墳丘構造を関連づけて把握することには自ずと限界があったが、最小限度の截ち割りを主体部横断面と北側の盛土縦断面で行った（第266図）。墳丘の表面や道で削られた墳裾で観察する限り墳丘は主に黄褐色と暗茶褐色～暗灰色の粘質土で構築されている。主体部の截ち割りでも２種類の盛土を確認したが礫床の直接のベースとなった盛土は灰白色粘質土のブロッ



第267図　塚山古墳主体部遺物出土状況図（S＝1／16）



第268図　塚山古墳主体部横断面図（S＝1／8）

クを多く含む土層（第266図4，5層）で、明らかに異なる土が用いられていた。この土の平面的な分布を見ると、北西で矩形に曲がりほぼ同じ標高から盛土されているので、墳頂平坦面を意識して置かれた可能性がある。墳丘東側ではこの土層は確認できず、平面的な観察の限りでは土層がかなり複雑に入り組み、大きく攪乱されていることが予想された。

埋土中から赤色顔料が僅かに出土している。攪乱を受けていない北側でもその出土傾向は散漫かつ微量であり、礫床面では検出できなかったため棺の内外で少量使用された程度と思われる。

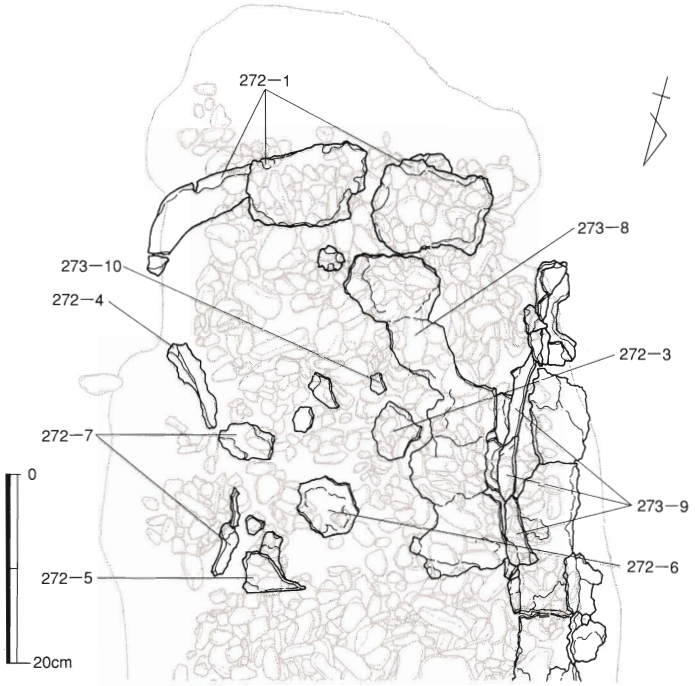
副葬品出土状況

副葬品は鉄刀1本、鉄剣4本、鹿角装刀子数本、三角板鋲留短甲1領、不明鉄器数片のほか青銅鏡1面、ガラス製小玉3点、滑石製臼玉94点以上（破片を含む）が出土した。礫床上から出土しており、全て棺内の副葬品と考えられる。副葬品は主体部中央の空間を挟んで南北に分けて配置されており、南北のまとまりごとに出土状況を述べる。

北側の1群では掘形北端から南へ0.45mの主体部主軸上に鏡が1面あり、この東西に切先を南に向けて剣が1本ずつ置かれている。刀子は必ずしも原位置とは言えないものもあるが、鏡と両剣の柄に近い位置から出土している（第271図2、5、8）。鏡は鏡背面を上に、紐口を南北に向けて置かれている。銅イオンの影響によるものか、鏡は他の棺内埋土とは異なる黒色の土に覆われていた。後述するように紐口で繊維質が確認されているが、鏡全体を布にくるんだ痕跡は認められなかった。鏡面側で微量の炭を確認したが、これが鏡を納めた木箱の痕跡であるか棺材の痕跡であるか不明である。西側の鉄剣4（第270図5）は柄を欠くが、東側の鉄剣3（同4）は鏡と柄がほぼ隣り合うように置かれている。東西の剣は一見すると棺の両側辺に沿っているように見えるが、実際には両剣は平行ではなく南に向け「ハ」字状に僅かに開く。このことから鏡は遺体の頭部北側に置かれ2本の剣は頭部から両肩を挟むように置かれていたものと思われる。このように被葬者の頭部周辺を囲うように副葬品を配置するしており、次に述べる主体部南半南側とは副葬品の扱い方に明瞭な差を看取できる。

南側では足下側に短甲を置き、これに接して鉄刀1本と鉄剣2本が切先を頭側に向け置かれていた。短甲は主体部の南端で検出されたが、後世の攪乱により左前胴から後胴にかけて大半が失われており、残存状況は極めて悪い。右前胴から脇部にかけての部位は礫床の直上から検出されている。

これらはほぼ原位置を留めているとみられ、本来は押付板側を南に向け、前胴を下にした横倒しの状態で置かれていたと考えられる。短甲の西側に隙間なく接して置かれた３本の刀剣は、上下３段に重ねて置かれている。最下段に２本の剣が平置きされていて、下の鉄剣２（第270図２）と鞘入の上の鉄剣１（同１）とは切先がずれて重なる。この上に鉄刀（同３）が刃を下に向けて立てて置かれていた。南側から出土した刀子のうち原位置を保っているものは礫床中央付近で出土した鹿角装刀子（第271図３）と最下段の剣の下から出土したもの（同１）である。このように南側では、棺の南端に短甲を納め、さらに刀剣３本を短甲と棺の東側辺との隙間に押し込むような形で副葬されている。



第269図　塚山古墳主体部短甲出土状況図（S＝1／8）

玉類はガラス製小玉３点，滑石製臼玉94点（含破片）が出土した。出土した玉のほとんどは排土の洗浄過程で確認したため厳密な出土位置は不明だが、特定できた13点については全て主体部北側の鉄剣周辺で出土している。縦横断のセクションライン（第276図）で区切られた範囲ごとの出土数を示すと以下のとおりである。北端からＢラインまでの東が９個で西が39個（含ガラス小玉１）、Ｂ・Ｃライン間の東が７個で西が11個、Ｃ・Ｄライン間の東が２個（含ガラス小玉１）で西が３個、Ｄラインから南端までの東が14個で西が２個である。攪乱による移動も考慮しなければならないが大まかに傾向を窺うとすれば、被葬者の下半身に相当すると思われる範囲では数少なく、頭に近い北側と短甲周辺の南端に集中することがわかる。北端西側の39個は全体の４割に相当する数で、このあたりに連をなして副葬したことがわかる。ただし、鉄剣３，４付近からも相当数出土していることから被葬者の頭部付近を意識した副葬状況と言えよう。一方短甲付近にも計16個があり、副葬位置を特定できないながらおそらく足下に置かれたものであろう。

出土遺物[1)]

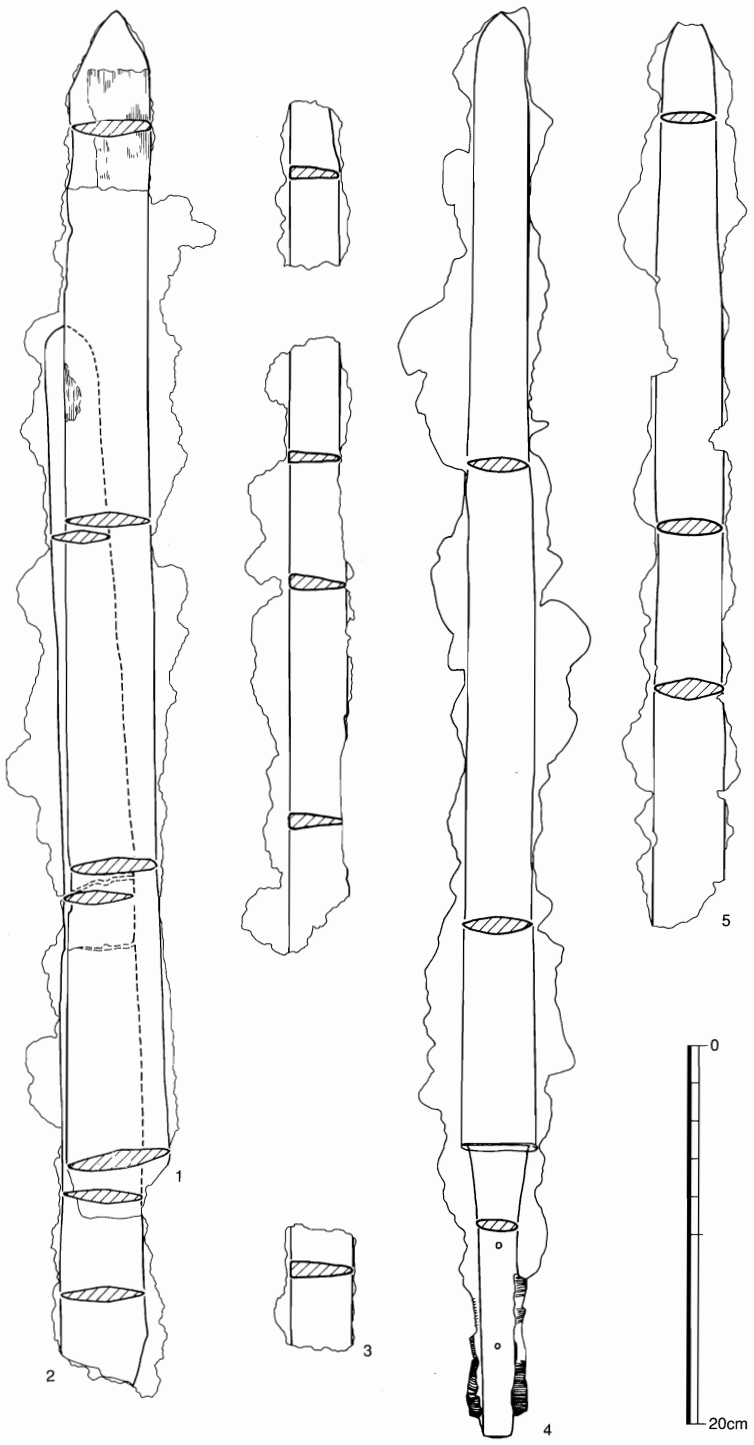
１）鉄剣・鉄刀（第270図　図版172）

鉄剣１（第270図１）は茎が欠損するが、現状で長さ63.3㎝、最大幅5.3㎝の比較的大型の剣である。断面は杏仁形で、切先は比較的鋭い角度で屈曲する。刃部に木質が付着する。鉄剣２（同２）は鉄剣１の裏面に固着していた剣で同様に茎が欠損する。現状で長さ54.1㎝、最大幅4.5㎝で、鉄剣１より一回り小型である。断面は杏仁形で、切先は比較的緩やかな角度で屈曲する形態である。刃部に木質が付着する。鉄刀（同３）は鉄剣１に接して刃部を立てた状態で検出されたものである。切先と茎が欠損し、刀身も検出時には５片に分割しており、うち２片は倒れて鉄剣１に固着した状態であった。現状で推測される全長は65.1㎝、最大幅3.2㎝である。刀身はほぼ直線状を呈するとみられ、峰の部分の幅は0.8㎝を測る。木質が付着する。鉄剣３（同４）は、唯一全形のわかる剣

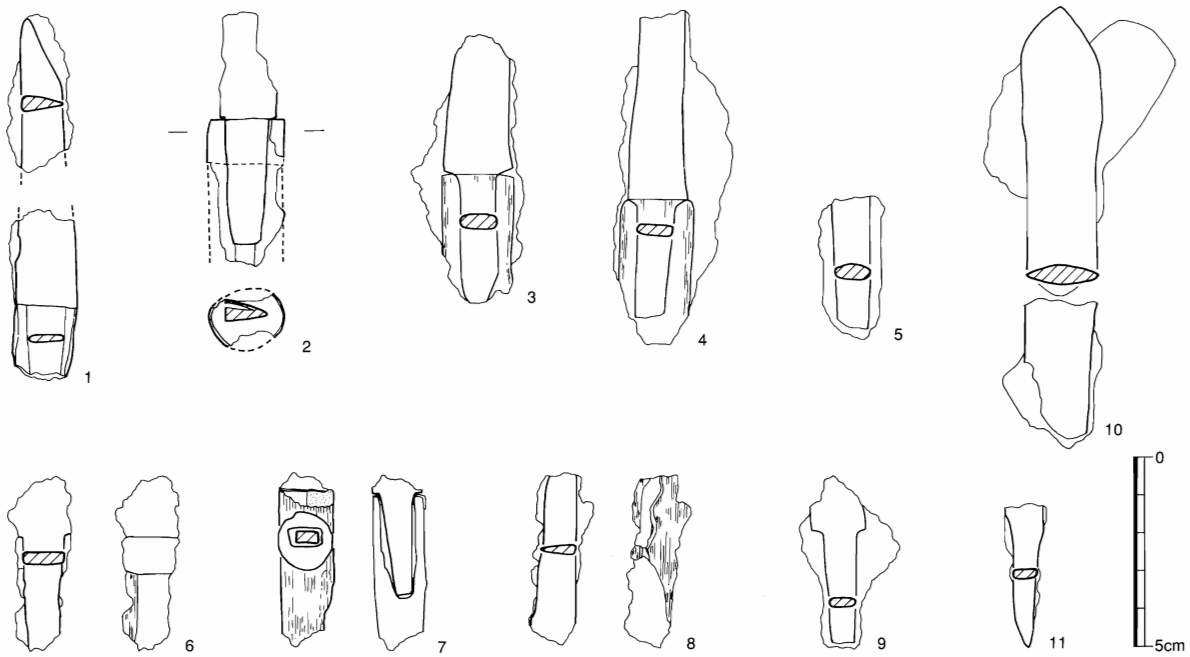
である。長さは75.0cm、刃部長は1.6cm、茎は15.5cmである。刃部断面は杏仁形で、両関は浅く切れ込む。茎は僅かに湾曲するがほぼ直線的に茎尻に向かって伸びる。２個の目釘孔は茎にほぼ均等に配置されている。刃部に木質が付着し、柄縁と柄間に拵えの一部が残っている。柄間には布状のものが巻かれていた[2]。鉄剣４（同５）は切先と刃部から茎を欠損する。残存長47.5cm、最大幅1.8cmで、鉄剣３とほぼ同大であろう。刃部に木質が付着し、断面は杏仁形で切先は細い。

２）刀子（第271図１～９　図版173）

１は出土状況から同一個体とみられるものであるが、接合はできなかった。残存長は9.5cmで刃部元幅は1.6cmである。両関は直角に曲がり、茎は端部を欠損するが断面は扁平な長方形で、鹿角が装着される。２は刃部上半を欠損し、残存長は6.7cm、刃部元幅は1.4cm、茎長は3.3cmである。茎断面は関側で楔形である。両関は浅く直角に切れ込む。柄は鹿角製で柄縁には鹿角に被るように黒色のはばき状のものが認められる。３、４は刃部先端と茎部端部を欠損するもので、３は残存長6.5cm、刃部元幅1.8cm、４は残存長8.1cm、刃部元幅1.5cm。いずれも両関でやや斜角を呈する。茎部は断面が平たい長方形を呈し、鹿角が装着される。５は鹿角を装着した茎で、関を欠く。断面は楕円形である。６は茎に鹿角と柄縁に幅１cmのはばき状のものが残る。両関は浅く直角に曲がる。茎断面は扁平な方形である。７も茎を断面円形の鹿角の柄に装着したもので、柄縁にはばき状のものが僅かに残る。両関は直角に浅く曲がる。茎長は2.7cmで断面は方形である。８は刃部の破片で外面に鞘らしき痕跡が残る。９は茎部と刀部の一部を残す。刃部元幅は1.4cmで両関はやや斜角を呈する。茎には鹿角や木質の痕跡はみられなかった。



第270図　塚山古墳主体部出土遺物実測図（1）（S＝1／4）



第271図　塚山古墳主体部出土遺物実測図（2）（S＝1／2）

3）槍（第271図10　図版174）

茎を欠くが、柄縁が直線的になると思われる呑口式の槍である。柄の断面が杏仁形で柄縁は漆塗りで仕上げる。攪乱を受けており、本来の出土位置は特定できないが、恐らく棺外に副葬されたのであろう。

4）短甲[3]（第272～274図　図版175、176）

【各部位の所見】破片は小片を含めて20点あまりを数えたが、部位が特定できた10点について図化した。第272図1は後胴押付板である。出土時には小片に破砕していたが、上端縁辺部を長さ約49cmに渡って接合できた。縁辺には径4㎜前後の覆輪孔が4㎜間隔で穿たれ、覆輪の革組が遺存している。図面では模式的に一部を復元した。なお、覆輪には黒漆膜が付着していた。中央下辺部には三角板の地板端部が3枚重なっており、径5㎜大の鉄鋲で留められている。2は長さ6.2cmの小片で部位の特定は難しいが、縁辺部が若干弧状を呈すること、縁部に覆輪孔がみられること、断面がゆるやかに湾曲することなどから左前胴押付板の破片とみられる。3も小片であるが、縁辺部が直線状を呈すること、断面がほとんど湾曲しないことから左前胴押付板の正面上端の破片とみられる。縁辺部には覆輪の革組が遺存し、黒漆膜が付着する[4]。4は2点の破片が上下に接合したもので、後胴左脇部である。左側には幅3cmの蝶番板が重なるが、下側破片のものは土圧などのためか折れ曲がってしまっている。また、押付板の裏面には下縁に沿って地板の重ね痕が残る。5・7は直線的な縁辺部に覆輪孔が穿たれ断面は強く外反し、側辺に帯状の縦方向の板が重なる。覆輪孔が縦方向の板にも及ぶことから、この縦方向の板は引合板ではなく蝶番板と判断され、5は左前胴脇部の裾、7は後胴左脇部の裾と想定される。覆輪孔は蝶番板を裾板に重ねた後、2枚同時に穿たれている。6は鉄板が4枚重なった破片である。中央は帯金であり、側辺に帯状の縦方向の板が重なることから、部位は竪上第2段～長側第1段あるいは長側第1段～第3段と想定される。前者の場合には縦方向の板は引合板となるが、後者の場合には引合板か蝶番板なのか判別がつかない。

第273図8は礫床の直上で検出された右前胴の脇部である。押付板は脇部から正面付近まで残存しており、それをもとに前胴正面部の高さを復元すると33.5cmとなる。脇部には蝶番板が重なり、

蝶番板には長方形2鋲の蝶番金具が2ヶ所につく。なお、比較的大きな破片である長側第3段の地板には、後胴にみられる三角板の痕跡を確認できない。9は後胴右脇部の破片である。押付板から裾板まで残存しており、脇部の高さは20.3cmを測る。長側第3段の地板は、左側部が斜行することから三角板とみられる。右側部には蝶番板が重なり、8と同様に長方形2鋲の蝶番金具がつく。なお、蝶番板の右側部は破損し折れ曲がっているが、先端に別の鉄板が錆着している。これは、8の蝶番板の破片とみられる。10は蝶番金具であり、8・9に付属したものと同形態の長方形2鋲である。右脇部の4点は蝶番板に鋲留めされた状態で遺存しているので、この蝶番金具は左脇部のどこかに配置されていたものと考えられる。

【展開図】ほぼ部位を特定できた破片10点を合成した短甲の展開模式図を第274図に示す[5]。左前胴と後胴の押付板より下方はほどんど欠失し、おもに押付板から右脇部にかけてのみ遺存していたことが一目瞭然である。なお、後胴の両脇部に長側第2段の帯金が残存しているが、両者の位置を揃えると、脇部の高さが左右で異なってしまう。本来湾曲している部位なので、平置きしてはめ込むとズレが生じてしまうのかもしれない。6については、縦方向の板を蝶番板と想定して左前胴脇部の長側第1段～第3段に置いたが、天地逆転して前胴正面に移行しても違和感ないものである。10の蝶番金具は左脇部のどこに配置してもよいものである。図では左前胴脇部の上方に置いたが、7のこれに対応する部位には蝶番金具の痕跡を現状では確認できなかった。

【形態的諸属性】

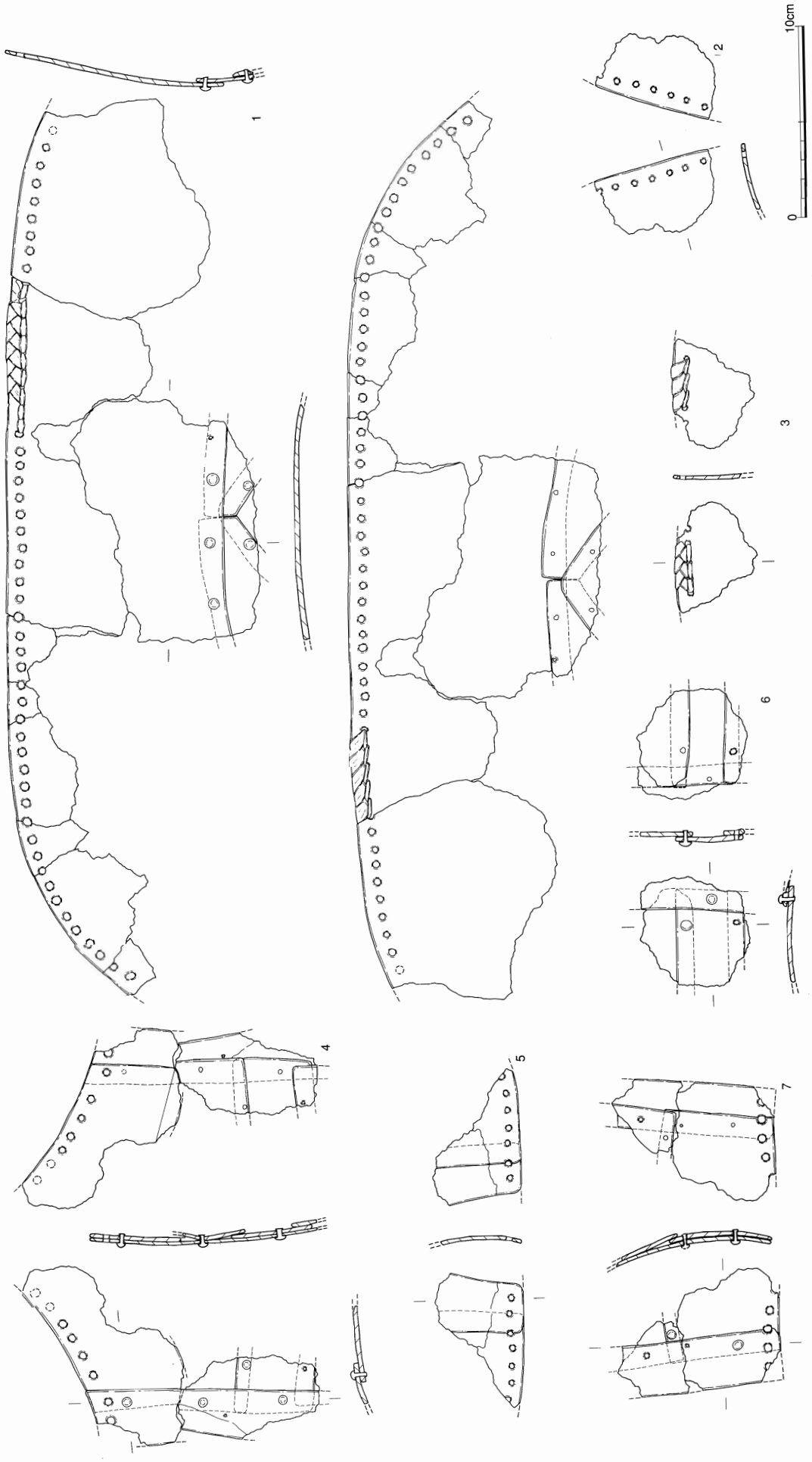
段構成　欠部分が多く、前胴・後胴ともに竪上第3段帯金とみられる破片を確認できないため、全体の段構成の確定はできない。しかし、後胴については、遺存している竪上第2段地板、長側第1段帯金、長側第2段地板の鉄板が通有の7段構成の場合と同様の法量・形状をもつと判断されること、後胴が7段以下の構成をとる例はきわめて稀なこと（管見では福岡県永浦4号墳（アサヒグラフ編集部1999）の1例のみ）から、7段構成であると想定して大過ないと思われる。一方、前胴については、竪上第3段地板をもたずに6段構成をとる横矧板鋲留短甲が10例以上あること、本例の遺存部分において観察される鉄板が6段構成でも7段構成でも矛盾のない法量・形状をもつことから、6段構成の可能性も考慮しておく必要がある。7段構成の可能性を高くみつもりつつ、断定は差し控えておくのが穏当かと思われる。

胴開閉　両脇開閉で、左右とも前胴・後胴の両方に蝶番板をもつ。すなわち、全体で合計4枚の蝶番板をもつ。蝶番金具は長方形2鋲で、蝶番金具としては最も出土例の多いものである。それぞれの蝶番板の上下2ヶ所ずつ、合計8個が装備されていたと思われるが、うち5個のみが遺存している。

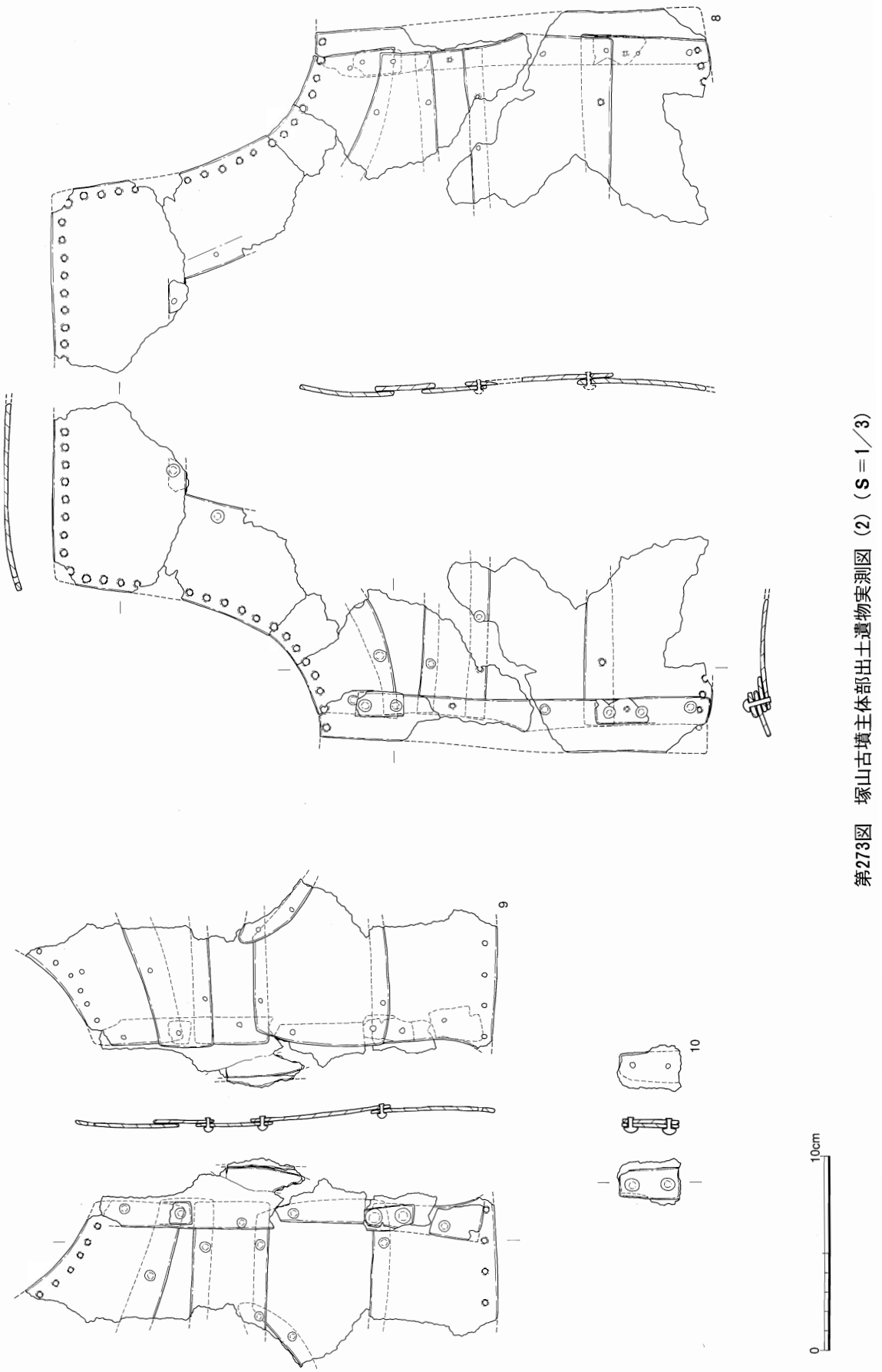
地板形式　後胴には三角板が使用されたことが、竪上第2段中央上部と長側第3段右脇部の地板破片からわかる。前胴については、現状で三角板の存在を確認できないこと、とくに比較的大きな破片である右前胴の長側第3段において三角板が使用された形跡を確認できないことから、横矧板形式であった可能性もある。したがって、三角板鋲留短甲であるか三角板横矧板併用鋲留短甲であるかは確定できない。

覆輪　高橋工氏による分類の革組Ⅲ技法に相当する（高橋1991）。

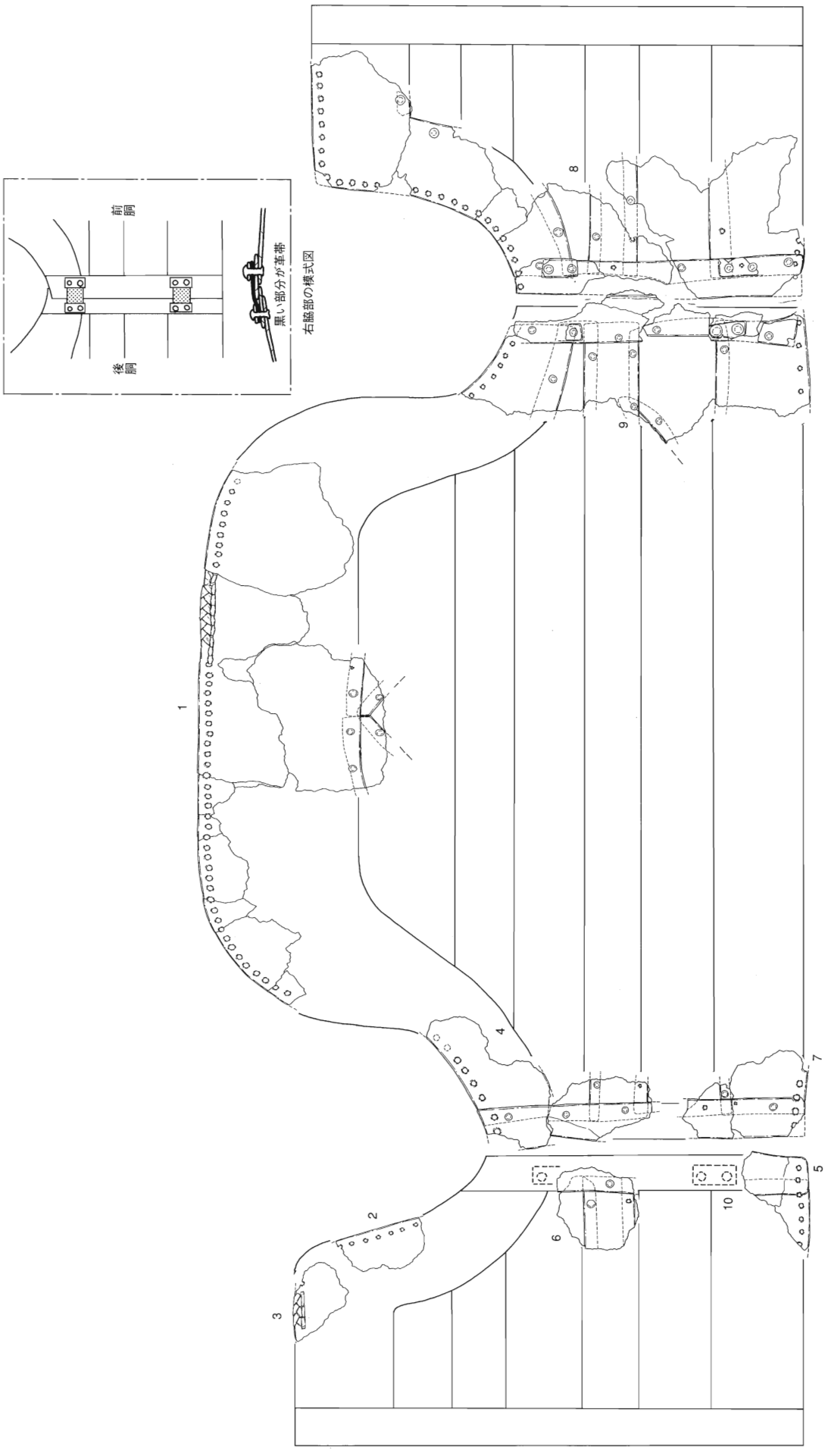
【編年的位置】鋲留短甲の編年において着目されている要素のうち最も比重の高いものは、①鋲頭径と②鋲留数である（吉村1988・滝沢1991）。鋲頭径が大きく、鋲留数の少ないものほど、新相を示すことが指摘されている。①については、本例はおおむね5㎜以上を測ることから大型鋲の範疇



第272図　塚山古墳主体部出土遺物実測図（3）（S＝1／3）



第273図　塚山古墳主体部出土遺物実測図（2）（S＝1／3）



第274図　塚山古墳主体部出土短甲展開横式図（S＝1／2）

でとらえることができる。②については後胴竪上第3段の帯金における鋲留数が指標とされているが、本例は該当部分がまったく遺存していないため、この要素について検討することはできない。

胴開閉・蝶番金具・覆輪などのほかの要素も勘案して滝沢誠氏の型式分類に照らし合わせると、Ⅱａ式あるいはⅡｂ式に相当することがわかる（滝沢1991）。両型式のいずれかに確定できないのは、鋲留数が不明なことによる。滝沢氏によれば、Ⅱａ式とⅡｂ式の絶対年代は5世紀の第3四半期頃との理解が示されている。本例については、鉄頭径が5㎜を大きく超えるものではないことから、その年代幅の中でもやや古い段階の所産と推定しておきたい。

【類　例】本例が三角板横矧板併用鋲留短甲であった場合には、管見の限りでは9例目の出土ということになる。表3に、ほかの8例のおもな属性を示す。地板形式以外の属性を含め、本例と一致する例はみあたらない。

【県内出土の短甲】最後に県内で出土した短甲を表4に集成しておく。塚山古墳出土例は8例目とみられる。この他、甲冑類としては、斐川町・軍原古墳（大谷1994・1996）から小札が出土しており、同町・小丸子山古墳（杉谷・持田1948）からも冑が出土したとの伝承がある。

表3　三角板横矧板併用鋲留短甲の出土例

古　墳　名	府県	(滝沢1991)による形式分類	段 前・後	開閉	覆輪 上縁・下縁	蝶番板 前・後	蝶番金具	文　献
八重原1号	千葉	Ⅱａ	7	右	革組・鉄包	○・×	釣壺円形3鋲	杉山・田中1989
新井原1号	長野	Ⅱａ	7	右	革組	○・×	?	岩崎・松尾1988注6）
宇治二子山南	京都	Ⅱａ／ｂ	7	右	鉄包	○・×	長方形2鋲	宇治市1991
西小山	大阪	Ⅰａ／ｂ	5・7	左右	革包	○・?	長方形2鋲	梅原1932
今井1号	奈良	－	7	?	?	?	?	奈良県1984
後出3号	奈良	－	7	右	革包	○・×	方形4鋲	奈良県1986 注6）
仙人塚	岡山	（Ⅱｂ）	7	右	?	?・×	長方形2鋲	沼田1901
島内3号地下式横穴	宮崎	Ⅱａ	7	×	革包	－	－	えびの市2001

表4　島根県内の短甲出土例

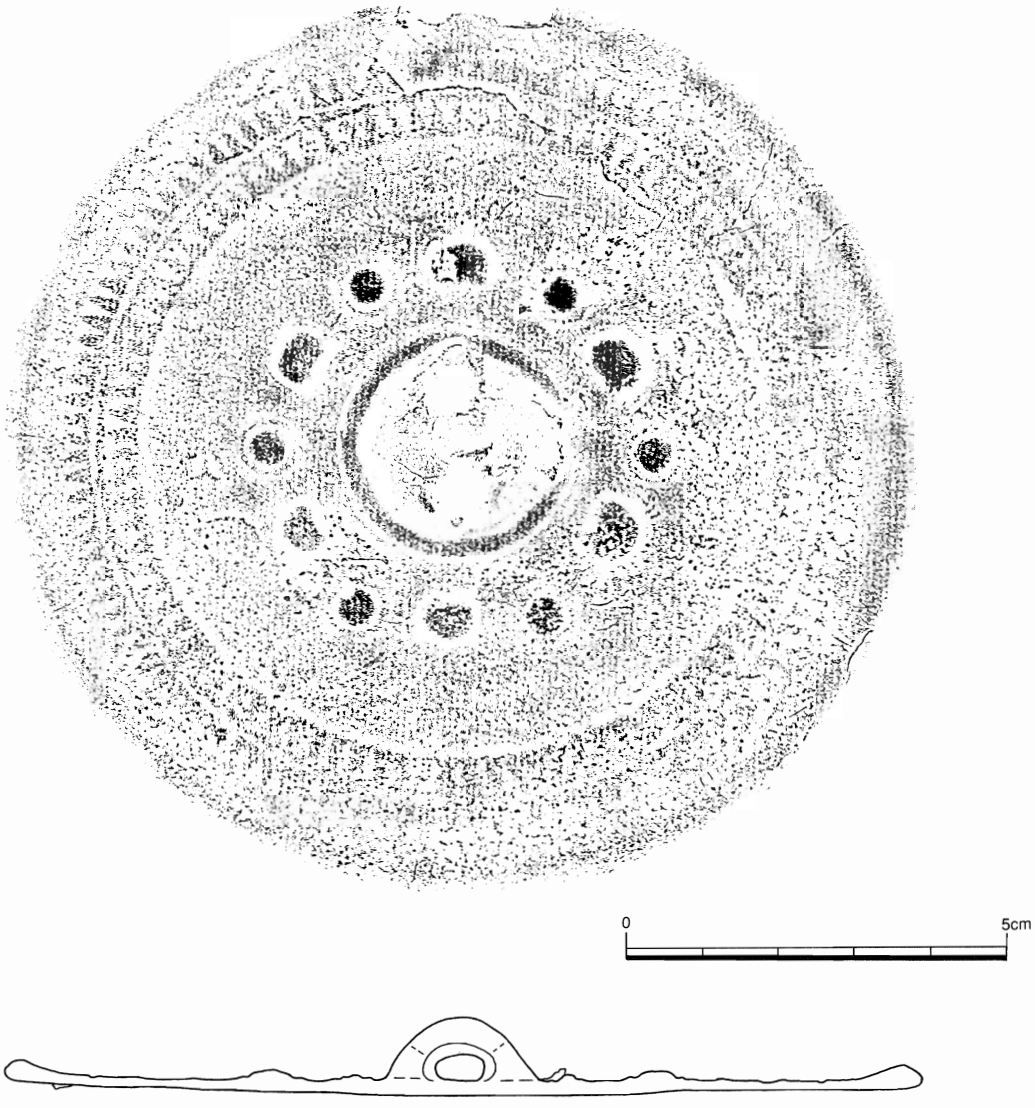
古　墳　名	市町村	短甲の型式	古墳の形態・規模	埋葬施設	古墳の時期	文　献
中山B1号墳	石見町	方形板革綴短甲	前方後方墳　全長22m	箱式石棺	前期	石見町1977
丹花庵古墳	松江市	三角板革綴短甲	方墳　一辺49m	長持形石棺	中期後半（～TK208）	古代文化C1998
大塚荒神古墳	松江市	革綴短甲	方墳　一辺14m	割竹形石棺	中期	山本1966
玉造築山古墳	玉湯町	横矧板鋲留短甲	円墳　径16m	舟形石棺	中期後葉	山本1966
毘売塚古墳	安来市	革綴短甲（三角板か）	前方後円墳　全長41.8m	舟形石棺	中期中葉	大谷・清野1996
月坂放レ山5号墳	安来市	横矧板鋲留短甲	方墳　一辺14m	木棺	中期後半	注7）
弥陀が谷古墳	美保関町	三角板鋲留短甲	消滅により不明			松本1986
塚山古墳	松江市	三角板鋲留短甲（横矧板併用か）	方墳　一辺33m	礫床・舟形木棺か	中期後半（TK208）	

5）鏡[8]（第275図　図版177,176）

出土した青銅鏡は仿製の六神頭鏡である。直径は12.1cm、厚さは内区が1.8～2.0㎜、外区が1.5㎜で重量（保存処理後）は97.81ｇである。調査時に外縁端部を僅かに欠損したものの、内区から外区にかけて亀裂が生じていたほかは完形で出土している。全体に磨滅が著しく文様の細部などは微かにそれと知れる程度であり、副葬に至るまで長期間保有されたことが予測される。

周縁の幅は狭く高さも低く丸みを帯びているが、本来は稜線のはっきりした縁を持っていたと考

えられる。外区文様は突線を挟んで2重に鋸歯文が廻るもので森下章司氏の分類する突線付鋸鋸文にあたる（森下1991）。櫛歯文帯はその内側を区切る段があるため辛うじて識別できるが、文様はほとんど視認できない。櫛歯文帯と内区の間には二重の突線で挟まれた区画があるが観察不能である。内区文様は神像の頭部を胴部と切り離して6乳の間に各1個配した図像で、神頭は平坦に表現した頭頂部を紐に向け顔を正面に向けている。目鼻口の表現は磨滅により確認できない。神頭の幅は7.2～8.7㎜、長さ5.9～6.2㎜、高さ（鏡表面から計測。以下同）3～3.5㎜である。胴部は痕跡的に縦方向の2本線として表現され、顔の左右には翼手状の表現が一部で二重線でなされている。また、頭頂部には冠らしき表現がある。乳座の周りにも放射状に文様が施されており、神頭との間を隙間無く埋めているものと思われる。鈕は直径2.1㎝、高さ1.01㎝で鈕孔は半円形で直径は6～9㎜である。鈕座は直径3.12㎝で有節重弧文を施すと思われるが確認できない。乳は6個を配し、直径5.1㎜、高さ3～3.5㎜である。乳座は円形で直径8㎜である。

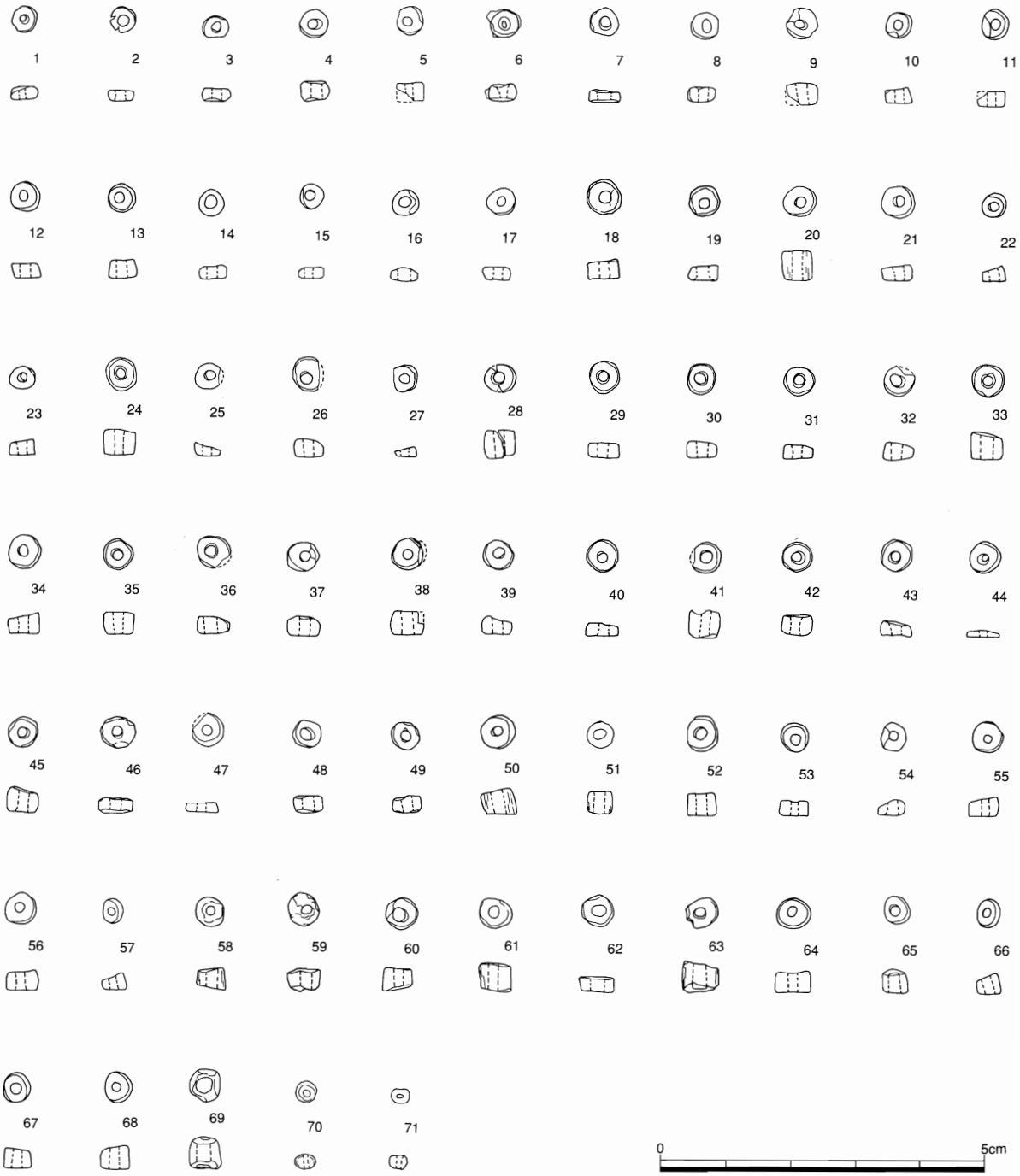


第275図　塚山古墳主体部出土遺物実測図（5）（S＝1／1）

鏡の表背両面で鏡を包んだ布の痕跡は認められなかったが、鈕孔に繊維質が固着していていることから、副葬当時鈕孔に紐が通してあったようである（図版178）。鏡表面の大半は縮緬状の錆に覆われているが、部分的に研磨痕が認められる。

内区文様の特徴からこの鏡は森下氏の神頭鏡系に属し、神像表現の省略具合から同型式の組列で初期の段階に位置づけられ、製作年代は4世紀中頃と考えられている。同種の図像を持つ鏡は愛知・岐阜両県と福岡、佐賀、熊本県の北～中部九州地方から比較的まとまって出土しており、近くでは鳥取県の六部山3号墳から出土している。諸例を見ると4世紀後半から5世紀代に副葬されている（荻野1982）。

6）櫛（図版176）



第276図　塚山古墳主体部出土遺物実測図（6）（S＝1／1）

保存処理の過程で確認したもので、竹ひごを結束して中程から折り曲げた、いわゆる彎曲結歯式の縦櫛である。アーチ形の根本が約1㎝ほど残っていた。短甲の破片と共に出土しており、棺の南端付近に副葬したものと思われる。

7）玉類（第276図　図版176）

玉類は滑石製臼玉94点、ガラス製小玉3点が出土している。棺内埋土の掘り下げ過程で目視できたのは全個体数97点のうち13点で、他の84点は棺内埋土の洗浄によってはじめて確認できたものである。ちなみに埋土の採集は手掘りして集めたほか、提供を受けた掃除機を駆使して遺漏を最小限にするよう努めた。しかしながら調査の性格上、礫床を除去してまで埋土の洗浄を行っていないので出土数は副葬された全数ではなく、これに近い数字としておく。

出土した滑石製臼玉のうち図示できたのは68個である（第276図1～68）。硬度が低い上、1個が薄い輪切り状に剥離するものもあり、十分に接合できなかった。大きさを見ると直径4㎜前後のものが多く、長さは3.8～5.4㎜の幅がある。極端に短いものは先に述べた薄い輪切り状剥離をしている。外面に筋状の研磨痕が残るものもある。

ガラス小玉（第276図69～71）は3個でそれぞれ特徴が異なる。主体部北端に近い位置から出土した69の小玉は直径4.7㎜、長さ5.9㎜で他の2個に比べ大きい。色調は淡青色で外面に3，4の平坦な面を持ち、側面形は丸みが無く歪である。70、71の小玉は共に丸みを持つが色調は前者が青紫色で後者は淡青色である。

第3節　まとめ

墳丘及び外周施設　塚山古墳は南北に細長くのびる丘陵の南東端と平地の境に位置する一辺約33mの造り出し付方墳で、墳丘の主軸はN－27°－Wを向く。現状の墳丘高は、2トレンチの墳端で4.5m、5トレンチの墳端で計測すると5.8mになる。古墳時代中期の方墳としては、松江市廟所古墳（53×44m）、丹花庵古墳（約49m）、石屋古墳（42×40m）などに次ぐ墳丘規模であり、出雲地方では№2クラスの首長墳といえる。

墳丘東辺には、墳丘主軸からやや南側にずれた位置に長さ4m、幅12mの造り出し部が付くことが分かった。また、墳丘の南側にも長さ4.5mの造り出し部を持つ可能性が高いと考えられる。このように隣接する2辺に造り出し部が付く例として松江市大庭鶏塚古墳（松江市1979）が挙げられる。なお、松江市石屋古墳（松江市1985）は、反対側の2辺に造り出し部を持つ。塚山古墳の東側造り出し部周辺では形象埴輪や須恵器・土師器が出土しており、古墳祭祀の重要な場であったことが窺われる。なお、東辺の造り出し部南端では周堀底面に段差がつくが、これは墳丘北側と南側との墳端の標高差をここで解消しようとしたためにこのような形に造られたのであろう。

墳丘は下部が周堀の掘り込みに伴う地山の削り出しで、上部の約3.5mが盛土によって築造されている。旧表土の標高は1トレンチで12.5m、2トレンチで12.7m、3トレンチで12.4mとなっており、舌状に張り出した丘陵の先端部の地形を加工したと思われる。墳丘の周囲に平坦な面が見られるが、後世の削平によるもので古墳の本来のテラスとは異なると考えられる。ただし、墳丘高がおよそ5mあることから、旧表土の上に若干盛土をした高さに段築があったと推測される。

周堀内に転落した石が確認でき、墳丘には葺石が施されていたことが分かった。ただし、1トレンチで原位置をとどめた可能性のあるものがまばらに見られる以外には、原位置に残っていると思われるものはない。このことから墳丘の下段の地山削り出し部分には葺石が施されていなかったか、もしくはあったとしても丁寧な葺石はされていなかったと思われる。

墳丘の周囲には堀が巡っており、幅は墳丘の東辺で約6m、西辺で1.6m～4mになると推測される。墳丘北側の周堀の外部には幅4.5mの外堤状の高まりがあり、そのさらに外側で周堀とほぼ平行する溝が検出された。ただし、墳丘の西側・南側では外堤は確認できなかった。なお、外堤の北西隅のP1には木柱が埋設されており、これは古墳に伴う立柱の可能性が考えられる。古墳に木製品・柱穴が伴う例として、奈良県四条古墳、京都府今里車塚古墳では「木の埴輪」というべき木製品が樹立され（西藤1992）、京都府鴨谷東1号墳（立命館大1987）では墳丘周囲を巡る埴輪列の中に一定の間隔を置いて木柱が立てられていた痕跡が確認されている。P1の東側の外堤上に杭列が見られた。これについては古墳に伴うものか分からないが、京都府白米山古墳（加悦町1998・1999）では墳頂部に掘り方を持つ柱穴とともに、杭列と考えられる小さなピットが確認されていることから、あながち古墳と無関係のものとは言い切れないように思われる。

埴輪　円筒埴輪は、口縁端部がコの字形に面取りされており、底部調整は見られない。焼成は土師質のものと須恵質のものの両方あり、黒斑のあるものは見られない。断面台形の凸帯が3本以上あると考えられ、凸帯の高さは1㎝以下と低くなっている。調整は外面タテハケのみのものと、B種ヨコハケの施されたものがあり、中には底部の一番下までヨコハケの施されたものもある。こうした特徴から川西編年（川西1978）Ⅳ期に並行し、藤永編年（藤永1997）3期古相に位置づけられる。

色調が橙褐色のものと白色系のものが見られること、ヘラ記号が「⌒」のものと傘形のものがあること、調整の違いなどから複数の工人（集団）の存在が窺われる。古墳の築造とそれにかかわる埴輪の生産・供給の問題を考える上で興味深い。

形象埴輪は人物埴輪が2個体以上があり、1体は冠帽を被った男性の頭部、もう1体は力士になると思われる。人物埴輪は石屋古墳と並ぶ時期で、県内ではこれらが最古段階と考えられる。このほか家形埴輪と考えられる破片も出土している。

須恵器　無蓋高坏、壷もしくは瓶、器台、甕が造り出し部周辺から出土している。高坏は坏部の稜はシャープで、脚部は4方向に透孔を持つようである。甕の胴部は内面の当て具痕がなで消されかかっている。こうした特徴から陶邑編年（田辺1981）のTK208型式に位置づけられよう。壷は胴部が横方向に大きく張り出すもので、陶邑編年Ⅰ期のうちに収まると思われる。筒形器台は、島根県内では他に松江市金崎1号墳、安来市島田1号墳（島根県1997）、古曽志大谷1号墳（島根県1989）で出土している。筒部と壷部が一体に作られている点、脚部が段を持たずに外反しながら開く点で島田1号墳のものと共通している。

主体部構造　塚山古墳の主体部は礫床の上に舟形と思われる刳り抜きの木棺を置く構造であった。礫床に使われた黒色の円礫は黒色頁岩を主体とする円礫で、日本海に面した鹿島町の海岸に分布すると言われ（鹿島町1985）、同種の礫を主体部に用いた古墳には奥才古墳群（鹿島町）、古曽志善坊1号墳（松江市古曽志町）があり、詳細は不明ながら折廻古墳群（同法吉町）、月廻古墳群（同）なども同様と思われる。これらは箱形棺の底面に礫を敷く構造で両者とも「礫床」と呼ばれているが全く異なる構造である。

刳り抜き木棺の棺底から棺側にかけて円礫を敷く礫床は本来、竪穴式石槨の排水機能を担った棺床構造だったものが単独で使われたもので、例としては塩津山1号墳第3主体部、寺床1号墳第1主体部があり、遅くとも前期中頃の小谷3期（松山2000）には出現する。一方組み合わせ構造の棺底に礫敷きする礫床は奥才古墳群で小谷2期の石棺に採用され、竪穴式石槨を持つ1号墳に後出する塩津山4号墳第1主体部では木棺に採用されている。このことから2つの「礫床」構造は古墳出現期にやや遅れて小谷2～3期に出現することがわかる。

組み合わせ棺の礫床の変遷については奥才古墳群の調査成果に詳しく、石棺から木棺に転化して一部で棺が長大化し、中期中頃には終焉を迎える。刳り抜き棺の場合、調査例が少ないため中期中頃までの様子は全く不明であるがそれ以後についてはある程度概略がわかる。塚山古墳に後出し、この地域の首長墓に比定される伝宇牟加比売命御陵古墳では木棺を角礫で囲う構造の主体部が確認されている。古曽志大谷1号墳には前方部に「舟形木棺」の周囲を大小の礫で囲う「礫槨状」の主体部があり、時期は塚山古墳に後出し、伝宇牟加比売命御陵古墳に先行する。以上から刳り抜き木棺を受けていた礫床が棺側を石で囲う形態に変化していく様子ががおおよそわかる。

組み合わせ棺の礫敷きがそれ自体完結した構造の主体部であるのに対し、刳り抜き木棺の礫床は石槨構造から派生したものであることから、両者の違いが被葬者の階層性に起因することはある程度推測できる。塚山古墳の西側丘陵上には21基以上の小墳で構成される月廻古墳群があり、礫敷きの箱形棺が4基ある。また箱形石棺に礫敷きする折廻古墳1号墳は塚山古墳に近い南東丘陵上に位置し、これらは奥才古墳群と同じように前期から中期にかけて継続して築造された小規模墳である。特に月廻古墳群は塚山古墳と指呼の間ほどの距離にあり、同質の礫を用いる風習を一部で共有していることからもおそらく同一の氏族集団と考えられる。月廻古墳群の個々の先後関係は明らかでないが、奥才古墳群とほぼ同様な変遷をたどったとすれば、中期以降塚山古墳とその系譜に連なる中型の首長墓を生み出すに至った支配者層集団の累代の墳墓と考えられる。このように見れば2つの「礫床」、つまり刳り抜き棺と組み合わせ棺の階層性が墳丘規模や副葬品の格差に対応しており、塚山古墳に導入されその後も変遷しながら使われた刳り抜き棺・礫床構造の優位性を確認できる[9]。

副葬品　主体部からは青銅鏡1面、滑石製臼玉94個以上（含破片）、櫛1、ガラス製小玉3個のほか鉄刀1本、鉄剣4本、鹿角装刀子7本以上、槍1、三角板（又は横矧板併用）鋲留短甲1領が出土した。総じて鉄製武器・武具類の占める割合が高い中期古墳的な副葬品構成で、短甲を持つことから被葬者が畿内政権とのつながりのある武人的な性格を持つ人物であったと窺える。個々の副葬品については既に事実記載で述べたとおりなので、ここでは遺物の副葬状況についてまとめておく。

まず、副葬品の出土状況を整理しておく。頭側にあたる棺の北側では中央に鏡を置きその両側に切先足側に向けて2本の剣が置かれ、遺体の頭部周辺を囲繞するような配置形態をとる。これに対し南側は足下に短甲を置き、鉄剣2本、鉄刀1本は棺側面との隙間に押し込むようにして切先を頭側に向けて置かれていた。いずれも棺内副葬で、刀剣はすべてに木質が残ることから鞘入りである。考えられる。このように足下側では棺内の空間利用が器物の集積という方向性を指向しているのに対し、頭側では被葬者の頭部付近を護持するような配置方法で、儀礼的な所作を窺わせる。

古墳の副葬品配置についてはこれまで多くの指摘や研究があり、近年では宇垣匡雅氏の副葬刀剣の配置に関する論考がある。これによると被葬者の頭部を重視し刀剣によってこれを護るという刀

剣配置儀礼が畿内前期古墳に存在し、儀礼の意図を僻邪思想にもとめている（宇垣1997）。県内でもこの配置様式を導入した前期古墳がいくつかあり、畿内型の葬送儀礼の一部を受容していたことがわかる。これに続く中期では副葬品配置のわかる調査例が少ないが、塚山古墳では足下側の刀剣が頭側を向き、古曽志大谷1号墳の前方部主体、月坂放れ山5号墳（安来市）、山崎古墳（松江市西川津町）も被葬者の足もとから切先を頭側に向けて刀剣を置く。このような配置も一定の儀礼的な様式にあたるかも知れない。一方、頭部付近では2剣で遺体の頭部から両肩を挟むように置かれており、頭部を意識した畿内の僻邪儀礼に通じる配置形態と言えるであろう。この場合鏡の配置がはたして同様の意図を持ったのか検討を要するが、両剣の柄に挟まれるような位置関係にあることから遺体頭部をコ字形に囲むことが意図されたと考えたい。

法吉地域における首長墳の系列　塚山古墳周辺には中規模の首長墳クラスの古墳が築かれている。これらについて時期が不明確なものもあるが、新宮古墳（円墳 25m）[10] →塚山古墳（方墳 33m 7期）→田中谷古墳（前方後方墳 25m）[11] →伝宇牟加比売命御陵古墳（方墳 16m 9期）という系列が考えられる。出雲地方では古墳時代中期から後期にかけて小地域ごとに首長墳系列が見られるが、その典型といえよう。

まとめ　塚山古墳は法吉地域周辺を拠点とした首長の墓であり、出雲地方の中期首長墳で全容の分かる数少ない例で、かつ標式的な古墳といえる。古墳時代中期の出雲地方では、小地域ごとに首長墳が分立しており、その中で方墳を採用する例が多く見られる。今回の調査では、そうした中期の首長墳の一端を解明した上、墳形のほか、主体部、副葬品、埴輪など多くの要素から畿内政権と在地首長、出雲地方内部での首長間の関係を考える上で重要な資料が得られた。また、造り出し部における古墳祭祀の様相や形象埴輪の導入など、葬送儀礼の変遷を探る上でも大きな意味を持つと考えられる。

最後に石棺出土伝承について触れておく。詳細は不明ながら塚山古墳で過去に石棺の蓋らしき巨石が墳裾に露出していたという伝承があり、今回の調査では事実関係を直接明らかにできなかった（第1節1参照）。この巨石が真に石棺の蓋であったとすれば、今回検出した主体部とは別の種類の埋葬施設が存在したことになる。礫床の主体部が墳丘中心より西に若干ずれていることや墳丘中央付近の攪乱土に大型の礫が露出していることなどを積極的に評価すれば、中心主体の存在も考えられなくはない。いずれにしても古墳の評価に関わる重要な点であるが、幸いにも関係機関の努力によって古墳が公園として保存されることとなったので、その解明は将来の調査に委ねたい。

注

1）出土遺物のうち鉄製品は諸般の事情により本報告作成と平行して保存処理を実施しているため、以下に述べる所見は処理前におこなった観察とX線撮影に基づき、処理途中で確認した事実関係をできるだけ付加して記述したものである。従って個体同定や部位確認の作業が未了の段階の報告であるため、保存処理が完了した後に種類と数量の確定及び新知見に基づく記述の修正が行われるべきものであることを明記しておく。

2）鉄剣3の柄間の将えはX線撮影で良好に確認できた。しかし、外注先で保存処理中、誤ってそのほとんどが削り飛ばされてしまい、遺憾ながら現存していない。

3）短甲についての所見は、奈良文化財研究所・小林謙一氏、京都大学・阪口英毅氏のご教示によるところが大きい。

4）2・3が左前胴押付板の破片であるという根拠は、1・4・8・9の位置が確定しており、そこにしか入らないという点もあげられる。

5）当初は部位を同縮尺で掲載する予定であったが、押付板を同縮尺で合成すると後胴の幅が広くなりすぎてしまい、地板の枚数などに誤解を生じることも考えられたので、押付板のみ横方向の縮尺をさらに小さくしてバランスを整えた。

6）短甲に関するデータは（滝沢1991）による。

7）調査担当者である安来市教育委員会・水口晶朗氏のご教示による。

8）鏡の所見は大手前大学・森下章司氏のご教示に基づき調査担当者が行った。従って記載に誤り等があれば執筆者にその責があることを明記しておく。

9）塩津山4号墳では中心となる第2主体部が礫床を持つ小形の竪穴式石槨で、隣接する第1主体部では組み合わせの箱形木棺の底面に礫を敷く構造の主体部が検出された。棺の規模は両者ともあまり違わないが槨を伴う方が中心主体である事実は両者の格差を表出しているといえよう。

10）新宮古墳について、表面観察では造り出し部があるように思われること、出雲地方では古墳時代中期に方墳に先行して円墳が首長墳に採用される地域があることからここでは中期古墳と考えたが時期について明確な根拠はない。乱掘坑に50㎝を超える石材が見られることから横穴式石室の可能性も考えられる。なお、島根大学考古学研究会によって測量調査がされている。このとき土師器片数点が採取されているが時期は特定できない。

11）田中谷古墳は島根大学考古学研究会によって墳丘測量調査がされた。このとき表採された埴輪片が島根大学考古学研究室に保管されているが、渡邊貞幸教授、島根大学考古学研究会のご厚意により実見できた。明確な時期を特定できるものはないが、須恵質のものがあることから川西Ⅳ期以降のものと思われる。

引用・参考文献

沼田頼輔1901　「備中小田郡新山村古墳発見の鎧に就いて」『考古界』第1篇第1号

梅原末治1932　「淡輪村西小山古墳と其の遺物」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯

杉谷光昭・持田基1948　「荘原村の古墳」『出雲考古学会報』第3号

山本清1966　「山陰の石棺についてⅠ」『山陰文化研究紀要』7号　島根大学

前島己基1974　「月廻古墳群」『日本考古学年報』25　1972年版

宮沢明久1976　「月廻古墳群」『日本考古学年報』27　1974年版

石見町教育委員会1977　『中山古墳群－発掘調査概報－』

川西宏幸1978　「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻4号

松江市教育委員会1979　『史跡大庭鶏塚発掘調査報告』

田辺昭三1981　『須恵器大成』角川書店

荻野繁春1982　「倭製神像鏡について」『福井工業高等専門学校研究紀要』人文・社会科学第16号

奈良県教育委員会1984　「五条市今井1号墳発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1983年度（第2分冊）

松江市教育委員会1984　『山崎古墳』

松江市教育委員会1985　『史跡石屋古墳』

鹿島町教育委員会1985　『奥才古墳群』

奈良県教育委員会1986　「後出古墳群Ⅰ」『奈良県遺跡調査概報』1985年度（第2分冊）

松本岩雄1986　「美保関町の考古資料」『美保関町誌』下巻

立命館大学文学部1987　『鴨谷東1号墳1次発掘調査概報』

岩崎卓也・松尾昌彦1988　「武器・武具」『長野県史』考古資料編　全1巻（4）遺構・遺物

吉村和昭1988　「短甲系譜試論－鋲留技法導入以後を中心として－」『橿原考古学研究所紀要考古学論攷』第13冊

杉山晋作・田中新史編1989　『古墳時代研究Ⅲ－千葉県君津市所在八重原1号墳・2号墳の調査－』古墳時代研究会

鹿島町立歴史民俗資料館1989　『古代狭田王国の興亡』1989年特別展図録

島根県教育委員会1989　『古曽志遺跡群発掘調査報告書－朝日ヶ丘団地造成工事に伴う発掘調査－』

宇治市教育委員会1991　『宇治二子山古墳発掘調査報告』宇治市文化財調査報告書第2冊

滝沢誠1991　「鋲留短甲の編年」『考古学雑誌』第76巻第3号

森下章司1991　「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻第6号

高橋工1991　「甲冑製作技術に関する若干の新視点」『盾塚　鞍塚　珠金塚古墳』由良大和古代文化研究協会

西藤清秀1992　『古墳時代の研究　9　古墳Ⅲ　埴輪』雄山閣

松江市教育委員会1993　『伝宇牟加比売命御陵古墳』松江市文化財調査報告書第54集
木次町教育委員会1993　『斐伊中山古墳群－西支群－』
大谷晃二1994・1996　「斐川町軍原古墳について(上・中・下)」『八雲立つ風土記の丘』№127・136・137
大谷晃二・清野孝之1996　「安来市毘売塚古墳の再検討」『島根考古学会誌』第13集
宇垣匡雅1997　「前期古墳における刀剣副葬の地域性」『考古学研究』第44巻第1号
藤永照隆1997　「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌』第14集
島根県教育委員会a 1997　『岸尾遺跡・島田遺跡』一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅴ
島根県教育委員会b 1997　『塩津山古墳群』一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅵ
島根大学考古学研究会1997　『法吉物語』
加悦町教育委員会1998　『白米山古墳Ⅱ』加悦町文化財調査報告第26集
古代文化センター1998　「丹花庵古墳の測量調査」『古代文化研究』第6号
アサヒグラフ編集部1999　「副葬方法が手にとるようにわかる　玄界灘沿岸に未盗掘の墳墓」『古代史発掘1996－1998新遺跡カタログVol.5』朝日新聞社　pp.161－163
加悦町教育委員会1999　『白米山古墳Ⅲ　須代遺跡Ⅳ』加悦町文化財調査報告第28集
松山智弘2000　「小谷式再検討」『島根考古学会誌』第17集
えびの市2001　『島内地下式横穴群』えびの市埋蔵文化財調査報告書第29集
鹿島町立歴史民俗資料館2001　『古墳出現－奥才古墳群から見る前期古墳の様相－』2001年特別展図録

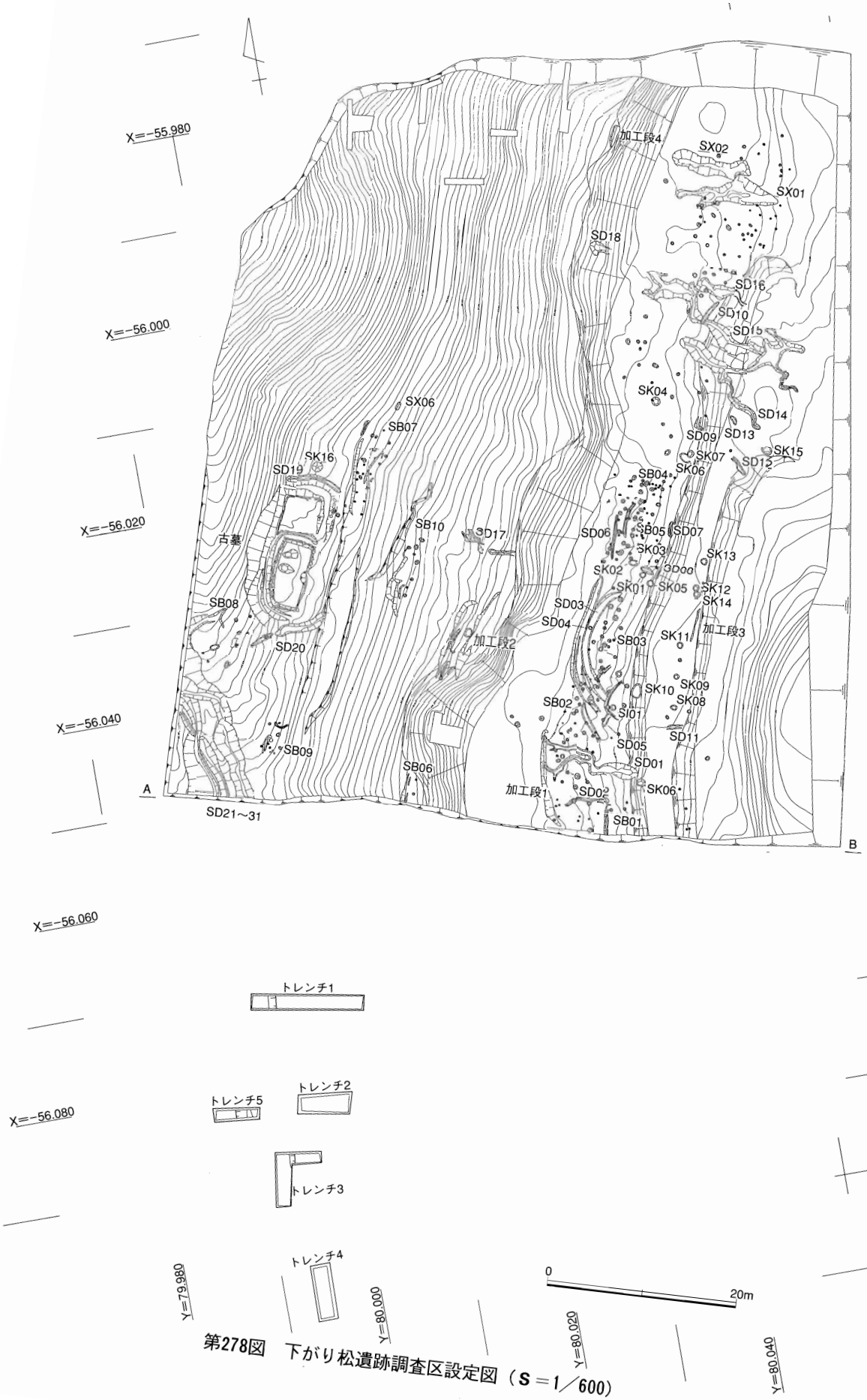
第6章　下がり松遺跡

第1節　調査の経過と調査方法

下がり松遺跡は、田中谷遺跡の東側に隣接する標高約30mの丘陵先端部に立地する。丘陵の北奥には角谷遺跡が立地し、さらに下がり松遺跡の東側に隣接する丘陵には古墳時代後期の円墳とみられる新宮1号墳が存在する。

調査は田中谷遺跡Ⅱ区の調査終了後、8月10日からとりかかった。本来、平成11年度の範囲確認調査により、丘陵頂部から東向き斜面を経て低湿な谷部までを含む広大な範囲が調査対象となっていた。しかしながら前述のように夏場からの調査開始であったため、なるべく調査時間を短縮するべく、丘陵先端部についてはまず5ヶ所についてトレンチ調査を行った。その結果、明確な遺物・遺構が検出されなかったので、この部分については全面調査は行わず、丘陵斜面から谷部までの5,126㎡について本調査を行った。また、丘陵斜面上方には周知の遺跡として「松崎金一郎所有山林古墳」が存在していたので、調査対象を古墳と丘陵斜面～谷部との2つに分け2班体制で調査を行った。なお、団地造成工事も調査と並行して行われていた。そのため、調査終盤には丘陵部の遺跡範囲以外がほとんど削平され、地面から遺跡範囲のみ浮かび出た状態となった（図版179～181参照）。

第277図　下がり松遺跡調査区割図（S＝1／2000）



第278図　下がり松遺跡調査区設定図（S＝1／600）

丘陵斜面部から谷部にかけての調査は、重機による表土はぎをまず実施した。廃土を処理する場所がなかったため、廃土はとりあえず谷部に仮置きし、まず斜面部のみ表土はぎを行った。斜面部下方は近世の開墾・民家の造成等により削平され、平坦面が2段に形成されていた。そのため遺構の残存状況は総じてよくなかったが、平坦面から竪穴建物1棟・掘立柱建物5棟・加工段2基・溝状遺構16基・土坑15基・性格不明遺構2基などを、斜面上方からは掘立柱建物6棟・加工段2基・溝状遺構8基・土坑1基を検出した。谷部の調査は年の瀬も迫った12月13日から調査を行った。まず上面に仮置きした廃土を、重機により調査の終了した斜面部に天地替えして処理した。谷部は予想通り粘土層が厚く堆積していたが、それも重機で除去して遺物包含層の調査を行った。湿地であるため水が湧き続け、寒空の下それをポンプで抜きながら調査であった。包含層からは墨書土器を含む多数の土器類が出土したが、遺構は検出されなかった。谷部の調査は12月21日で終了した。

古墳の調査は、田中谷遺跡Ⅰ区の調査終了後、別の班が9月28日から調査を行った。古墳であるため人力での表土はぎ作業を行った。当初は斜面に立地する古墳時代終末期の方墳とみられていたが、調査の結果、石積基壇をもつ中世の火葬墓であることが判明した。さらに基壇の下面から掘立柱建物も3棟検出された。調査は1月10日をもって終了した。

第2節　調査の結果

1．基本層序

第279図に調査区の南壁の土層図を掲載している。全長およそ72m、標高差も20mを測る。斜面部は表土を除去すれば即地山が検出され、平坦部については近年まで民家が存在していたこともあり、表土下には造成土が盛られていた。

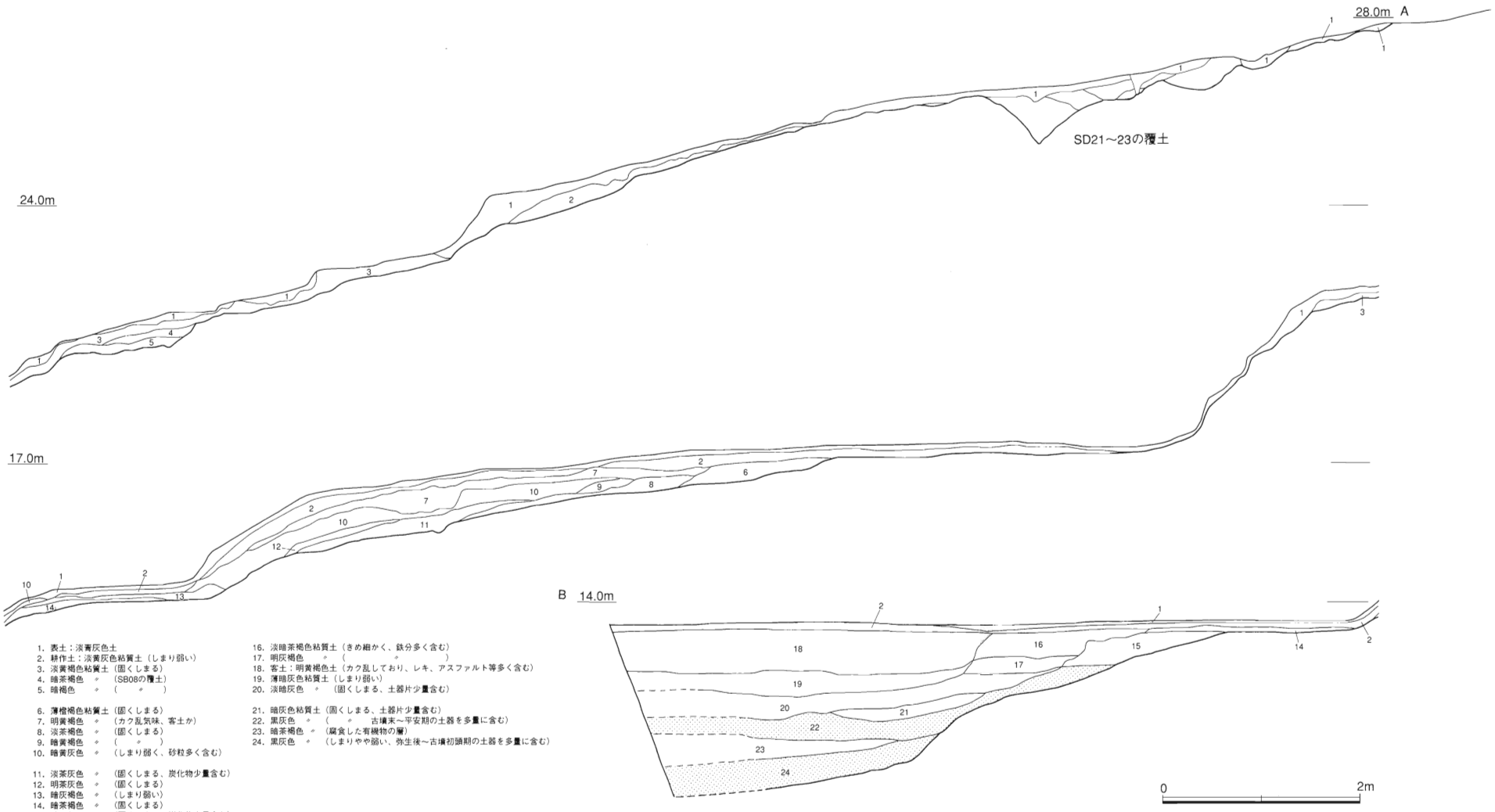
谷部も表土下には造成土が厚く盛られていたが、その下層には近世以前の水田層とみられる灰色粘土層が堆積する。粘土層の下層には古墳時代後期～平安期の遺物を含む黒色粘土層が堆積し、その下層に有機物層を挟み、さらにその下層に弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物を含む黒色粘土層が堆積している。従って谷部について、以下のように土層を分類する。

第Ⅰ層　－灰色粘質土：固くしまるシルト質の層で、遺物も少量含んでいる。第279図の19・20・21層に相当。
第Ⅱ層　－黒色粘質土：古墳時代後期～平安期の遺物を多量に含む粘土層。第279図の22層に相当。
第Ⅲ層　－茶褐色粘質土：腐食した有機物を多量に含む粘土層。第279図の23層に相当。
第Ⅳ層　－黒色粘質土：弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物を含む粘土層。第279図の24層に相当。

2．トレンチ調査

本調査に先立ち、遺跡の立地する丘陵の先端部について、遺跡の広がりを確認するためトレンチ調査を5ヶ所行った。その土層図を第280図に示している。その結果、3ヶ所において大規模な溝状遺構を確認された。

トレンチ1では、地山断面に溝の右肩から底面にかけての落ち込みを示す部分がある。底面は平

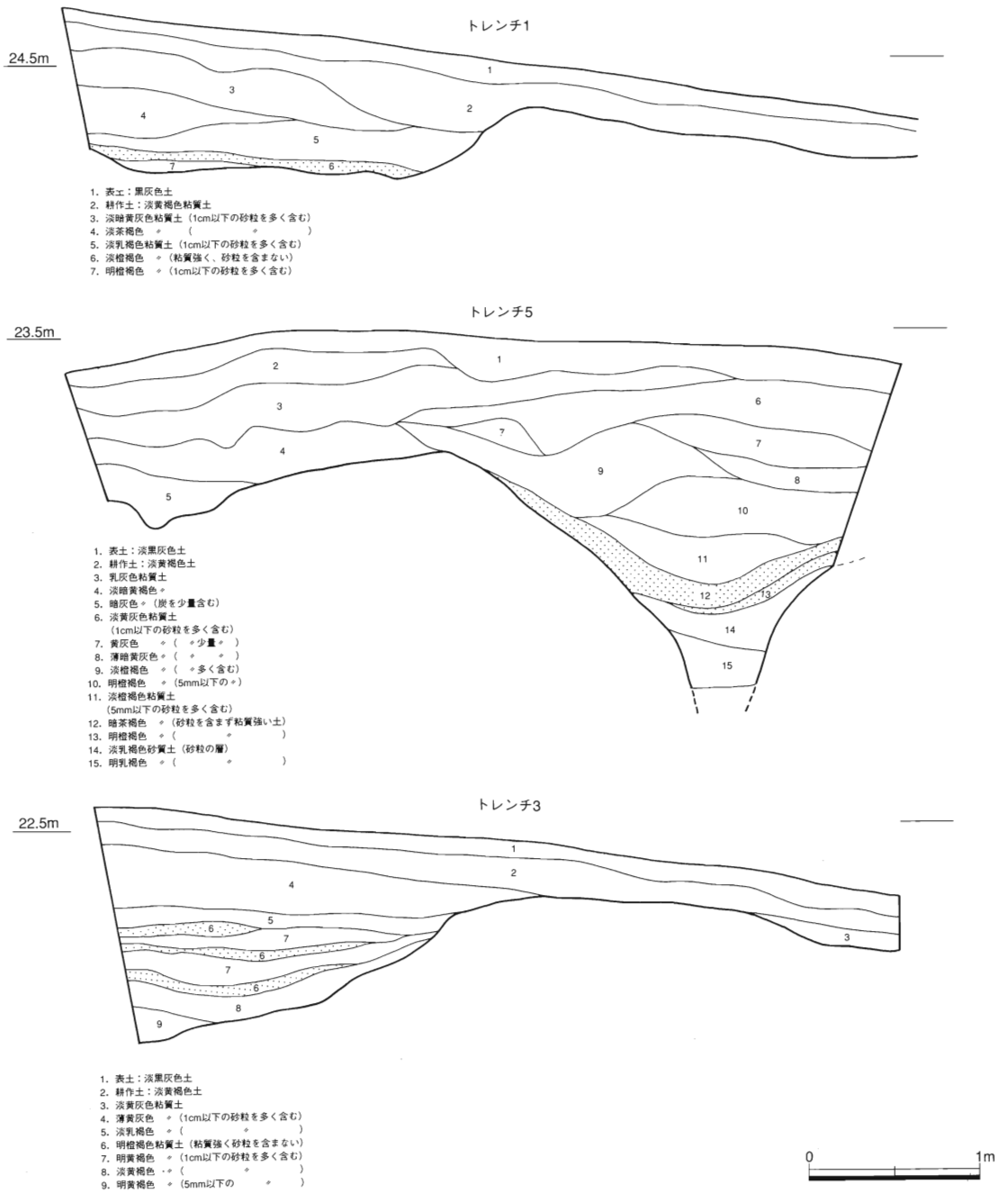


1. 表土：淡青灰色土
2. 耕作土：淡黄灰色粘質土（しまり弱い）
3. 淡黄褐色粘質土（固くしまる）
4. 暗茶褐色　〃　（SB08の覆土）
5. 暗褐色　〃　（　〃　）
6. 薄橙褐色粘質土（固くしまる）
7. 明黄褐色　〃　（カク乱気味、客土か）
8. 淡茶褐色　〃　（固くしまる）
9. 暗黄褐色　〃　（　〃　）
10. 暗黄灰色　〃　（しまり弱く、砂粒多く含む）
11. 淡茶灰色　〃　（固くしまる、炭化物少量含む）
12. 明茶灰色　〃　（固くしまる）
13. 暗灰褐色　〃　（しまり弱い）
14. 暗茶褐色　〃　（固くしまる）
15. 暗灰色　〃　（固くしまり、炭化物少量含む）
16. 淡暗茶褐色粘質土（きめ細かく、鉄分多く含む）
17. 明灰褐色　〃　（　〃　）
18. 客土：明黄褐色土（カク乱しており、レキ、アスファルト等多く含む）
19. 薄暗灰色粘質土（しまり弱い）
20. 淡暗灰色　〃　（固くしまる、土器片少量含む）
21. 暗灰色粘質土（固くしまる、土器片少量含む）
22. 黒灰色　〃　（　〃　古墳末～平安期の土器を多量に含む）
23. 暗茶褐色　〃　（腐食した有機物の層）
24. 黒灰色　〃　（しまりやや弱い、弥生後～古墳初頭期の土器を多量に含む）

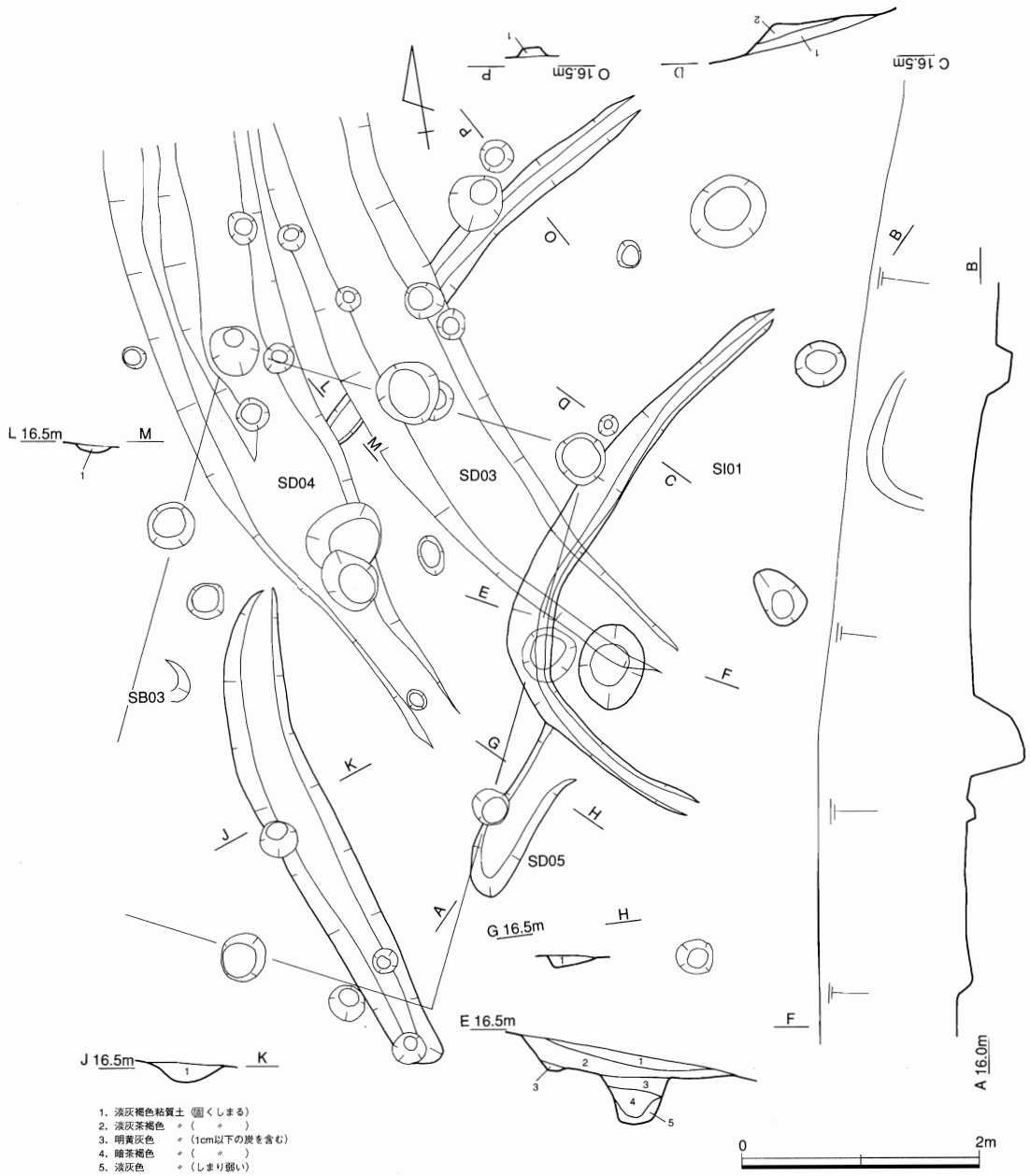
第279図　下がり松遺跡調査区南壁A－B土層断面図（S＝1／120）

坦で、溝内には砂粒の層と、砂粒を全く含まない粘土層が交互に堆積している。トレンチ５では、溝の左肩の落ち込みを示す部分が検出された。完全には掘りきっていないが、溝はＶ字状を呈し、同様に砂粒層と粘土層が交互に堆積している。トレンチ３では溝の右肩が検出され、底面にかけて緩やかに落ち込んでいく。やはり砂粒層と粘土層が交互に堆積する。これらを俯瞰すると、トレンチ１・３で検出されたのは同じ溝の右端部とみられ、トレンチ５で検出されたのは平行してのびる別の溝とみることができる。

この溝内から遺物は出土せず時期や性格は不明瞭だが、遺跡の調査区南西端部で同形態の溝が４条検出されている（ＳＤ21～24）。これらは一連のものと考えられるので、詳細は別項で述べることにする。



第280図　下がり松遺跡トレンチ１，３，５北壁土層断面図（Ｓ＝1／40）



第281図　下がり松遺跡ＳＩ01、ＳＤ05実測図（Ｓ＝1／60）

3．竪穴建物

竪穴建物は１棟のみ検出された。周辺はかなり削平を受けているので、建物の掘り込みが消失して竪穴建物として検出できなかったものもあるかもしれない。

ＳＩ01・ＳＤ05（第281図）

ＳＩ01は調査区平坦面の南側で検出された。他の遺構が最も密集する地点に位置しており、ＳＩ01もＳＤ03～05と切りあって検出された。ＳＩ01の東側は段状に削平され残存していないが、隅丸方形の建物とみられる。現状で3.9×2.3mを測り、上方は削平されているとみられるが床面までの深さは20cmである。床面から柱穴が２点と中央ピットが検出されているが、本来は４本柱だったと考えられる。また、ＳＩ01の西側1.8m付近には、２本の溝が建物を囲むように検出されている。ＳＤ03・04によって切られているが、ＳＩ01の周溝とみられる。南側の溝が長さおよそ4.2m・幅55cm、北側が3.8m・幅32cmを測る。

第282図　下がり松遺跡ＳＩ01出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）

なお、ＳＩ01南側に切りあった状態で溝状遺構ＳＤ05が検出されている。長さ1.52m・幅42cmを測る。検出時にはＳＩ01がＳＤ05を切ったように見受けられたが、ＳＩ01の付属施設である可能性もあるかもしれない。溝内から遺物は検出されていない。

ＳＩ01出土遺物（第282図）

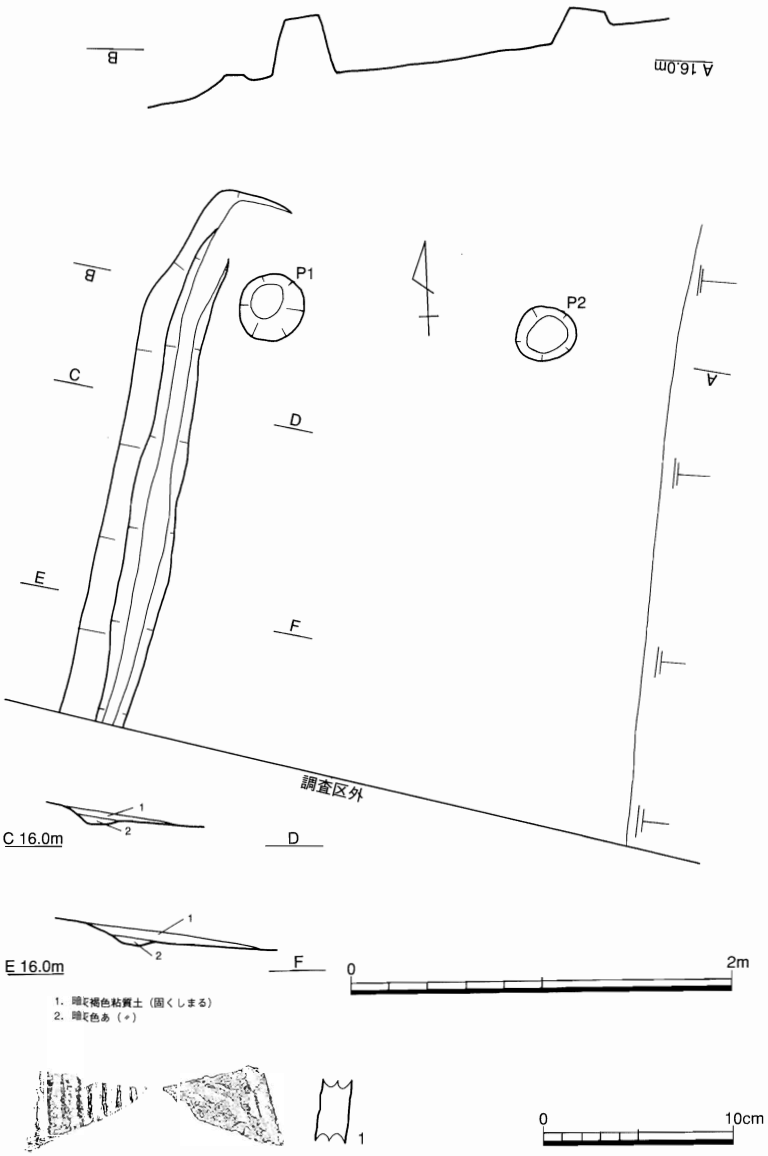
床面から２点ほど検出された。いずれも小片で風化が著しいが、複合口縁を呈する甕である。１は口縁が若干外反し、外面に凹線が確認できる。２は口縁が若干上下に拡張し、外面は無文である。時期はいずれも草田２期に相当するとみられる。

４．掘立柱建物

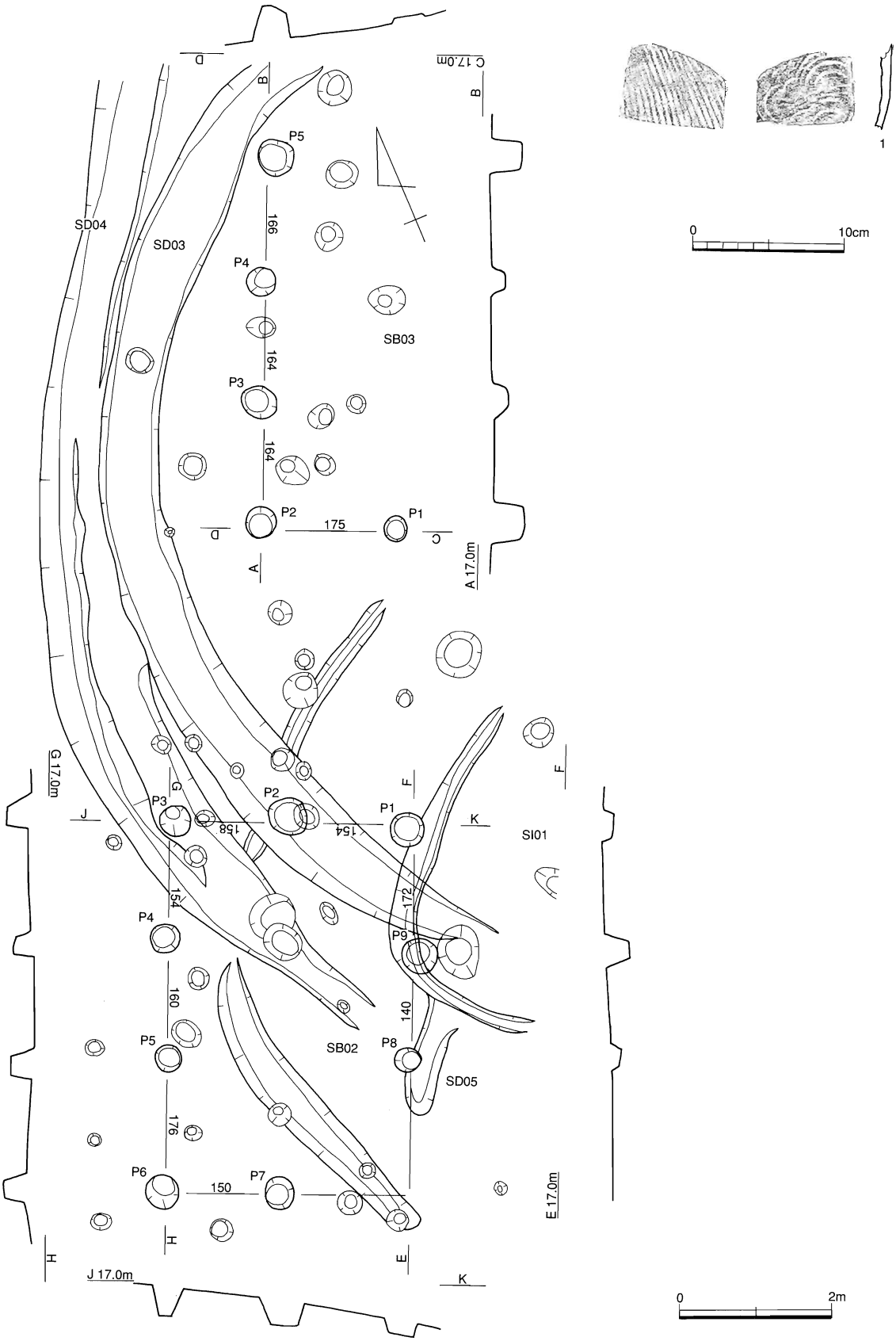
掘立柱建物は全部で11棟検出されている。立地別にみると、平坦面で５棟、斜面部で６棟検出されている。また遺跡内では、斜面を加工して平坦面を造り出している遺構がいくつかみられる。そのうち柱穴が検出できなかったものは、建物が存在するのか判断できなかったので、加工段と称し掘立柱建物と区別している。

ＳＢ01（第283図）

平坦面の南端で検出され、調査区南壁にかかっている。遺構は調査区外にも続いているが、おおよそ桁行きを南北方向に合わせているとみられる。遺構の東側は段状に削平され残存していない。斜面を加工して平坦面を形成しており、加工段に沿って溝も検出された。柱穴は段に直行するように２点ほど検出するにとどまっており、柱穴間は1.5mを測る。



第283図　下がり松遺跡ＳＢ01・出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）



第284図　下がり松遺跡ＳＢ02,03・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／80、遺物：Ｓ＝1／4）

遺物は床面から１点出土した。須恵器甕の破片と思われる。

ＳＢ02・ＳＢ03（第284図）

ＳＢ02はＳＩ01のすぐ西隣で検出され、柱穴の一部とＳＩ01の堀片が切りあっている。南東端の柱穴を欠くが、２×３間の側柱建物で桁行長4.96m・梁行長3.2m・床面積15.9㎡を測る。柱穴から遺物は出土していないが、ＳＩ01との切りあいからＳＩ01よりは新しいといえる。

ＳＢ03は、ＳＢ02の北側およそ４mの位置に隣り合って検出された。建物東側の柱列は削平されて残存していないが、本来は２×３間の側柱建物であったと推測される。桁行長およそ５mで、ＳＢ02と規模や方向を同じくすることから、両者は概ね同時期に並列して建てられていたと考えられる。

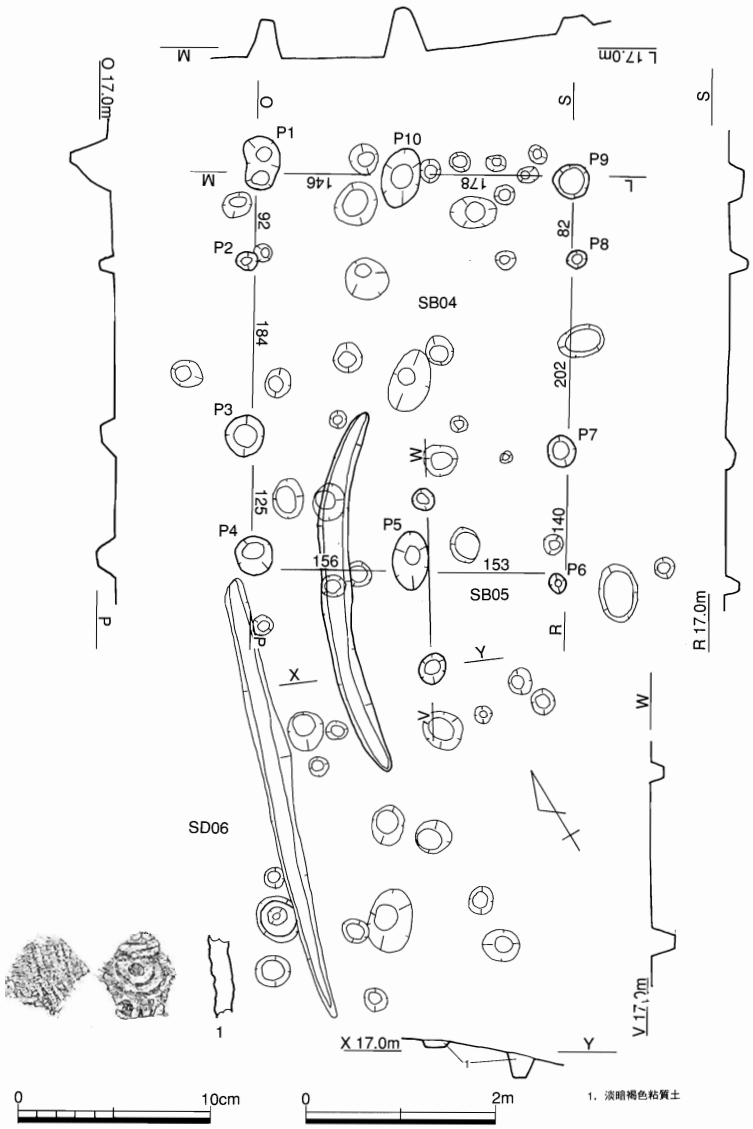
遺物はＰ２より須恵器甕と思われる小破片が出土している。

ＳＢ04・ＳＢ05（第285図）

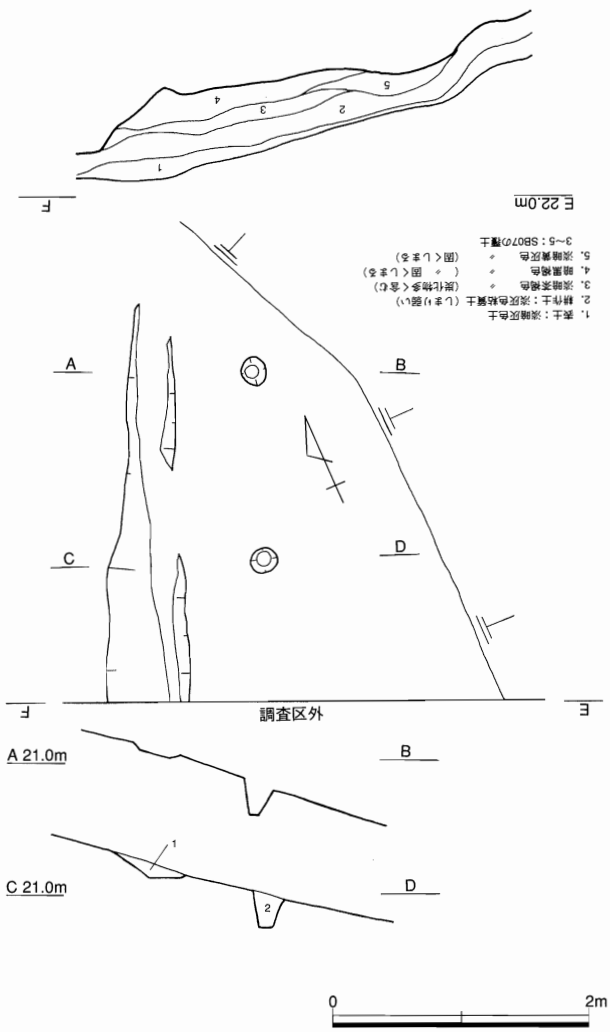
ＳＢ04は平坦部の中央付近で検出され、周辺はＳＢ05や多数のピット、溝状遺構ＳＤ06などが密集している。ほぼ全体が残存し、２×３間の側柱建物で桁行長4.2m・梁行長3.3m・床面積13.9㎡を測る。桁行きの柱列間隔は均等でなく、内側が1.8m、外側が1.3mと内側が50cmほど長い。

遺物はＰ１より須恵器甕と思われる小破片が出土している。

ＳＢ05はＳＢ04と切りあっている溝をもとに、図上復元したものである。この溝は長さ3.8m・幅32cmを測る小規模なものだが、弧状を呈し建物の壁体溝とも見受けられた。この溝に平行する柱列としてピットが２点検出されたので、合わせて建物跡として復元した。想像の域を出ないが、本来は竪穴建物であった可能性もある。遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第285図　下がり松遺跡ＳＢ04,05・出土遺物実測図（Ｓ＝1／80）



第286図　下がり松遺跡ＳＢ06実測図（Ｓ＝1／60）

ＳＢ06（第286図）

ＳＢ06は調査区南端で検出され、遺構は調査区。外にも続いている。斜面の先端部に立地しており、東側は後世の削平により流出している。なお、この斜面先端の削平は大規模なもので、平坦面までの段差はおよそ３ｍを測るものである。ＳＢ06は斜面を加工して平坦面を造り出しており、床面から壁帯溝が検出されている。柱穴は２点検出され、柱間は1.5ｍを測る。

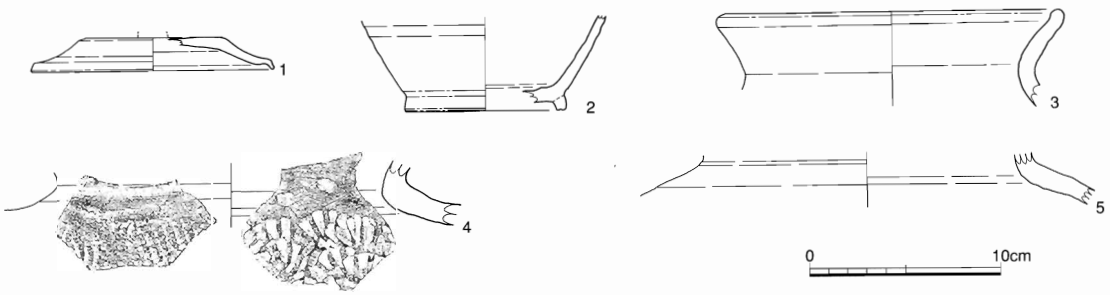
ＳＢ06出土遺物（第287図）

建物の覆土から複数の遺物が出土している。いずれも須恵器である。１は先端部を折り曲げる蓋で、擬宝珠状のつまみがつくとみられる。８世紀後半とみられる。２は高台付碗である。体部と底部の境に高台が付き、８世紀後葉～９世紀とみられる。３～５は壺・甕類であり、３は口縁部、４・５は肩部片である。

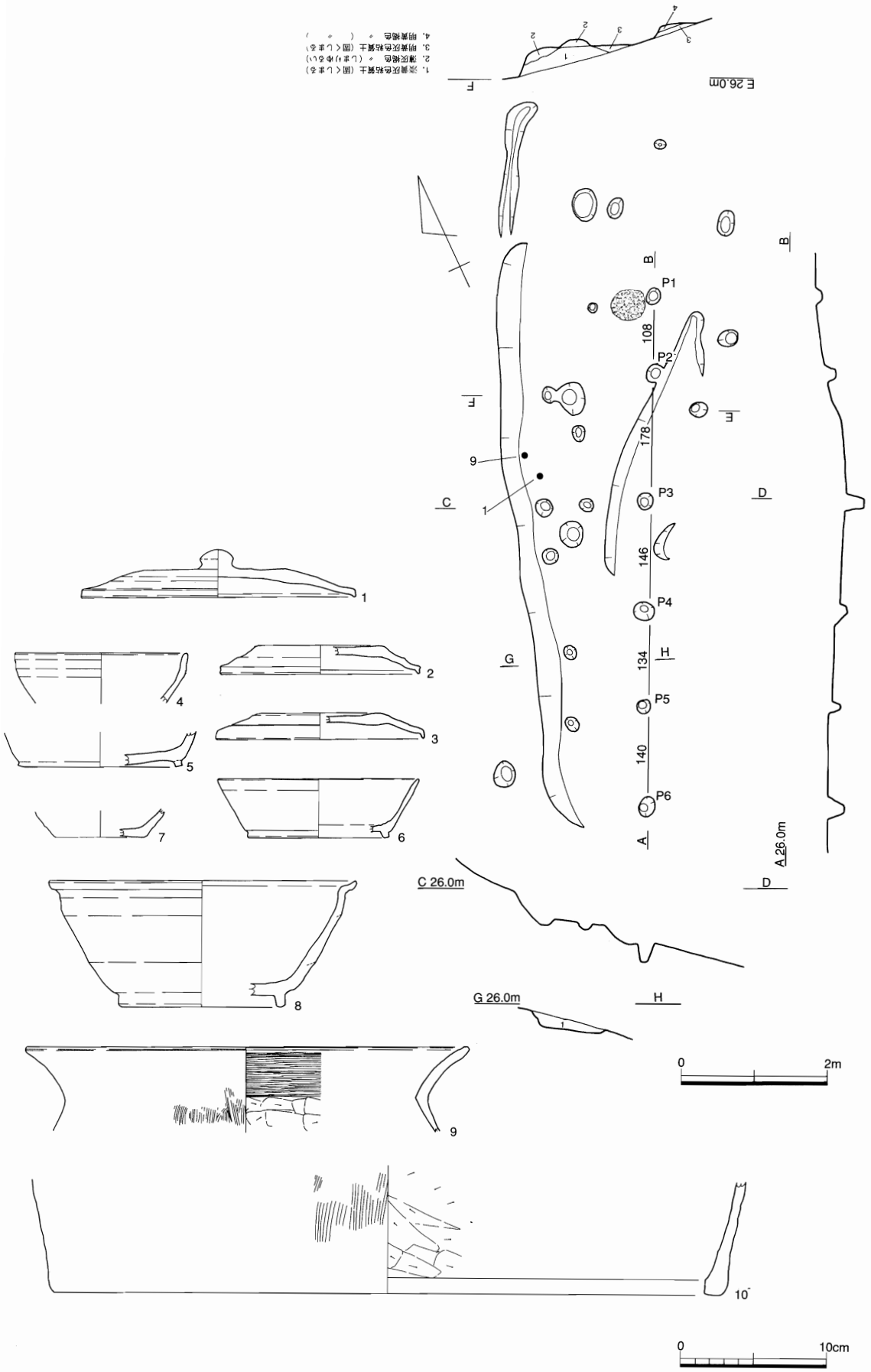
ＳＢ07（第288図）

斜面の上方に立地し、古墓の北東側で検出された加工段状の建物跡である。加工段の長さは8.2ｍを測り、段に沿った柱列が１条検出されている。柱列は６本のピットからなり、長さ6.8ｍを測る。床面はかなり流出しているが、焼土面もみられる。また、加工段の北側には溝があり、東にも溝状の加工段もみられるが、残りが悪くここではＳＢ07として一括で扱った。

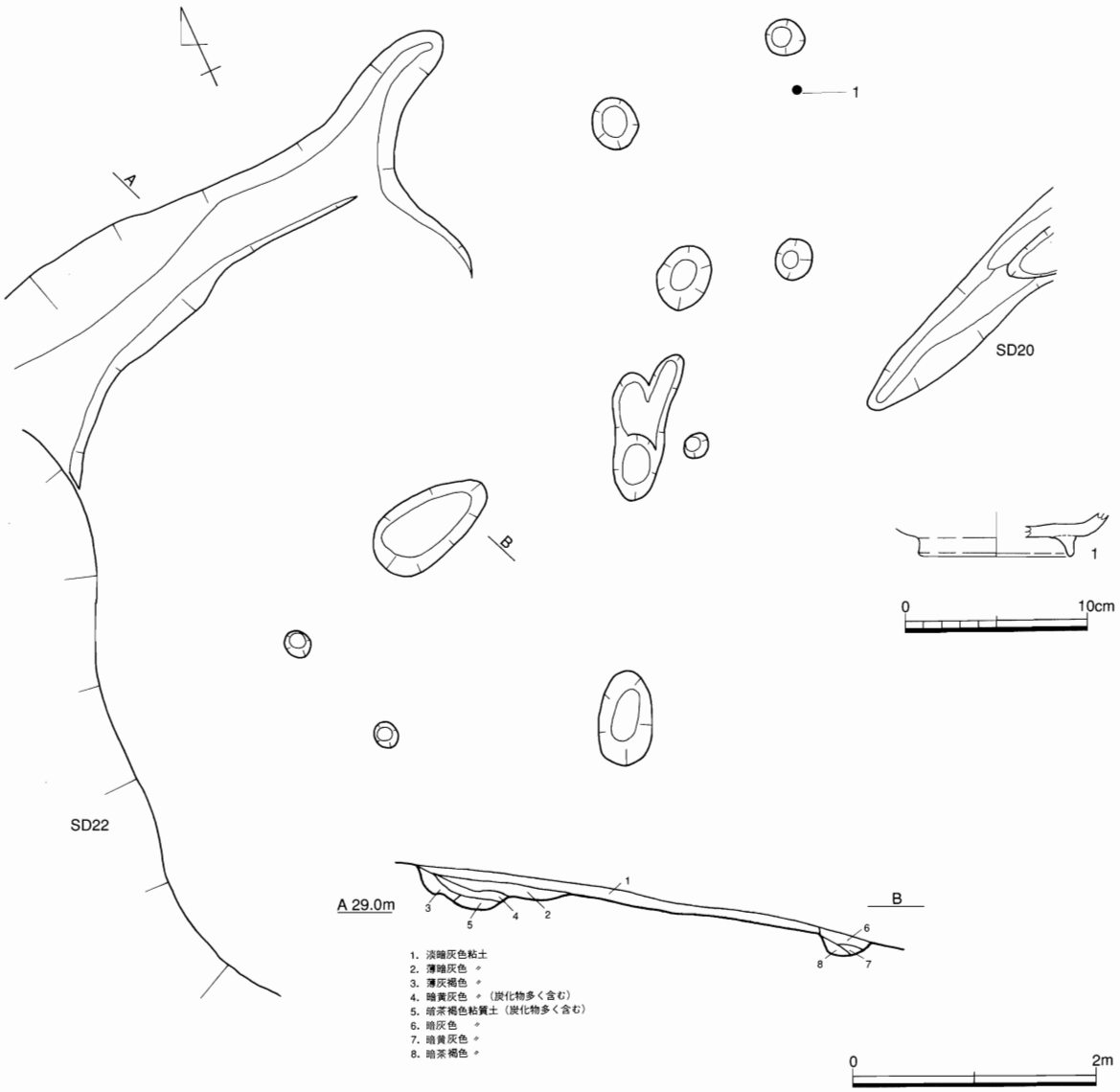
遺物は床面（１・９）や覆土から出土している。１～３は擬宝珠状つまみがつき、口縁端部を折り曲げる坏蓋である。８世紀後半とみられる。４～８は碗で高台の付くもの（５・６・８）と付かないもの（４・７）がある。８世紀後半～９世紀とみられる。９・10は土師器で、９は甕、10は移動式竈の底部とみられる。



第287図　下がり松遺跡ＳＢ06出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）



第288図　下がり松遺跡ＳＢ07・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／80、遺物：Ｓ＝1／4）

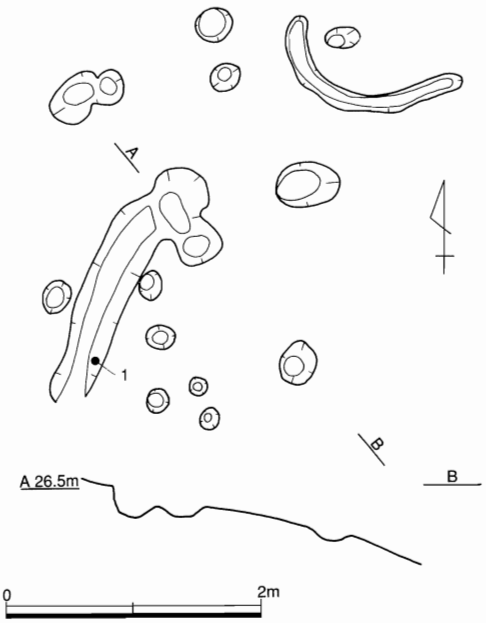


第289図　下がり松遺跡ＳＢ08・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／60、遺物：Ｓ＝1／4）

ＳＢ08（第289図）

斜面の上方の丘陵頂部、標高29m付近で検出された。大半が流出しており、残存状況はよくないが、溝と溝の南東側で不揃いのピットが10点検出された。溝とピットは一連のものとみられ、何らかの建物があったと思われるが、ピットは明確な並びを示さず規模などは定かでない。溝は後世のＳＤ24に切られているが、割合しっかりと掘り込まれており、途中で南方に分かれてのびる気配がある。規模は長さ2.4m・幅54cm・最大深25cmを測る。

東端の地山上で遺物が１点ほど検出された。１は須恵器の高台付碗の小片で、８世紀代とみられる。



第290図　下がり松遺跡ＳＢ09実測図（Ｓ＝1／60）

第291図　下がり松遺跡ＳＢ09出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）

ＳＢ09（第290図）

ＳＢ08の南方10mの位置で検出され、標高は26.5m付近に立地する。ＳＢ08と同様残存状況は悪く、小規模な溝２基と不揃いなピットを14点を検出したにすぎない。何らかの建物跡と思われるが、規模などは定かでない。手前の溝は弧状にのび、長さ2.1m・幅42cm・深さ24cmを測る。奥の溝は深さがほとんどなく、根の痕跡かもしれない。

ＳＢ09出土遺物（第291図）

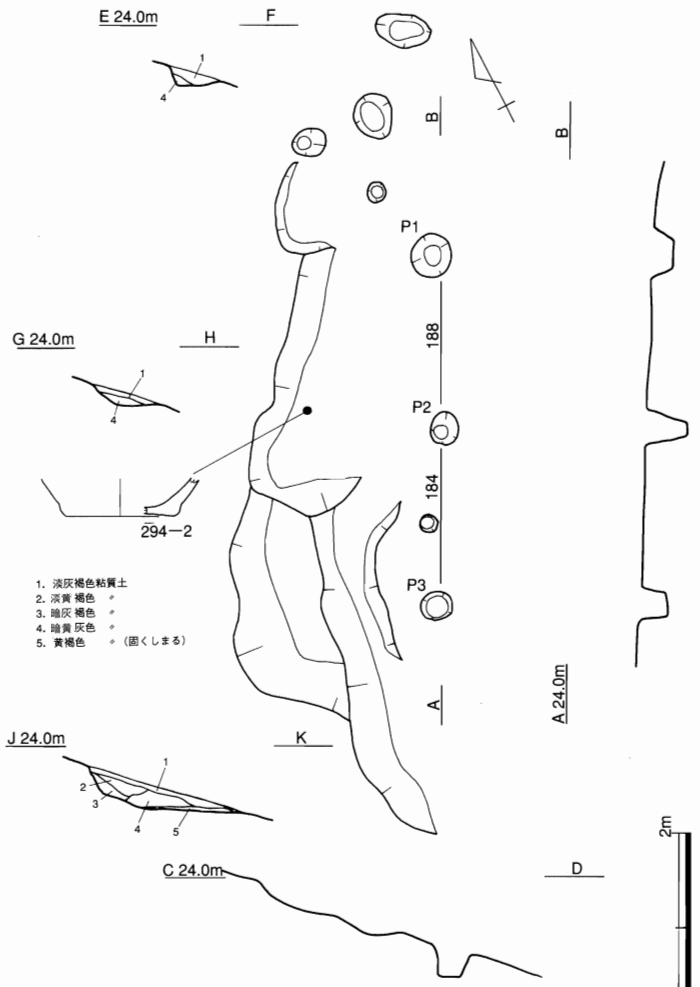
溝内より１点出土している。１は須恵器の坏身の底部片である。回転糸切り痕が残り、８世紀後半代とみられる。

ＳＢ10（第292図）

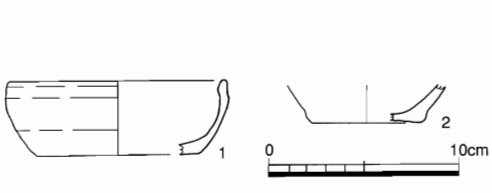
ＳＢ10は斜面の中ほどの標高23～24m付近で検出された。ＳＢ06・07と同様に加工段を造り出しているが、何段かに重なっており建て替えの痕跡がうかがえる。建物東側は流出しているが、床面からピット３点からなる柱列が検出されている。加工段は長さ7.3m、柱列は長さは3.7mを測る。

ＳＢ10出土遺物（第293図）

覆土（１）と床面（２）から遺物が２点出土している。いずれも須恵器の碗で底部に回転糸切り痕が残り、８世紀後半代とみられる。



第292図　下がり松遺跡ＳＢ10実測図（Ｓ＝1／80）



第293図　下がり松遺跡ＳＢ10出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）

ＳＢ11，12，13（第294図）

これら３棟の建物は丘陵尾根からやや下った標高27m付近に位置する。斜面を長さ約11mにわたって削り出し、平坦面を造り出した上に建物を構築している。後述する古墓はこの建物の加工段を利用して、斜面をさらに削り、盛土して基壇を構築している。この平坦面上からピットを多数検出したが、古墓の構築など後世の改変もあり、建物の全容は確認できなかった。３棟は棟方向を斜面に平行させた細長い建物で、後背の丘陵側に溝を廻らせていたようである。斜面の下方側から順にＳＢ11、12、13とする。

ＳＢ11は４×１間のＬ字に曲がる注穴列で斜面に平行で柱間間隔が揃わない部分もある。棟方向はＮ－35’－Ｅで桁行は6.3mである。伴う後背の溝は建物南端側に僅かに残っている。３棟の中でもっも古いと考えられる。ＳＢ12は２間分の注穴列で梁間方向に展開する柱穴を確認できなかった。棟方向はＮ－36°－ＥでＳＢ11とほぼ同じである。ＳＢ13は５×２間のＬ字に曲がる注穴列である。棟方向はＮ－27°－Ｅで桁行は7.54m、梁間は3.0mである。後背の溝が南端で僅かに曲がっており切り合いから３棟の中でもっとも新しいと考えられる。

出土遺物のうち建物の柱穴から出土のものは11。これ以外に基壇も盛土中などから出土した。１は土師器埦で、２は土師器甕。３は須恵器甕で加工段上からそれぞれ出土した。出土遺物から建物

第294図　下がり松遺跡ＳＢ11～13・出土遺物実測図（遺構：Ｓ＝1／80、遺物：Ｓ＝1／4）

はおおよそ平安時代と考えられる。

５．加工段

斜面を平坦に加工して造成され、さらに柱穴など建物の痕跡がみられない遺構を加工段とする。本来建物が存在したが、流失などにより柱穴が失われた可能性があるものも含んでいる。

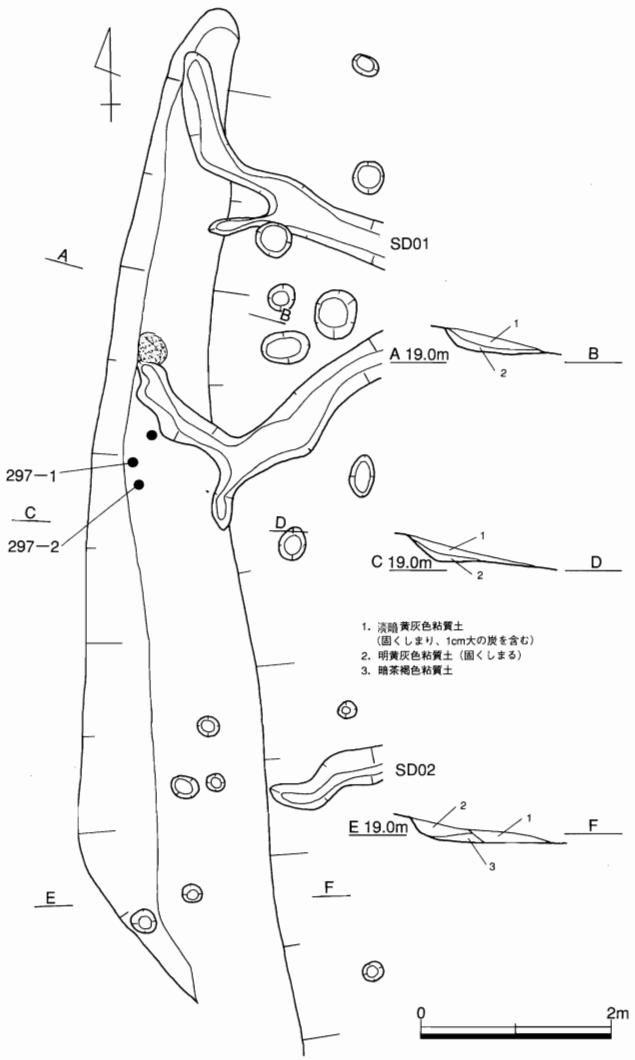
遺跡からは、平坦部から２基、斜面部から２基の加工段が検出された。いずれも残りは悪く、本来は建物があったかもしれない。

加工段１（第295図）

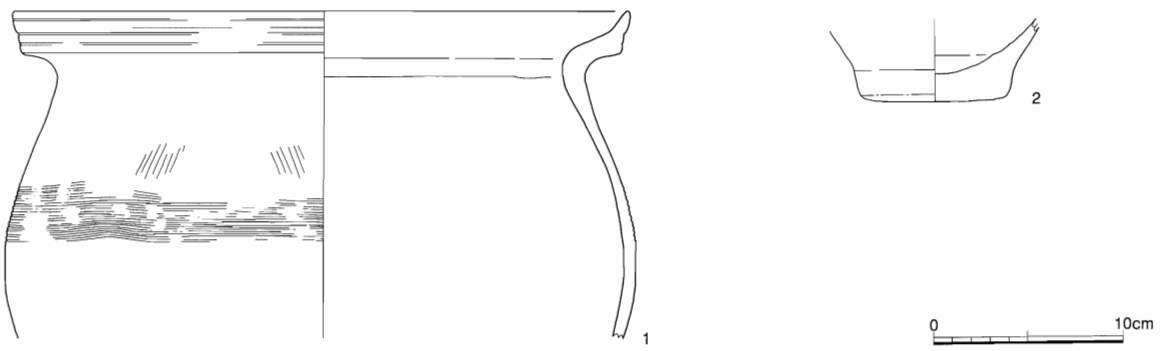
平坦部の南端付近、ＳＢ01の西方６ｍに位置している。ＳＤ01・02と切りあうなど、東側はかなり削平をうけている。現状で10.6ｍ・床面幅1.2ｍを測り、かなり細長い段状遺構であるが、調査区外にも平坦面が続く気配がある。周辺にピット類が多数みられるが、段に伴うように明確な並びを示すものは検出できなかった。また、床面から焼土面も１ヶ所検出されている。

加工段１出土遺物（第296図）

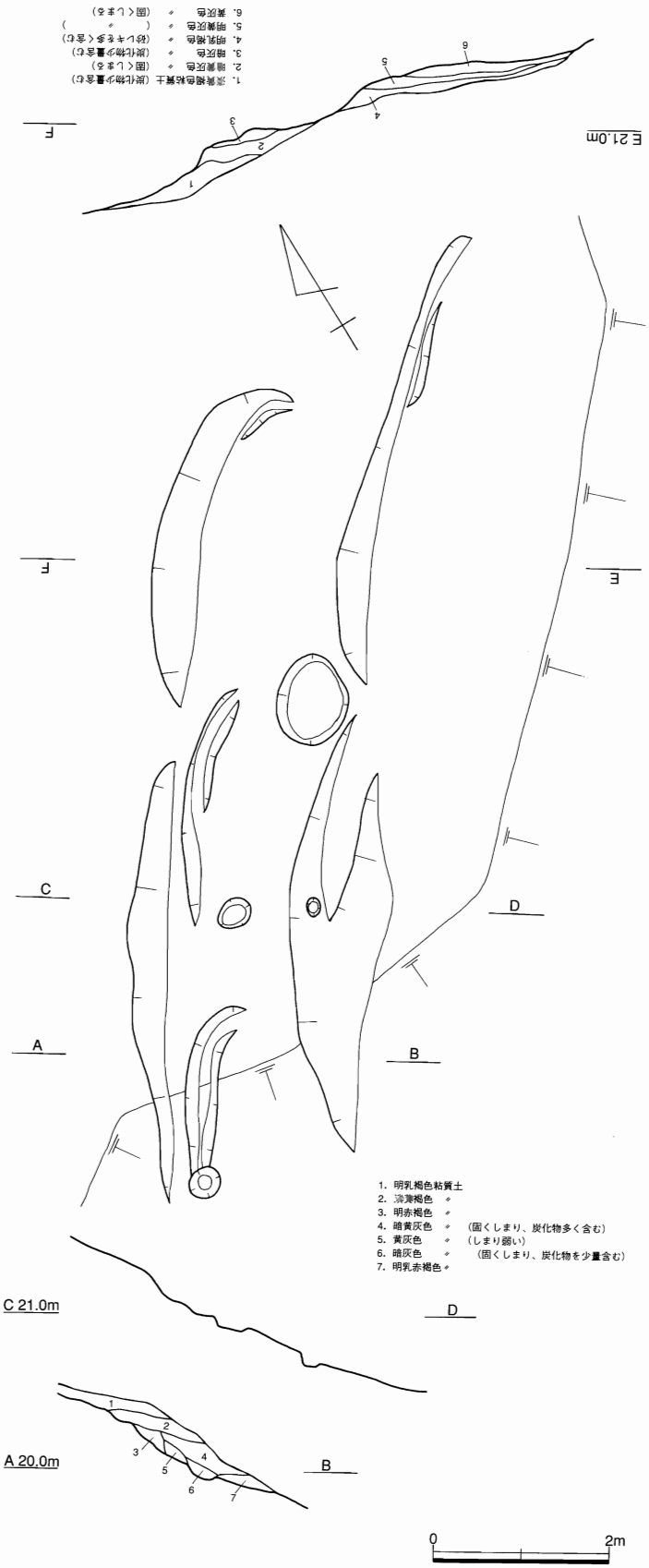
遺物は床面から多数出土しているが、図化できるものは限られていた。２点ほど掲載している。１は複合口縁を呈する甕である。肩部はあまり張らず、口縁はやや外反気味に直立する。外面には３条の凹線文が、胴部にはハケ状工具による直線文が施される。草田２期に相当するとみられる。２は底部である。平底で復元底径は5.5㎝を測る。胎土から１と同一個体の可能性が高いものである。



第295図　下がり松遺跡加工段１実測図（Ｓ＝1／80）



第296図　下がり松遺跡加工段１出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）



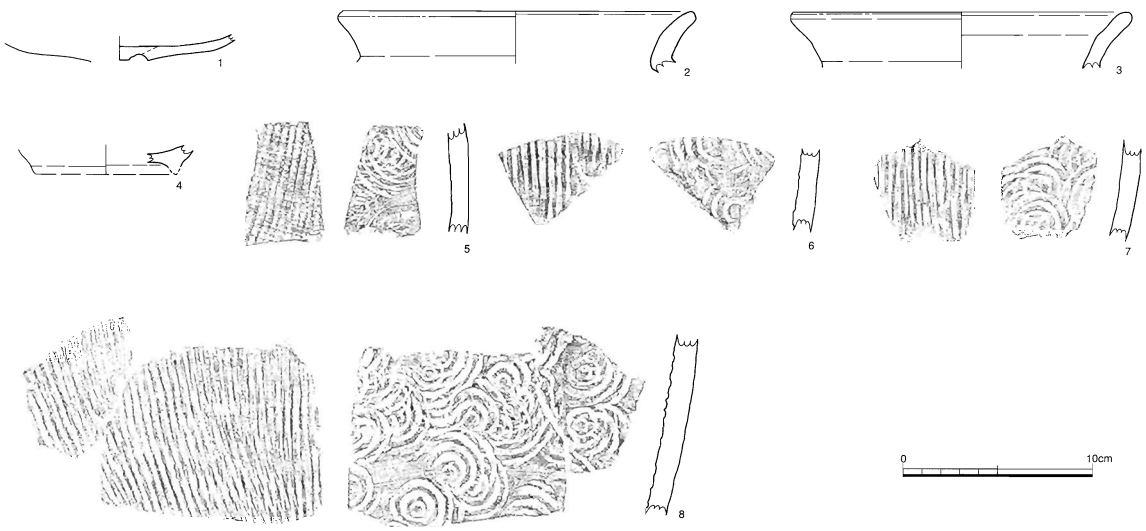
第297図　下がり松遺跡加工段2実測図（S＝1／80）

加工段2（第297図）

斜面部の先端で検出され、標高は20～22mを測る。残りはよくないが、加工段は2段検出され、上下段とも中央付近が途切れている。規模は上段が長さ9.4m・床面幅1.6m、下段が10.6m・床面幅2.2mを測る。上段には壁沿いに幅30cm程の溝が3基検出されたが、いずれも端部が曲がっており、つながる気配はない。またピットも3点検出されたが、大きさは不揃いで配列を示さない。下段は南側でさらに段が分かれており、北側では壁帯溝も一部検出されている。以上のように、加工段2は複数の遺構が重なっている可能性が高いといえるが、土層観察などで切りあい関係を明らかにすることはできなかった。

加工段2出土遺物（第298図）

覆土から複数の遺物が出土している。1は土師器で、高坏の坏部底面である。円盤充填法で作られ、古墳時代前期とみられる。2・3・5～8は須恵器の壺・甕類である。2・3は口縁部、5～8は体部破片である。外面タタキが5は格子目で6～8は平行タタキである。いずれも古墳時代後期以降のものであろうか。4は風化が著しいが、土師質土器の高台付碗である。

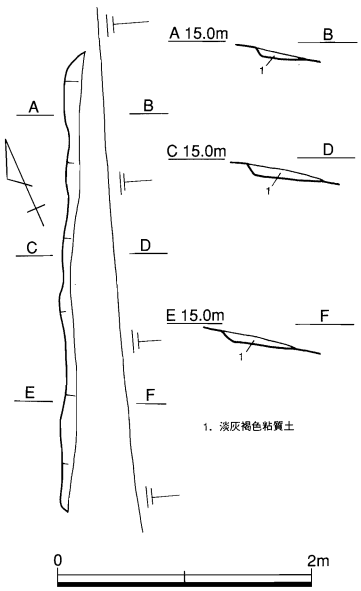


第298図　下がり松遺跡加工段2出土遺物実測図（S＝1／4）

加工段3（第299図）

加工段3は平坦部の2段目で検出された。この平坦部の2段目は、平坦部をさらにもう1段加工して造り出されている。そのため遺構が密集する1段目と比較して、2段目は遺構の分布密度が非常に低い。2段目で検出された建物・加工段状の遺構は加工段3のみである。

加工段3もかなり削平を受けている。床面の大半は流失しており、わずかに長さ3.7m、高さ10cmほどの加工段が残るのみある。遺物も検出されず、時期は不明である。

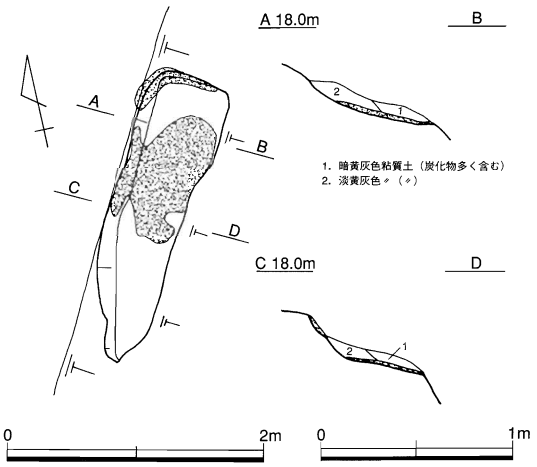


第299図　下がり松遺跡加工段3実測図（S＝1／60）

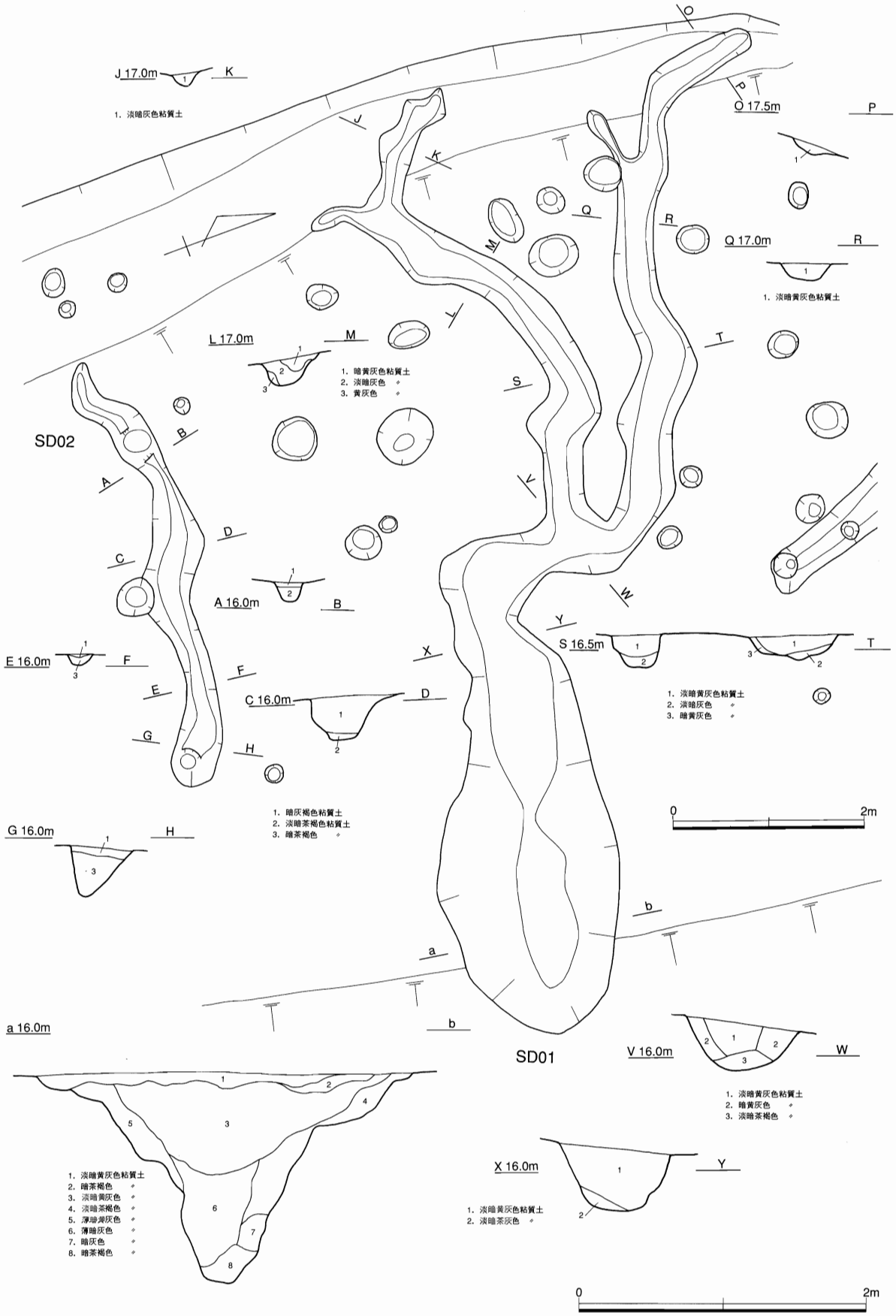
加工段4（第300図）

加工段4は調査区北端の斜面部先端に位置し、標高は19mを測る。加工段4が立地する斜面部の北側は遺構の分布が希薄なところであるが、本来は標高20m前後にはいくつか存在していたのであろう。加工段4も東側はかなり削平をうけているが、加工段の北側隅部が残存している。現状で長さ2.4m・床面幅57cmを測る。また、床面から壁にかけてかなりの広範囲で比熱の痕跡がみられ、覆土にも炭化物が詰まっていた。

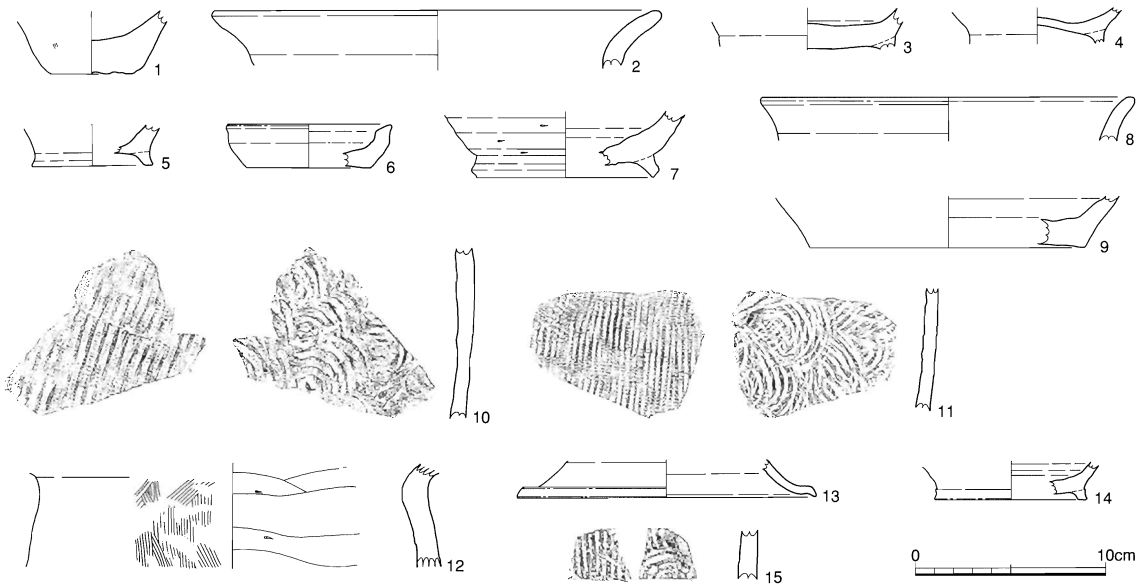
遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第300図　下がり松遺跡加工段4実測図（平面：S＝1／60、断面：S＝1／40）



第301図　下がり松遺跡ＳＤ01,02実測図（平面：Ｓ＝1／60、断面：Ｓ＝1／40）



第302図　下がり松遺跡ＳＤ01，02出土遺物実測図（ＳＤ01：1～11、ＳＤ02：12～15）（Ｓ＝1／4）

６．溝状遺構

溝状遺構は総数24基検出されている。斜面部から平坦部にかけて幅広く分布しているが、遺物を伴うものは限られている。全体的に斜面に直交するかたちで掘り込まれているものが多いが、まれに平行するものも含まれる。斜面に平行に掘り込まれるものは、建物跡の側溝など別の遺構に伴うものである可能性が高い。また、丘陵頂部では道路遺構とみられる溝状遺構も検出されている。

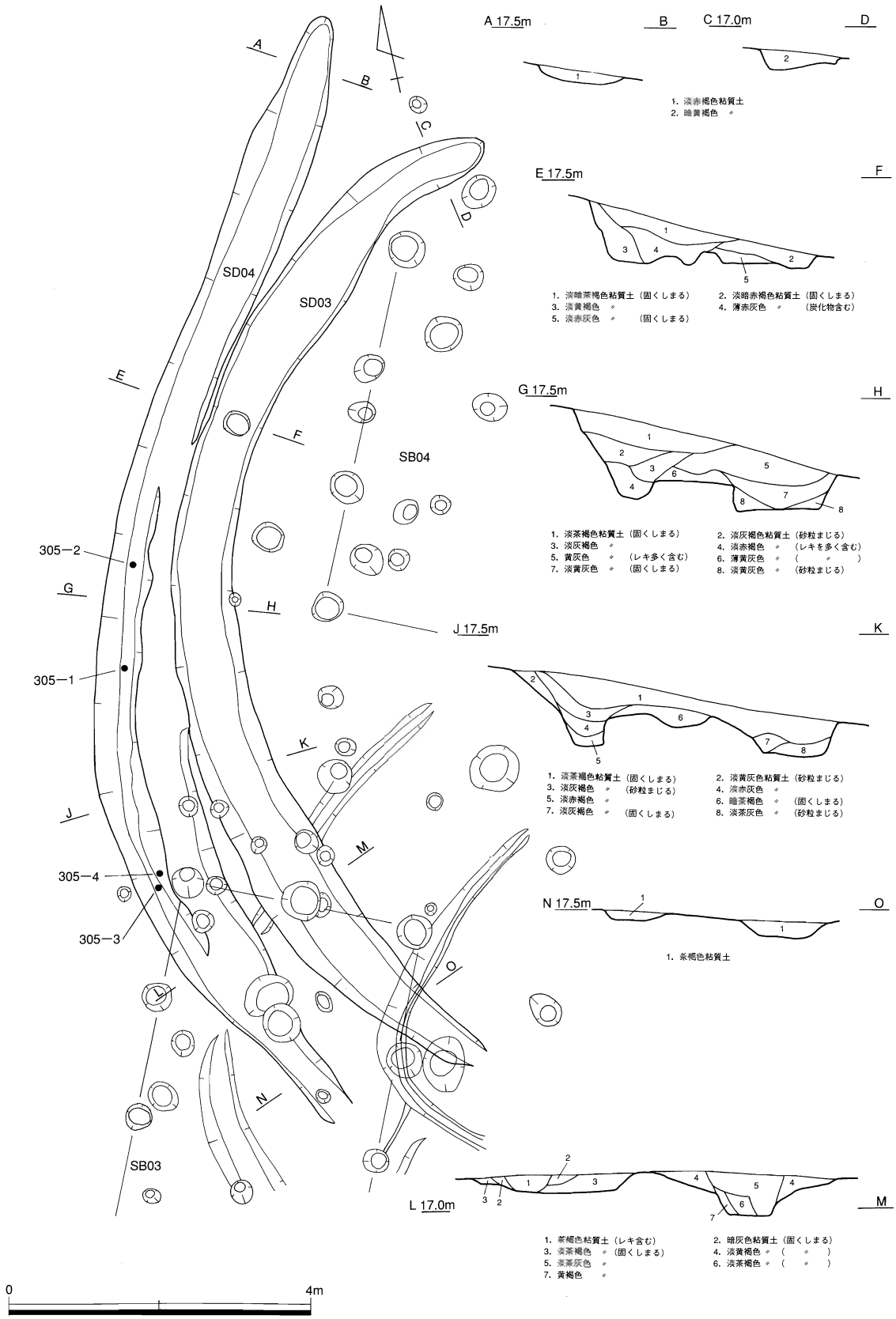
ＳＤ01・02（第301図）

ＳＤ01・02は、平坦面の南壁付近で並列して検出された。いずれも斜面に直交してのびており、基端部は加工段１を堀り込んでいる。ＳＤ01は複雑に蛇行しながらのびており、全長7.2m・最大幅1.3m・最大深1.2mを測る。まず４本の溝が合流して２本になり、そこから2.8m進んだ地点でまた合流して１本になる。そこから南に折れ曲がってのび、さらに東に折れて3.3m進んで行き止まりとなる。深さは徐々に深くなっており、先端部が最も深く断面Ｖ字を呈する。先端部から水が流れ出る構造ではないので、先端部に水を溜める機能をもつと考えられるが定かではない。

ＳＤ02はＳＤ01の南側1.7mに位置している。ＳＤ01と並列して蛇行しながらのびているが、ＳＤ01と比較して全長3.1m・幅38㎝・深さ36㎝と小規模である。

ＳＤ01・02出土遺物（第302図）

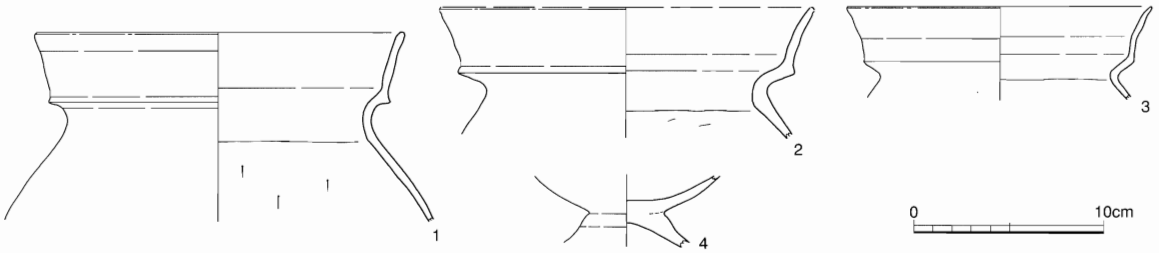
図化した以外にも多数の遺物が出土しているが、ほとんどは磨滅の著しい小片であり流れ込みとみられる。形を復元できるもののみ掲載した。１～11はＳＤ01出土遺物である。１は弥生土器の底部とみられる。２は土師器の甕である。３～５は風化が著しいが、土師質土器の高台付きの碗である。６～11は須恵器である。６は灯明皿である。７は高台付きの壺とみられる。８は甕の口縁、９は平底の甕の底部である。10・11は甕類の体部片である。12～15はＳＤ02出土遺物である。12は土師器甕の胴部である。13は須恵器の坏蓋で、口縁端部が屈曲する。14は高台付き碗で、15は甕の体部片である。これらの時期の特定は難しいが、蓋杯類から概ね８世紀以降のものが多いとみうけられる。



第303図　下がり松遺跡ＳＤ03,04実測図（Ｓ＝1／80）

ＳＤ03・04（第303図）

ＳＤ03・04は平坦部南側に位置し、両者は重なって検出された。周辺にはＳＩ01やＳＢ03・04などが密集し、ＳＤ03・04と切りあっている。両者とも形態は南北方向に弧状にのびるが、ＳＤ04は



第304図　下がり松遺跡ＳＤ04出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）

北端部が直線状にのびている。規模はＳＤ03が全長14.6m・幅1.0m・最大深52cm、ＳＤ04が全長15.6m・幅1.3m・最大深1.2mを測る。両者とも同規模であるが、土層観察からＳＤ04が後から掘り込まれたとみられる。また、ＳＤ04は途中でさらに２段に掘り込まれている。

ＳＤ04出土遺物（第304図）

ＳＤ03からは遺物が出土していない。ＳＤ04では、溝内底面から数点まとまって遺物が出土している。１～４は複合口縁を呈する甕である。いずれも薄手で、外面は無文である。口縁先端は尖り気味に丸くおさめている。５は低脚杯である。これらの遺物は草田４・５期に相当し、弥生時代後期末とみられる。

さてＳＤ03・04の性格であるが、その形態から竪穴建物の側溝である可能性が高く、この溝に対応する建物跡は削平により消失したとみられる。時期的にも、弥生時代後期中葉のＳＩ01の覆土を掘り込んでいることから矛盾しない。

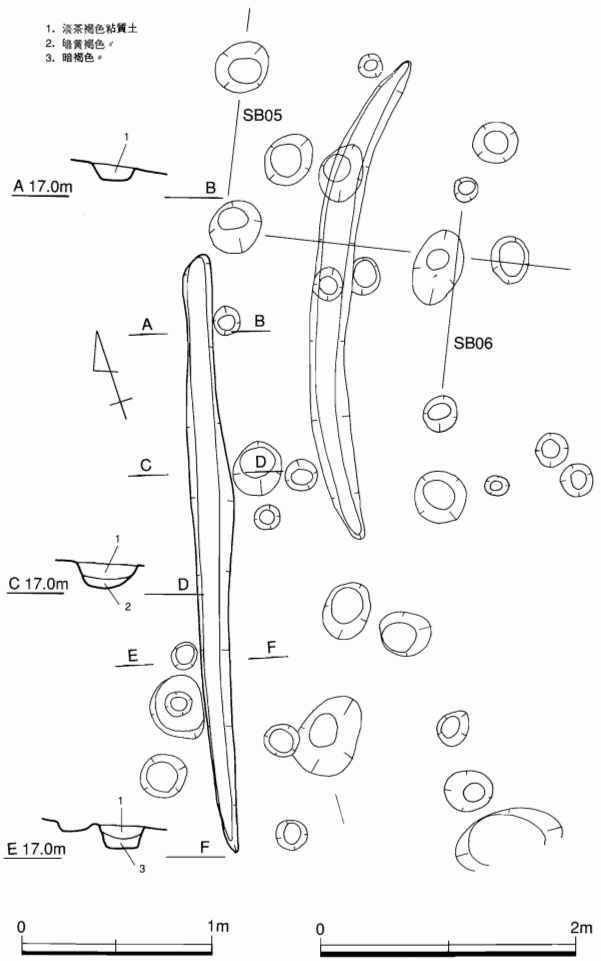
ＳＤ05（第281図）

248Ｐで記述している。

ＳＤ06（第305図）

ＳＢ06のすぐ西隣に位置している。南北方向に平行し、直線状に細長くのびた溝である。規模は長さ4.8m・幅36cm・深さ21cmを測る。本来ＳＤ06は、ＳＢ06の例から建物の側溝と思われるが、この溝に対応する柱列を検出することはできなかった。従って現状では溝状遺構として扱っている。

溝内から遺物は検出されていない。

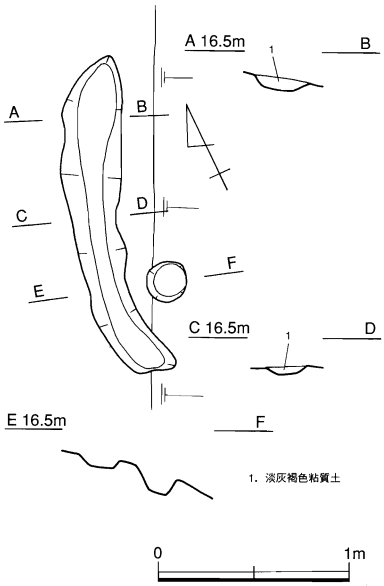


第305図　下がり松遺跡ＳＤ06実測図（平面：Ｓ＝1／60）

ＳＤ07（第306図）

ＳＤ07は平坦部のほぼ中央の先端部に位置し、南北方向に平行してやや弧状にのびている。規模は、長さは1.8m・幅32cm・深さ10cmを測る小規模なものである。なお、溝のすぐ東隣にピットが１点検出されている。溝はこのピットを巻き込むようにのびており、両者は一連ものとも考えられる。従ってＳＤ07は建物跡の側溝である可能性があるが、不明瞭な点が多いので、ここでは溝状遺構として扱った。

溝内から遺物は出土していない。

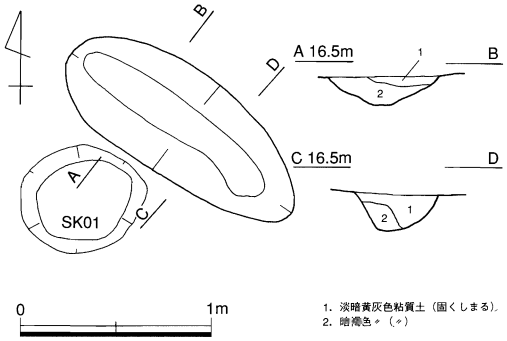


第306図　下がり松遺跡ＳＤ07実測図（Ｓ＝1／40）

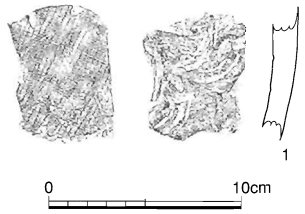
ＳＤ08（第307図）

平坦部の中央からやや南寄り付近、ＳＤ07から南方４ｍに位置する。南側にはＳＫ01が隣接している。溝は東西方向にのびており、規模は長さ1.4ｍ・幅58cm・深さ22cmを測る楕円形の溝である。

溝内より、須恵器甕の体部片とみられる遺物が出土している（第308図）。



第307図　下がり松遺跡ＳＤ08実測図（Ｓ＝1／40）

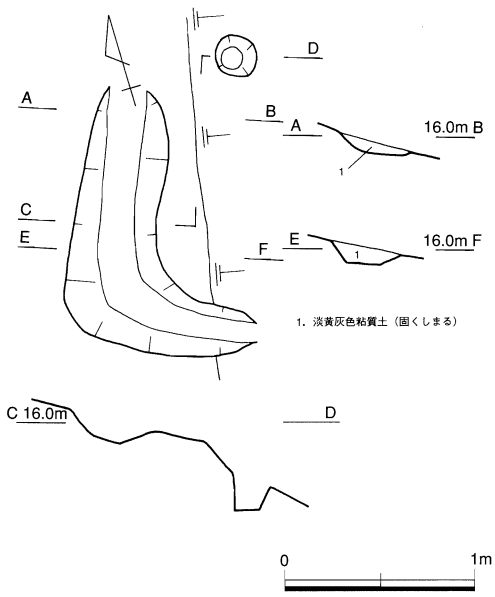


第308図　下がり松遺跡ＳＤ08出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）

ＳＤ09（第309図）

平坦部のほぼ中央で検出された。平坦面の先端部に位置しており、東側は削平により流失している。途中で屈曲しており、その形態から建物の側溝の南隅ともみうけられる。規模は全長２ｍ・幅42cm・深さ12cmを測る。溝のすぐ北西隣にピットが１点検出されているが、溝との関連は不明である。

溝内から遺物は出土しおらず、時期は不明である。

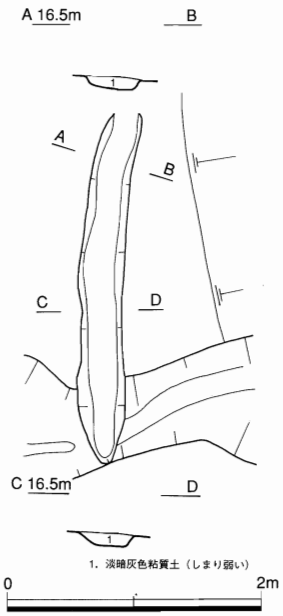


第309図　下がり松遺跡ＳＤ09実測図（Ｓ＝1／40）

ＳＤ10（第310図）

平坦部の中央よりやや北側に位置し、ＳＤ15の覆土を掘り込んでいる。南北方向に平行して、やや丸みを帯びながら直線状にのびている。規模は長さ2.8m・幅36cm・10cmを測り、形態や規模はＳＤ06や07、09と類似する。溝の性格としては建物の側溝等の機能が考えられるが、対応する柱穴が検出されず、定かでない。

溝内より遺物が検出されず時期は不明だが、ＳＤ15の覆土を掘り込んでおり、ＳＤ15よりは新しいといえる。

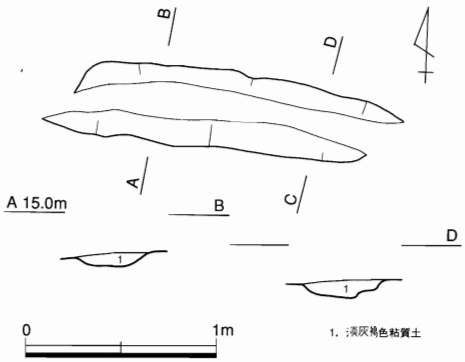


第310図　下がり松遺跡ＳＤ10実測図（Ｓ＝1／60）

ＳＤ11（第311図）

調査区の南側、平坦部の２段目から検出された。斜面に直交して掘り込まれ、東西方向に平行して直線状にのびている。規模は長さ1.9m・幅42cm・深さ８cmを測る小規模な溝状遺構である。

溝内より遺物は出土しておらず、時期や性格は不明である。

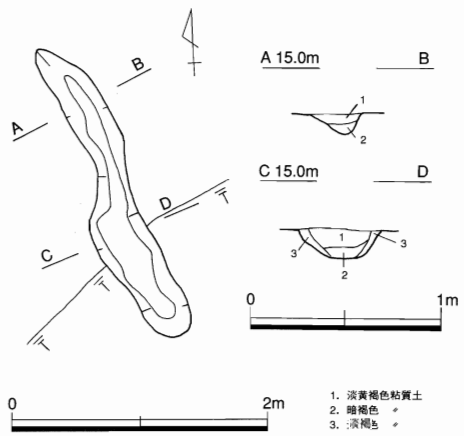


第311図　下がり松遺跡ＳＤ11実測図（Ｓ＝1／40）

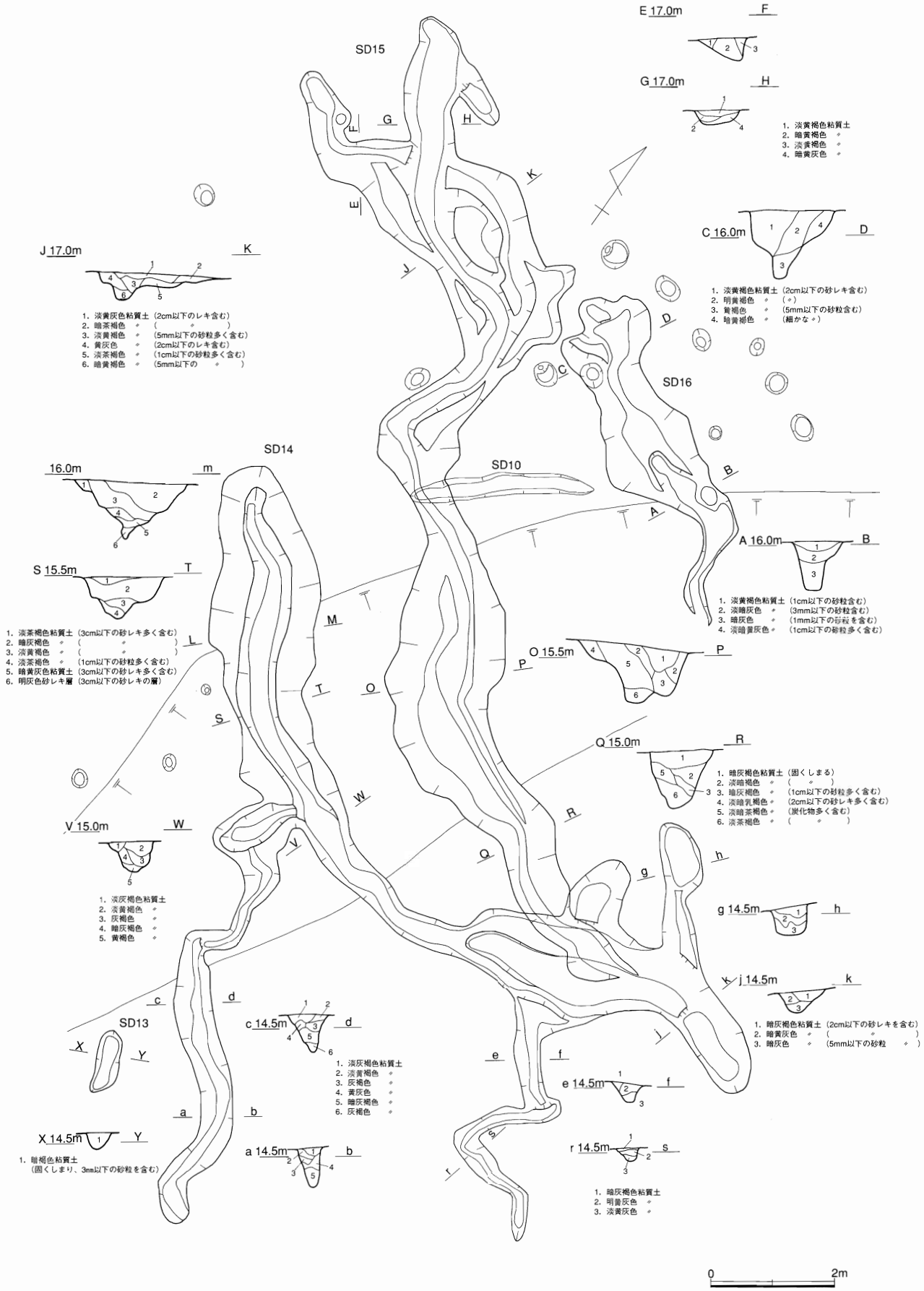
ＳＤ12（第312図）

平坦部の２段目に位置し、中央からやや北寄りで検出された。斜面に直交気味に掘り込まれ、南東方向に蛇行しながらのびている。規模は長さ2.5m・幅42cm・深さ24cmを測る。

遺物は出土しておらず時期や性格は不明である。しかしながら、後述するＳＤ13・14・15・16と方向や規模をを同じくしており、これらと関連があると思われる。



第312図　下がり松遺跡ＳＤ12実測図（平面：Ｓ＝1／60、断面：1／40）



第313図　下がり松遺跡ＳＤ13～16実測図（Ｓ＝1／90）

ＳＤ13・14・15・16及び出土遺物（第313・314・315図）

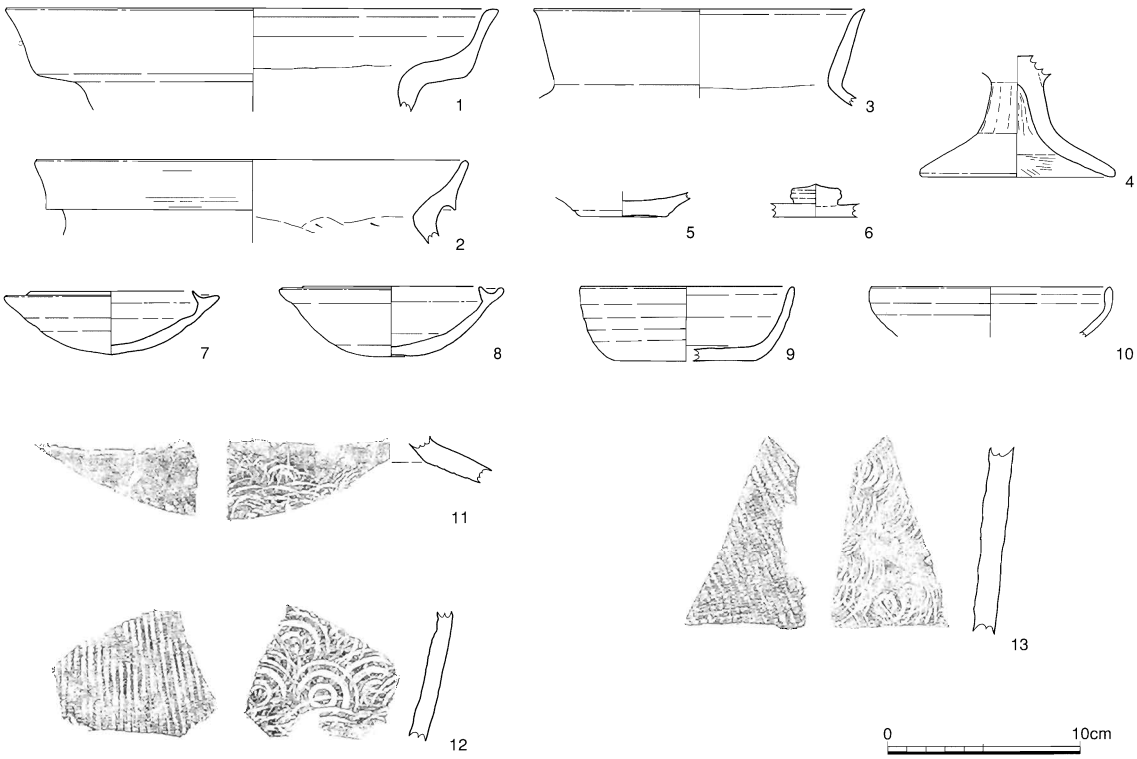
この４基の溝状遺構は同方向に並列して検出された。平坦部の北側寄りに位置し、斜面に直交するかたちで掘り込まれている。これらは何らかの関連があると考えられるので、ここでまとめて記述する。

ＳＤ13は最も南に位置しており、規模は長さ1.0ｍ・幅39㎝・深さ29㎝を測る小規模な溝である。溝内から遺物は出土しておらず、時期や性格は不明である。なお、隣接するＳＤ14と方向や規模が類似しており、本来はＳＤ14と合流していた溝の残存部なのかもしれない。

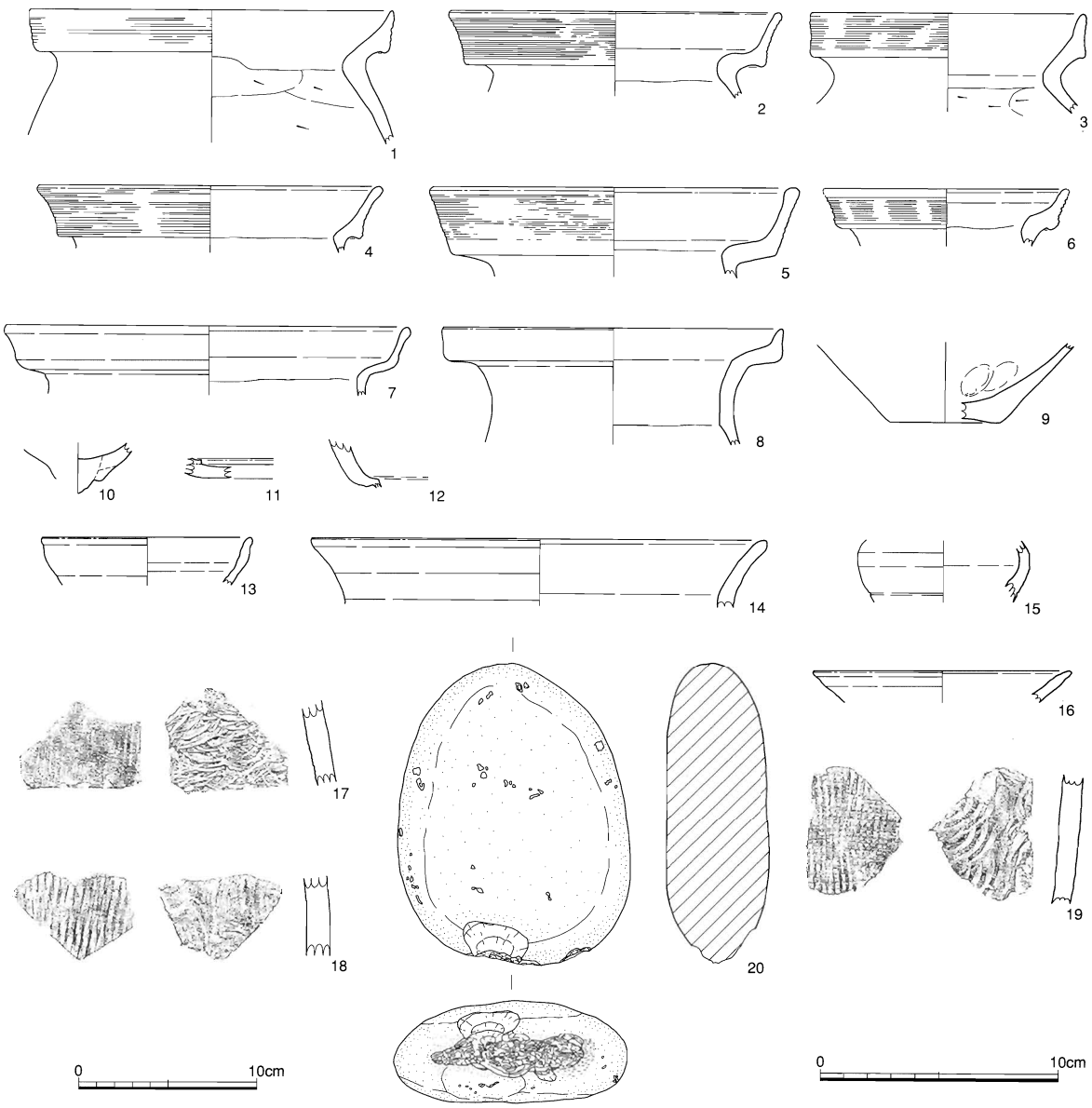
ＳＤ14は５本の溝から形成されている。基点は平坦部の１段目にあるが、蛇行しながら平坦部２段目にまたがってのびている。規模は一様でないが、最大長14.4ｍ・最大幅1.8ｍ・最大深97㎝を測る。溝が途中で２つに分かれたり、終点付近では３つの溝が合流するという複雑な形状を呈している。終点付近は逆台形状に深く掘り込まれており、水溜のような機能があったことを伺わせる。

ＳＤ14からは様々な遺物が出土しているが、大半は磨滅が著しく、残りのよい13点について図化した（第314図）。いずれも流れ込みと思われる。１・２は複合口縁を呈する壺・甕類である。１は壺とみられ、口縁端部に面をもつ。古墳時代前期とみられる。２は甕であり、外面にかすかに平行沈線文が確認できる。草田２期か。３は単純口縁の土師器甕である。口縁は逆ハ字状に立ち上がる。４は土師器の高坏の脚部である。５は土師質土器皿の底部である。底面に回転糸切り痕が残る。６～13は須恵器である。６～10は坏・碗類である。６は坏蓋片で擬宝珠状つまみがつく。７・８は小型で受部が付く坏身である。大谷編年出雲６期とみられる。９は高台のつかない碗である。底部に回転糸切り痕が残る。10は口縁が先端にかけて屈曲して立ち上がる。９・10は８世紀後半代とみられる。11～13は壺・甕類の肩部・体部片である。

ＳＤ15はＳＤ14の北側に隣接している。規模は最大長18.3ｍ・最大幅2.0ｍ・最大深1.2ｍを測る。



第314図　下がり松遺跡ＳＤ14出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）



第315図　下がり松遺跡ＳＤ15,16出土遺物実測図（ＳＤ15：1～18、ＳＤ16：19・20）（1～19：Ｓ＝1／4、20：Ｓ＝1／3）

２本の溝が途中で合流し、４ｍほど西方に進んだ付近で鍵状に折れ曲がる。そして西方にそのままのびて終点という複雑な形状を呈している。検出時には、ＳＤ15がＳＤ14の覆土を掘り込んいるように見受けられた。

ＳＤ15からも多数の遺物が出土しているが、大半は磨滅が著しいものであった（第315図１～18）。１～８は複合口縁を呈する壺・甕類で、溝の１・３は口縁が直立し、２・４～６は口縁が外反する。いずれも外面に平行沈線文が施されている。７は甕で口縁は無文である。８は壺で、口縁が短く直立する。これらは１・３・６・８が草田２期、２・４・５・７が草田３期に相当するとみられる。９は平底で弥生土器の底部とみられる。10は土師器の高坏である。11～18は須恵器である。11は輪状つまみのつく坏蓋片である。12は高坏脚部の端部である。13は坏身で、口縁端部がくびれる。14は甕の口縁である。15は碗、16は皿とみられる。17・18は甕の体部片である。これらの須恵器は概ね８世紀以降のものと考えられる。

ＳＤ16はＳＤ15の北側に隣接している。規模は長さ6.0m・幅1.6m・深さ84㎝を測り、ＳＤ14・15と比較して小規模であるが、形態は同様に複雑である。基点が最も幅広くそのまま西方にのびる

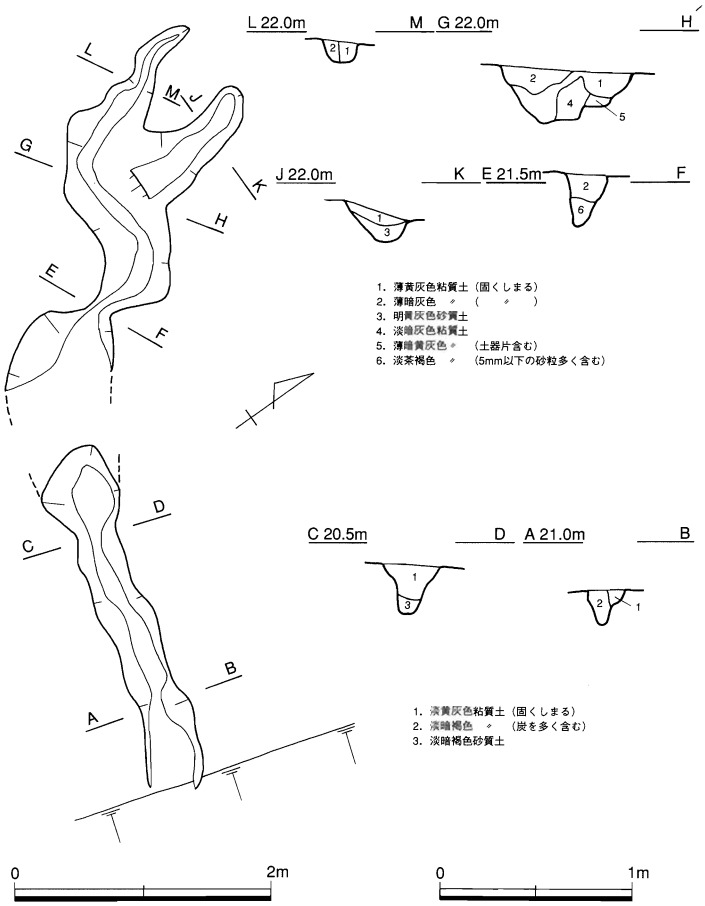
が、終点付近では幅が一気に窄まり、そのまま鍵状に蛇行してのびるという特異な形状を呈する。

ＳＤ16からは磨滅した小片が多く出土している。ここでは２点掲載した（第315図19・20）。19は須恵器甕の体部片である。20は敲石である。長さ13㎝、幅9.8㎝、厚さ4.4㎝を測る。側面に敲打痕がみられる。

これらの溝の時期であるが、出土遺物は概ね弥生時代後期と古墳時代後期以降に分類できる。ＳＤ15の弥生土器群は溝内の下層から出土していることから、これらの溝は弥生後期に掘られ、その後破棄された後、古墳時代後期以降に至り再利用されたといえるのではないか。その際、掘り直されたり別の溝が掘られたため、このように複雑な形状を呈しているものと推測される。

ＳＤ17（第316図）

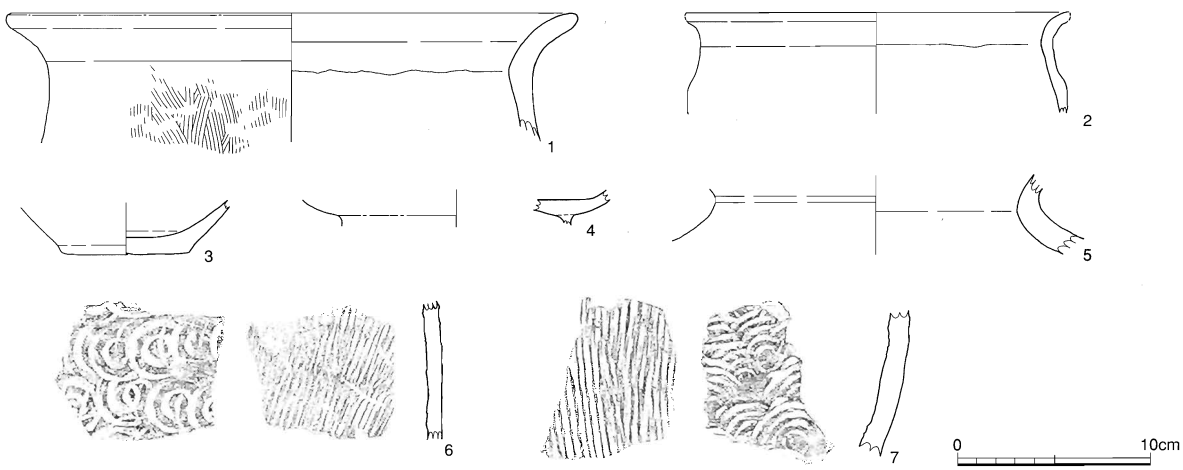
ＳＤ17は斜面部の中央付近に位置する。斜面の先端に立地し、斜面に直交するかたちで掘り込まれている。溝は東側と西側に分かれて検出されたが、後世の削平によるものとみられ、本来は１本の溝であったと考えられる。復元すると、全長6.3ｍ・最大幅1.0ｍ・最大深45㎝の溝となる。西側の溝は急に向きを変えたり窄まったりするが、東側の溝はほぼ直線状にのびている。この特徴は平坦部で検出されたＳＤ14・15・16に非常に類似することから、ＳＤ17はこれらと同様の機能をもつ溝状遺構と考えられるだろう。



第316図　下がり松遺跡ＳＤ17実測図（平面：Ｓ＝1／60、断面：Ｓ＝1／40）

ＳＤ17出土遺物（第317図）

溝内から多数の遺物が出土している。１は土師器の甕である。口縁が大きく

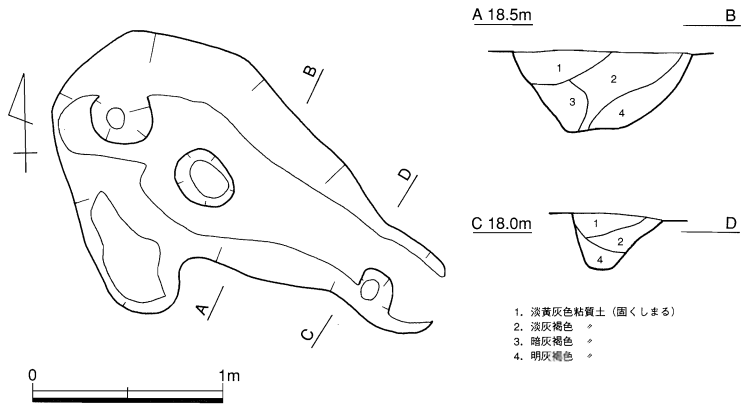


第317図　下がり松遺跡ＳＤ17出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）

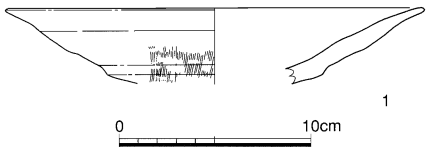
外反する。2は風化が著しいが土師器甕とみられる。器壁が薄手で、口縁先端が磨滅していることから、本来は複合口縁の甕であった可能性もある。3は土師質土器の坏である。4～7は須恵器である。4は皿の底部で高台がつく。5は甕の頸部、6・7は体部破片である。これらの時期の特定は難しいが、概ね古墳時代後期以降のものである。

ＳＤ18（第318図）

ＳＤ18は調査区北側の斜面部に位置する。斜面部先端の削平面に立地していることから、溝自体もかなりの削平を受けていると思われる。斜面に直交するかたちで東西方向にのび、現状で規模は長さ2.3m・幅1.4m・深さ42cmを測る。底面が平坦で逆台形状に掘り込まれているが、出口にかけ窄まる傾向があったり、堀り形も不整形である。この溝のちょうど延長上には、ＳＤ15が位置しており、或いは、本来両者は1つの溝であった可能性も考えられる。



第318図　下がり松遺跡ＳＤ18実測図（Ｓ＝1／40）



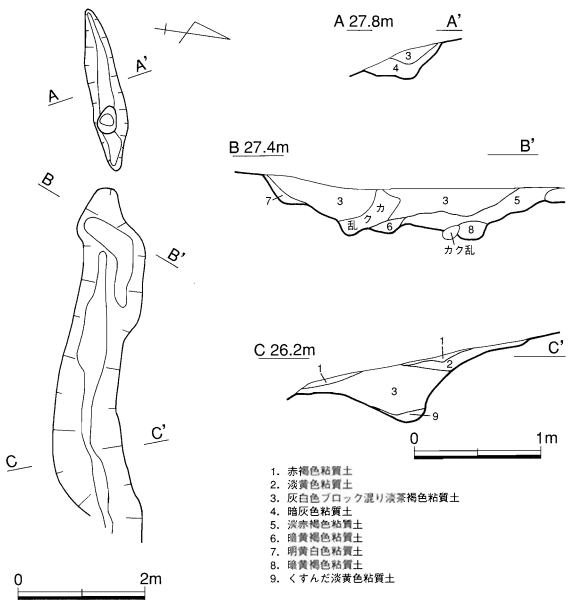
第319図　下がり松遺跡ＳＤ18出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）

ＳＤ18出土遺物（第319図）

溝内より遺物が1点出土した。1は土師器の高坏の坏部である。坏に深さはなく、口縁と底面の境に段をもつ。古墳時代中期（松山Ⅱ期）とみられ、遺物からみるとＳＤ15とは差異がある。

ＳＤ20（第320図）

古墓の南側に位置する。標高28m付近から古墓前面の道まで斜面を斜行するように伸びている。途中途切れてはいるが全長約8.5mで、深さは最大0.46mである。埋土の大半は斜面上方に見られる地山由来の粘質ブロックで、出土遺物はない。形状から溝としたが、尾根から下る道の可能性が高い。



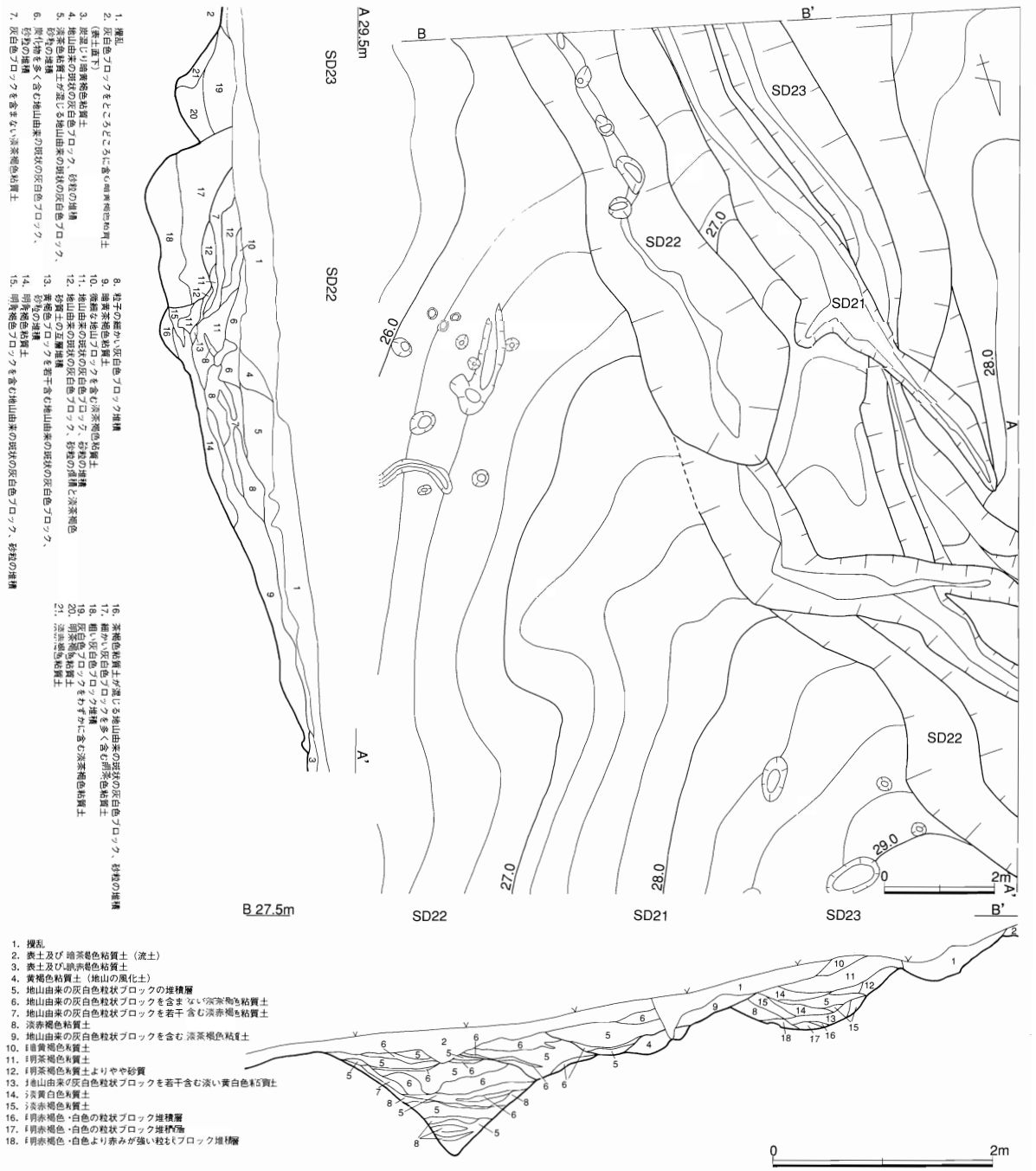
第320図　下がり松遺跡ＳＤ20実測図（平面：Ｓ＝1／120、断面：Ｓ＝1／60）

ＳＤ21，22，23（第321図）

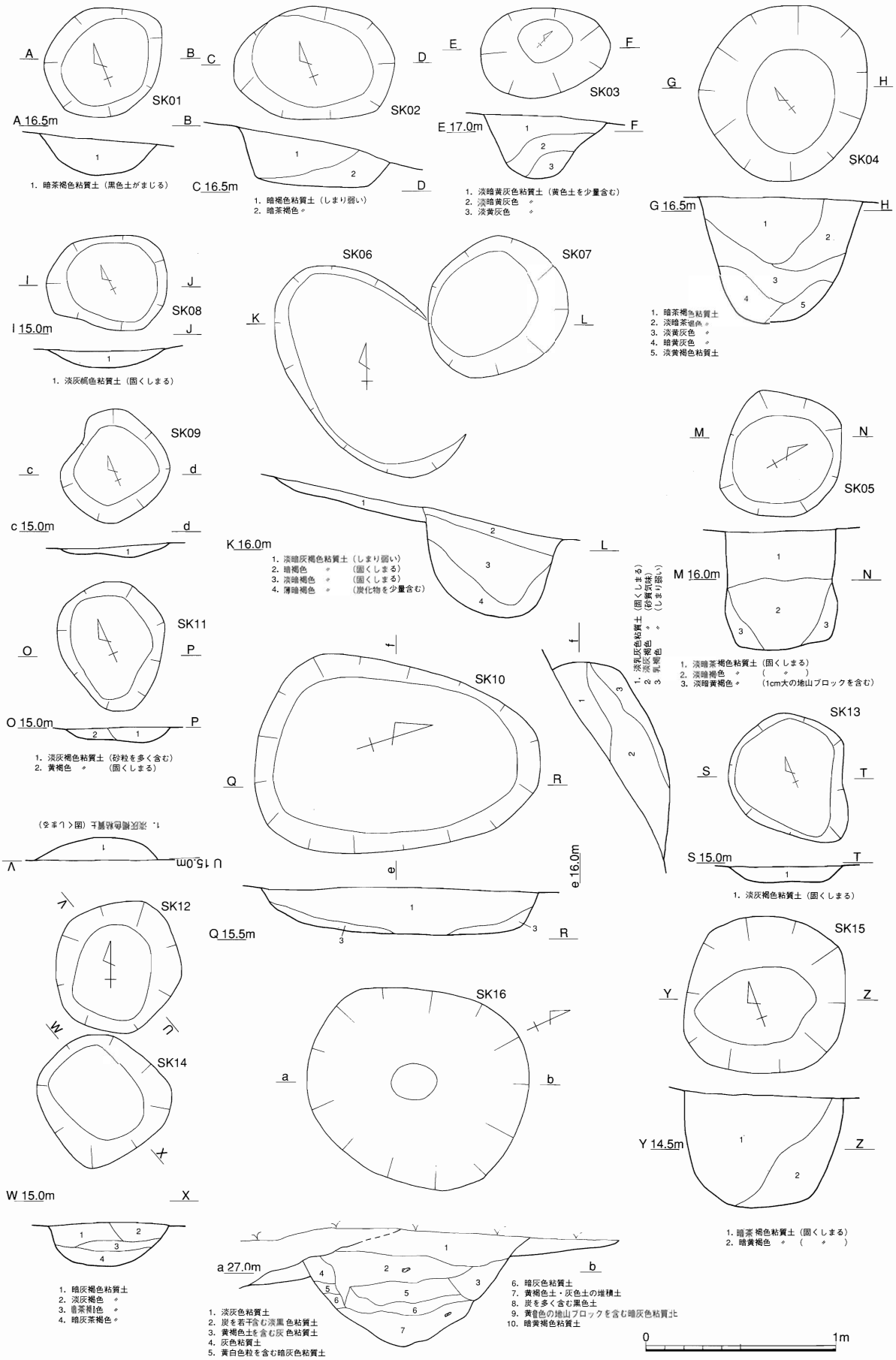
調査区の南西隅に位置する。丘陵尾根状にあたりトレンチ調査で確認した溝状の遺構の続きである。丘陵先端から角谷遺跡を経て尾根筋を縦断しているので溝ではなく道と考えた方が自然であろう。検出範囲は限られているがおおよそ尾根筋を南から北に向け伸びている。3条の溝を切り合い関係から確認できた新しい順にＳＤ21、22、23とする。ＳＤ21は調査区南端で他の2本の溝に挟まれて位置し、最も新しい。北端は浅くなって消え

ている。ＳＤ22はＳＤ21の東側に位置する。他の２本が蛇行するのに比べＳＤ22は途中で大きく折れ曲がる。またこの屈曲点の南側で１ｍ近く段差を持ち、埋土が細かい互層となって堆積している。調査区西壁の断面（Ａ－Ａ’）を見ると明らかに埋土に切り合いが認められ、平面的には同じ方向性を持ちながら複数が重複していたものと思われる。かなり長期間にわたって補修しながら使用されたものと思われる。ＳＤ23は最も古い。南端では一番西に位置し、やや蛇行しながら伸びる。

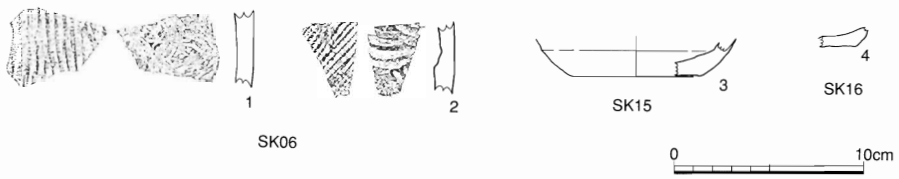
これらの遺構からは全く遺物は出土しなかったため時期は不明である。ただし、ＳＤ22の北端が８世紀代の遺物が出土したＳＢ08の埋土に覆われていることから、これより古い可能性もある。



第321図　下がり松遺跡ＳＤ21～23実測図（平面：Ｓ＝1／120、断面：Ｓ＝1／60）



第322図　下がり松遺跡ＳＫ01～16実測図（Ｓ＝1／30）



第323図　下がり松遺跡ＳＫ06,15,16出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）

7．土　坑

土坑は総数16基検出されている。分布状況をみると、調査区の中央から南側に限られており、ほとんどは平坦部で集中的に検出されている。遺物が出土した例はわずかで、時期が特定できていないものが大半である。

ＳＫ01（第322図）

平坦部に位置し、ＳＤ08・ＳＫ05に隣接する。不整円形を呈し、長さ65cm・幅55cm・深さ19cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ02（第322図）

平坦部に位置し、ＳＫ01の北西１ｍに立地する。不整楕円形を呈し、底部は平坦に掘り込まれている。長さ84cm・幅60cm・深さ25cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ03（第322図）

平坦部に位置し、ＳＫ02の北西1.1ｍに立地する。不整楕円形を呈し、長さ67cm・幅48cm・深さ34cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ04（第322図）

平坦部の中央からやや北寄りに位置し、周辺からはピット以外の遺構が検出されていない。不整円形を呈し、長さ98cm・幅88cm・深さ65cmを測る比較的大型の土坑である。遺物は出土していない。

ＳＫ05（第322図）

平坦部に位置し、ＳＫ01の南西に隣接する。不整円形を呈し、長さ65cm・幅60cm・深さ62cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ06（第322図）

平坦部の中央付近に位置し、ＳＫ07と切りあっている。楕円形を呈し、長さ1.2ｍ・幅79cm・深さ６cmを測る浅い土坑である。遺物は須恵器の甕片が２点出土した（第323図１・２）。

ＳＫ07（第322図）

ＳＫ06と重なっており、ＳＫ06の覆土を掘り込んでいる。不整円形を呈し、長さ75cm・幅68cm・深さ46cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ08（第322図）

平坦部の２段目の南寄りに位置する。不整円形を呈し、長さ63cm・幅50cm・深さ９cmを測る浅い土坑である。遺物は出土していない。

ＳＫ09（第322図）

平坦部２段目に位置し、ＳＫ08の北方2.5ｍに立地する。不整円形を呈し、長さ60cm・幅57cm・深さ６cmを浅い土坑である。遺物は出土していない。

ＳＫ10（第322図）

平坦部１段目と２段目の間の加工斜面に位置し、すぐ西にはＳＩ01が隣接する。不整楕円形を呈し、長さ1.5m・幅1.3m・深さ35cmを測る大型の土坑である。遺物は出土していない。

ＳＫ11（第322図）

平坦部２段目に位置し、ＳＫ09の北方2.6mに立地する。不整楕円形を呈し、長さ68cm・幅56cm・深さ８cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ12（第322図）

平坦部２段目に位置し、ＳＫ11の北方5.5mに立地する。ＳＫ14に隣接している。不整円形を呈し、長さ71cm・幅65cm・深さ11cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ13（第322図）

平坦部２段目に位置し、ＳＫ12の北方2.5mに立地する。不整円形を呈し、長さ73cm・幅63cm・深さ９cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ14（第322図）

ＳＫ12のすぐ南側に隣接する。不整円形を呈し、長さ65cm・幅61cm・深さ23cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ15（第322図）

平坦部２段目に位置し、北方にはＳＤ13～16が存在する。不整円形を呈し、長さ92cm・幅82cm・深さ59cmを測る。遺物は須恵器の坏身片が１点出土した。８世紀代とみられる。

ＳＫ16（第322図）

斜面部に位置し、ＳＤ19の北側に隣接する。不整円形を呈し、長さ116cm・幅101cm・深さ62cmを測る。遺物は須恵器の碗の小片が１点出土した。

８．性格不明遺構（ＳＸ）

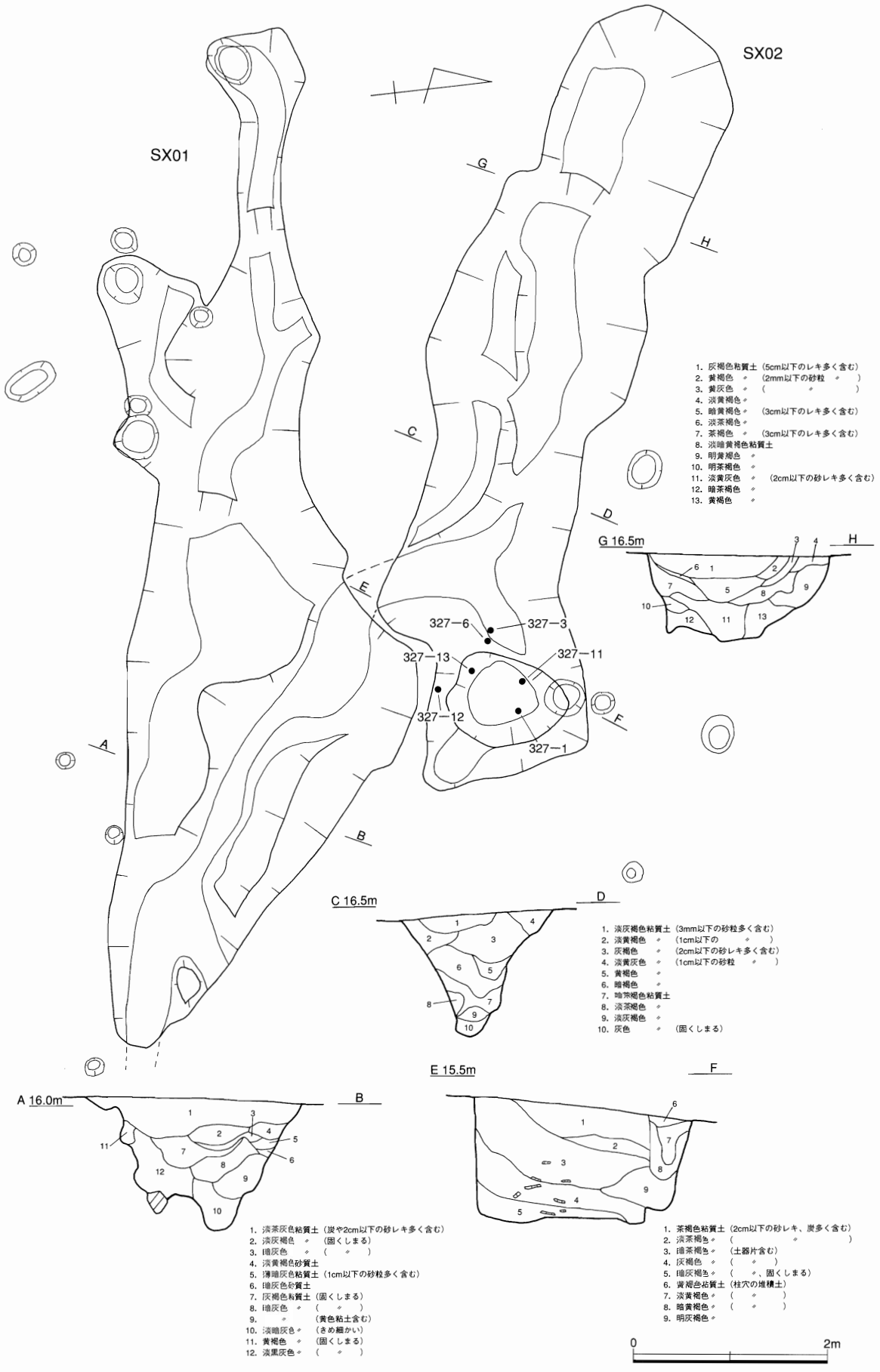
性格不明の遺構として２基（ＳＸ01・02）を検出した。いずれも調査区平坦部の北端に位置し、２基並列して掘り込まれている。形態的には溝状の遺構であるが、他の溝状遺構とは規模などが明らかに異なるので、ＳＸとして区別した。

ＳＸ01（第324図）

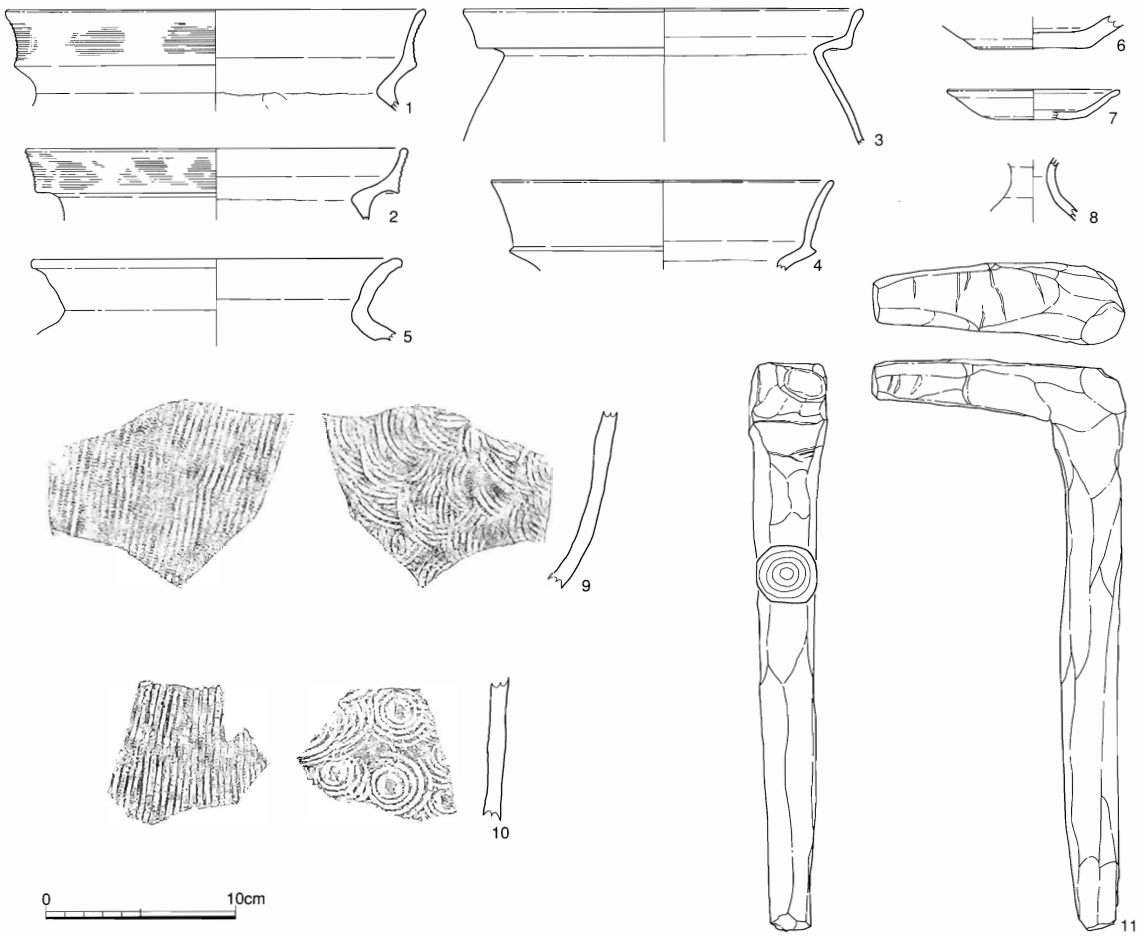
南側をＳＸ01とした。斜面に直交して南東方向にのびており、規模は、現状で全長10.9m・最大幅3.0m・最大深1.5mを測る。基点は細長い溝状を呈するが、徐々に階段状に深く、幅広く掘り込まれていく。終点はさらに西方に向かってトンネル状に続いていたが、安全面を考慮して調査は断念した。底面から須恵器片や土堰具の柄が出土している。

ＳＸ02（第324図）

ＳＸ02はＳＸ01と並列して検出された。規模は全長8.6m・最大幅2.1m・最大深1.3mを測る。形態はＳＸ01と異なり、基点から終点までほぼ一定の幅で掘り込まれているが、深さは同様に階段状に深くなっている。さらに終点付近はトンネル状にＳＸ01と繋がっている。なお、この終点付近は断面方形状にしっかりと掘り込まれ、底面から複合口縁の土器が多量に出土した。この先端部には本来はＳＸ02とは別の、土坑状の堀り込みがあった可能性がある。



第324図　下がり松遺跡ＳＸ01,02実測図（Ｓ＝1／60）



第325図　下がり松遺跡ＳＸ01出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）

ＳＸ01出土遺物（第325図）

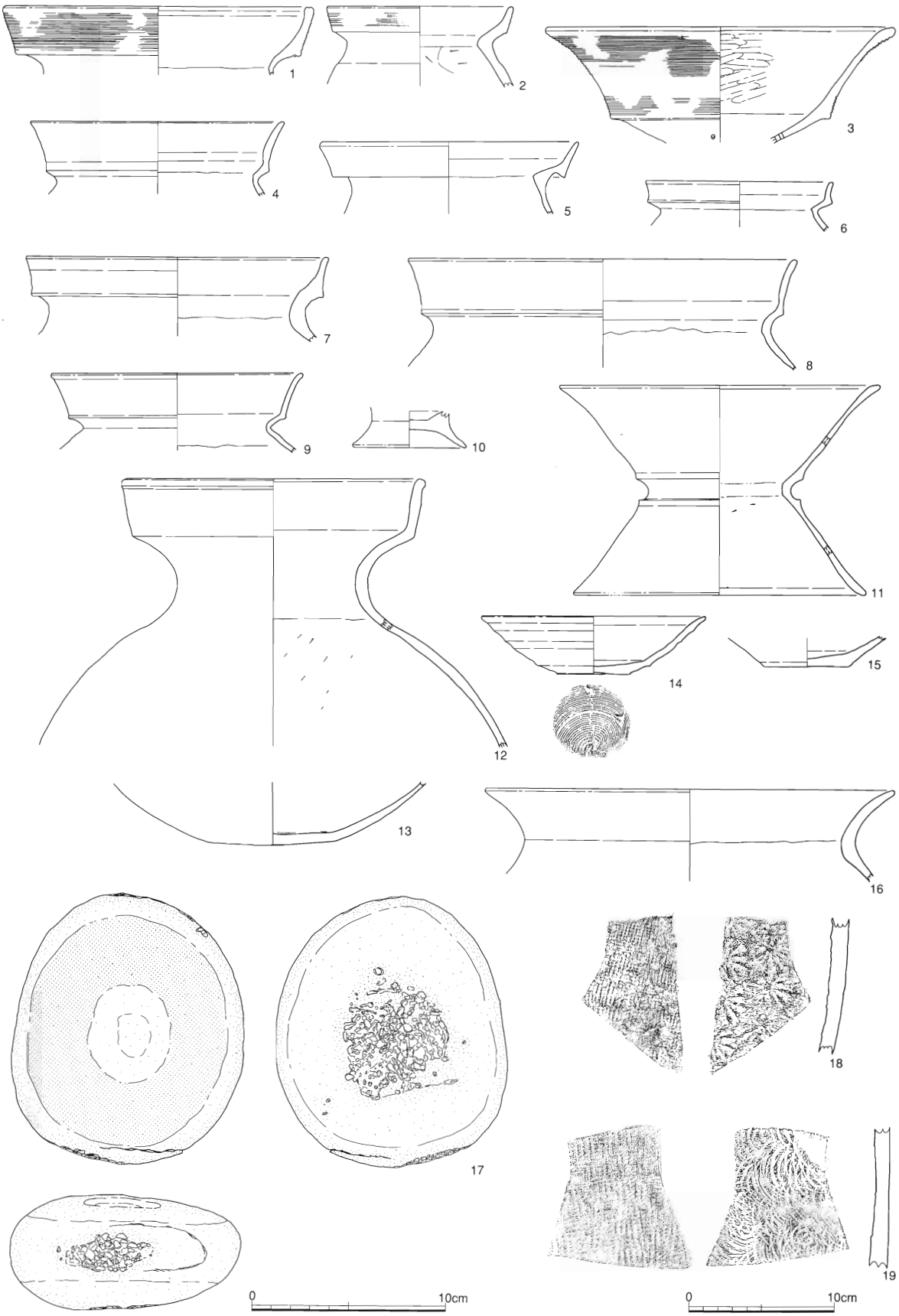
1～8は上層から出土した。1～4は複合口縁を呈する甕である。いずれも磨滅しているが、1・2は口縁が外反気味にひらき、平行短線文が施されている。3は器壁が薄手で頸部は短く、口縁も短く外反して立ち上がる。4は口縁は無文で先端部を尖り気味に丸くおさめている。時期は1～3が草田2～3期、4は草田4～5期とみられる。5は須恵器の甕である。6は土師質土器の坏である。7は須恵器の皿、8は須恵器の小壺とみられる。9～11は遺構の終点付近の底面から出土したものである。9・10は須恵器甕の体部片である。11は木製品で、鍵状に折れ曲がる形状をもつ。先端部に段差があり、斧状鉄器の装着部とみられる。土掘り具と考えられるだろう。

ＳＸ02出土遺物（第326図）

多量の遺物が遺構内から出土しているが、いずれも磨滅が著しい。1・2・4～9は複合口縁を呈する甕である。1・2は口縁が直立気味に立ち上がり、外面に平行短線文が施されている。草田2期とみられる。4～9は無文で、4・5は先端部が尖り気味に丸くおさまる。6は口縁が短く立ち上がり、端部に面をもつ。9は先端部が若干屈曲する。3・11は鼓形器台で両者とも筒部が短いタイプだが、11は無文である。10は鉢の脚部であろうか。12は複合口縁を呈する壺で、13はその底部とみられる。口縁は直立して立ち上がり、端部を丸くおさめている。3は草田3期、それ以外は草田4～5期に相当するものであろう。14・15は土師質土器の碗である。16は単純口縁の土師器甕である。18・19は須恵器甕の体部片である。18は内面に放射状の当て具痕が残る。17は磨石で、表面に磨り面が、裏面と側面に敲痕がみられる。長さ19㎝・幅15.6㎝を測る。これらのうち3・6・

８・９・12・13が遺構の先端部の下層から底面にかけて出土し、他は上層からの出土である。

さて、ＳＸ01・02の時期であるが、ＳＸ01は底面から須恵器片が出土しているので、概ね古墳時



第326図　下がり松遺跡ＳＸ02出土遺物実測図（1～16・18・19：Ｓ＝1／4、17：Ｓ＝1／3）

代後期以降と考えられる。ＳＸ02も、その形態からＳＸ01と同時期の遺構とみうけられる。なお、ＳＸ02は弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけての土器が多いが、多くは先端部下層から出土している。先端部に弥生末～古墳初頭期の土器が集中しているのは、やはり別の土坑状遺構がＳＸ02と重なっていた可能性が高いだろう。この遺構の性格は不明であるが、大型の土坑ともみてとれる。この付近は低湿で粘土層が露出しており、想像の域を出ないが粘土の採掘坑である可能性も考えられる。

9．遺物包含層

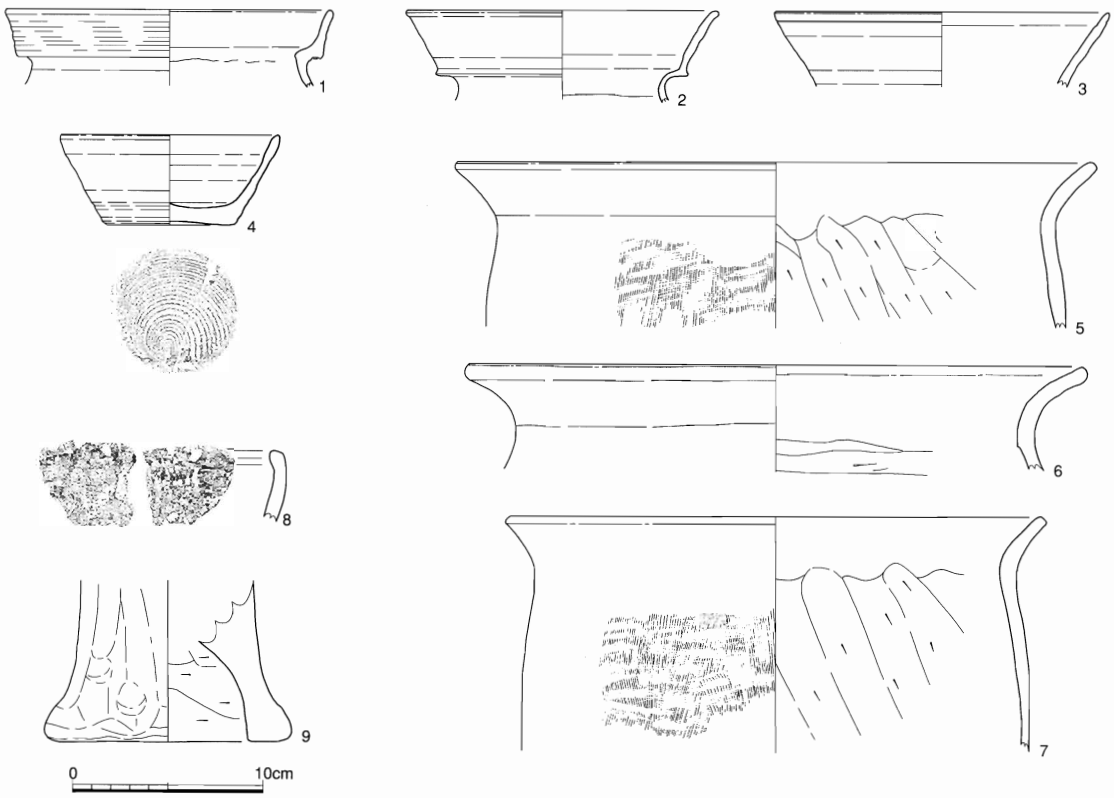
遺物包含層は調査区南東端の、谷部に堆積した2枚の黒色粘土層をいう（Ｐ245・第279図参照）。上の黒色粘土層を第Ⅱ層、下を第Ⅳ層とし、古い方から記述していく。

第Ⅳ層出土遺物（第327図1・2）

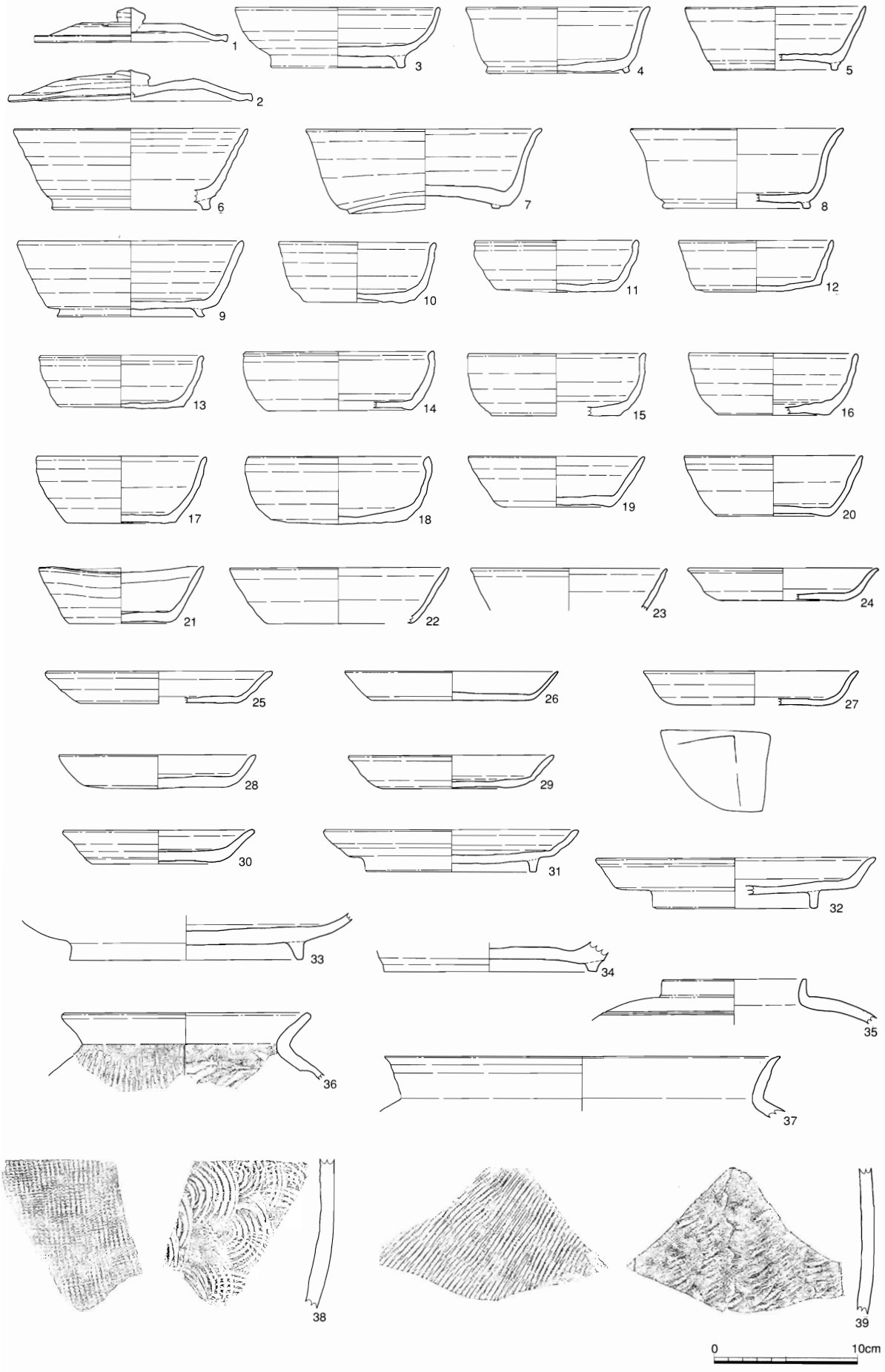
第Ⅳ層からの出土遺物はほとんどが小片で、風化が著しいのものが多い。ここでは2点のみ図化した。いずれも複合口縁を呈する甕である。1は口縁がやや外反しながら直立し、外面に平行短線文が施される。2は器壁が薄手で、口縁は外反し先端部がやや折れ曲がる。1は草田2期、2は草田4・5期とみられる。2点のみではあるが、第Ⅳ層は弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物を含む包含層といえる。

第Ⅱ層出土遺物（第328図3～9、第329・330・331図）

第Ⅱ層からは多種多様の遺物が出土している。第327図3・4は土師質土器の碗で、体部が逆ハ字状に開く。9世紀代とみられる。5～7は土師器の甕で、いずれも口縁は大きく外反し胴部が張



第327図　下がり松遺跡第Ⅳ，Ⅱ層出土遺物（1）（S＝1／4）



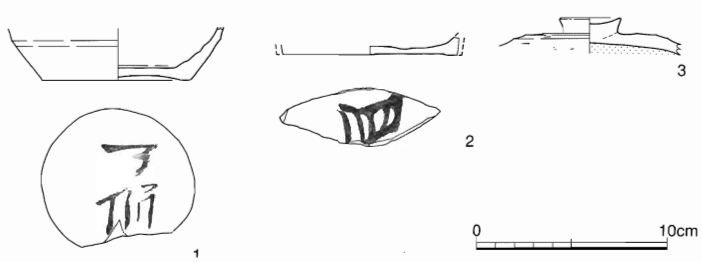
第328図　下がり松遺跡第Ⅱ層出土遺物（2）（S＝1／4）

らないものである。8は製塩土器である。口縁先端が内側に折れ曲がる。9は土製支脚の脚部である。底面は上げ底である。

第328図は須恵器である。1・2は坏蓋である。扁平で口縁端部は屈曲し、宝珠状つまみがつく。8世紀後葉～9世紀代とみられる。3～9は高台付きの碗である。3は体部が丸みをおびて立ち上がり、回転糸切り痕をナデ消している。4～6・9は体部が逆ハ字状に開く。7・8は体部が丸みをおびて立ち上がるが、口縁にかけては大きく外反する。底面は回転糸切り痕をナデ消している。これらはいずれも8世紀後半～9世紀代とみられる。10～23は高台の付かない碗である。いずれも回転糸切りとみられ、体部が丸みをおびて立ち上がるもの（10・11・13～18）と、逆ハ字状に開くもの（12・19～23）に分けられる。前者が8世紀後葉から9世紀前半、後者が9世紀後半とみられる。24～32は皿である。高台の付かないもの（24～30）、高台の付くもの（31・32）がある。27の底面にはL字状のヘラ記号がみられる。33は器壁の厚さや、高台の径の大きさから盤とみられる。34は壺類の底部とみられる。35は短頸壺の口縁である。36～39は壺・甕類である。36・37は口縁部で、38・39は体部片である。39は内面の同心円の当て具痕をナデ消している。

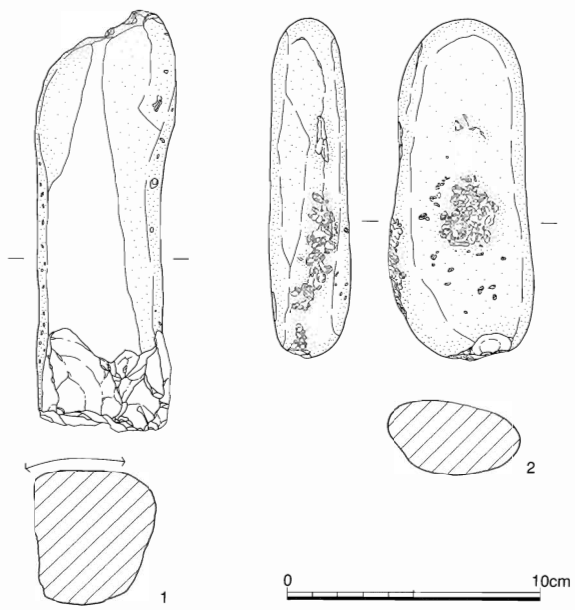
第329図1・2は墨書土器である。いずれも須恵器である。1は坏で底部は回転糸切りである。磨滅が著しく文字の判読は難しいが、「万福」と読める。8世紀後半代とみられる。2は小片で文字も破損している。「澤」であろうか。回転糸切り痕が残る。

第329図3は坏蓋から転用された硯である。内面は研磨されてツルツルである。輪状つまみをもち、7世紀後半代とみられる。



第329図　下がり松遺跡第Ⅱ層出土遺物実測図（3）（S＝1／4）

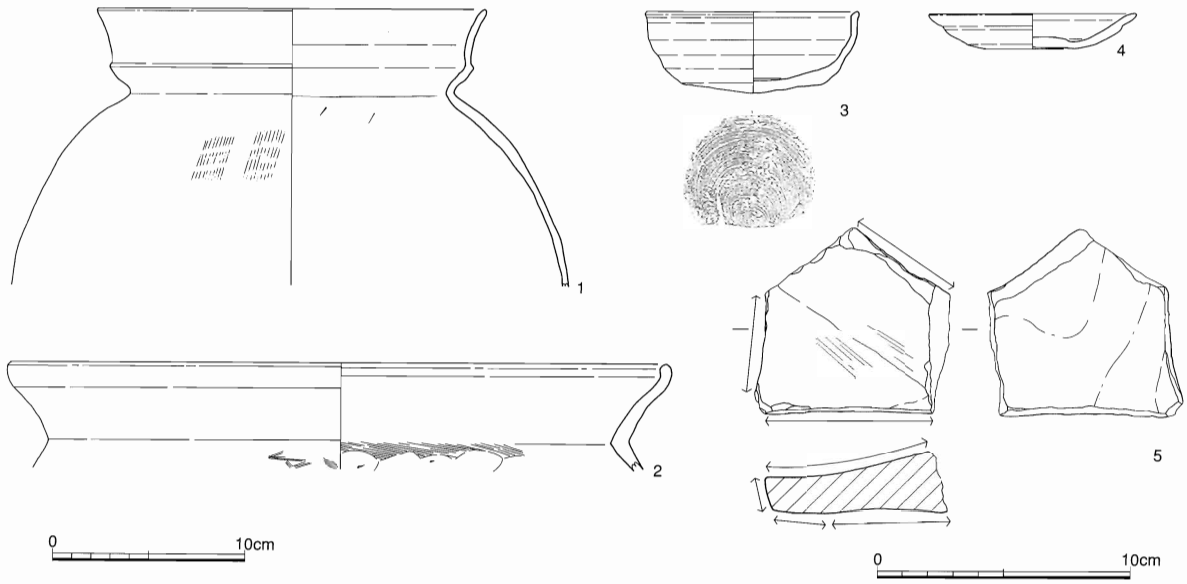
第330図は石器である。1は砥石で、一面のみが砥面として使用されている。長さ17.0cm・幅5.6cm・厚さ5.4cmを測る。2は敲石である。乳房状を呈し、表面と側面に細かな敲打痕がみられる。長さ13.9cm・幅5.8cm・厚さ3.0cmを測る。



第330図　下がり松遺跡第Ⅱ層出土遺物実測図（4）（S＝1／3）

10. 遺構に伴わない遺物

平坦部の南側で、遺構に伴わない遺物が数点出土している（第331図）。1は複合口縁を呈する甕である。磨滅が著しいが、口縁端部を丸くおさめている。草田4～5期に相当するとみられる。2は土師器の甕である。口縁はくの字に屈曲するが、先端部は直立する。3は須恵器の坏身である。底面は回転糸切りで、口縁端部は折れ曲がる。8世紀後半代とみられる。4は土師質土器の皿である。5は石灰岩製の砥石である。各面が砥面として使用され湾曲している。



第331図　下がり松遺跡遺構に伴わない出土遺物実測図（1～4：S＝1／4、5：S＝1／3）

11. 古墓

古墓は下がり松遺跡の丘陵斜面に位置する（第４、278図）。標高27.5m付近にあたり、南北に伸びる丘陵尾根頂部からやや下った場所に築かれている。古墓の東側は谷を挟んで別の丘陵が前面に伸び、北側は谷が閉塞していて視界は狭い。南側は鷲谷から続く狭小な水田が僅かに見下ろせるが眺望は必ずしも良くない。

古墓の前面には丘陵南端から北に上る道が伸びている。道敷の幅は２～３ｍで、基壇裾から路面までの比高差は約1.5ｍである。道は、基壇の南で尾根頂部から下る道と斜行し、南北の道は北へ約50ｍの地点で、下降する道は10ｍほどでそれぞれ途絶えている。

調査前の地形観察では、丘陵上方側に斜面を削りだした面が長さ約16ｍ続き、その下方に長方形のマウンドとその北側に土手で囲まれた平坦面が造り出されていた。マウンドの中央付近は斜面下方側に向けて窪んでいた。

調査は掘り下げ前の地形測量図（第332図）を作成しこれに基づいてマウンドの長・短辺の中軸線を設定した。この交点を原点とし、直交する２本の中軸線を調査の基準線（第334図のＡ－Ａ’とＢ－Ｂ’）とした。マウンド（古墓基壇）、平坦面及びこれを囲む土手土層断面はこの基準線に沿って観察・記録を行った。基壇の上、及び下面で検出された遺構（ＳＸ03～05、07）についてはこの基準線によらず任意の軸を設定した。

検出された遺構の概要を述べる（第333図）。古墓は石積基壇で、基壇上面で火葬骨、五輪塔、瓦が攪乱された状態で確認された（ＳＸ03～05）。基壇の北側には平坦面があり、北と東側は逆Ｌ字に曲がる土手で区切られていた。土手の北側は溝（ＳＤ19）が穿たれている。また南側はＳＤ20とした溝状の遺構がある。基壇盛土下の旧表土面で荼毘跡と思われる遺構（ＳＸ07）を確認した。なお、この古墓の北側で骨片を伴う焼土壙（ＳＸ06）を検出した。なお、古墓は平安時代の建物（ＳＢ11～13）が建てられた加工段を利用して構築されている。建物に関しては既に述べたので、ここでは改めては触れない。以下、遺構ごとに説明を加える。

基壇（第334、335図）

基壇に関する記述では尾根側を後背、谷側を前面、平坦面側を北、反対側を南とする。基壇は丘

陵尾根から約4ｍ東に下った斜面に築かれている。基壇の平面形は長方形で、長軸をＮ－22°－Ｅに向ける。後背側の長辺は中程でやや外側に膨らむが他の3辺は直線的である。前面側の長辺は7.0m、後背側が7.5mで短辺は北側が3.5m、南側が3.0mである。高さは前面側で0.85m、後背側で0.4mである。

石積みは人頭大の角礫を積み上げたもので、前面と南北辺の一部で数段積み上げた個所が残っていたがほとんどは基底部の一段目しか残っていなかった。基壇前面では中央から南短辺隅にかけて根石にあたる石列が残っていなかった。基壇周辺の表土・流土を除去する際に基壇から転落した多数の角礫が出土した（第334図）。周溝内に転落していた礫はあまり多くなく、大半は基壇基底石上に被るようにして崩れた状態で検出された（図版210）。基底石が検出できなかった基壇前面南側でも礫が相当数出土していることから本来は石積みされていたことがわかる。基壇高が前面側で0.7m程度あることから階段など、基壇の入り口となる施設が前面側に存在した可能性もあるが、前面中央の攪乱と大きな立木によって確認することはできなかった。

基壇には前面を除く3方に溝が廻る。後背側から南に向けて丘陵斜面を削り込むように溝を穿ち、北側は平坦面と区画している。溝底の幅は平均0.2～0.3m程度で、南北辺側の溝は前面側で浅くなって消える。

基壇の構築状況を把握するため、調査の基準線に沿って基壇の長、短辺方向で土層観察用のベルトを設け、盛土の掘り下げを行った。その結果、基壇はすべて盛土で構成されていることがわかっ

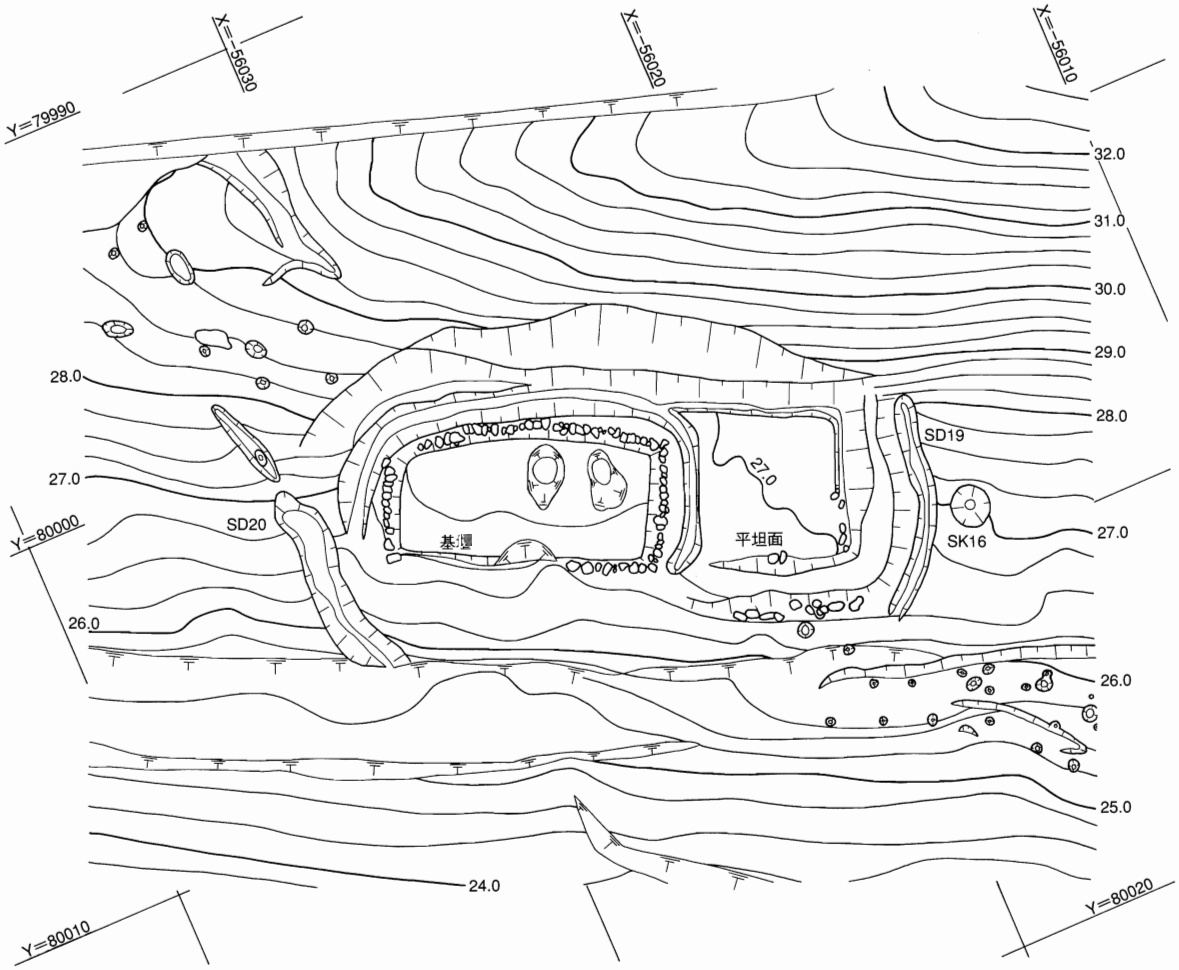
第332図　下がり松遺跡古墓調査前地形測量図（S＝1／200）

た（第334図）。盛土は18～38層に細分されるが、堆積状況や層相によって上層と下層に大別できる。

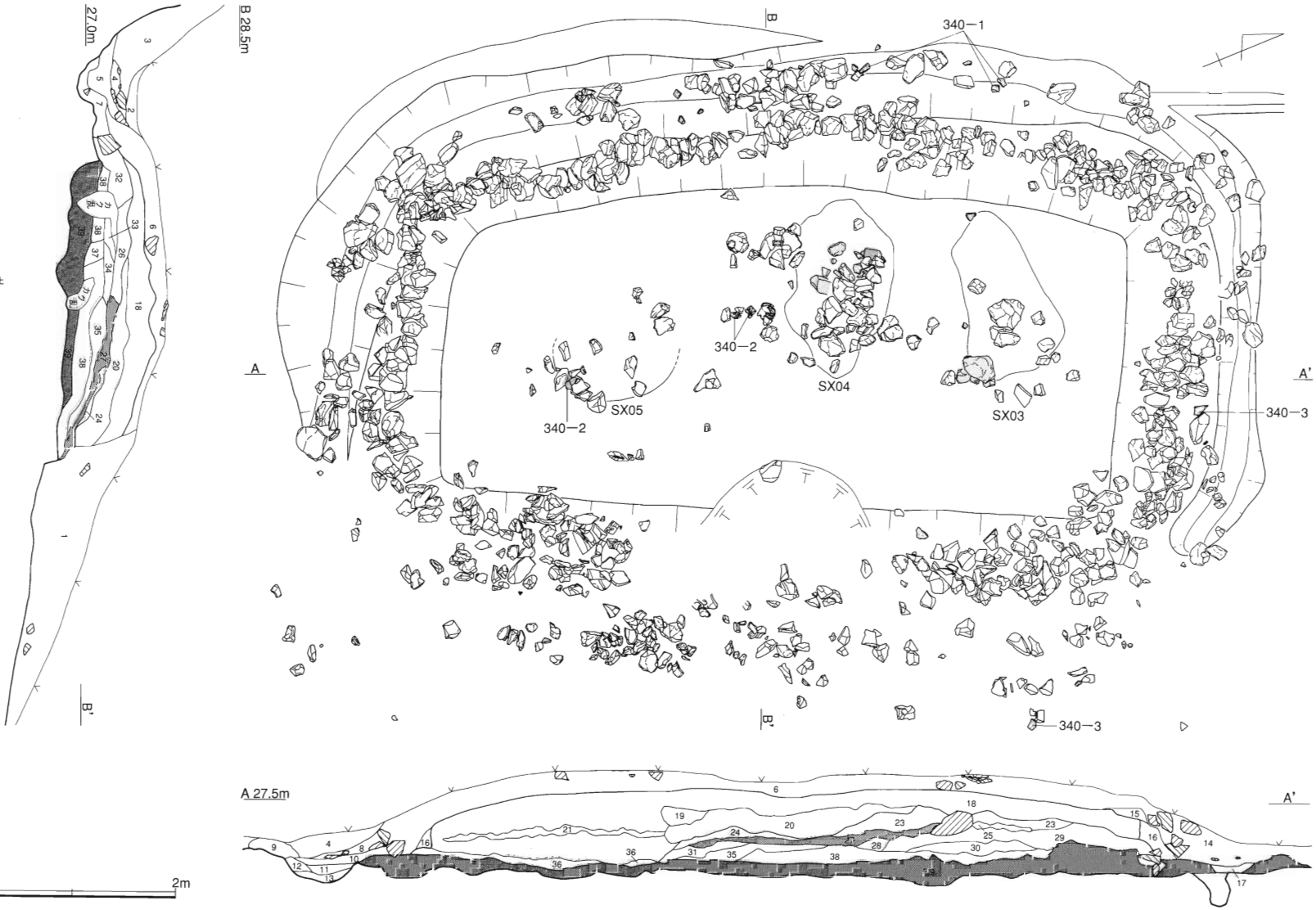
上層は18～22層で、下層盛土を覆うように厚く堆積している。後背の丘陵地山に由来する粘質ブロックを多く含みしまりがなく、基本的には斜面を削り出した土をそのまま使ったものと思われる。なお、18層中から骨片が出土したことから、火葬骨を混入させた可能性も考えられる。

下層は23～38層で、旧表土面から盛られていて、厚さ10cm前後の薄い層群で構成されている。断面で見る限り小マウンド状に盛り上げた状況が看取できる。土質は基本的に粘質で、基壇から斜面下方あたりに堆積する地山の土と共通する。このうち27層は赤褐色の粘質土で、他の盛土に比べ非常に際だった色調を示している。この土は、基壇前面付近から斜面下方の限られた範囲に露頭する土であることから、基壇造成に際し赤い土を選別し、意図的に盛土として使用したものと思われる。赤い土の使用にどのような意味があったか、確かなことはわからないが、後述する荼毘（ＳＸ07）との関係も考慮すべき点の一つにあげられる。下層中の33～35層から角礫が20数個まとまって出土した（第337図左　図版215）。熱を受けて赤変しているものもあり、荼毘（ＳＸ07）で用いられたものと思われる。

盛土と基壇石積の状況を後背側で見ると、石積の１段目は下層盛土と共に置かれ、２段目以上は上層盛土と共に積み上げられたようである。北辺の後背側では表土を若干掘り込んで１段目を据え、２、３段目を下層盛土に対応させ、それ以上は上層盛土に対応させて積んでいる。これは前面側との高低差を極力解消するためと思われる。これに続く基壇前面側では下層盛土の法足を抑えるよう



第333図　下がり松遺跡古墓調査後地形測量図（S＝1／200）



攪乱
1. 暗茶褐色粘質土

基壇・周溝埋土
2. 腐植土を含む暗黄褐色粘質土
3. 地山ブロックを含む粘質土
4. 灰白色ブロックを斑状に含む淡褐色粘質土
5. 暗黄褐色粘質土
6. 淡茶褐色砂質土
7. 淡茶褐色粘質土
8. 淡黄褐色粘質土
9. 黄白色地山ブロック
10. 淡黄褐色粘質土
11. 淡灰色粘質土
12. 淡茶褐色粘質土
13. 暗茶色粘質土
14. 暗黄褐色粘質土
15. 白色粒を含む淡茶褐色粘質土
16. 赤褐色粒を含む淡茶褐色粘質土
17. 白色ブロックを含む暗茶褐色粘質土

基壇盛土
18. 地山由来の黄褐色明茶褐色ブロックを多く含む粘質土
19. 18と同質。ややくすんだ色調を呈する
20. 18と同質。ブロックがやや小さい
21. 黒色粘質土が斑状に重なる
22. 18とほぼ同質
23. 灰白色粒子を多く含む黄白色粘質土
24. 淡黒色粘質土
25. 暗茶色粘質土
26. 暗黄褐色粘質土
27. 赤褐色粘質土
28. 暗赤褐色粘質土
29. 赤褐色ブロックをわづかに含む黄白色粘質土
30. 茶褐色明黄褐色ブロックを若干含む黄褐色粘質土
31. 淡黒色粘質土
32. 淡赤褐色ブロック混じり暗茶褐色粘質土
33. 淡黄褐色粘質土
34. 明黄褐色粘質ブロックを含む淡黄褐色粘質土
35. 暗茶褐色粘質土
36. 黄褐色、黄白色ブロック混じり淡黒色粘質土
37. 明黄褐色粘質土
38. 黄白色粘質ブロック混じり淡黒色粘質土

基壇構築以前の表土
39. 黒色粘質土

第334図　下がり松遺跡古墓基壇検出平面図・断面図（S＝1／60）

にして削り出した基盤上に一段目を並べている。このように石積の工程は基壇構築の2段階に対応していることがわかるが、南側だけは上層に盛土をするときに1段目から積まれている。恐らく上層盛土の搬入場所であったため、石積が最終段階におこなわれたためと考えられる。

次に基壇上面で検出された遺構について説明する。基壇上面で火葬骨がまとまって出土した場所が3個所確認でき、北から順にＳＸ03～05とした（第334～336図）。

ＳＸ03は北端に位置する土壙である。基壇の短軸とは若干斜行する不整形な長楕円形で、基壇前面側に約1.2mの空間がある。長径3.23m、短径1.5mで、深さは最大でも0.13mと浅い。土壙の上面には人頭大～拳大の礫があったほか、五輪塔の地輪（第341図３）と紀年銘を持つ平瓦の小片（第340図３）が掘形のライン上から出土している。土壙内からは骨片が出土しているが、土壙の基盤となる盛土にも火葬骨片が含まれていて、厳密に区別できなかった。土壙内の土は暗黄褐色砂質土だけで、土質にしまりがないことから埋土ではなく流入土と思われる。

ＳＸ04はＳＸ03の南隣に位置する土壙で両者は中心で約1.4m離れている。基壇の中心からやや北に寄っていて、ＳＸ03と同様基壇前面側に約1.2mの空間がある。平面形は不整形な長楕円で長軸方向は基壇の短軸方向とほぼ平行する。長径1.75m、短径0.93mである。掘形は2段になっていて、中央付近でさらに落ち込み、深さは最大で0.43mである。土壙上面では大小の礫に混じって五輪塔の火輪（第339図５）、水輪（同４）と丸瓦（第340図１）の破片がかたまって出土し、２段掘りの壙内に落ち込む様子が窺えた。礫を除去した土壙中央部からは骨片が若干出土した。土はＳＸ03同様、暗黄褐色砂質土だけで、土質にしまりがないことから埋土ではなく流入土と考えられた。

ＳＸ05は基壇の南側に位置する。表土・流土を除去する過程で角礫と丸瓦（第340図２）がややまとまった様子で検出され、骨片も僅かに出土した（第334図）。盛土面で精査したところ前述したＳＸ03、04と同様の黄褐色砂質土が平面的に認められた。しかし、断面では立ち上がりなど確認できなかったことから主体となる土層が流土と区別できず、結果的には礫、瓦、骨片を含む黄褐色砂質土の広がりとしてしか認識できなかった。確認できた範囲では南北方向が1.15mであった。基壇の南側のほぼ中央に位置するため、前2者のように基壇前面側に空間を持たない。

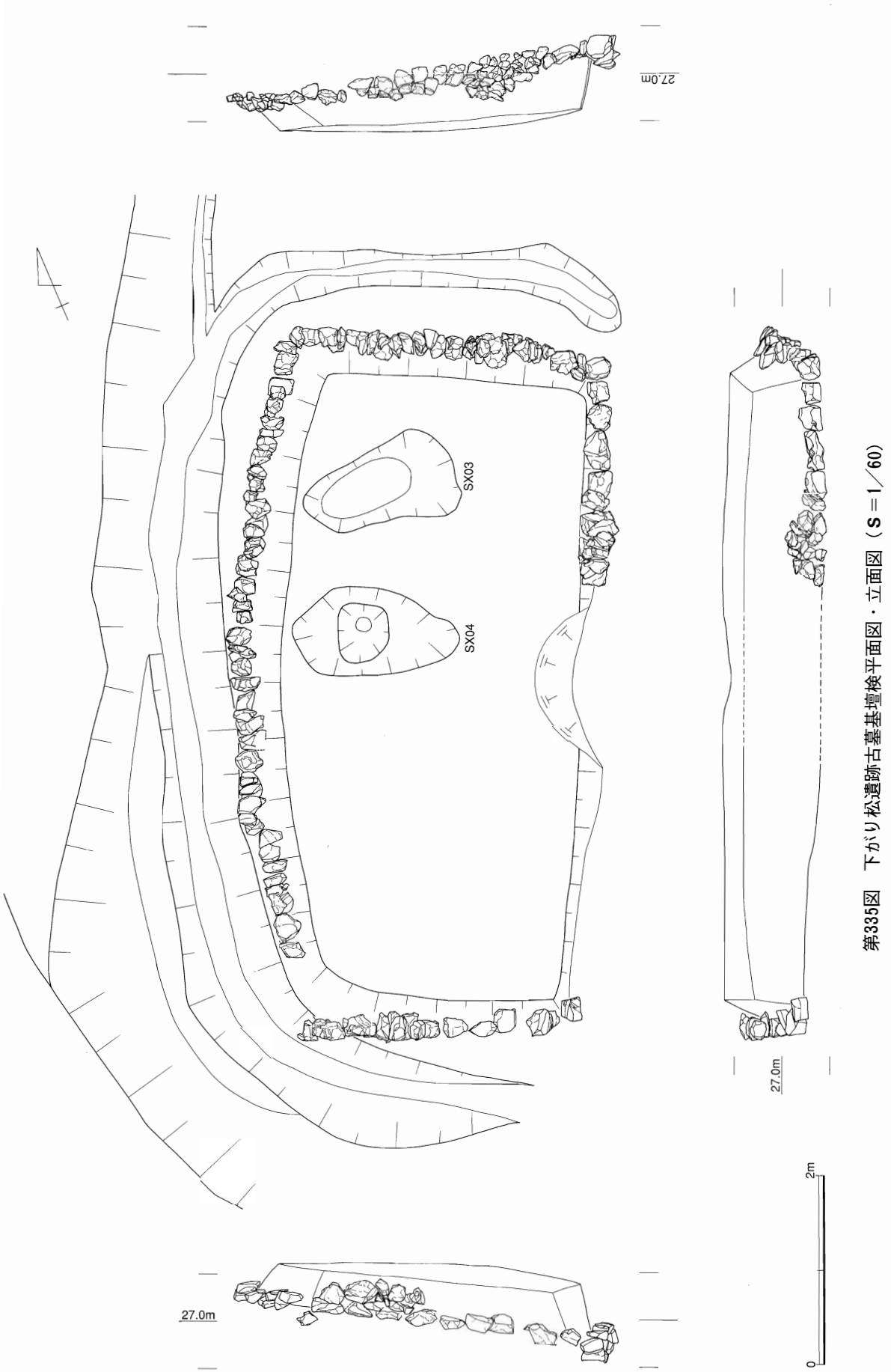
出土した瓦は丸瓦２、平瓦１で、丸瓦はＳＸ04、05から出土した。紀年銘のある平瓦は飛散した破片のうち一片がＳＸ03から出土しているにすぎない。

以上の調査所見から、ＳＸ03～05は攪乱による再集積で、火葬骨を埋納した遺構そのものではないと考えられる。

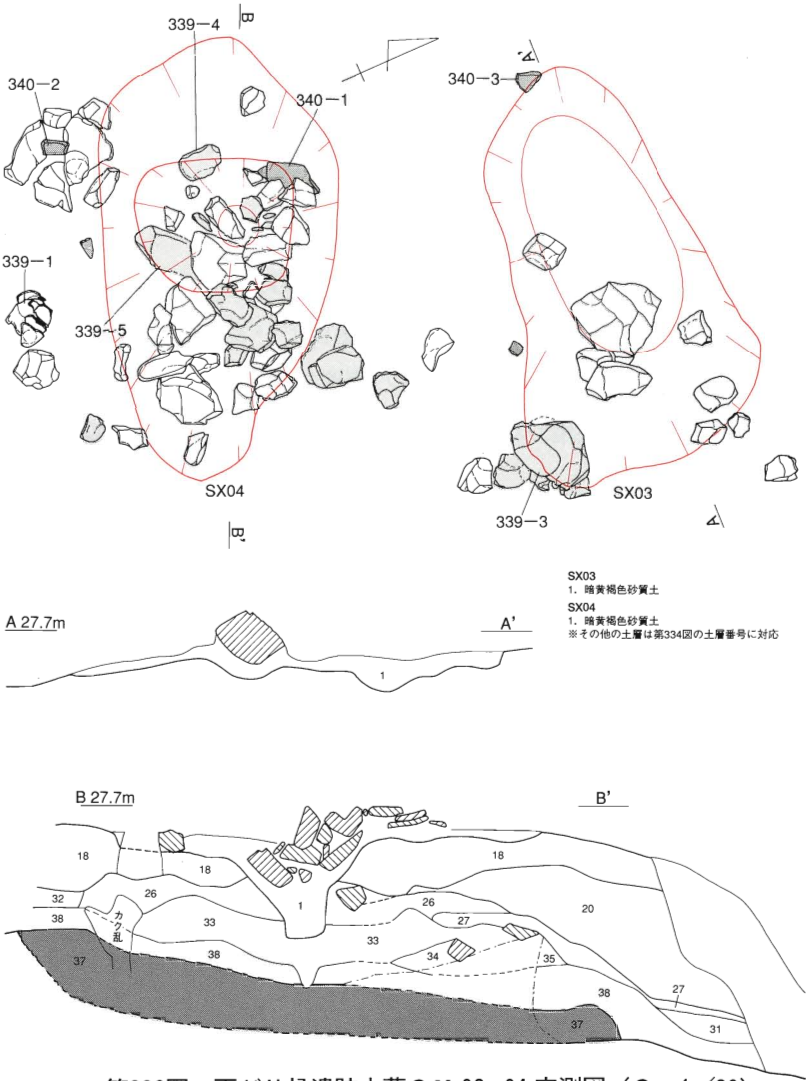
基壇盛土を完全に除去すると基壇構築以前の旧表土が現れた。この旧地表面で荼毘跡と考えられる焼土面（ＳＸ07）を確認した（第337図右）。基壇上の遺構との位置関係を見るとＳＸ03のほぼ真下に当たる。平面形は不整形な方形で、規模は東西1.35m、南北1.27mである。中央の0.6×0.37mの範囲には骨片を多く含む灰が溜まっていて、これを囲むように赤変した焼土が認められた（第337図右　図版５上）。西側の焼土面上にはもとの形をとどめる炭も部分的に残っていた。荼毘に伴う柱穴や台石は検出できなかったが、先述した盛土中の礫群に熱を受けて赤変した角礫（第337図左のトーンを貼った石）があることから、これらが荼毘に付す際に台として使われた可能性も考えられる。

平坦面

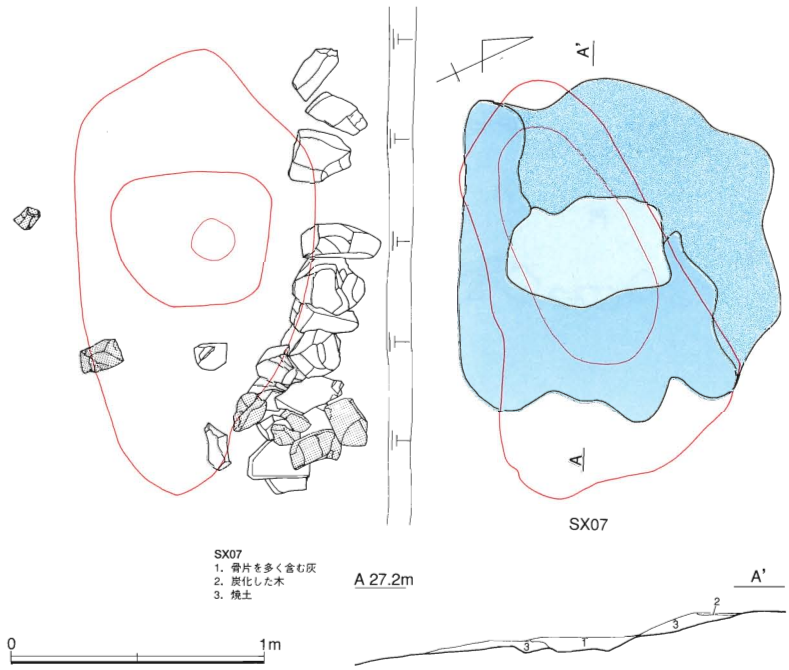
基壇の北側に３m四方の平坦面があり、北と東は逆Ｌ字形の土手で囲まれている。平坦面は基壇



第335図　下がり松遺跡古墓基壇検平面図・立面図（S＝1／60）



第336図　下がり松遺跡古墓ＳＸ03，04実測図（Ｓ＝1／30）



第337図　下がり松遺跡古墓基壇ＳＸ07・盛土中礫実測図（Ｓ＝1／30）

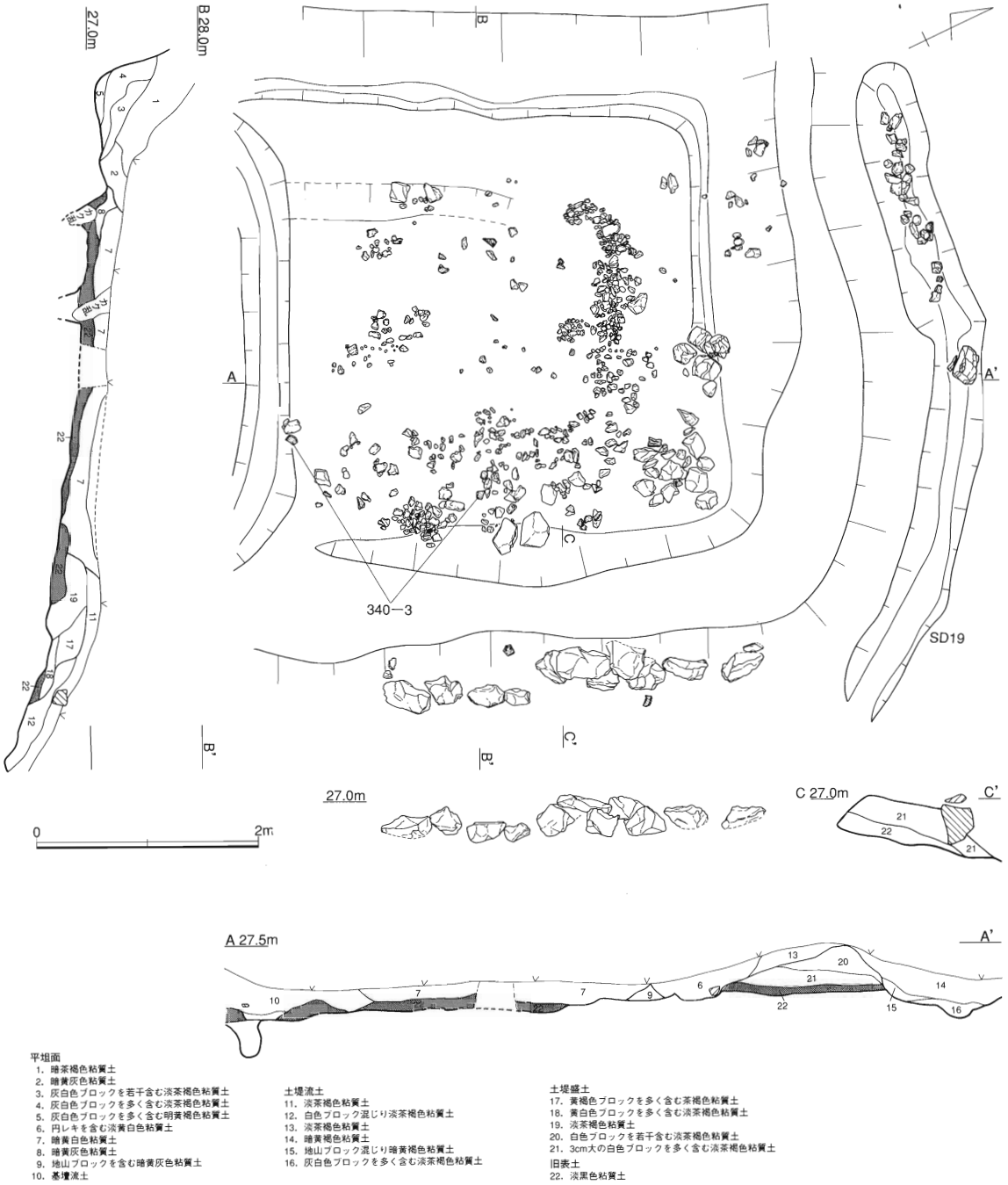
同様ＳＢ11の加工段を利用して作られていて、建物に伴う遺物を包含する覆土（旧表土）が基盤上に堆積している。丘陵上方側は削り込まれて高さ約２ｍの壁が基壇側から続いている。この壁下には幅の狭い溝が穿たれていて、土手が斜面に取り付く位置で直角に曲がり、途中で消えている。土手は盛土で構成されていて斜面下方側では石が１～２段積まれている。基壇の石より大型の角礫を使用し、石垣のような印象を受ける。平坦面上には５㎝前後の小円礫が土手に沿うようにかたまって出土した。ただし砂利敷きといえるほど面はそろってはいない。この小礫群と土手の間に大型の角礫がややまとまって出土した。これらの出土層位を見ると前者が７層、後者が２～６層で両者の先後関係は後者が新しい（第338図Ｂ－Ｂ’）。７層は基壇流土を切り込んでいることから、平坦面が基壇構築後ある程度の時間が経過して造られたことがわかる。おそらく土手の構築も小礫群に伴うものと思われるが、東に石垣を築き、北を溝でさらに区画するなど、平坦面を厳重に囲っていることが窺える。出土遺物は少なく、第340図３にあげた平瓦の破片が２点、土師器碗（第339図８）、須恵器碗（同９）の

ほか須恵器の甕片がある。須恵器は下層の建物に伴うものである。

土手の北側には溝ＳＤ19が東西方向に伸びている。長さ6.0m、幅0.5mで深さは0.1～0.2mである。西端は土手が斜面に取り付くかなり高所にあり、北側の区画を意識して設けられた溝である。土手側から転落したと思われる礫と須恵器片（第339図６）が出土した。

出土遺物

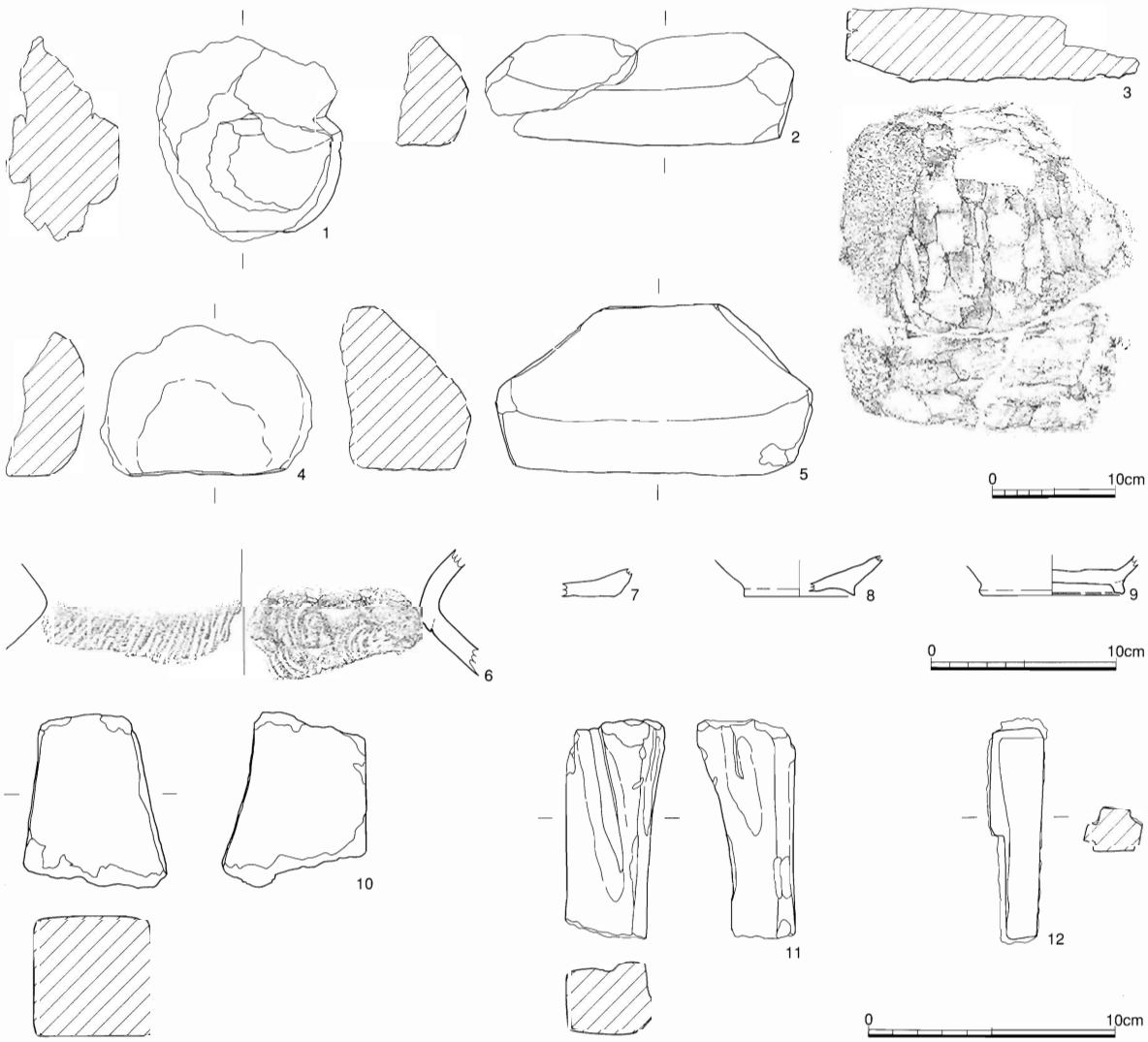
次に出土遺物について述べる。五輪塔（第338図）は大半が基壇上から出土したほか、周溝内に転落した破片が若干あった。石材はすべて白色凝灰岩で、節理が発達していて所々に直径0.5㎝前後の窪みが見られるのが特徴である。１は空風輪の破片で縦方向の節理をもつ。欠損が著しいが両輪の境界は明確な段をなしていることがわかる。枘は欠損していて形状は不明である。風輪の直径



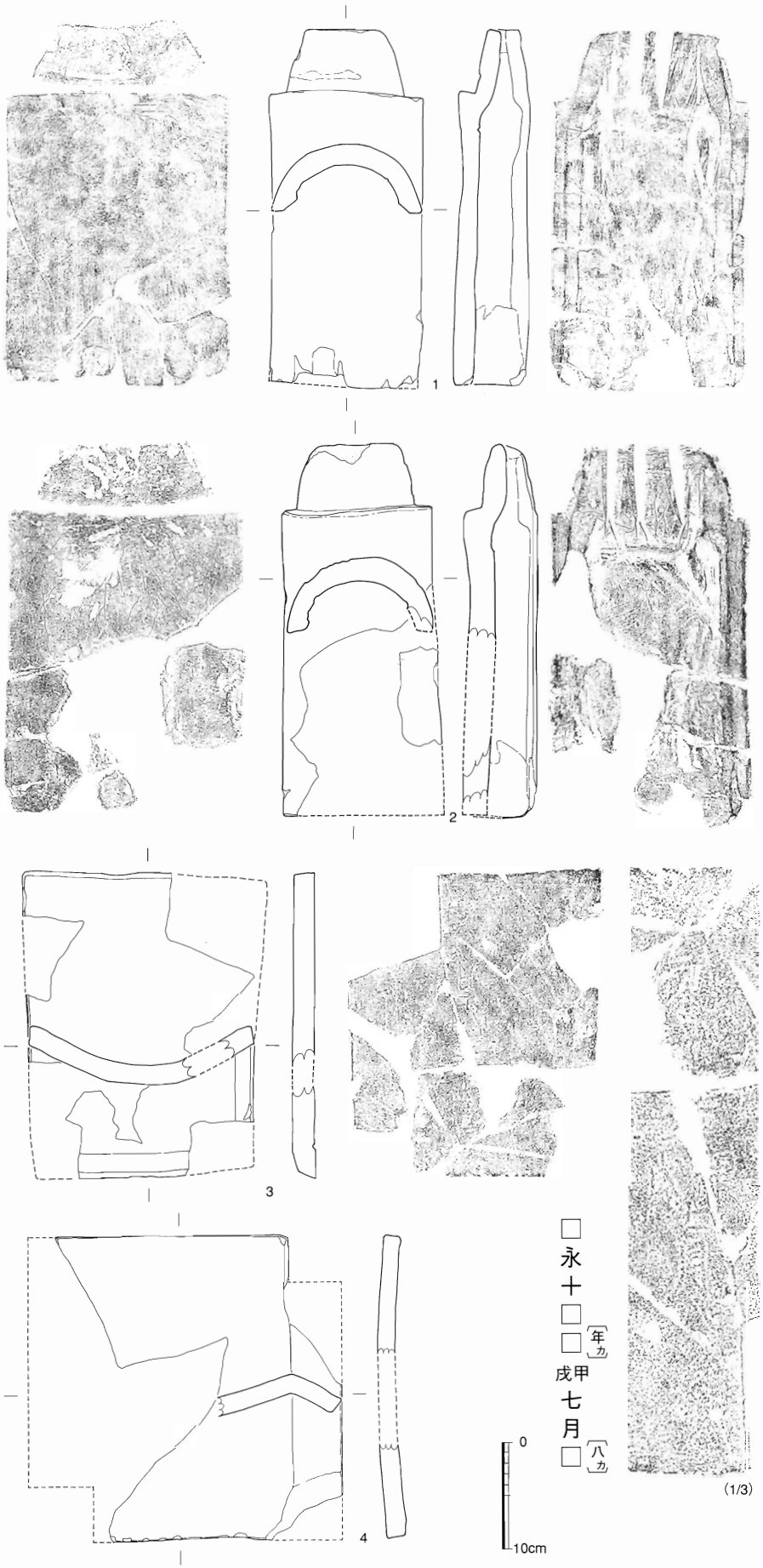
第338図　下がり松遺跡古墓平坦面実測図（Ｓ＝1／60）

は復元すると12㎝である。２、５は火輪である。特徴はほぼ同じで同一個体の可能性がある。５の高さは13.7㎝である。棟線は直線的で軒の湾曲は小さい。表面は平滑であるが上面と下面には加工痕が残る。節理は縦方向である。４は水輪で、縦方向の節理で剥離した破片である。表面は研磨されているが、下面（または上面）の加工痕は不明瞭である。上（下）端の直径は復元すると26.4㎝になる。５は地輪の上面または下面部の破片である。横方向に剥離している。表面にはノミ痕が明瞭に残っている。１辺は24㎝である。土器（同）は数片出土している。６はＳＤ19から出土した須恵器で甕の頸部である。７は隣接するＳＫ16出土の土師器碗底部は回転糸切りである。８は高台の付く土師器碗である。９は高台付の須恵器碗である。石製品では砥石が２点出土した。10は４面とも使用されている。11も各面使用されるが図示した２面で筋状に窪む。12の鉄製品は柱状である他は用途を特定できる特徴は認められない。12は時期を特定できないが、ほかの遺物はは下層の建物に伴う遺物である。

瓦（第340図）は基壇とその周辺から出土した。１は丸瓦で全長33.1㎝、胴部長27.5㎝、胴部幅14.2㎝、胴部高6.8㎝、胴部の厚さ2.0㎝、湾曲比（胴部高／胴部幅）0.479である。凹面には目の細かい布目が残り、部分的に離れ砂が付着する。コビキ痕は確認できない。胴部凹面には玉縁側に寄った位置に吊り紐の痕跡がある。破線状の圧痕が水平に通り、紐の幅は約５㎜である。胴部凸面は



第339図　下がり松遺跡古墓出土遺物実測図（1）（1～5：Ｓ＝1／6、6～9：Ｓ＝1／4、10～12：Ｓ＝1／3）



第340図　下がり松遺跡古墓出土遺物実測図（2）（S＝1／6）

縦方向の縄叩き痕を粗くなで消す。狭端縁側に縄叩き具とは異なる無紋の叩き具原体の圧痕が残る。次に面取り個所と計測値を上げる。凹面側では胴部両側縁が幅1.5cmで、玉縁部側面の削り残しは幅0.6cmである。胴部広端縁は幅7.5cmで軽く削る程度である。玉縁端は幅2.5cmで胴部両側縁の面取りに先行して施されている。凸面側では玉縁部両側縁に面取りを施す。この面取りは胴部狭端縁には及ばない。表面の色調は燻し瓦を思わせる淡青黒色で、破断面は淡灰白色である。

2も丸瓦で全長34.8cm、胴部長28.8cm、胴部幅13.9cm、胴部高7.0cm、胴部の厚さ2.2cm、湾曲比0.504である。凹面には目の細かい布目があり、僅かながら右上がりのコビキ痕（コビキA[1]）が残る。吊り紐は1と同じA型である。離れ砂は顕著でない。胴部凸面は縦方向の縄叩き痕をなで消す。

次に面取り個所と計測値を示す。凹面側で

は胴部左側縁が幅1.5㎝、右側縁が0.7㎝で、玉縁部側面の削り残しは幅0.8㎝である。胴部広端縁は幅6.0㎝で１の丸瓦と同様軽く削る。玉縁端は幅1.4㎝で胴部両側縁との切り合いは不明である。凸面側では玉縁部両側縁に面取りを施す。１と同じく胴部狭端縁には及ばない。風化が著しいが表面は淡黒色だったと思われる。

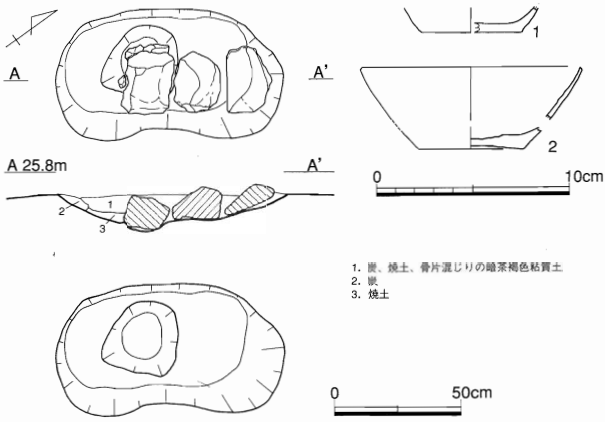
３は平瓦である。全長28.1㎝で、広、狭端隅を欠くが復元すると狭端縁幅は20.5㎝、広端縁幅は21.5㎝程度になる。両側面の残る中央付近の深さが3.6㎝で、ここの湾曲比が0.17である。焼成は良好で硬質、色調は暗青灰色である。凹面は斜め方向に強くなでられ、右下がりのコビキ痕がかすかに残る。布目は確認できない。離れ砂は狭端縁から右側縁にかけ僅かに認められる。狭端縁の面取りは２面施され、幅は狭端部側が1.2㎝、広端縁側が0.6㎝である。右側縁の面取りは幅1.3㎝で、左側縁では明瞭でない。凸面はほぼ全面に離れ砂が付着する。狭端縁側に凹型台の端部らしき圧痕がみられる。凸面の中央には紀年銘がある。文字はへら書きではなく型押しによってレリーフ状に浮き上がっていて、狭端縁を上に「□永十□□甲戌七月□」と記されている。１字目はほとんど痕跡がなく、「十」の下２字は欠損により不明であるが下の１字は文字の左右端が僅かに残っている。痕跡からは判読できないが「年」であろう。干支は左右に並列して書き分けられている。最後の文字は「八」の可能性があり、その下は広端縁まで約６㎝には文字が確認できない。凸面の文字列付近を詳細に観察すると上下方向に幅５㎝にわたり凸面が僅かに平坦になっている。この範囲で離れ砂が胎土に押さえ込まれて比較的に平滑になっていることから、文字を彫り込んだ叩き板が使用されたことが推測される。

４は燻しの桟瓦である。基壇下斜面の表土上から出土しており、古墓には伴わない遺物である。全長28.1㎝、厚さ1.7㎝で、幅は欠損により不明である。凹面は平部は横方向のなで、桟部は縦方向のなでを施し、凸面はすべて横方向のなでである。通有の右桟瓦とは反対に、頭側から見て桟が右に付く左桟瓦で、松江市周辺で現在も使用されている[2)]。

ＳＸ06（第341図　図版216）

基壇から約20ｍ北北東の斜面で検出した焼土壙である。平面は長楕円形で、長径0.9ｍ、短径0.48ｍで、焼けて変色した人頭大の角礫３個が底面に接した状態で出土した。下面は赤変した焼土で土壙の南側、角礫のない部分では炭が薄く堆積している。土壙を覆う堆積土には焼土、炭に混じり骨片が混じっていたことから、荼毘跡と考えられる。

出土遺物は土師器碗が２点で、底部外面はなで調整である。



第341図　下がり松遺跡古墓ＳＸ06・出土遺物実測図
（遺構：Ｓ＝1／30、遺物：Ｓ＝1／4）

第３節　まとめ

前述したように、下がり松遺跡が立地する丘陵斜面～平坦部から、竪穴建物跡１棟、掘立柱建物

跡11棟、加工段4基、溝状遺構24基、土坑16基、性格不明遺構2基、中世の火葬墓が検出された。ここでは、各遺構の時期別の様相と、斜面上方で検出された中世の火葬墓について若干の考察を加えてみたい。

1．下がり松遺跡の遺構の変遷について

検出された遺構は後世の削平等により残りが悪く、遺物も出土せず時期が特定できていないものも多いが、おおよそ5期に区分できそうである。谷部第Ⅱ・Ⅳ層から所属時期不明の石器類が出土しているが、明確な遺構がみられるのは弥生時代後期以降である。

①弥生時代後期中葉（草田2期）：ＳＩ01、加工段1

最も古い遺構は、平坦部南端で検出されたＳＩ01と加工段1である。いずれも残りはよくないが、ＳＩ01は床面形隅丸方形の竪穴建物である。建物周囲に周溝が廻り中央ピットが存在することなどが、この時期の竪穴建物の特徴に類似する。[3)]

②弥生時代後期末～古墳時代前期（草田4～7期）：ＳＤ03，04、ＳＤ15、ＳＸ02、谷部第Ⅳ層

建物跡こそ検出できなかったが、ＳＤ03・04は竪穴建物の周溝と考えられる。ＳＤ15やＳＸ02は粘土採掘坑とも考えられる大型の土坑状遺構である。他の溝状遺構上層からも遺物が数点検出されていることから、本来は広範囲でこの時期の集落が広がっていたと考えられる。ＳＢ05も弥生後期の竪穴建物である可能性がある。

③古墳時代中期（松山Ⅱ・Ⅲ期）：ＳＤ18

明確にこの時期の遺物が伴う遺構はＳＤ18のみである。古墳時代中期には遺構数が激減するものとみられる。

④古墳時代後期～終末期（～大谷6・7期）：ＳＤ14

この時期も明確な遺構は少なく、特に後期前半のものは皆無とみられる。後期後半期にしてもＳＤ14から蓋杯が2点出土しているのみである。なお、ＳＢ01・03・04、ＳＤ08から須恵器甕の破片や土師器甕が出土しているが、細別時期の特定は困難である。後期後半以降とは考えられるが、中でもＳＢ02～04は平坦部で規則的に並列して検出されており、これらはほぼ同時期と考えられる。

⑤奈良・平安期：ＳＢ06～11、加工段2、ＳＤ01，02・14～17、ＳＫ15、ＳＸ01，02、谷部第Ⅱ層

8世紀以降は急激に遺構・遺物数が増加する。遺構では掘立柱建物が6棟、加工段1棟、溝状遺構6基、土坑1基、性格不明遺構2基から遺物が出土し、谷部第Ⅱ層はこの時期の遺物を大量に包含している。掘立柱建物はいずれも斜面で検出され、時期は概ね8世紀後半～9世紀代とみられる。この他、谷部第Ⅱ層から墨書土器や転用硯が出土している。

以上、集落の時期的変遷を概観してみたが、弥生後期と奈良・平安期の2つの盛行期がある。弥生後期の竪穴建物については、後期中葉（ＳＩ01）と終末期（ＳＤ04）の2時期に分けられる。弥生後期の竪穴建物跡が出土した田中谷遺跡Ⅰ区でも、後期前～中葉が2棟、終末期が1棟と2時期に区別されている。しかしながら後期後葉が空白期という訳ではなく、田中谷遺跡Ⅲ区（松江市2001）の旧河道内で草田3期の土器が多数出土しており、弥生後期でも時期により集落の配置に変化があることが想定される。また、奈良・平安期の掘立柱建物としてＳＢ06～11があり、これをＡ群とする。また、細別時期は不明だが、古墳時代後期以降とみられる掘立柱建物にＳＢ02～04があり、これをＢ群とする。Ｂ群はいずれも2×3間で、平坦部に規則的に配置された掘立柱建物であ

る。一方、A群は斜面に不規則に立地し、2棟は桁行5間を数えるなど、B群とは明らかに様相が異なる。これらの性格であるが、興味深い遺物として谷部第Ⅱ層から出土した墨書土器がある。墨書の詳細は省くが時期は概ね8世紀後半とみられ、転用硯も含めこれらを所有した集落は一般的な集落とは考えがたい。或いはB群が官衙的な性格をもつ建物としてあてられるのではないか。田中谷遺跡Ⅴ区でも墨書土器が出土しており、この遺跡付近が「法吉郷」でも重要な位置を占めていたことが想定される。

2．古墓について

古墓に関わる調査結果をまとめておく。

①検出した古墓は石積基壇で、平面長方形で規模は最大で7.5×3.5m、高さ0.85mである。

②基壇上面の攪乱壙から火葬骨、五輪塔、瓦が出土した。これらが火葬骨の埋納位置を反映しているかどうかは不明である。

③基壇北側の平坦面は基壇に遅れて付設されていて、石垣状の石積みを持つ土手と溝で厳重に区画されていた。

④基壇造成以前の旧表土面で荼毘跡を確認した。また古墓の北側でも荼毘跡と思われる土壙を検出した。

以上のような成果があった一方問題点も残った。以下若干の問題を整理してまとめとする。

1）五輪塔

古墓の時期を考えるうえで基壇上から出土した五輪塔と瓦が主な検討対象となるが、まず五輪塔の製作年代について、年代推定された類例との比較から検討する。

五輪塔の石材は「白粉石」と呼ばれる白色凝灰岩で、産出地は特定されていないが松江市周辺と考えられている。この石を用いた石造物がいくつか調査されている[4]。このうち社日古墓は、低い石積み基壇を持ち、4基の五輪塔が建てられていたことが調査により確認されている（島根県2000）。出土した五輪塔は下がり松古墓のものに比べ僅かに大きいが空風輪、火輪の形態は互いに共通している。五輪塔の変遷を考える上で問題となるのは五輪塔の形態が単純で型式組列の指標となる属性があまり顕著でない点にある。また宝篋印塔に比べ紀年銘資料が少ないことも実年代を知るうえで手がかりに欠けている。加えて、この種の遺跡がその性格上供伴遺物が少ないこと、石塔自体移動が容易であるため本来据えられた場所を特定できる機会が少ないことなども編年を検討する上で大きな制約となっている。当地方の五輪塔変遷が十分に解明されていない現状では、特徴の類似だけで社日古墓と同時期とするのはややためらわれるが、既存の年代観に従えば、下がり松古墓の五輪塔は室町時代後半に位置づけられよう。

2）基壇・荼毘

次に古墓の構造について検討する。基壇を持つ古墓の例は数例知られており、下がり松古墓のような基壇高が1m前後と高い例としては舟山古墓A群[5]（宍道町）、土井殿の墓（益田市）、とうの山古墓（同）などがあるがいずれも未発掘のため詳細は不明である。一方基壇高が低いものでは、社日古墓（松江市竹矢町）、二反田古墓（同法吉町）、土井松ヶ段古墓（邑智郡羽須美村）、東仙道土居遺跡（鹿足郡美都町）が調査によって確認されている。このうち二反田古墓は下がり松古墓の東約1㎞の同地区内に位置する。南向きの丘陵斜面に上下2段にわたって加工段を造り出し、2区

画程度を1単位とした5群の基壇が継続的に構築されている。基壇は1辺2m程度の長さで0.2～0.4mの扁平な円礫をに並べて区画し、上面に砂利を敷き詰めた構造（報文では「石敷基壇」）である。五輪塔は無く、すべて白色凝灰岩製の宝篋印塔で室町時代後期に位置づけられている（松江市1987）。なお、二反田古墓の下の加工段から荼毘跡が8個所検出されており、下がり松古墓と同様、墓域内で火葬を行っていることが確かめられている。興味深いことに、火葬は表土上で行われたものと土壙内に石を置いて行ったものの2種があり、下がり松古墓でも2種の荼毘遺構（SX07とSX06）が確認されている。このように同じ方法で火葬し、同じ白色凝灰岩を石造物に使用しながら、基壇構造と石造物の種類が異なる古墓が同地区内に存在する事実は大変興味深い。今、これに対する何らかの解釈を提示することは調査者の力量を越えており不可能であるが、中世墓を検討する上で五輪塔・宝篋印塔など古墓の上部構造だけでなく基壇立地や構造、火葬や納骨の方法の確認など古墓総体を対象とした検討が今後一層深化することで、未解明な点の多い当地域の中世墓の諸相も徐々に明らかになっていくものと思われる。

3）瓦

古墓基壇から出土した瓦の製作年代について考えてみたい。以下の検討は、中近世の瓦が質・量共に豊富な法隆寺の資料群に基づく研究成果（小林・佐川1989、法隆寺1992）に依拠して行う[6)]。

まず、丸瓦の時期を検討するうえで手がかりになるのは面取りの方法と凹面の吊り紐痕であろう。玉縁側縁の削り残しがあるのは室町時代中期前半までで、玉縁凸面の側縁に胴部狭端に達しない面取りが施されるのは同前期前半までである。一方、凹面の吊り紐痕が袋布に刺し縫いされているのは吊り紐の使用開始当初の鎌倉時代以降であるが室町時代前期後半以降には袋布の外に紐を長く垂らすようになる。本例を見ると刺し縫いされた紐の圧痕は破線状になっており、明らかに古い特徴を示している。紐の幅は5㎜とやや太い。粘土板の脱落防止用に考案された吊り紐は、その初期段階は2㎜前後の細い紐で鎌倉時代後期から5㎜前後の太い紐に変化するとされている。以上から丸瓦は鎌倉後期～室町時代前期前半の時期があてられる。

次に平瓦であるが、丸瓦ほど時期的変遷を確認できる属性が多くないため製作時期を絞り込むことは難しい。平瓦に離れ砂を用いる例は桶巻き作りから凸型台一枚作りに変わった段階から見られるが、凹凸両面に使用されるのは鎌倉時代までとされる。本例の場合凹面の砂があまり顕著ではないことから、離れ砂の使用を断言するにはややためらわれる。凸面の叩きは紀年銘の板以外の痕跡は明瞭でない。無文の叩き板が使用されたとすれば、おおよそ鎌倉時代を上限とすることができる。次に平瓦の形態的特徴を示す湾曲比に注目してみる。鎌倉時代は反りが大きく湾曲比は0.15以上で、室町時代は0.125～0.15、江戸時代初頭は0.10～0.125で時代が下るにつれて扁平な形に変化する。本例は広・狭端隅を欠くが、中央付近で計測すると湾曲比は0.175で、中世前期的な形態であると言える。さて、この平瓦の紀年銘について検討すると、紀年の2文字目が「永」で干支が甲戌の年は文永11（1274）年、応永1（1394）年、寛永11（1634）年で、銘は10年代であることから文永か寛永のどちらかとなる。製作技術の検討から考えられた年代観をあてると必然的に文永11年が導き出される。

以上のことから丸瓦と平瓦はほぼ同時期の所産と結論できる訳だが、先述したように五輪塔はおおよそ15世紀以降の所産であり両者に100年以上の開きが生じてしまうことになる。古墓が15世紀

代とすれば、A築造関わった人々が意図的または偶然に「古瓦」を調達したことになる。仮に、五輪塔が本来基壇の築造には伴わず、供養など何らか意図で後世になって置かれたとすれば、B瓦が古墓に伴い13世紀第4四半期をあまり前後しない時期の墓になる。次に古墓に伴わないとすれば、C古墓築造後に瓦は偶然もたらされ廃棄されたことになる。瓦の数からすれば、たとえごく小形でも祠の屋根を覆うものではないことは明らかなので、C以外であれば古墓の構造に深く関わっていたと考えられるが、推測できる類例もなく現状では不明である。

いま、古墓という遺跡から離れてみても、紀年銘の叩き痕をとどめるような瓦がどのような契機で作られもたらされたのか、たいへん興味深い事例ではあるが、当地方では中世瓦の出土例は若干知られる程度であるため答えを導き出せる現状にはない。今のところ県内の中世瓦の出土例は城館に偏っているが[7]、それ以外では下がり松古墓に比較的に近い鹿島町佐太前遺跡から丸瓦の小片が出土している（鹿島町1987）。これらを見ると、特徴的な2つの瓦が存在することがわかる[8]。1類（町教委報告挿図9－70，72，73）はコビキ痕Aが認められる破片で凸面は滑らかで幅広のナデまたは磨きの単位が明瞭なものである。焼成は良好で堅牢である。2類（同図9－69，71）は凸面に縄叩きを施し凹面の布目は明瞭だがコビキ痕は確認できない。外面の色調は燻し特有の青黒色で焼成はやや軟質である。両者とも凹面両側縁の面取り幅は3㎝以上、1類の72の資料では凹面広端縁の面取りは4㎝以上ある。両方とも下がり松古墓の丸瓦に比べかなり大型である。玉縁が欠損していたり、吊り紐の形状が確認できないなど製作技法の細部にわたって比較できないが、1類は室町時代後期以前に、2類は同中期中葉以前に位置づけられる資料である。佐太前遺跡は現佐太神社の前面に位置する遺跡で古代から中世に至る各時代の遺物が出土しており、古代以来この社と密接な関係を持った遺跡と考えられている。現佐太神社は大社造りの3社殿が並列する特異な本殿構造をもち、重要文化財に指定されている。中世には既に3社が並列していたと考えられ、杵築大社（出雲大社）に次ぐ二宮として出雲国内で重要な地位を占めていた。中世佐陀神社の構造の諸相について検討をおこなった井上寛司氏によれば、本地仏を祭る仏教施設である神宮寺が境内地とその周辺に複数設けられていたとされている（井上1997）。先に見た瓦がおおよそ16世紀以前で、中世佐陀神社に関連した瓦葺き建物に使用されたとすれば神宮寺の所用瓦と見て間違い無いであろう。

下がり松古墓出土瓦については本来の使用されていたあるいは使用されるはずであった場所が特定できないが、中世佐陀神社の神宮寺との関係も全くないとは言えない。もちろん地理的に近いだけで両者を短絡的に結びつけることは慎まなければいけないが、出雲国二宮を誇る有力神社の社領が出土場所と近接[9]している事実は、瓦葺き建物が少ない中世前期にあってその使用場所を推定する上で無視できない条件である。今報告では、これ以上の検討材料もないため一応の推測を示すにとどめるが、出土例が少ないためこれまであまり意識されなかった中世瓦について、今後調査事例が増加するに従い、文献史の成果を交えてより詳細な検討も試みられるであろう。下がり松古墓の瓦も近い将来、その俎上で資料的位置づけがなされるものと考える。

注

1）「コビキ痕」の変化は、所定の粘土板を粘土塊から切り出す際に使う道具がより糸（A）から鉄線（B）に変化したことによるもので、中世から近世初頭の造瓦技術の変遷の中で大きなメルクマールとなっている（高槻市1984）。

2）このような燻しの桟瓦は高知県、京都府（京大1995）にも存在するがその場合、右桟・左桟両方を同一建物で葺き分け

て使う。これに対し、松江市周辺では左桟瓦を単独で使用する。同種の桟瓦は施釉赤瓦の生産が盛んな県西部では確認できず、その成立事情については全く解明されていないと言っても過言ではない。

3）類例として、松江市・長嶺遺跡ＳＩ01（松江市1986）、同・勝負遺跡ＳＩ01（島根県ａ1992）、東出雲町・渋山池古墳群ＳＩ01（島根県1988）などがある。

4）社日古墓（松江市竹矢町　島根県2000）、中竹矢遺跡（同　島根県ｂ1992）、正林寺五輪塔群（同大庭町　島根県1968）、内堀石塔群（同　島根県1990）、二反田古墓（同法吉町　松江市1987）がある。このうち正林寺五輪塔が最も古く室町時代前半で他は同後半に下るとされている（島根県2000）。

5）舟山古墓Ａ群の基壇は5.5×5.0m、高さ約１mの方形で、基壇周辺で石は確認できないと言う。上面に来待石製の五輪塔１基と台石１が並んで置かれており、室町時代後半～近世初頭と推定されている（西尾・稲田1996）。

6）法隆寺昭和資財帳作成に伴う一連の調査・研究は、多数の紀年銘資料の存在と相まって中近世瓦の変遷を検討する上で基盤となっている。

7）県内で中世瓦と確認できる資料は、富田城跡（広瀬町）、山吹城跡（大田市・仁摩町）、七尾城跡（益田市）から出土している。

8）鹿島町教育委員会のご厚意により、実見。

9）中世佐陀社の領域については、鳥羽院に寄進された際の関係文書である康治二年八月十九日太政官牒案（「安楽寿院古文書」『平安遺文』2519号）に記載があり、それによると秋鹿郡恵積郷と西条生馬郷であった（井上1997）。

引用・参考文献

浦林亮次1960「瓦の歴史－法隆寺遺瓦群における技術史的一試論」『建築史研究』28

島根県教育委員会1968「正林寺の五輪塔群」『島根県文化財調査報告書』第５集

高槻市教育委員会1984『摂津　高槻城本丸跡発掘調査報告書』

松江市教育委員会1986『中竹矢後１号墳、長嶺遺跡』

松江市教育委員会1987『二反田古墓』

鹿島町教育委員会1987『佐太前遺跡』

小林謙一・佐川正敏1989「法隆寺出土古瓦の調査速報（２）平安時代～近世の軒丸瓦」『伊珂留我　法隆寺昭和資財帳調査概報⑩』法隆寺昭和資財帳編纂所

上原真人1990「平瓦製作法の変遷－近世造瓦技術成立の前提－」『播磨考古学論叢』今里幾次先生古希記念論文集刊行会

島根県教育委員会1990『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書』Ⅶ

島根県教育委員会ａ1992『一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ（勝負遺跡）』

島根県教育委員会ｂ1992『一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書－中竹矢遺跡－』Ⅹ

今岡稔1992「上久々茂地区の中世石塔と古墓について」『上久々茂土居跡』島根県教育委員会

法隆寺昭和資財帳編集委員会1992『法隆寺の至宝　瓦－昭和資財帳－』第15巻

京都大学埋蔵文化財研究センター1995『京都大学構内遺跡調査研究年報　1992年度』

今岡稔1996「月山富田城採集瓦のコビキＡ手法について」『島根考古学会誌』第13集

西尾克己・稲田信1996「宍道町・舟山古墓群について」『宍道町歴史叢書』Ⅰ

井上寛司1997「中世佐陀神社の構造と特質」『重要文化財　佐太神社－佐太神社の総合的研究－』鹿島町立歴史民俗資料館

島根県教育委員会1998『渋山古墳群－一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅺ－』

益田市教育委員会1998『七尾城跡・三宅御土居跡』益田氏関連遺跡群発掘調査報告書

島根県教育委員会2000『社日古墳－一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12－』

間野大丞2001「来待石製五輪塔・宝篋印塔について」『来待石を中心とした日本海文化』

松江市教育委員会2001『田中谷遺跡（Ⅲ区）発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第86集

第7章　角　谷　遺　跡

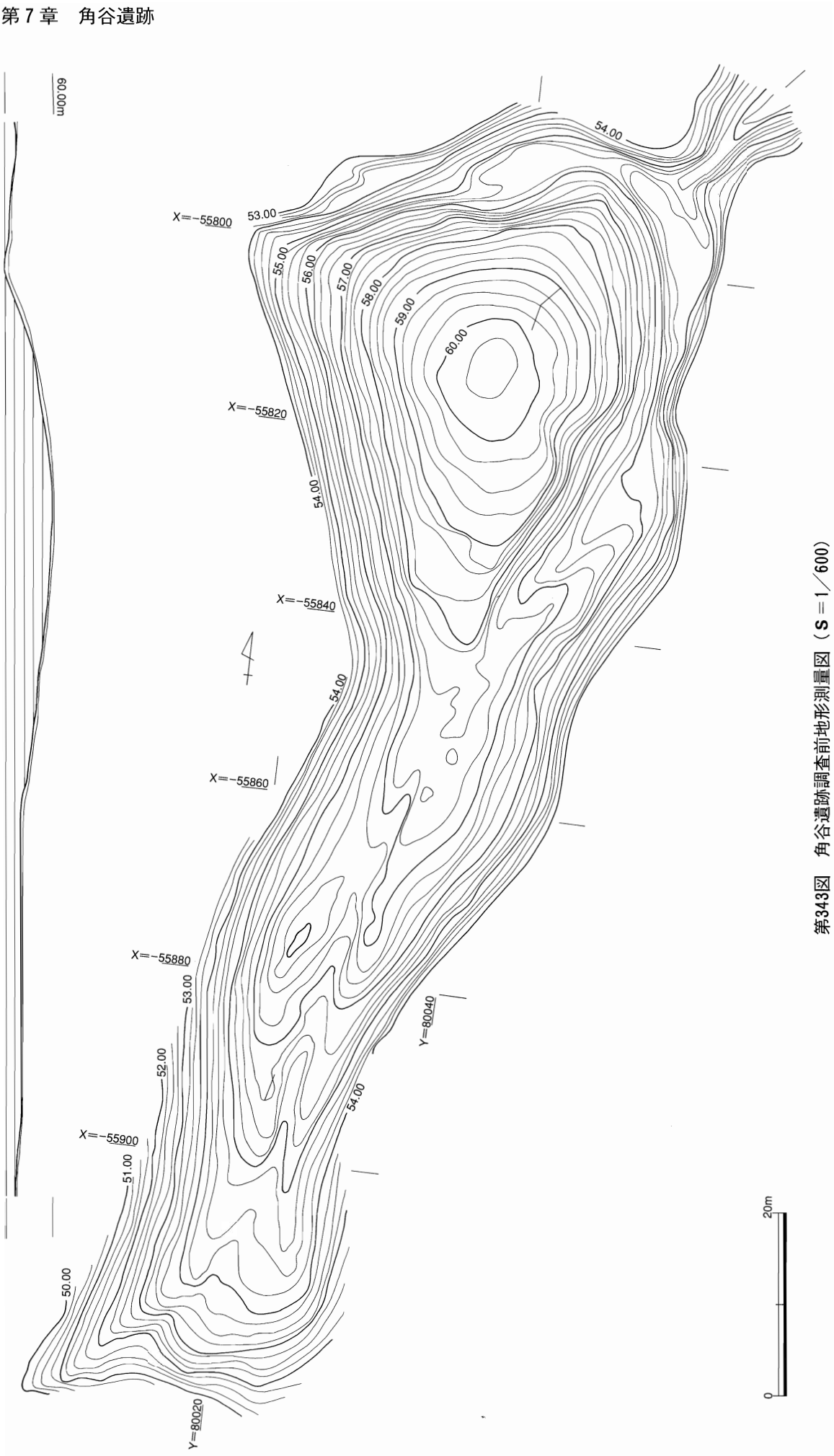
第1節　調査の経過および調査方法

角谷遺跡は、東西に細長い谷に挟まれた、南北にのびる丘陵尾根上に位置している。戦国期に尼子氏に属した松田氏の居城、白鹿山城砦群は角谷遺跡の北東に位置する。

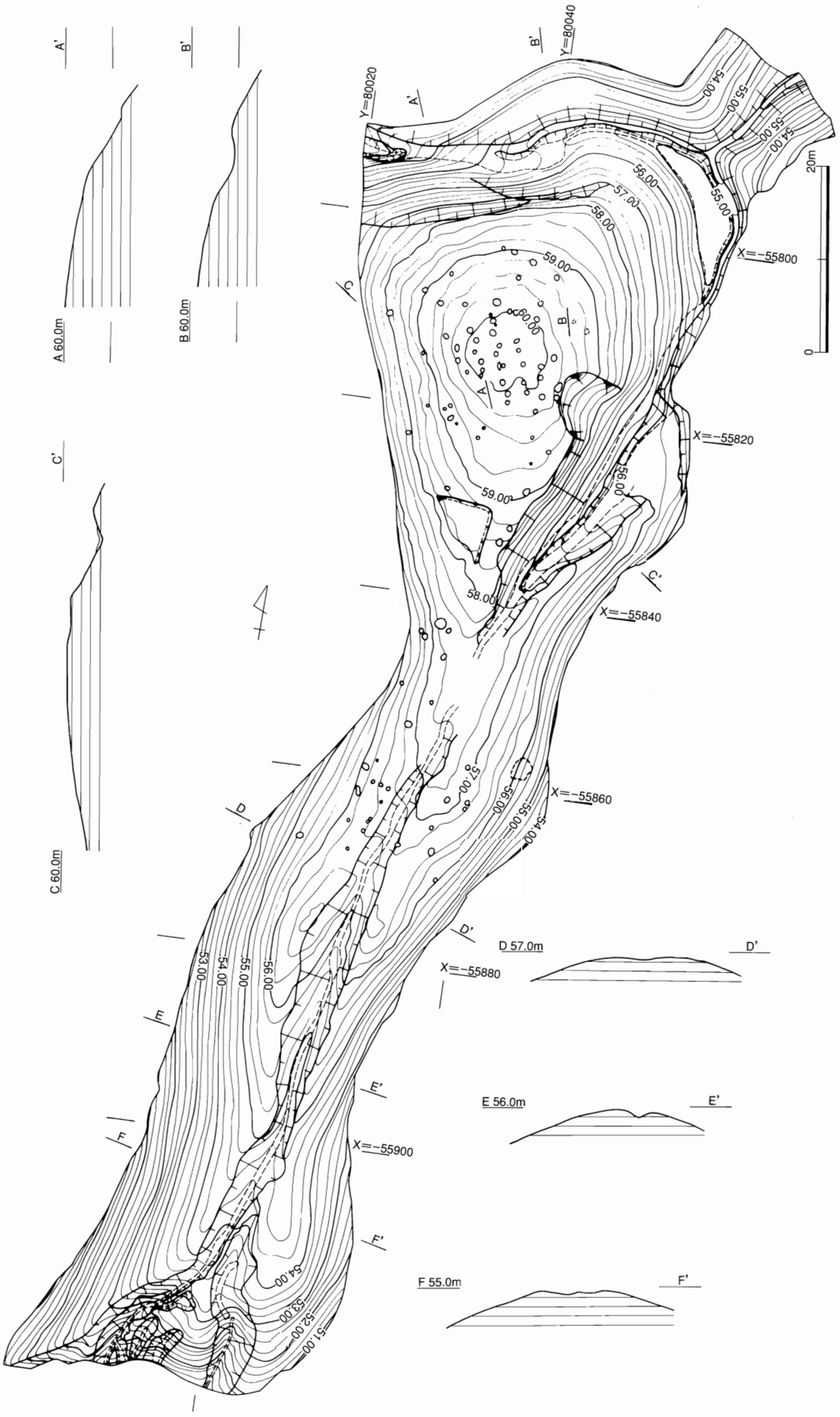
遺跡の最高所は標高約60mで、この尾根の一つのピークとなっている。丘頂部はなだらかな地形で、南側へは緩やかに傾斜しながら尾根がのびており、北側は斜面が急に下っており、小さな谷が入り込んでいる。

調査前に現地を踏査したところ、地形の様子からこの部分が山城の可能性があると考えられ、トレンチ調査では、石器や須恵器片が出土したため、本調査を実施することとなった。調査にあたって、25cmコンターで地形測量を行ったのち、9月20日より発掘調査を開始した。丘頂部を中心にピットが100基余り検出できた。12月29日に空中写真撮影・測量を実施したのち、土橋状遺構の南半分を重機で掘り下げ、土層断面を記録し、平成12年1月12日に調査を終了した。調査面積は4000㎡である。なお、平成12年4月9日、地元住民を対象とした現地見学会が開催された。

第342図　角谷遺跡調査区設定図（S＝1／2000）



第343図　角谷遺跡調査前地形測量図（S＝1／600）



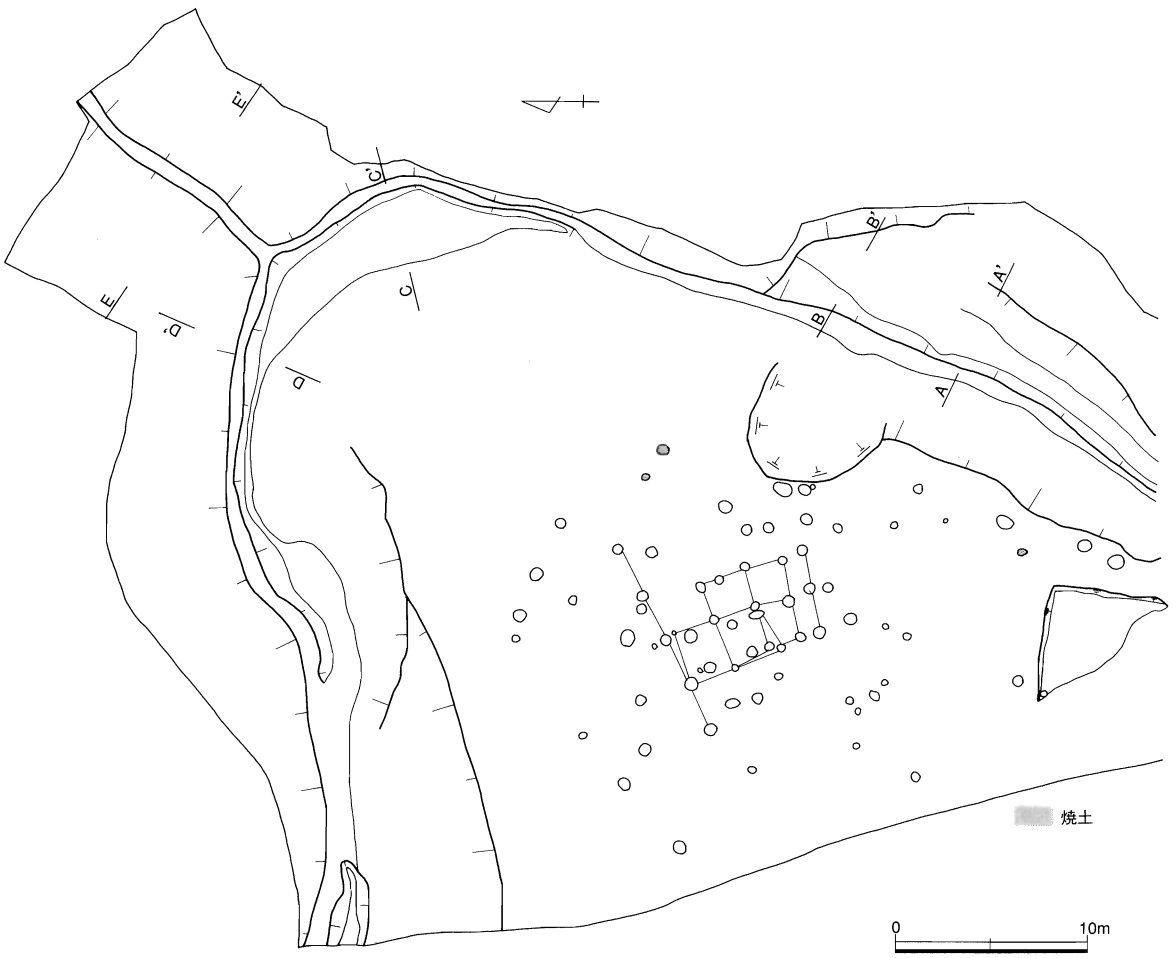
第344図　角谷遺跡調査後地形測量図（S＝1／600）

第2節　調査の結果

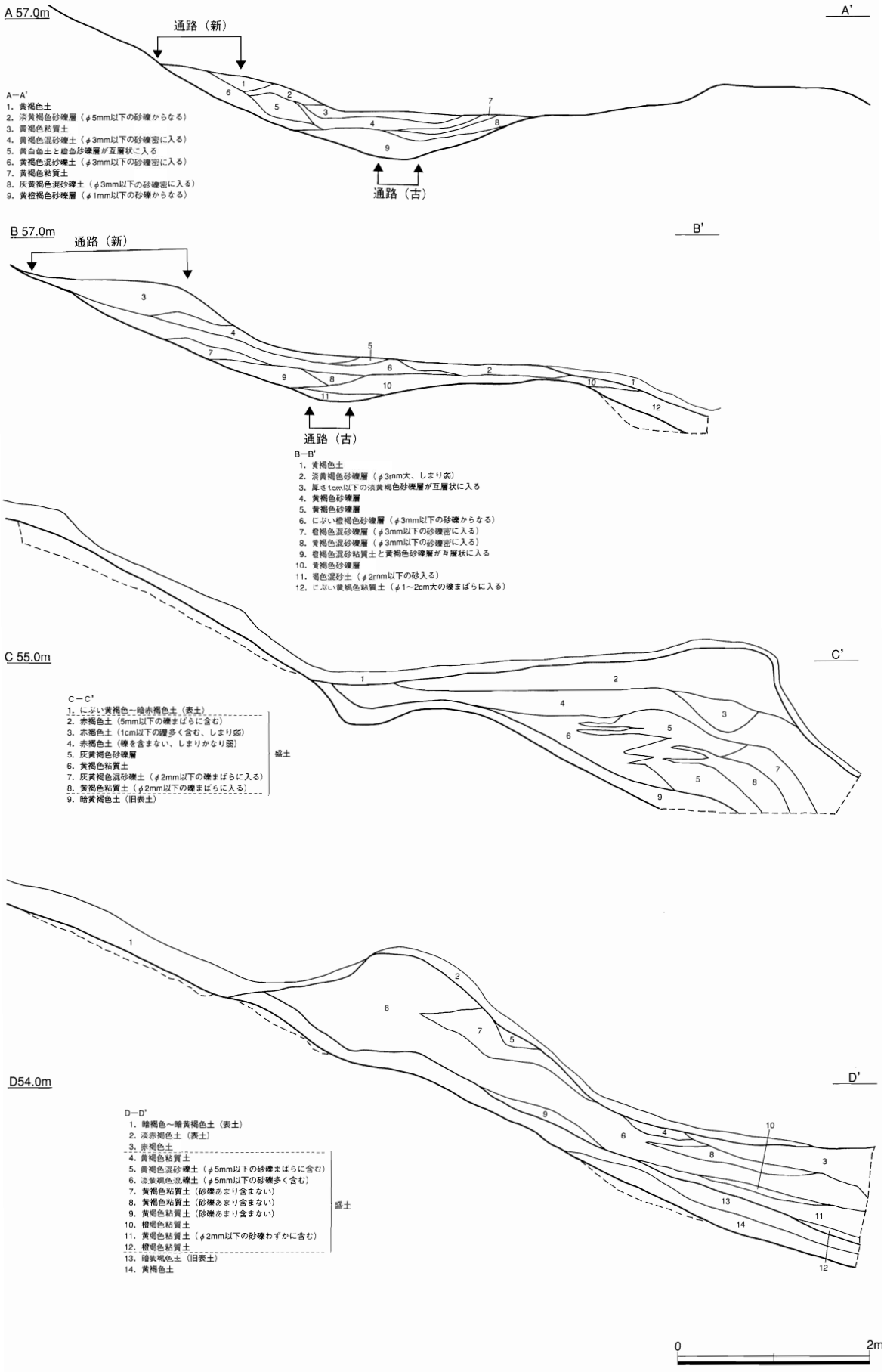
発掘調査前の地形

まず、発掘前の踏査・地形測量で確認できた現地の状況について触れておく。丘頂部については人為的に削平されたり、盛り土によって造成されているような状況は窺えなかったが、なだらかな地形で、広い空間を有していた。丘頂部南側の尾根筋から丘頂部の東側部にかけては、土塁状の高まりを伴う通路がのび、さらにこの通路を経て丘頂部の北側へまわりこむと、標高約55mの部分で弧状の平坦面が確認できた。弧状平坦面は長さ18m、最も広い部分で幅が4.5mある。弧状平坦面の外縁は若干高い通路になり、内側はくぼんだ状態であった。弧状平坦面から北には小さな谷が入り込んでいたが、平坦面から上面幅0.5mの土橋状の遺構（以下、土橋）が設けられ、北側の丘陵と往き来できるようになっていた。また、弧状平坦面の西側にも通路がのびており、丘陵の麓まで降りていくことが可能であった。

このような地形から、丘頂部が山城遺構の中心部で、弧状平坦面が丘頂部に対して帯郭的な性格を持つ可能性が考えられた。また丘頂部南側の尾根筋から東側にかけてのびる通路に土塁状の高まりが認められることも防御的な機能を持つように思われた。



第345図　角谷遺跡丘頂部周辺遺構配置図（S＝1／400）



第346図　角谷遺跡土層断面図（S＝1／60）

なお、丘頂部の南西側に東西６ｍ、南北６ｍの加工段のようなものが見られるが、これは山小屋の跡である。

次に発掘調査で確認できたことを以下に述べたい。

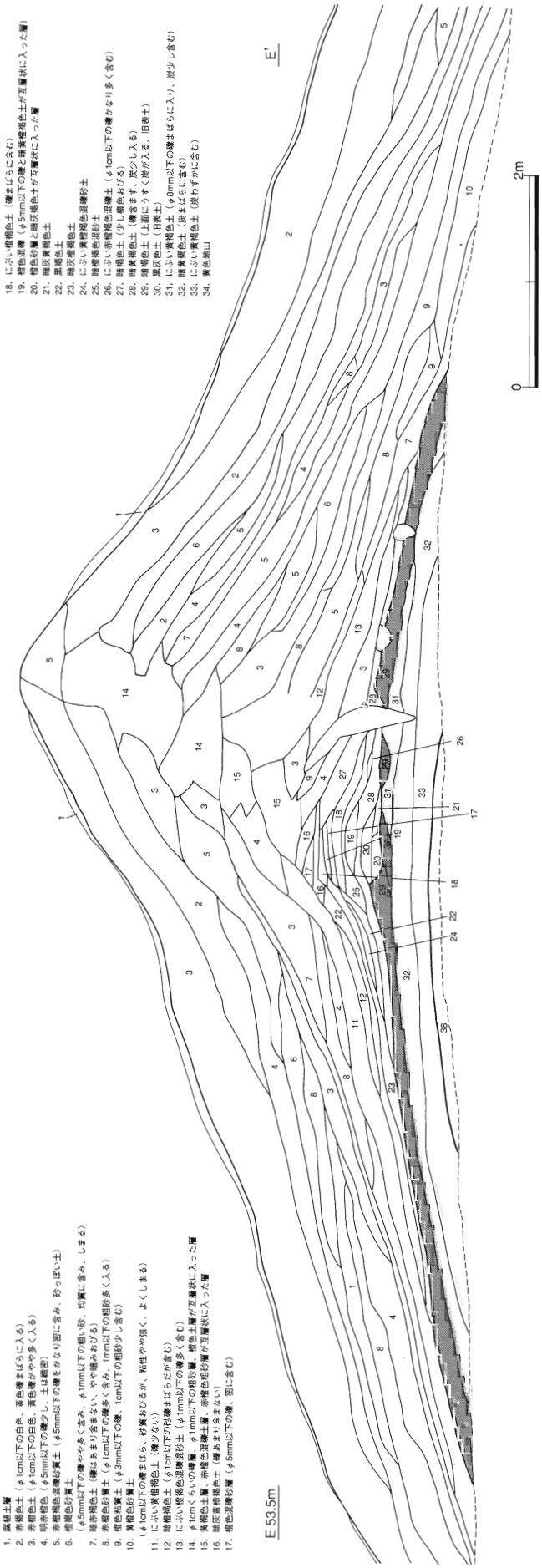
通路跡

尾根筋から丘頂部東側の通路に伴う土塁状の高まりは地山からなり、盛土は施されていなかった。このことから、土塁状の高まりは人為的に削り出して造られたのではなく、人が行き来するうちに通路の部分に窪みが生じたり、草木が生えなくなって、そこに雨水が流れることでさらに窪みが大きくなったと推測できる。土塁状の高まりと南側尾根筋の通路との高低差は最大で0.75mある。

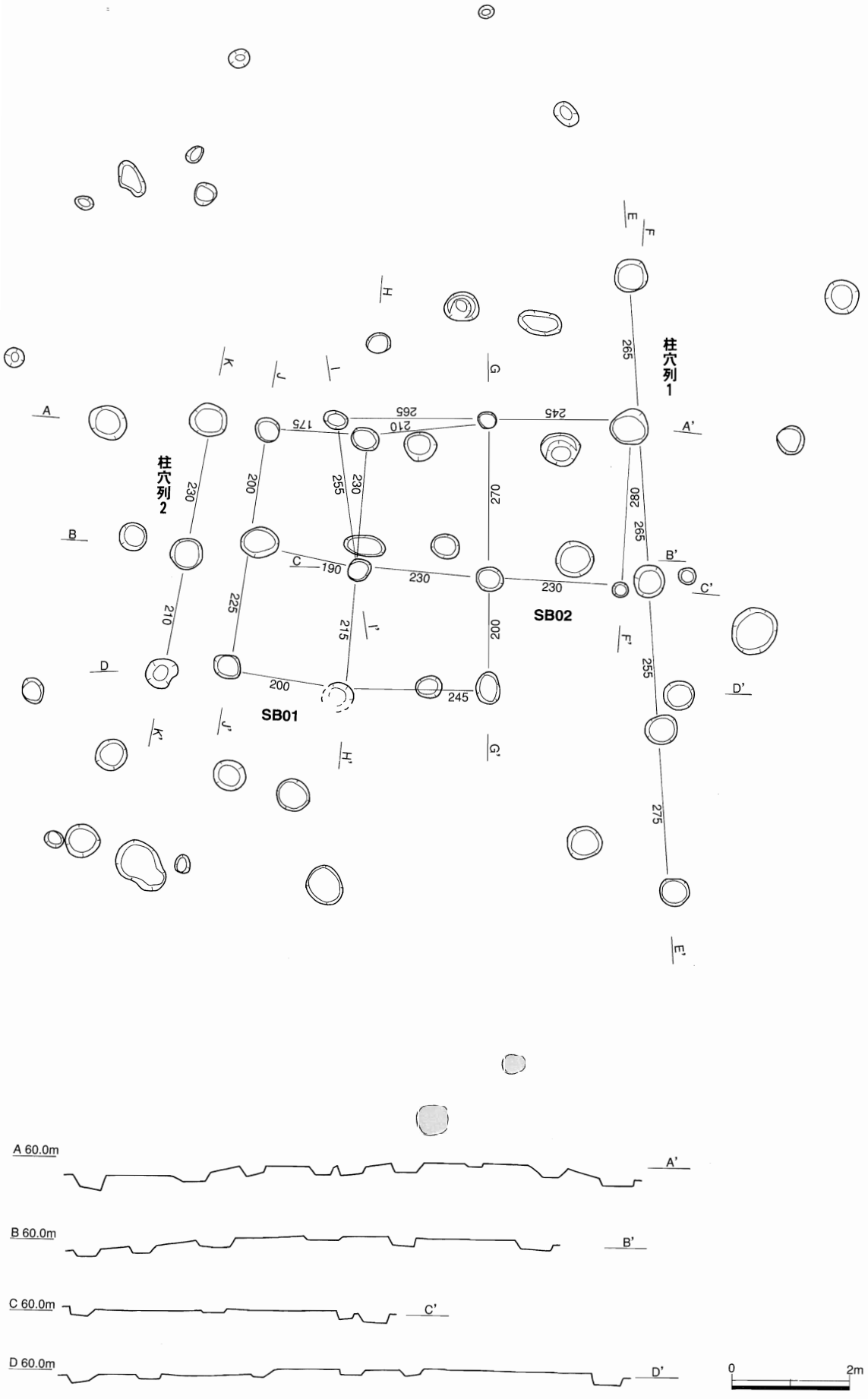
丘頂部東側の通路は土層の断ち割りを行った結果、古い段階の通路を埋めて新しい通路が造られていることが分かった。古段階の通路は、地山面が低く窪んだ部分を通り、標高は第345図A－A'ラインで55.5m、B－B'ラインで55.3mと北側へ行くほど低くなっている。古段階の通路は全面を検出していないためどのようにのびるか断定できないが、北側は地崩れ状になっており、ここでとぎれると思われる。新段階の通路は古段階の通路を埋め戻し、さらに斜面中に一段高く盛土をして造られ、北側の弧状平坦面につながる。標高は第345図A－A'ラインで56.5m、B－B'ラインで56.6mになる。古段階の通路が地崩れで通れなくなったために造り直された可能性も考えられる。

弧状平坦面・土橋（第345～347図、図版229・230）

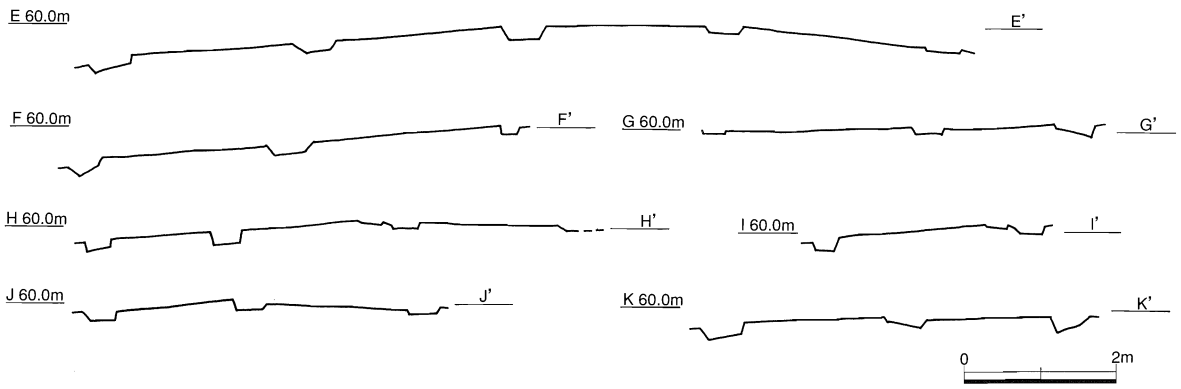
弧状平坦面では丘陵の西麓からのびてきた通路と南側からのびてきた通路が合



第347図　角谷遺跡土橋土層断面図（S＝1／60）



第348図　角谷遺跡丘頂部ピット群実測図（S＝1／100）



第349図　角谷遺跡丘頂部ピット群断面図（Ｓ＝1／100）

流し、ここから北側の丘陵につながる形で土橋が設けられている。弧状平坦面・土橋は大規模な盛土で一体となって造られたと考えられる。土橋の南北の長さは13m以上あり、盛土は3.3mの高さで、東西20m以上の範囲で盛られている。土橋の盛土の芯部は１㎝前後の礫層や、粗砂層、赤橙色から黄褐色の土層が互層状になり、堅くしまった状態であった。これに対し、盛土の外側の部分は赤褐色から黄橙色の土層が斜め方向に堆積しており、しまりは弱く、通路の上からかきおろすようにして土が盛られたかのような印象を受ける。芯部は盛土上部に行くにつれて、西側から東側に移動しており、この土橋が一度に築かれたものではなく、何段階かに分けて造られた可能性もある。旧表土層は尾根の中央で橙色の砂層や暗灰褐色から暗黄橙褐色土が入り込んでとぎれているが、この部分は土橋が築かれる以前の通路跡だったのかもしれない。なお、旧表土中からは351－６が出土しており、土橋は奈良時代以降に築かれたと考えられる。弧状平坦面上では鉄砲玉が１点採取されている。

丘頂部のピット群（第348・349図、図版225）

丘頂部では、明確な盛土や地山の削り出しは確認できなかったが、多数の柱穴を確認することができた。柱穴の並びについてはやや不規則な部分もあったが、ここでは２棟の掘立柱建物と２つの柱穴列を試みに復元した。

ＳＢ01は東西２間×南北２間の総柱建物で、東西の長さ4.7m、南北の長さが東辺で4.5m、西辺で3.9mあり、いびつな四角形をしている。ＳＢ02と重複するが前後関係については不明である。東辺を基準とした主軸方向はＮ－18°－Ｗである。

ＳＢ02は東西１間×南北２間の掘立柱建物で、東西の長さが2.8m、南北の長さが東辺で4.6m、西辺で5.1mで、やや不整形な台形になっている。東辺を基準とした主軸方向はＮ－19°－Ｗである。

柱穴列１はＳＢ01の北側に位置し、この北辺と平行する。５基の柱穴がＮ－63°－Ｅ方向に並んでおり、東西の長さは10.7mになる。

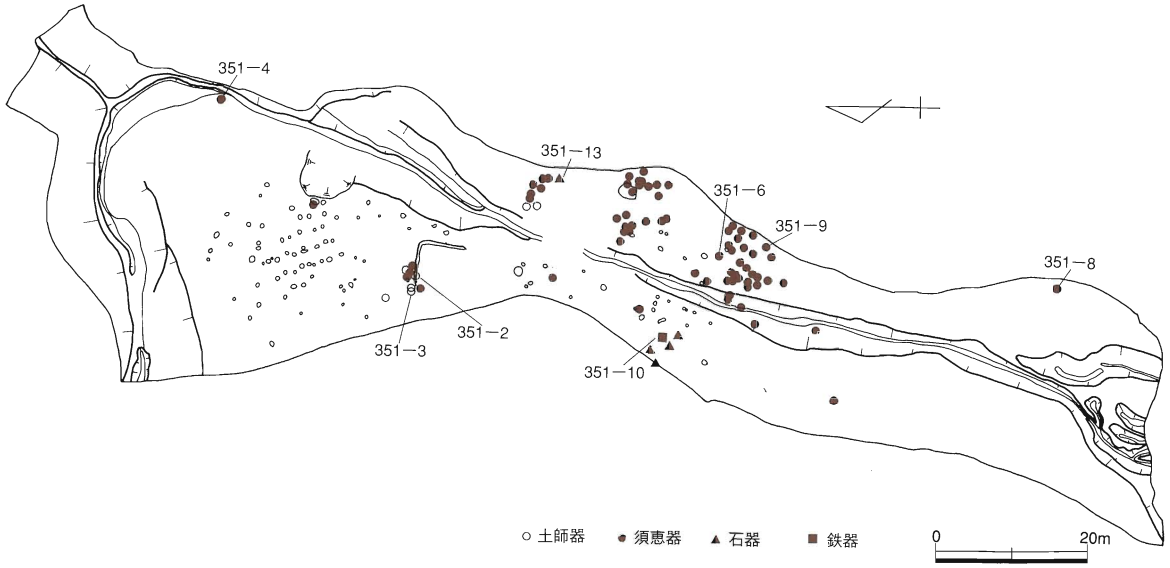
柱穴列２はＳＢ01の南側に位置し、この南辺とほぼ平行する。３基の柱穴がＮ－79°－Ｅ方向に並んでおり、東西の長さは4.4mになる。

なお、ピット群周辺では数ヶ所の焼土面も認められる。

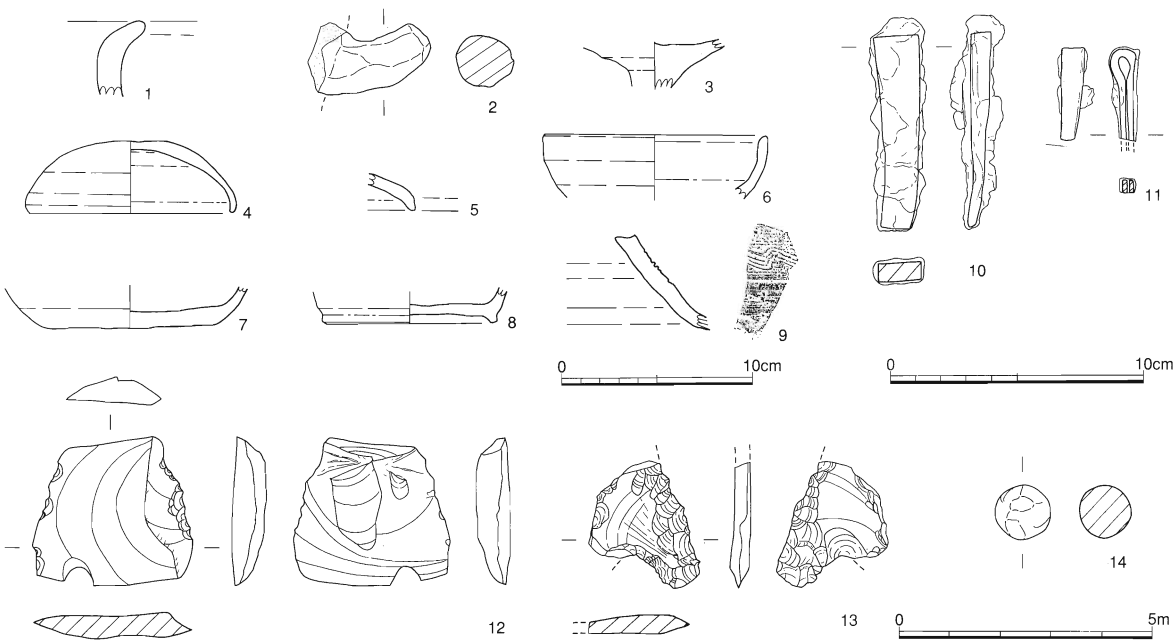
遺物（第351図、図版226）

石器・土師器・須恵器・金属製品が出土した。遺物はおもに丘頂部の南側の尾根筋で出土しているが、なかには弧状平坦面上で採取されたものや、土橋の旧表土中に含まれていたものもある。

１は土師器甕、２は甑の把手である。３は小片であるが、土師器の柱状高台皿で、12世紀前後の



第350図　角谷遺跡遺物分布図（S＝1／1000）



第351図　角谷遺跡出土遺物実測図（1～9：S＝1／4、10・11：S＝1／3、12～14：S＝2／3）

ものと思われる。４は須恵器坏蓋で弧状平坦面の南東端付近で出土したものである。大谷編年出雲６期に位置づけられる。５は須恵器蓋、６～８は埦で、それぞれ８世紀後半から９世紀初頭に位置づけられよう。６は土橋の旧表土中から出土している。９は須恵器器台の破片と考えられる。破片上部には透孔の一部が残っているが、透孔の下端は沈線と平行しておらず、透孔の形態は不明である。古墳時代後期のものと思われる。10はくさび状の鉄器、11は厚さ３㎜の鉄板を折り曲げて作られた鉄器で、用途は不明である。12は旧石器の台形様石器と思われる。左右側縁には二次調整が施されている。13は黒曜石製の凹基無茎石鏃で、先端やかえりが欠損している。14は鉛製の鉄砲玉で発掘調査後の見学会の時に弧状平坦面で採取されたものである。直径11㎜で、重量は6.35gある。使用による変形は認められない。

第3節　まとめ

角谷遺跡は尾根筋上に南北にのびる通路跡と丘頂部のピット群からなる。丘陵北側では谷が入り込み、尾根が途切れた形になっているが、ここで南北にのびる通路跡と西側からのびる通路跡が合流して弧状平坦面が設けられ、ここから北側の丘陵につながる形で土橋が設けられている。

丘頂部のピット群については、やや不規則な柱配置であるが建物跡や柱穴列が立ち並びそうである。これらに直接伴う遺物はないものの丘頂部の南側の尾根筋では奈良・平安時代の須恵器片が比較的多く出土し、ピット群と比較的近い位置では12世紀頃の柱状高台皿1点が出土している。

本遺跡と遺構・立地状況の類似した遺跡として安来市陽徳遺跡（島根県1995）が挙げられる。陽徳遺跡は標高約80mの丘陵頂上に3棟の掘立柱建物跡が確認され、周辺には9～10世紀前後の須恵器を伴う土坑や、12世紀代の土器を伴う土坑が検出されている。遺跡の性格として山岳寺院との関連性が指摘されている。本遺跡では祭祀関連の遺物は出土していないため断言できないが、何らかの祭祀に関わる建物跡があった可能性も考えておきたい。

本遺跡で特に注目されるのは大規模な盛土によって築かれた土橋である。以下にこれらの類例を挙げ、この遺跡の性格を考えることとしたい。

松江市藤ヶ谷遺跡C地点（松江市1999）の土橋は、南北にのびる尾根筋の低くなっている部分に、長さ2.5m、旧表土から高さ2mの盛土がされている。土橋に伴って出土した遺物はないが、8世紀後半頃の須恵器、近世以降と見られる褐釉陶器が出土している。報告では山城に関連する遺構と理解されているが、土橋に接して郭が設けられている様子は見られない。

岡山県みそのお遺跡（岡山県1993）では、尾根筋の低くなっている部分に「土塁状遺構」が築かれている。芯部は細砂と粘質土によって版築状になり、その外側は粘質土によって覆い仕上げられており、本遺跡の盛土方法と共通している。報告では、この遺構について古道と考えられている。

通常、山城の土橋は尾根筋を削り出して造られており、管見にふれる限りではこのように盛土で造られているものは見られない。また、盛土に要する労力や防御的な機能から考えるならば、尾根を削り出して土橋を設ける方がより効果的であると思われる。このようなことから、本遺跡の土橋も山城に伴うものとするには疑問が残り、むしろ尾根筋を結ぶ通路と考えるべきかと思われる。ただし、このような大規模な造成がいかなる理由で行われたのか今のところ明確にはできない。

本遺跡の場合、郭状の弧状平坦面に鉄砲玉が採取されていることから、通路として造成された部分がのちに山城（陣城）に取り込まれたとも考えられる。本遺跡の北東に位置する白鹿山城砦群では尼子氏と毛利氏の間で戦闘が繰り広げられており、こうした流れの中でこの地でも兵員の駐屯施設や監視施設が設けられた可能性もあろう。

参考文献

岡山県教育委員会1993　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告87みそのお遺跡－県営御津工業団地造成工事に伴う発掘調査－』
島根県教育委員会1995　『陽徳遺跡－一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書11』
松江市教育委員会1999　『大佐遺跡群発掘調査報告書』

第8章　自然科学分析

第1節　田中谷遺跡・下がり松古墓における^{14}C年代測定

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント㈱）

1．はじめに

当報告は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した分析委託業務の概報である。

当委託業務は、遺構の年代測定、および調査地点の地形発達の資料とするために、発掘調査に伴って露出した試料の^{14}C年代測定を実施したものである。

分析用試料が採取された「田中谷遺跡」・「下がり松遺跡」は、松江市法吉町地内に立地する遺跡である。

2．試料について

測定試料はすべて島根県教育庁埋蔵文化財調査センターより提供を受けた。測定試料を表5に示す。

表5　分析試料一覧

試料No.	遺　跡　名	出土地点	種別
1	下がり松遺跡	ＳＸ07	木炭
2	田中谷遺跡Ⅱ区	トレンチ１－７層	自然木
3	田中谷遺跡Ⅱ区	トレンチ２－４層	自然木
4	田中谷遺跡Ⅱ区	トレンチ３－９層	自然木
5	田中谷遺跡Ⅴ区		井戸枠
6	田中谷遺跡Ⅴ区	Ｅ２	桶

3．年代測定方法および結果

ＡＭＳ（加速器質量分析）法により年代測定を行った。分析結果を表6に示す。

表6　^{14}C年代

試料No.	測定年代（yBP）	δ^{13}C（‰）	補正^{14}C（yBP）	暦年代*1（cal　y.）	測定番号（PLD－）
1	9,440±35	－25.6	9,430±35	BC8800～8605	996
2	24,610±80	－29.1	24,540±80		997
3	3,110±30	－29.9	3,030±35	BC1390～1330 BC1325～1210	998
4	20,970±70	－24.8	20,970±70		999
5	1,890±30	－28.0	1,840±30	AD120～215	1000
6	2,230±30	－23.5	2,250±30	BC395～350 BC320～230	1001

*1：2 sigma，95%probability

4．測定結果と予想年代の違いについて

試料№.1は中世の墓にかかわる炭と考えられている。一方得られた値は9,440±35 yrBPと、推定されていた年代よりおよそ9000年古い値を示した。提供を受けた分析用試料は炭片を集めた物であり、分析試料とした炭片の中に異なる年代を示す炭が含まれていたと考えられる。遺跡周辺には崖錐堆積物が分布しており、この中に含まれていた木片が荼毘に際して混入した可能性がある。

試料№.2～4は、異なる地点の崖錐堆積物より得られた試料である。それぞれの直上が弥生時代後期を考えられる遺構面を形成しており、弥生時代中期から後期頃の年代が推定された。得られた値は最終氷期、および縄文時代晩期頃を示すものである。崖錐堆積物のうち2地点が最終氷期の間に、1地点は縄文時代晩期に形成された可能性がある。また試料全てについて、後世に形成された崖錐堆積物に二次的に取り込まれた可能性が否定できない。

試料№.5は弥生時代後期に使われた井戸枠であり、桶からの転用と考えられている。このことから、得られた1,840±30yrBPの値は、井戸枠（桶）の材料の伐採年代に近いものと考えられる。

試料№.6は弥生時代後期に使われた桶の一部である。しかし、得られた年代2,230±30yrBP（弥生時代前期）の値を示し、予想年代より数百年古い値を示す。一般に木の成育年には数百年の幅があり、伐採年、製品の制作年、廃棄年にも、それぞれ数百年以上の差がある。これらのことから、得られた年代は材料の木が生育していた年代を示すと考えられる。

第２節　塚山古墳出土炭化材の^{14}C年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

塚山古墳の主体部は、古墳の中央よりやや西に位置し、東西方向の幅が0.4～0.5m、南北方向の長さが3.2mを呈する。木棺は残存していないが、床面には5cm以下の円礫が敷き詰められている。遺体は頭部を北にして葬られたと考えられている。副葬品は、遺体の両肩付近および右足付近に鉄剣・鉄刀、足の南側に短甲、頭の北側に青銅鏡やガラス小玉等が検出されている。また、青銅鏡の北側縁辺と右肩付近の鉄剣下部からは黒色の木片が出土しており、それぞれ鏡を納めた箱や木棺の部材に由来する可能性が考えられている。

本報告では、これらの木材の放射性炭素年代測定を行い、古墳の構築時期に関する資料を得る。また、木材の樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。なお、試料がいずれも小片であるため、年代測定は、小片でも測定可能な加速器質量分析法（AMS法）で行う。

１．試料

試料は、鏡背を上に置かれた青銅鏡の北側縁辺から出土した木片１点（試料番号１）と、主体部西側に置かれた鉄剣（270－5）の下部から出土した木片１点で、約1.5cm×1.0cm×３mm程度の木片が２点と５mm角以下の細片が数片入っていた。そのため、比較的大きい木片２点を試料番号2,3とした。放射性炭素年代測定は、試料番号１と２の２点について行い、樹種同定は３点全点について行う。

２．試料の性状

試料は、いずれも肉眼で黒色を呈する。日本産樹木では、生木で材が黒色を呈する種類はほとんどないが、遺跡から出土する中には稀に黒色を呈する場合がある。黒色を呈する種類は、これまでの事例ではクリやコナラ節等が多い。一方、木材が炭化した場合にも肉眼で黒色を呈する。生木と炭化材の最も大きな違いは、その成分である。生木では、多糖類であるセルロース、ヘミセルロース、芳香族重合化合物であるリグニンを３大成分とする。また、生木が黒色化するのは、おそらく木材中のタンニンなどが関わっていると考えられる。一方、炭化材は木材を空気の供給を絶って加熱することにより、上記の化学物質は分解され、炭素・酸素・水素などは複雑な化合物となって揮発し最後に木炭（炭化材）が残る。また、有酸素で燃焼させた場合でも、途中で消火すれば木炭が残る。この木炭の成分は、８割近くを固定炭素が占め、他に揮発分や灰分等で構成される。肉眼的には、生木が生物的で柔らかい印象があるのに対し、炭化材はやや無機的で堅い印象がある。また、炭化材は、生木に比較して弾力性が低く、横断面方向に比較的割り易い。炭化材の木口面の破断面は、比較的平滑である。炭化材は、断面が時に金属光沢を有するが、遺跡出土材では炭化時の状況や保存状態により見られないことも多い。今回の試料は、金属光沢はみられないが、横断面方向に比較的容易に割れ、断面が平滑になる。また、電子顕微鏡観察時に生木の場合に認められることが多いチャージアップがない。

以上の特徴から、今回の試料は炭化材と判断される。

3．方法

（1）放射性炭素年代測定

試料調製および測定は、株式会社加速器分析研究所（IAA）が行った。

表7　放射性炭素年代測定および樹種同定結果

番号	出土位置	試料の質	樹種	年代	δ13C	補正年代	Code No.
1	鏡北側	炭化材	針葉樹	1590±30BP	−24.0±1.4‰	1610±40BP	IAA-10127
2	鉄剣（270−5）直下	炭化材	ケヤキ	1990±30BP	−20.9±1.0‰	2060±40BP	IAA-10128
3	鉄剣（270−5）直下	炭化材	ケヤキ				

1）放射性炭素年代測定は、加速器質量分析法（AMS法）による測定。
2）年代は、1950年を基点とした年数で、補正年代は同位体効果の補正を行った年代。
3）放射性炭素の半減期は、5568年を使用した。

（2）樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

4．結果

放射性炭素年代測定および樹種同定結果を表1に示す。炭化材の放射性炭素年代測定結果は、試料番号1が1590±30BP（補正年代1610BP）、試料番号2が1990±30BP（補正年代2060±40BP）であった。一方、炭化材の樹種は、試料番号1が針葉樹、試料番号2が落葉広葉樹のケヤキに同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・針葉樹

試料の大部分は微細な炭粉が塊状になったものであり、木材組織が観察できたのは1㎜角程度の小片1点であった。軸方向組織は仮道管を主とする。仮道管内壁は平滑で、らせん肥厚は認められない。樹脂細胞および樹脂道の有無は、試料が小片のため確認できなかった。放射組織は、観察した範囲では柔細胞のみで構成され、樹脂道は確認できない。分野壁孔は、少なくとも窓状ではないが、保存が悪く詳細は不明。放射組織の内壁および末端壁は平滑となり、じゅず状の肥厚は見られない。放射組織は単列、1～6細胞高。

現生種との比較では、スギ、ヒノキ科、マキ属等が比較的近い組織を有することから、これらのいずれかと考えられる。これらの種類を同定するためには、樹脂細胞の配列や分野壁孔の形態が重要であるが、今回の試料では観察できず、種類の同定には至らなかった。

・ケヤキ（Zelkova serrata（Thunb.）Makino）　ニレ科ケヤキ属

試料はいずれも年輪界付近で割れているが、晩材部道管の径と年輪界に僅かに残る孔圏部道管の径の変化から環孔材と判断できる。孔圏外の小道管は、漸減しながら塊状に複合して配列し、接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～10細胞幅、1～60細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

5．考察

（1）年代について

出土した木材の年代は、試料番号1が1590±30BP（補正年代1610±40BP）、試料番号2が1990±

30BP(補正年代2060±40BP)であった。これらの年代は、弥生時代～古墳時代前期の年代測定値（日本第四紀学会ほか，1992）に相当し、推定年代よりも古い。試料のうち、試料番号2は副葬品である鉄剣の直下から出土しており、埋葬時の炭化材であることは確実である。このような場合には、樹齢の影響等によって実際よりも古い年代が得られた可能性がある（東村1990)。

日本に生育する樹木の多くは、毎年1本の年輪を形成する。樹種によって異なるが、樹木が生きている間に実際に活動している年輪は外側の一部のみで、古い年輪から順に活動を停止し、放射性炭素の崩壊が始まる。そのため、樹木の中心部を使用して年代測定を行うと、実際の伐採年代よりも古い年代が得られることになる。このような年輪による誤差は、大径木に成長した樹木ほど大きくなる。

今回年代測定を行った炭化材は、針葉樹とケヤキに同定されている。針葉樹は、スギ、ヒノキ科、マキ属等が候補として挙げられているが、スギやヒノキ科には樹齢が1000年を越える個体が珍しくない。また、ケヤキも大径木になる種類であり、現在天然記念物に指定されている中では、樹齢1000年を越えると推定されている個体もある（沼田1984)。したがって、今回の試料についても、年輪の誤差による可能性がある。とくに、ケヤキの方がより古い年代が得られていることは、木棺などの大型の部材に利用され、そこに古い年輪の部分も混じっていた可能性が考えられる。しかし、後述するように、これらの炭化材が直接古墳で使用された部材に由来するか疑問も残る。今後、鉄剣などに木質が付着していれば、それらの木質の年代測定も行い、比較検討を行いたい。

（2）用材選択について

古墳から出土した木片は、いずれも炭化材であり、青銅鏡北側出土試料（試料番号1）が種類不明の針葉樹、鉄剣（270－5）直下出土試料（試料番号2,3）が2点ともケヤキであった。試料番号2,3については、同じ樹種であること、大きさがほぼ同じであること等を考慮すると、同一部材に由来する可能性が高い。

これらの炭化材は、試料番号1が青銅鏡を納めた箱、試料番号2,3が木棺の部材に由来する可能性が考えられている。箱に針葉樹材が利用される例は、これまでにも多数報告されており（島地・伊東1988；伊東1990)、今回の結果も調和的である。また、ケヤキは、山形県衛守塚および漆塚古墳、神奈川県日吉観音松古墳で木棺の部材として利用された例がある（山内1973,1981)。ケヤキは大径木になることから、大型の部材として利用可能であり、本古墳でも木棺の部材として利用された可能性がある。しかし、炭化材は木材が蒸し焼きや不完全燃焼で燃え残った場合等、火を受けた場合にのみできるものであり、埋土中で自然に炭化することはあり得ない。例えば、神奈川県久地西前田横穴墓では、緑青が付着した副葬品などに関連すると考えられる木材が出土しているが、炭化材ではなく生木であった（パリノ・サーヴェイ㈱1998)。このことから、これらの炭化材は、埋葬時にすでに何らかの理由により火を受けて炭化していたことが推定される。埋葬時に木棺を焼く事例も知られているが、その場合は木棺の形状が残り、もっと多くの炭化材が出土することが予想される。また、床面の円礫に焼成痕が残ることも推定される。しかし、今回調査が行われた主体部内では、他に木棺や箱の部材と考えられる炭化材が出土していない。そのため、これらの炭化材は、木棺や箱以外の木材に由来する可能性がある。

古代の埋葬例では、除湿などを目的として墓内に炭化材が詰められた例があるが、大量の炭化材が検出されている（小清水・嶋倉1981)。また、福島県蒲倉古墳群では、祭祀の痕跡などと考えら

れる炭化材集中部が検出されているが、これも横穴式石室を持つ古墳の桟道での検出であり、炭化材の他に石材の被熱なども確認されている（黒澤他2000）。これらの事例を考慮すると、今回の炭化材は、埋葬施設内に意図的に置かれた例や祭祀などが行われた例とは傾向が異なる。これらのことから、埋葬作業の際に使用した燃料材などの一部が何らかの要因により混入した可能性等が考えられるが、断定はできない。

引用文献

山内文1973　「植物遺存体の研究法」『考古学ジャーナル』No.80　p.20－25

小清水卓二·嶋倉巳三郎1981　「木炭の樹種」.「太安萬侶墓」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第43冊　p.89－91　奈良県立橿原考古学究所.

山内文1981　「材の解剖学的識別法および発掘された丸木船·弓·木棺の用材について」『古文化財の科学』No.26　p.43－59

沼田眞編1984　「日本の天然記念物5」『植物Ⅲ』186p　講談社

島地謙·伊東隆夫編1988　『日本の遺跡出土木製品総覧』296p　雄山閣

東村武信1990　『改訂　考古学と物理化学』.212p.,学生社.

伊東隆夫1990　「日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ」.資料,『木材研究』第26号　p.91－189　京都大学木材研究所.

日本第四紀学会1992　『図解·日本の人類遺跡』242p　東京大学出版会

パリノ·サーヴェイ㈱1998　「久地西前田横穴墓群（第2次）における自然科学分析」『久地西前田横穴墓群－第2次調査－』p.84－96　久地西前田横穴墓群発掘調査団

黒澤俊廣他2000　『蒲倉古墳群第6次調査報告－』78p　福島県郡山市教育委員会·財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

第3節　塚山古墳出土の赤色顔料について

朽津信明（東京文化財研究所）
下山　進（吉備国際大学）

1．はじめに

島根県松江市の塚山古墳では、礫床の上の埋土中から、微量の赤色顔料が出土したと報告されている[1]。本稿では、その赤色顔料の分析結果を報告する。

2．分析方法と結果

2．1．方法

分析は朽津・下山[2]に基づき、非接触型分光光度計による可視光反射スペクトル測定[3]と、低レベル放射線源を用いた蛍光X線分析[4]とにより行った。前者では接写レンズを用い、測定時間約1秒で赤色顔料の色を計測した。後者では、線源としてアメリシウム241（50マイクロキュリー）を用い、測定時間は900秒で、主要元素を分析した。なお、試料は非破壊で分析され、そのままの状態で既に返却されている。

2．2．結果

まず、測色の結果、赤色顔料の色はL＊＝36.7，a＊＝23.2，b＊＝17.1であった。また、その可視光反射スペクトルは、580nm付近に大きな吸収を持つ、朱に特徴的なスペクトル[2]と波形が類似した。次に元素分析の結果、主成分として水銀が検出され、それ以外に僅かに鉄やカルシウムが検出された。

3．考察

元素として検出された鉄やカルシウムなどは、付着土壌に起因するものと考えられ、赤色顔料自体は水銀を主成分とするもの、すなわち朱であると考えられる。

島根県下の考古出土品で観察される赤色顔料については、松江市教育委員会[5]でまとめられている。それによれば、赤色顔料の出土状況や時期によって、ベンガラであるか朱であるかの傾向が異なる場合があるという。今回の出土状況は、「4類：主体部床面に部分的に少量検出された例」に該当すると思われ、時期としては古墳時代中期とされている。島根県下における4類の出土状況を示す赤色顔料としては、これまでは朱の例が比較的多く報告されているが、古墳時代中期ということで限定すると分析事例が少なく、十分な議論ができる段階にはない。ただし、島根県下における古墳時代後期の赤色顔料としては、ベンガラの使用事例が比較的多く報告されていることから、古墳時代中期の事例として今回朱の使用が確認されたことは、今後そうした赤色顔料の変遷などについて議論される場合の、一つの議論材料が提供されたことになる。

注

1）本報告書第5章第2節

2）朽津信明・下山進・松本岩雄（2002）出雲地方中世～近世壁画の使用顔料に関する研究、古代文化研究、10、1－26

3）朽津信明・黒木紀子・井口智子・三石正一（1999）顔料鉱物の可視光反射スペクトルに関する基礎的研究、保存科学、38、108－123

4）朽津信明・下山進（2001）函館市に残る幕末～明治絵画の顔料調査、市立函館博物館研究紀要、1－20
5）松江市教育委員会（1994）釜代 1 号墳外発掘調査報告書

出土遺物観察表

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
7−1	31	SI01	土師器	甕		20.8		外：ヨコナデ 内：	密（0.5mm程度の砂粒を少し含む）	外：白褐色 内：白褐色	古墳後期	風化著しい
−2	31	SI01	弥生土器	高坏				外： 内：	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡白褐色〜淡赤褐色 内：淡白褐色	松山Ⅱ期	風化著しい
−3	31	SI01	弥生土器	鉢		17.6		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：暗黄褐色 内：暗黄褐色	弥生後期	
8−1	31	SI02 壁帯溝	土師器	小型壺				外：ナデ？ 内：ナデ？	やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：暗橙褐色 内：暗橙褐色	古墳中期	風化
−2	31	P3	土師器	甕				外：ヨコナデ 内：	やや粗（1㎜以下の砂粒を含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	松山Ⅱ期	風化
−3	31	壁帯溝	土師器	小型丸底壺	(8.9)	(7.0)		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ，ハケメ	密（1㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	松山Ⅱ期	
−4	31	壁帯溝	土師器	壺？				外：ヘラミガキ？後ヘラ描き沈線文 内：ナデ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡黄褐色 内：淡橙褐色〜淡黄褐色	古墳中期	
−5	31	壁帯溝	土師器	甕				外：ヨコナデ，ハケメ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密（0.5㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色	松山Ⅱ期	
−6	31	壁帯溝	土師器	高坏			11.4	外：ヘラミガキ？ 内：ナデ	密（0.5㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：淡橙褐色 内：淡灰褐色	古墳中期	
9−1	31	SI05 溝	弥生土器	甕		17.0		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	粗（0.5〜2㎜大の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田2期	風化
−2	31	SI05，06 溝	弥生土器	甕		(16.5)		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田1期	
−3	31	SI05，06 溝	土師器	鼓形器台				外：ヨコナデ 内：	やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田4期〜	風化著しい
−4	31	SI05，06 溝	弥生土器	小型器台				外：ヨコナデ 内：	やや粗（0.5〜1㎜大の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田3期〜	円形透，風化著しい
−5	31	SI05，06 溝	弥生土器	壺		18.4		外：ヨコナデ？ 内：ヨコナデ？	やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：白褐色	草田4期	風化著しい
−6	31	SI05，06 溝	弥生土器	甕		(12.8)		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田4期	風化著しい
−7	31	SI05 溝	弥生土器	甕				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	草田4期	
11−1	32	SI04 溝	弥生土器	甕		17.3		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	粗（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡橙褐色〜白褐色 内：淡橙褐色〜白褐色	草田1期	
−2	32	SI04 溝	弥生土器	甕		13.8		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（0.5〜1㎜大の砂粒を含む）	外：淡橙褐色 内：明橙褐色	草田2期	
−3	32	SI04 溝	弥生土器	甕		15.6		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（砂粒を少し含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	草田2期	
−4	32	SI04 溝	弥生土器	甕			(3.4)	外：ナデ？ 内：ヘラケズリ後ハケメ	やや粗（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡灰褐色 内：黒灰色	弥生後期	
−5	32	SI04 溝	土師器	甕		11.8		外：ヨコナデ，浅い平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：灰褐色 内：暗灰褐色	草田2期	
−6	32	SI04 溝	弥生土器	甕		(27.8)		外：ヨコナデ，平行沈線文，刺突文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（0.5〜2㎜大の砂粒を多く含む）	外：明白褐色 内：明白褐色	草田2期	
−8	32	SI04 溝	弥生土器	甕		26.0		外：ヨコナデ？ 内：ヨコナデ？ヘラケズリ	粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：暗白褐色 内：暗白褐色	草田3期	風化著しい
−9	32	SI04 壁帯溝	弥生土器	壺			(1.8)	外：ヘラミガキ，ナデ， 内：ナデ	やや粗（3㎜以下の砂粒を少し含む）	外：暗黒灰色〜淡灰褐色 内：暗灰褐色	弥生後期	
−10	32	SI04	弥生土器	甕		10.0		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ	密（1㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：淡白褐色 内：淡白褐色	草田2期	赤色顔料付着
−11		SI04	弥生土器	甕				外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ	密（0.5〜1㎜大の砂粒を少し含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	草田2期	
−12	32	SI04	弥生土器	甕		(18.6)		外：ヨコナデ？，平行沈線文 内：ヨコナデ？，ヘラケズリ	粗（1〜3㎜大の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：白褐色	草田3期	風化
−13	32	SI04	弥生土器	鉢				外：ヘラミガキ，ハケメ 内：ヘラミガキ	密（1〜2㎜大の砂粒を僅かに含む）	外：（煤付着） 内：淡灰褐色	弥生後期	
−14	32	SI04	弥生土器	甕		22.6		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田3期	
−15	32	SI04	弥生土器	高坏			16.4	外：ヨコナデ，ヘラミガキ？，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（0.5〜3㎜大の砂粒を少し含む）	外：白褐色〜淡黄褐色 内：暗黄褐色	草田2期	風化
−16	32	SI04	弥生土器	甕		22.8		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	粗（0.5〜3㎜大の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色〜淡橙褐色 内：淡黄褐色〜淡橙褐色	草田3期	
−17	32	SI04	弥生土器	甕		30.0		外：ヨコナデ，平行沈線文，沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：黄褐色 内：白褐色	草田3期	
12−1		SB01 P3	土師器	甕				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	粗（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	古墳後期	
−2		SB01 P3	土師器	甕				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	粗（1㎜大の砂粒を多く含む）	外：（煤付着） 内：暗白褐色	古墳後期	
−3		SB01 P3	土師器	甕				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡橙褐色 内：白褐色	古墳後期	風化

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
15－1	32	ＳＢ04～07 包含層	須恵器	高台付皿			13.6	外：回転ナデ，ナデ，回転糸切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（2㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：淡灰色 内：淡灰色	奈良～	
－2	32	ＳＢ04～07 包含層	須恵器	高台付皿			9.2	外：回転ナデ，ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：淡青灰色 内：淡灰色	奈良～	
－3	33	ＳＢ04～07 包含層	須恵器	灯明皿	3.0	7.8	4.8	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ	やや密（0.5～1㎜大の砂粒を少し含む）	外：暗灰色～淡灰色 内：暗灰色	奈良～	
－4	32	ＳＢ04～07 包含層	須恵器	坏身	5.0	12.6		外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（0.5～1㎜大の白色砂粒を少し含む）	外：淡青灰色 内：淡茶褐色	大谷４～５期	
－5	33	ＳＢ04～07 包含層	土師器	埦	5.2	13.2		外： 内：	密	外：淡茶褐色 内：白褐色	古墳後期	風化著しい
－6	32	ＳＢ04～07 包含層 周辺ピット	須恵器	坏蓋				外：回転ナデ，沈線 内：回転ナデ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡灰白色 内：淡灰白色	古墳後期	
－7	32	ＳＢ04～07 包含層 周辺ピット	須恵器	坏蓋				外：回転ナデ，沈線 内：回転ナデ	密	外：暗灰色 内：淡灰色	古墳後期	
－8	32	ＳＢ04～07 包含層 周辺ピット	須恵器	坏蓋				外：回転ナデ，沈線 内：回転ナデ	密	外：明灰白色 内：淡灰色	古墳後期	
－9	32	ＳＢ04～07 包含層 周辺ピット	須恵器	坏身				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	外：淡黄灰色 内：淡灰色	古墳後期	
－10	32	ＳＢ04～07 包含層 周辺ピット	須恵器	坏身				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	外：黒灰色～灰白色 内：灰白色	古墳後期	灰かぶり
－11	32	ＳＢ04～07 包含層 周辺ピット	須恵器	壺				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	外：灰白色 内：灰白色	古墳後期	灰かぶり
－12	33	ＳＢ04～07 包含層 周辺ピット	土師器	甕				外： 内：	やや密（1㎜以下の白色砂粒を含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	古墳後期	風化著しい
－13	33	ＳＢ04～07 包含層 周辺ピット	土師器	甕				外：ヨコナデ？ 内：	密	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	古墳後期	風化著しい
－14	33	ＳＢ04～07 包含層 周辺ピット	土師器	甕				外： 内：	密	外：白褐色 内：白褐色	古墳後期	風化著しい
－15	33	ＳＢ04～07 包含層 周辺ピット	土師器	甕				外：ヨコナデ，ヨコナデ後ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	古墳後期	
－16	33	ＳＢ04～07 包含層 周辺ピット	弥生土器	甕				外： 内：	やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色	草田４～５期	風化著しい
－17	33	ＳＢ04～07 包含層 周辺ピット	土師器	甕				外：ヨコナデ 内：ヘラケズリ？	やや密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	古墳前期	風化
－18	33	ＳＢ04～07 包含層 周辺ピット	土師器	高坏				外：ヘラミガキ？ 内：ヨコナデ，指頭圧痕？	やや密（3㎜以下の砂粒を含む）	外：白褐色 内：白褐色	古墳前期	風化
－19	33	ＳＢ04～07 包含層 周辺ピット	土師器	高坏				外：ハケメ 内：	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：明橙褐色 内：明白褐色	古墳前期	風化著しい
16－1	33	ＳＢ04　Ｐ3	須恵器	坏身	(3.2)	13.2	5.0	外：回転ナデ，ナデ，ヘラ切り後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（1㎜以下の砂粒を含む）	外：暗灰色 内：暗淡青灰色	大谷４期	
－2	33	ＳＢ04　Ｐ7	須恵器	坏蓋				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	外：淡黄灰色 内：灰白色	大谷１期	
－3	33	ＳＢ04　Ｐ6	土師器	甕				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色～淡橙褐色 内：白褐色	古墳中期	
－4	33	ＳＢ04　Ｐ4	土師器	甕				外：ヨコナデ 内：	やや粗（2㎜以下の砂粒を含む）	外：淡黄褐色 内：白褐色	古墳後期	風化著しい
－5	33	ＳＢ04　Ｐ4	土師器	高坏？　埦？				外： 内：	密	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色	古墳後期	風化著しい
－6	33	ＳＢ04　Ｐ5	土師器	高坏				外：ハケメ 内：	密（2㎜以下の砂粒を含む）	外：淡橙褐色～白褐色 内：赤褐色～白褐色	古墳中期	風化著しい
18－1	33	ＳＢ06　Ｐ3	土師器	甕		19.2		外： 内：	やや密（2㎜以下の白色砂粒を少し含む）	外：橙褐色 内：赤褐色	古墳後期	風化著しい
－2	33	ＳＢ06　Ｐ2	須恵器	坏身		13.6		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ	密	外：淡灰色 内：淡灰色	大谷２期	
－3	33	ＳＢ06　Ｐ4	土師器	甕		20.0		外： 内：		外：白褐色 内：白褐色	古墳後期	風化著しい
19－1	33	ＳＢ07　Ｐ6	土師器	甕				外：ヨコナデ？ 内：	やや密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡橙褐色～白褐色 内：淡橙褐色～白褐色	古墳後期	風化
－2	33	ＳＢ07　Ｐ8	須恵器	無蓋高坏（？）		12.6		外：回転ナデ，沈線 内：回転ナデ	密	外：淡灰色 内：淡灰色	古墳後期	
21－1	34	ＳＫ09	須恵器	埦	5.0	11.3	6.7	外：回転ナデ，ナデ，回転糸切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（1㎜以下の白色砂粒を多く含む）	外：暗灰色 内：暗灰色	奈良	
－2	34	ＳＫ09	須恵器	埦	4.4	12.3	8.0	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ	密	外：淡灰色 内：淡灰色	奈良	
－3	34	ＳＫ09	須恵器	埦	4.3	12.4	8.7	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ	密（0.5㎜大の細かい砂粒を少し含む）	外：明灰白色 内：明灰白色	奈良	風化著しい
－4	34	ＳＫ09	須恵器	埦	5.0	12.8	(7.5)	外：回転ナデ，回転糸切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡灰色～淡黄灰色 内：淡灰色	奈良	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
21−5	34	SK09	須恵器	皿	2.9	12.8	9.5	外：回転ナデ，回転糸切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（2㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：暗灰色 内：暗灰色	奈良	
−6	34	SK09	須恵器	皿	2.7	14.3	10.2	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，ナデ	密	外：淡黄褐色 内：淡灰褐色〜淡黄褐色	奈良	
22−1	34	SK10	土師器	高坏		19.6		外：ハケメ 内：	やや密（2㎜以下の砂粒を含む）	外：淡橙褐色〜淡黄褐色 内：淡橙褐色〜淡黄褐色	松山Ⅱ期	風化著しい
−2	34	SK10	土師器	甕		18.4		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ，ヘラケズリ後ナデ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：暗淡白褐色 内：淡黄褐色	草田5〜6期	
25−1	34	SK06	弥生土器	甕		19.4		外：ヨコナデ，ハケメ，平行沈線文，波状文 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	やや粗（1〜2㎜大の砂粒を多く含む）	外：明白褐色 内：明白褐色	草田3期	
−2	34	SK06	弥生土器	甕		16.6		外：ヨコナデ，ハケメ後平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：橙褐色〜淡黄褐色 内：淡黄褐色〜淡灰褐色	草田4期	
−3	35	SK06	弥生土器	甕		16.0		外：ヨコナデ，ハケメ，平行沈線文，刺突文 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	草田4〜5期	
−4	34	SK06	弥生土器	甕			(3.0)	外：ハケメ？ 内：ヘラケズリ？	やや粗（1㎜以下の砂粒を含む）	外：暗白褐色 内：暗白褐色	弥生後期	
−5	34	SK06	弥生土器	低脚坏？			11.2	外：ヨコナデ，ハケメ後ナデ 内：ハケメ	密	外：暗白褐色 内：灰褐色	弥生後期	
−6	35	SK06	弥生土器	甕		17.8		外：ヨコナデ，ハケメ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色〜淡灰褐色	草田5期	風化著しい
−7	34	SK06	弥生土器	甕		19.0		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（1㎜以下の砂粒を含む）	外：暗白褐色 内：暗白褐色	草田5期	
−8	35	SK06	弥生土器	甕		(19.0)		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（2㎜以下の細かい砂粒を多く含む）	外：淡白褐色 内：淡白褐色	草田5期	風化
−9	34	SK06	弥生土器	甕		(13.2)		外： 内：ヘラケズリ？	やや粗（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：暗灰褐色 内：暗灰褐色	草田5期	風化
−10	34	SK06	弥生土器	甕		22.0		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	やや粗（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：橙褐色〜灰褐色 内：淡黄褐色	草田5期	風化著しい
−11		SK06	弥生土器	甕		17.8		外：ヨコナデ，ハケメ，刺突文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：明白褐色 内：明白褐色	草田5期	風化
−12	35	SK06	弥生土器	甕		(17.4)		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや粗（1㎜以下の砂粒を含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田5期	
−13		SK06	弥生土器	甕		(18.4)		外：ヨコナデ？ 内：	やや粗（0.5〜1㎜大の砂粒を含む）	外：淡橙褐色〜淡黄褐色 内：淡橙褐色〜淡黄褐色	草田5期	風化
−14		SK06	弥生土器	甕		(19.0)		外：ヨコナデ，ヘラケズリ？ 内：ヨコナデ	やや粗（1㎜以下の砂粒を含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田5期	風化
−15		SK06	弥生土器	鼓形器台			(20.2)	外：ヨコナデ？ 内：	やや粗（1㎜以下の砂粒を含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田5期	風化著しい
−16	35	SK06	弥生土器	鼓形器台	11.3	20.0	19.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ後ナデ	やや粗（0.5〜2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色〜淡橙白色 内：白褐色〜淡橙白色	草田5期	風化著しい
−17	34	SK06	弥生土器	鼓形器台			18.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ，ヘラミガキ	やや粗（0.5〜1㎜大の砂粒を含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田5期	
−18	35	SK06	弥生土器	鼓形器台	13.3	21.8	19.5	外：ヨコナデ 内：ヘラケズリ	粗（0.5〜2㎜大の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田5期	風化著しい
−19		SK06	弥生土器	鼓形器台				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（2㎜以下の砂粒を含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色	草田5期	風化
−20	35	SK06	弥生土器	鼓形器台	13.7	23.4	20.8	外：ヨコナデ 内：ナデ，ヘラケズリ	粗（0.5〜1㎜大の砂粒を多く含む）	外：白褐色〜淡橙褐色 内：白褐色〜淡橙褐色	草田5期	風化
−21	34	SK05	弥生土器	鼓形器台			23.0	外：ヨコナデ？ 内：ヘラケズリ後ナデ	やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田5期	風化
−22	34	SK05	弥生土器	甕		(18.6)		外：ヨコナデ？，平行沈線文，波状文 内：ヨコナデ？，ヘラケズリ	やや粗（0.5〜2㎜大の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色〜淡橙褐色 内：淡橙褐色	草田5期	風化
−23	34	SK05	弥生土器	甕？				外：ヨコナデ，ハケメ，平行沈線文，波状文 内：ナデ？，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色〜淡茶褐色 内：淡灰褐色	草田5期	風化
−24	34	SK05	弥生土器	高坏				外： 内：	やや粗（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡橙褐色〜白褐色 内：淡橙褐色〜白褐色	弥生後期	風化著しい
−25		SK05	弥生土器	甕				外：平行沈線文，円形スタンプ文 内：ヘラケズリ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色 内：煤付着	弥生後期	
28−1	35	SE01 掘方土中	弥生土器	壺				外：ハケメ後ヨコナデ，平行沈線文，波状文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ，ヘラミガキ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：煤付着 内：淡黄褐色	弥生後期	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
28－2	35	ＳＥ01	弥生土器	甕		20.2		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密（0.5～1㎜大の砂粒を僅かに含む）	外：橙褐色～淡灰褐色 内：淡灰褐色	草田２期	
－3	35	ＳＥ01	弥生土器	甕		14.8		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（２㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	草田２期	
－4	35	ＳＥ01	弥生土器	甕		16.0		外：ヨコナデ，ハケメ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（１～２㎜大の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田２期	
－5	35	ＳＥ01	弥生土器	甕		18.2		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ，ヘラミガキ	密（１㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色 内：淡黄褐色	草田２期	
－6	35	ＳＥ01	弥生土器	甕		20.0		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（0.5～1㎜大の砂粒を多く含む）	外：暗淡黄褐色 内：暗淡黄褐色	草田２期	
－7	35	ＳＥ01	弥生土器	高坏				外：ヘラミガキ 内：ナデ？	やや粗（１～４㎜大の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	弥生後期	
－8	35	ＳＥ01	弥生土器	壺？			5.8	外：指頭圧痕，ハケメ後ナデ 内：ヘラケズリ後ナデ	やや密（２㎜以下の砂粒を多く含む）	外：灰褐色 内：白褐色	弥生後期	
29－1		ＳＤ05	弥生土器	甕		(14.6)		外：ヨコナデ？，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	粗（３㎜以下の砂粒を多く含む）	外：黄褐色 内：黄褐色	草田２～３期	風化著しい
－2		ＳＤ06	弥生土器	甕		17.6		外：平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	粗（0.5～3㎜大の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田２期	風化著しい
30－1		ＳＤ14	弥生土器	甕		(23.0)		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ	粗（0.5～2㎜大の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田２期	風化
－2		ＳＤ15	土師器	甕				外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ	やや密（３㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡橙褐色 内：白褐色	草田３期	
33－1	37	ＳＤ11	弥生土器	注口土器（把手）				外：ナデ，刺突文 内：ナデ？	やや密（２㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田３期	
－2	37	ＳＤ12	弥生土器	甕			(3.5)	外： 内：	やや粗（３㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡灰褐色～淡赤褐色 内：淡灰褐色	弥生後期	風化著しい
－3	37	ＳＤ09	弥生土器	甕				外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（0.5㎜大の砂粒を多く含む）	外：淡橙褐色 内：（煤付着）	草田２～３期	
－4	37	ＳＤ21	弥生土器	甕		14.8		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（２㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田２期	
－5	37	ＳＤ11	弥生土器	甕		16.0		外：ヨコナデ，刺突文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（３㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色～橙褐色 内：白褐色～橙褐色	草田４期	風化
－6	37	ＳＤ11	弥生土器	甕		(16.7)		外：ヨコナデ，ナデ？，ハケメ，刺突文 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	密（0.5～1㎜大の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色～淡赤褐色 内：暗淡黄褐色	草田４期	
－7	37	ＳＤ11	弥生土器	甕		(17.1)		外：ヨコナデ，ハケメ，刺突文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	やや密（0.5～1㎜大の砂粒を多く含む）	外：明白褐色 内：明白褐色	草田４期	
－8	37	ＳＤ11	土師器	甕		(25.0)		外： 内：ヘラケズリ	やや粗（0.5～2㎜大の砂粒を多く含む）	外：赤褐色 内：赤褐色	草田５期	風化著しい
－9	37	ＳＤ11　南端	弥生土器	甕		(11.0)		外：ヨコナデ？，刺突文 内：ヘラケズリ	やや粗（３㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡橙褐色 内：淡桃灰色	草田５期	風化著しい
－10	37	ＳＤ11	弥生土器	鼓形器台	14.5	22.5	19.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ，ヘラミガキ	密（１㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡白褐色 内：淡白褐色	草田４期	
－11	37	ＳＤ11	弥生土器	高坏？				外：波状文 内：	やや密（２㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色 内：白褐色	弥生後期	風化著しい
－12	37	ＳＤ11	弥生土器	甕	(34.3)	(24.8)	(5.0)	外：ヨコナデ，ハケメ，平行沈線文，刺突文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（0.5～1㎜大の砂粒を多く含む）	外：白褐色～淡橙色 内：白褐色	草田３期	風化著しい
37－1	38	旧河道１　Ｂ－１　包含層	青磁	埦				外：施釉 内：施釉，劃花文	淡灰白色で緻密	濃緑色	D期　12c後半～13c前半	龍泉窯Ⅰ－２類
－2	38	旧河道１　Ｃ－５　包含層	白磁	壺				外：幅広い筋状の段，施釉 内：施釉	緻密	外：白色（釉） 内：	10ｃ以前	
－3	38	旧河道１　Ｃ－４　包含層	青白磁	合子身				外：花弁状の浮き彫り，施釉 内：施釉	淡灰白色	外：淡青白色（釉） 内：くすんだ青白色（釉）	12c	
－4	38	旧河道１　包含層	白磁	皿				外：施釉 内：施釉	白色緻密	白色	12c前半	
－5	38	旧河道１　Ｂ－４　包含層	白磁	埦			(5.7)	外：ヘラケズリ，施釉 内：施釉	灰白色で緻密	黄色気味の白色	12c前半	Ⅱ－１類
－6	38	旧河道１　包含層	白磁	埦			6.0	外：ヘラケズリ 内：見込みに段，施釉	灰白色	乳白色～灰白色	12c前半	白磁埦Ⅴ類
－7	38	旧河道１　包含層	土製品	不明	6.6	6.3	6.1	外：ナデ 内：	やや粗（0.5～1㎜大の砂粒を多く含む）	外：暗淡黄褐色～淡橙褐色 内：		
－8	38	旧河道１　Ｂ－５　包含層	須恵器	円面硯			(14.0)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	外： 内：黒灰色	奈良～	長方形（？）透
－9	38	旧河道１　流路１　Ａ－２	黒色土器	高台付埦		(16.0)		外：ナデ？ 内：ヘラミガキ	密	外：暗淡黄褐色 内：暗淡黄褐色	10ｃ	風化著しい
－10	38	旧河道１　流路１　Ａ－２	黒色土器	高台付埦	5.9	15.1	6.9	外：ヨコナデ後ヘラミガキ 内：ヨコナデ，ヘラミガキ	密（１㎜大の砂粒を少し含む）	外：暗淡黄褐色～淡橙褐色 内：暗淡黄褐色	10ｃ	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
37－11	38	旧河道1 流路1 A－3	土師器	埦			3.9	外：ヨコナデ，回転糸切 内：ナデ	密	外：白褐色 内：白褐色		
－12	38	旧河道1 流路1 A－3	土師器	埦			3.3	外：ヨコナデ，ハケメによる押さえ，回転糸切 内：丁寧なナデ	密	外：淡白褐色～淡橙褐色 内：淡白褐色		
－13	38	旧河道1 流路1 A－3	土師器	埦			(4.5)	外：ヨコナデ，回転糸切 内：丁寧なナデ	密	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色		赤色顔料付着
－14	38	旧河道1 流路2 A－3	土師器	柱状高台付坏	5.0	9.6	5.8	外：ナデ，回転糸切 内：ヨコナデ	密	外：淡桃褐色 内：淡桃褐色	12c	
－15	38	旧河道1 流路2 A－1	土師器	柱状高台付坏			(4.4)	外：ヨコナデ，回転糸切 内：丁寧なナデ	密	外：白褐色 内：白褐色	12c	
－16	38	旧河道1 流路2 A－1	土師器	柱状高台付坏	3.9	9.0	5.0	外：ヨコナデ，回転糸切 内：粗いナデ	密	外：淡灰白色 内：淡灰白色	12c	
－17		旧河道1 流路2	土師器	埦			6.8	外：ヨコナデ，回転糸切 内：ヨコナデ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色 内：白褐色		
－18		旧河道1 流路2 A－1	須恵器	埦			5.5	外：ナデ，回転糸切 内：ナデ	密	外：白灰色 内：暗灰色		
－19		旧河道1 流路2 A－2	須恵器	壺？			(7.0)	外：ヘラケズリ，回転糸切 内：回転ナデ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白灰色 内：白灰色		
－20		旧河道1 流路2 A－2	須恵器	蓋	(14.6)			外：回転ナデ，回転ヘラケズリ，回転糸切 内：回転ナデ，ナデ	密（1㎜大の黒色砂粒を僅かに含む）	外：暗灰色 内：白灰色	奈良～	
－21		旧河道1 流路2 A－3	須恵器	蓋	3.6	14.7		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：暗青灰色 内：暗青灰色	奈良～	ヘラ記号（×）
－22		旧河道1 流路2 B－4	須恵器	蓋	2.5		16.8	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ， 内：回転ナデ，ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：暗青灰色 内：暗青灰色	奈良～	
－23		旧河道1 流路2	須恵器	蓋				外： 内：回転ナデ，ナデ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：暗緑色（自然釉） 内：淡灰色	奈良	
－24		旧河道1 流路2 A－3	須恵器	蓋	2.8	9.6		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ	密（1㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	大谷6期	
－25		旧河道1 流路2 A－3	須恵器	高台付埦			8.0	外：回転ナデ，ヘラケズリ後ナデ，回転糸切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（1㎜以下の白色砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：淡灰色		
－26		旧河道1 流路2 A－3	須恵器	高台付埦	5.0	15.0	9.4	外：回転ナデ，ナデ，回転糸切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（2㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：淡灰色 内：淡灰色		
－27		旧河道1 流路2	須恵器	高台付坏	4.0	13.0	9.6	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（砂粒を少し含む）	外：暗青灰色 内：暗青灰色		
－28		旧河道1 流路2 A－3	須恵器	高台付埦			7.5	外：回転ナデ，ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：暗青灰色 内：暗青灰色		
－29		旧河道1 流路2 B－2	須恵器	埦	4.4	13.8	7.8	外：回転ナデ，ナデ，回転糸切 内：回転ナデ	密（0.5～1㎜大の砂粒を少し含む）	外：淡灰色 内：淡灰色	奈良	
－30		旧河道1 流路2 B－1，2	須恵器	埦	4.5	11.6		外：回転ナデ，ヘラケズリ後ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：暗灰白色 内：暗灰白色	大谷6期	
－31		旧河道1 流路2 A－3	須恵器	灯明皿	2.5	9.5	5.7	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ	密	外：白灰色 内：淡灰色	奈良	
－32		旧河道1 流路2 A－3	須恵器	低脚無蓋高坏				外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（4㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：淡灰色 内：淡灰色	奈良	
－33		旧河道1 流路2 A－3	須恵器	有蓋壺		11.0		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	外：白灰色 内：白灰色		
－34		旧河道1 流路2 A－2	須恵器	埦	8.8	16.8	7.5	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ，静止糸切 内：回転ナデ，ナデ	密（砂粒を少し含む）	外：明青灰色 内：明青灰色	奈良	
－35		旧河道1 流路2 A－1	須恵器	坏身	3.9	11.8		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色 内：暗灰白色	大谷5期	ヘラ記号（×）
－36		旧河道1 流路2	須恵器	坏蓋	3.6	11.8		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：明灰色 内：明灰色	大谷4期	
－37	38	旧河道1 A－3	須恵器	蓋	2.8	12.4		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色～淡青灰色 内：灰白色	大谷6～7期	
－38	38	旧河道1 A－3，B－3	須恵器	蓋	3.1	15.5		外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：淡青灰色 内：淡青灰色	大谷6～7期	灰かぶり
－39	38	旧河道1 A－3	須恵器	蓋	3.5	13.2		外：回転ナデ，ナデ，回転ヘラケズリ？ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色 内：青灰色	大谷6～7期	灰かぶり
－40	38	旧河道1 A－3	須恵器	蓋	2.9	14.8		外：回転ナデ？，ナデ？，回転ヘラケズリ？ 内：回転ナデ，ナデ	密	外： 内：青灰色	大谷6期	灰かぶり
－41	38	旧河道1 A－3	須恵器	蓋	2.9	9.8		外：回転ナデ，ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色～灰白色 内：灰白色	大谷6期	
－42	38	旧河道1 B－4	須恵器	蓋	2.2	10.4		外：回転ナデ，ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ	密	外：淡青灰色 内：淡青灰色	大谷6期	灰かぶり
－43	38	旧河道1 A－3，B－3	須恵器	蓋	2.8	9.6		外：回転ナデ，ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ	密	外：暗青灰色 内：茶褐色	大谷6期	
－44	38	旧河道1 A－3	須恵器	蓋	3.1	9.5		外：回転ナデ，ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色 内：青灰色	大谷6期	ヘラ記号（#）

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
37－45		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	高台付埦	5.9	14.6	7.6	外：回転ナデ，回転糸切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（1㎜以下の白色砂粒を含む）	外：暗灰褐色 内：青灰色	大谷8期	
－46		旧河道1　A－4	須恵器	高台付埦	(5.4)	13.1	8.0	外：回転ナデ，回転糸切後回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：赤褐色～淡灰色 内：赤褐色	大谷8期	
－47		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	高台付埦			9.2	外：回転ナデ，回転糸切後ナデ 内：回転ナデ	密	外：青灰色 内：淡青灰色	大谷8期	
－48		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	高台付埦			7.8	外：回転ナデ，静止糸切後回転ナデ 内：ナデ	密（0.5㎜大の砂粒を少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	大谷8期	
39－1	39	旧河道1　B－1，2	須恵器	坏蓋	3.6	9.2		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：暗青灰色 内：暗青灰色	大谷4期	
－2		旧河道1　B－5	須恵器	坏蓋	3.9	11.6		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密（0.5～1㎜大の砂粒少しを含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	大谷4期	
－3		旧河道1　B－1，2	須恵器	坏蓋	4.0	11.8		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密（3㎜大の黒色」砂粒を多く含む）	外：暗青灰色 内：暗灰白色	大谷5期	
－4	39	旧河道1　B－4	須恵器	坏蓋	4.1	11.8		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ，沈線 内：回転ナデ，ナデ，沈線	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡青灰色 内：淡灰色	大谷3期	
－5	39	旧河道1　B－3	須恵器	坏蓋	4.1	11.8		外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：灰白色 内：灰白色	大谷4期	ヘラ記号（一）
－6		旧河道1　B－5	須恵器	坏蓋	4.4	(12.1)		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（0.5㎜大の砂粒を多く含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	大谷4期	
－7	39	旧河道1　B－1	須恵器	坏蓋	4.2	12.1		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：灰白色 内：灰白色	大谷5期	
－8		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	坏蓋	4.3	12.2		外：回転ナデ，ヘラケズリ後ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：灰白色 内：灰白色	大谷4期	
－9	39	旧河道1　B－4	須恵器	坏蓋	4.2	12.2		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色～灰白色 内：灰白色	大谷3期	
－10		旧河道1　B－1	須恵器	坏蓋	4.5	12.4		外：回転ナデ，回転ヘラ切り後ナデ 内：回転ナデ	密（砂粒を少し含む）	外：灰白色 内：灰白色	大谷5期	
－11	39	旧河道1　A－4	須恵器	坏蓋	3.5	12.4		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ，ヘラ切，沈線 内：回転ナデ，ナデ，沈線	密（2㎜以下の砂粒を含む）	外：明灰色～淡灰色 内：明灰色	大谷4期	
－12		旧河道1　B－2	須恵器	坏蓋	3.8	12.5		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色～暗灰白色 内：暗灰白色	大谷4期	風化？
－13		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	坏蓋	3.9	12.6		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色 内：青灰色	大谷4期	
－14	39	旧河道1　B－4	須恵器	坏蓋	4.2	12.6		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，沈線	密（0.5㎜以下の白色砂粒を多く含む）	外：淡黄灰色～淡灰色 内：淡灰色	大谷4期	
－15	39	旧河道1　B－5	須恵器	坏蓋	3.8	12.6		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：青灰色～淡青灰色 内：淡青灰色	大谷4期	
－16		旧河道1　B－2	須恵器	坏蓋	3.5	12.7		外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色 内：青灰色	大谷5期	
－17		旧河道1　B－2	須恵器	坏蓋	4.0	12.8		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色 内：暗灰白色	大谷4期	
－18		旧河道1　B－1，2	須恵器	坏蓋	4.5	12.8		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ？ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色 内：暗灰白色	大谷5期？	ヘラ記号（×）
－19		旧河道1　A－3	須恵器	坏蓋	3.8	12.8		外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ，沈線 内：回転ナデ，ナデ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷4期	
－20	39	旧河道1　B－4	須恵器	坏蓋	4.5	13.0		外：回転ナデ，ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷4期	
－21		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	坏蓋	4.3	13.0		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：暗青灰色 内：暗青灰色	大谷4期	
－22		旧河道1　B－2	須恵器	坏蓋	4.7	13.4		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（3㎜以下の黒色砂粒を含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷4期	
－23	39	旧河道1　B－2	須恵器	坏蓋	4.6	13.4		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（砂粒を少し含む）	外：灰白色 内：青灰色	大谷3期	風化？
－24	39	旧河道1　A－3	須恵器	坏蓋	4.3	13.5		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（4㎜程度の砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷4期	
－25		旧河道1　B－4	須恵器	坏蓋	4.5	13.6		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密（1㎜大の白色砂粒を僅かに含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	大谷3期	
－26		旧河道1　B－1	須恵器	坏蓋	4.9	13.8		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ？ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：肌色～灰白色 内：明茶褐色	大谷4期	風化
－27	40	旧河道1　A－3	須恵器	坏身	3.4	9.6		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ？ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色 内：青灰色	大谷6期	灰かぶり
－28	40	旧河道1　A－3	須恵器	坏身	3.6	10.2		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ？ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰白色 内：青灰色	大谷6期	灰かぶり
－29	40	旧河道1　B－1，2	須恵器	坏身	3.5	9.0		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ	密	外：青灰色 内：青灰色	大谷6期	灰かぶり

土器

掲図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
39－30		旧河道1　A－3	須恵器	坏身	3.6	10.8		外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ？ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色～灰白色 内：青灰色	大谷5～6期	
－31		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	坏身	3.2	10.8		外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：暗青灰色 内：暗灰白色	大谷6期	
－32		旧河道1　A－3	須恵器	坏身	3.9	11.2		外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色 内：淡青灰色	大谷6期	灰かぶり
－33		旧河道1　B－5	須恵器	坏身	3.8	11.6		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：淡灰色 内：淡灰色	大谷5期	
－34		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	坏身		11.5		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ？ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：灰白色 内：灰白色	大谷5期	
－35		旧河道1　B－1	須恵器	坏身	3.7	11.8		外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（砂粒を少し含む）	外：灰白色 内：灰白色	大谷5期	灰かぶり
－36	40	旧河道1　A－2	須恵器	坏身	4.6	11.8		外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：淡青灰色 内：淡青灰色	大谷5～6期	
－37		旧河道1　B－1	須恵器	坏身	4.1	12.0		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	密（1㎜以下の黒色砂粒を多く含む）	外：灰白色 内：青灰色	大谷5期	
－38	40	旧河道1　A－4	須恵器	坏身	3.9	12.0	(5.6)	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（2㎜以下の砂粒を含む）	外：明灰色 内：明灰色	大谷5期	
－39	40	旧河道1　B－2	須恵器	坏身	4.3	12.4		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	密（砂粒を少し含む）	外：暗灰白色 内：暗灰白色	大谷4期	
－40	40	旧河道1　B－5	須恵器	坏身	3.0	12.4	6.5	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密（1㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：淡青灰色～淡灰色 内：淡灰色	大谷4期	
－41	40	旧河道1　B－3	須恵器	坏身	4.2	12.4		外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	やや密（2㎜以下の白色砂粒を少し含む）	外：淡黄灰色 内：淡黄灰色	大谷4期	
－42	40	旧河道1　B－3	須恵器	坏身	4.1	12.6		外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ，ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色 内：暗灰色	大谷4期	ヘラ記号（キ）
－43	40	旧河道1　B－2	須恵器	坏身	3.9	12.6	6.4	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：灰白色 内：灰白色	大谷4期	灰かぶり
－44		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	坏身	3.8	12.6		外：回転ナデ，ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：暗灰白色 内：灰白色	大谷4期	
－45		旧河道1　B－3	須恵器	坏身	4.1	12.6		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：灰白色 内：青灰色	大谷4期	
－46	40	旧河道1　B－1	須恵器	坏身	3.8	13.0		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（砂粒を少し含む）	外：明灰白色 内：灰白色	大谷4期	
－47	40	旧河道1　B－3	須恵器	坏身	4.0	13.0		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ？ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色 内：淡青灰色	大谷4期	
－48		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	坏身	3.6	13.0		外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷4期	
－49		旧河道1　B－1，2	須恵器	坏身	3.8	13.3		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色 内：暗灰白色	大谷4期	
－50		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	坏身		13.4		外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ？ 内：回転ナデ	密	外：青灰色 内：灰白色	大谷4期	
－51		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	坏身，坏蓋，甕？				外：回転ナデ（杯身） 内：ナデ？（甕・内）	密（0.5㎜以下の砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：	古墳後期	3個体が熔着
40－1	41	旧河道1　B－2	須恵器	低脚無蓋高杯	8.8	13.4	7.8	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（0.5㎜以下の砂粒を多く含む）	外：暗青灰色 内：青灰色	大谷4期	2方三角形透
－2	41	旧河道1　B－1	須恵器	低脚無蓋高坏	9.4	14.4	10.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（砂粒を少し含む）	外：灰白色 内：灰白色～青灰色	大谷4期	2方長方形透
－3	41	旧河道1　B－1，2	須恵器	低脚無蓋高坏	11.1	14.7	9.8	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色 内：青灰色～灰白色	大谷5期	2方長方形透
－4		旧河道1　B－2	須恵器	低脚無蓋高坏	10.5	13.0	9.8	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：淡灰白色 内：淡灰白色	大谷5期	2方三角形透
－5	41	旧河道1　B－4	須恵器	低脚無蓋高坏	11.0	15.5	10.5	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：赤褐色 内：赤褐色	大谷5期	2方長方形透
－6		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	無蓋高坏		(18.0)		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（3㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：暗赤灰色～暗灰色 内：淡暗赤灰色	大谷5期	2方透
－7		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	無蓋高坏		15.7		外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（砂粒を少し含む）	外：暗青灰色～淡青灰色 内：青灰色～淡青灰色	大谷5期	
－8		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	長脚無蓋高坏		15.2		外：回転ナデ，ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：暗青灰色 内：青灰色	大谷4期	透
－9		旧河道1　B－1	須恵器	低脚無蓋高坏		14.8		外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：灰白色 内：灰白色	大谷5期	2方長方形透
－10		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	低脚無蓋高坏			7.8	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色 内：淡青灰色	大谷5～6期	2方長方形透
－11		旧河道1　B－1	須恵器	低脚無蓋高杯			7.8	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：暗青灰色 内：青灰色	大谷5～6期	2方長方形透
－12		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	低脚無蓋高坏			7.6	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色 内：淡青灰色	大谷6期	2方透

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
40－13		旧河道1　A－3	須恵器	低脚無蓋高坏			(8.8)	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色 内：青灰色～灰白色	大谷5～6期	2方長方形透（一方は切れ目）
－14		旧河道1　A－3	須恵器	低脚無蓋高坏			8.8	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色 内：青灰色	大谷5期	1方長方形透
－15		旧河道1　A－2	須恵器	低脚無蓋高坏			9.4	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷5～6期	2方長方形透（一方は切れ目）
－16		旧河道1　B－4	須恵器	低脚無蓋高坏			9.4	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷5～6期	2方長方形透（一方は切れ目）
－17		旧河道1　B－1	須恵器	低脚無蓋高坏	6.4		9.9	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（砂粒を少し含む）	外：暗青灰色 内：青灰色	大谷5期	2方三角形透
－18		旧河道1　B－1，2	須恵器	低脚無蓋高坏			9.4	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：暗灰白色～淡灰白色 内：青灰色～淡灰白色	大谷5～6期	2方長方形透（一方は切れ目）
－19		旧河道1　B－1，2	須恵器	低脚無蓋高坏			9.7	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（0.5㎜以下の砂粒を多く含む）	外：灰白色 内：灰白色	大谷5～6期	2方長方形透（一方は切れ目）
－20		旧河道1　B－1	須恵器	低脚無蓋高坏	7.2		10.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：灰白色 内：灰白色	大谷4期	2方三角形透
－21		旧河道1　B－1，2	須恵器	低脚無蓋高坏				外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（1㎜以下の砂粒を含む）	外：灰白色 内：青灰色	大谷6期	2方透（切れ目）
－22		旧河道1　B－1，2	須恵器	低脚無蓋高坏			(9.6)	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：灰白色 内：灰白色	大谷5～6期	2方三角形透（一方は切れ目）
－23		旧河道1　B－1	須恵器	低脚無蓋高坏			10.8	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：灰白色 内：淡灰白色	大谷5期	2方三角形透
－24		旧河道1　B－1，2	須恵器	低脚無蓋高坏			11.1	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：淡青灰色 内：灰白色	大谷5～6期	2方長方形透（一方は切れ目）
－25		旧河道1　A－3	須恵器	低脚無蓋高坏			11.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：灰白色 内：灰白色～淡灰白色	大谷5期	2方長方形透
－26		旧河道1　B－2	須恵器	蓋	4.9	15.0		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（砂粒を少し含む）	外：灰白色 内：明灰白色	大谷3期	
－27	41	旧河道1　B－4	須恵器	長脚無蓋高坏			12.5	外：回転ナデ，沈線 内：回転ナデ	密（1㎜以下の砂粒を含む）	外：暗灰色 内：暗灰色～淡灰色	大谷5～6期	2段2方長方形透　灰かぶり
－28		旧河道1　A－3	須恵器	長脚有蓋高坏		15.4		外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：灰白色 内：灰白色	大谷3期	3方長方形透
－29		旧河道1　B－2	須恵器	有蓋高坏	4.0	13.4		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：暗灰白色	大谷3期	3方三角形透
－30	41	旧河道1　B－4	須恵器	長脚有蓋高坏		14.0		外：回転ナデ，沈線 内：回転ナデ，ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷3期	2段長方形3方透
－31	41	旧河道1　A－3	須恵器	長脚無蓋高坏			9.8	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷5～6期	2段2方長方形透
－32	41	旧河道1　B－2	須恵器	長脚無蓋高坏	5.6		6.9	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（0.5㎜以下の砂粒を多く含む）	外：灰白色 内：灰白色	大谷5期	2段2方透（切れ目）
41－1		旧河道1　B－2	須恵器	甕				外：回転ナデ，波状文 内：回転ナデ	密	外：淡青灰色 内：青灰色	大谷3～4期	灰かぶり
－2	42	旧河道1　A－4	須恵器	甕	(12.2)		4.9	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ，ヘラ切，波状文，沈線，刺突文 内：回転ナデ	密（3㎜以下の砂粒を含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷3～4期	
－3	42	旧河道1　B－1	須恵器	甕			5.2	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密（0.5㎜大の砂粒を僅かに含む）	外：青灰色～白褐色 内：淡青灰色	大谷5期	円孔，ヘラ記号（×），灰かぶり
－4		旧河道1　B－5	須恵器	甕		15.0		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	外：暗灰色 内：暗灰色	古墳後期	
－5		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	短頸壺			(5.3)	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	密	外：青灰色 内：青灰色	古墳後期	灰かぶり
－6		旧河道1　C－6	須恵器	小型壺		(7.0)		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ	密	外：暗灰色 内：淡灰色	古墳後期	灰かぶり
－7		旧河道1　B－5	須恵器	短頸壺				外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡灰色 内：淡灰色	古墳後期	ヘラ記号（×）
－8		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	坏蓋？	(4.0)	(8.8)		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	外：暗青灰色 内：淡青灰色	古墳後期	灰かぶり
－9		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	坏蓋	3.3	9.0		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：青灰色～淡青灰色 内：青灰色	古墳後期	
－10		旧河道1　B－1，2	須恵器	壺			5.8	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色 内：淡青灰色	古墳後期	
－11		旧河道1　B－1，2	須恵器	壺				外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密（砂粒を少し含む）	外：灰白色～青灰色 内：灰白色	古墳後期	
－12	42	旧河道1　A－3，B－3	須恵器	平瓶		7.8		外：回転ナデ，ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：青灰色 内：青灰色	大谷5期	
－13	42	旧河道1　B－2	須恵器	平瓶	(13.8)	(7.6)		外：回転ナデ，カキ目 内：回転ナデ，ナデ	密（0.5㎜大の砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：淡青灰色	大谷5期	灰かぶり

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
41－14		旧河道1　B－5	須恵器	脚付鉢		(22.2)		外：回転ナデ，カキ目後回転ヘラケズリ，カキ目後回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（0.5㎜大の白色砂粒を少し含む）	外：淡黄灰色 内：淡黄灰色	古墳後期	
－15		旧河道1　B－5　中層	須恵器	坏蓋	5.8	13.0		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ，回転ヘラケズリ後ナデ，沈線 内：回転ナデ，沈線	密	外：淡灰色 内：淡灰色	大谷1期	
－16	42	旧河道1　B－5	須恵器	坏身	6.5	(11.8)		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，沈線	密（1㎜以下の白色砂粒を少し含む）	外：暗灰色 内：淡灰色	大谷1期	
－17		旧河道1　B－5　中層	須恵器	坏身		11.6		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，沈線	密	外：淡灰色～淡青灰色 内：淡灰色	大谷1期	
－18	42	旧河道1　B－5	須恵器	坏身	4.5	12.4	(5.3)	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ，沈線 内：回転ナデ，ナデ	密	外：明黒色 内：明灰色	大谷1期	
－19	42	旧河道1　C－6	須恵器	坏身	5.3	12.8		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ，沈線 内：回転ナデ	密	外：淡灰色 内：淡灰色	大谷1期	
－20	42	旧河道1　B－5　中層	須恵器	坏身	5.3	12.8		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ，沈線 内：回転ナデ	密	外：暗灰色 内：暗灰色	大谷1期	
－21		旧河道1　A－3，B－3	須恵器	坏身	5.0	13.0	6.2	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	密	外：淡青灰色 内：灰白色	大谷1期	
－22		旧河道1　B－5	須恵器	有蓋高坏	6.0	12.4		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	密	外：淡灰色 内：淡灰色	大谷1期	3方（？）長方形透
－23		旧河道1　B－5　中層	須恵器	低脚有蓋高坏	9.8	12.8	8.0	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ，沈線 内：回転ナデ，沈線	密	外：明灰色 内：明灰色	大谷1期	3方長方形透
－24		旧河道1　B－5　中層	須恵器	低脚有蓋高坏	8.4	14.2	9.6	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：淡灰色～暗灰色 内：淡灰色	大谷1期	3方長方形（？）透
－25		旧河道1　B－5　中層	須恵器	低脚有蓋高坏			9.2	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	外：青灰色～灰白色 内：淡青灰色	大谷1期	3方（？）長方形透
－26	42	旧河道1　C－6	須恵器	低脚有蓋高坏			8.4	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ，回転ヘラケズリ後カキ目 内：回転ナデ	密	外： 内：	大谷1期	3方長方形透，灰かぶり
－27	42	旧河道1　C－6（C－5）	須恵器	低脚無蓋高坏	10.9	15.6	9.4	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ，カキ目，カキ目後ナデ，波状文 内：回転ナデ，ナデ	密	外：淡灰色 内：淡灰色	大谷1～2期	3方長方形透
－28		旧河道1	須恵器	低脚無蓋高坏				外：回転ナデ，回転ヘラケズリ，波状文，沈線 内：回転ナデ	密	外：淡灰色 内：淡灰色	大谷1～2期	
－29		旧河道1　B－4	須恵器	低脚無蓋高坏		17.6		外：回転ナデ，波状文，沈線 内：回転ナデ	密	外：淡青灰色 内：暗灰色	大谷1～2期	
－30		旧河道1　C－5	須恵器	低脚無蓋高坏		16.4		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ，波状文 内：回転ナデ	密（2㎜以下の砂粒を含む）	外：淡灰色 内：淡青灰色	大谷1～2期	3方長方形透，灰かぶり
－31		旧河道1　B－5　中層	須恵器	低脚無蓋高坏			9.6	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	外：淡灰色 内：淡灰色	大谷2C期	3方長方形透
－32		旧河道1　B－0	須恵器	低脚無蓋高坏			8.6	外：回転ナデ，カキ目 内：回転ナデ	密（砂粒を少し含む）	外：灰白色 内：淡灰白色	大谷2C期	3方長方形透
－33		旧河道1　B－5　中層	須恵器	低脚無蓋高坏			11.0	外：回転ナデ，カキ目，波状文，沈線 内：回転ナデ	密	外：暗灰色 内：暗灰色	大谷1期～2期	3方長方形（？）透
－34	42	旧河道1　B－5	須恵器	低脚高坏			12.2	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（1㎜以下の白色砂粒を僅かに含む）	外：暗灰色 内：暗灰色～灰白色	大谷1期（TK73～216）	3方円形透
－35	42	旧河道1　B－0（B－1）	須恵器	低脚無蓋高坏	10.4	16.0	9.0	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：暗灰色 内：明灰色～青灰色	大谷3期（？）TK43頃（？）	
42－1		旧河道1　B－1，2	須恵器	甕		19.0		外：回転ナデ，タタキ 内：回転ナデ，ナデ，同心円の当て具痕	密	外：灰白色～黒灰色 内：黒灰色～暗青灰色	古墳後期	灰かぶり
－2		旧河道1　B－1，2	須恵器	甕		31.0		外：回転ナデ，タタキ後カキメ，波状文，沈線 内：回転ナデ，同心円の当て具痕	密	外：淡灰色 内：暗灰色	古墳後期	
44－1		旧河道1　B－1，2	土師器	鉢		23.0		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗	外：明赤褐色 内：明茶褐色	古墳後期	風化著しい
－2		旧河道1　C－6	土師器	甕		(13.0)		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	古墳後期	
－3	43	旧河道1　B－3	土師器	甕		(14.6)		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色	古墳後期	
－4		旧河道1　B－2	土師器	甕		16.0		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（0.5㎜以下の砂粒を含む）	外：淡黄褐色～淡橙褐色 内：暗淡白褐色	古墳後期	
－5		旧河道1　B－1	土師器	甕		15.2		外：ヨコナデ？ 内：ヨコナデ？ナデ？	やや粗	外：茶褐色 内：淡茶褐色	古墳後期	風化
－6	43	旧河道1　B－5	土師器	甕		17.5		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色～淡橙褐色 内：白褐色	古墳後期	
－7		旧河道1　A－3，B－3	土師器	甕		7.4		外：ヨコナデ，ヘラケズリ 内：ヨコナデ，ハケメ	やや粗（0.5～2㎜大の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色～淡橙褐色 内：淡橙褐色	古墳後期	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
42－8		旧河道1　B－2	土師器	甕		17.8		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ？	やや粗	外：明茶褐色 内：茶褐色	古墳後期	風化著しい
－9		旧河道1　B－1	土師器	甕		18.2		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗	外：明白褐色 内：明白褐色	古墳後期	
－10	43	旧河道1　B－3	土師器	甕		18.6		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（0.5～2㎜大の砂粒を多く含む）	外：淡灰褐色 内：明橙褐色	古墳後期	
－11		旧河道1　B－2	土師器	甕		19.2		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗	外：明茶褐色 内：明茶褐色～ 白褐色	古墳後期	
－12		旧河道1　B－2	土師器	甕		18.7		外：ヨコナデ，ハケメ後ナデ？ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗	外：明茶褐色 内：明茶褐色	古墳後期	
－13	43	旧河道1　B－2	土師器	甕		20.4		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	密（0.5～1㎜大の砂粒を多く含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色	古墳後期	
－14		旧河道1　B－2	土師器	甕		22.6		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡白褐色～ 淡橙褐色 内：淡白褐色	古墳後期	
－15	43	旧河道1　A－2	土師器	甕		21.2		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	粗（1㎜以上の砂粒を含む）	外：明茶褐色 内：明茶褐色	古墳後期	
45－1	43	旧河道1　B－1，2	土師器	甕		21.0		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗	外：明茶褐色 内：明茶褐色	古墳後期	
－2	43	旧河道1　B－1，2	土師器	甕		(11.5)		外： 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡橙褐色 内：淡白褐色	古墳後期	風化著しい
－3		旧河道1　B－4	土師器	甕		18.0		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（0.5㎜大の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：淡黄褐色	古墳後期	
－4	43	旧河道1　A－3，B－3	土師器	甕		29.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	粗（0.5～3㎜大の砂粒を多く含む）	外：白褐色～暗淡黄褐色 内：暗淡黄褐色	古墳後期	風化著しい
－5	44	旧河道1　B－1，2	土師器	甑		35.8		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（0.5～2㎜大の砂粒を多く含む）	外：白褐色～淡橙褐色 内：白褐色	古墳後期	
－6	44	旧河道1　B－1，2	土師器	甑		28.0		外：ナデ，ハケメ 内：ナデ，ヘラケズリ	やや密（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	古墳後期	
－7		旧河道1　B－1	土師器	甑		(29.4)		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	やや密（0.5㎜大の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	古墳後期	
－8	44	旧河道1　B－1，2	土師器	甑			13.0	外：ヨコナデ，ナデ，ハケメ 内：ヨコナデ？，ヘラケズリ，ヘラケズリ後ナデ	やや粗（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色～淡橙褐色 内：黄褐色	古墳後期	
－9		旧河道1　B－1，2	土師器	甑				外：強いナデ，ハケメ 内：ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を含む）	外：白褐色 内：黄褐色	古墳後期	基軸部差込み痕残る
－10	44	旧河道1　B－1，2	土師器	甑			11.0	外：ナデ，ハケメ 内：ナデ，ヘラケズリ	やや密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：黄褐色 内：黄褐色	古墳後期	焼成前穿孔
－11	44	旧河道1　B－1，2	土師器	甑			13.0	外：ナデ，ハケメ 内：ナデ，ヘラケズリ	やや粗（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡白褐色 内：淡橙褐色	古墳後期	焼成前穿孔
46－1	44	旧河道1　A－3，B－3	土師器	竈		29.6		外：ヨコナデ，ナデ，ハケメ 内：ヘラケズリ，ハケメ	密（0.5～1㎜大の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	古墳後期	
－2	44	旧河道1　B－2	土師器	竈				外：強いナデ 内：ヘラケズリ後ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色	古墳後期	
－3		旧河道1　B－1	土師器	竈		(36.0)		外：ナデ 内：ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	古墳後期	
－4		旧河道1　B－1	土師器	竈				外：ナデ，ハケメ 内：ナデ，ヘラケズリ	やや密（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	古墳後期	
－5		旧河道1　B－1，2	土師器	竈				外：ナデ，ハケメ 内：ヘラケズリ後ナデ	密（1㎜以下の砂粒を含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色～ 淡灰褐色	古墳後期	
－6	44	旧河道1　B－1	土師器	竈	(34.4)	(30.4)	(27.6)	外：ヨコナデ，ナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ後ナデ	やや密（0.5～1㎜大の砂粒を多く含む）	外：白褐色～淡橙褐色 内：白褐色	古墳後期	風化著しい
－7		旧河道1　B－1，2	土師器	竈			(35.0)	外：ハケメ 内：ヘラケズリ，ナデ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	古墳後期	
－8		旧河道1　B－1	土製品	土製支脚	15.4		11.1	外：ナデ，ヘラケズリ，穿孔 内：ナデ	やや密（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	古墳後期	
－9		旧河道1　B－2	土製品	土製支脚	9.5		(7.5)	外：ナデ 内：ヘラケズリ	密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	古墳後期	
－10		旧河道1　B－2	土製品	土製支脚	18.3		(12.4)	外：ナデ，ヘラケズリ，穿孔 内：	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：	古墳後期	
－11		旧河道1　A－2	土製品	土製支脚	16.4		10.6	外：ナデ，ハケメ，穿孔 内：ナデ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色～淡橙褐色 内：白褐色～淡橙褐色	古墳後期	
－12		旧河道1　B－1	土製品	土製支脚	18.2		(12.0)	外：ナデ 内：ナデ	やや密（2㎜以下の砂粒を含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	古墳後期	
49－1	45	旧河道1　B－5　中層	土師器	長頸壺		10.0		外：ヨコナデ，ハケメ 内：指頭圧痕，ハケメ，	密（0.5～1㎜大の砂粒を少し含む）	外：白褐色～橙褐色 内：白褐色～橙褐色	古墳中期	
－2		旧河道1　B－5	土師器	直口壺		9.3		外：ハケメ後ナデ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	密（0.5～1㎜大の砂粒を僅かに含む）	外：白褐色 内：白褐色	古墳中期	赤色顔料付着
－3	45	旧河道1　B－5　下層	土師器	壺		20.2		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密（3㎜以下の砂粒を少し含む）	外：暗淡黄褐色 内：暗淡黄褐色	古墳中期	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
49－4	45	旧河道1　B－4	土師器	直口壺		(18.6)		外：ヨコナデ，ヘラミガキ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，指頭圧痕，シボリメ	密（0.5㎜大の砂粒を少し含む）	外：白褐色～淡黄褐色 内：白褐色～淡黄褐色	古墳中期	
－5		旧河道1　B－4	土師器	甕		11.6		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色	古墳中期	
－6	45	旧河道1　B－4	土師器	甕		(19.1)		外：ヨコナデ，ハケメ後ヨコナデ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ，ハケメ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：明白褐色～暗淡黄褐色 内：明白褐色～暗淡黄褐色	松山Ⅱ期	
－7	45	旧河道1　B－1，2	土師器	甕		18.0		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	密（1㎜以下の砂粒を含む）	外：淡白褐色 内：白褐色	松山Ⅱ期	
－8		旧河道1　B－1	土師器	壺		20.8		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ後ナデ，ヘラケズリ	やや密（0.5～1㎜大の砂粒を含む）	外：淡黄褐色～淡橙褐色 内：橙褐色～白褐色	松山Ⅱ期	風化
－9		旧河道1　B－1	土師器	甕		18.0		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	やや密（1㎜大の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	松山Ⅱ期	
－10	45	旧河道1　B－6　中層	土師器	甕		12.6		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，指頭圧痕，ヘラケズリ後ナデ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色 内：白褐色	松山Ⅱ期	
－11	45	旧河道1　B－1，2	土師器	甕		14.3		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，指頭圧痕，ヘラケズリ	やや粗	外：明茶褐色 内：明茶褐色	松山Ⅱ期	
－12	45	旧河道1　B－4	土師器	甕		15.2		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	やや密（0.5～1㎜大の砂粒を少し含む）	外：淡黄褐色～淡橙褐色 内：淡黄褐色～淡橙褐色	松山Ⅱ期	
－13		旧河道1　B－3	土師器	甕		15.2		外：ヨコナデ，ハケメ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡灰褐色 内：黄褐色	松山Ⅱ期	
－14	45	旧河道1　B－2	土師器	甕		15.4		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡白褐色～橙褐色 内：淡白褐色	松山Ⅱ期	
－15	45	旧河道1　B－1	土師器	甕		15.2		外：ヨコナデ，ハケメ後波状文 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ後ナデ	やや密（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：淡黄褐色（煤付着）	松山Ⅱ期	
50－1	46	旧河道1　A－0	土師器	小型丸底壺				外：ヨコナデ，ナデ 内：ヨコナデ，ナデ	密	外：赤褐色～茶褐色 内：赤褐色～灰褐色	松山Ⅱ期	
－2	46	旧河道1　A－0	土師器	小型丸底壺				外： 内：ヨコナデ，指頭圧痕	やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色～淡橙褐色 内：白褐色～淡橙褐色	松山Ⅱ期	風化著しい
－3	46	旧河道1　A－0，1	土師器	小型丸底壺	7.8	7.2		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色～橙褐色	松山Ⅱ期	風化
－4	46	旧河道1　A－0，1	土師器	小型丸底壺	8.0	7.6		外：ナデ後ハケメ 内：ナデ，ヘラケズリ	やや密（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	松山Ⅱ期	
－5	46	旧河道1　A－0，1	土師器	小型丸底壺	8.1	8.7		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，指頭圧痕，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	松山Ⅱ期	風化著しい
－6	46	旧河道1　A－0，1	土師器	小型丸底壺	9.6	8.6		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡灰褐色～淡橙褐色 内：橙褐色	松山Ⅱ期	
－7	46	旧河道1　A－0	土師器	小型丸底壺		9.6		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	松山Ⅱ期	
－8	46	旧河道1　A－0	土師器	小型丸底壺	9.7	9.5		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ？	やや粗（0.5㎜程度の砂粒を少し含む）	外：暗白褐色～橙褐色 内：暗白褐色～橙褐色	松山Ⅱ期	風化著しい
－9		旧河道1　A－0	土師器	小型丸底壺		10.4		外：ナデ後ハケメ 内：ナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	松山Ⅱ期	風化
－10		旧河道1　A－0	土師器	高坏		16.1		外：ハケメ後ヨコナデ，ナデ 内：ヨコナデ？，ヘラミガキ？	密	外：茶褐色～暗茶褐色 内：茶褐色	松山Ⅱ期	風化
－11		旧河道1　A－0	土師器	高坏			11.0	外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ，ハケメ，シボリメ	密	外：茶褐色 内：淡茶褐色	松山Ⅱ期	3方円形透
－12		旧河道1　A－0，1	土師器	高坏			10.6	外： 内：シボリメ	やや密（1㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	松山Ⅱ期	2又は3方円形透
－13		旧河道1　A－0，1	土師器	小型丸底鉢	6.1	10.0		外：ハケメ，ハケメ後ナデ 内：ヘラケズリ後ナデ，ハケメ	やや粗（0.5～2㎜大の砂粒を多く含む）	外：暗白褐色 内：暗淡橙褐色	松山Ⅱ期	風化
－14		旧河道1　A－0，1	土師器	高坏	(10.1)	(12.4)	5.6	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ナデ？	やや密（3㎜以下の砂粒を含む）	外：白褐色～淡橙褐色 内：白褐色～淡橙褐色	松山Ⅱ期	風化著しい
－15	46	旧河道1　A－0	土師器	甕		13.6		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（3㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色	松山Ⅱ期	
－16	46	旧河道1　A－1	土師器	甕		16.2		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ，ヘラケズリ後ナデ	やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：黄褐色 内：黄褐色	松山Ⅱ期	
－17		旧河道1　A－0	土師器	甕		14.8		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリのちナデ，ハケメ	やや密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	松山Ⅱ期	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
50－18		旧河道1　A－1	土師器	甕		16.2		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ハケメ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	松山Ⅱ期	
－19	46	旧河道1　1ライン	土師器	甕		15.0		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，指頭圧痕，ヘラケズリ，ハケメ後ナデ	やや密（0.5～1㎜大の砂粒を少し含む）	外：白褐色～黄褐色 内：白褐色～黄褐色	松山Ⅱ期	
－20	46	旧河道1　1ライン	土師器	甕		15.0		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色 内：白褐色	松山Ⅱ期	
－21		旧河道1　A－1	土師器	甕	(27.2)	16.4		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：暗淡黄褐色 内：暗淡黄褐色	松山Ⅱ期	風化
－22		旧河道1　A－0	土師器	甕		19.0		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：暗黄褐色	松山Ⅱ期	
51－1	47	旧河道1　B－1，2	土師器	甕		17.0		外：ヨコナデ，ハケメ後ナデ？ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗	外：白褐色 内：白褐色	松山Ⅰ期	
－2	47	旧河道1　B－3　2層	土師器	甕	(14.8)			外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	やや密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡灰褐色 内：淡橙褐色	松山Ⅰ期	
－3		旧河道1　B－3　2層	土師器	甕		15.0		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色	松山Ⅰ期	
－4	47	旧河道1　B－3　2層	土師器	甕		14.2		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色	松山Ⅰ期	
－5	47	旧河道1　B－3　2層	土師器	甕		12.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	密（0.5㎜程度の砂粒を多く含む）	外：橙褐色 内：橙褐色	松山Ⅰ期	
－6	47	旧河道1　B－3　2層	土師器	甕		12.8		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡黄褐色 内：淡橙白色	松山Ⅰ期	
－7	47	旧河道1　B－3　2層	土師器	甕		16.0		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：明橙褐色 内：明橙褐色～淡白褐色	松山Ⅰ期	
－8		旧河道1　B－1，2	土師器	甕	(12.8)			外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡黒褐色～橙褐色 内：淡黒褐色	松山Ⅰ期	
－9	47	旧河道1　B－1，2	土師器	甕		14.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ？	やや粗（5㎜以下の石英を含む）	外：赤褐色 内：明茶褐色	松山Ⅰ期	
－10	47	旧河道1　B－3　2層	土師器	甕		15.0		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色	松山Ⅰ期	
－11		旧河道1　A－3，B－3	土師器	甕		14.2		外：ヨコナデ，ナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	やや密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡灰褐色～白褐色 内：淡灰褐色	松山Ⅰ期	
－12	47	旧河道1　A－，B－3	土師器	甕		17.2		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色～淡橙褐色 内：白褐色	松山Ⅰ期	
－13	47	旧河道1　A－3，B－3	土師器	甕		16.2		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：橙褐色 内：橙褐色	松山Ⅰ期	
－14	47	旧河道1　A－3，B－3	土師器	壺		27.4		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡白褐色 内：淡黄褐色	松山Ⅰ期	
－15	47	旧河道1　B－3	土師器	壺		24.4		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，指頭圧痕，ヘラケズリ	密（0.5㎜程度の砂粒を多く含む）	外：淡白褐色 内：淡白褐色	松山Ⅰ期	
52－1	48	旧河道1　B－5	土師器	高杯	13.4	15.0	(9.2)	外：ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ，ハケメ後ヘラミガキ 内：ナデ，ヘラケズリ後ナデ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色～淡赤褐色 内：淡黄褐色～淡赤褐色	松山Ⅳ～	赤色顔料付着
－2		旧河道1　A－3，B－3	土師器	高杯			9.2	外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密	外：淡白褐色 内：淡白褐色	松山Ⅳ～	赤色顔料付着
－3		旧河道1　B－4	土師器	高杯		(13.9)		外：ナデ，ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	密（2㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：白褐色 内：白褐色	松山Ⅳ～	赤色顔料付着
－4		旧河道1　B－1	土師器	高杯			10.4	外：ヨコナデ？，ヘラミガキ？ 内：ヨコナデ？，ヘラケズリ？	密	外：橙褐色 内：橙褐色	松山Ⅳ～	風化著しい
－5		旧河道1　A－3，B－3	土師器	高杯	14.3	18.5	11.0	外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	松山Ⅳ～	風化，赤色顔料付着
－6		旧河道1　A－3	土師器	高杯		20.4		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ハケメ	やや粗（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：明橙褐色 内：明橙褐色	松山Ⅱ	風化
－7	48	旧河道1　B－4	土師器	高杯		(26.0)		外：ハケメ 内：	やや密（0.5～2㎜大の砂粒を多く含む）	外：淡白褐色 内：淡白褐色	松山Ⅱ	風化著しい
－8		旧河道1　B－1	土師器	高杯		14.0		外：ハケメ後ヘラミガキ，ヘラミガキ 内：ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色～淡橙褐色 内：白褐色～淡灰褐色	松山Ⅱ	風化
－9		旧河道1　B－1	土師器	高杯		18.8		外：ナデ，ヘラミガキ，ハケメ 内：ヘラミガキ	密（1㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：白褐色 内：淡橙褐色	松山Ⅱ	風化著しい
－10		旧河道1　B－1	土師器	高杯			12.0	外：ナデ，ヘラミガキ，ハケメ 内：ナデ，ヘラケズリ，ヘラケズリ後ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：明白褐色 内：明白褐色	松山Ⅱ～	風化
－11		旧河道1　A－2	土師器	高杯			14.8	外：ヨコナデ，ヘラミガキ，ハケメ 内：ヘラケズリ，ヘラケズリ後ナデ，ヘラミガキ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色～淡赤褐色 内：白褐色	松山Ⅱ～	
－12	48	旧河道1　B－4	土師器	高杯	13.6	(20.2)	(13.6)	外：ヘラミガキ？ハケメ 内：ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：橙褐色～淡黄褐色 内：白褐色		風化著しい
－13		旧河道1	土師器	高杯		16.6		外： 内：ヘラミガキ？	やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：暗白褐色		風化著しい

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
52－14	48	旧河道1　B－3	土師器	高坏		19.6		外：ヨコナデ，ハケメ後ナデ 内：ハケメ	密（0.5㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡明赤褐色 内：明赤褐色～淡黄褐色	松山Ⅱ　古	
－15	48	旧河道1　B－4	土師器	高坏	12.4	(20.8)	(10.2)	外：ハケメ後ナデ，指頭圧痕，ヘラミガキ 内：ナデ，ヘラケズリ後ナデ，ハケメ	やや密（4㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色～茶褐色 内：橙褐色		3方円形透，風化著しい
－16		旧河道1　B－4	土師器	高坏		17.2		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：暗橙褐色 内：暗橙褐色～淡黄褐色	松山Ⅱ期	風化著しい
－17		旧河道1　A－1	土師器	高坏		(16.8)		外：ハケメ 内：ハケメ	やや密（0.5～1㎜大の砂粒を多く含む）	外：黄褐色 内：黄褐色		風化著しい
－18		旧河道1　B－1，2	土師器	高坏		16.2		外：ヘラミガキ 内：ヨコナデ，ヘラミガキ？	密	外：赤褐色 内：淡赤褐色		
－19	48	旧河道1　B－1	土師器	高坏		15.9		外： 内：	粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	松山Ⅰ	風化著しい
－20		旧河道1　B－3	土師器	高坏	(13.3)	(15.4)	10.9	外：ヨコナデ，ナデ，ヘラミガキ，ハケメ 内：指頭圧痕，ヘラケズリ，ヘラミガキ，ハケメ，シボリメ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡黄褐色～淡橙褐色 内：淡黄褐色	松山Ⅰ	風化
－21	48	旧河道1　B－3	土師器	高坏	14.2	15.7	11.5	外：ヨコナデ，ヘラミガキ 内：ヨコナデ，指頭圧痕，ヘラケズリ	密（0.5～1㎜大の砂粒を多く含む）	外：白褐色～灰褐色 内：白褐色	松山Ⅰ	2方円形透
－22	48	旧河道1　B－5　中層	土師器	高坏		15.2		外：ヘラミガキ，ハケメ 内：ヘラミガキ	密（0.5㎜大の砂粒を少し含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	松山Ⅰ	
－23		旧河道1　B－1	土師器	高坏		15.4		外：ヨコナデ，ヘラミガキ？ 内：ヨコナデ，ヘラミガキ	密	外：明茶褐色 内：明茶褐色	松山Ⅱ	風化著しい
－24		旧河道1　B－1	土師器	高坏		10.4		外：ヨコナデ，ヘラケズリ，ハケメ 内：ヘラミガキ	やや粗	外：淡赤褐色 内：淡赤褐色	松山Ⅱ	風化
－25		旧河道1　B－4	土師器	高坏			8.2	外：ヨコナデ 内：	粗	外：淡明茶褐色 内：白褐色		風化著しい
－26	48	旧河道1　B－3	土師器	高坏			10.4	外：ナデ，ヘラミガキ 内：ナデ，ヘラケズリ	密	外：淡桃色 内：淡桃色	松山Ⅰ期	
－27	48	旧河道1　B－3	土師器	高坏		10.9		外：ヨコナデ，ヘラミガキ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ，ヘラ痕	密	外：明茶褐色 内：淡赤褐色	松山Ⅰ期	
－28	48	旧河道1　B－1，2	土師器	高坏			9.4	外：ナデ，ヘラミガキ，ハケメ 内：ナデ，ハケメ，シボリメ	密（0.5㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡橙褐色～淡黄褐色 内：淡黄褐色～灰褐色	松山Ⅰ期	
－29	48	旧河道1　A－3，B－3	土師器	高坏			11.0	外：ナデ，ヘラミガキ，ハケメ 内：ナデ，ヘラケズリ，ハケメ	やや密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色～淡橙褐色 内：淡橙褐色	松山Ⅰ期	
－30	48	旧河道1　B－3	土師器	高坏			10.4	外：ハケメ後ヘラミガキ 内：ナデ，指頭圧痕，ヘラケズリ後ナデ，ヘラケズリ	密（0.5㎜大の砂粒を多く含む）	外：明白褐色 内：白褐色	松山Ⅰ期	3方円形透
53－1	49	旧河道1　C－6	土製品	土鈴	5.6	5.5	3.4	外：ナデ 内：ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色 内：白褐色	古墳後期	穿孔
－2	49	旧河道1　A－3，B－3	土師器	埦	3.2	6.4		外：ハケメ 内：ハケメ，指頭圧痕	密	外：白褐色 内：白褐色	古墳後期	赤色顔料付着
－3	49	旧河道1　B－5　中層	土師器	手捏土器	4.6	5.5		外：ナデ，ヘラケズリ後ナデ 内：ナデ	密（2㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	古墳後期	
－4	49	旧河道1　A－3，B－3	土師器	手捏土器	5.3	4.6	(2.8)	外：ナデ，ハケメ後ヘラミガキ 内：ナデ，指頭圧痕	密（1㎜以下の砂粒を含む）	外：明白褐色 内：白褐色	古墳後期	風化
－5	49	旧河道1　A－3，B－3	土師器	ミニチュア土器	5.0	(3.0)	(3.6)	外：ヨコナデ，ナデ，ハケメ 内：ヨコナデ	密	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	古墳後期	
－6	49	旧河道1　B－4	土師器	手捏土器	2.9	3.2		外：指頭圧痕 内：ナデ	密	外：白褐色～淡橙褐色 内：淡橙褐色	古墳後期	
－7	49	旧河道1　B－1，2	土師器	手捏土器	4.9	5.9		外：指頭圧痕 内：ナデ	やや粗	外：明茶褐色 内：明茶褐色	古墳後期	
－8	49	旧河道1　B－1	土師器	手捏土器	(4.6)	(5.9)		外：指頭圧痕 内：指頭圧痕	密（石英が目立つ）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	古墳後期	
－9	49	旧河道1　B－1，2	弥生土器	手捏土器	4.9	8.6		外：ナデ 内：ナデ	やや密（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	古墳後期	
－10	49	旧河道1　B－5　中層	土師器	埦？	5.1	14.8	(6.0)	外：ナデ 内：ナデ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色 内：白褐色	古墳後期	赤色顔料付着，漆付着
－11		旧河道1　A－3，B－3	土師器	埦	4.3	14.7	(6.5)	外：ヨコナデ，回転糸切後ナデ 内：ヨコナデ，ナデ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	古墳後期	赤色顔料付着
－12	49	旧河道1　B－1，2	土師器	高坏		15.5		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラミガキ？	やや粗	外：赤褐色 内：茶褐色	古墳中期～後期	風化
－13		旧河道1　A－3，B－3	土師器	埦		14.0		外：ナデ，ハケメ 内：ナデ？	やや密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡白褐色 内：淡白褐色	古墳中期～後期	風化著しい
－14		旧河道1　A－3，B－3	土師器	埦	5.7	11.3		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラミガキ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色 内：白褐色	古墳中期～後期	赤色顔料付着
－15		旧河道1　B－5	土師器	埦	5.5	11.7		外：指頭圧痕 内：	密（1㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	古墳中期～後期	風化著しい
－16	50	旧河道1　B－3	土師器	低脚坏	4.4	13.4	3.8	外：ヨコナデ，ナデ 内：ナデ？	密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：暗淡橙褐色 内：暗淡黄褐色	松山Ⅰ期	風化

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
53－17	50	旧河道1　A－3，B－3	土師器	低脚坏	4.1	12.8	3.2	外：ヨコナデ，ナデ，ヘラミガキ 内：ナデ，ヘラミガキ	密（0.5㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡橙褐色 内：白褐色～淡橙褐色	松山Ⅰ期	
－18	49	旧河道1　B－1	土師器	小型丸底壺		10.8		外：ヨコナデ，ナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	古墳中期	
－19	50	旧河道1　B－1	土師器	小型丸底壺	9.4	(8.2)		外：ヨコナデ？，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色～橙褐色 内：橙褐色	古墳中期	風化著しい
－20	50	旧河道1　B－1，2	弥生土器	小型丸底壺	8.7	8.8		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗	外：白褐色 内：白褐色～黒褐色	古墳中期	
－21	50	旧河道1　B－5　中層	土師器	小型丸底壺	8.4	8.4		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色～明橙褐色 内：白褐色	古墳中期	
－22	50	旧河道1　B－2	弥生土器	小型丸底壺	9.0	8.1		外：ヨコナデ，指頭圧痕，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗	外：赤褐色 内：赤褐色	古墳中期	
－23	50	旧河道1　B－4	土師器	小型丸底壺	8.9	8.7		外：ヨコナデ？ハケメ後ナデ 内：ヘラケズリ後ナデ，ハケメ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：暗白褐色～淡橙褐色 内：暗白褐色	古墳中期	風化著しい
－24	50	旧河道1　B－1	土師器	小型丸底壺	9.3	8.7		外：ヨコナデ，ハケメ後ナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	古墳中期	焼成後穿孔
－25	50	旧河道1　B－5　最下層	土師器	小型丸底壺	9.2	8.9		外：ヨコナデ，ハケメ後ナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	古墳中期	
－26	50	旧河道1　B－6	土師器	小型丸底壺	9.8	7.9		外：ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色～淡橙褐色 内：白褐色～淡橙褐色	古墳中期	3個の焼成後穿孔，風化
－27	50	旧河道1　B－2	弥生土器	小型丸底壺	7.0	5.6		外：ヨコナデ，ハケメ後ナデ 内：ヨコナデ，ナデ	密	外：明茶褐色～白褐色 内：茶褐色～明茶色	松山Ⅰ期	
－28	50	旧河道1　B－2	弥生土器	小型丸底壺	9.1	9.2		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗	外：茶褐色 内：赤褐色	松山Ⅰ期	
－29	50	旧河道1　B－4	土師器	小型丸底壺	9.5	8.8		外：ヨコナデ，ハケメ，ハケメ後ナデ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：橙褐色 内：橙褐色	松山Ⅰ期	
－30	50	旧河道1　B－3	土師器	鼓形器台	9.4	14.4	12.8	外：ヨコナデ，ヨコナデ後ヘラミガキ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ，ヘラケズリ後ヘラミガキ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡白褐色～淡橙褐色 内：淡白褐色～淡橙褐色	松山Ⅰ期	3方円形透
－31	50	旧河道1　B－3	土師器	鼓形器台	6.9	11.0	10.4	外：ヨコナデ，ナデ 内：ナデ，ヘラケズリ，ヘラミガキ	密（0.5㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡白褐色 内：淡白褐色	松山Ⅰ期	
－32	50	旧河道1	土師器	中空小型器台	7.0	9.0	8.4	外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ後ハケメ	やや密（4㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色	松山Ⅰ期	
－33	49	旧河道1　B－1，2	土師器	小型丸底壺				外：ヨコナデ，ナデ 内：指頭圧痕	やや粗	外：暗茶褐色 内：暗茶褐色	松山Ⅰ期	
－34	49	旧河道1　B－3	土師器	小型丸底壺			2.3	外：指頭圧痕 内：ヨコナデ，指頭圧痕	密（1㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：明橙褐色～暗灰褐色 内：淡灰褐色	松山Ⅰ期	風化著しい
55－1	51	旧河道1　B－1	弥生土器	甕		12.3		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗	外：白褐色 内：白褐色	草田2期	
－2	51	旧河道1　B－1	弥生土器	甕		12.6		外：ヨコナデ，ヘラケズリ，ヘラミガキ，ハケメ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ，ヘラミガキ	粗	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	草田2期	
－3	51	旧河道1　B－1，2	弥生土器	甕		14.8		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（1㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：青灰褐色 内：淡灰褐色	草田2期	
－4		旧河道1　B－1	弥生土器	甕		15.2		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（砂粒を多くふくむ）	外：明茶褐色 内：明茶褐色	草田2期	
－5	51	旧河道1　B－1	弥生土器	甕		17.0		外：ヨコナデ，平行沈線文，刺突文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田2期	
－6		旧河道1　B－1，2	弥生土器	甕		16.7		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗	外：明茶褐色 内：明茶褐色	草田2期	
－7		旧河道1　B－1	弥生土器	甕		22.0		外：ヨコナデ，平行沈線文後ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：青灰褐色 内：青灰褐色	草田2期	
－8		旧河道1　B－1，2	弥生土器	甕		19.6		外：ヨコナデ後ハケメ，平行沈線文，刺突文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	草田3期	
－9	51	旧河道1　B－1，2	弥生土器	注口土器（注口部）				外：ヘラミガキ 内：ナデ？	やや粗（0.5～3㎜大の砂粒を多く含む）	外：淡橙褐色 内：白褐色	古墳後期	
－10	51	旧河道1　A－3，B－3	弥生土器	注口土器（把手）				外：刺突文 内：ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：暗淡白褐色 内：暗淡白褐色	古墳後期	
－11		旧河道1　B－4	弥生土器	器台脚部			(10.8)	外：ヨコナデ，ヘラミガキ，平行沈線文 内：ナデ，ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	古墳後期	
－12		旧河道1　B－6	弥生土器	器台		19.0		外：ヨコナデ，ヘラミガキ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラミガキ	やや粗（0.5～2㎜大の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田2期	
－13	51	旧河道1　C－5	弥生土器	蓋	9.2	14.6		外：ヨコナデ，ハケメ，平行沈線文 内：ナデ，ヘラケズリ	やや粗（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色～灰褐色 内：暗灰褐色	草田3期	2個の円形穿孔

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
55－14	51	旧河道1　B－2	弥生土器	高坏		19.0		外：ヨコナデ，ヘラミガキ，平行沈線文 内：ヘラミガキ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：明淡橙褐色 内：淡橙褐色	草田3期	
－15	51	旧河道1　B－5	弥生土器	小型壺？	10.1	10.4		外：ヨコナデ，ヘラミガキ，平行沈線文，刺突文 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	やや密（3㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	古墳後期	
－16	51	旧河道1　B－5　最下層	弥生土器	小型壺		10.8		外：ヨコナデ，平行沈線文，刺突文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（0.5～1㎜大の砂粒を多く含む）	外：（煤付着） 内：灰褐色	古墳後期	
－17	51	旧河道1　A－5	弥生土器	装飾壺				外：ハケメ，ヘラミガキ，沈線文，刺突文，竹管文 内：ヘラミガキ？	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色 内：灰褐色	古墳後期	赤色顔料付着
－18	51	旧河道1　B－5　最下層	弥生土器	脚付壺	15.7	11.7	9.6	外：ヨコナデ，ハケメ後ヘラミガキ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ，ナデ	やや密（0.5～1㎜大の砂粒を少し含む）	外：淡橙褐色～淡黄褐色 内：淡橙褐色	古墳後期	頸部に2個の円孔が2対赤色顔料付着
－19		旧河道1　B－1	弥生土器	低脚坏	4.9	11.3	5.0	外：ヨコナデ，ナデ 内：ヨコナデ？	やや密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	草田3期	
－20		旧河道1　B－1	土師器	低脚坏	6.3	14.1	6.0	外：ナデ，ヘラミガキ，ハケメ後ヘラミガキ 内：ナデ，ハケメ後ヘラミガキ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：灰褐色 内：淡黄褐色	草田3期	
－21	51	旧河道1　B－1	土師器	低脚坏	6.1	12.9	6.1	外：ナデ，ハケメ 内：ナデ，ハケメ	やや密（1㎜程度の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田3期	風化著しい
－22		旧河道1　1ライン	弥生土器	甕		17.8		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，指頭圧痕，ヘラケズリ	粗（0.5～1㎜大の砂粒を多く含む）	外：暗淡黄褐色～淡橙褐色 内：暗淡黄褐色	草田4期	
－23		旧河道1	土師器	鼓形器台			19.5	外： 内：ヨコナデ	やや粗（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田4期	風化著しい
－24	51	旧河道1　B－2	弥生土器	壺				外：ハケメ後ヨコナデ，竹管文 内：ナデ，ヘラケズリ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色 内：白褐色	古墳後期	
－25	51	旧河道1　B－1，2	弥生土器	壺？甕？				外：ヨコナデ，ナデ，ハケメ 内：ヘラケズリ後ナデ	粗（1㎜以上の白色砂粒を多く含む）	外：明茶褐色～明赤褐色 内：茶褐色～黒褐色	古墳後期	底部に円形穿孔
56－1	52	旧河道1　B－5	弥生土器	壺				外：ヨコナデ，波状文，平行沈線文 内：ヘラケズリ，ヘラミガキ	やや粗（0.5～2㎜大の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	古墳後期	
－2	52	旧河道1　B－4	弥生土器	壺？				外：沈線文 内：ヘラケズリ	やや粗（0.5～2㎜大の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	古墳後期	風化，56－3と同一個体
－3	52	旧河道1　B－4	弥生土器	壺？				外：沈線文 内：ヘラケズリ	やや粗（0.5～2㎜大の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	古墳後期	風化，56－2と同一個体
－4	52	旧河道1　A－0，1	弥生土器	壺				外：ハケメ後平行沈線文 内：ナデ，ヘラケズリ	やや粗（0.5～3㎜大の砂粒を多く含む）	外：橙褐色～淡黄褐色 内：橙褐色～淡黄褐色	古墳後期	
－5	52	旧河道1　B－4	弥生土器	壺？				外：ヨコナデ，ハケメ，突帯刺突文 内：ハケメ	やや粗（5㎜以下の砂粒を多く含む）	外：黄褐色～橙褐色 内：黄褐色～橙褐色	弥生後期終末	56－6と同一個体
－6	52	旧河道1　B－4	弥生土器	壺？			(8.7)	外：ナデ，タタキ，ハケメ 内：ユビ押さえ，ハケメ	やや粗（5㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色～橙褐色 内：白褐色～橙褐色	弥生後期終末	56－5と同一個体
62－1		旧河道2　上層	土師器	甕		(12.2)		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密（0.5～3㎜大の砂粒を僅かに含む）	外：淡白褐色 内：淡白褐色	松山Ⅱ期	
－2	55	旧河道2　上層	土師器	小型丸底壺		11.0		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色～淡橙褐色 内：淡黄褐色～淡橙褐色	松山Ⅱ期	赤色顔料，漆付着
－3	55	旧河道2　上層	土師器	甕		12.6		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色 内：白褐色	松山Ⅱ期	
－4		旧河道2　上層	土師器	甕		14.4		外：ヨコナデ，ハケメ後ナデ 内：ナデ，ヘラケズリ，ハケメ後ナデ	密（2㎜以下の白色砂粒を含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	松山Ⅱ期	
－5	55	旧河道2　上層	土師器	甕		15.6		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（1㎜大の砂粒を多く含む）	外：白褐色～淡赤褐色 内：白褐色	松山Ⅱ期	
－6		旧河道2　上層	土師器	甕		15.1		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：暗黄褐色 内：暗淡橙褐色	松山Ⅱ期	
－7	55	旧河道2　上層	土師器	壺		17.9		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，指頭圧痕，ヘラケズリ	やや密（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色～淡橙褐色 内：白褐色	松山Ⅱ期	
－8	55	旧河道2　上層	土師器	壺				外：ヨコナデ，刺突文後ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡白褐色 内：橙褐色	古墳前期	風化
－9		旧河道2　上層	土師器	壺				外：ヨコナデ，ハケメ，刺突文 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	古墳前期	
－10		旧河道2　上層	土師器	小型丸底壺		8.8		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	やや密（1㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	古墳中期	焼成前穿孔
－11	55	旧河道2　上層	土師器	小型丸底壺				外：ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密（2㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	古墳中期	
－12		旧河道2　上層	土師器	小型丸底壺	8.7	10.2		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ，ヘラケズリ，ハケメ	やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色	古墳中期	風化，赤色顔料付着
－13		旧河道2　上層	弥生土器	手焙土器	4.1	(6.0)		外：指頭圧痕 内：指頭圧痕	密（1㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：暗白褐色 内：暗白褐色		

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
62－14		旧河道2 上層	土師器	手捏土器	2.0	3.3		外：指頭圧痕 内：指頭圧痕	やや密（0.5～1㎜大の砂粒を少し含む）	外：白褐色 内：白褐色		
－15		旧河道2 上層	土師器	高坏	13.4	(17.6)	10.5	外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラミガキ，シボリメ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡白褐色 内：淡白褐色～淡橙褐色	古墳中期	風化著しい，3方円形透
－16		旧河道2 上層	土師器	高坏			13.6	外：ヘラミガキ，ハケメ後ヘラミガキ 内：指頭圧痕，ヘラケズリ，ハケメ後ナデ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色 内：白褐色	古墳中期	風化，赤色顔料付着
－17		旧河道2 上層	弥生土器	甕		22.0		外：ヨコナデ，ハケメ？ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（0.5㎜大の砂粒を多く含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	草田6期	
－18		旧河道2 上層	土師器	甕		21.0		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色～淡橙褐色	草田4～5期	
－19	55	旧河道2 上層	弥生土器	甕		16.0		外：ヨコナデ，ハケメ，波状文 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	密（1㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：暗淡黄褐色 内：暗淡黄褐色	草田4期	
－20	55	旧河道2 上層	弥生土器	甕		17.6		外：ヨコナデ，ハケメ，平行沈線文，刺突文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田4期	
－21		旧河道2 上層	弥生土器	高坏		(19.6)		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヘラケズリ，ヘラミガキ？	やや密（2㎜以下の砂粒を含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	弥生中期Ⅳ－Ⅰ様式	風化
－22		旧河道2 上層	弥生土器	壺		(14.2)		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ナデ	やや密（0.5～3㎜大の砂粒を少し含む）	外：明淡黄褐色 内：淡白褐色	Ⅳ－1様式	風化
－23		旧河道2 上層	弥生土器	壺				外：ヘラミガキ，刺突文，平行沈線文 内：ヘラケズリ	やや密（3㎜以下の砂粒を少し含む）	外：白褐色 内：白褐色	古墳後期	
－24		旧河道2 上層	弥生土器	甕				外：ハケメ，波状文，平行沈線文 内：ヘラケズリ	やや密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：灰褐色 内：淡灰褐色	古墳後期	
－25		旧河道2 上層	弥生土器	甕				外：ヘラミガキ後平行沈線文，刺突文 内：ヘラケズリ	やや粗（0.5～1㎜大の砂粒を多く含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	古墳後期	赤色顔料付着
－26		旧河道2 上層	弥生土器	壺			5.4	外：ヘラミガキ 内：ナデ	やや粗（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：灰褐色 内：暗黄褐色	古墳後期	
64－1	56	旧河道2 下層	弥生土器	甕		16.4		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：灰褐色 内：灰褐色	草田2期	
－2		旧河道2 下層	弥生土器	甕		16.8		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（0.5～2㎜大の砂粒を多く含む）	外：暗灰褐色 内：暗灰褐色	草田2期	
－3	56	旧河道2 下層	弥生土器	甕		19.6		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：灰褐色 内：灰褐色	草田2期	
－4	56	旧河道2 下層	弥生土器	甕				外：ヘラミガキ，刺突文 内：ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：暗橙褐色 内：暗橙褐色	草田2期	
－5	56	旧河道2	弥生土器	壺			5.4	外：ナデ，ハケメ 内：ナデ	密（1㎜大の砂粒を少し含む）	外：灰褐色 内：灰褐色	草田2期	
－6	56	旧河道2 下層	弥生土器	壺		16.6		外：ヘラミガキ，ヘラミガキ後平行沈線文 内：ヘラケズリ，ヘラミガキ	やや粗（0.5～3㎜大の砂粒を多く含む）	外：（煤付着） 内：淡黄褐色	草田2期	
－7	56	旧河道2 下層	弥生土器	壺		(13.2)		外：ヨコナデ，ヘラミガキ 内：ヨコナデ，ナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田2期	
－8	56	旧河道2 下層	弥生土器	蓋				外：ヨコナデ，ヘラミガキ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	草田2期	1対の円孔
－9		旧河道2	弥生土器	高坏		20.0		外：ヨコナデ，ハケメ後ナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ後ヘラミガキ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：（煤付着） 内：白褐色	草田2期	
－10	56	旧河道2 下層	弥生土器	器台		20.4		外：ヘラミガキ，平行沈線文 内：ヘラミガキ	密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：暗白褐色 内：淡灰褐色	草田2期	
－11	56	旧河道2 下層	弥生土器	高坏	22.1	24.2	15.0	外：ヨコナデ，ヘラミガキ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ，ヘラミガキ	やや粗（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡灰褐色～白褐色 内：白褐色	草田2期	

木器

挿図番号	写真	出土地点	器種	長(L)	幅(W)	厚(T)	径(D)	高(H)	木取り	樹種	備考
27	36	SE01	井戸枠			8.8	最長径 74.0 最短径 64.2	(74.4)		バラ科サクラ属	漆付着
58－1	54	旧河道1 B－5 3層	天秤棒	233.5	6.0	4.0			板目	スギ科スギ属スギ	
－2	54	旧河道1 A－0，1	小型容器	9.6	8.2			4.6	横木取	クスノキ科タブノキ属	
－3	54	旧河道1 B－5 3層	柄	(46.6)	2.6	1.9			柾目	クロウメモドキ科ケンポナシ属ケンポナシ	
－4	54	旧河道1 B－5 下層	鍬子？	(36.8)	12.2	6.6			柾目	スギ科スギ属スギ	裏面焼け焦げ
－5	54	旧河道1 B－5 3層	原材	51.8	20.9	7.6			柾目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
65－1	57	旧河道2 C－1	刳物桶	22.3	(4.3)	2.5			竪木取	スギ科スギ属スギ	
－2	57	旧河道2 C－1	桶底板	(23.6)	(7.0)	1.0			板目	スギ科スギ属スギ	
－3	57	旧河道2 C－1	桶？	(27.8)	10.0	1.7			柾目	スギ科スギ属スギ	
－4	57	旧河道2 下層	四足盤	33.6	(10.3)			14.0	横木取	スギ科スギ属スギ	焼け焦げ
－5	58	旧河道2 C－1	釣瓶	22.8	(7.0)			4.6	横木取	スギ科スギ属スギ	

木器

挿図番号	写真	出土地点	器種	長(L)	幅(W)	厚(T)	径(D)	高(H)	木取り	樹種	備考
66－1	57	旧河道2　C－1	鍬	(31.5)	(12.5)	2.5			板目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	焼け焦げ
－2	57	旧河道2　C－1	泥除	(7.1)	(18.3)	1.1			板目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	裏面焼け焦げ
－3	58	旧河道2　下層	箱側板？	44.8	(8.8)	1.1			柾目	スギ科スギ属スギ	
－4		旧河道2　下層	板材	24.4	(9.0)	1.0			板目	スギ科スギ属スギ	焼け焦げ
－5	57	旧河道2　C－1	腰掛脚板	(16.0)	(10.1)	3.0			柾目	スギ科スギ属スギ	
－6	57	旧河道2　C－1	部材	(18.5)	2.0	1.6			板目	スギ科スギ属スギ	焼け焦げ
－7	58	旧河道2　C－1	矢板	(67.1)	7.3	1.5			板目	スギ科スギ属スギ	

石器・鉄器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	長	幅	厚	重量	石材	備考
11－7	32	ＳＤ07	石器	石鏃？	19.4	6.0	2.9	396.1	貢岩	
15－20	33	ＳＢ04～07周辺ピット	石器	砥石	9.5	8.2	7.9	598.5	不明	
57－1	53	旧河道1　Ｂ－5　2層	石製品	紡錘車	4.0	1.6	0.8	35.7	蛇紋岩	
－2	53	旧河道1　Ｂ－2	石製品	紡錘車			2.7	(11.6)	凝灰岩	
－3	53	旧河道1　Ａ－3，Ｂ－3	石製品	紡錘車	4.9	4.9	2.6	(546.3)	凝灰岩	
－4	53	旧河道1　Ｂ－0　4層	石製品	勾玉	2.5	1.8	1.0	7.3	瑪瑙	明茶褐色
－5	53	旧河道1　Ｂ－1　土器溜まり	石製品	勾玉	2.9	1.7	0.8	5.1	瑪瑙	黒茶色～白色
－6	53	旧河道1　丘陵上　北壁付近	石製品	勾玉	2.0	1.1	0.5	1.3	瑪瑙	明茶褐色
－7		旧河道1　Ａ－3	石器	石鏃	1.9	1.4	0.5	1.0	黒曜石	
－8		旧河道1　Ｂ－0	石器	砥石	7.7	5.2	2.0	79.3	凝灰岩	
－9		旧河道1　Ａ－3，Ｂ－3	石器	敲石	8.1	8.3	4.1	411.8	不明	
－10	53	旧河道1　Ｂ－5	石器	内磨き砥石	8.0	3.0	1.0	38.7	結晶片岩	
－11		旧河道1　Ｂ－1	石器	砥石	11.5	6.7	3.5	452.0	不明	
－12		旧河道1　Ｂ－1	石器	砥石	15.7	12.0	3.5	788.9	凝灰岩	
－13		旧河道1　Ｃ－5	鉄器	不明	24.6	2.3	1.8			
63		旧河道2　Ｃ－1	石器	敲石	8.1	8.4	5.6	574.5	不明	

Ⅱ区　土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
70－1	79	Ⅱ－1区　第Ⅰ層	土師器	甕		21.0		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田6～7期	
－2	79	Ⅱ－1区　第Ⅰ層	土師器	壺		16.1		外：ナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡褐色 内：淡褐色		
－3	79	Ⅱ－1区　第Ⅰ層	弥生土器	脚付壺				外：平行沈線文，刺突文 内：ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：淡乳褐色 内：乳褐色	草田2期	
－4	79	Ⅱ－1区　第Ⅰ層	弥生土器	脚付壺				外：平行沈線文、刺突文 内：ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：淡黄褐色 内：淡乳褐色	草田2期	
－5	79	Ⅱ－1区　第Ⅰ層	土師器	低脚付杯			8.0	外：ヨコナデ 内：ケズリ，ハケメ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡白褐色 内：淡乳褐色		
－6	79	Ⅱ－1区　第Ⅰ層	土製品	手捏土器		6.3	4.2	外：ナデ，指頭圧痕 内：ナデ	密	外：赤褐色 内：黄褐色		
－7	79	Ⅱ－1区　第Ⅰ層	土師器	高杯（脚部）		10.0		外：ナデ 内：ナデ，シボリ	3㎜以下の砂粒少量含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	松山Ⅱ～Ⅲ期	
－8	79	Ⅱ－1区　第Ⅰ層	須恵器	坏		9.3		外：回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデのちナデ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：青灰色 内：青灰色	大谷6期	歪みが著しい　ヘラ記号「×」
－9	79	Ⅱ－1区　第Ⅰ層	須恵器	甕				外：波状文，沈線 内：ナデ	2㎜以下の砂粒少量含む	外：青灰色 内：青灰色		
71－1	67	Ⅱ－1区　第Ⅱ層	弥生土器	甕		16.2		外：凹線，ヨコナデ，ヘラミガキ 内：ヨコナデ，ケズリ	1㎜以下の砂粒含む	外：黒色 内：灰褐色	草田2期	
－2	67	Ⅱ－1区　第Ⅱ層	弥生土器	甕		16.3		外：ヨコナデ，凹線，ハケメ 内：ナデ	2㎜以下の砂粒含む	外：暗黒灰色 内：淡茶褐色	草田2期	
－3	67	Ⅱ－1区　第Ⅱ層	弥生土器	甕		20.6		外：平行沈線文，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：淡茶褐色 内：暗茶褐色	草田2期	
－4	67	Ⅱ－1区　第Ⅱ層	弥生土器	甕		16.1		外：凹線，ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：暗茶褐色 内：黄茶褐色	草田2期	
－5	67	Ⅱ－1区　第Ⅱ層	弥生土器	甕		14.9		外：平行沈線文，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ケズリ	2㎜以下の砂粒含む	外：黄灰色 内：黄灰色	草田2期	煤付着
－6	67	Ⅱ－1区　第Ⅱ層	弥生土器	甕		18.4		外：凹線，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラミガキ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：暗黒褐色 内：黄灰色	草田2期	
－7	67	Ⅱ－1区　第Ⅱ層	弥生土器	甕		25.6		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の白砂少量含む	外：暗茶褐色 内：茶褐色	草田2期	
－8	67	Ⅱ－1区　第Ⅱ層	弥生土器	甕		23.4		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の白砂多く含む	外：暗灰色 内：暗灰色	草田2期	
－9	67	Ⅱ－1区　第Ⅱ層	弥生土器	甕		18.5		外：平行沈線文，ヨコナデ，刺突文 内：ヨコナデ，ケズリ	2㎜以下の砂粒含む	外：黒灰色 内：黒灰色	草田2期	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
71－10	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	甕		20.6		外：平行沈線文，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：薄茶褐色 内：薄灰褐色	草田2期	
－11	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	甕		16.8		外：平行沈線文，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色	草田3期	
－12	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	甕		23.0		外：平行沈線文，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田3期	
－13	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	土師器	甕		15.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒含む	外：淡白灰色 内：淡白灰色	草田6～7期	
－14	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	土師器	甕		16.6		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒含む	外：暗黒灰色 内：淡茶褐色	草田6～7期	
－15	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	土師器	甕		18.1		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	3㎜以下の砂粒含む	外：暗黒灰色 内：淡茶褐色	草田6～7期	
－16	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	甕				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色		
－17	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	甕				外：沈線，刺突文 内：ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：黒褐色 内：暗灰褐色		
－18	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	甕				外：ヨコナデ，波状文 内：ヨコナデ	3㎜ほどの砂粒少量含む	外：黒褐色 内：暗茶褐色		
－19	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	甕				外：羽状文 内：ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		
－20	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	甕				外：沈線，刺突文 内：ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡灰褐色 内：灰褐色		
－21	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	甕				外：刺突文，沈線 内：ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：黒褐色 内：暗灰褐色		
－22	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	甕				外：刺突文，沈線 内：ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：黒色 内：灰褐色		
－23	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	壺				外：沈線，刺突文，竹管文 内：ナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色		
－24	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	甕				外：刺突文 内：ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：黒色 内：暗茶褐色		
－25	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	壺				外：タテ方向のハケメのち凹線 内：ヨコナデ	密	外：淡灰色 内：淡灰褐色		吉備系
－26	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	甕				外：ナデ？　指頭圧痕文帯 内：ナデ？	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	Ⅳ－1～2	
－27	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	土師器	甕		19.2		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	3㎜以下の砂粒含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		
－28	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	土師器	甕		16.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色		
－29	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	土師器	甕				外：ナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色		
－30	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	壺か甕底部			9.4	外：ナデ 内：ナデ，ハケメ	3㎜以下の砂粒多く含む	外：黄褐色 内：黄褐色		
－31	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	甕（底部）			5.6	外：ナデ 内：ヘラケズリ	0.5㎜以下の砂粒少量含む	外：黒灰褐色 内：黒灰褐色		
－32	67	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	土師器	甕		14.6		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒含む	外：暗黒褐色 内：淡茶褐色		
72－1	68	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	高坏		16.4		外：凹線，ミガキ 内：ヨコナデ，ミガキ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：薄茶褐色 内：薄茶褐色	草田2期	
－2	68	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	高坏		15.7		外：凹線，ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	1㎜以下の砂粒含む	外：黒褐色 内：黒褐色	草田2期	
－3	68	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	高坏		20.8		外：平行沈線文 内：ヨコナデ	1㎜以下の砂粒含む	外：淡茶褐色 内：暗茶褐色	草田2期	
－4	68	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	器台		21.8		外：凹線，ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	2㎜以下の砂粒含む	外：灰褐色 内：灰褐色	草田2期	
－5	68	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	器台			14.2	外：ヘラミガキ，平行沈線文 内：指頭圧痕，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡茶褐色 内：茶褐色	草田2期	内外面に赤色顔料付着
－6	68	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	高坏		18.6		外：平行沈線文，ヘラミガキ 内：ナデ，ヘラミガキ	1㎜以下の砂粒含む	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	草田3期	
－7	68	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	土師器	高坏		16.4		外：ヨコナデ，ヘラミガキ 内：ヨコナデ，ヘラミガキ	5㎜ほどの石少量含む	外：暗茶褐色 内：暗茶褐色	草田3期	
－8	68	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	土師器	高坏		17.0		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	2㎜以下の白砂少量含む	外：薄乳褐色 内：薄乳褐色		
－9	68	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	高坏（脚部）			15.9	外：指頭圧痕，ヨコナデ 内：ヘラケズリ，ヨコナデ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：白褐色 内：茶褐色		
－10	68	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	長頸壺		12.7		外：ヘラミガキ 内：ハケメ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：乳白色 内：乳白色	草田3期	
－11	68	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	土師器	小型丸底壺				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色	松山Ⅱ期	
－12	68	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	須恵器	高坏（脚部）			9.8	外：ヘラミガキ 内：ヘラケズリ，ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：暗灰褐色 内：暗灰褐色	松山2～3期	
－13	68	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	脚付装飾壺（胴部）				外：平行沈線文，爪形文，スタンプ文 内：ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：黄褐色 内：淡暗灰色	草田2期	脚部と同一個体か
－13	68	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	脚付装飾壺（脚部）			7.4	外：平行沈線文，ハケメ，ヨコナデ 内：ヘラケズリ，ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：乳白色 内：淡灰色	草田2期	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
72－14	68	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	弥生土器	注口土器か（把手）				外：ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：乳褐色		
－15	68	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	土師器	鍋（把手）				外：ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：淡黄褐色		
74－1	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	弥生土器	壺		15.9		外：凹線，ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒含む	外：淡褐色 内：淡褐色	草田2期	
－2	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	弥生土器	甕		15.4		外：平行沈線文，ヨコナデ，波状文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒含む	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色	草田2期	
－3	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	弥生土器	甕		15.3		外：凹線，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：暗黒褐色 内：淡茶褐色	草田2期	
－4	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	弥生土器	甕		16.0		外：凹線，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：茶褐色 内：茶褐色	草田2期	
－5	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	弥生土器	甕		27.6		外：平行沈線文，ナデ 内：ナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田2期	
－6	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	弥生土器	甕		16.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：暗黒褐色 内：灰褐色	草田4～5期	
－7	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	弥生土器	甕		14.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：薄黄褐色 内：薄黄褐色	草田4～5期	
－8	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	弥生土器	甕		22.9		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：薄乳褐色 内：薄乳褐色	草田4～5期	
－9	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	弥生土器	高杯（杯部）		15.6		外：凹線，ヨコナデ 内：ヨコナデ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：黒褐色 内：暗茶褐色	草田2期	
－10	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	弥生土器	鼓型器台		16.7		外：平行沈線文，ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	2㎜以下の砂粒含む	外：黄灰色 内：黄灰色	草田2期	
－11	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	弥生土器	甕			2.4	外：ヘラミガキ，ヨコナデ 内：ヨコナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色		
－12	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	弥生土器	甕（底部）			5.4	外：ハケメ，ナデ 内：ナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：暗灰褐色 内：茶褐色		
－13	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	弥生土器	高杯（脚部）			14.4	外：平行沈線文，ミガキ 内：ミガキ，ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：灰褐色 内：灰褐色	草田2期	
－14	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	弥生土器	高杯？		20.9		外：凹線，ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：暗茶褐色 内：薄乳褐色	草田1期	
－15	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	弥生土器	短頸壺		13.3		外：ナデ 内：ナデ，ヘラケズリ	3㎜以下の砂粒多く含む	外：薄乳褐色 内：薄乳褐色		
－16	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	土師器	甕		18.2		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ，ハケメ	2㎜以下の砂粒少量含む	外：灰褐色 内：灰褐色		
－17	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	弥生土器	低脚杯		13.0		外：ヨコナデ 内：ヘラミガキ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡乳褐色 内：暗灰褐色	草田3期	
－18	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	土師器	埦		15.6		外：ヨコナデ 内：ヘラミガキ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：茶褐色 内：茶褐色		
－19	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	土師器	甕		15.8		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：黄褐色 内：黄褐色		
－20	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	土製品	土製支脚				外：ナデ 内：ナデ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色		貫通する穿孔アリ
－21	69	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	須恵器	蓋杯		11.2		外：回転ナデ 内：	1㎜以下の砂粒含む	外：青灰色 内：青灰色	大谷4期	
－22	69	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	須恵器	蓋杯	4.9	14.0	2.8	外：回転ナデ 内：回転ナデ，不定ナデ	1㎜以下の白砂含む	外：青灰色 内：青灰色	大谷5期	自然釉付着
－23	69	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	須恵器	埦	4.2	11.2		外：ヨコナデ，回転糸切り 内：ヨコナデ	1㎜以下の砂粒含む	外：青灰色 内：青灰色		
－24	69	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	須恵器	腺				外：刺突文 ナデ 内：ヨコナデ	1㎜以下の砂粒含む	外：青灰色 内：青灰色		
78－1	71	Ⅱ－1区 第1しがらみ状遺構	弥生土器	壺		14.6		外：凹線，ヨコナデ，列点文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	7㎜以下の砂粒多く含む	外：淡灰色 内：淡灰色	草田2期	
－2	71	Ⅱ－1区 第1しがらみ状遺構	弥生土器	甕		19.0		外：凹線，ヘラ状工具による刺突文，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ，ミガキ	6㎜ほどの石少量含む	外：薄茶褐色 内：薄茶褐色	草田2期	
－3	71	Ⅱ－1区 第1しがらみ状遺構	弥生土器	甕		16.6		外：凹線，ナデ，ヘラ状工具による刺突文 内：ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：黒褐色 内：淡灰褐色	草田2期	
－4	71	Ⅱ－1区 第1しがらみ状遺構	弥生土器	甕		18.0		外：平行沈線文，ヨコナデ，刺突文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の白砂多く含む	外：淡乳灰色 内：淡乳灰色	草田2期	
－5	71	Ⅱ－1区 第1しがらみ状遺構	弥生土器	甕（胴部）				外：ハケメ 内：ハケメ	3㎜以下の砂粒少量含む	外：黒褐色 内：淡灰褐色		
－6	71	Ⅱ－1区 第1しがらみ状遺構	弥生土器	甕				外：凹線，ヨコナデ，ミガキ 内：ミガキ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色		内外面に赤色顔料付着
－7	71	Ⅱ－1区 第1しがらみ状遺構	弥生土器	器台		17.1		外：平行沈線文，ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡乳褐色 内：淡茶褐色	草田2期	
81－1	72	Ⅱ－1区 第2しがらみ状遺構	弥生土器	壺		14.0		外：平行沈線文，ヘラミガキ，刺突文 内：ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：暗茶褐色 内：暗茶褐色	草田2期	
－2	72	Ⅱ－1区 第2しがらみ状遺構	弥生土器	蓋		6.0		外：平行沈線文，ヨコナデ，ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	2㎜以下の砂粒含む	外：黒褐色 内：黒褐色	草田2期	穿孔あり
－3	71	Ⅱ－1区 第2しがらみ状遺構	弥生土器	注口土器（把手）				外：ナデ 内：	1㎜以下の砂粒含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色		
－4	72	Ⅱ－1区 第2しがらみ状遺構	弥生土器	甕		20.6		外：平行沈線文，ヨコナデ，刺突文 内：ナデ，ケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：橙褐色 内：橙褐色	草田2期	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
81－5	72	Ⅱ－1区 第2しがら み状遺構	弥生土器	甕		18.6		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	3㎜以下の砂粒含む	外：淡乳白色～暗灰色 内：淡乳白色～暗灰色	草田2期	
－6	72	Ⅱ－1区 第2しがら み状遺構	弥生土器	器台		17.0		外：平行沈線文，ヨコナデ，ヘラミガキ 内：ヨコナデ，ハケメ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：灰白色 内：灰白色	草田2期	
－7	71	Ⅱ－1区 第2しがら み状遺構	弥生土器	甕		13.7		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：薄白褐色 内：薄乳褐色	草田4～5期	
85－1	74	Ⅱ－1区 第3しがら み状遺構	弥生土器	甕		17.5		外：平行沈線文，ナデ，刺突文 内：ナデ，ヘラミガキ，ハケメ	2㎜以下の砂粒含む	外：黒灰色 内：淡灰色	草田2期	
－2	74	Ⅱ－1区 第3しがら み状遺構	弥生土器	甕				外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田2期	
－3	74	Ⅱ－1区 第3しがら み状遺構	弥生土器	甕		19.7		外：凹線，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	3㎜以下の砂粒多く含む	外：薄茶褐色 内：薄茶褐色	草田2期	
－4	74	Ⅱ－1区 第3しがら み状遺構	弥生土器	甕		17.4		外：平行沈線文，竹管文，刺突文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒少量含む	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	草田2期	
－5	74	Ⅱ－1区 第3しがら み状遺構	弥生土器	底部		4.4	23.0	外：ナデ 内：ナデ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡茶褐色 内：暗茶褐色		
92－1	78	Ⅱ－1区 SD02	弥生土器	短頸壺		13.9		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	3㎜以下の砂粒含む	外：薄茶褐色 内：薄茶褐色		
－2	78	Ⅱ－1区 SD02	弥生土器	壺		17.0		外：凹線，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ミガキ？	1㎜以下の砂粒少量含む	外：暗茶褐色 内：暗茶褐色	草田2期	
－3	78	Ⅱ－1区 SD02	弥生土器	甕		19.0		外：平行沈線文，ヨコナデ 内：ナデ，ケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡黄灰色 内：淡黄灰色	草田2期	
－4	78	Ⅱ－1区 SD02	弥生土器	甕		16.4		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：淡黄灰色 内：淡黄灰色	草田4～5期	
－5	78	Ⅱ－1区 SD02	弥生土器	甕		16.2		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡茶白色 内：淡茶白色	草田4～5期	
－6	78	Ⅱ－1区 SD02	弥生土器	底部			9.8	外：ヘラミガキ，ナデ 内：ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		
－7	78	Ⅱ－1区 SD02	土師器	甕		10.2		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の白砂多く含む	外：薄乳褐色 内：淡乳褐色		
93－1	78	Ⅱ－1区 第4しがら み状遺構	弥生土器	甕		22.3		外：凹線，ヨコナデ，刺突文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒含む	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色	草田2期	煤付着
－2	77	Ⅱ－1区 第4しがら み状遺構	弥生土器	甕		15.1		外：平行沈線文，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラミガキ，ケズリ	2㎜以下の砂粒含む	外：灰白色 内：灰白色	草田2期	
－3	77	Ⅱ－1区 第4しがら み状遺構	弥生土器	甕		13.8		外：平行沈線文，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の白砂多く含む	外：暗灰白色 内：灰白色	草田2期	
－4	77	Ⅱ－1区 第4しがら み状遺構	弥生土器	高坏		17.1		外：平行沈線文 内：	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色	草田2期か	風化著しい
100－1	80	Ⅱ－2区 第Ⅲ層	弥生土器	甕		19.8		外：平行沈線文，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田2期	
－2	80	Ⅱ－2区 第Ⅲ層	弥生土器	壺		16.0		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	3㎜以下の砂粒含む	外：黄褐色 内：黄褐色	草田2期	
－3	80	Ⅱ－2区 第Ⅲ層	弥生土器	鼓形器台（筒部）				外： 内：	2㎜以下の砂粒含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		風化著しい
－4	80	Ⅱ－2区 第Ⅲ層	弥生土器	壺				外： 内：	1㎜以下の砂粒含む	外：黄白色 内：黄白色		頸部に突帯あり 風化著しい
－5	80	Ⅱ－2区 第Ⅲ層	土師器	甕		19.5		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色		
－6	80	Ⅱ－2区 第Ⅱ層	土師器	高坏		17.4		外： 内：	2㎜以下の砂粒含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色	松山Ⅰ期	風化著しい
－7	80	Ⅱ－2区 第Ⅱ層	土師器	高坏	10.7	17.6	10.6	外：ハケメ 内：	1㎜以下の砂粒含む	外：淡黄白色 内：淡黄白色		赤色顔料付着　風化著しい
－8	80	Ⅱ－2区 第Ⅱ層	土師器	甕		18.0		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：薄乳褐色 内：薄乳褐色		
－9	80	Ⅱ－2区 第Ⅱ層	土師器	鉢		14.2		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒含む	外：明褐色 内：明褐色		
－10	80	Ⅱ－2区 第Ⅲ層	土師器	埦		16.6		外： 内：ナデ	1㎜以下の砂粒含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		内面に赤色顔料付着
－11	80	Ⅱ－2区 第Ⅲ層	須恵器	蓋杯		12.0		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	外：青灰色 内：青灰色	大谷5期	自然釉付着
－12	80	Ⅱ－2区 第Ⅲ層	須恵器	坏蓋	3.8	3.6	8.8	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：青灰色 内：青灰色	大谷6期	
－13	80	Ⅱ－2区 第Ⅲ層	須恵器	高坏（脚部）			8.8	外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：青灰色 内：青灰色		
－14	80	Ⅱ－2区 第Ⅲ層	須恵器	高坏（脚部）				外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒含む	外：青灰色 内：青灰色	大谷5～6期	
－15	80	Ⅱ－2区 第Ⅲ層	須恵器	甕				外：回転ナデ，波状文 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：青灰色 内：青灰色		
102－1	79	Ⅱ－2区 旧河道2	弥生土器	甕		14.4		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡桃褐色 内：淡桃褐色	草田4～5期	風化著しい
－2	79	Ⅱ－2区 旧河道2	土師器	甕		14.2		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒含む	外：黄灰色 内：黄灰色		

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
102－3	79	Ⅱ－2区 旧河道2	土師器	甑か		32.4		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：薄乳褐色 内：薄乳褐色		
－4	79	Ⅱ－2区 旧河道2	土師器	甕		23.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	3㎜以下の砂粒多く含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色		
－5	79	Ⅱ－2区 旧河道2	土師器	低脚杯（脚部）			6.3	外：ハケメ 内：ハケメ，ナデ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色		
－6	79	Ⅱ－2区 旧河道2	土師器	器台				外： 内：指頭圧痕，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		風化著しい
－7	79	Ⅱ－2区 旧河道2	土師器	塊		10.7		外： 内：	1㎜以下の砂粒少量含む	外：淡黄褐色 内：淡乳褐色		風化著しい
－8	79	Ⅱ－2区 旧河道2	土師器	高杯			14.0	外：ヘラミガキ，ナデ 内：ヘラミガキ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：赤褐色 内：赤褐色	松山Ⅱ～Ⅲ期	
－9	79	Ⅱ－2区 旧河道2	土師器	土製支脚				外：ナデ 内：	1㎜以下の砂粒少量含む	外：淡黄灰色 内：淡黄灰色		貫通しない穿孔アリ
－10	79	Ⅱ－2区 旧河道2	土師器	竈				外：ナデ 内：ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色		
－11	79	Ⅱ－2区 旧河道2	土師器	竈				外：ナデ 内：ナデ	1㎜以下の砂粒含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色		
－12	79	Ⅱ－2区 旧河道2	土師器	甑（把手）				外：ナデ 内：	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡黄灰色 内：淡黄灰色		
－13	79	Ⅱ－2区 旧河道2	須恵器	蓋杯	4.4	12.4		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：青灰色 内：青灰色	大谷5期	自然釉付着
－14	79	Ⅱ－2区 旧河道2	須恵器	蓋杯		9.4		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：青灰色 内：青灰色	大谷5期	
－15	79	Ⅱ－2区 旧河道2	須恵器	蓋杯		6.7		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：青灰色 内：青灰色	大谷5期	
－16	79	Ⅱ－2区 旧河道2	須恵器	塊				外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	2㎜以下の砂粒少量含む	外：灰褐色 内：灰褐色		
－17	79	Ⅱ－2区 旧河道2	須恵器	長頸壺		6.9		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒含む	外：青灰色 内：青灰色		
－18	79	Ⅱ－2区 旧河道2	須恵器	高杯			9.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ，2方方形透かし	2㎜以下の砂粒少量含む	外：青灰色 内：青灰色	大谷4～5期	
－19	79	Ⅱ－2区 旧河道2	須恵器	高杯				外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ，切れ目透かし	1㎜以下の白砂含む	外：明灰白色 内：明灰白色	大谷4～5期	
－20	79	Ⅱ－2区 旧河道2	須恵器	甕				外：格子タタキ，カキメ 内：同心円タタキ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：青灰色 内：青灰色		
－21	79	Ⅱ－2区 旧河道2	須恵器	甕				外：回転ナデ，カキメ 内：同心円タタキ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：青灰色 内：青灰色		
－23	80	Ⅱ－2区 旧河道3	弥生土器	壺		16.1		外：平行沈線文，波状文，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田2期	風化著しい
－24	80	Ⅱ－2区 旧河道3	土師器	手捏土器				外：ナデ 内：ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		
－25	80	Ⅱ－2区 旧河道3	須恵器	坏蓋				外：ヘラケズリ 内：回転ナデ	1㎜以下の白砂含む	外：青灰色 内：青灰色		

木器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	長(L)	幅(W)	厚(T)	高(H)	木取り	樹種	備考
72－16	70	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	木製品	盤	23.0	5.5	1.1		柾目	スギ科スギ属スギ	
－17	70	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	木製品	火きり杵	14.8	1.3	1.1		柾目	スギ科スギ属スギ	
－18	70	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	木製品	皮紐	2.5	2.2	0.1			サクラｏｒカバの樹皮	
75－1	70	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	木製品	不明	26.5	2.3	1.4		柾目	スギ科スギ属スギ	
－2	70	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	木製品	容器蓋	7.8	2.3	0.7	1.8	柾目	スギ科スギ属スギ	
－3	70	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	木製品	皮紐	4.2	2.5	0.1			サクラｏｒカバの樹皮	
79－1	71･72	Ⅱ－1区 第1しがらみ状遺構	木製品	四脚盤	38.9	25.8	2.2	9.8	板目	スギ科スギ属スギ	
－2	72	Ⅱ－1区 第1しがらみ状遺構	木製品	不明（円盤状木器）	6.2	5.5	0.6		板目	スギ科スギ属スギ	
82－1	72･73	Ⅱ－1区 第1しがらみ状遺構	木製品	鋤	14.5	8.4	1.3		板目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
－2	73	Ⅱ－1区 第1しがらみ状遺構	木製品	柄	66.1	3.4	3.3		柾目	ブナ科シイ	
－3	73	Ⅱ－1区 第1しがらみ状遺構	木製品	鎌柄	34.2	4.4	2.3		柾目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
－4	73	Ⅱ－1区 第1しがらみ状遺構	木製品	斧柄	49.6	6.1	2.7		柾目	ツバキ科サカキ属サカキ	
－5	72･73	Ⅱ－1区 第1しがらみ状遺構	木製品	刳物桶	25.1	21.4	4.0		竪木地	スギ科スギ属スギ	
83－1	74	Ⅱ－1区 第2しがらみ状遺構	木製品	杭	84.1	6.5	6.5			マツ科モミ属	半分が燃えている。
－2	73	Ⅱ－1区 第2しがらみ状遺構	木製品	樋	61.2	14.8	4.0		板目	スギ科スギ属スギ	
－3	74	Ⅱ－1区 第2しがらみ状遺構	木製品	用途不明	93.5	3.0	2.5		柾目	スギ科スギ属スギ	

木器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	長(L)	幅(W)	厚(T)	高(H)	木取り	樹種	備考
86－1	75	Ⅱ－1区 第3しがらみ状遺構	木製品	容器蓋	20.1	3.8	1.1		柾目	スギ科スギ属スギ	外面に赤色顔料が残る
－2	75	Ⅱ－1区 第3しがらみ状遺構	木製品	刳物桶	13.8	7.8	1.3		竪木地	スギ科スギ属スギ	
－3	75	Ⅱ－1区 第3しがらみ状遺構	木製品	不明	11.1	2.3	1.9		柾目	ツバキ科ツバキ属	
－4	75	Ⅱ－1区 第3しがらみ状遺構	木製品	槽脚部	7.7	6.9	2.3		柾目	スギ科スギ属スギ	
－5	75	Ⅱ－1区 第3しがらみ状遺構	木製品	楔	27.1	6.2	2.8		板目	イイギリ科イイギリ属イイギリ	
－6	75	Ⅱ－1区 第3しがらみ状遺構	木製品	楔	35.5	5.8	2.9		板目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
－7	74	Ⅱ－1区 第3しがらみ状遺構	木製品	天秤棒か	33.2	2.5	2.2		柾目	マツ科モミ属	
－8	74	Ⅱ－1区 第3しがらみ状遺構	木製品	火きり杵か	43.9	1.1	1.0		柾目	スギ科スギ属スギ	
－9	75	Ⅱ－1区 第3しがらみ状遺構	木製品	狭鍬	29.7	8.5	1.7		板目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	表面の大半が焼け焦げている
87－1	75·76	Ⅱ－1区 第3しがらみ状遺構	木製品	平鋤	48.5	16.2	1.6		柾目	スギ科スギ属スギ	
－2	75·76	Ⅱ－1区 第3しがらみ状遺構	木製品	泥除未成品	53.4	21.0	2.8		柾目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
－3	76	Ⅱ－1区 第3しがらみ状遺構	木製品	腰掛	46.6	19.1	2.5		板目	ヒノキ科ヒノキ属	
－4	76	Ⅱ－1区 第3しがらみ状遺構	木製品	腰掛脚部	19.7	4.2	2.9		柾目	ヒノキ科ヒノキ属	
－5	76	Ⅱ－1区 第3しがらみ状遺構	木製品	杭	51.5	7.9	4.5		板目	ブナ科シイ属	
88－1	76	Ⅱ－1区 第3しがらみ状遺構	木製品	部材	228.2	14.1	8.2			ヒノキ科アスナロ属	
94－1	77	Ⅱ－1区 第4しがらみ状遺構	木製品	泥除	19.8	19.5	0.8		柾目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
－2	77	Ⅱ－1区 第4しがらみ状遺構	木製品	不明（部材）	21.3	2.0	1.4		柾目	スギ科スギ属スギ	
－3	77	Ⅱ－1区 第4しがらみ状遺構	木製品	杓子状木器	22.6	7.4	1.4		柾目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
－4	77	Ⅱ－1区 第4しがらみ状遺構	木製品	不明板状木器	11.5	11.7	1.4		柾目	スギ科スギ属スギ	
－5	77	Ⅱ－1区 第4しがらみ状遺構	木製品	槽	59.7	15.5	3.9		板目	スギ科スギ属スギ	
－6	73	Ⅱ－1区 第4しがらみ状遺構	木製品	柄（用途不明）	78.1	2.9	2.4		柾目	ヒノキ科ヒノキ属	
95－1	78	Ⅱ－1区 第4しがらみ状遺構	木製品	小型材（すだれ状木器）	52.4	1.5	0.9		柾目	ヒノキ科ヒノキ属	
－2	78	Ⅱ－1区 第4しがらみ状遺構	木製品	小型材（すだれ状木器）	48.4	1.6	0.9		柾目	ヒノキ科ヒノキ属	
－3	78	Ⅱ－1区 第4しがらみ状遺構	木製品	小型材（すだれ状木器）	47.5	1.3	0.8		柾目	ヒノキ科ヒノキ属	
－4	78	Ⅱ－1区 第4しがらみ状遺構	木製品	小型材（すだれ状木器）	54.5	1.8	0.8		柾目	ヒノキ科ヒノキ属	
－5	78	Ⅱ－1区 第4しがらみ状遺構	木製品	小型材（すだれ状木器）	57.8	1.0	1.1		柾目	ヒノキ科ヒノキ属	
－6	78	Ⅱ－1区 第4しがらみ状遺構	木製品	小型材（すだれ状木器）	78.3	1.2	0.9		柾目	ヒノキ科ヒノキ属	

石器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	遺存状況	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
73－1	70	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	石器	石鏃	一部欠損	1.7	1.3	0.2	0.50	黒曜石	
－2	70	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	石器	刃器	完形	8.6	6.5	1.3	73.80	黒曜石	
－3	70	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	石器	刃器	完形	5.6	8.2	1.6	77.55	黒曜石	
－4	70	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	石器	砥石	完形	5.5	5.3	2.7	141.14		
－5	69	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	石器	砥石	完形	6.5	7.0	3.9	231.45		
－6	69	Ⅱ－1区 第Ⅱ層	石器	砥石	完形	8.9	9.4	8.5	834.50		
76－1	70	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	石器	石鏃	完形	2.3	1.6	0.4	1.12	サヌカイト	
－2	70	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	石器	二次加工品	完形	5.3	1.5	0.6	6.22	黒曜石	
－3	70	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	石器	刃器	完形	7.8	6.0	1.4	49.79		
－4	70	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	石器	刃器か	完形	4.4	3.2	0.4	6.41		
－5	69	Ⅱ－1区 第Ⅲ層	石器	磨製石斧	完形	15.0	5.7	4.9	595.59		
－22	70	Ⅱ区－2 旧河道2	石器	刃器	完形	2.6	3.1	0.6	4.82	黒曜石	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
107－1	85	旧河道	弥生土器	甕		26.0		外：平行沈線文，ナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	粗（最大径5㎜以下の砂粒多く含む）	外：乳白色 内：乳白色	草田2期	
－2	85	旧河道	弥生土器	甕		20.3		外：平行沈線文，ヨコナデ 内：ヨコナデ？ヘラケズリ？	粗（最大径3.5㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡茶褐色 内：淡肌色	草田2期	
－3	85	旧河道	弥生土器	甕		16.5		外：ヨコナデ，口縁部平行沈線文を施した後上半分をナデ消し 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（最大径3㎜以下の砂粒を多少含む）	外：淡肌色 内：淡肌色	草田2期	
－4	85	旧河道	弥生土器	甕				外：貝殻腹縁による平行沈線文，ヨコナデ 内：ミガキ，ヨコナデ	やや密（最大径3㎜以下の砂粒少し含む）	外：黒褐色 内：淡黄褐色	草田3期	
－5	85	旧河道	弥生土器	甕		23.0		外：ヨコナデ，波状文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（最大径3㎜以下の砂粒をやや多く含む）	外：乳白色 内：乳白色	草田5期	
－6	85	旧河道	弥生土器	甕		15.8		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ？	粗（最大径4㎜以下の砂粒多く含む）	外：淡黄灰色 内：淡赤灰色	草田2期	
－7	85	旧河道	弥生土器	甕		16.3		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（2㎜以下の砂粒を多少含む）	外：淡肌色 内：淡肌色	草田5期	
－8	85	旧河道	弥生土器	底部			8.5	外： 内：	粗（最大径3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：赤褐色 内：暗褐色	Ⅰ～Ⅱ様式	
110－1	85	加工段1	須恵器	埦				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	8ｃ中葉～後半	
112－1	85・86	柱穴列2－P2	須恵器	埦	4.0	12.4		外：回転ナデ，ヘラ切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：灰白色 内：灰白色	7ｃ中葉～末	
－2	85	柱穴列2－P2	須恵器	高台付埦			8.4	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（長石，石英など2㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	7ｃ中葉～末	
114－1	86	加工段2	須恵器	埦	4.7	11.8	7.2	外：回転ナデ，糸切後ナデもしくは摩滅 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：灰白色 内：灰白色	8ｃ中葉～後半	
－2	86	加工段2	須恵器	皿	2.2	13.5	10.6	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（長石など1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：暗青灰色 内：暗青灰色～赤褐色	8ｃ中葉～9ｃ前半	
－3	86	加工段2	須恵器	高台付皿			12	外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（長石など1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡灰色 内：淡灰色	8ｃ中葉～後半	
－4	86	加工段2	須恵器	壷			7.6	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	外：灰褐色 内：灰褐色	8ｃ中葉～後半	
115－1	86	SK01	弥生土器	甕		23.6		外：ヨコナデ，ハケメ，ヘラ状工具による刺突 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密（長石，石英など2㎜以下の砂礫少し含む，4㎜位のものも僅かに含む）	外：明茶褐色 内：明茶褐色	草田6期	
116－1		SK02	弥生土器	甕				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密（1㎜程の砂粒をごく僅かに含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	草田5期	
117－1	85	SX01	須恵器	埦				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色		
－2	85	SX01	須恵器	埦			7.6	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ	やや粗（2㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色		
－3	85	SX01	須恵器	甕				外：平行タタキ 内：当て具痕	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：灰色 内：灰色		
118－1	85	丘陵裾平坦面遺物包含層	弥生土器	甕		18.0		外：凹線，ヨコナデ 内：ヨコナデ？，ヘラケズリ？	粗（最大径2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色	草田1期	
－2	87	丘陵裾平坦面遺物包含層	須恵器	蓋	2.9	13.8		外：回転ナデ，右回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（最大径2㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	7ｃ中葉～末	輪状つまみ
－3	87	丘陵裾平坦面遺物包含層	須恵器	蓋	3.1	17.0		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：青灰色 内：青灰色	7c末～8ｃ中葉	輪状つまみ
－4	86	丘陵裾平坦面遺物包含層	須恵器	坏身	3.4	11.3		外：回転ナデ，ヘラ起こし 内：回転ナデ	密（1㎜以下の砂粒ごく僅かに含む）	外：灰白色 内：灰白色	大谷6期	
－5	87	丘陵裾平坦面遺物包含層	須恵器	高台付埦	4.4	15.3		外：回転ナデ，ヘラ起こし 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1㎜程の砂粒ごく僅かに含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	7ｃ中葉～末	
－6	86		須恵器	高台付皿	3.4	21.0		外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（最大径2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ中葉～9ｃ前半	
－7	86	丘陵裾平坦面遺物包含層	須恵器	高坏		12.6		外：回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（最大径3㎜以下の砂粒を多少含む）	外：暗青灰色 内：暗青灰色	大谷5期～	
－8		丘陵裾平坦面遺物包含層	須恵器	高坏			10.5	外：回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密	外：暗青灰色 内：暗青灰色	大谷5期～	2方透かし
－9	87	丘陵裾平坦面遺物包含層	須恵器	壷			6.9	外：右回転ナデ，右回転ヘラケズリ 内：右回転ナデ	密	外：淡青灰色 内：淡青灰色		ヘラ記号「＊」
－10	86	丘陵裾平坦面遺物包含層	須恵器	甕				外：平行タタキ 内：放射状当て具痕	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	9ｃ中葉～	
－11	86	丘陵裾平坦面遺物包含層	須恵器	壷		9.2		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（長石など0.5㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色		

石器・鉄器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	長	幅	厚	重量	石材	備考
118－12	87	耕作土	鉄製品	釘	26.0	3.4	2.5	271.3		
－13	87	耕作土		鉄滓（鍛冶滓）	7.6	7.8	3.6	237.0		
－14	87	耕作土	石器	スクレイパー	5.0	3.7	1.3	16.4	黒曜石	
－15	87	排土中	石器	スクレイパー	8.0	4.3	1.6	30.9	黒曜石	

Ⅴ区　土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
123－1	109	ＳＩ01上層	須恵器	蓋	2.95	9.0		外：回転ナデ，右回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密（2㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷６期	擬宝珠つまみ
－2	109	ＳＩ01上層	須恵器	壺	12.0	10.6		外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒まばらに含む）	外：灰白色 内：灰白色	大谷６期～	
－3	109	ＳＩ01上層	須恵器	大型鉢	26.4	41.6		外：ナデ，沈線，タタキ，タタキ後ナデ 内：ナデ，同心円タタキ	やや密（最大径4㎜以下の砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	８c中葉～後半	
124－1	111	ＳＢ01	土師器	甕		25.2		外：調整不明 内：調整不明	やや粗（最大径3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	７c	
－2	111	ＳＢ01	土製品	甑（把手）				外：調整不明 内：下から上のヘラケズリ	やや粗（1㎜ほどの砂粒を多く含む）	外：淡黄灰色 内：淡黄灰色		
－3	111	ＳＢ01	土製品	竈		36.0		外：ヨコナデ，摩滅のため調整不明 内：ヘラケズリ	粗（最大径5㎜以下の砂粒を含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		
－4	111	ＳＢ01	土製品	土製支脚				外：ユビナデ 内：	やや粗（1㎜ほどの砂粒を多少含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		
－5	111	ＳＢ01	埴輪	円筒埴輪				外：調整不明 内：調整不明	密（砂粒極僅かに含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色		
－6	109	ＳＢ01	須恵器	蓋	2.8	9.8		外：回転ナデ，ヘラケズリり 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1㎜以下の砂粒僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷６期	輪状つまみ
－7	109	ＳＢ01	須恵器	蓋	3.2	9.9		外：回転ナデ，右回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密	外：暗灰褐色 内：灰白色	大谷６期	擬宝珠つまみ
－8	111	ＳＢ01	須恵器	蓋	3.0	11.7		外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密	外：青灰色～灰白色 内：灰白色	大谷６期	
－9	109	ＳＢ01	須恵器	蓋	2.9	12.3		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：灰褐色 内：青灰色	大谷６期	輪状つまみ
－10	111	ＳＢ01	須恵器	坏蓋	3.6	10.0		外：回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（2㎜以下の砂粒まばらに含む）	外：青灰色 内：灰褐色	大谷６期	
－11	109	ＳＢ01	須恵器	坏蓋	3.7	9.6		外：右回転ナデ，右回転ヘラケズリ，ヘラ起こし 内：右回転ナデ	密（1㎜以下の砂粒まばらに含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷６期	
－12	109	ＳＢ01	須恵器	坏身	3.5	8.3		外：回転ナデ，ヘラ起こし後板状工具でナデ 内：回転ナデ，ナデ	やや密（最大径3㎜以下の砂粒を多少含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷６期	
－13	109	ＳＢ01	須恵器	坏身	3.2	8.0		外：回転ナデ，ヘラ起こし，ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	やや密（最大径2㎜以下の砂粒を多少含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷６期	
－14	110	ＳＢ01	須恵器	坏身	3.6	9.1		外：回転ナデ（自然釉付着），ヘラ起こし 内：回転ナデ，ナデ	密（1㎜以下の砂粒を多少含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷６期	底部，円形竹筒による刺突
－15	110	ＳＢ01	須恵器	坏身	3.0	8.2		外：回転ナデ，ヘラ起こし 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（2㎜以下の砂粒をまばらに含む）	外：灰色 内：青灰色	大谷６期	
－16	110	ＳＢ01	須恵器	埦	3.4	9.5		外：右回転ナデ，左回転ヘラケズリ，ヘラ起こし 内：右回転ナデ	密（径1.5㎜以下の長石粒まばらに含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	大谷６期	
－17	110	ＳＢ01	須恵器	埦	4.0	10.2		外：右回転ナデ，ヘラ起こし 内：右回転ナデ，不定方向ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	大谷６期	ヘラ記号　「×」
－18	110・111	ＳＢ01	須恵器	高台付埦	4.6	12.4	8.2	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（最大径3㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷６期	
－19	110・111	ＳＢ01－Ｐ３	須恵器	高台付埦			7.9	外：回転ナデ 内：ナデ	密（長石，石英など1㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	大谷６期	
－20	111	ＳＢ01	須恵器	高台付埦			8.5	外：回転ナデ，ヘラ起こし 内：回転ナデ，ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒若干含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	大谷６期	
－21	111	ＳＢ01	須恵器	高台付埦			7.6	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ	やや密（3㎜以下の砂粒少量含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷６期	ヘラ記号「×」
－22	110	ＳＢ01	須恵器	高坏	10.5	15.4	9.2	外：回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：青灰色 内：青灰色	大谷６期	ヘラ記号「×」 ２方透
－23	110	ＳＢ01	須恵器	高坏	9.3	15.3	8.2	外：右回転ナデ 内：右回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや密（最大径5㎜以下の砂粒を多少含む）	外：灰白色 内：灰白色	大谷６期	２方透
－24	111	ＳＢ01	須恵器	短頸壺	8.5	6.4	最大径12.2	外：右回転ナデ，右回転ヘラケズリ 内：右回転ナデ	密（0.5㎜以下の砂粒をまばらに含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	大谷６期	２方透
－25	111	ＳＢ01	須恵器	壺		9.2		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	大谷６期	２方透
－26	111	ＳＢ01	須恵器	長頸壺		7.6		外：右回転ナデ，カキメ，沈線文 内：右回転ナデ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷６期	２方透
126－1	112	加工段１	土師器	甕		25.6		外：摩滅の為調整不明 内：摩滅の為調整不明	やや粗（2㎜程の砂粒をやや多く含む）	外：黄褐色 内：黄褐色	７c	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
126－2	112	加工段1	土師器	甕		17.5		外：ヨコナデ，摩滅のため調整不明 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（最大径3㎜以下の砂粒を多少含む）	外：濃赤褐色 内：濃赤褐色	7c	
－3	112	加工段1	土師器	甑		23.8		外：ヨコナデ，ナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	粗（石英，長石など2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：黄褐色 内：黄褐色		
－4	112	加工段1	土師器	竈	窯穴径34.9	炊き口19～		外：ハケメ，ヨコナデ 内：ヘラケズリ	粗（4㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		
－5	112	加工段1	土製品	土製支脚	20.3		13.9	外：ナデ 内：ナデ	粗（最大径8㎜以下の砂粒を多少含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色		
－6	112	加工段1	土製品	土製支脚	19.4		13.5	外：ナデ 内：ナデ	粗（最大径4㎜以下の砂粒を多少含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色		
－7	112	加工段1	須恵器	蓋	2.4	13.2		外：回転ナデ，ヘラケズリ 内：回転ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒若干含む）	外：淡青褐色 内：淡青褐色	大谷6期	
－8	112	加工段1	須恵器	蓋	2.2	8.6		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや密（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷6期	
－9	112	加工段1	須恵器	蓋			つまみ4.4	外：回転ナデ，ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡青褐色 内：淡青褐色	大谷6期	
－10	113	加工段1	須恵器	蓋	3.7	10.8		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：灰白色～青灰色 内：灰白色	大谷6期	擬宝珠つまみ，ヘラ記号「×」
－11	113	加工段1	須恵器	蓋	3.0	9.4		外：回転ナデ，右回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや粗（最大径3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷6期	擬宝珠つまみ
－12	113	加工段1	須恵器	蓋	2.95	8.0		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密	外：淡青灰色 内：青灰色	大谷6期	擬宝珠つまみ
－13	113	加工段1	須恵器	蓋	2.6	9.5		外：右回転ナデ，右回転ヘラケズリ 内：右回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（最大径2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷6期	擬宝珠つまみ
－14	113	加工段1	須恵器	蓋	2.7	9.0		外：右回転ナデ，右回転ヘラケズリ 内：右回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（3㎜以下の砂粒僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷6期	擬宝珠つまみ
－15	113	加工段1	須恵器	蓋	2.9	9.2		外：回転ナデ，右回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	粗（最大径4㎜以下の砂粒を多く含む）	外：暗青灰色 内：暗青灰色	大谷6期	擬宝珠つまみ 焼き歪み
－16	112	加工段1	須恵器	坏身	3.6	9.5		外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：淡青灰色 内：灰白色	大谷6期	ヘラ記号「×」
－17	113	加工段1	須恵器	坏身	2.5	11.4		外：右回転ナデ，右回転ヘラ切り，自然面が付着 内：右回転ナデ	やや密（2㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷6期	
－18	113	加工段1	須恵器	坏身	4.0	10.7		外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（長石，石英1㎜以下の砂礫少し含む）	外：青灰色 内：灰白色	大谷6期	ヘラ記号「×」 焼き歪み
－19	112	加工段1	須恵器	高台付埦	5.0	13.4	7.0	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ，ヘラ起こし	密	外：明青灰色 内：暗青灰色	大谷6期	
127－1	113	SD01	土師器	壺				外：調整不明，突帯あり 内：調整不明	やや粗（最大径3㎜以下の砂粒を多く含む，長石，石英を含む）	外：淡橙色 内：灰白色	古墳前期	
130－1	113・114	SK02	須恵器	坏蓋	3.5	9.8		外：回転ナデ，回転ナデ後平行タタキ，ヘラ起こし 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（最大径1㎜以下の砂粒をごくわずかに含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷6期	
131－1	114	1トレンチ	土製品	土製支脚	10.1		12.4	外：ナデ，指頭圧痕 内：ヘラケズリ，刺突	粗（石英，長石など最大径5㎜以下の砂粒を多少含む）	外：濃赤褐色 内：濃赤褐色		
－2	114	1トレンチ	埴輪	形象埴輪				外：ナデ 内：指頭圧痕，シボリメ	やや粗（最大径3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：黄白色 内：黄白色		人物　腕
－3	114	1トレンチ	埴輪	円筒埴輪				外：ハケメ，ナデ，タガあり 内：ハケメ，ナデ	やや粗（最大径2.5㎜以下の砂粒を多少含む）	外：淡褐色 内：淡褐色		
－4	114	1トレンチ	須恵器	坏蓋		10.6		外：右回転ナデ，ヘラ切後ナデ 内：右回転ナデ	密（砂粒少）	外：灰褐色 内：灰褐色	大谷6期	
－5	114	1トレンチ	須恵器	埦	4.4	10.8		外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：灰白色 内：青灰色	8c中葉～末	
－6	114	1トレンチ	須恵器	埦	4.0	11.8		外：回転ナデ，糸切 内：回転ナデ	密（砂粒少）	外：青灰色 内：青灰色	8c中葉～9c前葉	
－7	114	1トレンチ	須恵器	埦		15.4		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（2.5㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	7c中葉～末	
－8	114	1トレンチ	須恵器	皿	2.3	(13.0)		外：回転ナデ，糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：青灰色 内：青灰色	8c末～9c前葉	
－9	114	1トレンチ	須恵器	高台付皿	3.5	20.0	14.6	外：回転ナデ，糸切，糸切後ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密	外：灰褐色～赤褐色 内：赤褐色	8c中葉～9c前葉	
132－1	113	遺構外	弥生土器？	壺・甕の底部			13.1	外：摩滅の為調整不明 内：摩滅の為調整不明	粗（最大径2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色	Ⅰ様式	
－2	113	遺構外	須恵器	埦	4.1	10.2		外：回転ロクロナデ，右回転ヘラケズリ 内：回転ロクロナデ	密（2㎜以下の砂粒含む）	外：淡青灰色～暗青灰色 内：淡青灰色	7c前葉～中葉	
－3	113	遺構外	須恵器	高台付埦			8.0	外：回転ナデ，糸切後ナデ，糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：青灰色 内：青灰色	8c末～9c	ヘラ記号「×」
－4	113	遺構外	須恵器	壺		12.2		外：回転ナデ，沈線文 内：回転ナデ	密（1㎜以下の砂粒多少し含む）	外：青灰色 内：青灰色		
150－1	115	SB15　溝	弥生土器	蓋	7.9	12.9		外：摩滅著しく調整不明 内：摩滅著しく調整不明	やや粗（長石・石英をやや多く含む）	外：灰褐色 内：黄褐色	草田2期	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
150－2	115	ＳＢ15－Ｐ２	弥生土器	甕				外：平行沈線文，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（２㎜以下の砂粒まばらに含む）	外：淡暗灰褐色 内：黄褐色	草田２期	
151－1	117	旧河道２	土師器	柱状高台皿			4.2	外：回転ナデ 内：	密（長石・石英など0.5㎜以下の砂粒を少し含む）	外：橙褐色 内：橙褐色	12ｃ前後	
155－1	115	ＳＢ19	弥生土器	甕				外：平行沈線文 内：摩滅の為調整不明	粗（２㎜以下の砂粒多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田２期	
161－1	115	ＳＢ25－Ｐ５	弥生土器	壷				外：平行沈線文，ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	やや密（２㎜以下の砂粒若干含む）	外：淡褐色 内：淡褐色	草田２期	
－2	115	ＳＢ25－Ｐ５	弥生土器	甕				外：凹線文，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（２㎜以下の砂粒若干含む）	外：淡黒色 内：淡黒色	草田２期	
－3	115	ＳＢ25　溝	弥生土器	甕		18.5		外：平行沈線文，ヘラ状工具による刺突，ナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	粗（１～３㎜の長石・石英の粒子を多く含む）	外：暗茶褐色 内：白褐色	草田２期	
－4	115	ＳＢ25　溝	弥生土器	鼓形器台		19.0		外：貝殻腹縁による平行沈線文 内：摩滅の為調整不明	やや密（最大径３㎜以下の砂粒を多少含む）	外：黄褐色 内：黄褐色	草田２期	
164－1	115	ＳＢ28－Ｐ４新	弥生土器～土師器	鼓形器台				外： 内：ヘラケズリ	やや（２㎜以下の砂粒若干含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田４期～	
168－1	115	ＳＤ07	土師器	壷		26.8		外：ヨコナデ？摩滅のため調整不明 内：摩滅のため調整不明	やや密（２㎜以下の砂粒を若干含む）	外：黄白色 内：黄白色	草田７期	
－2	115	ＳＤ07	土師器	甕		13.2		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密（２㎜以下の砂粒若干含む）	外：明黄褐色 内：明黄褐色	草田６期	
171－1	115	ＳＤ13	弥生土器	甕		22.2		外：ヨコナデ，平行沈線文，刺突 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（長石・石英を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田２期	
－2	115	ＳＤ13	弥生土器	壷		15.6		外：ヨコナデ，口縁下半さらに強くヨコナデした後沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	粗	外：明茶褐色 内：明茶褐色	草田２期	
173－1	115	ＳＤ17	弥生土器	甕		15.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（２㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：淡褐色 内：淡褐色	草田５期	
175－1	115	ＳＤ19	弥生土器	甕	12.6			外：平行沈線文 内：摩滅の為調整不明	粗（２㎜以下の砂粒多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田２期	
－2	115	ＳＤ19	弥生土器	壷		14.2		外：凹線，ハケメ 内：ヨコナデ，指頭圧痕	やや密（最大径3.5㎜以下の砂粒を多少含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田１期	
－3	115	ＳＤ19	弥生土器	甕				外：摩滅の為調整不明 内：摩滅の為調整不明	粗（２㎜以下の砂粒多く含む）	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	草田２期～３期	
－4	115	ＳＤ19	弥生土器	底部			3.7	外：ナデ 内：ヘラケズリ	やや密（最大径３㎜以下の砂粒を多少含む）	外：淡赤褐色 内：黒色		
176－1	115	ＳＫ03	弥生土器	甕		21.5		外：平行沈線文 内：ヨコナデ？	やや密（２㎜以下の砂粒まばらに入る）	外：黒褐色 内：茶褐色	草田２期	
－2	115	ＳＫ03	弥生土器	甕				外：平行沈線文 内：ナデ，ヘラケズリ	やや粗（２㎜以下の砂粒をやや多く含む）	外：淡灰褐色 内：淡黄褐色	草田２期	
－3	115	ＳＫ03	弥生土器	壷				外：平行沈線文 内：ヨコナデ	粗（３㎜以下の砂粒をやや多く含む）	外：淡黄褐色 内：暗灰褐色	草田２期	
－4	115	ＳＫ03	弥生土器	壷				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密（１㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田４期～	
－5	115	ＳＫ03	弥生土器～土師器	鼓形器台				外：ヨコナデ，摩滅の為調整不明 内：ヨコナデ，摩滅の為調整不明	やや密（1.5㎜以下の砂粒まばらに含む）	外：淡褐色 内：淡褐色	草田４期～	
－6	115	ＳＫ03	土師器	低脚坏			7.2	外：摩滅著しく調整不明 内：摩滅著しく調整不明	密（１㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田４期～	
178－1	115	ＳＫ05	弥生土器	鼓形器台				外：ヘラミガキ？ 内：ヘラミガキ？	やや密（２㎜以下の砂粒若干含む）	外：黄白色 内：黄白色	草田４期～５期	
179－1	117	旧河道１	須恵器	壷			5.4	外：回転ナデ，カキメ，回転ヘラ切 内：回転ナデ	やや密（1.5㎜以下の砂粒若干含む）	外：青灰色 内：青灰色		
180－1	117	旧河道３	土師器	埦				外：回転ナデ，赤色顔料塗布 内：回転ナデ	密（0.5㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡赤色 内：黄白色		
183－1	116	旧河道４	弥生土器	甕		12.2		外：口縁部に凸線，ヘラ状工具による刺突 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（２㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：赤褐色 内：赤褐色	草田１期	
－2	116	旧河道４	弥生土器	甕		21.8		外：凹線，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ハケメ，ヘラケズリ	粗（最大径2.5㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田２期	
－3	116	旧河道４	弥生土器	甕		20.5		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（２㎜以下の砂粒を多少含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田２期	
－4	116	旧河道４	弥生土器	甕		31.4		外：平行沈線文，ヨコナデ，ハケ原体による刺突 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（最大径2.5㎜以下の砂粒を多少含む）	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色	草田２期	
－5	116	旧河道４	弥生土器	甕		23.2		外：平行沈線文，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（最大径３㎜以下の砂粒をやや多く含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	草田２期	
－6	116	旧河道４	弥生土器	甕		15.9		外：平行沈線文，２枚貝による刺突，ハケメ，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	粗	外：黒褐色～茶褐色 内：黒褐色～茶褐色	草田２期	
－7	116	旧河道４	弥生土器	甕		19.5		外：平行沈線文，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（３㎜以下の砂礫多少含む）	外：淡黄褐色 内：黄褐色	草田２期	
－8	116	旧河道４	弥生土器	甕		(13.8)		外：ヨコナデ後平行沈線文，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	粗（最大径２㎜以下の砂粒を多く含む）	外：灰褐色 内：灰褐色	草田３期	
－9	116	旧河道４	弥生土器	甕		20.7		外：平行沈線文（施文後なでられたか）刺突文，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（２㎜大の長石・石英を多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田２期	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
183－10	116	旧河道4	古式土師器	甕		16.2		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田4期	
－11	116	旧河道4	弥生土器	甕		14.8		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密（最大径2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田5期	
－12	116	旧河道4	弥生土器	甕		13.8		外：ヨコナデ，ハケメ後ナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	粗	外：灰褐色 内：灰黄褐色	草田1期	
－13	116	旧河道4	弥生土器	壷		10.8		外：ヘラミガキ（摩滅のため方向不明） 内：ヘラミガキ（摩滅のため方向不明）	粗（2㎜以下の砂粒多く含む）	外：白褐色 内：白褐色		
－14	116	旧河道4	弥生土器	壷		9.4		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗（最大径2.5㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		
－15	116	旧河道4	弥生土器	底部			4.4	外：調整不明（焼成前底部穿孔） 内：ヘラケズリ	やや密（最大径2㎜以下の砂粒を多少含む）	外：淡黄灰色 内：暗褐色		
－16	116	旧河道4	弥生土器	高坏				外：ナデ 内：	粗（最大径4㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		
－17	116	旧河道4	弥生土器	高坏				外：ハケメ 内：棒状工具？によるナデ，ヘラケズリ	やや粗	外：茶褐色 内：茶褐色	草田4期～	
－18	116	旧河道4	弥生土器	蓋		9.8		外：2条凹線，ヘラミガキ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ，ヘラケズリ後ヘラミガキ	密（2㎜以下の砂粒少し含む）	外：茶褐色 内：茶褐色		
－19	116	旧河道4	弥生土器	蓋		11.3		外：ハケメ 内：ヘラケズリ	やや密（2㎜程の砂粒を多少含む）	外：淡肌色 内：淡肌色		
－20	116	旧河道4	弥生土器	手捏土器	5.4	4.5		外：指ナデ 内：指ナデ	密（径3㎜以下の砂礫まばらに入る）	外：黒褐色～明茶褐色 内：淡黄褐色		
185－1	117	旧河道5	須恵器	甕				外：波状文，沈線文，カキメ 内：回転ナデ	密（1㎜程の砂粒をごく僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色		
－2	117	旧河道5	須恵器	甕				外：回転ナデ，カキメ 内：回転ナデ，カキメ	やや粗（最大径2㎜以下の砂粒をやや多く含む）	外：青灰色 内：青灰色		
－3	117	旧河道5	須恵器	甕				外：タタキ後回転ナデ 内：回転ナデ	密（最大径4㎜以下の砂粒を少し含む）	外：濃紫灰色 内：濃紫灰色		
－4	117	旧河道5	須恵器	甕				外：タタキ目後回転ナデ 内：回転ナデ	密（2㎜以下の長石など含む）	外：青灰色～暗赤紫色 内：青灰色～暗赤紫色		
－5	117	旧河道5	須恵器	埦	3.7	12.6	9.2	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（微砂粒を含む）	外：暗灰色（底に煤付着） 内：暗灰色	8ｃ中葉～末	
－6	117	旧河道5	須恵器	高台付埦		9.6		外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（2㎜以下の砂粒を極ごく僅かに含む）	外：濃青灰色 内：濃青灰色	8ｃ末～9ｃ前半	
－7	117	旧河道5	須恵器	埦			7.0	外：回転ナデ，右回転糸切 内：回転ナデ	密（1㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：白灰色 内：白灰色	8ｃ中葉～9ｃ	
－8	117	旧河道5	須恵器	高台付埦			8.8	外：回転ナデ，静止糸切後ナデ 内：回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：青灰色 内：暗青灰色	7ｃ中葉～末	
－9	117	旧河道5	須恵器	皿	2.0	12.3	8.1	外：回転ナデ，糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密	外：灰褐色～暗茶褐色 内：灰褐色～暗茶褐色	8ｃ中葉～9ｃ前半	
－10	117	旧河道5	須恵器	高坏			8.4	外：回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：濃青灰色 内：濃青灰色	大谷5期～	2方透
－11	117	旧河道5	土製品	土製支脚				外：ナデ 内：	粗（最大径2.5㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色		
－12	117	旧河道5	土師器	高台付埦		14.6		外：回転ナデ，糸切後高台貼付け 内：回転ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：灰褐色～黄褐色 内：灰褐色	10ｃ～11ｃ	煤付着
－13	117	旧河道5	土師器	埦			5.4	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ	密（2㎜以下の砂粒少し含む）	外：灰黄褐色 内：暗褐色		
－14	117	旧河道5	土師器	皿	2.1	8.8	4.2	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ	密（2㎜以下の砂粒少し含む）	外：黄褐色 内：黄褐色		
－15	117	旧河道5	土師器	埦			5.4	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ	密（0.5㎜以下の砂粒ごく僅かに含む）	外：赤褐色 内：灰黄褐色		
－16	117	旧河道5	土師器	埦・皿類				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：暗褐色 内：暗褐色		
189－1	118	ＳＥ01	古式土師器	甕		24.4		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗（最大径2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田5期	
－2	118	ＳＥ01	弥生土器	甕		19.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（1㎜程の砂粒を若干含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田4期	
190－1	118	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	弥生土器	甕		11.5		外：凸線，ヘラミガキ 内：ヘラミガキ，ヘラケズリ	やや粗	外：黒褐色 内：黒褐色	草田1期	
－2	118	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	弥生土器	甕		20.2		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（2㎜以下の砂粒やや多く入る）	外：茶褐色 内：茶褐色	草田2期	
－3	118	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	弥生土器	甕		18.2		外：ヨコナデ，左下がりハケメ後横方向のハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（2㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：茶褐色 内：明茶褐色	草田4期	
－4	118	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	弥生土器	甕		19.4		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（1㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田4期	
－5	118	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	弥生土器	甕		15.5		外：ヨコナデ，平行沈線文，波状文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ，	粗（1㎜程の砂粒を多く含む）	外：淡灰色（すす付着） 内：黄白色	草田4期	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
190－6	119	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	弥生土器	低脚坏	4.6	13.6	4.6	外：摩滅のため調整不明 内：摩滅のため調整不明	やや粗（２㎜以下の砂粒多く含む）	外：淡褐色（口縁付着） 内：淡褐色（口縁付着）	草田４期	
－7	118	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	弥生土器	底脚坏			11.0	外：ナデ 内：ヘラケズリ，指頭圧痕	やや粗（１㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	草田４期	
－8	118	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	弥生土器	底脚坏				外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	やや粗	外：茶褐色 内：茶褐色	草田４期	
－9	118	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	古式土師器	高坏		21.7		外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ？	粗（0.5㎜程の砂粒を多く含む）	外：淡黄灰色 内：淡黄灰色	草田４期	
－10	118	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	弥生土器	高坏				外：ハケメ，摩滅のため不明 内：ヘラミガキ，円盤充填，円盤に棒状の刺突	やや粗	外：茶褐色 内：茶褐色	草田４期	
－11	118	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	弥生土器	高坏				外：ヘラミガキ？ 内：シボリメ	やや粗	外：明茶褐色 内：明茶褐色	草田４期	
－12	118	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	弥生土器？	鼓形器台	12.5	25.0	19.6	外：ヨコナデ 内：ヘラケズリ，ヘラミガキ？	やや粗（１㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：淡赤褐色 内：淡赤褐色	草田５期	
－13	118	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	弥生土器？	鼓形器台	13.2	19.2	16.1	外：ヨコナデ，刺突 内：ヘラケズリ，ヘラケズリ後ヘラミガキ	密（最大径４㎜以下の砂粒を多少含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田４～５期	
－14	118	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	弥生土器	器台				外：ヘラミガキ，ナデ，ヘラ描きの多条沈線文 内::ヘラケズリ	やや密（２㎜以下の砂粒若干含む。１㎝大のレキ入る）	外：茶褐色 内：茶褐色	草田２期	
－15	118	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	古式土師器	甕形土器		11.8		外：ヨコナデ 内：ヘラケズリ	やや粗（最大径３㎜以下の砂粒を多少含む）	外：淡肌色 内：淡肌色	草田４期～	
－16	119	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	弥生土器	片口付土器				外：ハケメ後ヘラミガキ 内：	やや密（１㎜程の砂粒を少し含む）	外：淡褐色 内：淡褐色		外：煤付着 内：朱付着
－17	118	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	弥生土器					外：摩滅のため調整不明 内：摩滅のため調整不明	粗（３㎜以下の砂粒を多く含む）	外：灰褐色～黒褐色 内：明茶褐色		
192－1	119	遺物包含層	弥生土器	壺もしは甕底部			9.0		やや粗（最大径3.5㎜以下の砂粒を多少含む）	外：淡黄灰色 内：黒褐色	Ⅰ様式	
－2	119	遺物包含層	弥生土器	甕		19.6		外：平行沈線文 内：ヘラケズリ？	やや粗（1.5㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：暗茶褐色 内：暗茶褐色	草田２期	
－3	119	遺物包含層	弥生土器	鼓形器台		17.6		外：平行沈線文 内：ヘラミガキ，シボリメ	やや粗（２㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：白褐色 内：白褐色	草田２期	
－4	119	遺物包含層	弥生土器	高坏			9.5	外：脚端部に平行線 内：ヘラケズリ	粗（長石・石英など２㎜以下の砂粒多く含む）	外：黄白色 内：黄白色	草田２期	ＳＢ22－Ｐ６に伴うか
－5	119	遺物包含層	弥生土器	甑形土器		12.4		外：ヨコナデ 内：摩滅の為調整不明	やや密（２㎜以下の砂粒若干含む）	外：白褐色 内：黒褐色	草田４期	
197－1	122	ＳＩ02	弥生土器	壷底部			6.2	外：ナデか？ 内：ナデか？	密（2.5㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡明赤褐色 内：淡明赤褐色		風化著しい
－2	122	ＳＩ02	弥生土器	大形低脚坏			9.1	外：ナデ 内：風化の為不明	密	外：淡褐色 内：淡褐色		風化著しい
－3	122	ＳＩ02周溝	土師器	甕		19.8		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，指頭圧痕，ヘラケズリか？	密	外：淡褐色 内：淡褐色	草田５期	
－4	122	ＳＩ02周溝	弥生土器	甕				外：横ナデ，横方向のハケメ後ナデ，波状文 内：風化の為不明	密（３㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色	草田７期	
－5	122	ＳＩ02周溝	弥生土器	甕		12.8		外：ヨコナデ，摩滅著しい 内：ヨコナデ，摩滅著しい	やや（２㎜以下の砂粒まばらに含む）	外：淡明褐色 内：淡明褐色		
－6	122	ＳＩ02周溝	弥生土器	甕				外：タタキ 内：ナデ	やや密（２㎜以下の砂粒少し含む）	外：褐色 内：暗灰褐色		
－9	122	ＳＤ21	弥生土器	壷か甕				外：波状文，平行沈線文 内：ヘラケズリか，摩滅の為調整不明	粗（3㎜以下の礫多く含む）	外：淡橙褐色 内：黒褐色	草田３期	
－10	122	ＳＤ21	弥生土器	壷か甕			5.9	外：風化の為不明 内：風化の為不明	粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡橙褐色～灰黄色 内：淡橙褐色～灰黄色		
－11	122	加工段２	土師器	擂り鉢		30.4		外：指頭によるナデ，ハケメ後ナデか？ 内：ナデ，スリメ	密（１～２㎜大の砂粒含む）	外：黄橙色 内：黄橙色		
－12	122	加工段２	土師器	竈（庇）				外：指頭圧痕 内：ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：黄橙色，暗褐色 内：黄橙色		
－13	122	加工段２	土師器	竈（庇）				外：指頭によるナデ 内：	密（1㎜以下の砂粒多し）	外：黄橙色～暗橙色 内：黄橙色～暗橙色		
199－1	122	ＳＩ03周溝	弥生土器	甕		25.8		外：平行沈線文，ヨコナデ 内：風化の為不明	やや粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：橙褐色～淡橙白色 内：橙褐色～淡橙白色	草田２期	
－2	122	ＳＩ03周溝	弥生土器	甕		16.2		外：貝殻による平行沈線文，ヨコナデ 内：ヘラミガキ	やや粗（１～２㎜の砂粒含む）	外：暗橙褐色 内：暗橙褐色	草田２期	
－3	122	ＳＩ03周溝	弥生土器	壷か甕			6.0	外：不明 内：不明	粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：暗黄橙色～灰褐色 内：暗黄橙色～灰褐色		

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
199－4	122	ＳＩ03周溝	弥生土器	器台				外：風化の為調整不明 内：シボリメ	やや粗（１～2㎜の砂粒を含む）	外：淡橙白色 内：淡橙白色	草田２期	
206－1	123	ＳＢ30加工段	須恵器	坏身	2.5	9.4		外：回転ナデ，ヘラ起こし 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1㎜以下の砂粒わずかに含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷６期	へら記号「＊」
－2	123	ＳＢ30加工段	須恵器	坏身	3.6	9.3		外：回転ナデ，ヘラ起こし 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（2㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷６期	
－3	123	ＳＢ30加工段	須恵器	塊	4.0	10.0			密（1㎜以下の砂粒わずかに含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	大谷６期	
－4	123	ＳＫ07	須恵器	高坏	11.4	20.2	9.6	外：回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや密（最大径２㎜以下の砂粒を多少含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	大谷６期	２方透
－5	123	ＳＫ07	土製品	土製支脚	18.2		10.5	外：ナデ 内：ケズリ，ナデ	やや粗（最大径３㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		
207－1	123	加工段３東斜面	土師器	鉢				外：ヨコナデ？，風化のため不明 内：ヨコナデ？，風化のため不明	密	外：淡褐色 内：淡褐色		
－2	123	加工段３東斜面	須恵器	蓋	2.5	17.6		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（１㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ末～９ｃ前半	擬宝珠つまみ
－3	123	加工段３東斜面	須恵器	塊	5.1	13.2	9.4	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，ナデ	密（１㎜程の砂粒を少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	８ｃ中葉～後半	
－4	123	加工段３東斜面	須恵器	高坏			10.2	外：回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや密（1.5㎜以下の砂粒まばらに入る）	外：青灰色 内：青灰色	大谷編年出雲６期	２方透
－5	123	ＳＫ08	須恵器	蓋				外：回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（１㎜以下の砂粒ごく僅かに含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色		
－6	123	ＳＫ08	須恵器	蓋				外：回転ナデ 内：回転ナデ後ナデ	密（１㎜程の砂粒をごく僅かに含む）	外：灰白色 内：灰白色		輪状つまみ
－7	123	ＳＫ08	須恵器	塊	4.1	13.0	7.8	外：回転ナデ，回転糸切後ナデ 内：回転ナデ後ナデ	密（１㎜程の砂粒をごく僅かに含む）	外：暗青灰色 内：暗青灰色	８ｃ中葉～後半	
－8	123	ＳＫ08	須恵器	高台付塊	3.4	12.4	7.0	外：回転ナデ，回転糸切後回転ナデ 内：回転ナデ後ナデ	密（１㎜ほどの砂粒少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	７ｃ末～８ｃ前葉	
－9	123	ＳＫ08	須恵器	盤		22.4		外：回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや密（２㎜以下の砂粒少量含む）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ後半	
209－1	124	柱穴列４－Ｐ３	土師質土器	塊			5.8	外：回転ナデ，右回転糸切 内：回転ナデ	やや密	外：淡明茶褐色 内：淡明茶褐色	12ｃ	
－2	124	柱穴列４－Ｐ３	土師器	塊	3.6	12.0	5.7	外：回転ナデ，右回転糸切 内：回転ナデ	密（φ１㎜以下の砂粒少し含む）	外：明褐色 内：明褐色	12ｃ	
210－1	124	ＳＢ３４－Ｐ３	陶器	甕				外：タタキ目状の押印が帯状に入る。上下ナデ消し 内：指ナデ	粗（２㎜以下の砂粒やや多く含み長さ15㎜大の礫が入る）	外：淡灰褐色 内：淡褐色	13ｃ後半～14ｃ前半	内：煤付着
－2	124	ＳＢ３４－Ｐ３	陶器	不明				外：ナデ 内：ナデ，指頭圧痕	密（φ0.5㎜以下の砂粒少し含む）	外：灰色 内：灰色		
215－1	124	加工段4	土師器	甕		19.4		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密（2㎜程度の砂粒を若干含む）	外：灰橙色 内：灰橙色	７ｃ	
－2	124	加工段4	土師器	甑				外：ナデ 内：ナデ？	やや密（2㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡明褐色 内：淡明褐色		
－3	124	加工段4	土師器	竈				外：ナデ 内：ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒若干含む）	外：明淡褐色 内：明淡褐色		
－4	124	加工段4	土製品	竈			24.2	外：ハケメ 内：ヘラケズリ？摩滅の為不明	やや密（2㎜以下の砂粒若干含む）	外：橙褐色 内：橙褐色		
－5	124	加工段4	土製品	竈			28.5	外：縦方向のナデ 内：横方向の指ナデ	やや密（2㎜以下の砂粒若干混じる）	外：橙褐色 内：橙褐色		
－6	124	加工段4	土師器	竈				外：ナデ 内：ナデ	やや密（2㎜以下の砂粒若干含む）	外：淡明褐色 内：淡明褐色		
－7	125	加工段4	須恵器	坏蓋	3.8	11.1		外：右回転ナデ，ヘラ起こし 内：右回転ナデ，ナデ	密（２㎜以下の石英，長石粒まばらに含む）	外：灰色 内：灰色	大谷６期	
－8	125	加工段4	須恵器	坏身	4.0	10.0		外：回転ナデ，ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや密（２㎜以下の砂粒若干含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷６期	
－9	125	加工段４	須恵器	坏身	3.5	9.8		外：回転ナデ，ヘラ起こし 内：ナデ	密（２㎜以下の長石，石英粒含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	大谷６期	
－10	125	加工段4	須恵器	塊	4.2	12.0	7.7	外：回転ナデ，回転糸切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	やや密（１㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ後半～末	
－11	125	加工段4	須恵器	塊				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（最大径３㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	７ｃ中葉～末	
－12	125	加工段4	須恵器	高台付坏			8.9	外：回転ナデ 内：回転ナデ後ナデ	密（最大径２㎜以下の砂粒ごく僅かに含む）	外：淡青灰色～淡黄灰色 内：青灰色	７ｃ	
－13	125	加工段4	須恵器	高坏	11.4	17.8	9.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：青灰色 内：灰白色	大谷５期	上下２段の３方透
－14	125	加工段4	壺					外：回転ロクロナデ 内：回転ロクロナデ	密（２㎜以下の石英，長石粒まばらに含む）	外：青灰色 内：青灰色		
－15	125	加工段4	甕			16.2		外：回転ナデ，平行タタキ 内：回転ナデ，当て具痕	やや密（３㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色		
216－1	125	加工段5	須恵器	蓋		18.8		外：回転ナデ，ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	やや密（最大径２㎜以下の砂粒を多少含む）	外：青灰色 内：青灰色	７ｃ末～８ｃ	
－2	125	加工段５	須恵器	塊		12.6		外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，ナデ	密（最大径２㎜以下の砂粒少し含む）	外：暗青灰色 内：暗青灰色	８ｃ中葉～後半	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
216－3	126	加工段5	須恵器	塊	4.1	12.7	8.9	外：右回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ後ナデ	やや密（3㎜以下の砂粒若干含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ中葉～後半	
－4	125	加工段5	須恵器	皿		15.4	9.8	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ中葉～後半	
－5	125	加工段5	須恵器	大型鉢		39.4		外：平行タタキ後カキメ 内：回転ナデ，当て具痕後強いナデ	やや密（2㎜以下の砂粒若干含む）	外：灰白色 内：青灰色	8ｃ中葉～後半	把手付
－6	125	加工段5東斜面	土師器	高坏				外：縦方向のナデ 内：ナデかヘラケズリ？	やや粗（1㎜以下の微砂粒をやや多く含む）	外：淡茶色～淡灰色 内：淡茶色～淡灰色		
－7	125	加工段5東斜面	須恵器	塊		15.2		外：回転ナデ 内：回転ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ中葉～9ｃ前半	
－8	125	加工段5東斜面	須恵器	高台付塊	5.8	14.6	9.8	外：回転ナデ 内：回転ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ中葉～9ｃ前半	
－9	125	加工段5東斜面	須恵器	壺				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：灰白色 内：灰白色		
－10	125	加工段5東斜面	須恵器	高台付皿				外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ後ナデ	やや密	外：茶褐色 内：茶褐色	8ｃ中葉～9ｃ前半	
－11	125	加工段5東斜面	須恵器	甕				外：回転ナデ，波状文 内：回転ナデ	密（2㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色		
－12	126	ＳＸ01	須恵器	塊		12.2		外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1.5㎜以下の砂粒少し含む）	外：灰白色 内：灰白色	8ｃ中葉～後半	
－13	126	ＳＸ01	須恵器	高台付塊	4.2	12.0	8.4	外：回転ナデ，回転糸切後ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：青灰色 内：明青灰色	8ｃ中葉～後半	
－14	126	ＳＸ01	須恵器	皿	2.6	14.3		外：回転ナデ，右回転糸切 内：右回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（2㎜以下の長石などの砂粒まばらに含む）	外：青灰色～赤褐色 内：青灰色～赤褐色	8ｃ中葉～9ｃ前半	
－15	126	ＳＸ01	須恵器	皿	2.3	18.4		外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：灰白色 内：灰白色	8Ｃ中葉～9Ｃ前半	
－16	126	ＳＸ01	須恵器	高台付皿	2.9	17.6	15.8	外：回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ中葉～9ｃ前半	
－17	126	ＳＸ01	須恵器	甕				外：回転ナデ，平行タタキ 内：回転ナデ当て具痕	密（2㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色～灰白色 内：青灰色		
217－1	126	ＳＤ24周辺	弥生土器	壺		27.4		外：ナデか？ 内：ナデか？	密（2㎜以下の砂粒まばらに含む）	外：淡明褐色 内：淡明褐色	Ⅲ様式	風化著しい
－2	126	ＳＤ24周辺	弥生土器	甕		24.6		外：凹線，摩滅の為不明 内：ヘラケズリ，摩滅の為不明	やや粗（3㎜以下の砂粒を多く含む）	外：淡明褐色 内：淡明褐色	草田2期	
－3	126	ＳＤ24	弥生土器	壺				外：爪形の刺突，摩滅の為調整不明 内：摩滅の為調整不明	粗（2㎜以下の砂粒多く含む）	外：淡黒色 内：淡黒色	草田2期～3期	
－4	126	ＳＤ24	弥生土器	壺		18.0		外：平行沈線，ナデ，横方向のハケメ 内：ヘラケズリ，摩滅の為不明	やや粗（3㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田3期	
－5	126	ＳＤ24	弥生土器	甕		15.5		外：貝殻腹縁による平行沈線，ヨコナデ 内：摩滅の為不明	密	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色	草田3期	
－6	126	ＳＤ24	弥生土器	甕		17.0		外：ヨコナデ？ 内：ヨコナデ？	やや粗（2㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：淡灰茶褐色 内：淡灰茶褐色	草田3期	風化著しい
－7	126	ＳＤ25	弥生土器	甕		18.4		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密（2㎜以下の砂粒若干含む）	外：淡明褐色 内：淡明褐色	草田5期	
－8	126	ＳＤ25周辺	弥生土器	甕				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密（1.5㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色	草田5期	
220－1	127	ＳＤ29	土師器	甕				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	普通	外：淡褐色 内：淡褐色		
－2	127	ＳＤ29	土師器	甕				外：ヨコナデ 内：ハケメ後ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（2㎜程度の砂粒含む）	外：暗褐色 内：暗褐色		
－3	127	ＳＤ29	須恵器	坏身		9.2		外：回転ナデ，ヘラ起こし 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：灰白色 内：灰白色	大谷5期	
－4	127	ＳＤ29	須恵器	蓋	3.2	12.4		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ後ナデ	密（最大径2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ末～9ｃ前半	擬宝珠つまみ
－5	127	ＳＤ29	須恵器	坏身	3.9	12.6	8.6	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：黒褐色～茶褐色 内：茶褐色	8ｃ中葉～後半	
－6	127	ＳＤ29	須恵器	塊	2.7	11.4		外：回転ナデ，糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（2㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ末～9ｃ前半	
－7	127	ＳＤ29	須恵器	高台付塊	4.3	11.4	8.8	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，ナデ	密（1㎜大の砂粒を少し含む）	外：黄青灰色 内：黄青灰色	8ｃ中葉～後半	
－8	127	ＳＤ29	須恵器	皿	2.4	15.6		外：回転ナデ，ナデ，糸切後ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（5㎜程度の礫を含む）	外：青灰色～茶褐色 内：青灰色～茶褐色	8ｃ中葉～後半	
－9	127	ＳＤ29	須恵器	皿	2.7	16.0		外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：灰褐色～桃褐色 内：黄褐色	8ｃ中葉～9ｃ前半	
－10	127	ＳＤ29	須恵器	高台付皿	4.1	27.0	22.6	外：回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：黄褐色 内：桃褐色	8ｃ中葉～9ｃ前半	
222－1	127	ＳＤ30	土師器	甕		41.0		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（1㎜以下の微砂粒を多く含む）	外：淡橙色～淡黄色 内：淡橙色～淡黄色		

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
222－2	127	SD30	土製品	土製支脚				外：ナデ 内：ヘラケズリ？	普通	外：暗褐色 内：暗褐色		
－3	127	SD30	土製品	土製支脚	19.0			外：指ナデ，摩滅が著しい 内：ヘラケズリか？，摩滅が著しい	粗（4㎜以下の砂粒多く含む）	外：赤褐色～鈍黄褐色 内：赤褐色～鈍黄褐色		
－4	127	SD30	須恵器	蓋		16.2		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや密（2㎜以下の砂粒若干含む）	外：青灰色 内：灰褐色	7ｃ末～8ｃ	
－5	127	SD30	須恵器	蓋		13.6		外：回転糸切，回転ヘラケズリ，回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：灰褐色 内：灰白色	8ｃ末～9ｃ前半	
－6	127	SD30	須恵器	蓋		16.4		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密	外：暗灰白色 内：暗灰白色	8ｃ末～9ｃ前半	
－7	127	SD30	須恵器	埦	4.4	12.9	7.9	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（2㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ中葉～後半	
－8	128	SD30	須恵器	埦	4.4	10.6		外：右回転ナデ，右回転糸切 内：右回転ナデ	密（4㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ中葉～後半	
－9	127	SD30	須恵器	埦	3.9	11.4		外：回転ナデ，糸切 内：回転ナデ，ナデ	やや密（2㎜以下の砂粒若干含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ中葉～9ｃ	
－10	127	SD30	須恵器	埦	4.1	11.5	8.0	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，ナデ	密（3㎜の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ中葉～9ｃ	
－11	127	SD30	須恵器	高台付埦	4.5	12.8	9.0	外：回転ナデ，糸切後ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：灰褐色 内：灰褐色	8ｃ末～9ｃ前半	
－12	127	SD30	須恵器	皿	2.3	13.2		外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや粗（3㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：灰褐色～赤褐色 内：灰褐色	8ｃ中葉～9ｃ前半	
－13	127	SD30	須恵器	皿	2.6	12.2	7.2	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，ナデ	やや密（3㎜以下の砂粒を若干含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ中葉～9ｃ前半	
－14	128	SD30	須恵器	高台付皿			14.4	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（2㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：灰褐色	8ｃ中葉～9ｃ前半	8ｃ
－15	128	SD30	須恵器	甕				外：回転ナデ，平行タタキ 内：回転ナデ，タタキ	密（1㎜程の砂粒をごく僅か含む）	外：濃青灰色 内：濃青灰色		
－16	128	SD30	須恵器	甕				外：回転ナデ 内：回転ナデ，当て具痕	密（1㎜程の砂粒を少し含む）	外：淡暗灰色 内：淡暗灰色		自然釉付着
－17	128	SD30	須恵器	高台付鉢	9.3	22.8	15.4	外：回転ナデ，糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（石英，長石など2㎜以下の砂粒含む）	外：青灰色 内：青灰色		
－18	128	SD30	須恵器	鉢				外：回転ナデ 内：回転ナデ	やや密（1㎜程の砂粒をまばらに含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色		
－19	128	SD30	須恵器	鉢				外：回転ナデ，格子タタキ 内：回転ナデ，ナデ	密（最大径2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ中葉～後半	
223－1	128	SD31	須恵器	蓋	2.4	14.0		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ末～9ｃ前半	擬宝珠つまみ
－2	128	SD31	須恵器	蓋	2.5	14.6		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	7ｃ末～8ｃ	
－3	128	SD31	須恵器	埦	5.0	13.0	8.0	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，ナデ	密（1㎜程の砂粒ごく僅かに含む）	外：灰白色 内：灰白色	8ｃ中葉～後半	
－4	128	SD31	須恵器	高台付埦	6.9	14.8	5.3	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ末～9ｃ前半	
－5	128	SD31	須恵器	皿	2.5	15.2		外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ中葉～9ｃ前半	
－6	128	SD31	須恵器	高台付皿	3.4	17.6	12.9	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色～灰褐色 内：青褐色～灰褐色	8ｃ中葉～9ｃ前半	
－7	128	SD31	土師器	甕		24.0		外：摩滅の為調整不明 内：摩滅の為調整不明	やや粗（2～3㎜の砂粒を含む）	外：淡褐色 内：淡褐色	8ｃ	風化著しい
－8	128	SD31	土師器	甕				外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（2～3㎜の砂粒を含む）	外：明褐色 内：明褐色		
－9	128	SD31	埴輪					外：ハケメ，ナデ 内：ハケメ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：明茶褐色 内：明茶褐色		
224－1	129	SD32	土師器	甑			22.4	外：不明 内：ヘラケズリ	密	外：暗褐色 内：暗褐色		
－2	129	SD32	須恵器	埦	5.1	12.3	8.4	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（微砂粒を少し含む）	外：濃青灰色 内：濃青灰色	8ｃ中葉～後半	
－3	129	SD32	須恵器	高台付埦			10.0	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや密（最大径3㎜以下の砂粒を多少含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ末～9ｃ前半	
－4	129	SD32	須恵器	皿	2.7	13.2	7.0	外：回転ナデ，回転糸切後ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：暗青灰色 内：暗青灰色	8ｃ中葉～後半	
－5	129	SD32	須恵器	高台付皿	3.2	18.4	14.8	外：回転ナデ，糸切 内：回転ナデ	やや密（2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ末～9ｃ前半	
－6	129	SD32	土師器	埦			5.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（2㎜以下の砂粒少し含む）	外：黄褐色 内：灰褐色		
225－1	129	SD33	土師器	甑（把手）				外：ナデ 内：ヘラケズリ	密	外：淡褐色 内：淡褐色		
－2	129	SD33	須恵器	埦	3.65	11.8	7.2	外：回転ナデ，糸切 内：回転ナデ	密（微砂粒をごく僅かに含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	8ｃ中葉～9ｃ	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
225－3	129	SD33	須恵器	高台付埦	4.8	14.4	7.6	外：回転ナデ，ヘラ起こし後高台貼付 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：黒灰色 内：淡青灰色	7ｃ中葉～末	
－4	129	SD33	須恵器	高台付埦			9.2	外：回転ナデ，糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1㎜程の砂粒を少し含む）	外：濃青灰色 内：濃青灰色	8ｃ末～9ｃ前半	
－5	129	SD33	須恵器	長頸壺		9.5		外：回転ナデ 内：回転ナデ，タタキ？	密（微砂粒をごく僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色		
－6	129	SD33	須恵器	壺			5.0	外：回転ナデ，回転ヘラ削後ナデ，糸切 内：回転ナデ	やや密（2㎜以下の砂粒を多少含む）	外：暗青灰色 内：暗青灰色		
－7	129	SD33	土師質土器	高台付埦			6.0	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ	密	外：淡褐色 内：淡褐色	10ｃ	
－8	129	SD33	土師質土器	埦			6.0	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ	やや粗（微砂粒を多く含む）	外：暗褐色 内：暗褐色		
－9	129	SD33	白磁	埦		16.4		外：回転ナデ，上くすり 内：回転ナデ，上くすり	密（砂粒少）	外：白 内：白	12ｃ	
226－1	130	SD34	土師器	甕				外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや粗（2㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色	8ｃ～9ｃ	
－2	130	SD34	須恵器	埦	4.0	11.2	7.8	外：回転ナデ，糸切後ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（2㎜以下の砂粒少し含む）	外：暗青灰色 内：暗青灰色	8ｃ中葉～後半	
－3	130	SD34	須恵器	高台付埦	4.6	12.8	9.6	外：回転ナデ，ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（0.5㎜程の砂粒をごく僅かに含む）	外：暗青灰色 内：暗青灰色	8ｃ末～9ｃ前半	
－4	130	SD34	須恵器	皿	3.2	15.4	12.2	外：回転ナデ，糸切後ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：白褐色 内：白褐色	8ｃ中葉～9ｃ前半	
－5	130	SD34	土師器	埦か皿			4.0	外：回転ナデ 内：	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：赤褐色 内：赤褐色		摩滅著しい
228－1	130	SK10	須恵器	埦	5.0	13.0	7.3	外：回転ナデ，右回転糸切 内：回転ナデ	やや密（2㎜以下の砂粒若干含む）	外：淡灰色 内：淡灰色	8ｃ中葉～後半	
－2	130	SK10	須恵器	皿	2.5	16.0		外：回転ナデ，糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ中葉～後半	
－3	130	SK10	須恵器	盤	5.0	21.0	11.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや密（3㎜以下の砂粒若干含む）	外：明茶褐色 内：青灰色～灰白色	8ｃ中葉～後半	高台に2方向の透
229－1	130	SK11	須恵器	高台付壺			10.5	外：ロクロナデ，後了目タタキ 内：回転ナデ後ナデ	密（1㎜以下の長石粒など少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ後半～9ｃ前半	
－2	130	SK11	須恵器	蓋	2.7	14.4		外：回転ナデ，ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密（最大径2㎜以下の砂粒をごくわずかに含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色		擬宝珠つまみ
230－1	130	SK12	須恵器	坏蓋	3.4	9.6		外：回転ナデ，ヘラ起こし 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1㎜以下の長石，石英粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷6期	
－2	130	SK12	須恵器	蓋		16.8		外：回転ナデ，回転糸切後回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	やや粗（最大径3㎜以下の砂粒をやや多く含む）	外：濃青灰色 内：濃青灰色	8ｃ末～9ｃ前半	擬宝珠つまみ
－3	130	SK12	須恵器	埦	4.0	12.3	8.0	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ中葉～後半	
231－1	131	SK13	土師器	高坏		26.3		外：風化の為不明，棒状の刺突 内：風化の為不明	やや密（まれに大粒の砂粒含む）	外：淡橙色 内：淡橙色	公山1期	
－2	131	SK13	須恵器	蓋	2.6	8.0		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：青灰色 内：青灰色	7ｃ前葉～中葉	
－3	131	SK13	須恵器	埦			9.0	外：回転ナデ，糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや粗（2㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：茶褐色 内：茶褐色	8ｃ中葉～後半	
－4	131	SK13	須恵器	壺		9.8		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	外：青灰色 内：焼きむらの為観察難		
－5	131	SK13	土師器	柱状高台皿		8.6		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（まれに大粒の砂粒を含む）	外：暗淡茶色 内：暗淡茶色	12ｃ前後	
－6	131	SK13	土師器	埦			6.4	外：回転ナデ，糸切？ 内：回転ナデ	密（1㎜以下の砂粒僅かに含む）	外：橙色～赤茶色 内：橙色～赤茶色	12ｃ前後	
232－1	131	SK16	土師器	埦				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（0.5㎜以下の砂粒少し含む）	外：白褐色 内：白褐色		
－2	131	SK17	土師器	埦か皿			5.8	外：回転ナデ，右回転糸切 内：回転ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：明黄褐色 内：明黄褐色		
234－1	131	SX02	土師器	高坏			8.0	外：不明 内：不明	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡褐色 内：淡褐色		摩滅著しい
－2	132	SX02	土師器	甕		27.0		外：ヨコナデ，ナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：暗褐色 内：淡褐色		
－3	131	SX02	土師器	壺		17.8		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	やや密（1㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：茶褐色 内：暗灰色		
－4	131	SX02	土師器	甕		17.8		外：ヨコナデ，縦方向のハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	粗（2㎜以下の砂粒多く含む）	外：淡暗褐色 内：淡暗褐色		
－5	131	SX02	土師器	甕				外：ナデ 内：		外：淡褐色 内：淡褐色		
－6	131	SX02	土師器	甕				外：ヨコナデ 内：ヘラケズリ	粗（2㎜以下の砂粒多く含む）	外：明褐色 内：明褐色		
－7	132	SX02	土師器	甕				外：ナデか？不明 内：不明	やや粗（2㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色		風化著しい
－8	132	SX02	土製品	土製支脚			10.1	外：ナデ 内：強い指ナデ	粗（2㎜以下の砂粒多く含む）	外：橙褐色～灰褐色 内：橙褐色～灰褐色		

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
234－9	132	ＳＸ02	土製品	土製支脚				外：指ナデ，摩滅が著しい 内：	やや密	外：暗褐色 内：		
－10	132	ＳＸ02	須恵器	坏蓋				外：ヘラ切後ナデ，回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（１㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷５～６期	
－11	132	ＳＸ02	須恵器	蓋				外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	やや密（１㎜以下の砂粒僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ末～９ｃ前半	
－12	132	ＳＸ02	須恵器	蓋				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（１㎜大の砂粒を少し含む）	外：濃青灰色 内：濃青灰色	７ｃ	
－13	132	ＳＸ02	須恵器	蓋		9.0		外：回転ヘラケズリ，回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：ややただれ観察難 内：青灰色	７ｃ前半～中葉	
－14	132	ＳＸ02	須恵器	蓋	2.7	13.3		外：回転ナデ，回転ヘラ削 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（１㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ末～９ｃ前半	摘宝珠つまみ
－15	132	ＳＸ02	須恵器	蓋	3.6	17.8		外：回転ナデ，右回転ヘラケズリ，回転糸切後回転ナデ 内：回転ナデ後ナデ	やや密（最大径５㎜以下の砂粒多少含む）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ末～９ｃ前半	摘宝珠つまみ
－16	132	ＳＸ02	須恵器	蓋	3.3	13.4		外：回転ナデ，ヘラケズリ後回転ナデ 内：回転ナデ	やや密（１㎜以下の砂粒僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ末～９ｃ前半	摘宝珠つまみ
－17	132	ＳＸ02	須恵器	蓋	4.0	20.2		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1.5㎜以下の砂粒少し含む）	外：灰白色 内：灰白色	８ｃ末～９ｃ前半	摘宝珠つまみ
－18	132	ＳＸ02	須恵器	蓋	2.5	15.2		外：回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒若干含む）	外：赤紫色～青灰色 内：赤紫色～青灰色	７ｃ末～８ｃ前葉	輪状つまみ
－19	132	ＳＸ02	須恵器	蓋	2.4	15.8		外：回転ヘラケズリ後ナデ，回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（２㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	７ｃ末～８ｃ前葉	輪状つまみ
－20	134	ＳＸ02	須恵器	坏身	3.3	8.4		外：回転ナデ，ヘラ起こし後ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（３㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	大谷６期	
－21	134	ＳＸ02	須恵器	塊				外：回転ナデ，ヘラ起こし 内：回転ナデ	密（２㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	７ｃ前半～中葉	
－22	132	ＳＸ02	須恵器	塊	4.0	11.4	7.8	外：右回転ナデ，右回転糸切 内：右回転ナデ，ナデ	密（0.5㎜前後の小さな砂粒を少し含み，２㎜大のものもまばらに含む）	外：青灰色～黒灰色 内：青灰色～黒灰色	８ｃ中葉～後半	
－23	132	ＳＸ02	須恵器	塊	4.4	12.7	8.5	外：右回転ナデ，右回転糸切 内：右回転ナデ，ナデ	やや粗（４㎜以下の砂粒含む）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ中葉～後半	
－24		ＳＸ02	須恵器	塊	3.7	13.6	9.4	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，ナデ	密（2㎜以下の砂粒を含む）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ中葉～後半	
－25	133	ＳＸ02	須恵器	塊	5.6	14.5	8.5	外：右回転ナデ，右回転糸切後ナデ 内：右回転ナデ，ナデ	密（３㎜以下の砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ中葉～後半	
－26	133	ＳＸ02	須恵器	塊	3.9	12.4	8.0	外：右回転ナデ，右回転糸切 内：右回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや密（３㎜以下の砂粒若干含む）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ中葉～後半	
－27	133	ＳＸ02	須恵器	塊	4.7	13.0	8.0	外：右回転ナデ，回転糸切 内：右回転ナデ，ナデ	やや密（３㎜大の砂粒混じり）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ中葉～後半	
－28	133	ＳＸ02	須恵器	塊	4.3	11.3	7.2	外：右回転ナデ，回転糸切 内：右回転ナデ，ナデ	密（1.5㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ中葉～後半	
－29	133	ＳＸ02	須恵器	塊	4.8	(11.5)	7.6	外：右回転ナデ，右回転糸切 内：右回転ナデ，右回転ナデ後ナデ	密（２㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ中葉～後半	
－30	133	ＳＸ02	須恵器	塊	4.0	11.8	8.3	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，ナデ	やや粗（２㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	８ｃ中葉～後半	
－31	134	ＳＸ02	須恵器	塊身	3.4	12.8	8.8	外：回転ロクロナデ，回転糸切 内：回転ロクロナデ，ナデ	やや密（３㎜以下の砂粒含む）	外：灰褐色 内：灰褐色	８ｃ後半～９ｃ前半	
－32	133	ＳＸ02	須恵器	高台付塊	5.0	14.0	9.4	外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや密（２㎜以下の砂粒若干含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	７ｃ中葉～末	
－33	133	ＳＸ02	須恵器	高台付塊	4.3	13.1	9.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	やや密（２㎜大の砂粒多少入る）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	７ｃ末～８ｃ前葉	
－34	134	ＳＸ02	須恵器	高台付塊	4.2	12.0	8.2	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，ナデ	密（１㎜大の砂粒含む）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ中葉～後半	
－35	134	ＳＸ02	須恵器	高台付塊	4.3	13.4	9.6	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（１㎜以下の砂粒を含む）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ中葉～後半	
－36	133	ＳＸ02	須恵器	高台付塊	4.0	11.6	9.4	外：回転ナデ 内：回転ヘラケズリ	密（２㎜以下の砂粒少し含む）	外：紫色 内：紫色	８ｃ末～９ｃ前半	
－37	133	ＳＸ02	須恵器	高台付塊	5.2	14.8	10.5	外：回転ナデ 内：回転ナデ	やや密（３㎜以下の砂粒を含む）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ末～９ｃ前半	
－38	134	ＳＸ02	須恵器	高台付塊	4.5	12.5	10.1	外：右回転ナデ 内：右回転ナデ，ナデ	密（２㎜以下の長石粒含む）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ末～９ｃ前半	
－39	134	ＳＸ02	須恵器	皿	2.7	14.2	11.0	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，ナデ	やや密（２㎜以下の砂粒若干含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	８ｃ中葉～９ｃ前半	
－40	134	ＳＸ02	須恵器	皿	(2.8)	13.7		外：回転ナデ，右回転糸切 内：回転ナデ，ナデ	やや粗（１㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：灰褐色～橙褐色 内：灰褐色～橙褐色	８ｃ中葉～後半	
－41	134	ＳＸ02	須恵器	皿	2.5	12.2		外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，ナデ	密（１㎜以下の砂粒を含む）	外：乳白色 内：乳白色	８ｃ中葉～９ｃ前半	
－42	134	ＳＸ02	須恵器	高台付皿	2.7	13.2	11.2	外：回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	やや粗（0.5～２㎜前後の砂粒を含む）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ中葉～９ｃ前半	
－43	134	ＳＸ02	須恵器	高台付塊			8.7	外：回転ナデ，ヘラ切後ナデ 内：回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：青灰色 内：青灰色	７ｃ中葉～末	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種 別	器 種	器 高	口 径	底 径	手法の特徴	胎 土	色 調	時 期	備 考
234－44	134	ＳＸ02	須恵器	高台付皿	3.8	18.8		外：回転ナデ，回転糸切後ナデ 内：回転ナデ	やや密（２㎜以下の砂粒若干含む）	外：青灰色 内：青灰色	８ｃ末～９ｃ前半	
－45	134	ＳＸ02	須恵器	高台付皿	3.5	18.0	12.4	外：回転ナデ，回転糸切後ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密	外：灰褐色～青灰色 内：灰褐色～青灰色	８ｃ末～９ｃ前半	
－46	134	ＳＸ02	須恵器	高坏			10.2	外：回転ナデ，沈線文 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密	外：灰白色 内：灰白色	大谷６期～	３方透
－47	134	ＳＸ02	須恵器	高坏	9.0	14.2	8.6	外：回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1.5㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：淡青灰色	大谷５期～	２方透
235－1	135	ＳＸ02	須恵器	壺		8.2		外：回転ナデ 内：回転ナデ	やや密（２㎜以下の砂粒を多く含む）	外：青灰褐色 内：青灰褐色	大谷７期～	
－2	135	ＳＸ02	須恵器	壺			頸部径5.6	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（最大径３㎜以下の砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷７期～	
－3	135	ＳＸ02	須恵器	壺			9.8	外：回転ナデ，回転糸切右回り 内：回転ナデ	やや密（３㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷８期	
－4	135	ＳＸ02	須恵器	壺	18.1		10.2	外：平行タタキ後回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	密（最大径５㎜以下の砂粒を少し含む）	外：暗赤褐色 内：暗赤褐色		ヘラ記号「×」
－5	135	ＳＸ02	須恵器	短頸壺	19.0	10.2	13.9	外：回転ナデ，ヘラ切り後ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（１㎜程の砂粒ごく僅かに含む）	外：灰白色 内：灰白色		
－6	135	ＳＸ02	須恵器	短頸壺		11.9		外：回転ナデ，平行タタキ目後ナデ，平行タタキ後カキメ 内：回転ナデ，当て具痕	やや密（２㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色		
－7	135	ＳＸ02	須恵器	𤭯			2.8	外:右回転ナデ，ヘラケズリ 内：回転ナデ	やや密（最大径２㎜以下の砂粒多少含む）	外：暗青灰色 内：暗青灰色	大谷６期～	
－8	135,136	ＳＸ02	須恵器	平瓶			頸部径5.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ胴部：円盤閉塞による風船技法で整形	密（2㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	大谷６期～５期	
－9	136	ＳＸ02	須恵器	甕	28.7	19.3		外：回転ナデ，平行タタキ，沈線文 内：回転ナデ，波当て具痕	密（最大径2㎜以下の砂粒ごく僅かに含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色		ヘラ記号「[illegible]」
－10	135	ＳＸ02	須恵器	甕		14.5		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（１㎜程の砂粒をごく僅かに含む）	外：濃青灰色 内：濃青灰色		
－11	135	ＳＸ02	須恵器	甕				外：回転ナデ，平行タタキ，カキメ 内：回転ナデ，当て具痕	やや密（１㎜以下の砂粒若干含む）	外：青灰色～灰白色 内：青灰色		
－12	136	ＳＸ02	須恵器	甕	62.1	21.4		外：回転ナデ，平行タタキ 内：回転ナデ，放射状の当て具痕	密（最大径3㎜以下の砂粒をごく僅かに含む）	外：暗灰色～淡灰色 内：灰色～暗灰色		
－13	136	ＳＸ02	須恵器	横瓶	23.4	13.2		外：回転ナデ，タタキ目 内：回転ナデ，当て具痕	やや密（最大径３㎜以下の砂粒をごく僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色		
－14	136	ＳＸ02	古代土師器	埦			5.0	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ	密（1㎜以下の砂粒僅かに含む）	外：淡褐色 内：淡褐色	12ｃ	
－15	136	ＳＸ02	古代土師器	埦			5.6	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ	密	外：淡褐色 内：淡褐色	12ｃ	
－16	136	ＳＸ02	古代土師器	埦	4.4	15.5	4.9	外：回転ナデ，回転糸切後ナデ 内：回転ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡褐色 内：淡褐色	12ｃ	
－17	136	ＳＸ02	古代土師器	高台付埦			7.9	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（1㎜以下の砂粒僅かに含む）	外：明褐色 内：明褐色	11ｃ	
－18	136	ＳＸ02	古代土師器	皿	1.7	6.8	3.8	外：ヨコナデ，回転糸切 内：ヨコナデ，指ナデ	密	外：淡褐色 内：淡褐色	12ｃ	
－19	136	ＳＸ02	古代土師器	皿	1.7	7.3	3.7	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ	密（0.5㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡褐色 内：淡褐色	12ｃ	
－20	136	ＳＸ02	古代土師器	皿	1.9	8.0	3.8	外：ヨコナデ，回転糸切 内：ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡明褐色， 内：淡明褐色	12ｃ	
－21	136	ＳＸ02	白磁	埦			5.2	外：回転ナデ，ヘラケズリ，上くすり 内：回転ナデ，上くすり	密（砂粒少）	外：白色 内：白色	12ｃ	
236－1	137	ＳＸ03	須恵器	蓋				外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（２㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	７ｃ	輪状つまみ
－2	137	ＳＸ03	須恵器	坏身		9.7		外：回転ナデ，ヘラ起こし 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（１㎜程の砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	大谷６期	
－3	137	ＳＸ03	須恵器	埦	3.5	11.5		外：回転ナデ，ヘラ切 内：回転ナデ，ナデ	密（２㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡灰色 内：淡灰色	大谷６期～	
－4	137	ＳＸ03	須恵器	長頸壺				外：回転ナデ 内：回転ナデ，指頭圧痕	やや密（２㎜以下の砂粒を多少含む）	外：淡灰色 内：淡灰色	大谷７期～	
－5	137	ＳＸ03	土師器	高台付埦	7.0	14.8		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（４㎜以下の砂礫僅かに含む）	外：淡灰白色～明橙色 内：淡灰白色～明橙色	11ｃ	
－6	137	ＳＸ03	土師器	皿	2.6	10.3	4.2	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ	密（砂粒をほとんど含まない）	外：淡橙白色～淡茶色 内：淡橙白色～淡茶色	12ｃ	
238－1	137	遺物包含層	弥生土器	壺？底部				外：はがれ，指頭圧痕か？ 内：指頭圧痕	やや粗（2㎜以下の	外：淡明褐色 内：淡明褐色	Ⅰ～Ⅱ様式	風化著しい
－2	137	遺物包含層	弥生土器	甕		12.7		外：口縁上面に円形浮文，ナデか？ 内：ナデか？	密	外：淡明褐色 内：淡明褐色	Ⅲ様式	
－3	137	遺物包含層	弥生土器	壺				外：肩部断面３角形の突帯２本 内：指ナデ	粗（2～３㎜の砂粒多く含む）	外：淡褐色 内：淡褐色	Ⅲ様式	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
238－4	137	遺物包含層	弥生土器	甕				外：凹線，ヨコナデ，風化の為1部不明 内：不明	やや密（1～2㎜以下の砂粒を若干含む）	外：暗淡茶色 内：暗淡茶色	草田1期	風化著しい
－5	137	遺物包含層	弥生土器	甕				外：平行沈線文 内：不明	やや粗（2～3㎜の砂粒含む）	外：暗灰色 内：暗灰色	草田2期	風化著しい
－6	137	遺物包含層	弥生土器	壺				外：平行沈線 内：ヨコナデ？，ヘラケズリ	粗（1～2㎜の砂粒を多く含む）	外：橙白色～灰白色 内：橙白色～灰白色	草田2期	
－7	137	遺物包含層	弥生土器	壺				外：断面3角形の突帯，爪形の刺突 内：不明	密（1㎜程度の砂粒を含む）	外：灰～白色 内：灰～白色	草田2期	
－8	137	遺物包含層	弥生土器	高坏か鉢		14.1		外：風化の為不明 内：風化の為不明	粗（1～2㎜の砂粒を多量に含む）	外：赤灰色 内：赤灰色		風化著しい
－9	137	遺物包含層	弥生土器	壺		17.8		外：ヨコナデ，口縁端部平坦面あり 内：調整不明	密	外：褐色 内：褐色	草田3期	風化著しい
－10	137	遺物包含層	土師器	鼓形器台			19.8	外：ヨコナデ？，摩滅により調整不明 内：ヘラケズリ？，摩滅により調整不明	密（1.5㎜以下の砂粒若干含む）	外：淡褐色 内：淡褐色	草田4期～5期	
239－1	138	遺物包含層	土師器	甕		28.7		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや粗（1～2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：橙色～淡橙色 内：橙色～淡橙色		
－2	138	遺物包含層	土師器	甑			16.8	外：ナデ，摩滅の為調整不明 内：ヘラケズリ？	やや密（2㎜以下の砂粒若干含む）	外：黄褐色 内：黄褐色		
－3	138	遺物包含層	須恵器	坏蓋	4.2	11.8		外：回転ナデ，ヘラ起こし 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（最大径2㎜以下の砂粒少し含む）	外：濃青灰色 内：青灰色	大谷6期	
－4	138	遺物包含層	須恵器	蓋	4.0	15.4		外：回転ナデ，ヘラケズリり 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1㎜程の砂粒ごく僅かに含む）	外：濃青灰色，濃緑灰色自然釉付 内：濃青灰色	7c中葉～末	輪状つまみ
－5	138	遺物包含層	須恵器	蓋	2.2	14.8		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（2㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：灰白色	7c末～8c後半	擬宝珠つまみ
－6	138	遺物包含層	須恵器	蓋	3.8	13.2		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密	外：青灰色 内：青灰色	8c末～9c前半	擬宝珠つまみ 焼き歪み
－7	138	遺物包含層	須恵器	蓋	3.2	13.1		外：回転ナデ，右回転糸切，ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	やや密（最大径2㎜以下の砂粒を多少含む）	外：暗青灰色 内：暗青灰色	8c末～9c前半	擬宝珠つまみ
－8	138	遺物包含層	須恵器	蓋		17.9		外：回転ナデ，ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや粗（最大径3㎜以下の砂粒をやや多く含む）	外：濃青灰色 内：濃青灰色	8c末～9c前半	
－9	138	遺物包含層	須恵器	蓋		14.8		外：回転ナデ，ヘラケズリ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（最大径2㎜以下の砂粒少し含む）	外：暗青灰色 内：暗青灰色	7c末～8c後半	
－10	138	遺物包含層	須恵器	蓋		17.0		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	密（2㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	8c末～9c前半	
－11	138	遺物包含層	須恵器	塊	5.5	16.0	8.4	外：右回転ナデ，ナデ 内：左回転ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色	8c中葉～後半	
－12	138	遺物包含層	須恵器	塊	4.2	11.4		外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：青灰色～赤銅色 内：赤銅色	8c中葉～後半	
－13	139	遺物包含層	須恵器	塊	4.0	11.1	7.0	外：右回転ナデ，右回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密	外：暗青灰色 内：暗青灰色	8c中葉～後半	
－14	139	遺物包含層	須恵器	塊	5.3	13.1	8.6	外：右回転ナデ，右回転糸切後ナデ 内：右回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（長石など2㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	8c中葉～後半	
－15	139	遺物包含層	須恵器	塊	3.4	12.2	8.4	外：回転ナデ，右回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密	外：青灰色 内：青灰色	8c中葉～9c	
－16	138	遺物包含層	須恵器	塊	3.9	9.6	7.6	外：回転ナデ，糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：黒褐色 内：黒褐色	8c中葉～9c	
－17	138	遺物包含層	須恵器	高台付塊	3.8	10.6	8.0	外：回転ナデ，右回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：暗青灰色 内：暗青灰色	8c後半～9c	
－18	139	遺物包含層	須恵器	高台付塊	6.6	18.5	10.2	外：右回転ナデ，静止糸切 内：右回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（長石など2㎜以下の砂粒を含む）	外：青灰色 内：青灰色	7c末～8c前半	
－19	138	遺物包含層	須恵器	高台付塊	4.5	14.2	9.2	外：右回転ナデ，静止糸切，静止糸切後ナデ 内：右回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（最大径4㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	7c末～8c前半	
－20	138	遺物包含層	須恵器	高台付塊	4.6	13.2	7.2	外：回転ナデ，ナデ，幅の狭い工具で刺突 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密	外：青灰色 内：青灰色	8c中葉～後半	
－21	139	遺物包含層	須恵器	塊	6.6	17.6	12.0	外：回転ナデ，右回転糸切 内：回転ナデ，回転糸切後ナデ	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	8c中葉～9c前半	
－22	138	遺物包含層	須恵器	高台付塊	6.5	15.4	11.9	外：回転ナデ，糸切後ナテ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（3㎜以下の砂粒少し含む）	外青灰色 内：青灰色	8c中葉～9c前半	
－23	138	遺物包含層	須恵器	高台付塊	4.8	12.0	8.4	外：回転ナデ，糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（だが，石粒が目立つ）	外：青灰色 内：青灰色	8c中葉～9c前半	
－24	140	遺物包含層	須恵器	高台付塊			6.2	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ	密（1㎜以下の砂粒僅かに含む）	外：灰白色 内：淡青灰色	9c	底部外面に「若口」墨書
－25	138	遺物包含層	須恵器	高台付塊	4.7	12.4	7.1	外：回転ナデ，右回転糸切 内：回転ナデ，ナデ	やや密（最大2㎜以下の砂粒多少含む）	外：青灰色 内：青灰色	9c	
－26	139	遺物包含層	須恵器	皿	2.5	11.9		外：回転ナデ，糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや密（1㎜以下の砂粒僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色	8c中葉～9c前半	
－27	139	遺物包含層	須恵器	高台付皿	3.9	18.6	12.8	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（砂粒少）	外：明茶褐色 内：明茶褐色	8c中葉～9c前半	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
239－28		遺物包含層	須恵器	高台付鉢			14.4	外：回転ナデ，静止糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密	外：青灰色 内：青灰色		
－29	139	遺物包含層	須恵器	盤		21.0		外：回転ナデ，ヘラケズリ 内：回転ナデ後ナデ	やや粗（最大径2㎜以下の砂粒を多く含む）	外：暗青灰色 内：暗青灰色	8ｃ後半	
－30		遺物包含層	須恵器	盤		14.4		外：回転ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（3㎜以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ末～9ｃ初頭	
－31	140	遺物包含層	須恵器	把手付鉢		25.0		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（微砂粒を少し含む）	外：濃青灰色 内：濃青灰色		
－32	140	遺物包含層	須恵器	壷底部			8.6	外：右回転ナデ，右回転糸切 内：右回転ナデ	やや粗（2㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：青灰色 内：青灰色		
－33	139，140	遺物包含層	須恵器	壷			14.2	外：回転ナデ，ヘラケズリ 内：回転ナデ	密（1㎜程の砂粒ごく僅かに含む）	外：淡赤褐色 内：淡赤褐色		
－34	139	遺物包含層	須恵器	壷	19.3	14.6	5.5	外：回転ナデ，タタキ 内：回転ナデ，タタキ	密（砂粒少）	外：青灰色，肩から上焼きただれ 内：青灰色		
－35	140	遺物包含層	須恵器	甕		16.0		外：回転ナデ，平行タタキ 内：回転ナデ，タタキ	密	外：青灰色 内：青灰色		
－36	140	遺物包含層	土製品	用途不明				外：ナデ 内：	やや密（1～2㎜の砂粒を含む）	外：淡赤灰色～灰色 内：		
－37	140	遺物包含層	土製品	用途不明				外：不明 内：不明	やや粗（2㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：褐色 内：褐色		摩滅著しい

木器

挿図番号	写真	出土地点	器種	長(L)	幅(W)	径(D)	厚(T)	高(H)	木取り	樹種	残存状況	備考
184－1	121	旧河道4	桶	18.0	12.4	21.2		2.2	竪木取り	スギ科スギ属スギ		
－2	121	旧河道4	盤？	29.1	6.8		2.1	2.4	横木取り	スギ科スギ属スギ		
189－3	121	ＳＥ01	四脚盤	38.6	7.6		1.8	4.2	横木取り	クワ科クワ属		
－4	121	ＳＥ01	井戸枠			77.8	10.4	45.2		ニレ科ケヤキ属ケヤキ		

石器・鉄製品

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	長	幅	厚	重量	石材	備考
123－4	114	ＳＩ01上層		鉄滓（鍛冶滓）	2.8	3.7	2.2	24.9		
124－27	114	ＳＢ01		鉄滓（鍛冶滓）	6.8	6.5	5.4	226.6		
132－5	114	北端		鉄滓（鍛冶滓）	5.0	4.7	3.6	87.3		
137－1	120	ＳＢ03－Ｐ4	石器	スクレイパー	4.9	1.5	1.0	6.8	黒曜石	
167－1	120	ＳＤ05	石器	石鏃	1.7	1.3	0.2	0.5	安山岩	
171－3	120	ＳＤ13	石器	石鏃	2.8	2.2	0.3	1.4	黒曜石	
183－21	120	旧河道4	石器	スクレイパー	6.9	5.7	1.6	50.7	黒曜石	
－22	120	旧河道4	石器	石鏃	2	1.6	6.5	1.8	黒曜石	
185－17	120	旧河道5	石器	石鏃	2.9	2.2	0.4	2.1	安山岩	
191－1	120	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	石器	磨、敲石	12.2	10.2	4.3	849.4		
－2	120	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	石器	磨石	9.9	10.5	3.2	454.9		
－3	120	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	石器	磨石（石材）	9.3	6.8	6.3	559.5		
－4	120	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	石器	敲石	8.5	7.9	5.1	507.2		
－5	120	ＳＥ01・ＳＤ20周辺	玉類	管玉	2.4	0.7		1.3	碧玉	淡緑色
197－7	122	ＳＩ02	石器	石器未製品	9.5	4.7	2.7	160.6	頁岩	
－8	122	ＳＩ02	石器	磨，敲石	9.1	8.4	3.5	418.8		
223－10	128	ＳＤ31	石製品	石帯	3.5	3.1	0.5	12.0		
231－7	131	ＳＫ13	石器	砥石	5.7	3.2	1.3	28.5	紅レン片岩	
236－7	137	ＳＸ03	石器	用途不明	23.7	8.8	4.4	1468.0		
237－1	137	ＳＸ03	古銭		径24.7	7.0	1.3	3.3		天聖元寶
－2	137	ＳＸ03	古銭		23.9	6.6	1.3	3.2		紹聖元寶
－3	137	ＳＸ03	古銭		22.8	6.0	1.4	3.5		照寧元寶
－4	137	ＳＸ03	古銭		24.6	5.8	1.4	2.7		政和通寶
－5	137	ＳＸ03	古銭		23.5	7.0	1.2	2.7		元祐通寶
－6	137	ＳＸ03	古銭		24.2	7.5	1.2	1.6		至和元寶
－7	137	ＳＸ03	古銭		237.0	6.3	1.2	2.0		祥符元寶
－8	137	ＳＸ03	古銭		224.0	6.3	1.4	2.8		皇宋通寶
－9	137	ＳＸ03	古銭		23.6	7.5	1.2	2.9		至和元寶
240－1	140	遺物包含層	石器	砥石	18.9	12.4	12.0	3660.0		

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
256－1	162	3トレンチ	埴輪	円筒埴輪		24.2		外：右上り縦のハケメ、ヨコナデ,ハケ後突帯貼付 内：左上りハケメ,ハケ後ヨコナデ,ナデ	密（1㎜以下の長石粒などをばらに含む）	外：橙褐色 内：橙褐色		ヘラ記号「𠂉」
－2	162	1トレンチ周堀	埴輪	円筒埴輪		25.5		外：縦方向ハケメ,突帯貼付にともないナデ 内：縦方向ナデ,突帯貼付にともないナデ	やや密（1㎜以下の長石・石英など砂粒含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		ヘラ記号「𠂇」
－3	162	8トレンチ	埴輪	円筒埴輪		24.6		外：摩滅の為調整不明 内：ハケメ，摩滅著しい	やや密（最大2.5㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		ヘラ記号「𠂉」
－4	162	3トレンチ	埴輪	円筒埴輪		23.2		外：ハケメ 内：ハケメ	密（最大径3㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：乳褐色 内：乳褐色		
－5	162	1トレンチ	埴輪	円筒埴輪		26.5		外：ハケメ 内：ハケメ，ナデ	やや密（1㎜程の砂粒多少含む）	外：乳橙褐色 内：乳橙褐色		
－6	162	1トレンチ	埴輪	円筒埴輪		21.2		外：左上りのハケメ 内：ナデ	やや密（1㎜程の砂粒を多少含む）	外：淡橙色 内：淡橙色		
－7	162	7トレンチ	埴輪	円筒埴輪				外：強いヨコナデ，右下がりのハケメ 内：強いヨコナデ，右下がりのハケメ	密（1㎜以下の長石粒など含む）	外：淡褐色 内：灰褐色		須恵質
－8	162	1トレンチ	埴輪	円筒埴輪				外：ハケメ 内：摩滅の為不明	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡橙褐色 内：乳白色		
－9	162	1トレンチ	埴輪	円筒埴輪				外：縦方向のハケメ 内：ナデ	密（1㎜ほどの砂粒を多少含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色		ヘラ記号「𠂉」
－10	162	3トレンチ	埴輪	円筒埴輪				外：左上りハケメ 内：左上りハケメ	密（2㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡肌色 内：淡肌色		ヘラ記号「𠂉」
257－1	163	3トレンチ	埴輪	埴輪片				外：左上りのハケ後突帯貼付によるナデ，B種横ハケ 内：縦方向ハケ，ナデ	やや密（2㎜以下の長石，石英粒含む）	外：淡赤褐色 内：淡赤褐色		
－2	163	3トレンチ	埴輪	円筒埴輪				外：ハケメ 内：ナデ？	やや密（2㎜以下の砂粒を多少含む）	外：乳褐色 内：乳褐色		
－3	163	4トレンチ	埴輪	円筒埴輪				外：調整不明 内：ナデ	やや密（2㎜以下の砂粒を多少含む）	外：橙褐色 内：橙褐色		須恵質
－4	163	2トレンチ	埴輪	底部				外：B種横ハケ 内：右下がりの強いナデ	密（1㎜以下の長石粒など含む）	外：黄灰色 内：黄灰色		須恵質
－5	163	8トレンチ	埴輪	不明			16.4	外：横方向のハケメ後縦方向のハケメ 内：ナデ	密（石英，長石など1㎜以下の砂粒含む）	外：黄褐色 内：黄褐色		
－6	162	1トレンチ	埴輪	底部片				外：縦方向のハケメ後突帯貼付にともなうナデ 内：縦方向のナデ	やや粗（長石，石英など1㎜以下の砂粒やや多く含む）	外：赤橙褐色 内：赤橙褐色		
－7	162	1トレンチ	埴輪	円筒埴輪			17.0	外：ハケメ 内：ナデ，指頭圧痕	やや密（2.5㎜以下の砂粒を多少含む）	外：乳褐色 内：乳褐色		
－8	163	8トレンチ	埴輪	朝顔形埴輪				外：ハケメ 内：ハケメ	密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：乳褐色 内：乳褐色		
－9	163	5トレンチ	埴輪	朝顔形埴輪				外：ハケメ，ナデ 内：ハケメ	密（1㎜程の砂粒を僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色		須恵質
－10	163	3トレンチ	埴輪	朝顔形埴輪				外：ハケメ 内：ハケメ	やや密（1㎜程の砂粒多少含む）	外：橙色 内：淡黄褐色		
－11	163	3トレンチ	埴輪	朝顔形埴輪				外：左上りのハケメ 内：左上りのハケメ	やや密（2㎜以下の長石粒含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		
258－1	164	8トレンチ	埴輪	人物埴輪			15.4×14.3	外：縦方向のハケメ，ナデ 内：ナデ，指頭圧痕	やや密（2㎜以下の長石・石英など含む）	外：橙褐色 内：橙褐色		基底～胴部・双脚
259－1	164	8トレンチ	埴輪	人物埴輪				外：ナデ，指頭圧痕 内：ナデ，指頭圧痕	やや粗（長石，石英などの3㎜以下の砂粒，砂礫含む）	外：黄橙色 内：黄橙色		頭部
－2	165	8トレンチ	埴輪	形象埴輪				外：指ナデ 内：	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：淡肌色 内：		
－3	165	8トレンチ	埴輪	形象埴輪				外：ナデ 内：	密（1㎜程の砂粒を僅かに含む）	外：淡橙色 内：		
－4	165	8トレンチ	埴輪	人物埴輪				外：ナデ 内：	やや粗（石英・長石など3㎜以下の砂粒・砂礫含む）	外：淡黄橙色 内：淡黄橙色		腕　ヘラ記号「×」
－5	165	8トレンチ	埴輪	人物埴輪				外：ナデ 内：	やや粗（石英・長石など2㎜以下の砂粒・砂礫を含む）	外：淡黄橙色 内：		腕
－6	165	8トレンチ	埴輪	人物埴輪				外：ナデ 内：	やや密（2㎜以下の砂粒を多少含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		腕
－7	165	8トレンチ	埴輪	人物埴輪				外：ナデ 内：ナデ	密（2㎜以下の砂粒僅かに含む）	外：淡橙色 内：淡橙色		腕
－8	165	8トレンチ	埴輪	形象埴輪				外： 内：	やや密（2㎜以下の砂粒を多少含む）	外：乳褐色 内：乳褐色		
－9	165	8トレンチ	埴輪	形象埴輪				外： 内：	やや密（最大径3㎜以下の砂粒を少し含む）	外：乳橙褐色 内：乳橙褐色		家型埴輪の屋根？
－10	165	8トレンチ	埴輪	形象埴輪				外： 内：	やや密（石英，長石など2㎜以下の砂粒含む）	外：橙褐色 内：橙褐色		家型埴輪？　網代状の線刻
－11	165	2トレンチ	埴輪	形象埴輪				外： 内：	密（1㎜程の砂粒をごく僅かに含む）	外：乳褐色 内：乳褐色		家型埴輪？　線刻

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
260－1	166	3トレンチ，8トレンチ	須恵器	高坏				外：回転ナデ，波状文 内：回転ナデ	密（1.5mm以下の長石粒など含む）	外：青灰色 内：青灰色	TK208並行	把手付
－2	166	3トレンチ	須恵器	腺				外：回転ナデ，沈線文，波状文 内：回転ナデ，指頭圧痕	密（2mm以下の砂粒を少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色		
－3	166	8トレンチ	須恵器	壷				外：回転ナデ，波状文 内：回転ナデ	密（1mm程の砂粒僅かに含む）	外：青灰色 内：青灰色		
－4	166	3トレンチ	須恵器	壷				外：回転ナデ，平行タタキ後カキメ，波状文 内：回転ナデ	密（最大径2mm以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色		自然釉付着
－5	166	3トレンチ	須恵器	筒形器台		14.3	27.4	外：回転ナデ，波状文，沈線文，刺突 内：回転ナデ，指頭圧痕	密（1mm以下の長石，石英含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色		壷部と台部 一体
－6	167	3トレンチ	須恵器	甕				外：回転ナデ，平行タタキ，自然釉付着 内：回転ナデ，同心円当て具痕後ナデ	やや密（最大径4mm以下の砂粒を多少含む）	外：濃青灰色 内：濃青灰色	TK208並行	自然釉付着
－7	167	3トレンチ	須恵器	甕				外：平行タタキ 内：同心円タタキ後ナデ	やや密（最大径4mm以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	TK208並行	
－8	167	3トレンチ	土師器	高坏				外：摩滅の為調整不明 内：底部に竹管状の棒で刺突	密（0.5mm以下の砂粒を少し含む）	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色		
－9	167	3トレンチ	土師器	高坏				外：摩滅の為調整不明 内：底部に竹管状の棒で刺突	密	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		
－10	167	3トレンチ	土師器	高坏				外：摩滅の為調整不明 内：底部に竹管状の棒で刺突	密	外：淡黄橙色 内：淡黄橙色		
264－1	168	2トレンチ	須恵器	蓋	3.3	12.4		外：回転ナデ後回転ヘラケズリ 内：回転ナデ後ナデ	やや密（1mm以下の砂粒を含む）	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	7c中葉～8c前葉	ヘラ記号「×」輪状つまみ
－2	168	2トレンチ	須恵器	蓋	1.9	15.6		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ後ナデ	密（1mm大の砂粒少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	7c末～8c前葉	輪状つまみ
－3	169	2トレンチ	須恵器	蓋	2.9	12.6		外：回転ナデ，回転糸切後ナデ 内：回転ナデ後ナデ	密（2mm以下の砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	8c末～9c前半	擬宝珠つまみ
－4	169	2トレンチ　SX01	須恵器	蓋	4.1	13.4		外：沈線文，回転ナデ 内：回転ナデ後ナデ	密	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	8c末～9c前半	擬宝珠つまみ
－5	168	2トレンチ	須恵器	塊	4.2	13.4	8.6	外：回転ナデ，右回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密	外：淡灰色 内：淡灰色	8c中葉～後半	ヘラ記号「×」
－6	168	2トレンチ	須恵器	塊	4.4	12.5	7.8	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1mm以下の砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	8c中葉～後半	
－7	169	2トレンチ	須恵器	塊	4.3	11.3	7.2	外：回転ナデ，右回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（5mm以下の砂粒含む，主に白砂粒）	外：青灰色 内：暗灰色	8c中葉～後半	
－8	169	2トレンチ	須恵器	塊	4.3	11.4	7.0	外：回転ナデ，回転ヘラ切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（3mm以下の白砂粒を少し含む）	外：淡紫灰色 内：淡紫灰色	8c中葉～後半	
－9	169	2トレンチ	須恵器	塊	4.1	11.6	7.2	外：回転ナデ，右回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（5mm以下の白砂少し含む）	外：青灰色 内：青灰色	8c中葉～後半	
－10	169	2トレンチ	須恵器	塊	4.2	10.4	7.1	外：回転ナデ，右回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後削止ナデ	密（最大径4mm以下の砂粒少し含む）	外：濃青灰色 内：濃青灰色	8c中葉～後半	底部外面に「木」の墨書
－11	169	2トレンチ	須恵器	塊			8.0	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後削止ナデ	密（2mm程の砂粒少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	8c中葉～後半	底部外面に「木」の墨書
－12	168	2トレンチ	須恵器	塊	3.9	12.0	8.0	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ後ナデ	密（5mm以下の砂粒を僅かと2mm以下の砂粒を含む）	外：暗灰色 内：暗灰色	8c中葉～9c前半	
－13	169	2トレンチ　SX01	須恵器	塊	4.5	10.8	7.8	外：回転ナデ，切り離し技法不明 内：回転ナデ後ナデ	やや密（2mm以下の砂粒若干含む）	外：黒色 内：淡灰色	9c中葉～後半	表面炭化物を吸着か？
－14	168	2トレンチ　SX01	須恵器	高台付塊		13.8		外：回転ナデ，ナデ 内：回転ナデ後ナデ	やや密（0.5mm以下の砂粒含む）	外：灰褐色 内：灰褐色	7c中葉～8c前葉	
－15	168	2トレンチ　SX01集石内	須恵器	高台付塊			8.0	外：回転ナデ，ヘラ起こし後高台貼付 内：回転ナデ後ナデ	密	外：淡灰色 内：淡灰色	7c中葉～8c前葉	
－16	168	2トレンチ	須恵器	高台付塊	4.7	13.1	9.3	外：回転ナデ，回転糸切後高台貼付，ナデ 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや密（3mm以下の白砂と小豆色の砂粒含む）	外：暗灰色 内：暗灰色	8c末～9c前半	
－17	169	2トレンチ	須恵器	高台付塊	3.8	12.3	9.5	外：回転ナデ，回転糸切後ナデ 内：回転ナデ後ナデ	密（1mm以下の白砂含む）	外：青灰色 内：青灰色	8c末～9c前半	
－18	169	2トレンチ	須恵器	高台付塊	4.2	11.9	9.1	外：回転ナデ，回転へら切り後高台貼付 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（1mm以下の白砂含む）	外：青灰色 内：青灰色	8c末～9c前半	
－19	170	2トレンチ	須恵器	高台付塊	4.8	10.9	7.2	外：回転ナデ，右回転糸切後高台貼付 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（最大径2mm以下の砂粒を多少含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色	8c末～9c前半	
－20	168	2トレンチ	須恵器	皿	1.9	14.4	8.8	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ後ナデ	密（1mm以下の砂粒を少し含む）	外：淡灰色 内：淡灰色	8c中葉～9c前葉	
－21	170	2トレンチ	須恵器	皿	2.1	15.2	11.7	外：回転ナデ，右回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	やや密（2mm以下の白色砂粒含む）	外：暗灰色～暗褐灰色 内：暗灰色～暗褐灰色	8c中葉～9c前葉	
－22	168	2トレンチ　SX01集石内	須恵器	高台付皿	2.2	17.4	13.8	外：回転ナデ，回転ヘラ切り 内：回転ナデ後ナデ	やや密（1mm以下の白砂と黒砂を含む）	外：青灰色 内：灰色	8c中葉～9c前葉	
－23	168	2トレンチ	須恵器	腺		9.6		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（0.5mm以下の砂粒を僅かに含む）	外：淡灰色 内：淡灰色	大谷6期～	
－24	168	2トレンチ	須恵器	壷				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（0.5mm以下の砂粒を僅かに含む）	外：灰白色 内：灰白色		
－25	168	2トレンチ	須恵器	壷				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（1mm程度の砂粒少し含む）	外：灰色 内：灰色		
－26	168	2トレンチ	須恵器	長頸壷				外：回転ナデ 内：回転ナデ，指頭圧痕	やや密（1mm以下の砂粒若干混じる）	外：暗灰色 内：暗灰色	大谷6期～7期	

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
264－27	170	2トレンチ　SX01集石	須恵器	壷				外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	密（0.5㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：淡青灰色～暗灰色 内：淡青灰色～暗灰色	大谷8期	
－28	170	2トレンチ	須恵器	横瓶		11.8		外：回転ナデ，タタキ 内：回転ナデ，当て具痕	密（砂粒少）	外：灰褐色 内：灰褐色	7ｃ	
－29	170	2トレンチ	須恵器	甕		10.3		外：回転ナデ，平行タタキ 内：回転ナデ，ナデ	やや密（2㎜以下の白砂含む）	外：暗灰色 内：暗灰色～青灰色		
－30	170	2トレンチ	須恵器	甕				外：回転ナデ 内：回転ナデ，当て具痕	密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：灰色 内：灰色		
－31	170	2トレンチ	須恵器	甕				外：平行タタキ 内：当て具痕	密	外：明茶褐色 内：明茶褐色		
－32	170	2トレンチ　SX01集石	須恵器	甕				外：平行タタキ 内：当て具痕	密	外：淡赤褐色～青灰色 内：紫灰白色		
265－1	170	2トレンチ　SX01	須恵器	甕				外：平行タタキ 内：タタキ	密（最大径1.5㎜以下の砂粒を少し含む）	外：青灰色 内：青灰色		
－2	170	2トレンチ　SX01集石	須恵器	甕		20.6		外：回転ナデ，ハケメ後タタキ 内：回転ナデ，タタキ	密	外：青灰色 内：青灰色		把手付
－3	170	2トレンチ	須恵器	大型鉢		36.4		外：回転ナデ，ナデ，平行タタキ 内：回転ナデ，当て具痕	密（砂粒少）	外：青灰色 内：青灰色	8ｃ中葉～後半	把手付
－4	170	2トレンチ	須恵器	甕				外：ナデ 内：ナデ，ヘラケズリ	やや粗（2㎜以下の砂粒やや多く入る）	外：暗黄褐色 内：暗黄褐色		
－5	170	2トレンチ　SX01集石	須恵器	甑（把手）				外：ナデ 内：	密（1㎜以下の砂粒少し含む）	外：灰褐色 内：		
－6	170	2トレンチ　SX01	須恵器	埦			5.4	外：回転ナデ，回転糸切 内：回転ナデ	密（1.5㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡褐色 内：淡褐色		
－7	170	2トレンチ　SX01	須恵器	高台付埦			5.3	外：摩滅の為調整不明 内：摩滅の為調整不明	やや密（1㎜以下の砂粒若干含む）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	10ｃ～11ｃ	

木製品

挿図番号	写真	出土地点	器種	長(L)	幅(W)	径(D)	厚(T)	高(H)	木取り	樹種	残存状況	備考
246－1	168	1トレンチ	柱根			77.8	10.4	45.2		ニレ科ケヤキ属ケヤキ		
265－8	168	2トレンチＳＸ01周辺	板材	62.8	23.4		2.1		板目			

石製品

挿図番号	写真	出土地点	種別	石材	長	径	厚	孔径	重量	色調	備考
276－1		1区	臼玉	滑石	4.1	4.0	2.1	1.3	0.05	灰褐色	
－2		1区	臼玉	滑石	4.0	4.0	1.7	1.5	0.04	黒褐色	
－3		1－8区	臼玉	滑石	3.7	3.9	1.7	1.4	0.03	淡青灰色	
－4		1－8区	臼玉	滑石	4.1	4.3	2.5	1.8	0.06	淡青灰色	
－5		1－8区	臼玉	滑石	4.1	4.1	2.6	1.2	0.04	青灰色	
－6		1－8区	臼玉	滑石	4.3	4.2	2.4	1.8	0.05	青灰色	錆付着
－7		1－8区	臼玉	滑石	4.2	4.2	1.5	1.8	0.04	淡青灰色	
－8		1－8区	臼玉	滑石	3.9	4.0	2.0	1.0	0.04	青灰色	
－9		1－8区	臼玉	滑石	4.5	4.4	3.0	1.6	0.06	青灰色	
－10		1－8区	臼玉	滑石	3.9	4.0	2.4	1.6	0.05	青灰色	
－11		1－8区	臼玉	滑石	4.4	4.3	2.2	1.3	0.05	青灰色	
－12		1－8区	臼玉	滑石	4.2	4.5	2.2	1.6	0.05	暗灰色	
－13		1－8区	臼玉	滑石	4.2	4.4	2.8	1.6	0.07	青灰色	
－14		2区	臼玉	滑石	4.1	3.9	2.0	1.8	0.04	黒褐色	
－15		2区	臼玉	滑石	3.9	3.8	1.7	1.6	0.03	黒褐色	
－16		2区	臼玉	滑石	3.9	3.9	2.0	1.8	0.04	黒褐色	
－17		2－7区　ベルト	臼玉	滑石	4.1	4.1	2.0	1.6	0.04	灰褐色	
－18		3区	臼玉	滑石	5.1	5.0	3.0	1.6	0.10	淡青灰色	
－19		3区	臼玉	滑石	4.5	4.5	2.2	1.4	0.06	淡緑灰色	
－20		3区	臼玉	滑石	4.6	5.0	4.9	1.6	0.17	淡青灰色	
－21		3区	臼玉	滑石	4.8	5.1	2.9	1.6	0.09	淡青灰色	
－22		3－4区	臼玉	滑石	3.5	3.8	2.6	1.3	0.05	淡緑灰色	
－23		3－4区	臼玉	滑石	3.9	4.0	2.6	1.2	0.07	淡緑灰色	
－24		4区	臼玉	滑石	5.0	4.5	4.2	1.5	0.10	暗灰色	
－25		4区	臼玉	滑石	4.0	3.8	2.3	1.5	0.03	緑灰色	
－26		4区	臼玉	滑石	5.4	4.0	3.0	1.5	0.07	暗灰色	
－27		4区	臼玉	滑石	4.1	3.5	1.8	1.4	0.04	淡緑灰色	

石製品

挿図番号	写真	出土地点	種別	石材	長	径	厚	孔径	重量	色調	備考
276－28		4区	臼玉	滑石	4.1	4.6	4.3	1.5	0.10	暗灰色	
－29		4区	臼玉	滑石	4.9	4.6	2.3	1.5	0.06	暗灰色	
－30		4区	臼玉	滑石	4.8	4.3	2.8	1.5	0.07	暗灰色	
－31		4区	臼玉	滑石	4.2	4.3	2.3	1.5	0.06	暗灰色	
－32		4区	臼玉	滑石	4.8	4.9	2.8	1.5	0.08	暗灰色	
－33		4区	臼玉	滑石	4.9	4.9	4.2	1.5	0.11	暗灰色	
－34		4区	臼玉	滑石	5.0	5.0	3.0	1.6	0.10	淡緑灰色	
－35		4区	臼玉	滑石	4.9	4.8	3.8	1.9	0.12	暗灰色	
－36		4区	臼玉	滑石	4.3	5.3	2.8	2.0	0.06	暗灰色	
－37		4区	臼玉	滑石	4.5	5.0	3.0	1.5	0.12	暗灰色	
－38		4区	臼玉	滑石	5.0	4.9	3.9	1.5	0.13	暗灰色	
－39		4区	臼玉	滑石	4.8	4.9	2.9	1.8	0.08	暗灰色	
－40		5区 縦ベルト	臼玉	滑石	4.9	5.0	2.0	1.8	0.09	暗灰色	
－41		5区 縦ベルト	臼玉	滑石	4.8	4.9	4.2	1.7	0.12	暗灰色	
－42		5区 横ベルト	臼玉	滑石	4.5	4.6	3.0	2.1	0.11	青灰色	
－43		5区 横ベルト	臼玉	滑石	5.1	4.9	2.3	1.9	0.07	青灰色	
－44		5区 横ベルト	臼玉	滑石	4.9	4.9	1.0	1.8	0.04	青灰色	
－45		5区 縦ベルト	臼玉	滑石	4.8	4.8	3.9	1.6	0.13	暗灰色	
－46		6区	臼玉	滑石	4.9	5.0	2.0	1.2	0.05	暗青灰色	
－47		6区	臼玉	滑石	4.9	4.8	1.5	1.8	0.05	青灰色	
－48		8区 縦ベルト	臼玉	滑石	4.2	4.4	2.7	2.0	0.05	黒灰色	
－49		8区 縦ベルト	臼玉	滑石	4.2	4.2	2.3	1.2	0.06	暗青灰色	
－50	178		臼玉	滑石	5.2	5.4	4.1	1.5	0.13	淡緑灰色	
－51		4区	臼玉	滑石	3.9	3.9	3.6	1.2	0.08	青灰色	
－52		4区	臼玉	滑石	5.2	4.7	3.5	1.8	0.10	暗緑灰色	
－53			臼玉	滑石	4.2	4.2	2.4	1.3	0.06	黒褐色	
－54			臼玉	滑石	4.2	3.9	2.3	1.4	0.04	灰褐色	
－55			臼玉	滑石	4.8	4.7	3.3	1.2	0.1	明灰褐色	
－56			臼玉	滑石	4.8	4.8	3.0	1.8	0.10	明灰褐色	
－57			臼玉	滑石	3.8	4.0	2.7	1.6	0.06	暗緑色	
－58			臼玉	滑石	4.6	4.5	3.4	1.3	0.09	灰白色	
－59			臼玉	滑石	4.7	4.8	3.6	1.5	0.11	灰白色	
－60			臼玉	滑石	4.8	4.8	3.4	1.5	0.09	灰白色	
－61			臼玉	滑石	4.5	4.8	3.8	1.1	0.11	灰白色	
－62			臼玉	滑石	5.0	5.1	2.5	1.6	0.08	灰白色	
－63			臼玉	滑石	4.7	4.7	4.1	1.1	0.10	灰白色	
－64			臼玉	滑石	4.7	5.4	3.4	1.7	0.10	青灰色	漆付着？
－65			臼玉	滑石	4.6	4.5	3.5	1.8	0.08	青灰色	
－66			臼玉	滑石	4.2	4.0	3.0	1.7	0.06	暗緑色	
－67			臼玉	滑石	4.7	4.6	2.7	1.7	0.08	暗灰色	
－68			臼玉	滑石	4.7	4.6	3.4	1.7	0.09	青灰色	漆付着？
－69	178		小玉	ガラス	5.9	4.7	4.7	1.8	0.15	青緑色	
－70	178	主体部周辺	小玉	ガラス	3.2	3.3	2.4	0.6	0.04	青紫色	
－71	178	7区	小玉	ガラス	2.1	2.6	1.8	0.7	0.02	淡青色	

鉄器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	全長	刃部長	茎長	関幅	茎最大幅	茎最小幅	厚さ	備考
270－1	171, 172	1，2区	鉄器	鉄剣	(63.3)			5.3			1.0	
－2	171	1，2区	鉄器	鉄剣	(54.1)			(4.5)			0.8	
－3	171	1，2区	鉄器	鉄刀	(65.1)			(3.2)			0.9	
－4	171	5，6区	鉄器	鉄剣	75.0	59.6	15.4	4.0	(3.3)	(1.5)	0.9	
－5	171	3，4区	鉄器	鉄剣	(47.5)			(3.8)			1.1	
271－1	172	1区	鉄器	刀子	(9.5)	(7.6)	(1.9)	1.6	1.1	(0.8)	0.5	
－2	173	5区	鉄器	刀子	(6.2)	(2.9)	3.3	1.4	1.2	0.7	0.3	鹿角
－3	173	2区	鉄器	刀子	(7.0)	(3.6)	(3.4)	1.8	1.0	(0.9)	0.4	鹿角
－4	173	2区	鉄器	刀子	(8.1)	(5.1)	3.0	1.5	1.0	0.7	0.3	鹿角

鉄器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	全長	刃部長	茎長	関幅	茎最大幅	茎最小幅	厚さ	備考
271－5	173	5区	鉄器	刀子	(3.5)		(3.5)		1.0	(0.8)	0.4	鹿角
－6	173	6区	鉄器	刀子	(4.6)	(1.6)	3.0	(1.4)	1.1	(0.8)	0.3	鹿角
－7	173	4区	鉄器	刀子	(3.3)	(0.5)	2.8	1.3	0.9	0.4	0.3	鹿角
－8	173	4区	鉄器	刀子	(4.6)	(4.6)		(1.0)			0.3	
－9	173	2区	鉄器	刀子	(4.4)	(1.4)	(3.0)	1.4	0.9	(0.6)	0.3	
－10	174	4区	鉄器	ヤリガンナ	(7.6)						0.6	
－11	173	4区	鉄器	ヤリガンナ	(3.8)				(1.1)	(0.2)	0.3	鹿角

短甲

挿図番号	写真	出土地点	種別	部位	長さ	幅	厚さ	備考
272－1	175	1－8区	短甲	後胴押付板～地板	12.9	47.3	0.2	覆輪部に革組遺存　黒漆膜付着
272－2	175,176	1－8区	短甲	前胴押付板か	6.2	3.9	0.2	
272－3	175,176	1－8区	短甲	前胴押付板か	4.4	5.6	0.2	覆輪部に革組遺存　黒漆膜付着
272－4	175,176	1－8区	短甲	後胴左脇部（押付板～長側第3段）	15.5	9.4	0.2	
272－5	175,176	1－8区	短甲	前胴左脇部（裾板）	4.8	7.0	0.2	
272－6	175,176	1－8区	短甲	前胴左脇部か（長側第1～3段か）	5.7	6.9	0.2	前胴前の可能性もあり
272－7	175,176	1－8区	短甲	後胴左脇部か（長側第3～4段）	8.5	6.4	0.2	前胴前縁部の可能性もあり
273－8	175,176	1－8区	短甲	前胴右脇部	34.0	18.8	0.2	
273－9	175,176	1－8区	短甲	後胴右脇部	24.4	11.0	0.2	
273－10	175,176	1－8区	短甲	蝶番金具	3.3	1.3	0.2	

下がり松遺跡

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
282－1	199	S I 01	弥生土器	甕		20.8		外：ヨコナデ，凹線 内：ヨコナデヘラケズリ	2㎜以下の砂粒含む	外：淡乳褐色 内：淡黄褐色	草田2期	風化著しい
－2	199	S I 01	弥生土器	甕		18.0		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	2㎜以下の白砂少量含む	外：淡黄褐色 内：黄白色	草田2期か	
283－1	199	S B01	須恵器	甕				外：格子タタキ 内：同心円タタキ	密　1㎜以下の細砂粒含む	外：暗青灰色 内：暗青灰色		
284－1	199	S B03	須恵器	甕				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	1㎜以下の白砂少量含む	外：淡灰色 内：淡灰色		
285－1	199	S B04	須恵器	甕				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	1㎜以下の白砂含む	外：暗青灰色 内：青灰色		
287－1	199	S B06	須恵器	坏蓋	1.8	12.8		外：ヘラケズリのちナデ，回転ナデ 内：ヨコナデ，不定ナデ	1㎜以下の砂粒を含む	外：黒灰色 内：暗青灰色		
－2	199	S B06	須恵器	高台付埦			8.4	外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒を含む	外：青灰色 内：薄青灰色		
－3	199	S B06	須恵器	甕		17.4		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒を含む	外：暗灰色 内：暗青灰色		
－4	199	S B06	須恵器	甕				外：回転ナデ，平行タタキのちナデ 内：回転ナデ，放射状タタキ	1㎜以下の砂粒を含む	外：暗青灰色 内：暗青灰色		
－5	199	S B06	須恵器	甕	2.9			外：回転ナデ，平行タタキ 内：回転ナデ，同心円タタキ	1㎜以下の白砂を少量含む	外：暗青灰色 内：暗青灰色		
288－1	200	S B07	須恵器	坏蓋	3.3	18.6		外：回転ナデ，ナデ 内：回転ナデ，ナデ	やや密　1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡灰色 内：淡灰色		
－2	200	S B07	須恵器	坏蓋	2.0	13.2		外：回転ナデ，ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	やや密　2㎜以下の砂粒多く含む	外：青灰色 内：青灰色		
－3	200	S B07	須恵器	坏蓋	1.8		13.8	外：回転ナデ，回転糸切り後のちナデ 内：回転ナデ，ナデ	やや密　2㎜以下の砂粒少量含む	外：青灰色 内：青灰色		
－4	200	S B07	須恵器	埦		11.6		外：回転ナデ，ナデ 内：回転ナデ	密　1㎜以下の砂粒含む	外：青灰色 内：灰白色		
－5	200	S B07	須恵器	高台付埦			11.4	外：回転ナデ，回転糸切りのちナデ 内：回転ナデ，ナデ	やや密　1㎜以下の砂粒を多く含む	外：青灰色 内：青灰色		
－6	200	S B07	須恵器	高台付埦	4.1	13.4	8.8	外：回転ナデ，ナデ 内：回転ナデ	密　1㎜以下の砂粒含む	外：青灰色 内：青灰色		
－7	200	S B07	土師器	埦			6.0	外：ヨコナデ，回転糸切り 内：ナデ	密	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色		
288－8	200	S B07	須恵器	高台付埦	8.7	20.8	10.8	外：回転ナデ，回転糸切りのちナデ 内：回転ナデ，ナデ	密　1㎜以下の砂粒を少量含む	外：淡黄灰色 内：淡黄灰色		
－9	200	S B07	土師器	甕		30.4		外：ナデ，ハケメ 内：ハケメ，ヘラケズリ	やや粗　2㎜以下の砂粒少量含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		風化著しい

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
288－10	200	SB07	土師器	甕			45.0	外：ハケメ 内：ヘラケズリ	粗 0.5～3㎜大の砂粒多く含む	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色		
289－1	200	SB08	須恵器	高台付埦			8.1	外：回転ナデ，ナデ，静止糸切りのちナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：黄灰色 内：黄灰色		
291－1		SB09	須恵器	埦			8.4	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ	密 1㎜以下の砂粒含む	外：灰褐色 内：灰褐色		風化著しい
293－1	200	SB10	須恵器	埦	4.0	11.2	8.6	外：回転ナデ，糸切り後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	やや密 1㎜以下の砂粒少量含む	外：青灰色 内：青灰色		
－2	200	SB10	土師器	埦			5.8	外：ナデ 内：ナデ	やや密 1㎜以下の砂粒少量含む	外：橙褐色 内：橙褐色		
294－1	200	SB11	土師器	埦			5.0	外：ヨコナデ，ナデ 内：ヨコナデ，ナデ	密	外：淡赤褐色 内：淡赤褐色		
－2	200	SB11	土師器	甕				外：ハケメ 内：ハケメ，ヘラケズリ	やや密 2㎜以下の砂粒少量含む	外：暗淡黄褐色 内：暗淡黄褐色		
－3	200	SB11	須恵器	甕		23.0		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密 1㎜以下の砂粒含む	外：黄灰色 内：黄灰色		灰かぶり
296－1	199	加工段1	弥生土器	甕		32.4		外：凹線，ハケメ 内：ナデ，ヘラケズリ	3㎜以下の砂粒多く含む	外：茶褐色 内：淡茶褐色	草田2期	
－2	199	加工段1	弥生土器	底部			7.4	外：ナデ 内：ナデ	3㎜以下の砂粒多く含む	外：淡赤褐色 内：淡黄褐色		風化著しい
298－1	199	加工段2	土師器	高坏（坏部）				外：ナデ 内：ナデ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：薄黄褐色 内：薄茶褐色		
－2	199	加工段2	須恵器	甕		18.2		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜ほどの砂粒含む	外：暗灰色 内：暗青灰色		
－3	199	加工段2	須恵器	甕		17.9		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の白砂を多く含む	外：淡青灰色 内：淡青灰色		
－4	199	加工段2	土師質土器	高台付埦			7.3	外：ナデ？ 内：ナデ？	1㎜以下の砂粒含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色		風化著しい
－5	199	加工段2	須恵器	甕片				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	1㎜以下の白砂を含む	外：暗灰色 内：暗青灰色		
－6	199	加工段2	須恵器	甕片				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	1㎜以下の砂粒含む	外：淡灰色 内：淡灰色		
－7	199	加工段2	須恵器	甕片				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	1㎜以下の砂粒含む	外：淡灰色 内：淡灰色		
－8	199	加工段2	須恵器	甕片				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	2㎜以下の砂粒含む	外：青灰色 内：淡灰色		
302－1	199	SD01	弥生土器	甕（底部）			5.1	外：ナデ，ハケメ 内：ナデ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：薄乳褐色 内：薄乳褐色		
－2	199	SD01	土師器	甕		23.2		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1㎜以下の白砂少量含む	外：暗茶褐色 内：茶褐色		
－3	199	SD01	土師質土器	高台付埦				外：ナデ 内：ナデ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：薄乳褐色 内：淡黄褐色		風化著しい
－4	199	SD01	土師質土器	高台付埦				外：ナデ 内：ナデ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡赤褐色 内：淡赤褐色		風化著しい
－5	199	SD01	土師質土器	高台付埦			6.2	外：ヨコナデ，糸切りのちナデ 内：ヨコナデ，不定ナデ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		
－6	199	SD01	須恵器	灯明皿	2.3	8.6	6.4	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ	1㎜程度の白砂を含む	外：淡青灰色 内：淡青灰色		
－7	199	SD01	須恵器	壺			8.6	外：回転ナデ，回転ヘラケズリ，回転糸切り 内：回転ナデ	2㎜以下の砂粒含む	外：青灰色 内：青灰色		
－8	199	SD01	須恵器	甕		19.4		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：暗青灰色 内：暗青灰色		
－9	199	SD01	須恵器	甕か			7.3	外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色		風化著しい
－10	199	SD01	須恵器	甕片				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	2㎜以下の白砂少量含む	外：青灰色 内：暗青灰色		
－11	199	SD01	須恵器	甕片				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：淡青灰色 内：淡青灰色		
－12	199	SD02	土師器	甕				外：ハケメ 内：ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒含む	外：黒褐色 内：淡黒褐色		
－13	199	SD02	須恵器	坏蓋	1.5	15.6		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の白砂を含む	外：淡青灰色 内：淡青灰色		
－14	199	SD02	須恵器	高台付埦			8.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒含む	外：青灰色 内：青灰色		
－15	199	SD02	須恵器	甕				外：格子タタキ 内：同心円タタキ	密	外：薄青灰色 内：薄青灰色		
304－1	201	SD04	弥生土器	甕		19.2		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	7㎜程度の石を含む	外：黄褐色 内：黄褐色	草田5～6期	
－2	201	SD04	弥生土器	甕		19.5		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	3㎜以下の砂粒多く含む	外：淡乳褐色 内：淡黄褐色	草田5～6期	
－3	201	SD04	弥生土器	甕		15.9		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒含む	外：黄褐色 内：黄褐色	草田5～6期	
－4	201	SD04	弥生土器	低脚杯				外：ヨコナデ？ 内：ヨコナデ？	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色	草田5～6期か	風化著しい

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
308－1	201	SD08	須恵器	甕				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	1㎜以下の砂粒含む	外：青灰色 内：淡灰色		
314－1	201	SD14	弥生土器	壺		25.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の白砂少量含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田2期か	
－2	201	SD14	弥生土器	甕		22.6		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色	草田2期	
－3	201	SD14	土師器	甕		17.2		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	5㎜以下の白砂少量含む	外：薄乳褐色 内：薄乳褐色		
－4	201	SD14	土師器	高坏（底部）			10.1	外：ミガキ，ヨコナデ 内：シボリ，ハケメ	1㎜以下の砂粒含む	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色	松山Ⅱ～Ⅲ期	
－5	201	SD14	土師質土器	皿			4.2	外：回転ナデ，回転糸切り 内：不定ナデ	1㎜以下の白砂少量含む	外：薄乳褐色 内：薄乳褐色		
－6	201	SD14	須恵器	坏蓋				外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒含む	外：青灰色 内：青灰色		
－7	201	SD14	須恵器	坏身	3.35	11.2		外：回転ナデ，回転ヘラケズリのちナデ 内：回転ナデ，不定ナデ	1㎜以下の白砂を含む	外：暗青灰色 内：暗青灰色	大谷6期	
－8	201	SD14	須恵器	坏身	3.7	9.2		外：回転ナデ，ヘラキリ 内：回転ナデ	1㎜以下の白砂少量含む	外：青灰色 内：青灰色	大谷6期	
－9	201	SD14	須恵器	埦	3.9	11.2	7.2	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	2㎜以下の白砂含む	外：暗灰色 内：暗灰色		
－10	201	SD14	須恵器	埦		12.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1㎜以下の白砂少量含む	外：暗青灰色 内：暗青灰色		
－11	201	SD14	須恵器	甕片				外：回転ナデ，平行タタキ 内：回転ナデ，同心円タタキ	3㎜以下の砂粒含む	外：淡青灰色 内：黒灰色		
－12	201	SD14	須恵器	甕片				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：暗青灰色 内：暗青灰色		
－13	201	SD14	須恵器	甕片				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：黒灰色 内：暗青灰色		
315－1	201	SD15	弥生土器	甕		20.5		外：平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡乳褐色 内：淡茶褐色	草田2期	風化著しい
－2	201	SD15	弥生土器	甕		18.6		外：平行沈線文，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色	草田3期	
－3	201	SD15	弥生土器	甕		15.4		外：平行沈線文，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色	草田2期	
－4	201	SD15	弥生土器	甕		19.4		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ？	3㎜以下の白砂多く含む	外：薄乳褐色 内：薄乳褐色	草田3期	
－6	201	SD15	弥生土器	甕		20.4		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒少量含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田3期	
－7	201	SD15	弥生土器	甕		13.4		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田3期	
－8	201	SD15	弥生土器	壺		22.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田2期	風化著しい
－9	201	SD15	弥生土器	底部			6.1	外：ナデ 内：ヘラケズリ，指頭圧痕	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡茶褐色 内：淡灰褐色		
－10	201	SD15	土師器	高坏				外：ナデ 内：ナデ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡白褐色 内：淡乳褐色		
－11	202	SD15	須恵器	坏蓋	1.1			外：回転ナデ 内：回転ナデ		外：青灰色 内：青灰色		
－12	202	SD15	須恵器	高坏				外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の白砂を少量含む	外：青灰色 内：青灰色		
－13	202	SD15	須恵器	埦		11.9		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の白砂含む	外：暗青灰色 内：暗青灰色		
－14	202	SD15	須恵器	甕		25.4		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：青灰色 内：青灰色		
－15	202	SD15	須恵器	甕				外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の白砂多く含む	外：青灰色 内：青灰色		
－16	202	SD15	須恵器	皿		14.4		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の白砂多く含む	外：淡青灰色 内：淡青灰色		
－17	202	SD15	須恵器	甕片				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	1㎜以下の白砂少量含む	外：淡青灰色 内：淡青灰色		
－18	202	SD15	須恵器	甕片				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	1㎜以下の砂粒含む	外：暗青灰色 内：青灰色		
－19	202	SD16	須恵器	甕				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：暗灰色 内：暗灰色		
317－1	202	SD17	土師器	甕		28.7		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒少量含む	外：黒褐色 内：橙褐色		
－2	202	SD17	土師器	甕		10.0		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の白砂少量含む	外：淡黄褐色 内：黄褐色		
－3	202	SD17	土師質土器	皿			6.6	外：回転糸切り？，ヨコナデ 内：ヨコナデ	1㎜以下の砂粒含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		
－4	202	SD17	須恵器	皿				外：回転ナデ 内：回転ナデ，不定ナデ	2㎜以下の砂粒含む	外：青灰色 内：青灰色		
－5	202	SD17	須恵器	甕				外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：青灰色 内：青灰色		

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
317－6	202	SD17	須恵器	甕				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	1㎜以下の砂粒含む	外：淡橙灰色 内：淡黄灰色		
－7	202	SD17	須恵器	甕				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	1㎜以下の白砂多く含む	外：淡灰色 内：薄灰色		
319－1	202	SD18	土師器	高坏		21.8		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色	松山Ⅱ期	
323－1	202	SK06	須恵器	甕				外：格子タタキ 内：同心円タタキ	密　1㎜以下の細砂粒含む	外：淡青灰色 内：淡青灰色		
－2	202	SK06	須恵器	甕				外：格子タタキ 内：同心円タタキ	密	外：淡青灰色 内：淡青灰色		
－3	202	SK15	須恵器	埦			6.5	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒含む	外：暗青灰色 内：暗茶灰色		
－4	202	SK16	須恵器	埦				外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒含む	外：淡青灰色 内：淡青灰色		
325－1	202	SX01	弥生土器	甕		21.6		外：平行沈線文 内：ナデ，ケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡黄白色 内：淡黄白色	草田２期	風化著しい
－2	202	SX01	弥生土器	甕		19.5		外：平行沈線文，ナデ 内：ナデ，ケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	草田２期	
－3	202	SX01	弥生土器	甕		22.8		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の白砂少量含む	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	草田２期	
－4	202	SX01	弥生土器	甕		17.8		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡黄褐色 内：淡乳褐色	草田４～５期	
－5	202	SX01	須恵器	甕		19.4		外：回転ナデ，平行タタキ 内：回転ナデ，同心円タタキ	1㎜以下の白砂多く含む	外：淡青灰色 内：淡青灰色		
－6	202	SX01	土師質土器	皿	1.7		5.9	外：ナデ，回転糸切り 内：ナデ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色		風化著しい
－7	202	SX01	須恵器	皿	1.6	8.9	3.6	外：回転ナデ，ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：乳白色 内：乳白色		
－8	202	SX01	須恵器	壺				外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の白砂少量含む	外：淡灰色 内：淡灰色		
－9	202	SX01	須恵器	甕片				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	1㎜以下の白砂少量含む	外：灰色，暗灰色 内：暗灰色		
－10	202	SX01	須恵器	甕片				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡灰色 内：淡青灰色		
326－1	203	SX02	弥生土器	甕		21.3		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	3㎜以下の砂粒多く含む	外：薄乳褐色 内：薄乳褐色	草田２期	
－2	203	SX02	弥生土器	甕		12.8		外：平行沈線文，ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：淡茶褐色 内：乳褐色	草田２期	
－3	203	SX02	弥生土器	器台		32.5		外：平行沈線文，ヨコナデ 内：ミガキ	2㎜以下の砂粒含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田３期	風化著しい
－4	203	SX02	弥生土器	甕		15.4		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の白砂多く含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色	草田４～５期	
－5	203	SX02	弥生土器	甕		17.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の白砂多く含む	外：茶褐色 内：茶褐色	草田４～５期	
－6	203	SX02	弥生土器	甕		12.8		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の白砂少量含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田４～５期	
－7	203	SX02	弥生土器	甕		20.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の白砂多く含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	草田４～５期	
－8	203	SX02	弥生土器	甕		26.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の白砂多く含む	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色	草田４～５期	
－9	203	SX02	弥生土器	甕		17.5		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の白砂少量含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色	草田４～５期	
－10	203	SX02	土師器	低脚杯か			7.6	外：ナデ 内：ナデ	2㎜以下の砂粒多く含む	外：黄褐色 内：褐色		
－11	203	SX02	弥生土器	器台	14.4	21.9	19.8	外： 内：ケズリ	密	外：淡赤褐色 内：淡乳褐色	草田４～５期	風化著しい
－12	203	SX02	土師器	壺		20.8		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	2㎜以下の砂粒含む	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色	草田６～７期	風化著しい
－13	203	SX02	土師器	底部			8.9	外： 内：	密	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色		12と同一個体か
－14	204	SX02	土師質土器	埦	4.0	15.4	5.0	外：ナデ，回転糸切り 内：ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色		
－15	204	SX02	土師質土器	埦			5.6	外：ナデ，回転糸切り 内：ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：淡桃褐色 内：淡桃褐色		
－16	204	SX02	土師器	甕				外：ナデ 内：ナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		風化著しい
－18	204	SX02	須恵器	甕片				外：平行タタキ 内：放射状タタキのちナデか	2㎜以下の砂粒含む	外：淡灰色 内：淡乳褐色		風化著しい
－19	204	SX02	須恵器	甕片				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	1㎜以下の白砂多く含む	外：暗灰色 内：暗灰色		
327－1	204	第Ⅳ層	弥生土器	甕		17.0		外：ヨコナデ，平行沈線文 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色	草田２期	
－2	204	第Ⅳ層	弥生土器	甕		16.4		外：回転ナデ 内：回転ナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の白砂多く含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色	草田４～５期	外面に煤付着

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
326－3	204	第Ⅱ層	土師質土器	埦		17.6		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の白砂含む	外：黒灰色 内：薄灰色		
－4	206	第Ⅱ層	土師質土器	埦	4.8	11.5	6.9	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ	2㎜以下の白砂含む	外：淡乳褐色 内：淡乳褐色		
－5	204	第Ⅱ層	土師器	甕		33.7		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：灰褐色 内：灰褐色		
－6	204	第Ⅱ層	土師器	甕		32.4		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の白砂多く含む	外：薄乳褐色 内：薄乳褐色		
－7	204	第Ⅱ層	土師器	甕		28.4		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		
－8	204	第Ⅱ層	土師器	製塩土器				外：ナデ 内：ナデ	1㎜以下の白砂多く含む	外：淡褐色 内：淡褐色		
－9	204	第Ⅱ層	土製品	土製支脚				外：ナデ 内：ナデ	1㎜以下の白砂多く含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色		
328－1	204	第Ⅱ層	須恵器	坏蓋	2.5	13.7		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡青灰色 内：暗青灰色		
－2	204	第Ⅱ層	須恵器	坏蓋	2.2	17.2		外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：青灰色 内：青灰色		ゆがみが著しい
－3	204	第Ⅱ層	須恵器	高台付埦	4.3	14.3	9.4	外：回転ナデ，回転糸切りのちナデ 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：青灰色 内：青灰色		
－4	204	第Ⅱ層	須恵器	高台付埦	4.7	12.8	9.0	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の白砂含む	外：青灰色 内：青灰色		
－5	204	第Ⅱ層	須恵器	高台付埦	4.5	12.7	8.8	外：回転ナデ，回転糸切りのちナデ 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の白砂多く含む	外：青灰色 内：青灰色		
－6	205	第Ⅱ層	須恵器	高台付埦	5.8	16.5	11.0	外：回転ナデ，回転糸切りのちナデ 内：回転ナデ，ナデ	1㎝以下の白石多く含む	外：青灰色 内：茶灰色		
－7	204	第Ⅱ層	須恵器	高台付埦	6.0	6.4	10.6	外：回転ナデ，回転糸切りのちナデ 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の白砂多く含む	外：青灰色 内：青灰色		
－8	204	第Ⅱ層	須恵器	高台付埦	5.7	15.5	10.4	外：回転ナデ，回転糸切りのちナデ 内：回転ナデ，ナデ	2㎜以下の砂粒含む	外：暗青灰色 内：暗青灰色		
－9	204	第Ⅱ層	須恵器	高台付埦	5.4	15.8	10.4	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の白砂少量含む	外：青灰色 内：青灰色		
－10	205	第Ⅱ層	須恵器	埦	4.4	10.8	7.6	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の白砂少量含む	外：青灰色 内：青灰色		
－11	205	第Ⅱ層	須恵器	埦	3.7	11.1	8.0	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：暗青灰色 内：暗青灰色		
－12	205	第Ⅱ層	須恵器	埦	3.6	10.7	8.7	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎜ほどの白砂含む	外：暗青灰色 内：暗青灰色		
－13	205	第Ⅱ層	須恵器	埦	3.8	11.0	8.8	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の白砂少量含む	外：青灰色 内：青灰色		
－14	205	第Ⅱ層	須恵器	埦	4.2	13.0	10.0	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の白砂少量含む	外：青灰色 内：青灰色		
－15	205	第Ⅱ層	須恵器	埦	4.4	12.2	9.0	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の白砂多く含む	外：淡青灰色 暗青灰色 内：淡青灰色		
－16	205	第Ⅱ層	須恵器	埦	4.4	11.9	8.0	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の白砂含む	外：淡青灰色 内：淡青灰色		
－17	205	第Ⅱ層	須恵器	埦	4.8	12.0	7.6	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の白砂含む	外：暗青灰色 内：暗青灰色		
－18	205	第Ⅱ層	須恵器	埦	4.5	12.6	9.6	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の白砂含む	外：淡灰色 内：淡灰色		
－19	205	第Ⅱ層	須恵器	埦	3.6	12.5	7.5	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の砂粒少量含む	外：薄青灰色 内：薄青灰色		
－20	205	第Ⅱ層	須恵器	埦	4.3	12.5	8.0	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	2㎜以下の砂粒含む	外：淡青灰色 内：淡青灰色		
－21	205	第Ⅱ層	須恵器	埦	4.0	11.5	7.2	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	2㎜以下の白砂含む	外：青灰色 内：淡青灰色		
－22	205	第Ⅱ層	須恵器	埦	4.9	15.2		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の白砂少量含む	外：暗青灰色 内：暗青灰色		
－23	205	第Ⅱ層	須恵器	埦	3.0	13.8		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜以下の白砂多く含む	外：暗青灰色 内：暗青灰色		
－24	205	第Ⅱ層	須恵器	皿	2.3	13.4	8.9	外：回転ナデ，回転糸切りのちナデ 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：青灰色 内：青灰色		
－25	205	第Ⅱ層	須恵器	皿	2.3	15.7	11.0	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎝以下の白石多く含む	外：灰白色 内：灰白色		
－26	205	第Ⅱ層	須恵器	皿	2.1	15.0	11.0	外： 内：	密	外：淡青灰色 内：淡青灰色		風化著しい
－27	205	第Ⅱ層	須恵器	皿	2.5	14.6	10.0	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の白砂含む	外：薄青灰色 内：薄灰色		底部にヘラ記号「×」
－28	205	第Ⅱ層	須恵器	皿	2.4	14.0	8.7	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の白砂含む	外：暗青灰色 内：暗青灰色		
－29	205	第Ⅱ層	須恵器	皿	2.4	14.5	8.5	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の白砂多く含む	外：青灰色 内：青灰色		風化著しい
－30	205	第Ⅱ層	須恵器	皿	2.4	13.6	9.0	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	密	外：薄青灰色 内：薄青灰色		

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
328－31	205	第Ⅱ層	須恵器	高台付皿	3.0	17.6	12.0	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	密	外：暗灰色 内：暗灰色		
－32	205	第Ⅱ層	須恵器	高台付皿	3.6	19.4	11.6	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の白砂少量含む	外：暗灰色 内：暗灰色		
－33	205	第Ⅱ層	須恵器	盤			16.5	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の白砂含む	外：淡青灰色 内：淡茶褐色 内：淡青灰色 淡茶褐色		
－34	205	第Ⅱ層	須恵器	盤			15.0	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の砂粒を多く含む	外：薄青灰色 内：暗青灰色		内面に自然釉付着
－35	205	第Ⅱ層	須恵器	短頸壺		10.1		外：回転ナデ，沈線 内：回転ナデ，ナデ	2㎜以下の白砂少量含む	外：暗青灰色 内：薄青灰色		
－36	205	第Ⅱ層	須恵器	甕				外：回転ナデ，平行タタキ 内：回転ナデ，同心円タタキ	2㎜ほどの白砂少量含む	外：暗青灰色 内：暗青灰色		
－37	205	第Ⅱ層	須恵器	甕		27.8		外：回転ナデ 内：回転ナデ	2㎜以下の砂粒含む	外：青灰色 内：青灰色		
－38	205	第Ⅱ層	須恵器	甕片				外：平行タタキ 内：同心円タタキ	1㎜以下の白砂多く含む	外：淡灰色 内：淡灰色		
－39	205	第Ⅱ層	須恵器	甕片				外：平行タタキ 内：同心円タタキのちナデ	1㎜以下の白砂少量含む	外：淡灰色 内：淡灰色		
329－1	206	第Ⅱ層	須恵器	壺			7.8	外：回転糸切り，回転ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密	外：薄青灰色 内：薄青灰色		墨書アリ「万福」か
－2	206	第Ⅱ層	須恵器	壺			9.2	外：回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	密　1㎜以下の砂粒少量含む	外：暗茶灰色 内：暗茶灰色		墨書アリ「澤」か
－3	206	第Ⅱ層	須恵器	杯蓋（転用硯）				外：回転ナデ，回転ヘラケズリ 内：研磨	密　1㎜以下の細砂粒含む	外：暗青灰色 内：暗青灰色		
331－1	206	遺構に伴わない	弥生土器	甕		20.0		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	布田4～5期	
－2	206	遺構に伴わない	土師器	甕		34.6		外：ヨコナデ，ハケメ 内：ヨコナデ，ハケメ，ヘラケズリ	3㎜以下の砂粒多く含む	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色		
－3	206	遺構に伴わない	須恵器	壺	4.3	10.8	7.3	外：回転ナデ，回転糸切り 内：回転ナデ，ナデ	1㎜以下の砂粒多く含む	外：暗青灰色 内：青灰色		
－4	206	遺構に伴わない	土師質土器	皿	1.9	10.9	4.4	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	2㎜以下の砂粒含む	外：薄乳褐色 内：薄乳褐色		
294－1		加工段5	土師器	不明			5.0	外：ヨコナデ，ナデ 内：ヨコナデ，ナデ	密	外：淡赤褐色～淡黄褐色 内：淡赤褐色～淡黄褐色		
－2		P2017	土師器	甕				外：ハケ目 内：ハケ目，ヘラケズリ	やや密（2㎜以下の砂粒を少し含む）	外：暗淡黄褐色 内：暗淡黄褐色		
－3		マウンド1区盛土中　P2019	須恵器	不明		23.0		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（1㎜以下の砂粒を含む）	外：黄灰色 内：黄灰色		灰かぶり
339－6	221	SD01	須恵器	甕				外：回転ナデ，タタキ後回転ナデ，タタキ 内：回転ナデ，指頭圧痕後ナデ，同心円の当て具痕	密（2㎜以下の砂粒を僅かに含む）	外：淡灰色 内：灰白色		
－7	221	SK01	土師器	不明				外：ナデ，糸切り 内：指頭圧痕	密	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色		
－8	221	平坦面1，4間ベルト	土師器	不明			6.0	外：ヨコナデ，ナデ 内：ナデ？	やや密（1㎜以下の砂粒を多く含む）	外：橙褐色 内：橙褐色		
－9	221	加工段1周辺　平坦面2区	須恵器	高台付坏			7.5	外：回転ナデ，回転糸切後ナデ 内：回転ナデ，ナデ	密（2㎜以下の砂粒を含む）	外：明灰色 内：明灰色		
341－1	221	SX06	土師器	不明			5.1	外：ナデ？ 内：ナデ？	密	外：橙褐色 内：橙褐色		
－2	221	SX06	土師器	坏			5.4	外：ナデ 内：ナデ	密（1㎜以下の砂粒を少し含む）	外：黄褐色 内：黄褐色		風化著しい

木器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	遺存状況	長さ	幅	厚さ	木取り	樹種	備考
325－11	203	SX01	木製品	斧柄	完形	29.7	4.1	2.9	芯持	カヤ	

石器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	遺存状況	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
315－20	202	SD16	石器	敲石	完形	12.8	9.8	4.9	829.9		
326－17	204	SX02	石器	敲石	完形	14.0	12.0	5.8	1503.9		磨り面もあり
330－1	206	第Ⅱ層	石器	砥石	完形か	16.6	5.0	5.4	741.8		
－2	206	第Ⅱ層	石器	敲石	完形	13.4	5.6	4.2	352.5		
331－5	206	遺構に伴わない	石器	砥石	完形か	7.2	7.2	2.6	167.9		

石器・鉄製品

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	長	幅	厚	棟高	軒高	軒幅	径	重量	備考
339－1	219	マウンド１区	五輪塔	空風輪	9.4						(12.0)		
－2		ＳＸ04	五輪塔	火輪		24.7		6.2		24.7			
－3	220	マウンド１区	五輪塔	地輪		24.0							
－4	220	マウンド１区	五輪塔	水輪							(26.4)		
－5	220	マウンド１区	五輪塔	火輪		21.5	13.5	6.9	4.4				
－10	221	マウンド４区	石器	砥石	7.1	4.9	5.8					286.6	
－11	221	マウンド１区　盛土中	石器	筋砥石	8.9	4.1	2.9					150.3	
－12	221	マウンド２区	鉄器	不明	8.6	2.2	1.6						

瓦

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	全長	胴部長	胴部幅	胴部厚	手法の特徴	胎土	色調	備考
340－1	217	マウンド１区	瓦	丸瓦	33.1	27.5	14.2	1.9	凸面：タタキ後ナデ 凹面：ケズリ痕，コビキ痕，布目痕，離れ砂痕	やや密（２㎜以下の砂粒を含む）	凸面：黒灰色～黄灰色 凹面：黄灰色	
－2	217	マウンド１区，３区，４区	瓦	丸瓦	34.8	288.0	13.9	2.3	凸面：タタキ後ナデ 凹面：ケズリ痕，布目痕，吊り紐痕	やや密（２㎜以下の砂粒を多く含む）	凸面：黒灰色 凹面：暗灰褐色	
－3	218，219	マウンド１～４区　平坦面３区，２－３間区	瓦	平瓦	28.1		(21.5)	1.9	凸面：離れ砂痕 凹面：ケズリ痕，コビキ痕，離れ砂痕	密（２㎜以下の砂粒を少し含む）	凸面：淡黄灰色 凹面：黒灰色～淡黄灰色	刻銘あり
－4	218	下方斜面　２区	瓦	桟瓦	28.1		26.4	1.7	凸面：縦ナデ，ヨコナデ 凹面：縦ナデ，ヨコナデ，コビキ痕	密	凸面：黒灰色 凹面：暗灰褐色	

角谷遺跡

土器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	胎土	色調	時期	備考
351－1	226		土師器	甕				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや粗	外：茶褐色 内：茶褐色		摩滅著しい
－2	226		土師器	甑（把手）				外：ナデ 内：ヘラケズリ？	やや粗	外：茶褐色 内：灰褐色		
－3	226		土師器	柱状高台皿				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（１㎜以下の砂粒少し含む）	外：明赤褐色 内：明赤褐色		風化著しい
－4	226		須恵器	坏蓋	3.9	10.5		外：回転ナデ，ヘラケズリ 内：回転ナデ，ナデ	密（２㎜以下の白砂を含む，５㎜以下の砂粒を含む）	外：青灰色 内：青灰色		
－5	226	排土中	須恵器	坏蓋				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（0.5㎜以下の砂粒少し含む）	外：淡青灰色 内：淡青灰色		
－6	226		須恵器	埦		11.6		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密（１㎜以下の長石など砂粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色		
－7	226		須恵器	埦			8.8	外：回転ナデ，右回転糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（１㎜以下の砂粒まばらに入る。５㎜大の礫も少し入る）	外：青灰色 内：青灰色		
－8	226		須恵器	高台付埦			9.2	外：回転ナデ，糸切 内：回転ナデ，回転ナデ後ナデ	密（１㎜以下の長石粒少し含む）	外：青灰色 内：青灰色		
－9	226	トレンチ	須恵器	器台				外：回転ナデ，波状文，平行沈線文 内：回転ナデ	密（砂粒少）	外：青灰色 内：青灰色		

石器・鉄器

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	長	幅	厚	重量	石材	備考
－10	226		鉄製品	くさび形鉄製品	7.7	1.8	0.8	40.13		
－11	226		鉄製品		3.7	0.8	0.8	5.26		
－12	226		石器	台形様石器	3.0	3.1	0.7	5.87	黒曜石	
－13	226		石器	石鏃	2.6	2.2	0.4	1.86	黒曜石	
－14	226	弧状平坦面		鉄砲玉	1.1	1.0	1.0	6.35		

報告書抄録

フリガナ	タナカダニイセキ　ツカヤマコフン　サガリマツイセキ　カドタニイセキ
書　　名	田中谷遺跡　塚山古墳　下がり松遺跡　角谷遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	法吉団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（本文編・写真図版編）
シリーズ番号	
編著者名	熱田貴保、深田浩、東山信治、越智昌二、朽津信明、下山進、㈱文化財調査コンサルタント、パリノ・サーヴェイ㈱
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター　http://www.pref.shimane.jp/section/maibun/
所 在 地	〒690－0131　島根県松江市打出町33番地　Tel(0852)36－8608㈹　maibun@pref.shimane.jp
発行年月日	2002（平成14）年3月29日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
田中谷遺跡	松江市法吉町 字田中・下り松 727－1番地外	32201	D 9	35° 29′ 42″	133° 02′ 56″	2000.4.10 ～2001.1.12	12,342㎡	宅地造成
塚山古墳	松江市法吉町 字下り松 721－1番地外	32201	D154	35° 29′ 27″	133° 02′ 52″	1999.5.20～11.30 2000.4.10～6.23 2001.1.29～3.15	900㎡	公園整備
下がり松遺跡	松江市法吉町 字下り松 680－2番地外	32201	D824	35° 29′ 30″	133° 02′ 54″	2000.8.10 ～2001.1.10	5,126㎡	宅地造成
角谷遺跡	松江市法吉町 字角谷 974番地外	32201		35° 29′ 37″	133° 02′ 54″	1999.9.20 ～2000.1.12	4,000㎡	宅地造成

遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田中谷遺跡	集落	弥生時代後期 ～鎌倉時代	竪穴建物10 掘立柱建物47 井戸2、旧河道数条	弥生土器、土師器、須恵器、石製品、鉄製品、木器	布掘建物を3棟確認
塚山古墳	古墳	古墳時代中期 奈良時代	礫床主体部1 葺石　造出2 井泉遺構1	刀剣類、短甲、鏡、玉類、櫛 円筒埴輪、人物埴輪、須恵器、木柱	県内で数少ない中期古墳の調査例。 住宅団地内に公園として保存整備。
下がり松遺跡	集落 古墓	弥生時代後期 ～平安時代 室町時代	竪穴建物1 掘立柱建物13 石積基壇1 荼毘跡2	弥生土器、土師器、須恵器、木器 瓦、五輪塔、火葬骨	
角谷遺跡	山城か	室町時代	掘立柱建物2、土橋	須恵器、土師器、石器、鉄製品、鉄砲玉	

田中谷遺跡
塚山古墳
下がり松遺跡
角谷遺跡

法吉団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
本　文　編

2002年３月29日

発行　島根県教育委員会
松江市殿町１番地
印刷　柏木印刷株式会社
松江市国屋町452番２号